麻帆良で生きた人

ARUM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
麻帆良で生きた人

【Ｎコード】
Ｎ１０８７Ｔ

【作者名】
ＡＲＵＭ

【あらすじ】
明治時代、麻帆良を守護する一族の長だった主人公。彼は魔法使い達によって土地と家族とを失い、自身も命を失ってしまう。だが彼は一族が代々守り敬い続け、そして自身が恋をした神木・幡桃の意思が具現化した精霊によって肉体を再構成され復活する。しかし、再構成された肉体は、もとの人間のものではなかった。そして、彼が再構成された時代も、明治時代ではなかった。

※タグを追加しました。

キャラ設定・六月十七日更新（前書き）

誤字の修正がてらキャラを追加しました。

キャラ設定・六月十七日更新

名前・セイ（斉）

男性、二十二歳。本編で名字は未登場。背は高くやせ型。
麻帆良を守る一族の長で歴代最高と言われる才能の持ち主だった。
ただしこの時点では原作のナギよりも魔力は少ない。
戦闘タイプは後衛特化。携帯する武器もだいたいが術具の類で、接近戦は不得手。
ただし懐に入られた時の手段は用意している。

一族が滅んでから百年、肉体を再構成されたことによって、人間から、「半分人で半分全く新しい何か」というよくわからない不老の存在になった。これにより霊力が桁違いに増加。

七話で名字が発覚。
玄凪（くろなぎ）

京都で神鳴流の師範代から気を習い、習得。虚空瞬動までなら軽くできる。

今使用可能な技術をまとめると、玄凪式の符術、式神召喚術、結界術に、気がある。

現在はさらに人から外れておりほぼ完全な人外。新しい技術として大幹部戦闘形態、神鳴流体術が追加。

名前、春香（ハルカ）

女性、年齢不詳。
神木・幡桃の精霊。美人。光になって現れたり消えたりできる。セイのことが好き。明治初頭に一族が滅ぼされてからは一度も人の姿はとっておらず、そのため魔法使いはその存在を知らない。

作者の中では出番はしばらくない。

名前、相坂（あいさか）さよ
女性。
第四話にてサクッと肉体を再構成されて復活、不老に。
京都でセイから符術、式神召喚術、結界術を学んだ結果、五行をほぼ完全に無効化する結界の作成に成功。
セイの正式なお嫁さんに。でも式はまだあげていない。

名前、近衛木乃芽（このえこのめ）
女性。

現関西呪術協会の長。近衛家の当主でもある。また、近右衛門の娘でもあり、実力未知数。

名前、近衛千蔵（このえせんぞう）

関西呪術協会の幹部。近衛の分家筋の人間で近右衛門の親戚にあたる。半分隠居していてあまり関西呪術協会には顔を出さなくなったが、それでもまだ一定の影響力を持つ重鎮である。
もう老齢だが、まだまだ腕は衰えておらず、今もたまに前線に出て

いっては部下に怒られている。一線級の呪術士でもある。
なお、親戚とはいえ、近右衛門と違い普通の頭の形をしている。

名前、橘（たちばな）
神鳴流を使う関西呪術協会の幹部だが、青山宗家の人間ではないので弐の太刀は使えない。
ただ、独自に編み出した奥義として、斬空閃に斬岩剣や斬魔剣を乗せて遠距離から攻撃する弐の太刀に似た技を持っている。この技は弐の太刀の二倍以上の飛距離を出せる。
ちなみに下の名前は然次（ぜんじ）。

名前、天ヶ崎（あまがさき）
男性。
関西呪術協会の幹部であり陰陽師。妻と幼い娘がいる。というか原作の千草の父。

幹部の中では末席だが、娘が絡むと強さの桁が変わる上、ギャグ補正が追加されてバグキャラ級になる。個人の研究成果として符を連動させて発動する技術がある。
ちなみに作者は下の名前は出すつもりがないので考えてもいない。

結局名前が出ないまま大戦で帰らぬ人に。

名前、白露（はくろ）

七尾の妖狐。女性？　セイの最も信頼する式神の一体。一番セイとのつき合いが長い式神でもある。
服装なども髪とあわせているのか白い物がほとんど。

名前、六火（りっか）

巨躯の鬼。男性。セイの最も信頼する式神の一体。古い鬼としては珍しく自分の山を持たなかった。
強いていうなら麻帆良近隣がそれに当たるが、玄凪の方が古くからこの地に根ざしており、自分の山にはできなかった。

名前、志津真（しづま）

男性。背に一対の黒い翼を持つ。セイの最も信頼する式神の一体。実は天狗や烏族では無く全く別のもの。式神三体の中でリーダー的な立ち位置にいる。

名前、時雨（しぐれ）

男性？　見た目は少年だが実年齢は不明。神話の時代を知る貴重な存在。その正体は古の昔に神の再現を目指して造られた模造品。

セイ曰わく“失敗作”
ただしその力は神に迫る、あるいは並ぶ程の物がある。

キャラ設定・六月十七日更新（後書き）

現在アンケートは必要ないというのが多いようです。

式神設定（前書き）

すいません。本編が少し長くなってしまい、今日中に投稿できません。
明日も忙しいので、早くて明日、最低でも二十五日には更新できるよう頑張ります。

少しずつ追加していくつもりです。
ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、すべてお待ちしております。

式神設定

ここには作者のオリジナルな式神の設定を載せております。随時更新していく予定です。
見なくても何ら支障はございません。
オリジナルじゃない普通の式神（妖怪）も載せるかもしれません。
ややネタバレになるかもしれないので、注意してください。

～黒輪火車～
（こくりんかしゃ）

第五話にて初登場。人によって造られた式神であり、分類的には鬼などの妖怪よりも、西洋におけるゴーレムに近い。
制作者はセイから数えて五代前、鬼才と呼ばれた当時の長。
黒輪火車は彼が妖怪の火車に着想をえて造られた式神で、実は本編で描写されていないだけで四輪。後部に姿勢制御を目的とした小さな車輪が二つつけられている。
本来の使用目的は長距離移動や物資の高速輸送である。
これは当時、九州方面から新しい技術をとりいれようとしており、そのための移動手段として開発された。

なお、開発秘話として、彼の部下達の間で、搭載量及び安定性重視の四輪派と、速度重視の一輪派での激しい論争があげられる。
結果一輪ではかなりの速度が出せるが、急な制動ができないのと、制作効率の悪さ、式神というより大型の呪具に近いものになってし

まうなど問題が続出したので、四輪に落ち着いたとのこと。

彼は他にも数多くの式神を造りあげており、その晩年の最高傑作として、人となんら変わらない人形があったという話があるが、基本専守防衛の一族では別にそんなもの造る必要性はなく、彼の道楽であったらしい。

～七つの災禍・八鬼の頭～
（ななつのさいか・はっきのこうべ）

第七話にて初登場。全高2メートルの巨大な鬼の頭蓋骨が八つセットになっている。
実はこれ、鬼の頭ではない。では何なのかというと、九十九神だったりする。
もとは黒輪火車と同じ五代前の長に造られた巨大な術具だったのだが、八つまとめて扱える術者がおらず、お蔵入りになった品。

で、それから時がたち、その存在などすっかり忘れられていたある日のこと。
倉庫から音がするというので見てみると、これらが変じて、自ら動き備蓄していた毒草や薬酒をかっくらっていたという。
それ以来、半分自立しているため術者が扱えるようになり式神として日の目を見ることになったという。

本来は相手の陣中に召喚して相手を撹乱させるための式神なので、攻撃方法は体当たりと噛みつきのみ。ただし、口から吐き出す煙に

触れると体に異常をきたす。

状態異常は石化、麻痺、幻惑、盲目、凍結、腐敗、幼児退化の七種類。選択可能。自然治癒しない。

引き連れている鬼火は数があるだけでとくにこれといった効果はない。

式神設定（後書き）

作者はパソコンで文章を作ったあと、それを携帯で投稿するので、時間が倍かかります。

ご了承ください。

プロローグ（前書き）

ご指摘により一部修正しました。

プロローグ

時代は明治初頭、彼は関東の麻帆良と呼ばれる土地に存在する神木・幡桃と、その周囲の森を古くから代々守護する一族の若き長だった。しかし、文明開化の波は秘境とすら言える麻帆良にも押し寄せていた。

「立派な魔法使い」

正義を掲げる西洋魔術師達。彼らによって一族の里は火に包まれていた。前々から接触はあった。極東におけるメガロ・メセンブリーナ連合、つまりは西洋魔術師達の拠点確保。神木・幡桃と周囲の霊地の無条件での明け渡し。

高圧的な態度と、長年この地を守護してきた一族をまるで無視し、今まで何の関連もなかったＭＭからの命令に、一族は当然これを拒否した。その結果が、宣戦布告もなしの突然の奇襲、そして燃える里の家々だった。

一族はもともと霊地を守護するための結界術と、少ない戦力を補うために西は京都の陰陽師から取り入れた符術と召喚術に特化した集団だった。　そのため、ＭＭの要求をけった時点で、通常よりも結界を強化し、また結界の数自体も増やしていた。それに加えて現当主である彼は歴代最高の才能とうたわれ、いずれ侵攻してくるであろうＭＭを撃退するのもたやすいと思われていた。

しかし、幾重にも張り巡らせた防衛線も今となっては意味をなさず、家々は燃えていた。圧倒的な物の数に物をいわせての物量作戦。最初は余裕をもって対処できており、戦局も有利に運べていた。魔法使い達が使う魔法は、魔法の射手はそもそも結界を通らず、大

規模な物は符を使い五行でもって散らし、幾重にも展開された防御結界でふせぎきる。
傭兵となど気をつかって接近戦を挑んでくる者達には召喚した鬼を筆頭とする妖怪などをあて対処する。一部達人級の強敵が現れた場合は一度に複数の多重結界を展開し魔力と気、その両方を封じてから多数でもって仕留める。昔から変わらぬこの手法で、ＭＭの攻勢は確実に防ぎきれていた。

状況が大きく変化したのは最初の攻勢から二ヶ月たった日のことだった。ＭＭの侵攻が一週間ほど前から下火になっていたその日、突如として幡桃の地下に位置する古代の遺跡から、ＭＭの兵がわいて出たのだ。一族は内部からの攻撃など想定しておらず、またそれにあわせて再びＭＭの兵が外側からも一大攻勢にでた。そして、内側からの攻撃による混乱から防衛線はし、里は火に包まれたのだった。

燃えさかる炎に包まれた里の中を、ひとりの男が歩いていく。満身創痍で、最初は白かった戦装束も今ではすっかり自身の血と返り血で真っ赤に染まってしまっていた。

彼がもう満足に戦えないことは明らかだった。頭に巻いた包帯には血がにじみ、足を引きずり、壁に手をついて火の粉が舞う里の中を歩いていく。
途中、ＭＭの兵や魔法使いと出くわすこともあったが、彼の残りの魔力が少なくなり、向こう側が見えるほどに薄くなってしまった彼の式神たちが倒してくれた。
本来式神は自身を呼び出した術者に使役される存在であり、そこに信頼関係は普通生まれるものではない。だが、初めて実戦を経験したときからともに戦い続けた彼らとの間には仲間としての確かな信

頼が存在したらしく、消える直前まで戦い続けた。そしてＭＭの兵を倒した直後、別れの言葉もなく、彼らはもとの世界に還った。

「見つけたぞ！　　生き残りだな！」

横合いから飛び出してきたＭＭの兵が剣を振りかぶって襲いかかってくるが、瀕死の状態からは考えられない速さで迎撃する。血で真っ赤になった手から残り少なくなった符が放たれ、兵士に触れた瞬間、爆発も閃光もなく、その兵士は四散した。

彼は骸となった兵士を一瞥すると、また壁に手をついて歩き出した。彼自身、一族の滅亡が時間の問題なのはわかっている。退路はないし、立派な魔法使いを自称する者達やＭＭの兵士達は捕虜などとらないだろう。

また、彼は自分の命がもう長くない事もわかっている。傷を負う度に手当てはしたが、余りにも血を流しすぎた。随分前から手足の感覚はなくなってきている。火の粉が舞う中でも何の熱さも感じず、歩くのにも手をつかなくてはならない。
今し方符を命中させられたのは、奇跡に等しいことだろう。

それでも彼は歩き続ける。一族の滅亡も、自らのそう遠くない死も、それらを両方理解した上で、一族の長として、最後に果たさなければならない役目があるから。

彼は、目的地を目指して歩き続ける。

それからしばらく歩き、里からはそう遠くない、しかしそれでいて人気のない静かな森を抜けた先の、少し開けた場所にたどり着いた。
　そこはこの麻帆良において神木・幡桃の次に重要な、常時展開型の結界の基点となっている小さな社がある場所である。

彼はまだこの場所に魔法使いの手が及んでいないことに安堵しつつ、さらに社に歩み寄る。
彼が社の前まで来ると、唐突に何もない空間から緑色の淡い光が現れた。彼は突然現れた光に身構えるでもなく、それが当然のことであるかのように光を見続けていた。
光はやがて人の形になり、光が消えた時には女性がひとり立っていた。

その女性がしなやかな肢体にまとうのは先ほどの光と同じ白に近い淡い緑の装束。同色の髪は絹のように滑らかで地面につきそうなほど長く、その整った顔は出会った者が皆美人と評するに違いない。しかし、その美しい顔は悲しみに染まり、翡翠のような瞳は涙に濡れている。

　彼女は、彼が何かを言う前に駆け寄り、自らの装束が血に汚れることにもかまわず彼の胸に飛び込んだ。彼はそれだけで倒れそうになるが、男の意地でたえてみせた。彼女は彼にしがみつきながら、かぼそい声でこういった。

「…もう、皆いってしまいました。後はあなただけ。あなたが最後の生き残り」

　彼はその言葉を聞いてからしばらくじっとしていたが、やがて大きく息を吐き、彼女の肩に手をおいて自身から引き離そうとする。

だが彼女は彼の胴に手を回し、離れようとしない。その様子を見て、彼は彼女を引き離すのを諦めた。

「私も、もう長くはないでしょう。ですが、その前にやるべきことはやっておかねばなりません」

そう言うと、手持ちの符、残りすべてを空に放つ。放たれた符はまるで引き寄せられているかのように社に向かっていった。それらが社の中に消えて数秒後、社の形がボロボロと崩れはじめ、ついには一山の土くれしかのこらなかった。

それを見届けたあと彼はぐらりと体勢をくずした。もし彼女に抱きしめられていなかったらそのまま倒れていたかもしれない。

…基点である社が失われた今、それによってつなぎ止められていた結界もその全てが消滅した。麻帆良の常時展開型の結界は、一族が滅んだ後も基点になっている社が残っている限り存在し続ける。一族の長たる彼の役目は、万が一、一族が敗れた際に一族の技術の結晶であり歴史そのものである結界を破壊し、結界とそれに連なる技術が悪用されるのを防ぐことだった。

そして、最後の使命を果たした彼の体からは、急激に生きるための力が失われつつあった。

そんな彼を彼女はそっと横たえ、膝枕をする。

煤にまみれ、血に汚れた彼の髪をそっと撫でる。彼の表情は、死の間際だというのにとても穏やかだった。

「…申し訳ありません、精霊様。私どもがお仕えできるのはここまでの、ようです」

「…名前」

「名前で呼んでください。…もう、あなたしかいないのです。私のことを名前で呼んでも、咎める者もいません。だから…」

彼は、ふっと微笑んだ。

「…わかりました。では、春香様とお呼びしましょう」

「…様は余計です」

春香。それが神木・幡桃の確たる意思が具現化した精霊という存在である彼女の名。

「そればかり、は、ご勘弁を。いまさら、なおりません」

「それもだめです。私は、一族の長たるあなたではなく、ただのセイとしてのあなたと話したいのです」

セイ。それは長きにわたり麻帆良の地を、神木・幡桃を守り続けた一族の最後の長であり、今まさに死にゆく青年の名。

「…春香」

「よろしい」

そう言って彼女は満足げにうなずく。

もともと、精霊である春香に名前などなかった。そのことを、何年も昔、この場所で幼かったころのセイに話したのが始まり。

その次の日に同じ場所にやってきて、名を持たない彼女に名前をくれた。一晩、書物を開いたり、母親にきいたりして考えたそうだ。

春香は嬉しかった。とても嬉しかった。
神木としての幡桃という名前はあったがそれはあくまでも木としての名前で、精霊として、確たる自分としての名前は持ったことがなかったからだ。嬉しくないはずがない。ただ、セイはその後当時の長、彼の父に怒られたそうだ。

それ以来、セイとは歴代の長の誰よりも親しく接してきた。いつしか、春香は恋心のようなものをセイに対して抱くようになっていった。
セイが成人してもなかなか嫁をもうけようとしないので、もしかしたら、セイも自分のことを好いてくれているのではないか、と淡い希望も抱いていた。

なのに、その彼は死に瀕している。胸の奥が痛い。もっとずっと一緒にいたい。春香はこのとき、改めて自分のセイへの思いを確認した。今動かなければ、二度と自分の気持ちを伝えることはできなくなる。
春香は、その思いを抑えることはできなかった。

「…ねえ、セイ」

「なん、でしょう」

「私は、あなたのことが好き」

セイが、驚きから目を丸くする。

「あなたは、私に名前をくれた。私に、神木・幡桃じゃない、春香というあたらしい私をくれた。私は精霊で、あなたは人間だけど、それでもあなたと一緒にいるのは私の長い記憶の中で一番楽しかっ

た。だから私はあなたといたい。いつまでも、ずっと一緒にいたい。私は、あなたが好き」

セイは目を丸くしたままそれを聞いていたが、突然笑い始めた。

「はは、あっはははははは！　　ははは、グ、ごふっ、げふっ」

笑いすぎたのが傷に響いたのか、セイは少しだけ血を吐いた。それでも息を整えてから、しっかりと春香の目を見て、言う。

「私も、あなたのことが、好き、ですよ、春香」

この言葉を聞いて、春香は自分の胸の内を何か暖かいものがみたしていくのを感じていた。

自分が感じていたことを。セイも感じてくれていた。熱いものがこみあげて、涙がとまらなくなる。

しかし、彼はつづける。

でも、と。

私はもうあなたといられない、と。

「できるなら、私もあなたと、ずっと、一緒にいたいです。書物でしか知らないいろんな物を、一緒に見て回りたい。…でも、もう、私は助からない。流石に、血を流しすぎました」

セイは、いよいよ自分の死が目前まで迫ってきていることを自覚していた。もう手足を動かすことすらままならないのだから。彼女の美しい顔に、手を伸ばすことさえかなわない。しかしセイはここで気づく。春香の目には強い光があった。何かを決意した強い光が。

彼女はまだ、あきらめていなかった。

「セイ、私ならあなたを助けることができる」

「それは…！」

彼の目にも、再び、強い希望の火が灯る。

「でも、何年かかるかわからないし、もしかしたら失敗するかもしれない。それに、間違いなく人ではなくなるし、老いて死ねなくなるかもしれない。それでも…」

「お願いします」

春香が言いきる前に、セイは即答する。その目には何の迷いもない。

「私は春香と一緒にいたい。たとえ何年かかったとしても耐えてみせる。老いて死ねなくなったとしても、春香といられるなら後悔しない。それにもし仮に失敗したとしても、なにもしなければどうせここで死ぬのです。億に一つでも可能せいがあるのなら…お願いします」

「わかりました…。私、ぜったい成功して見せます！　だから、今はゆっくりと休んでください」

そう言い聞かせるようにセイに告げると、春香はセイの頭をゆっくりと撫で始めた。

それにつれて、意識が急激に遠のいていくのをセイは感じていた。

ただ、それは先ほどから感じていたような死を思わせる冷たさではなく、あたたかい何かに身体が包まれていくような感覚だった。

この時、二人の周りには春香が現れたときと同じ淡い緑の光が地面から次々と現れ、その数を増やしていた。二人の周りを漂う幾つもの光の珠は増え続け、その数が二百を超えたとき、一斉に強く光り輝いた。

この発光現象に気づいたＭＭの兵士と魔法使いがしばらくしてからこの場にたどりついたとき、周りに人影や光りそうな物はなく、ただ土くれが一山あるだけであったという。

プロローグ（後書き）

ご意見御感想、誤字脱字の指摘、お待ちしています。

第一話・昭和××年（前書き）

修正しました。

第一話・昭和××年

Ｓｉｄｅ，セイ

気がつけば、闇の中にいた。足場はないのに、浮いているわけでもなく、ただ立っていた。前も後ろも、右も左も、ずっと闇だけが広がっている。もしかすると、ここが死後の世界なのかもしれない。想像していたのとは随分違う。寒くもなければ熱くもない。あの世らしくないとでも言うべきか。

　それでも、もしここがやはり死後の世界だと言うのならば、私は死んだのだろうか。

春香は絶対に成功して見せると言ったが、何らかの原因で失敗したのかもしれない。だが、私が死んでいるのだとしても後悔はない。私はあのまま何もしなくても死んでいた。それでも彼女は助けられるかもしれないと言ってくれた。だからわずかな望みにかけて、春香に自分の運命を託したのだ。

もともと負けたところで失う物のない賭けだった。それに負けたからといって、誰を恨むことができるというのか。

…ただ、もし叶うのならば。このどことともしれぬ空間に意識が残っているうちに、もう一度だけ春香と会って、最後の別れを…

「セイ」

突然、背後から聞こえてきた自分の名前を呼ぶ声に、慌ててそちらを振り返ると、誰よりも会いたかった人がそこにいた。

「春香！」

確かに今自分の前に春香がいる。今自分がいるここがどんな場所なのかはわからない。でもたとえどこであったとしても、目の前にいるのは間違いなく、意識が途切れるその瞬間まで一緒にいた春香だった。

「春香、ここはいったい何なのですか？　　それに、どうしてあなたもここにいるのです」

「…ごめん、セイ」

春香から発せられたのは、短い謝罪の言葉。それで、それだけで、自分の今おかれている状況を理解する事ができた。

「…そう、ですか。やはり、私は助からなかったのですか」

「…え？」

「なるほど、どうりで暗いはずです。死後の世界なら当然ですか」

「え？　　ええ？」

「気にしないでください、春香。どうせ助からなかった命です」

「いや、ちが…」

「それでも、最期に春香に会えて良かった」

「……」

「春香、私はやはりあなたのことが」

「えいやっ」

ドスッ！！

「がほぁっ！？　ぐ、げほっ、ごほっ。は、春香、なに、を…？」

春香のかわいらしいかけ声と共に、見た目からは考えられない威力の拳が直撃し、肺から空気を吹き飛ばした。

「セイ、私が謝ったのは、肉体の再構成に時間がかかったことについて」

…肉体の再構成？

「で、では」

春香は拳をぷらぷらさせながら笑って見せた。

「ええ、セイは生きてますね。死んでなんかいません」

生きている？　私が？　それはつまり…

「また、一緒にいられるのですか！？」

そう言った直後、春香の顔から笑顔が消えた。変わりに表れたのは、静かな怒りの表情。

「春香？」

「…すぐには、無理です」

「な、なぜ！」

「…セイ、よく聞いて」

「…なんでしょう」

「あなたの身体を再構成するのに百年近くかかったの」

「なっ！？」

「詳細は時間がないから言えない。だから要点だけ言います。あなたの再構成は成功しました。でも、人ではなくなった。今のあなたは半分精霊のような、新しい何か」

「何かって…」

「続けます。その影響で予想通り老化はなくなった。霊力…奴らの言うところの魔力も増えた」

奴らの響きに、侮蔑の感情がまじっていることに気づいたが、春香の話は続く。

「それで、再構成に時間がかかったのと、一緒にいられない理由ですけど…霊力が足りないのです」

「はいぃ？」

あまりに予想外な理由に、変な声が出たがそんなことは良い。旧世界でも有数の霊地であった麻帆良、その力の源である神木・幡桃に霊力が足りないとは何の冗談だろうか。

と、唐突に闇の世界が揺れる。

「…やっぱり霊力が足りませんか」

そういう春香も、身体が淡い光を帯び、徐々に透けてきている。きれいだった淡い緑色の光がなぜか今は灰色を混ぜたような濁った色をしている。

というか、いつの間にか自分の身体も光を帯びて透けてきている。

「待ってください春香！　何がどうなっているのですか！」

「今からあなたを麻帆良の、社があったあの場所に送ります。セイなら…一目見れば、それで理解できるはず」

その間にも、どんどん春香は透けていく。また会えたのに。また、一緒にいられると思ったのに、なぜ！？

自分でもわからないうちに、叫んでいた。

「春香！　春香ぁ！　また、また会えますか！　いつか、ずっと一緒にいられるようになるのですか！」

春香は微笑んだ。

「大丈夫、私達はつながってるから。セイが頑張ってくれれば、いつか、きっと…」

目を覚ました時、最初に視界に飛び込んできたのは、満天の星空だった。

慌ててとび起きると、自分の体の異変に気づく。傷がないのはもちろん、肉体が前のものより丈夫になっているし五感もより鋭敏になった、気がする。

少なくとも、春香が言っていたとおり霊力は桁違いに増えている。

服もいつの間にか、血で真っ赤に染まった戦装束から、飾り紐や房、鈴をつけ、術具として使う腰刀を差した、一族の長が特別な儀式の時にしか着ない濃緑の装束になっていた。

そして、なにより驚いたのが、髪の色まで変わっていることだ。今の髪の色は黒に近い暗い緑だ。昔は黒だった。もしかすると目の色も変わっているかもしれない。

と、ここまで確認してから、今度は周囲を見渡す。周りの木々はあの時とたいしてかわってはいないようだ。しかし、どうにも違和感がある。景色は変わっていないのに、昔ほど木々に生命力がない。麻帆良は霊地、土地に力があるから木々も生命力に満ちているはずなのにそれがない。

せいぜい普通の森程度しかない。

それだけではない、もっと漠然とした、空間、今見える世界そのものに違和感を感じる。何かよくわからない力が場を満たしているような…

「まさか、結界…？」

もしかすると、自分の知らない結界が張られているのかもしれない。そうだとするなら、このままここにいても始まらない。

そう考えたセイは、かつて一族の里があった方へ歩き出した。

第一話・昭和××年（後書き）

先は長いです。

第二話・知らない麻帆良（前書き）

可能なら、今日のうちにもう一話投稿します。
原作が遠いです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、何でもお待ちしております。

第二話・知らない麻帆良

Ｓｉｄｅ，セイ

「……」

森を抜けた先は、自分が思っていた景色とはかけ離れた世界だった。

セイの記憶では、森を抜ければ里があった場所に出るはずだった。

昔なら、まず目にはいるのは水を巡らせた堀と、石の基礎の上に木でもって組み上げた、里をぐるりと囲む防壁だった。

防壁の所々に作られた櫓には見張りが立ち、門の前には最低でも三人は常駐していて、長になってからも気軽に挨拶した物だった。

「……」

なのに、自分の記憶にあるそれらは、跡形すら残されていなかった。

ＭＭ連合は、宣戦布告もなしに戦争を仕掛けてくるような連中だった。

何百年もの間、そこにあり続けた歴史的価値のある物だとしても、新しい拠点を作るのに邪魔な堀や防壁が残されていないのは仕方がないことなのだろう。

だが、だからといって…

「だからといって、わざわざ街まで西洋にあわせなくてもいいだろうに…」

今目の前に広がるのは、本当にここに里があったのか目を疑いたくなるような光景だった。

西洋の建物をそのまま持ってきたかのような広い街並み。

中央に噴水の据えられた石畳の広場には奇妙な面やら飴細工やらの出店が軒をつらねている。

広場と同じ石畳の道には闇夜を照らす瓦斯灯らしきものが立ち並び、遠くには橋が架けられた城のような建物まである。

おまけに、あそこに見えるのは、確か鉄道とやらではなかったか。

「…麻帆良、学園祭…？」

とりあえず広場に入り、近くにあった看板に目をやるとそう書かれていた。

学園祭。

つまりは学校のお祭り。

ＭＭ連合の奴らはここ麻帆良に、かの英国にあるという魔法学校とやらを作ったのだろうか？

「なんだい兄ちゃん、祭りが目当てで麻帆良に来たんじゃないのかい？」

近くで奇妙な面を売っていた屋台の親父が話しかけてきた。

「そんな仮装してるもんだから、おれぁてっきりここの学生さんだと思ったんだがなぁ。ま、いいや。兄ちゃん、なんか面買ってくかい？」

しばし悩む。おそらく今この地を管理しているのは、ＭＭ連合かそれにつらなる組織だろう。

顔を隠すのにはちょうどいいかもしれない。

だが、悲しいかな。春香が再構成してくれたものの中に、金銭の類は含まれていなかったのだ。

「いえ、持ち合わせがないので…」

「なんだい、祭りの初日だってのに、もう金がないのか。スられでもしたのかい？」

「あはは、まあそんなところで」

肩をすくめてそう言うと、親父は気の毒そうな顔をした。実際は金銭どころか何もかも奪われたのだが。

「そうか、そいつぁ災難だったなぁ。よし、そういうことなら面の一つくらいくれてやらぁ！　どれでも好きなの一つ選びな！」

「え、いや。そういうわけには…」

「いいっていいって。面の一つくらいたいしたこっちゃねえよ。せっかくの祭りだ、楽しまねえと。それに、こまった時はお互い様だ。

また来年買いに来てくれりゃぁそれでいいさ」

…なんとも気前のいい親父さんだ。ここまで言われると、受け取らないのは逆に失礼になってしまう。

たくさんかけられている面をみる。よくよく見ると、面はどれも薄くて光沢のあるもので作られていて、興味をひかれる。

ただ、そのつくりはあまり好きではない。女の子の顔をした物や、何かで顔全体をおおったような面もある。微妙に作りが違うが、色ごとに五種類も用意されている。

「なんだい。どれも気に入らねえのか？」

「あ…すいません」

どうやら親父に感づかれてしまったようだ。意外と鋭い。

「ここに気にいったのがねぇなら、あとは問屋がふざけて作ったこんなものしかねえぞ」

そう言って親父が屋台の中から出してきたのは、木で作られた狐の面。

ただし、なぜか色が白でなく緋色で塗られ、苔のような濃い緑で模様が描かれた代物だが。

「はっは。やっぱこんなのいらねえよなあ。ったくなんで問屋のじじいも茶目っ気でこんなもん…」

「それをください」

「え？」

「それがいいです。お願いします」

親父は目をぱちくりとしていた。

「あ、ああ。いいけど…。本当にいいのか？　こんなんで？」

「ええ、気にいりました。ありがとうございます」

渡された面を顔にあて、後ろで紐を結び装着する。

「ま、いいけどよ。物好きもいるもんだ」

もう一度、屋台の親父に礼を言ってから歩き出す。

…親父と話している間も考えていたのだが、この場を包む結界がどのようなものであるか、ぼんやりとつかめてきた。

できればあっていてほしくない予想だが、それを確かめるためにも、やはり一度神木・幡桃…春香のところへ行かなければならない。

「おーい！　兄ちゃん！」

後ろから親父に呼び止められた。振り返ると、親父がこちらに向かって走って来ていた。

追いついた親父から渡されたのは、不思議な透明の容器に入れられたソバだった。

「兄ちゃんどうせ飯食ってねえんだろ？　こんなもんでわりぃが、

食ってくれよ」

じゃあな、と言って屋台の親父はもときた道を走って帰っていった。

結界のほかに、このソバについても考えながら、また幡桃に向けて足を進める。

「…箸がない。どうしよう、これ」

第二話・知らない麻帆良（後書き）

セイは明治生まれです。そのため、プラスチックをしりません。

ちなみに親父が渡したのは塩焼きソバです。

第三話・幽霊少女（前書き）

すいません。日をまたいでしまいました。

タイトルからもわかるとおり、やっと原作キャラが出ます。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、すべてお待ちしております。

第三話・幽霊少女

Ｓｉｄｅ，セイ

『うわぁ、すごいきれいです！』

セイは麻帆良をさまよい歩いていた。

『どうやってあんなに大きなものを動かしてるんでしょう？』

神木・幡桃の方向はわかるのだが、道がまったくわからない。建物が邪魔をしてうまく進めないのだ。

『あっ！　あの子の衣装、フリルがたくさんついてて、かわいいな…』

ようやく道を見つけたかと思ったら、今度は「ぱれーど」とかいう派手でぴかぴかした集団のせいで通れなくなってしまった。

『あれ？　あっちのお店、何を焼いているんだろう？』

途中、術具として使える腰刀があるのを思い出し、鴉天狗でも呼び

出してひとっ飛びしようかとも思ったのだが、時々見かけた魔法使いらしき奴らに見つかりたくなかったし、流石に非常識かと思ってやめた。

『わぁ、とうもろこしだぁ！　おいしそうだなぁ…』

それで、近くにいた実行委員の腕章をつけた生徒に、どうすれば神木・幡桃…今で言うところの世界樹まで行けるのか聞いてみたところ、目の前の「ぱれーど」が終わるまではどの道も通れないらしい。しかも「ぱれーど」は始まってすぐらしく、一部関係者以外は何時間も待たなくてはいけないらしい。

『……』

それで時間が有り余ってしまい、せっかくなので麻帆良祭を見物することにしたのだ。

幸い、仮装している者が学生を始めけっこういるので、今の格好でもそんなに周りからは浮いていなかったりするのだ。

『はぁ…』

そして、あちらこちらを気の向くまま、ふらふらしている内に見つけてしまったのだ。

『うぅ…グスッ』

うつむいてすすり泣く、幽霊の少女を。

Ｓｉｄｅ，相坂さよ

『はぁ…』

初めまして皆さん、相坂さよです。私はもう何十年もこの麻帆良で幽霊をやってるんですよ？　後輩だって、何千人といるんです。えへん！

……

……

……

うぅ、何やってるんでしょう、私。いくら寂しいからって、はずかしいです。皆さんって誰のことでしょう。

でもこの時期はまだいいんですよ？　夜になってもたくさん人がいますし、遅くまでどこも明るいし、珍しいものだってたくさん見られるんですよ。

だから、寂しくなんてないんですよ？

寂しくなんて…

『うぅ…グスッ』

…ほんとは、すごく寂しいんです。しってますか？　誰からも相手にされないのって、とってもつらいことなんですよ？
いつもひとりなんです。

幽霊だから眠ることもできないから、毎日毎日、一晩中ずっと暗い町の中でひとりなんです。

今だって寂しいんです。どんなにたくさんおいしいものがが目の前にあったとしても、ほんのひとかけらも、食べることはできないんです。
味も匂いも、わかりません。

唯一、いつの頃からか、ごく小さい物をうごかせるようにはなってましたけど、それだけです。
誰も気づいてくれないから、何の意味もありません。

それに、わたしは、過去のことはあまり思い出せないんです。
笑っちゃいますよね、私、自分がどうして死んだのかも思い出せないんです。
思い出せるのは、幽霊になってからの、長い長いよるの記憶だけ。

私はこれからどうなるんでしょうか？

ずっと幽霊のままなんでしょうか？

ずっと、ひとりの、まま…

「どうかしましたか？　お嬢さん」

その声に顔を上げると、目の前には背が高くて、赤い狐のお面をつけた男の人が立っていました。鈴や飾り紐のついた不思議な衣装を着ています。

もしかして、この人は私に声をかけてくれたのでしょうか？

…いいえ、そんなはずはありません。だって私は誰からも見えないんですから。

きっと近くに、ないている小さな女の子でもいたんでしょうね。

「そこの幽霊のお嬢さん、聞こえていないんですか？　…困りましたね」

幽霊の…って、この人、もしかして、私のことが見えてる！？

『私のことが、見えるんですか！？』

Ｓｉｄｅ，セイ

「どうかしましたか？　　お嬢さん」

つい、声をかけてしまいました。最初は無視しようかとも思ったんです。たぶん面倒ごとになりそうな気がしたんで。

ですが、「ぱれーど」が終わるまであと二時間近くあるのに、することが何もありませんし、なにより、ずっとうつむいたまま肩を震わせて泣いているんです。流石にほってはおけません。

しかし、こちらを向いてから反応がありませんね…。

「そこの幽霊のお嬢さん、聞こえていないんですか？　　…困りましたね」

やはり反応が…

『私のことが、見えるんですか！？』

…ありました。すごい勢いです。というか顔が近いです！　幽霊とはいえいえこの少女はかなりの美人です。

詰め寄られると少し困ってしまいます。

『答えてください！　私のことが見えるんですか！？　私の声が、聞こえているんですか！？』

「え、ええ。見えてもいますし、聞こえてもいますが…」

『…本当に？』

「本当です」

『……』

おや、また黙ってしまいました。どうしたのでしょうか？

『うぇ…』

「え！？　いや、ちょっと、なぜ！？」

『うえぇぇぇぇぇん！』

泣き出してしまいました！　どうすればいいんでしょうか、里の子供をあやしたことはありましたが、

流石にこの年の女の子はどうすればいいのかわかりません！

『グスッ、うえぇぇぇぇぇぇぇぇ！』

ああもうどうすればっ！？

第三話・幽霊少女（後書き）

この時期にこの場所で出せるのは彼女だけなので、出してみました。

作者はハーレムにはするつもりはないので、増やしても二人までです。

ご希望があれば、感想の方へ書いていただけると嬉しいです。

必ず反映できるとは限りませんが、がんばってこれからも更新していきます。

第四話・ぬらりひょん（前書き）

皆様のおかげでＰＶ１００００突破しました！
ありがとうございます！

なのに投稿は遅くなってしまいました。すいません。

第四話・ぬらりひょん

Ｓｉｄｅ，セイ

泣き続ける少女をどうにかなだめて、今はその少女と二人で世界樹をめざして歩いていた。
道すがら歩きながら彼女と会話したことでわかったことがいくつかある。

まず彼女の名前は相坂さよといい、ずっとここ麻帆良で幽霊をしていること。

どうして幽霊になってしまったのかは覚えていないこと。

この麻帆良学園都市は明治初期…一族が滅ぼされてからすぐに建てられたこと。

彼女は魔法を知らなかったことなどである。

互いの身の上話もしたので、今は下の名前で呼び合う程度には仲良くなった。

『へー、セイさんは人じゃなかったんですね。驚きです』

「いや、さよさん。あなただって幽霊じゃないですか。人のことは言えないでしょう」

『いいんです。私はれっきとした幽霊ですから。よくわからない何かなんかとは違います』

「いやいやいや、そんなにかわらないでしょう？」

『いいえ、全然違います』

「でも…」

『違います』

「…そうですか」

どうやら何を言っても無駄なようである。しかし、どうして何十年も麻帆良にいて魔法を知らないのだろうか？
夜の間もずっと起きているのなら、知っていても不思議ではないのだが覚えはないという。
…やはり、麻帆良を包む結界は「あれ」何だろうか…。

『そういえばセイさん、ずっと気になってたんですけど、その狐のお面はなんなんですか？　最初っからずっとつけてますけど…』

「あ、これですか？」

さよをなだめる間も、そう言えば面をつけたままだった。顔を見られたくない、というわけではなく、単に忘れていただけだ。

ちなみに、数十年ぶりの会話が楽しいのか、彼女からよく話しかけてくる。

「これ、さっき屋台の親父さんがただでくれたんですよ。なんでも、問屋さんが茶目っ気でつくった物だとか」

『え、もらったんですか？』

「ええ、そうです。けっこういいものですよ」

『…なーんだ、実は呪われていて外せないとかじゃないんですか』

さよは宙に浮いたまま、あからさまに肩を落とす。

なんですか、呪われて外せないって。

「そんなわけないでしょう。小説の読みすぎです。ほら、普通に外せ…あれ」

そういって面を外そうとするが、紐をきつく結びすぎたのか、とれない。にわかに嫌な汗がにじむ。

『まさか…』

さよが期待に満ちた目でこちらを見ている。足を止めて必死に格闘すること数分、無事ほどくことができた。

外した面と素顔をさよに見せる。

『なるほど…お面の下はそうなってたんですか。想像していたのとは全然違いますね』

いったいどんな想像をしていたのか気になるが怖いので聞かないでおく。

「ところでさよさん、世界樹広場にはまだつかないんですか？けっこう歩いたと思うんですけど…」

『もうすぐですよ。次の角をまがればそこがそうです。…しかし世界樹の精霊さんですかー。初めて会いますね、どんな人なんですか？』

「そうですね、やさしくて、美人ですかね」

『…美人ですか？』

「美人ですね」

『……』

おや、黙ってしまいました。…なぜでしょう、急に首筋のあたりがぴりぴりしてきました。

『あ、見えました。先に行きますね』

そう言ってさよが一人先に世界樹の方へ飛んでゆく。私は空を飛べないので普通に煉瓦の階段を下りていきます。

…おや、さよが離れると首筋のぴりぴりがなくなりました。

もしや、さっきのはさよが原因だったのでしょうか？

ははは。…まさかね。

…しかし、ようやくたどり着きましたね、春香。

神木・幡桃。またの名を世界樹。感覚の上では数時間ぶり、しかし現実では百年近い時間が流れていたという。

感慨深い物を感じて、その幹に手を添える。やはりこの幡桃も他の木と同じく、生命力が弱まっている。それでも、幹から春香の存在を感じ取ることができたことに安堵する。

春香は、「つながっている」と言っていた。もしかするとこの状態でも呼びかければ応えてくれるかもしれない。そう思い、幹に手をあてたまま、心の中で彼女の名前を呼ぶ。

『春香』

返事はない。しかし一度ではあきらめない。目をつぶってもう一度。

『春香』

やはり返事はない。もしかすると、彼女は休眠のような状態に入っているのかもしれない。

それでも、確かめておかなければならないことがあるから、もう一度、呼びかける。

『春香』

『……セイ？』

三度目にして成功。目を開く。いつの間にか汗をかいていたことに気づいた。

『セイさん、どうかしたんですか？』

「いいえ、なんでもありませんよ、さよさん」

そう言いつつ、さらに春香に呼びかける。

『春香、いくつか確かめたいことがあります。人の姿をとることはできますか？』

『少し、待って。他の世界樹に力を借りれば、何とか…』

すると、石畳の隙間から光の粒が現れ、それが春香の姿を形づくった。しかし、春香の姿はいつもと違い透けていて、向こう側が見えている。それでも、その美しさは少しも損なわれていなかった。

「セイ、さっきぶり」

「ええ、そうですね」

「まさか数時間で違う女の子を連れてくるとは思わなかった」

「はい？　ああ、さよさんはそんなんじゃないですよ」

「あら、もう下の名前で呼んでるの？　手が速いのですね」

「…春香」

「うふふ。わかってますよ、それくらい。少しからかっただけです。よろしくお願いしますね、さよさん」

『は、はい！　よろしくお願いします！』

「…ふざけるのはこの辺にしときましょう。春香、いくつか確かめたいことがあります」

「…ええ、そうでしょうね。私も話したいことがあります」

春香に、この数時間での麻帆良における仮説を話す。

「まず、この麻帆良は、英国にあるという魔法学校のような物ではないのですか？」

春香は、すぐに首肯する。

「そうです、そのとおり。ただし魔法学校じゃない。正確には、魔法使いが活動するために、隠れ蓑として作られた普通の学校。生徒や教師に魔法使いが紛れてる」

「…では次に、幡桃に霊力が足りないのは、この麻帆良全域を包む結界に消費されているからですか？」

「ええ。正確には、私と霊脈の両方から」

「…では最後。この麻帆良を包む結界は…」

できれば外れていて欲しい推論。それほどまでに、危険な結界。

「認識阻害結界……ですか？」

「ええ、あなたたち一族においては禁呪とされる認識阻害。それが、今の麻帆良には張られています」

『あの…』

ここまで黙っていたさよが、禁呪という言葉に反応したのか、話に加わってきた。

『認識阻害結界って、そんなに危ないものなんですか？　禁呪って…』

「…そうですね、簡単に言うのならば、人の心を弄ぶ術、と言っていいかもしれません」

認識阻害結界。これは陰陽師達が使う人払いの結界とは違い、不特定多数の対象者の精神に強力に作用する。
人払いの結界も人の精神に作用するものだが、これはあくまで一定の範囲から人を遠ざけ、裏の世界に巻き込まないようにするための物だ。
しかし、認識阻害結界は違う。「一般人を巻き込んだ」上で、それ

を異状と思わせないための結界。
自分たちの都合のみのために西洋の魔法使い達が編み出した、人を、人の心を歪める結界。
そして、世界を歪める結界でもある。
『そんな…ひどい』
「しかし、それが現実です」
さよに、そう言い放つ。冷たいようだが、これも世界の真実の一端である。できればさよには、彼ら西洋魔術師達にいいように流されてはほしくない。
「それで、春香。私はこれからどうすれば？」
麻帆良の現状を理解した上で、春香に問う。百年近く意識がなかったのだ、これからどう動けばいいのか皆目見当もつかない。おまけに服と腰刀、狐の面以外は、符も金銭の類も全くない。
「…とりあえず、二十二年後、次の大発光まですることはありません」
「ないって…なにも？」
「ええ、少なくともこの麻帆良においては」
なんと…。何もないとは。
「ですから、セイにはその力の使い方と、世界各地を巡って今の世

の中を裏も表も学んできてください。私はその間、二十二年後の麻帆良祭まで力を蓄えておきます。
…大まかなことは後で教えますから、がんばってください」

「まってください春香！　私の力とは？」

霊力が増えていたので、よりそれをみがけということだろうか？

「ええと…わかりやすく言うと、そうですね。
…さよさん、私たちの前に来て、目をつぶってください」

さよは突然呼ばれたことにきょとんとしつつも、言われたとおりに目をつぶる。

「セイ、手を」

春香に言われて、彼女の手を取る。

「いい、セイ。一度しかできないから、しっかり感じてて。私と心をあわせて」

「あわせるって、どうすれば…？」

「…私のことだけを考えて。難しいことは全て私がやるから。……
…いきます」

「ちょ、まっ…！？」

……それからのことは、あまりよく覚えていない。記憶がはっきりしないのだ。
光の中で春香と二人、何かの流れに乗っていたような気がするのだが。

しかも、なぜか幽霊だったはずのさよが肉体を持っている。
彼女自身もいったい何が起きたのかわかっていないようで、呆然と自分の手のひらを見つめている。
なお、今の彼女は春香の装束の色違いを着ている。色は綺麗な空色。なぜか首には白い狐のお面をつるしている。

「いったい、何が…？」

「霊脈です」

春香をみる。身体から光の粒子が離れていき、先ほどよりもさらに透けてきている。

「セイが見たのは、世界に走る霊脈の一部。半分精霊のような何かであるあなたの、新しい力。
これが二十二年後の計画の要。あなたには最終的に今のを、いえ、今以上のことをひとりでやってもらうことになります」

そう言う間にも、春香はどんどん色を失っていく。

「今行ったのは、さよさんの身体の再構成。彼女もまた、不老ですね」

あまりのことに頭がついてこない。
もう胸まで消えてしまった彼女が、言う。

「もう時間がないから、最後に言っておきますね」

「…ええ、なんです」

「さよさんは訳ありですし、いい人だから良いですけど、これ以上増やしたら承知しません」

……

……

……

「はぁっ！？　ちょっと何言ってるんですか！　だからさよさんは違うと…！」

『あ、どうやらさっきのさよさんの再構成でここの魔法使いに感づかれたようです。
せっかく作ったお揃いのお面ですから、それで上手く顔を隠して逃げ切ってくださいね？　それでは二十二年後に。…大好きです、セイ』

そう言って彼女は完全に光の粒子になって消えた。

「…お面はわざとですか。しかも最後に丸投げですか！　ええい、さよさん、お面をつけてください！」

「え？　ひゃわっ！？　ななな何を！？」

「さ、急いでここを離れますよ。まごまごしていると、見つかってしまいますからね」

「ほほう……どうしてそんなにいそぐのかのう？　せっかくの祭りじゃというのに。ゆっくりとしていけば良かろうて」

……どうやら手遅れだったようです。さよさんがいるので強行突破も難しいですかね。

覚悟を決めて、声の聞こえてきた方を見る。そこには二十人程度の男女と、先頭の…

「ほ、どうかしたのかの？」

後ろにかばうようにしているさよさんも、言葉が出てこないようです。当然ですね。だって…

「…ぬ」

「む、なにかいったかの」

「ぬらりひょんだーーーっ！！」

目の前に、日本三大妖怪の一匹がいたんですから。

第四話・ぬらりひょん（後書き）

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、お待ちしております。

第五話・式神召喚（前書き）

思い立って新しくパソコンのマウスを買いにいったら、帰りに雨でずぶ濡れになりました。

…すいません、関係ありませんね。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第五話・式神召喚

Ｓｉｄｅ，セイ

「ぬらりひょんだーーーっ！！」

「ほあっ！？」

ぬらりひょんです！　ぬらりひょんが今目の前にいます！　この日本三大妖怪の一匹、妖怪の総大将と言われるぬらりひょんです！

「いやわし人間！　妖怪じゃなくて普通の人間！！」

ぬらりひょんは必死に否定しますが、騙されはしません。妖力こそありませんが、それくらいはぬらりひょんならどうとでもできます。

「ありえません。その突き出した後頭部、ぬらりひょん以外の何者でもないではないですか」

「いやだから人間じゃと…まあよい、それよりもおぬしらに二三聞きたいことがある」

ぬらりひょんが仕切り直しました。私が叫んでからずっと後ろで苦

笑していた集団も、雰囲気が変わりました。どうやら彼らは魔法使いか、裏に関わる人間で間違いないようです。

「まったく…いくら麻帆良祭で人が多いとはいえ、よくこの世界樹広場まで来れたものじゃ。わしの名は近衛近右衛門。この麻帆良の学園長にして、関東魔法協会の長をしておる。お主らは身なりから察するに、関西呪術協会の者で間違いないかの？」

「…関東魔法協会に関西呪術協会？　いったい何のことです」

はて、そんな名前の組織には覚えがありません。この百年の間にできた組織でしょうか？

「きさま、とぼけるのもいい加減にしろっ！」

後ろにいた男の一人が叫びます。そう言われても知らない物は知らないんですから、しょうがないじゃないですか。

「学園長、やはり問答無用で捕縛しましょう！　尋問ならその後でもできます！」

「…しょうがないのう。おぬしら、おとなしく捕まってはくれんかの？　今ならまだそれなりの対応ができるのじゃが…」

私は無言のまま、後ろにいたさよさんの肩を右手で抱きかかえます。さよさんが短い悲鳴をあげますが、気にしている余裕はありません。左手は既に腰刀の柄をにぎり、いつでも抜けるようにしています。

「…交渉決裂のようじゃの。やむをえまい、我ら魔法使いの力とくと味わうがよい！」

近右衛門とやらのかけ声にあわせて、魔法使いたちは扇状に展開し、魔力で作られた矢を放ってきました。
先ほどの言葉から察するに、おそらくは捕縛系の魔法なのでしょう。数はだいたい一人二重程度、全部で四百すこしですかね。たいした数です。並の相手ならこれでおしまいでしょうね。

ですが…

「この程度の数、あの戦いに参加した魔法使い達は一人で撃ってきましたよ！」

左手の腰刀を抜き放ち、即席の結界を張る。結界は一族の千年以上の歴史と技術の結晶、即席とはいえ、長たる自分が扱うそれは、魔法の矢の千や二千はたやすく防げる。

案の定、魔法の矢は結界に命中しても、ただ砂埃を巻き上げただけで消滅した。

「やったか！？」

どうやら、上手い具合に砂埃が目くらましになっているらしい。

「…さよさん」

さっきからまったく動かないでいるさよに、相手に聞こえないように小さな声で話しかける。

「今から逃げるための足を呼びます。しっかりつかまっていてください」

「逃げるって…どこへ？」

「……とりあえず、この麻帆良の外へ」

む、砂埃がはれてきましたね。時間がありません。

「さあ、いきますよ！」

「は、はい」

腰刀により強く霊力を込めると、刃が白い光をまとう。これはまだ第一段階。

本来、一度召喚したことがある妖怪は、術具さえあればいちいち手順を踏まずとも霊力を込めて名を呼ぶだけで召喚できるのだが、今回はさよがいるため、いつもと違う妖怪を式神として召喚するので手順を最初から踏む必要があるのだ。

ともかく、第二段階。その刃を親指の腹につきたて、刃に血をつける。すると、光の刃が白から血と同じ朱に変わる。

「な、なんだあれは！？」

砂埃がはれて、朱い光が周囲へ広がる。周囲の魔法使い達はこの光景に魅入られているようだ。

第三段階。なおも光を放つ腰刀を、胸の前で右から左へ地面と水平に振るう。すると、真下に刃と同じ朱い光で描かれ、丸と四角で構成された召喚陣が現れる。

ここまでくると、魔法使い達も正気に戻ったのか、再度詠唱を始めるがもう遅い。

「…お出でませい」

最終段階。自分が召喚しようとしているものの名を、高らかに呼び上げる！

「黒輪火車！」

地面の召喚陣から、自分とさよを持ち上げるようにして、一辺が四メートルほどの立方体が現れた。その左右には名前の由来の大きな黒い車輪がついており、前面には口と大きな一つ目が描かれている。

「なんじゃあれは！？」

近右衛門も驚いているようだ。

そもそも黒輪火車は何代か前の一族の長が一から作り上げた式神の一体。故に普通の火車とは見た目も用途も大きく違う。驚くのも無理はない。

「では、お暇させていただきましょうか」

さよを黒輪火車の上に座らせ、腰刀を鞘に戻す。自身も彼女の隣に腰を下ろし、黒輪火車を撫でる。すると、黒輪火車が、車輪から炎をだしながら上昇し始めた。

「ま、またんか！」

近右衛門を筆頭に魔法使い達が何か言っているが、黒輪火車は意に介さず上昇を続ける。
やがて、彼らの声が届かない高空にたどり着いた。

「……あの、セイさん。これからどうするんですか？」

さよがおずおずと上目遣いに訊いてくる。不安なのかもしれない。幽霊だったとはいえ、彼女を巻き込む形になってしまった。…どんな形であれ、彼女に対して責任はとるつもりだ。

「とりあえずは、残されていそうな一族の拠点や、記憶にある近辺の組織を訪ねてみたいと思います。今の帝都を見てみるのも良いかもしれませんが金銭がありませんからね。そのあとは……」

「そのあとは？」

「……西へ。京の都に行ってみましょう」

第五話・式神召喚（後書き）

この話以降も、結構オリジナルな妖怪というか式神をだすつもりです。

なので、より詳細な式神紹介を追加するかもしれません。

第六話・西へ東へ（前書き）

お気に入り百件突破！
ＰＶも結構すごいことに！

これも読者の皆さんのおかげですね！

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

※修正しました。

第六話・西へ東へ

Ｓｉｄｅ，セイ

「これは駄目。これも駄目。こっちは…いけますね。あ、これも使える」

「セイさーん、こんなの出てきましたけどー」

「あー…それは駄目ですね。箱ごと火にくべちゃってください」

「はーい」

「それじゃまた何か出てきたら教えてください、さよさん」

どうも、セイです。今は少しでも符や術具を補給しようと、記憶にある一族の拠点や備蓄庫をまわっています。符は消耗品な上、今は一枚もありませんし、腰刀一本では同時に召喚できる式神にも限りがありますからね。

「ふぅ…、駄目ですね。…さよさーん、ここにはもうめぼしい物はなさそうですから、休憩にしますよー」

『はーい、いまそっちにいきますねー』

別の部屋からさよの返事が聞こえてきた。彼女は再構成された肉体を得ても、物を動かす力を失わなかった。それどころか、理由はわからないが力が強くなったので、今は一人で作業させていた。むしろ二人でやると彼女がひっついてきて作業効率が落ちるのだ。

…しかし駄目ですね。

今いるのは武蔵と甲斐の国境の山中に作られた拠点です。ここで見つけることができたのは、符が全部で八十枚ほど。その内、まだ何も書かれていない符が約半分の四十枚、戦闘に使う攻撃用の符がさらに半分の二十枚、緊急時のための転移符は二枚だけ。後は結界や治癒といった符です。

符などしょせんは消耗品、いくらあっても事欠くことはありません。なのに、ここで八箇所目だというのに、まだまともに使える道具を見つけたのはここが初めてなのです。というか、拠点として残ってたのもここが最初です。

他はすでに取り壊されていたり、「だむ」とやらのせいで水の中に沈んでいたりしました。

ですので、まだ建物が残っていたこの拠点を見た時はかなり期待したのですが、思ったほどではありませんでした。

符が多少残っていたのは嬉しいですか、召喚に使う術具が駄目になっていたのは痛いです。術具で召喚するのと符で召喚するのとでは効率が違いますからね。まあどちらにも長所と短所はありますけど。

ん、さよさんが戻ってきましたね。…おや、何か持ってきましたね。

「さよさん、それは…？」

「あ、呼ばれてから見つけたんで持ってきちゃいました。でもこの箱、私じゃ開けられないんです」

さよが宙に浮かべて持ってきた箱は、どこがふたかわからない大きな長方形の箱で、全面黒く塗られていますが、八つある角のうち一つだけが白く塗られています。

そして、この箱には見覚えがあります。

「…さよさん、お手柄かもしれません」

「え、でもこの箱開けられませんけど…？」

「そこはまぁ見ててください。あ、こっちに置いてもらえますか？」

そういって物をどけて場所を作り、さよはその場所に箱をゆっくりおろす。

後は、私の仕事です。箱の上部を一部をずらし、次にまた違う場所をずらす。それをどんどん繰り返していく。

「わぁ、これって秘密箱だったんですか、セイさん！」

そう、秘密箱。お土産で売ってるあれである。これはその技術を応用し、術と組み合わせてより難解にした代物で、一族が機密保持を

目的として作った封印術の一つである。開け方を知らないと、何日かけても開かない。

が、それは開け方を知らない者の話。解き方さえ知っていれば…お、開きましたね、中身は何が……

どうも、こんばんは、セイです。二度目ですね。今は夜になったので暗い内に黒輪火車で京都を目指して移動しています。関東の他の組織は駄目でした。陸奥まで足を伸ばしましたが駄目でした。どこの組織も残っていません。

表にも関わりの強い神社仏閣は残っていたのですが、実働部隊はもうどこもほとんど残っておらず、現状維持が精一杯のようです。なので、今は関東に区切りをつけて関西を目指しています。

……え、箱？

「…セイさん、それ幾つ目の箱ですか？」

「…七十六個目です。ですが、これも、ここを、こうして…よし、開きました。これで…」

しかし手の中の箱は開いたかと思うと、箱は砂になって崩れ、風に

乗って飛んでいった。

残されたのは、一回り小さな箱。

……ええ、もうこれと同じことを七十五回繰り返してます。解き方は同じなのですが、同じだからこそ余計にやる気がなくなっていきます。

こんな仕掛けは作った覚えがないので、前の代かそれ以前の長の仕業とみて間違いないでしょう。

しかしここまで来たら意地です。あんなに大きかった箱も、今は掛け軸の箱くらいの大きさしかありませんし。

「セイさん、少し休んだらどうですか？　もうずっとやってるじゃないですか。そんなに根を詰めると身体を壊しちゃいますよ？　そろそろ京都についちゃいますし…」

「これで、だめなら、切り上げますよ…、と。どうだ！」

七十七回目の正直。開いた箱を固唾を飲んで見守るが、箱に特に変化は起きない。

「やりましたね、セイさん！」

「…ええ、やりました！　やりましたよさよさん！　やっと開きましたよ！」

「ひゃあ！」

嬉しさの余りさよに抱きついてしまいました。さよが悲鳴をあげた気がしますが、きっと気のせいでしょう。うん。

「セ、セセセセイさん！　　ななな、何を！？」

「あ、すいません」

「え？　　…あ」

嫌だったかと思い、すぐにさよを話すと、少しの間ポカンとして、それからなぜか残念そうにしていた。

「…もう終わりですか…もっと…」

さよが何か言ったようなのだが、ちょうど風の音で聞こえなかった。

「さよさん、何ですって？」

「あっ、な、なんでもないです！　　そ、それよりもセイさん、箱の中には何が入ってたんですか！？」

「え、ああ。そう言えばそうでしたね」

箱が開いたことが嬉しすぎて忘れていました。
これだけの仕掛け、余程の物だと思うのですが…

「これは…術具の類、でしょうか？」

箱の中には厳重に青い布で包まれた棒状の物が入っていた。それを箱から取り出すと、箱は今までと同じように砂になって飛んでいった。まるで、役目は果たしたと言わんばかりに。

こういった物は例え一族の術具であっても、まれに呪われた品であったりするので注意が必要になる。なるべく慎重に、まかれた布を解いてゆく。

そして、布がすべて取り払われた時、そこにあったのは一振りの剣だった。

刀のような片刃ではなく両刃で、曲刀でもない。柄も刃も全てが一つの素材から造られており、どこにも継目は存在していない。刀でいう鍔もなく、ただ柄と刃があるだけの剣。

ただし、問題はこの剣を造るのに使われであろう素材。この剣は、全体の色は赤く、それ自体が霊力を持っているのか、ぼんやりと光っている。

おそらく、この剣は……

Ｓｉｄｅ，さよ

まったく、セイさんは私を何だとおもっているんでしょうか！

いきなり私を抱きしめたかと思えば、すぐに離されちゃいましたし…女の子として見られていないのでしょうか？

けど、いったいどうしたんでしょう？　あんなに喜んでいたセイさんが、箱の中身の赤いきれいな剣を、怖いくらい真剣な顔で見ていると思ったら、また同じように布を巻きなおしてしまいました。

何だったのか訊いても、術具としか答えてくれません。しかも、他の事を訊いても生返事ばかり。まともに答えてくれないばかりか、ろくに目も見てくれません。

さすがにこの態度には頭にきました。

さっきはいきなり抱きついてきたと思ったら今度はこれです。

京都につくまでに、多少大胆なことをしてでも私に目を向けさせてみせる。と、夜空を駆ける黒輪火車の上で、私は決意したのでした。

第六話・西へ東へ（後書き）

次回は京都です。

もう何話かしたら大戦編ですね。

やっと主人公を暴れさせられます。

第七話・京都の夜（前書き）

累計ＰＶ５００００突破。
お気に入り二百件突破。

…驚きすぎて逆に冷静になりました。

これも読者の皆様のおかげです。まだまだ頑張っていくのでよろしくお願いします。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、すべてお待ちしております。

第七話・京都の夜

餡蜜、という菓子をご存知だろうか？　賽の目に切られた寒天に、小豆餡や杏子、赤エンドウ豆などをのせ、その上に黒蜜といった蜜をかけていただく、夏の風物詩である。

なぜそんな話をするのか？　それは、今私とさよの目の前に餡蜜が、それも老舗といわれる名店の餡蜜があるからである。細かい細工の施された硝子の器にいれられて運ばれてきたそれは、清楚ながらも確かな存在感をもってそこにある。

寒天、小豆餡、そして赤い彩りを添える赤エンドウは、それぞれがただそこにあるだけで意味をなし、そこに黒蜜が加わることによって餡蜜として完璧な調和を作り上げている。

店員のごゆっくりという言葉すら、今の私にとっては嘲笑に聞こえる。そんな今の私に、この完成された芸術品とも言うべき餡蜜を食することなどできるのだろうか……

「セイさん、食べないならもらっちゃいますよー」

「ああっ、食べます！　食べますよ！　器返してください！！」

Ｓｉｄｅ，セイ

「まったく、何てことをするんですか」

「だってセイさんいつまでも手をつけないで、ぼーっとしてたから…」

「欲しいなら欲しいと言えば良いでしょう。別に餡蜜の一杯や二杯、気にすることでもないでしょうに」

「…でも、女だてらにとか、思われちゃうかもしれないじゃないですか」

「人の目を気にしていてもしょうがないでしょう…」

今は店を出て、夜の京都を歩いています。先ほど餡蜜をいただきましたが、実は私達、不老のためか空腹にならないのです。気づいたのは昨日のことです。

ええ、一日空を飛び続けてまったく空腹感を覚えなければイヤでも気づきます。

昨日の夜遅く…いえ、もう今日になった頃でしたかね、京都に到着したのは。

いえ、やはり良いものですね、さすが京都です。多少「びるでぃんぐ」や「あぱーと」が増えますたが、それでも昔懐かしい街並みが

残っていました。昔から連綿と続く伝統が残っているのは良いものです。おかげで、裏に関する品物を取り扱っている店を探すのに手間取らずにすみました。

しかし、百年近くたっても同じところで営業できていると言うことは、やはり西にはまだ陰陽師達や土着勢力が残っているんでしょうね。

とにかく、そこで転移符を換金しました。これで当座の活動資金は確保できましたし、他にも符やら何やらで半分使いました。さよさんにもこれから符や結界、式神の召喚について教えなくてはいけませんからね。

それとついでに、そこの店主に関西呪術協会との仲介を頼みました。場所は彼らから指定されたので、今はそこにむかって歩いているところですね。

あ、今は二人ともあの装束ではありません。私は白の「ぽろしゃつ」に「べーじゅのちのぱん」、さよさんは青い「てぃーしゃつ」に「でにむ」を身にまとっています。

これらは表の店に擬態するために売っている普通の商品だそうですが、二人の狐の面と元の装束をいれている旅行鞄は、魔法技術を取り入れて見た目よりも多くの物が入るようにした売れ筋商品らしいです。…ええ、高かったです。結構しました。まさか術具より高いとは思いませんでした。

…もっとも、魔法世界には中に異空間を作りあげるダイオラマ魔法球というとんでもないものも売っているそうです。
新しい結界のために一度研究してみたいのですが、店主によると値

段の桁が違うそうです。

と、そろそろついたようですね。待ち合わせ場所として指定されていた公園につきました。人払いの結界も張られているので間違いないでしょう。

「セイさん、ここなんですか？」

「ええ、間違いありません。ほら、あそこに」

少し離れた長いすに、杖を持った和服姿の老人がひとり。その傍らにはひと組の男女。二人とも背に竹刀袋を背負っているところを見ると、神鳴流でしょうかね。

周りに他の気配もあるのが気に入りませんけど…

私達があちらに近づくと、彼らも気づいたのか、長いすに座っていた老人が立ち上がりました。まぁ神鳴流の二人は公園に入った時点で気づいていたでしょうがね。

「…おまえさんらが、わしらに会いたいゆう“クロナギ”のもんかい？」

老人が、声に威圧感をにじませて話しかけてきました。さよさんは少しそれにのまれかけているようなので、私が前にでることで背後にかばいます。

「ええ、私が玄凪斉（くろなぎせい）です。かくいうあなたは、関西呪術協会に名を連ねる方で間違いなく？」

え？　玄凪（くろなぎ）？　私の名字ですけど、ご存じありませんでしたか？

「おう。まぁ関西呪術協会で幹部やっとる近衛千蔵ゆうもんや。しかしおどれ、今時分になって玄凪かたるたぁどこのもんや？　もう百年は前に滅んだ家やぞ。魔法使いどもに里焼かれてな」

「…滅んでなどいませんよ」

「あぁん？　なんやと？」

確かに一般的に見れば、土地を失い、一人しか残っていない一族など滅んだも同然でしょう。しかし…

「…まだ、私が残っています」

ええ、ええ。たった一人だけです。たった一人だけ生き残ってしまいました。ですが、たった一人でも、私は玄凪の名を継いだ長なのです。私が生きている限り、そこに玄凪はあります。ならば、滅んだなどとは言わせません。

「…は、優男か思たら、ええ面するやないか。まあええ、ほんならそういうことにしとこか。…ほな本題や。その玄凪のもんが、わしら関西呪術協会になんの用や」

「情報を」

「はぁ？」

「ここ百年。裏の世界で起きたことを、世界規模でなるべく詳しく。それと、魔法世界へと至る方法を」

春香は言っていました。学べ、と。それに、やはり多くを知るには一度あちらへ赴く必要もあるでしょう。

千蔵老人はそれを聞き、黙り込んでしまいました。何やら考え込んでいるようです。

「わしなぁ、まあ幹部やっとるくらいや、そこそこ権限も持っとるわ。多少のことなら、わしの一存でどうにかできる。せやが、ここ百年言うたら本山の書庫にいかなあかんが、流石にあそこにゃ勝手によそのもん入れる訳にはいかんわな」

千蔵老人はなぜだか少し楽しそうです。何か企んでいますね。これは。

「よそのもん入れるには長の許可がいるが、そうそうそこらの馬の骨を長に会わすわけにもいかん」

なるほど、話の筋は見えてきました。

「…それで？」

「そこで、や。われらの実力をわしに見せてみい。ほんなら、わしが責任もって長に会わしたるし、いろいろ便宜はかったるわい」

その言葉と共に、周囲の木立の陰から、陰陽師らしき服装の者や刀をもった者が現れました。その数十七。どうやらやるしかなさそうです。

「…わかりました。やりましょう」

「おっしゃ、ほんならさっそくやろうや。準備はええか？」

「あ、ちょっと待ってください。さよさんは戦えないので、戦闘から外してください」

「おう、なんやそっちの嬢ちゃん戦えんのかい。ほなこっち来て座っとき。手ぇ出さへんさかい」

しかし、さよは戸惑う素振りを見せます。普通は今から戦う相手の隣には座れませんね。

「セイさん…」

「大丈夫ですよ。信用しても問題はないでしょう」

それに、多人数が相手では、さよさんがいると立ち回れませんからね。

符と腰刀を取り出した旅行鞄をさよさんに渡します。

「…わかりました。でも、絶対勝ってくださいね！」

そういうとさよさんは鞄を持って千蔵老人の隣に座りました。

「今度こそ準備はええな？」

「ええ、問題ありません。…いつでもどうぞ」

腰刀を右手で抜き放ち、鞘は腰に差しておく。左手には数枚の符を持つ。

「ほんなら…始めぇ！！」

千蔵老人の声と同時、先手を取ります。

「お出でませい！　七つの災禍・八鬼の頭！！」

にわかに描かれる召喚陣。その数八つ。一瞬で展開された召喚陣に相手の動きが止まり、その間に陣からは八つの影が勢いよく飛び出してきた。

飛び出してきたのは、二メートルはある巨大な鬼の頭蓋骨。それらが百をこえる鬼火を引き連れて宙に浮かんでいるのだから不気味なことこの上ないです。

そして、それらは一斉に口を開けました。

数人がそれを見て大きく飛び退きますが、そのほとんどはまだ動けません。

「阿呆っ！　散れえっ！！」

どうやら千蔵老人はこちらの意図に気づいたようですね。しかし、もう遅い。

「やりなさい！！」

自分は頭蓋骨の一つの上に乗った状態で命令します。そして、八つの頭蓋骨の口から吐き出されたのは、禍々しい黒の煙。一定範囲への無差別攻撃。その煙が、彼らの大半を飲み込みました。

「な、なんだこれは！？」

「か、体が…っ！」

煙の中から声がしますが、すぐにやみました。
煙がはれた後に残ったのは大きく飛び退いた二人以外の、十五人分の石像でした。

「阿呆め、油断するからやっ…！」

千蔵老人はあっという間に大半がやられたのでおもしろくはないのでしょう。

「…まだ、やりますか？」

こう言うと、残った二人は千蔵老人を見ます。一瞬で仲間がやられれば、戦う気力も失せたのでしょう。

「あーあーあークソっ。負けや負け。あっという間にやられよって」

そういって千蔵老人は懐から符を取り出して石になった彼らに投げます。その符は彼らの額に張り付き石化を治療します。その動作は一瞬、彼は油断ならない人物のようです。

「そないに警戒せんでもええわい。約束はちゃんと守ったるわ。まぁもう今日は遅いさかいに明日になるけどな。…おらぁおどれら、とっとと帰るぞ！　人払い解くのを忘れるなぁ！」

千蔵老人がどなると、石化が解けてぼうっとしていた者達が、雷にうたれたようにきびきびと撤収していきました。

「…ほなわしらも行こか、玄凪の。夜の遅にいつまでもふらふらするもんちゃうわ。車ぁ回させるさかい、ついといで」

その背中を見ていると、さよが駆け寄ってきました。

「セイさん、大丈夫なんですか！？」

「はい？　何がです？」

「だって、セイさんもあの煙の中にいたんでしょう！？」

「ああ、私は大丈夫ですよ。……もしかして、心配してくれたんですか？」

そう言うと、顔を赤くしたさよが、無言でぽかぽかと殴りかかってきました。

こうして、京都で二度目の夜はふけていくのでした。

第七話・京都の夜（後書き）

京都編その一です。

今回は主人公の名字が出ました。

あと、新しく式神とオリキャラもでました。

千蔵老人についてはそのうちキャラ設定の方に追加します。

しかし……、戦闘と言えるほど戦闘してませんね。すいません。

第八話・西の総本山（前書き）

※一部修正しました。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第八話・西の総本山

「さて…ほんならこれから関西呪術協会緊急最高幹部会、はじめましょか」

Ｓｉｄｅ，セイ

どうも、セイです。昨晩は千蔵老人の計らいで、本山の一室をかりてさよさんと二人同じ部屋で休みました。
最初は男と女、できれば別室にしてほしいと頼んだんですが、千蔵老人の付き人で私達を部屋まで案内してくれた神鳴流の剣士いわく、監視しづらくなるのでまとまっていてほしいとのこと。
こう言われると諦めるほかありません。あやしさ満点の私たちが泊めてもらえただけでも御の字です。
ただ、布団が一組しか用意されていなかったのには断固抗議しまし

た。これには剣士の方も眉をしかめて「あの方は…」とつぶやいたあとすぐに布団を一組用意してくださいました。

とにかく、一晩あけた今朝、私は千蔵老人に連れられて関西呪術協会の総本山、その広い屋敷の廊下を歩いています。さよさんには、部屋で待っていてもらいました。

ふと、庭に目をやります。庭には桜が数多く植えられているようですが、残念ながら季節が違うので花を見ることはできません。しかし、いずれ春が来て花が咲けば、さぞや美しいことでしょう。

「おう、ここや」

千蔵老人が、立ち止まります。千蔵老人は昨日と同じような和服ですが、私は元の装束に着替えました。さすがに西洋かぶれで西の長に会うわけにはいきません。

と、控えていた巫女さん二人が音もなくふすまを開きました。千蔵老人はためらうことなく部屋に入っていき、私もそれに続きます。部屋の中は奥に向かって伸びており、何畳あるのかすぐにはわからないほどの広さを誇ります。

室内には既に十八人の男女が座っていました。いずれもが尋常ならざる霊力や気を宿しているようです。その中で空いているのは、二席。

私が一番入り口に近い席に、千蔵老人はそこそこ奥の席に腰をおろしました。こういうものはどこも様式美、新参者は下座に座るのが一般的です。席、他に空いてないですし。

そんなことを考えていると、部屋の一番奥、上座に座っていた女性

が口を開きました。

「さて…ほんならこれから関西呪術協会緊急最高幹部会、はじめましょか」

「いや、待ってくださいよ長。なに普通に始めようとしてるんです」

そう言って長と呼ばれた女性を止めたのは、丸メガネをかけた男性です。服装から察するに、陰陽師でしょうか？　何人か似た装束の人がいますし。

「はい？　どないしたんです天ヶ崎はん。なんかおかしなことでもありましたやろか？」

「いやいやいや、おかしいことだらけでしょう。急な最高幹部会を開く理由は不明、しかも部外者がいる。もとから京都にいる私らはともかく、狭雲さんや橘さんは夜に連絡もらって九州からとんできたそうじゃないですな。いったいなんなんです？」

数人が同意するように首を振ります。しかし覚悟はしてましたが、結構な視線がつきささってます。

「ん～、そやねえ。でも、私もよくわからへんのよ。言いだしたん私とちゃうし」

「はああ！？　あなたじゃないって、じゃあ誰です！？」

長は、あはは～、と笑う。

「千蔵のじいちゃん」

「千蔵さんが！？　何のために！？」

部屋の中が一気に騒がしくなりました。というか千蔵さん、長に話通してないってどういうことですか。

「なんじゃい千蔵、おどれついに引退か？」

「ちゃうわい阿呆。そこに座っとるやつのことで長の許可がほしいんでな。ま、皆呼んだんはついでやな。ついで」

「おい、千蔵…」

先ほど橘と呼ばれた千蔵と同世代の老人が座布団からのっそりと立ち上がります。手にはいつ抜いたのか、抜き身の野太刀が握られています。

「おまん、人を夜中にたたき起こして九州からこっち呼んだんや。まっさかくだらん用事やないやろなぁ…」

部屋の中の空気が凍り付きました。長は変わらず笑ってますけど、橘老人、目がやばいです。白黒反転してます。あれが噂の本気になった神鳴流でしょうか。

「おうよ、とびっきりの話や」

「…なら、話せ。くだらんかったら切る」

野太刀を鞘におさめ、橘老人はもとの席に座りなおしました。部屋

のそこら中で安堵のため息がもれます。

場が落ちついたのを見計らって、千蔵老人が話し始めました。

「さて、ほんなら始めよか。わしがそこにおるそいつに頼まれたんは、“ここ百年の裏の世界の歴史”…ようはここの書庫に入りたいゆうことやな。んで次が、“魔法世界に至る方法”。この二つ」

ん？　魔法世界のくだりで長の表情が少し動きましたね。

「いや、だから千蔵さんこのひと誰なんですか」

天ヶ崎さんが千蔵老人に訊きます。そういやまだ紹介されていませんね。

「ん、おう。聞いて驚け。本人いわく、“玄凪”斉。あの玄凪のもんらしいわ」

この一言で、騒々しいながらも和気あいあいとしていた空気は一瞬で消滅しました。

「“玄凪”言いました？　千蔵のじいちゃん」

「おうよ。ちなみに実力はわしんとこの部下が確認済み。まぁ十中八九ほんまもんで間違いないやろ」

空気が、澱む。さよさんを連れてこなくて大正解でした。たぶん気を失っていたでしょうからね。

いまこの場にいる関西呪術協会の幹部たち、それも千蔵や橘といっ

た年かさの者達がだす威圧感は、他の若い幹部も圧倒しています。
それだけ、玄凪の名は意外でしたかね。
「玄凪、…なるほど、玄凪か。あの“犬死に”したゆう、東の」
橘老人が、そう言いました。
…決して聞き捨てならない言葉です。
「…いま、なんとおっしゃいましたか？」
「犬死に、と言った。若造」
……
「……」
「どうした、若造、怖じ気付いたか」
…犬死に。なるほど、犬死にですか。この爺、私達の最期を犬死にと言いましたか。

「…さい」

「ん？」

「表に出なさい、下衆っ！！」

……許しませんよ。

Ｓｉｄｅ，長

どうも、長です。おはつに～。

……

ふざけてる場合やあらへんね。顔には出してへんけど、むこうさん

えらい怒ってはるわ。

橘のじいちゃんの悪いくせやね。わざと人怒らせて実力はかろうとしはる。千蔵のじいちゃんが実力確認済みやて言うてるのに。

…自分の目で見な納得せえへん人やさかい、しゃあないか。

でも、いくらわざとやゆうても、言ってええことと悪いことがあると思うんやけど…

「…さい」

お、むこうさんもやる気かな？　できればあんまり本山壊さんで欲しいんやけどな。ま、玄凪はもともと結界に特化した補助主体の一族や言う話やったと思うし、橘のじいちゃんが張り切りすぎん限り大丈……

「表にでなさい、下衆っ！！」

っあ！！！！

なんやのんあれ！！

あれはあかん！　あれはあかんよ！！　なにが結界特化や、何が補助主体や！！　書庫にあった史書は絶対間違っとる！　だ

って、
怒鳴り声一つでこの場の空気呑み込んでしもたやん！！
ここにおんのは、全員が関西呪術協会の名だたる幹部やで！？
しかも霊力桁外れやし…！！
なんの呪具の補助もないのに目視できる強さの霊力てなんやのん！！！！

……あかんわ、えらいもん怒らせてしもたかもしれん。詠春はん、もしかしたら、もう私ら会えへんかも……。

第八話・西の総本山（後書き）

また、京都です。次も京都です。

魔法世界に入れば執筆も楽になるはず。

第九話・これから（前書き）

今回も短いです。どうすれば長くなるんでしょうか…。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第九話・これから

Ｓｉｄｅ，近衛千蔵

…橘の、あんの阿呆が…っ！　龍の尾を踏みよった！！

もはや、部屋の中は戦場だ。ここは関西呪術協会の総本山で、いるのは組織を束ねる最高幹部たちだというのに、動けない。
へたに動けばどうなるかわからない。

おそらく、死ぬ。

それほどまでに、今の玄凪斉は危険だ。彼は強い。昨夜それは確認済みだったはず。
己の部下の石化を治療しながら下した評価は、変則的な召喚術者。
強さは幹部級だろうが、懐に入られれば案外もろいかもしれない、といったものだ。
結界や符、他の術を使用しなかったので不確定要素はあったが、妥当なところだと考えていた。

だから、彼が玄凪の名をかたる東のスパイである可能性が有りながらも、長にあわせることにきめた。
もし彼が本当に東のスパイで、何か行動を起こしたとしても、橘たち神鳴流を使う幹部で対処しきれると踏んだからだ。

だが、実際はどうだ。彼は爆発寸前、いや、もう爆発して臨戦態勢にはいったというのに、神鳴流を使う幹部連中はもとより、長さえ呑まれて動けないでいる。かくいう自分も動けない。
さらに追い討ちをかけるのが、この状況の原因がこちらにあること。迂闊に動けないし、流れを変えうる要素が思いつかない。幹部は既に全員ここにそろっている。
部下には近づかないように厳命してある。
おまけに、玄凪斉の、どこに隠していたんだと思わせるほどの霊力。霊力が何もしていないのに目視できるなど異状以外の何物でもない。実力の想定を大幅に情報修正しなくてはいけない。

だが、打つ手がなくとも何らかの行動は起こさなくてはいけない。最悪なのはこのまま戦闘に発展し、長の近衛木乃芽、もしくは幹部の誰かがやられること。もしそうなれば、関西呪術協会の影響力の低下は避けられない。

ならば、彼との交渉は必須。一番危険な会話の口火を切るのは、まだ若い長や天ヶ崎よりも、老い先短い自分の仕事。
もし失敗すれば、待っているのは戦闘。相手に呑まれた状態で始めれば、どんな被害がでるかわからない。

長年裏の世界で陰陽師として幾度も修羅場をくぐり抜けてきたが、こんな緊張は久しぶりだ。

そして、いよいよ覚悟を決めた時だった。

「玄凪斉さん、いいはったね。橘のじいちゃん、許したってくれへんか。…このとおりや」

関西呪術協会の長、近衛木乃芽が、そう言って頭を下げたのは。

Ｓｉｄｅ，セイ

はて…？　長はなんと言いました？　許せ？　あの爺を許せと？

「わしからも、重ねて頼む」

今度は、千蔵老人です。

「橘も、本心からああ言うたんやないんや。橘には橘の役目がある。それをまっとうしようとしただけや。…やり口には問題があったと思うが…すまんかった」

長と千蔵老人が頭をさげたまま、時間だけが過ぎていく。私も、他の幹部たちも、件の橘老人も、だれも動こうとはしません。

…しかし、こうして二人に頭を下げられて、少し頭が冷えました。確かに犬死にと言ったことは許せることではありませんし、許すつもりもありません。ですが、確かに玄凪はＭＭ連合に、ひいては西洋魔術師たちに一度負けた。それは変えようのない事実です。

それに、今の私は相手に物を頼む側だというのに、熱くなりすぎました。自制できなかった私にも非はあります。
怒りに任せて怒鳴ったあげく、霊力を半ば暴走させるなんて…まったく…何やってるんでしょうね、私は。

とにかく、あちらは千蔵老人や長までもが頭を下げて誠意を見せてくれたのです。私も、それ相応の対応をしなくてはいけません。

「…お二人とも、頭を上げてください」

今まで微動だにしていなかった二人が、ぴくりと動いて、おそるおそるといったふうに顔をあげました。

私は、今まで彼らがそうしていたように深々と頭を下げます。おそらく、幹部たちはそれはもう驚いているんじゃないでしょうかね。

「ご無礼の段、まことに申し訳ありませんでした」

しかし、と頭を上げて続けます。

「私達の最期を犬死にと言ったこと、許したわけではありません。そこは間違えないでください」

「わかったえ。ほなら、書庫の立ち入りを認め、魔法世界に至る道についても、うちらが責任持って手配する。そういうことで手打ちにしてもろてかまへんか？」

長がそう言います。ああ、あの表情には覚えがあります。これで駄目なら、命をかける…といった、覚悟を決めた表情です。あの時の、

燃える真帆良で結界の基点たる社を破壊しに行くとき、最後の防衛線に残る部下達も同じ表情をしていました。

まぁ、そんな悲壮な覚悟をせずとも、その条件をだした時点で私の腹は決まっているのですけどね。

「…願ってもないことです。お願いします」

「…ふぅ、ほんならこれで手打ちやね。改めて名乗っとくわ。うちの名前は近衛木乃芽、現近衛家当主にして、関西呪術協会の長」

「玄凪の長、玄凪斉です」

ここに、手打ちはなりました。

「おぅし！　ほんなら一件落着したところで、飯にしようや。もう昼になっとる」

千蔵老人が、今までの空気を吹き飛ばすかのように明るく言いました。いつの間にやら日もずいぶん高くなっていました。

それからは部屋にいたさよさんも呼んで、ちょっとした宴会になりました。まだ昼ということで、酒はあまり飲みませんでしたが、それでもギスギスした空気を吹き飛ばすには十分でした。

橘老人が腹を捌きかねない勢いで謝罪してきたので一応和解しましたし、千蔵老人に幹部のお歴々を紹介していただきました。どうやら千蔵老人が最高齢で、長が最年少だそうです。

あと、気になって麻帆良にいたぬらりひょんとの関係を訊いてみましたが、木乃芽さんが娘で、千蔵老人は親戚だそうです。…娘ですって。人類の神秘の一端に触れた気がします。

そして今、宴会も終わり、他の幹部達はそれぞれの持ち場に帰っていきました。橘老人もこれから飛行機で九州に帰るそうです。
一方、私とさよさんは千蔵老人に連れられ、一緒に書庫に向かっています。ほんとはさよさんには、また部屋に残ってもらうつもりだったのですが、幹部の誰かが酒を飲ませたらしく、ひっついて離れません。カブトムシもびっくりなくらいとれません。

しょうがないので、ふたりそろって廊下を歩いている訳なんですが、酔っぱらったさよさんは妙に艶っぽく、…その…匂いとか、胸が…

「ここや」

千蔵老人の声で我に返りました。
私は一体今何を？

「ここに史書や地方の伝承の資料なんかがまとめられとる。符や陰陽術なんかは別の禁書庫に入れられとるから、そっちはまた後日な。じゃ、ここの鍵は渡しとくさかい…って、何面白い顔しとる」

「はっ！？　　い、いえ何でもありません」

「…ははーん。なるほどなるほど。まぁ、するなとは言わんが、本は汚さんようにな」

「何をですか！」

「ん？　何やと思た？」

……遊ばれましたね。

千蔵老人は鍵を私に渡すと、にやりと笑ってから書庫を後にしました。

「んふふー。せんぞーさんはなんのことをいってたんでしょーねー」

…気にしません。さよさんは休ませておけばいいんです。

さよさんをひっつけたまま、大きな書庫の扉を開きます。高い位置に取り付けられた窓から光が差し込み、書架が立ち並ぶこの場所は、古紙と墨の匂い、そして静寂が支配する、過去を閉じ込めた空間。

次の幡桃の大発光まで、だいたいあと二十二年。

今のままでは、おそらく数の暴力に負ける。

百年前と同じ敗北。

そんなことは許さないし、許されない。

与えられた二十二年の猶予で、様々な準備が必要になる。

世界は進み続けている。

魔法も、科学技術も。
春香は学べと言った。
魔法使い達の本拠地、ＭＭ連合が存在する魔法世界に至れとも。
ならば、自分は立ち止まらない。
歩み続けて、力を得る。
そして春香を取り戻す。
そのための、これが最初の第一歩。

「…さあ、待っていなさいよ、魔法使い。全ては、ここからです」

「んふふー。そーですねー」

さよさん……

第九話・これから（後書き）

次回からは魔法世界に入ります。

まともな戦闘やギャグパートも増やせるよう頑張ります。

しかしテストも近い…

でも更新はしますよ。

第十話・魔法世界に至るまで（前書き）

ざっくりまとめてみました。会話が少なく説明が多いです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第十話・魔法世界に至るまで

「やっと、つきましたね…」

「ふわー、日本と全然違いますねー」

目の前に広がるのは地球…旧世界と呼ばれるそれとは、全く異なる様式の構造物の群れ。
水の上に円筒形の高層建築が立ち並び、空には鯨やアンモナイトを模したような人工物が空を飛ぶ。

今二人がいる、この場所は、この場所こそはーーー

「ここが…魔法世界…」

Ｓｉｄｅ，セイ

ああ、ついに、ついにここ魔法世界に、さよさんと二人、到着しました。ええ、関西呪術協会にお邪魔してから、ここ魔法世界にたどり着くまで早三ヶ月。
いろいろありましたよ。ほんとに、いろいろ…

せっかくなので、すこし簡単に振り返ってみましょうかね？

まず、関西呪術協会にいた間のことを話しましょうか。
あそこでは、結局、長と千蔵老人の強い要望があって、二ヶ月も時間をつぶしてしまいました。なんでも、玄凪の独自に派生した、符術と召喚術について是非とも学びたいとのこと。

そもそも玄凪の式神召喚術は、もとは符を使わず、呼び出す物も鬼や烏族ではありませんでした。

自らで作り上げた式神を、刀に代表される刃物や、杖や鏡などを術具として使い呼び出す、陰陽師の符を使う式神召喚術と大規模な儀式召喚術の中間のような術で、どちらかと言えば儀式召喚術に近い物になります。

もちろんこれはあらかじめ用意した強い式神を呼び出せますが、符を使うものと比べるてワンテンポ遅れてしまいます。
この問題を打破するために、かなり昔の長が西と交流を持ち、符の技術を取り入れて問題を解決。そこから長い時間をかけて派生した

のが今の玄凪の符を使う召喚術です。

今となっては私しか使い手のいない術式ですから、今を逃すと、他にチャンスはありませんからね。そこで私は本場の京都の陰陽師の技術を教えてもらうのを条件に、これを受けました。

さよさんのついでに数人の術者に教えるだけのつもりが、幹部の一人である天ヶ崎さんまで来るとは思いませんでした。

しかし、すぐに問題がおきました。さよさんは飲み込みがよかったのか、すぐに中位のものを呼べるようになったのですが、京都の術者は天ヶ崎さんですらもっとも初歩のものを呼べない、と言うか、術が発動しなかったのです。

これには困りました。慌てて天ヶ崎さんを筆頭とする京都の術者達に大規模な聞き込みを実施。すると、驚くべき発見がありました。

式神の符に限らず、術式起動のための力に、玄凪と京都では異なるものを使用していたのです。

玄凪は自身の中の霊力…西洋魔法使い風に言うと魔力となりますか、とにかくそれを使います。

これに対して、陰陽師たちは符に「気」を流すことで術を発動していたのです。

これは、玄凪の符の原理が元々の物から離れすぎた為だと思われます。

実際、気の代わりに霊力を流してもらうと、すぐに発動しました。

天ヶ崎さんは、幼い娘に自慢できると大喜びでしたが、それで良いんでしょうか？　まぁ、本人が納得してるんだから、良いですよね。

ただ、今度は逆に、私が京都式の符を使えません。私は気を扱えませんから。

おかげで、神鳴流の師範代につきっきりで気の修行をさせられました。これだけで一ヶ月消費しましたね。
神鳴流の師範代は、時間がないと言って、睡眠を週に一度しかとらせてくれませんでした。
そのせいで、一度目を覚ますとさよさんが…いえ、なんでもありません。忘れてください。

とにかく、一ヶ月がすぎ、師範代から、お前に気の扱いに関しては全て叩き込んだと言われた時は何の冗談かと思いましたが、実際にやってみろと言われて虚空瞬動ができた時は、いよいよ自分は知らないうちに残り半分も人間やめたんじゃないかと思ってほんとに怖かったですね。

自分が自分じゃないのではないか。疑心暗鬼と言いますか、自己暗示と言いますか、もしさよさんがいなければ私は壊れていたのではないか。今はそう思います。さよさんには感謝していますよ。

それから一ヶ月は非常に有意義でした。
玄凪の技を伝え、陰陽師の世界の概念を学び、天ヶ崎さんの娘さんと一緒に遊び、天ヶ崎さんと死闘を繰り広げました。
いや、強かったですよ、天ヶ崎さん。善鬼と護鬼を召喚し、自分は徹底した後衛というスタンダードな陰陽師のスタイルですが、符を十枚単位で連動させて使ってくるので強いの何の。

京都大文字焼きの連射は反則です。奥さんが来なければ本山は半壊していたかもしれません。

さよさんも強くなりましたね。彼女には式神召喚の才能も割とあったのですが、符術と、天ヶ崎さん達には教えなかった結界関連を中心に教えました。その結果、とんでもないことになりました。

今の彼女に、五行は通用しません。

さよさんは、五行の符を結界と共に滞空させ、相手の属性にあわせてその符の配列を変更、結界そのものの仕組みを一瞬でつくりかえる手法で、五行に関してはほぼノーダメージで防ぎます。さよさんの物を動かす力、ポルターガイストがあればこそできる技です。

正直私でも同じ手法で完璧にまねるのは無理です。

そんなことなどがありましたが、滞在すること二ヶ月、魔法世界に向かうために関西呪術協会を離れました。

餞別に結構な額の金銭と符やらなにやら予備も含めて二人分渡されたのは嬉しかったですね。

代わりに、木乃芽さんから魔法世界にいるという青山詠春という人にもしあったら、と伝言を託されましたが。

そして向かったのが、魔法世界へのゲートポートの一つがある、トルコ・イスタンブールの魔法協会です。

なんでも、トルコはいろいろ文化圏が混ざっているので、魔法使い以外にも土着組織が複数存在しているうえ、魔法使いの中でも幾つ

か派閥があるとのこと。

その中に日本とかかわりの深い一派がいるとのことで、彼らの手引きで魔法世界への転移に紛れ込ませてもらいました。

ただ、ここにくるまでに、今までで一番の問題。いえ、事件が発生しました。

パスポートがないので飛行機は使えません。

そのため陸路でトルコを目指したのですが、途中、中東にいたとき、さよさんに初めての実戦を経験させてしまいました。

今までまともに戦ったことなどあるはずもない、さよさんに、です。

関西にいたときとは逆で、私がさよさんにつきっきりになりました。

正直、私のときよりもかなり危なかったです。

私もさよさんも今となっては純粋な人ではありません。心に異状をきたせば、それはそのまま大きな影響を様々な面であたえます。

結局、この事件は紆余曲折を経たあげく、私とさよさんの間に信頼を超えた深い「絆」と「つながり」を持つに至って、やっと解決しました。

絆とつながりを分けた理由は察してください。

そして、幾多の困難を乗り越え、ついにここ魔法世界に私たちは立

っているのです。

「さて、これからどうしましょうかね」

「どうって…セイさん考えてなかったんですか？」

「いや、考えてましたけどね…」

私が考えていたプランの内の一つでは、しばらくは情報収集をかねてフリーの傭兵をやるつもりでした。しかし…さよさんも「覚悟」を決めたとは言え、戦いの矢面に立たせるのは気が引けます。

「…私のせいですか？」

「いえ、ちがいますよ。ただ、目的地までどう行ったものかと思いまして」

わたしの当初のもう一つのプラン。それは、ＭＭ連合とヘラス帝国のどちらにもくみせず、中立を保つ学術都市として有名なアリアドネーに行くこと。

ここなら少なくともいきなり拒絶されたりする心配はありませんし、図書館を使って独学で魔法を研究しようという計画です。

ここは中立ですから、少し前に始まったという連合と帝国の戦争に巻き込まれる心配もありませんからね。

部屋も、私とさよさんはもう男と女だから部屋は別などと言える関係ではないので一部屋借りれば事足りますし、仕事もなんとかなるでしょう。いざとなれば私だけ傭兵として働けば良いんです。

「さて、まずはここの通貨に両替してから、誰かにアリアドネーまでの道を訊くことにしましょうか」

「あっ！　待ってくださいよー、セイさん！」

ふふ、アリアドネーではどんな生活が待っているんでしょう？

少し楽しみになってきました。

第十話・魔法世界に至るまで（後書き）

明日は時間がないので、キャラ設定の更新のみとさせていただきます。

また、主人公は三ヶ月の間に、一般常識と横文字を習得したようです。

第十一話・セイの仕事（前書き）

今回はいつもよりは少し長いです。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第十一話・セイの仕事

Side，セイ

「“笑う死書”（スマイリー・ライブラリアン）」

口に出してみますが、なぜ私にこんな通称がついたのかわかりません。

私は日々まじめに課された業務を粛々とこなしているだけだというのに。

私とさよさんは、予定通り魔法学術都市アリアドネーに居を構えました。いやー、アリアドネーって、いろいろと安かったんですよ。物価とか地価とか。

なので、少し背伸びして小さな家を借りました。ゆくゆくは持ち主と交渉して買い上げるつもりです。

ですが、これで結構お金を使ったので、すぐに仕事を探すはめになりました。さいわい、図書館での仕事を見つけることができました。この図書館は学生でなくとも本を借りることができるらしく、ほっとしましたね。

あと、ここに来て魔法使いに対する印象がかなり変わりました。悪

いのはＭＭ連合と立派な魔法使いです。独善主義者とでも言うんですかね、彼らは。普通の魔法使いには結構良識的な方が多いのですが…。

あ、それと今は偽名でクロト、という名字を使っています。これはさよさんも同じものを使っています。え、なぜ同じ名字にしたか？

それを訊くのは野暮ってもんでしょう。

とにかく、ここでの仕事は、貸し出し期限の過ぎた本の督促、そして強制返却です。アリアドネーは魔法学術都市の名を冠するだけあって、その図書館には数多くの多種多様な魔法に関する本が収められています。しかし、中には悪いやつもいるもので、貴重書をかりたまま返さないやつが結構いるのです。

取り返しに行きたくても司書じゃとても手が足りない。戦乙女騎士団も暇じゃない。なら私のようなアルバイトの仕事です。延滞者のところに赴いて、返せば良し、返さぬのならば実力でもって回収するという仕事です。この仕事は歩合制の出来高払いですが、私はかなり稼げていますね。…これには理由があるんです。

実は、この仕事をしつつ図書館で本を借りて勉強してたんですよ。魔法基礎論とか、魔法障壁基礎概念とか、複合的多重魔法障壁論とか、鬼神兵とは？とか、いろいろ借りましたね。

私はそれを踏まえた上で、玄凪の結界術を下地にして魔法障壁のような常時展開型の新しい結界術の開発に取り組んでみました。

そしたらとんとん拍子に研究が進んでいき、あっという間にできたんですよ。破格の速度で。私はこれを天球儀式結界術（仮）と呼ぶことにしました。（仮）は重要なので忘れないでください。

この結界術、数十数百の結界が互いに補完しあうため隙がなく、範囲もいじれて、おまけに物理防御と結界の目視不可というおまけ付き。ステルスはつけていません。あれは影響がありすぎてもとの結界を維持できなくなりますからね。

それで実験もかねて、この新しい結界術を使って次の日の仕事に行ったのですが、予想以上です。ガラの悪い魔法使いが使ってきた上位古代語魔法をまるで無効化できました。周りが火の海でも中はそよ風ひとつおきません。

そこからはしめたものです。相手の攻撃はほぼ全く通りませんから、ワンサイドゲームですね。いつしか私の風貌が広まって、私が行くとほとんどの人はすぐに返してくれるようになりました。

…そういえば、この頃ですか。“笑う死書”と呼ばれるようになったのは。

で、今日も私は働きに行きます。家ではさよさんが待ってますからね、早く帰れるように頑張って1日働きましょう。

「ウェスペルタティア王国？　冗談ですよね？　ざっと９０００キロはありますよ？」

今日はなぜかいつものカウンターじゃなくて奥の部屋に通されたと思ったら、司書長からとんでもない用件をぶつけられました。

「すいません、冗談じゃないんですよクロトさん。ウェスペルタティア王国までいって本を取り返してきて欲しいんです」

「あそこ、そろそろ帝国の侵攻が迫ってるって聞いたんですけど」

「ですから、その前にお願いしたいんです」

「……」

「……」

困りましたね、できれば戦争とは関わりたくありません。ですが、疲れきった表情の司書長の頼みをむげにするのも忍びないですね。まだ若いのにあんなに白髪を増やしてまで働き続けているわけですし、ここに来てからいろいろお世話にもなりましたし。

「……わかりました」

「受けてくれるんですか！？」

「場所と相手によります。わざわざこの時期に取り返しにいくなんて何貸したんです？」

「あー…それは…」

おや、司書長が疲れているとはいえ言いよどむとは珍しい。

「…怒りません？」

「…内容によります」

「……場所は王都オスティア、相手はウェスペルタティア王国宮廷魔術師、本は第二種指定禁術大全集の三巻の写本です」

……

……

……

「すいません、帰らせてもらいます」

「ああっ！　待ってください！　怒らないでくださいって言ったじゃないですか！」

「内容によると言ったでしょう！　何が悲しくて最も激戦が予想されてる地域に出向いてアルバイトの私が何の恨みもない国一つにケンカを売らねばならんのです！　それに第二種指定禁術大全集っていったら、写本も含めて全部禁帯出のはずでしょう！？　なんで他国に貸し出したんです！」

「私や館長だってそりゃ反対しましたよ！？　でも上からの命令なんだからしょうがないじゃないですか！」

「だったらかの有名な戦乙女騎士団に行ってもらいなさい！」

「中立都市の騎士団を他国にそうホイホイ行かせられますか！」
「だったら何で貸し出したんです！」
「上の命令だって言ってるでしょう！　文句があるなら直接上に言ってください！」
「上等じゃないですか！　ついてきなさい！！」
「……え？　嘘ですよね？　ちょっとクロトさんまってください怒られますってーー！？」

「うーわ、最悪です。もう始まってるじゃないですか…」
結局、あの後やってきた館長と、司書長の二人に土下座されて断りきれず、今は私は王都オスティア付近の森の中で様子をうかがっています。
だってもう帝国の侵攻作戦が始まってるんですもん。おいそれとは近づけません。
やはりゼフィーリア、グラニクス、桃源、アル・ジャミーラを経由して、帝国勢力圏を避けたのは失敗でした。時間をかけすぎましたね。
「…おや、帝国は鬼神兵まで持ち出してきましたか。ふむ、目算で

全長三十メートルほどで、戦闘艦で現地まで運ぶ必要があると」
なんだか思っていたよりも、鬼神兵って使い勝手が悪そうですね。少なくとも個人で使うものではないです。がしゃどくろなんかを呼んだ方が便利そうですね。私なら一度に複数呼べますし。でも口からビームは…。
おっと、動きがありましたね。帝国の戦闘艦が精霊砲を発射しました。が、とある塔の手前でかき消えました。
「あー、帝国の戦闘艦の精霊砲が…って、消えた！？」
何です今の！？　今の消え方は反射や吸収ではありません。少なくとも私の知る結界や障壁の中ではある種の浄化や無効化に近いものがありましたが、あの規模では…
「…なるほど、これは本を回収にこさせるのも納得です」
アリアドネーから借り受けた禁術書に書かれた何らかの魔法技術を応用したのかもしれませんね。これを放っておくのはまずいです。
「さて、まあ素直に返してくれることを祈りますか」
私防御は良いですけど攻撃系は割と苦手なんですよ。
なんて言うか、呪文の詠唱が長いです。舌かみそうになるので…って！？
「はいっ！？　鬼神兵が吹っ飛んだ！？」
私は我が目を疑いました。先ほどの塔の最上部から、どでかい雷の

攻撃魔法が放たれて鬼神兵の内の一体を吹っ飛ばしました。
そのすぐ後、塔から二三の人影が飛び出して戦場を縦横無尽に暴れ回っているではないですか。
本を回収しに行くのなら今なんですが、どうしてでしょう？　もものすごく嫌な予感がします。今まで一番です。しかし行かないわけにも行きませんし…
「ええい、迷うな！　とっとと回収して、さっさと帰れば良いんです！　…よし、行きましょう」

「ふぅ…」
あの時飛び出した彼らによって戦線が立て直されたので、意外と楽に塔の最上部につけました。
こういうのは大概上から行った方が速いんですよ。え？　どうやっていきなり塔の最上部にたどりついたかですか？
アリアドネーで飛行や浮遊に関する魔法も学んでおいたんですよ。独学ですけどね。
「さて、と。第二種指定禁術大全集はどこにあるんですかね…と？」
「……だれ？」
「…しまった」

…うつろな目をした少女と、目があってしまいました。

「だれ？　　ナギたちの、なかま？」

「…ナギ？」

もしや、先ほどの雷を放った奴のことでしょうか？

「いいえ、私は仕事でここにきました。本を探しているのですよ」

「ほん？」

「ええ、本です。見ませんでしたか？　　これくらいの大きさで、色は…」

本の特徴を説明すると、少女は少ししてから「したでみた」とだけ呟きました。

…何でしょうね、あの子。全く顔を動かしませんでした。薬でも使われましたかね。

ですが、今の私にはどうすることもできません。治癒くらいならどうとでもなりますが、心に影響を与えるようなものになると専門外です。冷たいようですが、今は私の仕事を優先します。

……。本を見つけたらついでに連れて帰ってみましょうか。

いやー、ありましたありました。すぐ下の階の小部屋にぽんと置いてありましたよ。彼女の言ったとおりでした。中身が気になるところですが、受領書を残して今はとっとと帰ります。嫌な予感が消えた訳ではありませんからね。
ああ、あのお嬢さんのことを忘れていましたね。どうしましょう。やはり連れ帰って司書長あたりに治癒術の専門家を紹介してもらいましょうか。

「……ん？」

「おお？」

階段を上がりきった先、塔の最上部まで戻ると、少女の周りに人がいます。うさんくさい笑みをたたえたローブを着た男と、眼鏡をかけた黒髪の剣士、それに杖を持った赤髪の少年です。
彼らはいったい…

「おい、お前！　帝国の仲間か！」

「はい？」

赤髪の彼は突然いったい何を？

「いえ、違…」

「うるせえ！　来れ虚空の雷、薙ぎ払え！」

「ちょ、いきなり上位古代語魔法！？」

「雷の斧！」

「うわっ！？」

あの少年、いくら広いからって室内で上位古代語魔法ぶっ放すなんて非常識です！　私じゃなければ死んでますよ！

ああもう、砂埃で周りが見えやしない。

「やったぜ！！　さすがは俺だ！！」

「おいナギ！　お前今のが敵じゃなかったらどうするつもりだ！」

「んだよ詠春。あいつの服見ただろ？　敵だって。たぶん」

「いや、しかしだな…」

はて、今ナギとかいう少年は詠春と言いましたか？　確かに彼が持っていたのは野太刀に見えましたが…では彼が青山詠春？

「…少し訪ねますが」

「んなっ！？」

ナギ少年が驚いています。そんなに自信があったんですかね、今の。確かに高威力でしたが、あの魔法なら使えるものはごまんといます。彼はまだ世界の広さを知りませんね。ま、いいです。あんな子供より、木乃芽さんからの伝言の方が大事です。

「あなたが、青山詠春で相違ありませんか？」

Ｓｉｄｅ，ナギ

なんなんだ、目の前のこいつは。階段からひょっこり出てきたかと思ったら、俺の雷の斧をくらってびくともしてねえ。

「あなたが、青山詠春で相違ありませんか？」

「！！　なぜ私の名前を…」

ん？　詠春の知り合いか？

「木乃芽さんから伝言がありまして」

「木乃芽さんから！？　あなたは一体…？」

ふーん、俺の雷の斧も防いでたみたいだし、こいつ結構強いのかもな…よし、気に入った！

「おいお前、俺たちの仲間になれよ！！」

こいつを、「紅き翼」の仲間にするぜ！

第十一話・セイの仕事（後書き）

“笑う死書”
すいません。思いつきでだしました。大戦中にはもう二つ三つ出しますよ。
あと、天球儀式結界術（仮）…これは実はかなり重要だったりします。
（仮）ですけど。

作者はストックがない状態から始めました。
ですから割と話にあわせて設定を自由にできるんです。

第十二話・勧誘（前書き）

短い上に遅くなりました。すいません。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第十二話・勧誘

Ｓｉｄｅ，セイ

嫌な予感が的中しました！！　なんですかこの少年、きらっきらした目で人を見てきます。
…嫌いな目ですね。純粋で、何もかもが自分の思い通りにいく、自分こそが正しいと思っているやつの目です。
この手の輩に大概ろくなやつはいません。歪んでないだけましですが、面倒ごとの固まりです。
立派な魔法使いを目指してるくちですかね？　だったら最悪です。

そもそも出会いがしらにいきなり人に上位古代語魔法ぶっ放してきたくせに仲間になれって本気でしょうか？　謝罪の言葉もなく、いえ、あったとしても仲間にはなりませんが、それにしたって礼儀ってもんがあるでしょうに。

…やめです。相手にするだけ時間の無駄、用件をすませてとっとと帰りましょう。
ええ、そして司書長を経由してアリアドネー上層部に今回の報酬ふっかけてやりましょう。

それでさよさんと二人でちょっと良いお店にいって美味しいもの食べるんです。

「…木乃芽さんから伝言がありまして、『無事を願っています、必ず帰ってきてください、ずっとあなたを待っています』だそうです」

「木乃芽さん…！」

「無視された！？」

詠春とやらはなんだか知りませんけどうち震えてますね、そんなに嬉しかったんでしょうか？　しかしこの人と木乃芽さんですか…人生わからないものですね。

少年ですか？　当然無視です。

「…それと伝言はもう一つ」

「まだあるのか？　鶴子さんからか？」

「いいえ、これも木乃芽さんです。…なんでも、『信じとるけど、もしそっちで女作りよったら、近衛、橘、青山、天ヶ崎他幹部連中みなでぶちのめしたるさかい、覚悟しいや？　二度と日の目を見れんようにしたる』だそうです。あの目は本気の目でしたよ？」

おお、今度はさっきと違ってものすごく震えています。ガタガタっていう言葉をこれ以上ないくらい身体で表現しています！　顔とか真っ青ですし。

「さて…それじゃあ用も済みましたし、帰りますか」

「俺を…」

「ん？」

「無視してんじゃあ…」

はて、声が…

「ねえっ！！」

バシィッ！！

「いいいいいってええぇぇぇぇっ！？　なんだこの障壁、やけに固ぇ！！」

「ほう、不可視の障壁ですか？　なかなか珍しい術をお使いになるようで」

…ああ、どんどんめんどくさい方向に話が進んでいきます。

少年が素手で私に殴りかかってきて天球儀式結界術（仮）で自爆してわめいているかと思えば、ずっと笑みを浮かべたまま黙っていたローブの男が出てきましたよ。

すいませんね、お嬢さん。やはりあなたを連れて行くのは無理そうです。

「…なんですかね。私は一仕事おえて帰るところなんですが」

「おやおや、せっかちですね。名前くらい名乗っていってはどうで

す。私はアルビレオ・イマ。そっちがナギ・スプリングフィールド。詠春は…知っているようでしたね。で、あなたは？」

「……クロトです。急ぎますので、失礼しますよ」

いけません。ナギ少年とはまた違う嫌なタイプです。気がつけばズルズル引き込まれて抜け出せない、なんてことになりかねません。

「おいっ、待てよお前！！　俺達の仲間になれって言ってるだろ！？」

あーーーもーーー、このガキはっ！！

「……なるわけないでしょう、ガキ」

「んなっ！？　何でだよ！」

「仲間になる必要性がありません。今の仕事もありますし。そもそも、あなた何のために戦ってるんです？」

「決まってるだろ！　強い奴と戦うためだ！　んで、俺が最強だって証明する！」

「本物の馬鹿か…、いえ、もう話す価値もありません。では」

そういって瞬動で即座に塔から離脱。さらに虚空瞬動をくりかえして付近一帯から離れます。

ああ、嫌なことを聞きました。胸くそ悪いです。

最強？　そんな事のために、思想もなく、覚悟もなく、戦場に立つというのですか。

護りたいものも、譲れない思いも持たないくせに。

あれは戦争を、そして人の生き様というものをなめています。

…必要もなく戦場にたったのです。いつか、その業は最悪な形で返ってくるでしょうよ。

Ｓｉｄｅ，ナギ

「あああぁぁぁぁっ！　なんなんだよあいつ、せっかく誘ってやったっていうのに！　つぎあったらぶっ飛ばしてやる！！」

しかも俺のことを馬鹿とか言いやがって！

「…ナギ、今のあなたでは、おそらく彼には苦戦します。いえ、もしかしたら負けるかも」

はあっ！？　俺が負ける！？

「おい、どういうことだよ、アル。お前あいつのこと知ってんのか！？」

「おそらく、彼は少し前からアリアドネーに現れたという“笑う死書”でしょうね」

「わ、笑う死書！？」

なんか強そうじゃねえか！　でもししょってなんだ？

「アル、笑う死書とはいったい？」

お、さっきからずっと震えてた詠春が復活しやがった。

「なんでも、アリアドネーのとある図書館で本の回収業務にあたっているそうです。

相手がどんなに強かろうが、規則に従い本を回収していくそうで、噂では燃える天空の直撃を受けても、煤一つ付けず平然と炎の中から出てきたとか」

「燃える天空！？」

燃える天空っていやあ、かなりつええ魔法じゃねえか！　それをくらって無傷ってことは、あいつやっぱり…

「…よーし、決めた」

「ナギ？」

「次あったら、とりあえずぶっ飛ばす！」
そうすりゃ、たぶん仲間になるだろ！！

Ｓｉｄｅ，セイ

「ただいまー。さよさん、帰ってきましたよー」
いやー、暗くなってしまいました。あんまりいらいらしたんで、黒輪火車最大出力で帝国勢力圏を突っ切ってきましたが、結構かかりました。直線距離９０００キロはだてじゃなかったです。
そういえば黒輪火車の最大出力初めて使いましたね。流星のように見えていたかもしれません。
とにかく家に帰りつきました。帰れる場所と、待ってくれている人がいるのは良いものです。それと、家はオーナーの許可を得て改装済み。中はさよさんの意見をとりいれた和風の造り。安らげます。
「あ、セイさんお帰りなさい。お客さんが来てますよ」
はて、お客？ここにくるような知り合いはほぼいないんですが…
「誰です？　司書長ですか？」
「違います、司書長さんじゃないですねー。とりあえず今にお通し

しました。ちょうどさっきお見えになられたところですよ。すぐに追い返すのも失礼なので、とりあえずお茶だけ出しておきましたけど」

ふうむ、誰でしょうか…。あ、ちなみに司書長はさよさんと顔をあわせたことはあります。妻として紹介しました。…まだ正式に籍はいれた訳ではありませんよ？

とにかく、いちど会ってみるしかないでしょう。

居間に入ると、そこには黒衣に身を包んだ長髪の男が一人正座で座っていました。横には彼の物であろうマントがたたまれて置いてあります。

彼は私を見ると湯呑みを机に置いて言いました。

「あなたが“笑う死書”、クロト・セイ殿ですか？」

「ええ、私が黒戸セイです。今日はいったい何のご用で？」

…強いですね。今日は厄日でしょうか？

「単刀直入に申しあげます。私たちの仲間になりませんか？」

…確定しました。今日は厄日ですね。

第十二話・勧誘（後書き）

最後に出てきたキャラは、オリキャラっぽいですが原作キャラです。
多分ギャグ担当になるかも。

あ、デュナミスではないですよ？

第十三話・セイの微笑み（前書き）

短いです。長い文は難しいですね。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第十三話・セイの微笑み

「単刀直入に申し上げます。私たちの仲間になりませんか？」

Ｓｉｄｅ，セイ

もう何なんでしょうね、今日は。仕事で出向いた先で赤いガキに不愉快な思いをしてやっと帰ってきと思ったら、また勧誘です。まあこっちは古代語上位魔法ぶっ放してませんし、まだまともな話ができそうです。

「宗教の勧誘なら間に合ってますよ」

私も腰を下ろします。たったまますする話でもなさそうですからね。

「それに、『私達の仲間になりませんか？』などと言われてもなれるわけがないでしょう」

おっと、雰囲気がかわりましたね。静かな闘気、いえ殺気ですか。どうやら裏の人間で間違いなさそうです。その中でも、おそらくは相当な強者。

「それはどういう…」

「仲間になるとは具体的にどういうことです。どこかの組織への参加？　もしくはどこかの会社に雇用したいと？　単刀直入すぎて不明瞭なんですよ。もっと細かい話を先にしてくれないと考えようもありません。私にだって生活がありますからね。ただ働きなんてごめんですよ」

そう聞いて、彼から殺気が消えました。

「…そうですか、では、主ともう少し話を詰めてから参ります」

彼が横に置いてある自分のマントに手を伸ばします。

「待ちなさい。人の家を訪ねてきたんです。名前くらい名乗って行きなさい」

「…ではウェイタと」

「偽名ですか、まあいいでしょう」

それからウェイタと名乗った彼は、近日中にまた来るといって、私達の家を後にしました。

やれやれ…どうしてこうやっかいごとばかり増えていきますかね。やっぱり私何かに呪われているんじゃないでしょうか。

今度関西呪術協会に行ったらお祓いしてくれるよう頼んでみましょう。

「なめられてるんですかね、私？　ねぇ、司書長、なんとか言ったらどうなんです？」

今私の目の前で、司書長が日本式で相手に最大限の誠意を見せるときに使う土下座を実行しています。司書長は日本にいったことはないはずなんですが、なんで知ってるんでしょうね？

いえ、今はそんなことはどうだっていいんです。問題は、司書長が土下座する前に話したことです。

「せっかく回収してきた第二種指定禁術大全集、報酬が出ないとは、どういうことです？」

ウェイタと名乗った彼が帰った次の日、朝一番で司書長にブツを渡し、報酬が届くのが昼になるからまた来てくれというので昼になってから来てみれば、報酬が払えないという。

「それが～、その～…」

いらっ。

「司書長」

「はい？」

ぺしっ。

「痛っ…え、紙って…符！？」

司書長の額に符を一枚貼り付けました。発動はしていませんよ？

次に、同じ符を分厚い木でできたドアに貼り付けて、今度は発動します。ドアは見る間に崩れて土くれになってしまいました。

おや、どうしたのでしょう？　司書長がへたり込んで震えています。まだ符を貼っただけだというのに、どうしてそんなに私の顔を見て怯えているのでしょう？

「……ねぇ、司書長」

「は、はひっ！」

「全て話せ」

「はいぃっ！」

……

……

……

「フ、フフ、フフフフフフ……」

「ク、クロトさん？」

なるほどなるほど。実はあの第二種指定禁術大全集、貸し出すのを命令したのがウェスペルタティア王国の高官から賄賂をもらったアリアドネーの上層部の一部で、総長にばれる前にもみ消しに動いた、と。

「フハッ、ハハハ、ハハハハ！」

で、既にそいつらの部下によって強制的に本は司書長から回収され、書類も何も改竄済み、貸し出しなどされていないことになったと。

「ハハハハ！　ハハハ！　アハハハハハッ！！」

当然、貸し出しされていない本に対する報酬などなく、抗議にいった司書長も部下によって門前払い、と。

つまり、私の累計二万キロ以上のアリアドネーからウェスペルタティアまでの往復も、オスティアでの不愉快なガキとの一連の出来事も、すべてなかったことになる、と。

なるほど、なるほど。

「ク、クロトさん？　　…ひぃっ！？」

司書長が悲鳴をあげました、なぜでしょう？　　人の“とびっきりのイイ笑顔”を見て悲鳴をあげるなんて失礼な。

「ときに司書長、その上層部の一部、今どこにいるかご存知で？」

「え、ええたぶん。この時間なら、市街地の中央部のって、まさか！？」

「ふふふふふ…、ついてきなさい」

「い、いやあぁぁぁぁぁっ！？」

さぁて…どうしてくれましょうか……！

Ｓｉｄｅ，ウェイタ

はじめまして。“完全なる世界”の大幹部の一人、ウェイタです。

今回私は最近アリアドネーで有名な“笑う死書”クロト・セイの勧誘にきました。本来この手の仕事はフェイトの仕事なのですが、外せない仕事があるとかで、その代役として主より役目を賜りました。

今はアリアドネーのとあるカフェでささやかなティータイムの最中です。主にどこまでクロト・セイに情報開示するのか確認の手紙を持たせたので、返事が到着するまではささやかな休暇です。

「ふぅ、平和です」

しかしこれは偽りの平和にすぎない。主が目指す真の平和、完全なる世界の為に働くことはいとわない。

ただし今は休暇。ゆっくりしましょう。

そう思って紅茶のカップに手を付けた瞬間でした。辺りが、ふっと暗くなったのです。

何かと思って上を見ると、そこには巨大な骸骨が宙に浮いてーーー

かしゃん。

手から落ちたカップが粉々に砕け散りました。

大幹部である私が、事態について行けません。

鬼神兵クラスの巨大な骸骨が、突如として現れ、しかも浮いているのです。

そして、その頭部に立つ人影を見たとき、戦慄が走りました。

「クロト・セイ…！」

あなたはいったい、何者です！

第十三話・セイの微笑み（後書き）

前話から出てきた、ウェイタというこのキャラ、原作のナギの時代の最終決戦に出ていた水使いです。
ただ名前などの情報が全くわからないので、名前は適当につけました。

アーウェルンクスシリーズではないと思われますし、原作キャラではありますがオリキャラみたいな扱いになる予定です。

第十四話・誰よりもイイ笑顔で（前書き）

主人公が壊れました。多分最初で最後です。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全ておまちしております。

あとがきにアンケートがあります。

第十四話・誰よりもイイ笑顔で

Ｓｉｄｅ，ｏｔｈｅｒ

その日、アリアドネー戦乙女騎士団の臨時作戦本部では蜂の巣をつついたような大騒ぎだった。
つい十五分ほど前までは普段と変わらぬただの会議室であったのが、仰々しい臨時作戦本部などと呼ばれるようになったのは、とある凶報が始まりだった。

ーアリアドネー市街地に突如として、帝国の鬼神兵とも違う巨大な召喚魔が出現ー

これを受けて、戦乙女騎士団は事態の収拾のために即座に動ける一個中隊を派遣。なおかつ周囲の巡回などの通常任務に出ていた者達も現場に向かわせ、それで事態は収拾できると思われたのだが…

『だめです！　こちらの攻撃は通りません！』

『なんなのよあのガイコツ！　ただ突っ立ってるだけ！？』

『ふざけてる…私たちをコケにしているのか！』

聞こえてくる通信によると、現場では未だに芳しい成果はあがっていないらしい。

「もう、まったくなにをやってるの！」

臨時指揮官が本部で声を荒げるが、どうしようもない。現在進行形で、現場では試行錯誤しているだろうが、こちらではせいぜい相手の分析程度しか出来ないのだ。
それ以外にできたことといえば、周囲の部隊に急いでアリアドネーに帰還するように通信を送った程度だ。

「くそ…分析結果、資料照合はまだ終わらないかっ！？」

「で、でました！　ありましたっ！」

「読め！」

「照合結果、対象はおそらく極東アジアの伝承に残る“ＧＡＳＹＡＤＯＫＵＲＯ”だと思われます！　人の恨みの結晶化や、鬼というニホン独自の魔物の中の巨大な物の死骸に魂が宿って生まれるなと諸説あり、具体的な弱点はなし。属性はおそらく光が有効！
対処法は力によるごり押しです！」

「…おい、攻撃が通らんのはどういう理屈だ！　それさえわかれば対処も可能だ！」

「不明です！」

「なんだとぉ！？」

指揮官が、資料を読み上げていた部下につめよる。

「貴様、不明とはどういうことだ！」

「し、資料には攻撃を無効化するというような記述はまったくないんですよう！　ＧＡＳＹＡＤＯＫＵＲＯは障壁の類を発生させるという記述もありませんし、突然変異か、あるいは召喚者が何らかの手法をもって攻撃を無効化しているとしか…」

「ええい、手詰まりじゃないか！」

『本部、こちら第一小隊！』

「どうした！」

『小隊不明の召喚魔の頭部に人影を複数確認！』

「っ！　目視で確認できるか？」

『ええと…数は二。…ただ、どちらも見覚えがあるような？』

「…もう少し接近できるか？」

『はい！　……あぁっ！』

通信機から聞こえる騎士の驚愕の声に、にわかに本部に緊張が走る。

「おい、どうした！」

『でかぶつの頭部にいるのは、一人は第二図書館の司書長さんです！』

「はぁ？」

第二図書館の司書長といえば、割と美人なのだが世話焼きの苦労人で、年の割に多い若白髪が有名な人物だったはず。魔法学校からも近く、騎士団員にも世話になった者が結構いる。

なぜ彼女がそんなところに？

本部の中で彼女を知る全員が同時にそう思った。

「おい、もう一人は？」

『もう一人は……うぁー、たぶん笑う死書です』

「……なんだと？」

司令部におりる沈黙。それだけここアリアドネーの者にとって、少し前から急に現れた笑う死書の名前は恐ろしいものだ。彼は、本の回収であれば、政治的な立場上騎士団が動けないような相手でさえも笑みを浮かべつつ襲撃するという。ちなみに、騎士団にも返却を忘れて彼の世話になったやつが数人いる。

その中でも、一人酔っ払って返却を拒否した者がいるのだが、彼女は真っ青を通り越して白い顔をしていた。

「たしかか！？」

『おそらく！』

『本部、こちら第二小隊！』

第一小隊の通信を遮るような切羽詰まった第二小隊からの通信だった。

『敵、アリアドネー中央講堂に向かって浮遊したまま移動を開始しました！』

Ｓｉｄｅ，セイ

「きゃあああ！？　やめましょうってクロトさん！　中央講堂に乗り込むなんて正気じゃないです！　こんな物まで呼びだしてどうするんです！？　というか何で私まで！？」

「だまりなさい。私は怒っているのですよ。具体的に言うと歴代三位に入るくらい怒ってます。なめくさった馬鹿どもに、私の精神的苦痛を万倍にして返してやるのです。ええ、その上層部の一部に責任を押しつければ、多少暴れても死人さえ出なければ問題になどなりません」

フフフ。フハハハハハ。アハハハハハハハハ。今日の私は本気です。多少の面倒事なら許容する私でも、今回のことは我慢なりません。奴らは私の堪忍袋の緒をズッタズタにしてくれました。同じ目にあわせてやります。

「だ、だめです…。クロトさん本気だよぅ」

当然ではないですか。ここまでやられたからには万倍返し。やられたら我慢するか徹底的にぶちのめすかの二択、それが玄凪のやり方です。

「それに、あなたを連れていかないと私の言葉が正しいと伝わらないじゃないですか」

「そんな目的が！？　私幹部に発言できるほどえらくないですっ！」

「しょうがないですね。じゃあこうしましょう。今回のことが上手くいけば、たぶん上の席がほぼ確実にいくつか空きます。いえ、空けさせます。で、そうなると繰り上げで昇進する者が何人かでるでしょう。その中に紛れ込めるよう、ついでに交渉してあげます」

おお、司書長の目が揺れています。司書長ってアリアドネーだと中堅どころですからね。昇進は魅力的でしょう。

「昇進…」

悩んでます悩んでます。こんなチャンスまずないでしょうし。

「そこまでです！」

「む？」

はて、空から声が。いくら魔法世界でも、空から女の子が降ってくるなんてそうそうあるはずないんですが…

「戦乙女騎士団です！　すぐに召喚魔を消し、投降しなさい！」

あー、戦乙女騎士団ですか、帝国との国境線に結構な数が向かったと聞いたことがありましたが、それでもまだ結構な数がいますね。

「警告に対する返答なし！　戦乙女騎士団は実力をもってこれを排除します！　中隊攻撃態勢に移行、パターンB！」

って速い！？　警告から七秒弱で強制排除ってせめて十秒…！

「アリアドネー九六式、対召喚魔・中隊徹甲魔法！！」

…なるほど、これが武装中立を貫く要、戦乙女騎士団の複数人での合同魔法ですか。

数をそろえれば最上位魔法並みの出力、出せるんじゃないですかね。でもまぁ…

「今の私を止めるにはいささか役者不足です！！」

このがしゃどくろ、ただのがしゃどくろではありません。結界で捕縛したがしゃどくろに麻帆良防衛用に抗呪力処理や防御結界の陣などを施してから式神にした、改造版がしゃどくろです。今度口の内

側に陣を刻んで、鬼神兵のように口からビームを撃てるようにしてみましょうか…
ま、とにかく何を言いたいかというと、ちょっとやそっとでは、まるで効かないのですよ！

「な、弾かれた、だと！？」

「…さぁ進みなさい、がしゃどくろ！　周りを飛ぶ連中を気にする必要などありません。前進です！」

「まっ、まて！」

ははは、待っていなさいよ。この私をただで使おうとしたことの罪の重さ、思い知らせてやろうじゃないですか！

Ｓｉｄｅ，アリアドネー総長

いつもと同じように、なんの問題もなく始まり、滞りなく終わる。この日の総会も、そういう風に終わるのだと、そう思っていられたのは、動甲冑を完全装備した騎士が飛び込んで来るまででした。
アリアドネーの重役や幹部達が集まる大会議室。その扉が、何の前触れもなく開かれた。入ってきたのは完全装備の騎士が一人。

「きさま！　今何が行われているのか…」

「緊急事態です！　つべこべ言わずに急いで避難を！」

幹部の一人がたしなめようとしますが、それよりも速く騎士が叫びました。いったいなにが？　突然避難しろなどと…

「いったい何事ですか！」

「それが…っ！！」

騎士の目が見開かれ、顔には驚愕の表情。私の後ろには窓しかないというのに、外にワイバーンでもいるというのか。

「別に何かいるわけでもないでしょうに…っ！？」

そういって振り返った私の目に映ったのは、こちらに手を伸ばした巨大な骸骨でした。

Ｓｉｄｅ，セイ

「ハーハハハハハハ！　いけ！　やりなさいがしゃどくろ！
あの外壁を崩して大穴をあけてやりなさい！」

「ク、クロトさんが壊れた…！」

ハッハッハ、いや、なかなか爽快じゃないですか。ここまでは何の問題もないです。騎士団の連携魔法も中隊級までなら効かないこともわかりましたし。

おっと、がしゃどくろが幹部達が集まっているという大会議室の外壁を崩し終えましたね。おお、中の人達は呆然としています。さて、行くとしましょうか。

「さて…アリアドネーの皆々様、初めまして。私はクロト・セイと申します。巷では笑う死書などとも呼ばれていますかね？」

「そ、その笑う死書が、このようなまねをしてまで、いったい何のようです」

目の前にいる女性が、私にそうきりかえします。彼女がアリアドネー総長のようですね。さすがは一つの国家の長、立ち直りが速い。

「簡単なことです。私の労働に対する正当な報酬。それを要求しにきました」

「報酬、ですって？　いったい何の話ですか？」

「それについては彼女が」

後ろに隠れていた司書長をずいと前にだす。

「あなた、ウェンズリーさん！？」

自分の部下であるはずの司書長の登場に驚く総長。私はそれを尻目に、大会議室にいる幹部達をぐるりと見回します。

さぁて、いったいこの中の何人がなめたマネしたやつらなんでしょうねぇ…総長には必ず引き渡しを要求する事にしましょう。

フフフ、ハハハハハハハアハハッ！

……

……

……

その後のあらましを簡単に説明しましょう。話を聞いた総長は、即座に件の幹部数名とその部下を一時拘束。当然私も拘束されましたが、迅速な調査をお願いしました。

結果が出たのは三日後。幹部は粘ったそうですが、彼らの部下が自白したそうです。しかし、話はそれで終わりませんでした。逮捕された幹部達が、他の幹部の悪事を暴露して道連れをはかったものですから大変です。

最終的にはアリアドネーの中堅以上の幹部の四分の一が騎士団によって捕まるという大事になりました。

その後で、私の要求も通りました。報酬は全部で三つ。一つ目は、

金銭とダイオラマ魔法球。具体的には、金銭はだいたい中古の巡洋艦級が買えるくらい。ダイオラマ魔法級はだだっぴろい空間で、時間の対比は一対一。まあ自分でいじれということですかね。

二つ目は今回のことでの無罪放免。壁を壊した事くらいは罪に問われるかと思いましたが、そうはなりませんでした。騎士団がそうとう難色をしめしたそうですが、そこは一つ目とあわせて口止めの意味があるのでしょう。

ああ、そうそう、司書長も出世しましたよ。第一図書館の館長も捕まったそうで、その穴埋めに第二の館長が回されて、かわりに司書長が第二の館長になるそうです。まあ喜んでましたよ。

で、三つ目が直接的に私に関わった幹部どもの引き渡しです。これだけは譲れませんでしたからね。

これで、この事件に関することは全てです。

え？　引き渡された幹部達がどうなったか？

さて、どうなったんでしょうねー？

フフフフ…ハハハハハハハ！

「セイさん！　いつまでもうるさいです！」

さよさんに怒られました…。

第十四話・誰よりもイイ笑顔で（後書き）

前書きに書いたように、ちょっとしたアンケートです。

アンケートは２つ

そろそろ一度外伝を書いてみる予定なのですが、？外伝も読んでみたいかな？

？外伝よりも本編の方が読みたい！

答えていただける場合は、どちらかを選んで感想の方にお願いします。

アンケートの２つ目は誰についての外伝が良いかです。これについては誰でも良いですが、キャラによっては書くのがかなり遅れます。

ただ、作者の限界もあるので、アンケート結果が必ずしも反映できるとは限りません。

そこのところはご容赦ください。

ちなみに、アンケートが少なかったり誰でも良いという場合は、セイと天ヶ崎（父）の死闘？を書く予定です。

第十五話・雇用契約（前書き）

原作に出てくる新田先生が、他の赤松作品にも登場していることを知って驚きました。

いや、本編には何の関係もありませんけどね。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第十五話・雇用契約

Ｓｉｄｅ，セイ

困りましたね。今私の前には三人の男達がなぜか正座して座っているのですが、メンツが問題です。ひとりは、先日私の勧誘にきたウェイタと名乗る長髪の男性。二人目は、同じく長髪ですが、上半身裸で格闘家のような肉体をしたいかつい男。そして、三人目が一番の問題です。いえ、二人目の格好も十分問題なんですが、それとはまたベクトルの方向が違います。

「やあ、初めまして、“笑う死書”クロト・セイ。僕はフェイト。フェイト・アーウェルンクス」

フェイトと名乗る珍しい詰め襟を着たこの青年は、他の二人と感じが違います。亜人ではなく、人のはずなんですが、何か油断できないというか、薄ら寒いものを感じます。さよさんにはお茶を出してもらった後は別室で待機してもらうつもりでしたが、今は後ろに控えてもらっています。

そうすればいざとなればさよさんと共に脱出する事も可能ですし。

「より詳しい情報がないと、検討のしようがないという話だったね。今回はこちらの資料と予定している雇用条件についてまとめてある。今ここで読んでくれるかい？　即決しろとは言わないけれど、外

にもれると困る情報もあるからね。この交渉が終わり次第破棄する予定なんだ」

怖いですね。殺気もなく、威圧感もなく、ただ言葉だけで相手にプレッシャーを与えるとは。どうやらウェイタよりも数段上の人物のようです。

「…拝見しましょう」

机の上に置かれた資料を手に取り、目を通していきます。

組織の名前は…完全なる世界。どうもうさんくさい組織ですね。しかし十万人規模とは凄まじい。雇用期間については交渉次第みたいですが、どうやら給料は良いようです。破格といっても良いでしょうし、契約する場合は、いきなり幹部クラスとして扱うとかかれているのですが…

「…二つ、いえ、三つ気になる点があります」

「なにかな？」

「まずひとつ。雇用期間についてはまあ今はいいでしょう。ただし、この条件は破格すぎる。
見ず知らず、何の関わりもなかった人間にだす条件じゃない。あなた方は私に何を求めているのです？」

こういうと、フェイトはあごに手をあてて考える素振りをしました。

…ああ、わかりましたよ。違和感の正体。彼は“人らしく”ないのです。瞳の奥に見える光も、顔に張り付いた薄い笑みも、どちらか

と言えば人形のよう…

「そうだね、とりあえずは戦力確保かな。本当はここまでの待遇を用意するつもりはなかったんだけど、ウェイタが君を余りにも評価したんでね」

「…まあ良いでしょう。次に二つ目、あなたたち、表の組織ではありませんね？」

「そうだよ。強いて言うなら悪の秘密組織さ」

おや。

「良いんですか？　あっさり認めて」

「悪の秘密組織だというだけで断りそうな人のところにわざわざ幹部三人で来たりしないよ。それとも断るのかい？」

「…いえ」

「それで、最後の一つは一体なんだい？　別にこれ以上…」

「あなたたちは、いったい何がしたい」

手の甲で、資料をぽすんと叩く。

「……」

「この資料にはそれだけが、目的だけがすっぽりと抜け落ちています。十万人規模の組織力、あなたたち幹部の実力、他にも切り札は

あるでしょうし、一つの組織が持つにしては、小国の軍事力すら上まわる過剰なまでの力です。世界征服すらこの戦争の情勢によっては可能となりえるだけの力を、あなたたちは何に向けるのです？」

フェイトから表情が消えました。無機質で、どこまでも澄んだ瞳が私に向けられています。

「…そうだね。それについては、仲間になってから詳しく話すよ。流石に今の状態じゃ話せないことだから。でも、そうだね、僕たちがやろうとしているのは――――」

―世界を救うことだよ―

あの後、結論は一時保留。三日後にまた来ると言い、フェイト達は去っていきました。

悪の組織に参加することには私もさよさんもあまり抵抗はありません。月ごとの契約も可能なようですし、フリーの傭兵として契約するのが無難ですかね。

…ただ、やはり気になるのは最後の一言。“世界を救う”。あれが

何を意味するのかがわかりません。流石に世界を更地にするなんていう計画ではないでしょうし…

とにかく、まだ細かい条件は決めねばなりませんが、とりあえず私とさよさんはともに完全なる世界とやらに傭兵として参加することに決めました。

まだ二十年以上時間はありますが、力をつけるにしても、やはり効率的にやった方がいいですからね。これだけ巨大な組織なら、つても作れるでしょうし、ある程度の人員を引き抜くことも可能かもしれません。

さて、どうなりますかね…

…そういえば、フェイトの隣に座っていた、もう一人の名前はなんというんでしょう？

第十五話・雇用契約（後書き）

アンケートにお答えいただいた皆々様に、あとがきではありますが改めて感謝を。

まだ今週いっぱいくらいはうけつけます。

第十六話・グレート＝ブリッジ奪還妨害作戦・前編（前書き）

申し訳ありません。時間をかけたのに、結局半分に割りました。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第十六話・グレート＝ブリッジ奪還妨害作戦・前編

Ｓｉｄｅ，セイ

どうも、セイです。この挨拶も久々です。
あれから、私たちはフェイトに傭兵として完全なる世界に参加する旨を伝えました。それから彼らの拠点、墓守り人の宮殿に案内され、そこでさらに細かく雇用条件を決めました。
いやぁ、しかし凄いですねぇ、宮殿全体を包む超大規模積層魔法障壁。一目見れただけでも十分に勉強になりました。いや、あれはすごい。
この規模になると理論を組むだけでも一苦労ですし、実際に起動させるのは普通エネルギー面から考えて無理ですからね。ですが、私の天球儀式結界術（仮）が本当の意味で完成すれば、これを超えられるはずです。

…ただ、宮殿の中で一度だけ漆黒のローブに身を包んだ人影を見かけたのですが、正直ぞっとしました。あれは絶対に人ではありません。
勝てないとは言いませんが、神を殺すくらいの覚悟と準備が必要になります。私は少なくともそう見ました。
後日聞きましたが、その人物が完全なる世界の首領で、造物主というそうです。あらためてとんでもない組織だと思いましたね。

それから、フェイトにこの組織の本当の目的を教えてもらいました。…更地にするなんてもんじゃなかったです。ただ、そうなると私も困るので、決行の少し前には組織を抜け、旧世界に帰らせてもらう。と言うと、意外な程にあっさり了解をもらえました。

で、数日墓守り人の宮殿に滞在しました。任務が伝えられるまでの待機期間ですね。その間に書庫の一部を開いてもらったのですが、ここもすごかったですよ。

普通に禁書の類が置いてありますからね、ここ。禁書が普通に並べられている書庫の禁書エリアって何があるんでしょう？　普通は敬遠されがちな闇魔法や邪法と呼ばれる類の物がごろごろしてましたし、私はネクロノミコン辺りがでてきても、もはや驚きませんよ。

まぁとにかく数日の後、仮面をかぶった黒ローブ、デュナミスと名乗る幹部が私に命令を伝えに来たのですが、そこで本気の本気で殺し合いをすることになりました。

だって私に、傭兵として連合側に参加しろって言うんですよ？

気がついたら部屋の壁ごと吹き飛ばしてましたね。契約の中にはある程度の拒否権もありましたから仕事上の問題はありませんけど、とにかく殺し合いになりました。

私とデュナミスは戦闘タイプが似ているというのもあってなかなか決着はつきませんでしたよ。変身して大幹部戦闘形態になるとは思

いませんでしたけどね。

最後の辺りは特にひどかったです。

デュナミスが召喚した七百メートル級超巨大召喚魔に、私が召喚した、かつて玄凪一族が関八州を治めた時代の、抗魔呪紋処理を施された武装がしゃどくろ十八体が群がるという地獄絵図です。

触手を生やした特大悪魔と巨大な武装骸骨群の戦いなんて、どこの大怪獣映画のクライマックスですか。一部始終を見ていたさよさん曰わく『世界の終わりを見ているようだった』とのこと。

結果、最終的にダブルノックアウト。墓守り人の宮殿の外縁部がかなりの範囲で崩壊。積層魔法障壁にも影響がでるという大惨事。

ですが、その後でデュナミスとは仲良くなりました。腰をすえて話してみると意外と気の合う良い奴だったんですよ、これが。

旧世界と魔法世界の召喚術の系統とその差違についてや、魔界をはじめとする異世界についての考察など楽しい会話ができました。そこで知ったのですが、デュナミスって人じゃなかったんですね。

あと、『たぶん貴様も変身できるぞ？』と言われたときには顔がひきつりましたね。考えてみれば、私は半分人じゃないから有り得ない話じゃないんですよ。二の句が継げないでいると、奴は黙って肩を叩いてから去っていきました。いいやつです。

それから命令は連合の部分が帝国に変わりました。これなら何の文句もありません。

その後しばらくは各地を転戦しましたね。アルギュレー方面が多かったですけど、シルチスやウェスペルタティア方面も行きました。

服装はデュナミスがくれた彼と色違いのローブで、私が濃緑、さよさんが薄緑。それに狐の仮面をつけて戦場を暴れ回りました。

私も昔は無理でしたが、今なら格が低ければ鬼神兵クラスの大きさの物を頑張れば三桁近くまで召喚できるので、連合からしたら悪夢でしょう。

さよさんはさよさんで私ほどのことはできませんが、遠隔召喚術みたいなものを考案して、実戦で使用していましたね。巨大な土人形などに必死に対処していると、背後から突如として鬼などに襲撃を受けるんですから、もうやってられないでしょうね。

そうそう、なぜか戦場で天ヶ崎さんに会いました。他にも結構な数の京都の術者がいるので話を聞いてみると、戦況が良くない連合が脅しをかけてきてやむを得ず、という状況だそうです。また一つ連合を嫌う理由が増えました。

もちろん彼らとは戦いませんでしたよ。互いの近況を報告しあってからにこやかに別れました。

そんな中で、いつからかいくつか異名がつきました。私が“緋面”“召喚大師”“緑の祭主”“また出たよあのゴーレム軍団！”で、さよさんが“白面”“白狐”などです。二人まとめて“妖狐の番”などと呼ばれたりもします。しかし私に対する最後の物は異名ではないと思うのですが、これが一番連合の兵士達の間では有名らしいです。納得いきません。

で、それからは唯一対処できない、というか防げるけど攻撃できない戦闘艦をどうしようかとさよさんと二人考え始めたころ、フェイトに呼び出しをくらいました。

なんでも、私たちが頑張っている間に帝国がグレート＝ブリッジを占領したとのこと。このままでは帝国が勝ちすぎるので連合にグレ

ート＝ブリッジを奪還させるが、帝国と連合両方の兵力を削る良い機会なので、防衛側に参加して適度に暴れてこい。あと、紅き翼も来るからそっちもできたら何とかしろ、というのが命令の内容である。

ついでに大幹部に昇進というのも伝えられました。ただし、デュナミスとの戦闘で墓守り人の宮殿外縁部を破壊したので給料はそのままという切ない現実もありましたが。

そしてついにやってきましたグレート＝ブリッジ。全長三百キロ…長いです。ほんと長いです。そしてでかい。帝国も占領などせず、とっとと爆破するなりなんなりして、橋と要塞としての機能を奪ってから撤退した方が楽だと思うんですけどね。まぁそこは完全なる世界の内通者が帝国の軍や上層部に紛れこんでいるからでもあるんですが…

とにかく、眼下に海が広がるこの場所で、もう少しすればこの戦争でも最大規模の戦闘が始まります。しかも、フェイトからの情報によると、紅き翼のメンツが五人に増えているとのこと。嫌ですね。ただでさえ面倒くさい上に不愉快なガキに率いられた集団の数が増えている？　どうせろくな人間じゃないでしょう。あのガキの仲間になるような変人なんですから。

とりあえず怖いのはその新しいメンツです。なんでも、ショタというのと筋肉馬鹿という二人らしいです。ショタとはなんでしょう？

私もさよさんもわからないのでフェイトに訊いても、彼の部下が書いたらしく、フェイトも知らないそうです。

ショタ…謎の存在です。

「…さよさん、今度の戦闘は不確定要素が強いので、離れないでください」

「はいっ！」

むぎゅっ。

背中から抱きつかれました。

「…放してください」

「いやです」

「放し…」

「いやです」

「……ふぅ」

最近は、さよさんのスキンシップが前よりも激しくなってます。戦争で人を傷つけてますからね、多少無理をしているのかもしれません。甘えたいのなら、これくらいは甘えさせてあげましょう。

しばし、沈黙。

ここから見えるのは、一面の海と空。これが、明日には全て、戦闘艦と攻撃魔法、そして死で埋め尽くされるというのに、今は雲もな

く、海も凪いでいます。

…けじめをつけるには、良い機会ですかね。

「…さよさん」

「…なんです？」

「もうそろそろ完全なる世界の計画も佳境だそうです。これが終わったら旧世界に帰ろうと思っているんですが…」

「また京都ですか？」

「ええ。いまのところ他につてがありませんからね。その後は世界の旧跡を巡るつもりですが、その前に…、えぇと、その…」

「セイさん？」

「その…むこうに帰ったら、正式に籍を入れませんか？」

「ふぇ？」

「いや、その！　さよさんは戸籍上ではもう死亡扱いですし、私に至ってはそもそも戸籍に載っていないので、たぶん千蔵さんあたりに頼むことになると思いますけど…あれ？　さよさん？」

あれ？　どういうことでしょう？　さよさんが私から離れてうつむいています。…ま、まさか、嫌われた！？

「さ、さよさん？　あ、あの…」

「……しい」

「へ？　今なんて…」

「うれしいです！！　セイさん！！」

「うぐぁっ」

「うれしい！　うれしい！！　うれしい！！！　夢みたいです！」

再び抱きつかれました。今度は正面から。

良かった、嫌だったわけじゃなくて。

腕の中ではしゃぐさよさんが、どうしようもなく愛おしい。

愛おしいん、ですが…！

「さよさん！　落ちます！　落ちますって！　あ…」

「え？　…きゃああぁぁぁぁぁっ！？」

結局、私とさよさんは海まで二人そろって落ちました。

虚空瞬動か浮遊術を使えば良かったと気づいたのは海面に浮かんでからです。
それから二人して笑っていました。よく死ななかったものだと我ながら驚いた物です。

…もう、本当に人間ではないのだと、あらためて自覚しましたけどね…

メセンブリーナ連合によるグレート＝ブリッジ奪還作戦前日、穏やかな昼頃の話でした。

第十六話・グレート＝ブリッジ奪還妨害作戦・前編（後書き）

たまに他の作者様のところで、イラストを本編にあげている方がいらっしゃるのですが、どうやってるんでしょう？

あと、次回、おそらく戦闘です。

第十七話・グレート＝ブリッジ奪還妨害作戦・中編（前書き）

デキがあまりよくないです。すいません。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、すべてお待ちしております。

第十七話・グレート＝ブリッジ奪還妨害作戦・中編

剣で、槍で、拳で、斧で、魔法で、鬼神兵の一撃で、あるいは戦闘艦の精霊砲で、一度に数十数百単位の命の火が簡単に消えていく。
血が飛び散り、人だった物が四散し、世界を朱に染めていく。
そして、ここはそんな異常が通常になる戦場という一つの異界。
グレート＝ブリッジは、今まさに戦場だった。

Ｓｉｄｅ，セイ

今私はさよさんと共に黒輪火車に乗ってグレート＝ブリッジを東進しています。私たちは中央付近にいたのですが、紅き翼の連中は右翼から来たんですよ。おかげで今は全速力で移動中です。衝撃波で連合の兵が吹き飛んでいますが気にしません。
時々巨大な土人形を形成する符を空からばらまいているので、それに何とかしてもらいましょう。
どれくらい移動した頃だったでしょうか、遠くの方で大魔法特有の派手な光が見えたと思ったら、普通は絶対ありえない物が見えました。
「なんなんですか、あれは…」

どこからともなく巨人が使うような馬鹿げたサイズの両手剣が現れて、帝国の戦闘艦に向かって飛んでいきました。
当然、直撃した戦闘艦は火を噴いて落ちていき、やがて爆発しましたよ。

黒輪火車を黙って一度止めます。隣を見ると、同じようにさよさんが私の方を見ています。

「…セイさん、やっぱり帰りましょうよ」

「…そうしましょうか」

いくら命令でも、命あっての物種です。
なんの能力かわかりませんが、あんな物くらったらいくらなんでも私の結界でも防ぎきれるかわかりません。
デュナミスの助言と墓守り人の宮殿の書物の力で私の結界もバージョンアップしていますが、巡洋艦を一撃で沈めるような質量兵器での実地試験なんていくら私でも嫌です。

「それじゃ、帰る前に中央付近でもう少し暴れておきましょう」

「……めぇ―…」

「？　さよさん、何か言いました？」

「え？　何の事ですか？」

「…て……ぞぉー…」

「あ！　セイさんあそこです！！　赤い髪をした男の子が突っ込んできます！」

「何ですって！？」

慌ててそちらを見ると、視界は既に真っ白でした。上位古代語魔法の一つ、千の雷。

赤い髪をしていて、雷を得意として、魔法を放ちながら突っ込んでくる少年。

非常に残念なことに、心あたりが一人しかいません。

「見つけたぜ！　お前が緋面だな！　俺と勝負しやがれ！」

…やはりこのガキはバカなようです。オスティアであった時と何も変わっていません。というか相手にしたくありません。ほんと帰らせて下さいよ。

「ナギ、一人で先走るな！」

「へっ、おせえぜ詠春！」

「ナギ、詠春はあなたが心配なんですよ」

「おい、アル！」

「おや、違うので？」

「別に心配などせずとも、死ぬようなたまではない」

「師匠、そりゃねーぜ！」

ああもう、どんどん増えていくっていうか、囲まれてるじゃないですか！

…仕方ありませんね。“彼ら”を呼びますか。

「さよさん、今から仲間を増やしますから、さよさんは人数分の転移の準備を。あれは馬鹿ですが強いです」

「それって、どういう…！？」

私は黙ったまま数枚の符を取り出して、霊力を流し、“あの日”も最後まで付き従い共に戦った者達を呼び出します。

そして黒輪火車の上に現れる、数人の人影。そのいずれもが、妖怪と呼ばれながらも、高い知能と実力を持つが故に人に近い容姿を持つ、特級の式神達。

「…我らを呼ぶのは誰ぞ？」

黒の翼をその背に持つ男が言う。

「なんじゃ、久々に出番かと思うてみれば、術者どのは西洋術師ではないか」

七本の狐の尾を持つ女性が言う。

「つまらん。力任せの召喚か？　大将でないならやる気がせん」

額に二本の角を持つ大男が言う。

「ま、もっともその大将も今となっては土の下か。結局、春香の姉御とはくっつかんかったわな。カカカカぷもろっ！？」

最後の、人のことを馬鹿にした大男に関しては殴る。こいつらは、どうやら私が私だと気づいていないようです。殴った直後から私にばしばし殺気を叩きつけてきてますからね。

「きさま、召喚主とはいえ、我らのことをなんだと思っている？」

「目の前に本人がいるのに気づかない薄情な戦友どもです」

そういって、紅き翼には見えないようにしつつ、狐の面を外します。

「なにか言いたいことはありますか？」

おお、驚いてる驚いてる。そういえばあの戦いは百年前ですから、戦を生き延びたとしても、普通死んでますよね。

「た、大将か？　ほんもんか？　気配が人とちゃうで」

「いろいろあって、人じゃないんですよ」

「仮に本物だったとして、なぜ生きている。それに、その格好はい

ったい？」

「事情は後で説明しますから、今は指示に従ってください。きますよ」

仮面を再び装着し、ガキの方を向きます。小さなノートのようなものを見ながら詠唱にはいっています。またあの大魔法ですか、芸のない。

「白露と六火はここでさよさんを護衛。志津真は私と彼らの足止め。強いですから倒そうなどと思わないように」

「千の雷！」

ずどーん。これくらいじゃあ私の結界は揺らぎません。

「こんなのをくらいますからね。さて、いくとしましょうか」

なるべく速く撤収しましょう。ええそうしましょう。それが一番良い選択です。なんだか嫌な予感もしますし。

「おい大将、何したいかはわかったが、この嬢ちゃん誰や？」

大男の六火が訊いてきます。なんて答えましょうか。そうですね…

「さよさんです。私のお嫁さん予定です」

「はぁ！？　春香の姉御は！？」

「今彼女は動けません。ですが、彼女に対する気持ちも消えたわけ

ではありません。どっちも私のお嫁さんにします」

これは、私の偽らざる気持ち。どっちも大切なんだからしょうがないどす。

「…ほんまにセイの大将か？　あんなにうじうじしとったのに」

失礼な。ただ踏ん切りがつかなかっただけです。

「ああうざってえな！　詠春！　あの障壁なんとかできねえか！？」

「まかせろ！　斬魔剣…弐の太刀！」

「しまっ！？」

忘れてました！　ガキだけじゃなくて、他のも十二分に強い！

しかも、神鳴流の、斬魔剣の弐の太刀は…！

結界師は何の意味をなさずに、斬撃が私たちに迫ってくる。式神達は難なく避けるが、ちょうど逆の方を向いていたさよさんは気づけない。

「さよさん！！」

「え？　きゃあ！？」

とっさに押し倒して――――

ザシュッ！

「セイ、さん？　　い、いやあああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「大将！」

「セイの大将！？」

見れば、腰のあたりをざっくり斬られていた。そこからの、おびただしい量の出血。

腰から下の感覚がなく、視界が急激に暗くなってゆく。

「セイさん！　　セイさん！！　　そんな…治療用の符を貼ってるのに…！！」

もしかすると、自分はここで死ぬのかもしれない。

でも――――

「さよさんが、無事で、良かった…」

それを最後に、意識が途切れた。

第十七話・グレート＝ブリッジ奪還妨害作戦・中編（後書き）

まだ大戦編が終わらせることができません。
でも頑張ります。

それと、ＰＶやら何やらが結構な数になりました。ありがとうございます。

それを記念して、ここで、ちょっとした質問コーナーを設けます。
感想に質問を書いていただければ、ネタバレにならない範囲でなるべく速く回答します。

第十八話・グレート＝ブリッジ奪還妨害作戦・後編（前書き）

前回、十七話で多数のご意見ご感想をいただきました。真摯に受け止め精進していきたいと思います。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第十八話・グレート＝ブリッジ奪還妨害作戦・後編

暗い…ここは…？

見渡せども、辺りは闇。音もなく、光もなく、自分すらもわからない。

私は…死んだのでしょうか？

思い出せるのは、最後にみたさよの顔。
腰の傷は決して浅いものではなかった。
下手をすれば真っ二つになっていてもおかしくはなかったと思う。

まぁ、あれでは、助からないでしょうね…

ここが地獄だというなら、随分と味気ない。話に訊く、血の池も針の山もない。ただただ闇が広がるだけ。

私も、終わりですかね…

心残りは多々ある。というべきか、心残りしかない。春香から二度目の生を受けながら、何一つ為すことはできなかった。

春香を麻帆良から連れ出すことは叶わなかった。

腐りきった連合に復讐することもできなかった。

さよさんと旧世界に帰ることもできなかった。

……

何もかもが、中途半端。

諦めたくはない。しかし、もはやどうすることもできない。自分は、死んだのだから。所詮これが、たった一人の人間の限界。

……

意識が、記憶が、少しずつ薄くなっていく。

日の本が国の形を成すより古い、神話の時代を知る玄凪最後の生き残り。一族の歴史も、知識も、誇りも、それらがすべて何もかも。

走馬灯のように浮かんでは消えていくのは、自分が駆け抜けた短い人生のなかで、出逢い分かれていった者達。厳格であった父、優しかった母、気のよい里の仲間達。そして、自分が思いを伝えた二人

の女性。

……

次に見えるのは、燃える里。倒れ伏す仲間達。自分たちが守り続けた平穏という日常を、蹂躙する魔法使い達。

そして、戦場。魔法世界の趨勢をきめる戦場で、最後に見たさよさんは、泣いていたのではなかったか。

忘れて、良いのか？　簡単に諦めて、死を受け入れて良いのか？
自分はまだ春香を救えていない。さよを戦場に置き去りにしている。
何もなさず、何も救えず、最後に残された自分が、諦めてしまって良いのか？

…良い、わけがない！！

そこで、意識が急激に覚醒する。頭にかかっていた靄が晴れていくように、薄くなっていた自分が色を取り戻す。

見れば、先ほどまでは何もなかった闇の中で、今ははっきりと自分の身体を認識できる。

服はない。重力も感じない。だが、手はしっかり動く。足も確かについている。血こそ出ていないが、背中の傷も存在しているようだ。

現状を確認した上で、どうすればよいか、すっかり覚醒した頭で考える。この場所は春香に再構成される前に彼女と話した場所と似ている。もしもこの状況で自分が死んでいないとするならば、ここは自分の深層心理といったところか。

どうすればいいのか。自分が再び現実世界へ浮かび上がる術はないのか。自分の知りうる全ての術式魔法結界知識。どんな外法であったとしても、役にたちそうな物がないか、全てのことを思い出す。

そこでふと思い出したのは、いつかのデュナミスとのささいな会話。

『たぶん貴様も変身できるぞ？』

彼はそう言った。己のこの身は、既に半分人でない。

まだ自分が死んでいないのなら、この深層心理から働きかけることで、肉体を人に近いものから、より外れた物に変質できるのではないか？

もしそれが成功したなら、精神、あるいは魂といえる今の自分は再び現実世界に覚醒できるのではないか？

荒唐無稽。できるかどうか、それが正しいのかすらわからない。馬鹿げた、実に狂気じみた試み。成功しても、残り半分の“人間”は失ってしまうかもしれないのに。

それでも、たとえ完全に人でなくなるのだとしても、億に一つの可能性があるのなら、もはや躊躇わない。

イメージ。

思い浮かべるのは、あくまで自分。しかし自分でない新しい自分。自分を核に、より強く、自分がもつ知識と経験を軸とした、自身のイメージに合わせた新しい自分に作り替えていく。

もう一度、戦場に。彼女の隣に戻るために――

Ｓｉｄｅ，ナギ

「おーい、ナギ。こっちはどんなもんよ？」

さっきまで暴れ回っていたジャックが、俺の隣に降りてきた。

「…つまんねぇ」

「あん？」

不思議そうな顔をするジャックに、あごで方向を指し示す。

「あ～、なるほど…」

その先にあるのは、車輪のついた箱の上で泣く女。声からするに少女だろうと検討をつける。

その腕の中には、緑のローブを真っ赤に染めた男が一人。少女は男を抱きしめ、ただ慟哭を繰り返すのみ。

戦おうとは、しない。

「んじゃ、あっちは何なんだよ」

ジャックが指した方には、自分の仲間達と戦う三匹の怪物。人のカタチをしながらも、人とは思えない。それほどまでに、彼らの戦う様は苛烈だった。
ゼクトの最強防御が、狐の尾を生やした女が放つ青い炎に次々と侵食されていく。アルは角を持つ大男に攻め立てられている。巨大な金棒で襲いかかる男は、重力魔法を物ともせずに突き進む。
詠春に至っては、満足に戦えてすらいない。

詠春の相手をしている翼を持つ男は、異常なまでに速かった。詠春が野太刀を振り切る前に、手に持つ短槍で動きを阻害し、技を使わせないようにしているのだ。そのせいで詠春は思うように神鳴流を使えず、一番苦戦している。

「あのローブが詠春にやられる前に出した奴ら」

「ご主人様がやられちゃそりゃ怒るわ」

これだけの戦いをみれば、いつもなら真っ先に突っ込んでいくのだが、今日はそれをしない。

「結構強いかと思ったんだけどなー。詠春に一撃でやられちまってよ…」

「ほー、油断してたんじゃねーの？」

「あー、つまんねー」

「うだうだ悩む前にひと暴れしてこいよ。馬鹿なんだから考えるだけ無駄だぜ？」

「あぁ！？　なんだとてめぇ！」
「おー、やるかぁ！？　ナギィ！」
「上等だジャック！　吠え面かくなよコラァ！」

Ｓｉｄｅ，さよ

「セイさん…ぐす…セイ、さん…」

もうずっと彼の名を呼び続けているが、反応はない。反応が、あるはずがない。
背中の傷からはもう最初ほど血は流れていない。治癒の符が効いたのではなく、もうそれほど血が残っていないのだ。
腕の中の彼の顔は青白く、どんどん身体も冷たくなってゆく。それが嫌で、どんなに強く抱きしめても、彼の身体は熱を失ってゆく。

「セイ…さん…」

もう何枚目かもわからない治癒の符を背中の傷に貼り付ける。効果がないのはわかっているが、何もできないのが嫌で、せめて奇跡が起きるのを祈って符を使い続けているのだ。

符を貼ったばかりの傷を手でそっとなでる。すると、今までにない変化に気づいた。
傷が、ほのかに熱を持ち、淡く光っている。そこから熱が身体全体に伝わり、彼の体が少しずつだが温かくなってゆく。

「セイ、さん？　セイさん！　セイさん！！」

もしかすると、奇跡がおこったのかもしれない。そう思い、必死に彼の名を呼び続ける。
と、うっすらとだが、彼の目が開いた。

「う…さよ、さん？」

「セイ、さん…よかった…！」

「はな、れて…て、ください」

「セイさん？　何を言って…きゃっ！？」

セイが、自分を突き飛ばした。突然の事態に混乱しながらも、セイを見る。立ち上がり、胸と頭を抑えるセイは、とても大丈夫そうには見えない。しかも、傷から発せられる光が、淡いものからより強く、直視できないほどに荒々しく輝いているではないか。

「セイさん！？　そんな、いったいなにがどうなって…。この光は…」

「大丈夫、で…ぐ、つっ……あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

「セ、セイさん！？」

瞬間、夜の帳につつまれていたグレート＝ブリッジを、太陽のようにまばゆい光が照らし出した。

Ｓｉｄｅ，セイ

「はぁ、はぁ…ふぅ…」

大きく息を吸い、呼吸を整える。眼下に広がるのは、今も戦闘が続くグレート＝ブリッジ。どれくらい時間がたったのかわからないが、なんとか戻ってこれたようだ。

「セイさん！！」

「さよさん…」

真正面から、泣きはらして赤い目をしたさよさんに抱きつかれます。しかし、すぐに彼女は私から身体を話しました。

「セイさん、ですよね？　　…なんなんです、これ…？」

さよさんの言葉は、もっともです。今の私は、どう言い繕っても、人には見えないでしょう。

四肢こそ変化していませんが、背中の傷からは、今は多数の剣状突起と尾が生えていますからね。

あと側頭部から真上に向かって角も。

そんな化け物が血塗られて真っ赤になったボロボロのローブを着てるんですから、さよさんも驚くでしょうよ。

「はは…生きるために、人間、やめたかもしれません」

「人間をやめたって、どういう…」

「まあその辺りはまた後で。…とにかく一息いれたいですね。この姿なら転移も軽いでしょうが、その前に一撃でかいのをくれてやりましょう」

数ある剣状突起の中でも、左右から前に向かって伸びているもっとも長い二本に霊力を集中させます。それにともない、天球儀式結界（仮）を最低限の物を残して解除。

普段はそちらに回している力も剣状突起に集中させる。過剰な力に、剣状突起が青白く発光し、細かく振動し始める。

標的は、私を斬った詠春…でも良いのですが、木乃芽さんが悲しみますし、至近距離では志津真がいるのでやめます。

ここはやはりあのガキにしておきましょうか。

すぐ側にいる男がおそらく情報の筋肉馬鹿何でしょうね。直接の恨みはありませんが、まとめてくらってもらいましょう。

「……くらいなさい」

二本の剣状突起。それぞれの先に超高密度の霊力の球が発生し、次の瞬間にはそれらが二条の光となって夜空を駆けた。

「っ！　気合い防…！」

残念ながら筋肉馬鹿が何かしたようで、青い光は彼らをかすめて、海を引き裂いた末に十数キロ先で大爆発しました。

まずいですね。この技、あまり使わないようにしましょう。夜なのに北の空が昼のようです。どこの黙示録ですか。

「ナギッ！」

「これはいかん！」

あのガキの仲間はあわてて彼らがいた辺りに飛んでいきます。あの分だと死んではいないでしょうが、即座に戦列復帰というのは無理なはず。

この隙に、白露達を自分達のもとに召喚します。

「大将！　無事で良かった！」

「何が無事なものですか薄情者め。さよさんを守れと言ったでしょうが」

「いや、そうゆうてもいきなり神鳴流が飛んできたらとっさに避けてまうわ」

「それよかそのけったいな格好はどないしたんや。もうほとんど人間ちゃうやないか」

「だからその辺りのことは後でまとめて説明しますよ。他の部隊が集まってきたら相手をするのも面倒ですし、転移して逃げるのが先です。…行きますよ！」

こうして私達は、帝国、連合ともに大きな被害を出したグレート＝ブリッジを転移魔法で後にしました。

後で聞いた話ですが、この後連合は圧倒的な物量と、紅き翼の無事だったメンバーの活躍でグレート＝ブリッジ奪還に成功したそうですが、私の最後の一撃を帝国の新兵器だと勘違いして終始戦々恐々だったそうです。

第十八話・グレート＝ブリッジ奪還妨害作戦・後編（後書き）

もう何話かしたら大戦期辺も終わりです。

終わってしまいます。

原作期は、話を組むのが難しいです……

第十九話・フェイトの依頼（前書き）

更新ペースを二日～三日に一度に落とします。
ご理解ください。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第十九話・フェイトの依頼

Ｓｉｄｅ，セイ

あの後、転移魔法で墓守り人の宮殿に帰ると、すわ何事かと普段常駐している構成員及び幹部達に取り囲まれました。
私だと説明しても、信じてくれないんですよ。
主に背中についてる物が原因で。ちょうどフェイトやウェイタといった顔見知りの幹部が所用でいなかったので、デュナミスがいなければ面倒なことになっていたかもしれません。

他の幹部が臨戦態勢で警戒するなか、奴一人だけは『なるほど、貴様の大幹部戦闘形態はそんなふうなのか。うむ、興味深い。中距離支援型…いや、砲撃特化型が？』とか意味のわからないことを言ってましたからね。

とにかく、デュナミスのおかげで誤解は解けたんですが、その後すぐ倒れてそのまま寝込みました。剣状突起が自然と引っ込んだ後、だいたい三日くらいは四十度前後の高熱が続きましたね。
デュナミス曰わく、これは無理な変身の反動で、本来は身体の急激な変質は魔族だって絶対にしてはいけないそうです。下手したら死んでいたか完全な化け物になるかの二択だったとか。
…成功してほんと良かったと思いましたね。彼が言うには、一度変

身に成功すれば二回目以降は反動も全くないし、練習すれば部分的な変身なんてことも自由自在とのこと。ようは慣れなんだそうです。

ただ、奴は去り際に『この程度なら、もう一段階変身が残っているかもしれんぞ？』と言い残していきやがりました。

冗談じゃありません！　仮にもう一段階変身が残っていたとしたら、私はどうなってしまうんです！？　既に角と尾と剣状突起でかなりとげとげしい外観なのに、これ以上何がどうなるんです！？

……羽か？　もしかしたら翼が生えたりするのか？　あるいは四肢が獣のようになったり、デュナミスみたいに腕自体が増えたりとか？

ははは、どうしよう、絶対にないと断言したいのにできない。というか急に頭に想像図がパッと浮かびました。未来を暗示しているようで凄く不安です。

まあとにかく熱が下がってからは報告と説明ですね。まずは所用から帰ってきたフェイトにグレート＝ブリッジの報告と辞めたい旨を伝えてから、さよさんと式神たちへの説明会です。

説明し終えたあとで、『デュナミスによると、失敗していたら死ぬか心のない化け物になるかの二択だったとか。まぁもとから半分人ではありませんでしたしね』と軽口を叩いたら、さよさんに思いっきり殴られました。無茶をしないでほしいと。それから『セイさんが死んでしまうと思ったあの時、私がどれだけ悲しかったのか、辛かったのか、わかっててそんなことを言ってるんですか？』とか、『あなたが人を辞めるなら、私も人を辞めてあなたの隣に立ちます』とか言われました。

不覚にもジーンときて、衝動的にさよさんを抱きしめてしまいました。
それを見てにやにや笑っていた白露と六火を蹴り飛ばした私は悪くないはずです。

そんなことをしながら、悪の組織の総本部で日々を穏やかに過ごしつつフェイトの返答を待っていたのですが、ある日ついに声がかかりました。なんでも、最後にもう一仕事頼みたいのだとか。

「ウェスペルタティア王国の姫を誘拐する？」

場所は、フェイトに割り当てらた執務室。

あ、デュナミスやウェイタ、フェイトや私といった大幹部クラスになると、専用の執務室とそれに伴う私室が与えられるんですよ。内装は様々ですね。フェイトは落ち着いた雰囲気、ウェイタは鉢植えなんかを置いた安らぎ空間、デュナミスは重厚感のある黒で統一されていたりと多種多様です。

ちなみに私の部屋はほとんど物がありませんね。でていくのがわかってましたから物をあまり置かなかったんです。

ただ、本来一人部屋何ですが、私はさよさんと二人で使っています。さよさんにも一応部屋が用意されているのですが、どちらから言い出した訳でもなく、自然と二人で同じ部屋を使っていました。もっとも、私たちは大概仕事で外に出ていて、部屋を使う機会は多くはありませんでしたが。

…それにしても、私に頼むにしては、また妙な仕事ですね。

私は出されたコーヒーに口をつけつつ考えます。

普段要人の暗殺や誘拐は、確実性を重視してフェイトやウェイタといった実力のある幹部の中でも古株がいく仕事です。
私にはある程度の拒否権がありますし、この手のことは一度も頼まれたことは無かったのですが…

半分ほどコーヒーを飲んだところで、カップを机に置き、フェイトに疑問をぶつけます。

「また何で私が？　それ以前に私はこの間のグレート＝ブリッジの後の報告で、組織を辞めるとあなたに伝えたはず」

「…実は、ね。どうやら紅き翼が戦争の裏側にいる僕らに気づいたようなんだ。こそこそと僕らのことをかぎ回ってる」

フェイトもまたコーヒーを飲みながら答えます。そういえばフェイトはいつも同じ服ですが、何着も同じのをもってるんですかね？

「ほう、それで？　まさか幹部全員で奴らを始末しにいくから人手が足りないなんて言うんじゃないでしょうね？」

いくらなんでもそんな理由であるはずがないのはわかってますが、多少の嫌みはご愛嬌でしょう。もっとも、フェイトは嫌みだと気づいてくれませんが…

「彼らはしばらく放置する。下手に手をだしてもいたずらにこちらの人員を削るだけだよ。問題は、彼ら同様にこの戦争に疑問を持ち、彼らに協力する勢力があることなんだ」

「というと…どこです？　アリアドネーは中立ですから動くとは考えづらい。どちらかといえば共倒れしてくれればありがたいとか考えてるでしょうね。となると…やはり帝国ですか？　あるいはそのウェスペルタティアの姫がそうだと？」

「両方だよ。帝国のテオドラ第三皇女、ウェスペルタティアのアリカ王女。それにメセンブリーナ連合のマクギル元老院議員…」

「…驚きましたね」

「そうだね、僕も驚いてるよ。どうやら女性の方が行動力があるというのは本当のようだ」

「いや、そっちではなく、元老院議員の方です。マクギルとかいう」

「…なぜ？」

「なぜって、それは…」

それは、元老院がこの百年で私の記憶にあるものよりさらに腐敗していたからです。

完全なる世界は各国の上層部のほとんどに内通者や組織の人員が紛れ込んでいますからね。
最初にそのリストを見せてもらった時には驚いた物です。特に連合上層部に至っては構成員はすくないのに内通者は山ほどいるという状況。

これは、上層部が権力と政治力はあるのに自分の利益の為にしか動かない者がほとんどで、あまり完全なる世界としても懐に入れたくないという事情があるようです。
そんな悪の秘密組織からも嫌われるような状況で、まだ元老院にまともな思考ができる奴がいたとは…正直驚きですよね。

余談ですが、私がそのリストを見たときにはアリアドネーの内通者は全て×印が書かれていました。なぜかと思いたまたま近くにいたウェイタに訊いてみると、私が暴れたあの事件が原因だったそうです。おかげで『完全なる世界のアリアドネーでの影響力がほぼ無くなってしまった』と愚痴られました。

「まあいいや。話を戻そう。とにかく僕たちはこの動きを潰しておきたいんだ。ここまで大きくした戦争を、ここで止められるのは困るからね。既に彼らの影響を受けている人達もいるみたいだし、なるべく早い内に手を打ちたいんだ。でも、全てに対処するには時間と人が足りない」

「そこで、私に頼みたいと」

「そうだよ。どうやら近々紅き翼とマクギル元老院議員が、僕らとMM執政官のつながりを示す証拠の受け渡しのために接触するらし

い。
僕とあと数人でそちらは押さえるから、君とさよさんには秘密裏に会談を予定しているテオドラ皇女とアリカ王女をまとめて確保してほしいんだ。これはこちらから無理を言っているんだから、相応の報酬も出すよ。
もしどうしても嫌だというのなら、当初の契約に基づいて組織を辞めてくれてかまわない。
でも、できるなら君たちに受けてほしい」

ふむ…

「…あくまで、確保するまでが仕事なんですね？」

「いや、確保して、彼女たちを夜の迷宮まで移送してそこで終了。君たちはそのままゲートポートに向かってくれていいよ。前もってどこのゲートを使うか教えてくれれば、そこに報酬を持たせた部下を送るから」

…悪い仕事ではなさそうです。彼らにも世話になりましたし、受けてあげてもいいでしょう。

私はカップに半分ほど残っていたコーヒーを飲み干し、フェイトに向き直ります。

「…わかりました。お受けしましょう。ゲートポートはトルコ・イスタンブールとのゲートです」

「了解した。正直助かるよ。…しかし残念だな、君たちのことはマ

スターも割と気に入っていたのに」

「マスター…造物主が、ですか？」

変ですねえ、私は造物主と会話したことも無いはず何ですが…

「そうだよ。理由は僕も知らないけど」

「はぁ…ま、いいでしょう。それより、彼女らの周りにも何人か工作員を潜り込ませているんでしょう？　そのあたりはどうなってるんです」

私の問いに、フェイトは『ああ…』と思い出したように言いました。

「アリカ王女の方の付き人はほとんどが僕らの手の者だよ。テオドラ皇女の方は半分ほどだけど」

いやフェイトよ、それだけいるなら私を無理に行かせる必要ないんじゃ…

第十九話・フェイトの依頼（後書き）

フェイトは王家の魔力についてある程度の知識があります。

なので、人員がたくさんいても確実を期して大幹部クラスである主人公に依頼しました。

第二十話・要人誘拐作戦？（前書き）

作者が若干ネタに走りました。

たまにはこんな日もあります。

第二十話・要人誘拐作戦？

『こちらライブラリ・ワン。目標を確認』

『こ、こちらライブラリ・ツー。同じく目標を確認しました』

『了解、これより作戦を第二フェイズに移行する』

『……』

『どうした、ライブラリ・ツー』

『…あの～、セイさん』

『ん、なんです？』

『このライブラリ・ツーとかって、何のためなんですか？』

Ｓｉｄｅ，セイ

通信用小型魔法具から、さよさんの疑問に満ちた声が聞こえてきます。それはそうでしょうね。わたしだってそうです。

「アリカ王女の方に潜入しているフェイトの部下と事前に打ち合わせしておいたんですが、是非このようにして欲しいと言われたので。何でも、潜入などの特殊任務に携わる者にとって必須だとか」

『この格好もですか？』

「だ、そうですよ？　　様式美じゃないんですか？」

私たちは今、アリカ王女とテオドラ皇女が密会するという古い遺跡の隠し通路の中で息を潜めています。

作戦は、私達が奇襲をしかけ、注意がこちらを向いている隙を見て構成員達がが二人と護衛を無力化するというものです。失敗したら、私たちが直接制圧。最初から私達が行けば良いとも思うんですが、下手に傷つけたくないんだそうです。

作戦自体に文句はありません。

たださよさんの言うように、指定された格好には文句があります。

私達、なぜかどこかの国の特殊部隊みたいな格好してるんですよ。しかもなぜかハンドガンとトランシーバー型の魔法具を渡されて、コールサインまで決めさせられました。
何の意味があるんでしょうね、これ。
私も最初は断ろうとしたんですよ？　ハンドガンに限らず銃は私使いませんし、わざわざコールサインなんて決める必要もありませんし。そもそも念話で事足ります。

でも、断れなかったんですよ。

変ですよね、相手は潜入任務に従事するエリートとはいえ構成員、私は曲がりなりにも大幹部。なのに私は彼らの言うとおりに迷彩服着て埃っぽい通路に隠れてるんですから。
何ででしょうか、あの時の彼らには逆らえなかったんです。あの時の私に馬鹿やろうと言いたいです。

それでもさよさんはまだいいですよ。私なんかバンダナと黒い眼帯まで装備させられてるんですから。視界が狭いったらないです。

そう言えば旧世界出身の構成員の一人がそんな私を見て『ボ、ボス！？』とか言ってましたけど何だったんでしょう？　敬礼してから逃げていったんで話が聞けなかったんですよ。

『うう、この服ごわごわします。拳銃重い…』

「愚痴らないでください。もうそろそろ作戦予定時刻です。とっとと
とこの仕事終わらせて、京都に帰ってまた餡蜜食べに行きましょう」

『わかりました～…』

さて、何はともあれ、もうすぐ彼女達が到着する予定の時刻です。
既にテオドラ皇女は到着していますから、後はアリカ王女です。
今私達が隠れている通路は、部屋の天井付近につながっている通路
です。上からの奇襲はかなり効果的なんですが、私は接近戦は余り
得意じゃないんですよ。

まるっきりできないわけじゃないんですが、私の本分は中距離から
の召喚や結界による陣地作成。そこからの符による一方的な攻撃な
ど、制圧戦よりセン滅戦の方が向いてるんです。

…あれ？　　この任務そもそも向いてないんじゃ…？

『セイさん、三分前です。それにアリカ王女が部屋に入ってきまし
た』

おっと、無駄な思考を続ける時間は無くなりましたね。……確かに
資料の中にあったアリカ王女の写真と一緒です。さてどうしましょ
うか。

あくまで私達の役目は囮。完全なる世界の構成員は優秀ですから、

失敗することはないでしょう。いえ、ないと信じます。これは私の最後の仕事、いざという時の為の作戦を考えておきましょう。

部屋の中には二人の他に護衛が八人ずつ。計十八人います。
彼女たちの船については他の部下が当たっているので問題ありません。
この十八人の中で完全なる世界の構成員はテオドラ皇女側に四人、アリカ王女側に七人。私は他の七人についてのみ考えればいい。

作戦開始までの残り時間を確認するために、フタがないタイプの懐中時計を取り出して目をやります。

予定開始時刻まで、あと三十秒。

……無理です。

三十秒じゃ作戦なんて組めやしません。こんなこと考えてる間にも時間は過ぎていきますし。
ほら、あと十七秒。
作戦は“当たって砕けろ”の一択です。当初の予定通りにことが運ぶことを祈ります。

あと、八秒。

「カウントダウンを開始します。七、六、五…」

しょうがありません。いざとなったら臨機応変に対応しましょう。

あまり使ったことのないハンドガンをホルスターから抜き放ちます。

「四、三、二、一、零。突入！」

さーて、やるとしましょうか！

部屋と隠し通路を隔てる薄い石の隠し扉。それに貼り付けた爆裂符を起動させ、石の扉を吹き飛ばします。

この爆裂符、ちょいといじってありまして、爆風の方向を一転に向けられる上、威力の割に派手な光と音を出すようにしてあるんです。すくなくとも、これで室内の事情を知らない者達はこちらに意識をとられるはず。

私は部屋に飛び込み、空中で素早く状況を確認します。テオドラ皇女側ではこちらの構成員が皇女と護衛の近衛騎士を押さえ込んでいます。

アリカ王女側は――――

こちらの人員が、アリカ王女に吹き飛ばされていました。
なんということでしょう。彼女の護衛の部下は即座に確保できたというのに、アリカ王女自身はこちらの人員を寄せ付けません。
というかさっきから捕縛系の魔法の射手を剣で切り払ってるんですけどどうなってるんです！？
まずいですね、どうしましょう？
「きさまら、完全なる世界じゃな？」
…信じられません。少し考えごとをしている間に、七人いたアリカ王女側の構成員が彼女の部下を抑えている一人以外のされました。
テオドラ皇女側は全員押さえましたが、このままだと本格的にまずいかもです。
「貴様っ！」
テオドラ皇女の方に潜んでいた構成員が二人彼女を拘束するために動きましたが、あっという間にやられました。
一人は剣の柄頭を鳩尾に突き込まれて、もう一人は剣の側面で殴られて、それぞれ気絶しました。
アリカ王女強すぎませんか！？　あの剣筋、私の見立てでは中級幹部くらいまでなら余裕で倒せそうですよ！？
「なんじゃ、この程度か？」
「あなた、本当にアリカ姫で？」

「貴様は…」

おっと、私を見る目が、他の構成員を見る目と全然違います。めちゃくちゃ睨んで来てます。警戒心全開といったところでしょうか。私は服装も他とは違いますし。

「お初にお目にかかります。完全なる世界客員大幹部、クロト・セイと申します」

「セイ…ま、まさか“召喚大師”クロト・セイか！？」

拘束されたままのテオドラ皇女が叫びます。私は帝国側の傭兵として雇われていましたから、流石に知ってましたか。

「ええ、そうですよ。完全なる世界にも傭兵として雇われております。あ、言っておきますが雇われたのは完全なる世界が先です。あしからず」

テオドラ皇女は絶句してますね。私は帝国側では結構有名でしたから、ショックも大きいんでしょうねー。

「……貴様に、一つ訊きたい」

アリカ王女が隙のない構えのまま、そう言いました。もちろん答えますよ。この状況の打開策が思いつくまでの時間稼ぎの為に。

「何でしょう？」

「貴様は、なぜ戦争を影で操る完全なる世界に与するのじゃ？

アリアドネーで不正を働いた高官を一掃したという高名なお主が、
それに与する理由がわからん」

なんだ、そんなことですか。

私は空いた手で頭をかきながら答えます。

「言ったでしょう、雇われていると。強いていうならお金のため。
つまりは自分のためですね」

いえ、もちろんそれだけじゃないですよ？　来るべき時に向けての布石です。いつか麻帆良で戦う時までに、力は蓄えておかねば。
そのための金銭です。

しかし、アリカ王女はこの答えが気に入らなかったようです。

「なっ！？　き、貴様はそんな事のために完全なる世界に協力しておるのか！？」

「あ～…、そう言いますか」

まぁ、それが普通の感想ですよね。世界を滅ぼそうとする悪の組織を手伝って戦場に立つ理由がお金のため。
ある意味間違ってはないと思うんですが、彼女からすればそうではないのでしょう。
それまで過ごしてきた世界が違えば、価値観も異なります。

「私にも彼らとは別に目的があるんですよ。で、これが傭兵としての最後の仕事。これが終わればとっとと旧世界に帰れます。ですか

ら、大人しく捕まってはいただけませんか？アリカ・アナルキア・エンテオフュシア殿下？」

「むぅ…」

おや、まさかの思案顔。本当に大人しく捕まってはくれるとか？

「貴様、いやお主は、コレが最後の仕事だと言ったな？」

「ええ、言いました。それがどうかしましたか？」

「ならば、私に雇われぬか？」

「は？」

「だから、私に雇われぬかと言っておる」

「つまり、裏切れと？」

「いや？」

…？　どういうことでしょう？

「お主の仕事は私とテオドラ殿を捕縛することじゃろう？　なら、それをするといい。じゃが、私には頼りになる味方がいるから、きっと助け出してくれる。その後でなら、私と契約しても問題あるまい」

…なかなか面白い話ですね。彼らの本当の目的を知る私としては、いささかリスキーな提案ではありますが、この状況で先のことについて交渉を持ちかける度胸、嫌いじゃありません。

しかし…この絶対的な自信はどこからくるのでしょう？　完全なる世界から要人を奪還できるような連中がどこかにいましたかね？

……まさか。

「その、味方というのは…」

「紅き翼。主も聞いたことはあるじゃろう？」

…ふむ、彼女に雇われると、自動的にあのガキと仲間になる？

絶対にいやです！！

少なくとも、今のままの彼らと仲間になるなどまっぴらごめんです。
アルビレオとかいうのは余り友になりたいと思いませんでしたし、
ナギは論外。
詠春は…どうでしょう、斬られはしましたがあそこは戦場でしたから
らそれは仕方ないです。
さよさんに当たりかけたのには思うところがありますが、木乃芽さ
んが間にたったとすれば和解もあるかもしれません。
あとの二人は話したことがないのでわかりませんね。

とにかく、彼女に雇われるわけにはいかなくなりました。
私は手に持つハンドガンを彼女に向けます。

「その話、お断りさせていただきます」
じぶんでも驚くほどドスの効いた声が出ました。アリカ王女も私の
突然の変わりように目をむいています。
「どうします？　大人しくするのなら身の安全は保証しましょう。
ですが、あくまで抵抗するのなら手荒なまねをすることになります
が…」
いくらアリカ王女が強くても、こちらには私とさよさんという実力

者が二人そろってます。
どちらも前衛ではありませんが、そんなことアリカ王女はしりませんからね。
彼女の目の前にいるのは有名な傭兵で完全なる世界の幹部、クロト・セイだというわけです。
おまけにもう一人の目標であるテオドラ皇女は確保済み。味方なし、敵は多数という、限りなく彼女にとって不利な状況なのですよ。

「…なぜじゃ」

「なぜ、とは？」

「なぜ紅き翼というだけで拒む？」

「私は彼らが嫌いです」

「そんなっ！　確かにナギやラカンは馬鹿じゃし、アルビレオ・イマもうさんくさいが、決して悪い奴らでは…」

確かにその通りなのかもしれません。
彼らは強い。ナギは知りませんが、他はそれなりの努力の果てに強さを手に入れたのでしょう。

そういった人間は、たいてい自信の確固たる正義感…まぁ価値観を持っています。信念と言ってもいいかもしれません。

私には、ナギと私のそれが同じ物だとは、到底思えないのですよ。

「…あなたの知る世界が、世界の全てというわけでは無いでしょう？」

「くっ…」

アリカ王女は返答に窮し、悔しそうな顔をしてうつむいてしまいました。

彼女はその後すぐに剣を捨て降伏し、夜の迷宮まで移送する間もおとなしくしていました。

どうやら、私の言葉を多少なりとも信じてくれたようです。

もともと、他に選択肢もありませんでしたし。

それに、本気でナギ達を信頼しているようです。私には理解できま

せんが。

なにはともあれ、こうして私の完全なる世界での最後の仕事は、案外あっけなく終わってしまったのでした。

――さて、報酬を受け取ったら、懐かしき日本に帰るとしましょうか！

第二十話・要人誘拐作戦？（後書き）

以前アンケートをとった外伝ですが、とりあえずアリアドネーの幹部のその後をやろうかな？　とおもってます。

それと、グレート＝ブリッジの中後編が難航してます。すいません。

外伝・一（前書き）

今回、非常に短いです。

ご了承ください…

外伝・一

私の名は、ゼリム・オースロット。

先日までは、魔法学術都市アリアドネーで国家運営に携わる幹部の一人として腕を振るっていたものだ。

そんな私は、今はその職を失った。

いや、失わされたと言うべきか。

「クロト・セイ…“笑う死書”、か……」

通称、笑う死書。

彼のせいで、私は職を失った。

彼が引き起こしたとある事件で、私は巻き添えをくったのだ。

リークしたのは騎士団に捕縛された、私と同じ幹部の一人。

おかげで、汚職に手を染めていた私は弁明の暇もなく捕縛された。

もっとも、私の汚職は事件全体からすれば微々たる物で、なおかつ

私の今までの功績のおかげで、なんとか期限付きの追放ですんだが。
これはかなりいい方だと私は思う。
よく知らないが、事件の発端であり、彼が暴れる原因となった私より下の幹部達は、彼に引き渡されたらしい。

私はアリアドネーを離れる前に、彼らのひとりとたまたま街であったのだが、最初は誰だかわからなかった。
アリアドネーの中でも急進的な武闘派で、なおかつ血気盛んな若手の幹部だった彼の髪が真っ白になっていたのだ。
少し話してみてまた驚いたのだが、話し方や性格までもが変化していたのだ。
粗暴だった話し方は丁寧に、過激な考えは温和な平和思想に。
まるで、別人のように。

私はその余りの変わりように驚き、彼に何があったのか尋ねたのだが、彼は決して答えようとはしなかった。

だが、彼が最後、別れ際にうつろな目をして『緑の魔神と骨がね、

追ってくるんですよ。逃げても逃げても、ＯＨＡＮＡＳＨＩをしに……、永遠に、あの、異常、なっ、世界で……！』と言っていたのが記憶に深く残っている。

私はほどなくアリアドネーを離れた。

引き渡された他の幹部にはあっていない。

風の噂では大半が入院したらしい。

今は、辺境の密林で同じ境遇の者数人と共に新しく事業を始め、成功しつつある。

開拓されていない密林で、若かりしころに学んだ知識を生かし、新しい植物や動物を発見し、その利用法を見つける仕事だ。

…私はある意味、彼に感謝しているかもしれない。

もちろん危険はある。

だが、それを差し引いても今の生活は意外と充実しているのだ。

アリアドネーにいた頃のように、机にしがみついて書類とにらめっ

こをしたり、連合の狸や帝国の狐どもと顔をつきあわせ腹の探り合いをせずにすむ。

もはやアリアドネーに戻るつもりはない。

これからは、いつか夢見たように一人の学者として生きていくつもりだ。

それに、なにより…

「オースロット社長！　ケルベラス・クロス・イーターの亜種が発見されました！」

「何だとぉ！？　ようし、私もすぐにいく！」

ここは、いつも新しい発見に満ちているのだから。

外伝・一（後書き）

というわけで外伝でした。
最初作者が思っていたよりもかなり短くなってしまいました。朝に投稿は珍しいですね。

ゼリムの出番が今後有るかどうかは不明です。
無いとはいいません。

それでは、また。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第二十一話・旧世界にて（前書き）

今回、オリ設定？が入ります。

※ご指摘により誤字を修正しました。

第二十一話・旧世界にて

古都、京都。

千年以上の歴史を持ち、古き良き街並みを今に伝える日本有数の観光地の一つである。

だが、それは昼の、表の話。一度日が暮れてしまえば、街はまったく違った様相を見せる。

魔都、京都。

千年前からこの地に積み重ねられた呪いや人の怨。飢饉に戦乱、火事に病。宮中における権謀術数と、この土地に災いと闇は何時の時代でも存在した。

そこから生まれる怪異に対抗するための結界、魔の討滅を使命とする陰陽師、神社仏閣といった各勢力に、闇に巣くう鬼や妖怪。

それらが入り交じりつつ、千年という長いときの中で存在し続けた混沌の都。

千年前から未だ終わらぬ戦いが続く、平和な日常の裏側で確かに存

在する戦場。
それが京都の夜の顔。

――――で、あるのだが。

それはあくまで夜の話。
今は、国内外問わずの観光客が溢れかえる真っ昼間。平和そのもの。
そんな中で、戦う奴など普通はいるはずもない。

そもそも戦う者の数が減った。

宮中など今の京都には存在しない。

鬼や妖怪も夜の闇が文明の明かりによって消えていくのと共に姿を消していったし、精霊が宿るような清い自然もほとんど残されてはいない。

つまり、もう一度言うが――――

「平和なんですよね。京都」

「突然どうしたんです？　スプーンをくわえたまま話すなんてお行儀が悪いですよ、セイさん」

Ｓｉｄｅ，セイ

やあ、皆さん。セイです。なんとか日本は京都までたどり着きました。

今はいつかのお店で餡蜜を食べて休憩タイムです。小さな幸せはここにありました。

「ふぅ…やはり平和は良いものです」

「…ふふっ、セイさん、おじいちゃんみたいです」

「どうせ私は百歳超えてますよ～」

このようなささいな冗談を言えるのも平和だからです。

旧世界に帰ってきてからも、日本にたどり着くまでは大変でした。

フェイトの部下から報酬を受け取ったあと、ゲートを使ってトルコ・イスタンブールまで戻ってきたまではいいんです。

問題は、その後です。

こりずにまた使ったんですよ、陸路。

こちらは魔法世界のように世界真っ二つな戦争中というわけではありませんから、日本まで知り合いに挨拶しながらのんびり行こうと思ってたんです。

もちろんそれだけじゃないですよ？　実は、中東、インド付近の古代遺跡を巡ろうと考えていました。

おそらく、私がアリアドネーや墓守り人の宮殿で見た書物に間違いがなければ、きっとあるはずなんですよ。

歴史に消えた、古代地下迷宮が。

歴史のロマンに魅せられて、とかじゃないですよ？　少し探したい物があったんです。

俗に言う西洋魔法のように、体系化されていない物。

つまり、麻帆良における玄凪のような各地の古代文明、その神話や伝説に残っているような術式の技術。

私はそれが知りたかった。

私はフェイトから魔法世界の成り立ちについても聞いています。

魔法世界の真実、彼らがしようとしていることと、その理由も。

そして、造物主についてもある程度の話は聞けました。

そこで私はふと疑問に思ったのですよ。

造物主によって魔法世界が造られたのが約二千六百年前だという。

しかし、私の玄凪もそうですが、それ以前にも文明は存在していたし、各地に当時の遺跡も残されている。

ならば古の昔には、各地に今も伝わる神話や伝承の中で語られるような、魔法以外の秘法や秘術が存在したのではないか。

現に、今でも玄凪の結界術や日本の陰陽師のように、体系の違う術は存在する。

それに、西洋魔法は空間に存在する精霊を介して魔法という事象を発生させる。

精霊がいるというのなら、神話に出てくる古代の神々がかつていたのだとしてもおかしくはないはず。

私は考えました。

それらの痕跡が残っているとするのならば、いったいどこにあるのか。

主な候補は三カ所。

地中海沿岸のエジプトやギリシャ近隣。古代都市国家が存在した中東からインド亜大陸にかけて。それに加えて、中南米の遺跡群。

他にも何カ所か気になる所はあるんですが、とりあえずはこの三カ所。

地中海方面と中南米はつてがないし遠い。なので、帰りがてらに地下遺跡がありそうな場所の目星だけでもつけておこうと思ったんですが、これが大きな間違いでした。

いえ、ある意味では正解だったのかもしれませんが…

あれは、中東の何カ所かの土地でそれらしい場所を見つけた後でしたか、インドの山間部で人気のない寂れた寺院を見つけて、中に入ったんです。

どの部屋を回ってみても何も無いところでした。ハズレかなーと思いつつ最後に一番奥の部屋に足を踏み入れると、見慣れない強制転移魔法らしきものが発動したんですよ。

さよさんと二人まとめてとばされて、ついた先は窓のない広い部屋。高い天井には、はるか上の方に光を取り入れる為の格子窓が一つ。

地下に造られた脱出不能の牢獄といった感じでしたね、あそこは。

それよりも問題は足下に広がる数え切れないほどの人骨。そして中央で、上を見上げてたたずむ一人の少年。姿は人だが、気配は人間のそれではなかった。

身にまとうのは腰布一枚。褐色の肌に、地面についた少年の身長よりも長い暗い灰色の髪。

四肢は鎖につながれていて、上を見上げているので瞳の色はわかりませんでした。

その少年は、私達の存在に気づいたのか、顔をこちらに向けました。

赤い瞳が、私達を見ていました。

私達を見定めているような、なめ回すような視線。

「セイさん？　どうしたんです。ほんとにおじいちゃんになっちゃったとか？」

「違いますよ、彼と初めてあったときの事を思い出していたんです」

その後のことは、こうして餡蜜を食べていても鮮明に思い出せます。

彼は最初にこう言ったんです。

「君ら、えさ？」

いやぁ、衝撃的でしたね。開口一番『えさ？』ときましたからね。

しかも、本気で私達を食べにきましたし。実力行使で。

でも意外と弱かったです。人よりは断然強いですし、そんじょそこらの正義の魔法使いなら瞬殺でしょう。しかし私やさよさん、志津真よりかは弱かったので、割と楽に倒せました。

倒した後で訊いてみたんですが、四肢の鎖で弱体化させられていたそうです。

で、その少年がその後どうなったかというと…

「もぐもぐもぐもぐ…」

今、私達と一緒に餡蜜食べてます。既に八杯目、底なしです。周りからの視線が…！

私だって最初は連れてくるつもりなんてなかったんです。

他人をご飯だと思う人と旅なんてできません。

でも、彼がどうしてもついていきたいっていうんです。もうここで鎖につながれて一人でいるのは嫌だって泣くんです。

そうなったらさよさんは向こうの味方ですよ。一人でいる辛さはよーく知っているでしょうからね。

それでしょうがなく鎖を破壊して、連れて行くことにしたんです。もちろん人は襲わないように約束させました。

…おかげで、食費がえげつないことになりました。まったく、食費だけで前回の旅の数倍の費用がかかるとは思いませんでしたよ。ええ、思いませんでしたとも！

「もぐもぐ……どうした、マスター？」

しかも、なぜか私のことをマスターと呼ぶんです。いつでも、どこでも。

少しは周りの目を気にして欲しい物です。ああ、ほら、また周りからの視線が強くなりました。

なんで私がマスターなのか中国辺りで一度訊いてみたんです。

そしたら、私が一番強かったからですって。

じゃあなんで呼び方がマスターなのかと訊いてみたら、『なんとなく』ですって。

ふふふ……私はなんとなくで周りの良識ある一般人から白い目で見られているのですよ。

「はぁぁぁぁ…」

しかしどうしたものですかねぇ。私はグレート＝ブリッジで人間からさらに外れてしまいました。

新たな仲間？はそもそも人外。

これ、木乃芽さん達関西呪術協会の人達になんて説明したらいいんでしょう…

まさかいきなり斬岩剣で真っ二つ何てことはさすがにないでしょうが…

はぁ……

「もぐもぐもぐもぐもぐ……あ、なくなった…」

第二十一話・旧世界にて（後書き）

遺跡の数だけ、仲間を増やす！

…嘘です。すいません。作者には無理です。

少年の名前などについてはまた次回。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第二十二話・京都神鳴流（前書き）

なんとか投稿しました。

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

第二十二話・京都神鳴流

「くらえ、斬岩剣！」

「斬空閃！」

「斬鉄閃！」

「そんなの僕には効かないよー！　てりゃー」

「「「ぎゃあぁぁぁ！？」」」

「あはははは！　飛ーんでったー！！」

Ｓｉｄｅ，セイ

おお、なんということでしょう。
関西呪術協会の総本山へと続く鳥居が立ち並ぶ道の上で、神鳴流の門下生の皆さんが周りの竹林を巻き込みつつ吹っ飛んでいきます。

吹っ飛ばしたのは時雨…ああ、この間仲間になった少年のことです。日本に入るときに必要になりましたからね、名前。ちなみに、名付け親は私ではなくさよさんです。

「うりゃー」

「ぐあああぁぁぁ！？」

ああ、また一人神鳴流門下生が、ゆるいかけ声とは裏腹のとんでもない威力のパンチで吹き飛ばされていきました。

……彼らの心配はしていませんよ？　周りの竹林の被害のことで、後で怒られないか心配ですが、この事態の原因は彼らにありますからね、私たちは悪くありません。死んでなければいいでしょう。

…なぜこのような事になっているか？

そうですね…簡単にまとめましょう。

私たちは白い目で見られつつも店を後にし、日のある内に関西呪術協会の敷地内に入ったんです。で、問題が起こったのがここです。

いつもなら巫女さんたちが本山の途中に詰めているのですが、たまたま神鳴流の門下生がいましてね、からまれたんですよ。

私とさよさんは前に来てるのでいいとして、時雨は初めてですからね。
その上時雨は人じゃありません。
その辺りは魔を討つ神鳴流、目ざとく時雨が人じゃないことに感づいて『怪しい奴を本山に通すわけにはいかん！』ときたもんです。
人の話なんざ聞きゃしません。
で、問答してる内にしびれをきらしてかかってきて、時雨に片っ端から返り討ちにされてるわけです。
止めませんよ？　　さっきも言いましたが、死ななければなんとでもなります。
それに、半分くらいは『あっちの男、あんな綺麗な美人の嫁さんがいるくせに、昔鶴子師範代とつきっきりで一月も…ちくしょーっ！』とか言ってましたからね。
勘違いからくるやっかみなど相手にしてられません。
で、今に至ると。
「うわぁぁぁぁ、へぶっ！？」
おっと、こちらに門下生が飛んできたんですが、私が何かする前にさよさんの結界にぶちあたってずるずると落ちていきました。
「すいませんね、さよさん」

「えへへ、たまには私だって役にたたないと。いっつもセイさん一人で事を終わらせちゃうんですから」

さよさんが私の肩に頭を預けながら微笑んでいます。あ、私たちは蹴散らすのを時雨にまかせて休憩所の長いすで観戦に徹してますからね。

戦っていませんよ？

「くそっ…これならどうだ！　神鳴流奥義・斬魔剣！」

「っ！　痛っ…」

ああっ、時雨が斬魔剣の直撃をもらいました！

ってほぼ無傷です。彼は私のような結界や障壁は使えないはずなので、単に防御力が馬鹿高いだけです。

私だってまともにくらえば真っ二つだっていうのに…

「馬鹿な！？　斬魔剣が直撃してほぼ無傷だと！？」

あ～、やっぱり驚いてますね。私だって驚きです。

おや、時雨の様子が……、っ！？

「痛いや…鎖なしの僕に、傷を負わせられるんだ……」

わずかとはいえ、傷を負った時雨の気配が変わる。

ゴウッ、と、時雨を中心に風が巻き、彼の影が周りを侵食するように円形に広がっていく。

竹林の清浄な空気が、澱む。

あれは、いけませんっ…！

「なら、ちょっと本気で…」

「時雨、よしなさ…」

「そこまでにしたってぇな、坊」

私が時雨を止めようとしたその瞬間、遮るような形で、凛とした声が響きました。

あそこにいるのは……もしや？

本山の方から、抜き身の野太刀を片手に持った女性が一人ゆったりと歩いてくる。

今この場は戦闘という名の一方的な蹂躙によって、鳥居は吹き飛び、石畳は割れ、もはや荒れ地とかしている。

だがその女性は、そんな事は気にもとめず優雅に歩みを進める。

「ああっ！　鶴子師範代だ！」

「おお、師範代！」

そこにいたのは、京都神鳴流師範代・青山鶴子、その人だった。

「さて、まぁエラいはしゃいどるようやけど……おまんらは何をしとるん？」

唐突に、鶴子さんから言葉と共に強い殺気が放たれる。
ただしそれらが向かうのは、時雨ではなく、神鳴流の門下生たち。
「ひっ」
鶴子の登場によって希望に輝いていた彼らの顔が、一瞬にして青くなる。日頃から付き合いがある分、たとえ彼女が表面上笑っていても、その裏で怒っていることがよくわかるのだろう。
「どないしたん？」
「そ、それは…」
「なんや、言えへんようなことしとったんか。…ま、この有り様見たら言わずともわかりますわ」
ここで、鶴子さんは時雨を見て、それから私とさよさんを見た。
「セイはん、そこの坊つれて先に長のところいっといてもらえる？」
「…鶴子さんは？」
「このアホたれどもに折檻してから行きますわ」
抜き身の白刃がキラリと光り、門下生たちが震え上がっています。
ああ可哀想に。心から同情します。怖いから助けませんけど。

「そうですか。では、さよさん、時雨、行きましょう」

「はいっ！」

「あ、待ってよマスター！」

腕にさよさんが抱きつき、元に戻った時雨が駆けてきます。
本山はここからそんなに遠く無いので、まぁのんびり行きましょう。

「極大雷鳴剣！！」

背後から断末魔が聞こえた気がしますが、きっと気のせいでしょう。

「ふぅ…良い月ですねぇ、さよさん」

雲一つ無い夜空で、月が煌々と輝いています。

「そーですねー。まーんまるでーすねー」

駄目だ。完全に酔ってる。

…今は、木乃芽さんと千蔵さんが主体で開いてくれた歓迎の宴を抜け出してきた所です。

天ヶ崎さん達が魔法世界の大戦に行っているので控えめですが、ようは酒が飲める口実があれば良いのでしょう。

あと、時雨はその場に置いてきたので、私達がいないのがばれてもそんなに問題にはならないはず。

「それで…なんのご用です？　ただ酒を飲みに来た…という訳では無いのでしょう、鶴子さん」

気配のする方に声をかける。木々の間から出てきたのは、昼間世話になった青山鶴子だった。

手には昼間のように抜き身ではないが野太刀が握られ、顔には真剣な表情が浮かんでいる。

「いけずどすな。気づいてはったんなら、もっとはよに言うてくれてもええのに」

「ははは、気づけたのはついさっきです。…それで？」

「ほな、単刀直入に訊かせてもらいますわ。…セイはん、その体、

いったいどないしはったん」

「……なんのことです」

「とぼけんといてぇな。もともと、あんさんらが混ざりもんゆうんはわかっとった。せやけど、長や千蔵さんが大丈夫言うたさかいに気にせんかった。気の使い方教える間に、悪い奴や無いゆうんもわかったしな。せやけど、今のセイはんは、もうほとんど人から外れとる。……なにがあったん」

鋭いですねぇ…。誤魔化すのは、無理そうです。正直に話すとしましょうか。

「…魔法世界の戦場で、一度致命傷を負いました。私には、まだ成さねばならないことがあったから、生きるために人を辞めた。それだけの話です」

「…さよか」

鶴子さんが、さよさんの反対側、私の隣に腰を下ろしました。二人して月を見上げます。

少しの間話が途切れ、辺りを静寂が支配する。

しばらくして、鶴子さんが口火をきりました。

「セイはんの結界をして致命傷とは、どないな相手でしたん？」

…どうしましょう。言ったら後々問題になる気がします。

…別にいいか。そのときはどうとでもなるでしょう。

「……青山詠春。斬魔剣・弐の太刀でバッサリやられました。私が新しい結界を過信しすぎたというのもありましたがね」

「なんやて！？」

おお…鶴子さんが驚いてます。驚いてる顔初めて見ました。

まぁ驚くのも無理はないでしょう。死にかけた理由が自分の同門だっていうんですから。

しかし…さっきからさよさんの反応が無いと思ったら、私にもたれかかって寝てるじゃないですか。

私と鶴子さんは結構シリアスな話をしてるのに…

「あんのアホ詠春、どんだけ周りに迷惑かければ…！」

「いえいえ、油断した私も悪いんですよ。それにあそこは戦場でしたし、しょうがないですよ」

「…すまん、セイはん」

「……」

「……」

二度目の静寂。

私はもうあまり気にしていませんが、鶴子さんは思うところがあるのでしょう。

人を護り魔を狩る神鳴流が人外の原因になってれば世話無いですし。

「…決めた」

鶴子さんがすっくと立ち上がり私の顔をまっすぐ見つめます。

「セイはんに、神鳴流の奥義を伝えることにします。野太刀は向いてへんやろから、無手の技だけやけど」

「何故に！？」

なんで！？　理由がまったくわかりません！　話の脈絡が無さすぎるでしょう！　というか、まさかまた地獄の一週間睡眠一時間生活！？

「ほんまはよその人に教えたらあかんのやけど、お詫びのかわりどす。セイはんやったら、力に溺れることもないやろし」

鶴子さんが私の襟首を掴んで持ち上げます。
この細腕のどこにこんな力が！？

「大丈夫どすえ～。セイはん、気の扱いの時も優秀やったし、三ヶ月も頑張ればだいたい習得できますやろ」

三ヶ月も！？　助けて！　さよさん助けて！！

「あ、そうそう」

「あ痛っ！？」

鶴子さんがいきなり手を放したので、地面に身体を打ちつけました。地味に痛いです。

「あの時雨とかいう坊はなんなん？　千蔵さんに訊いてこい言われとったの忘れてましたわ」

時雨の正体、ですか……いえ、隠しても、いずれはばれることです。

「…他言無用でお願いしますよ？」

私の雰囲気が変わったのを察知したのか、鶴子さんも表情を改めます。

「長と千蔵さん以外なら」

「時雨は……言うなれば、神の模造品。古の時代に、ジャガーノートの再現を目指して造られた失敗作……私と同じ、怪物ですよ」

第二十二話・京都神鳴流（後書き）

最後に爆弾を投下してみました。
爆弾ってほどでもないですが。

原作までが遠いです…

第二十三話・怒り（前書き）

ＰＶが６４００００、ユニークが１０００００を突破した…！？

作者は夢じゃないかと疑ってます。

全ての読者様に感謝を！

第二十三話・怒り

私の関西呪術協会への帰還からはや八ヶ月、戦争に行っていた面々が帰ってきました。

私は彼らから、ある話を聞くことになりました。

その内容は、再び私に魔法世界へ赴くことを決意させるには十分な物でした。

Ｓｉｄｅ，セイ

魔法世界から、関西呪術協会の面々が帰ってきました。全員が帰ってこれたわけではありません。リーダー的な立場にあった天ヶ崎さ

んも帰ってこれませんでした。
それでも、天ヶ崎さんの奥さんや、数多くの人間が帰還し、無事を喜びあっています。

私からすれば、嬉しくもあり、悲しくもある光景です。
もちろん彼らの無事な帰還は喜ぶべき事なのでしょう。私が玄凪の符を教えた物もいますから、私としても嬉しいことです。

しかし同時に、彼らが帰還できたということは、一時の戦友であったフェイトやデュナミス達は敗れたということなのでしょう。
もしも彼らが勝利していたのなら、この場に彼らはいないはずなのだたから。

倒したのは、やはり実力から考えて紅き翼でしょうね。
…彼らは確かに、悪の秘密結社を自称するほどでしたから、魔法世界の世間一般からすれば悪だという自覚は持っていたのでしょう。

しかし、私は彼らを否定する気は全くありません。
彼らは自らが悪だと理解した上で、自身の理念に基づいて行動し、そして死んでいった。
末端や外部の人間はわかりませんが、少なくとも大幹部の連中は最後まで誇りを持って、理想を貫く為に戦ったはず。
そんな彼らを、どうして否定することができますか。

……いえ、途中で抜けた私が偉そうに言えることではないのですが、やはり少し寂しいものを感じます。

もしも私がいたならば…などと考えても、もはや無意味なことだというのに。

とにかく、それから催されたのは、彼らの無事な帰還を祝う盛大な宴。

皆で飲み、食らい、歌う。今日ばかりは無礼講と、幹部も下っ端もなくただただ大騒ぎにふける。

そんな中で、私はある話を聞きました。

「災厄の女王？」

「ええ、さいです」

私と酒を飲んでいるのは、帰還組の一人で符を教えた事のある術者。

彼が話した固有名詞に覚えが無く、首を傾げる。

「災厄の女王…災厄…。やはり覚えがないですね。さよさんはどう

です？　そんな人聞いたことあります？」

「私は知りませんねー。いつもセイさんと一緒にいたんですから、セイさんが知らないなら私も知りませんよー」

「ですよねぇ…。それで、誰なんです？　その災厄の女王って」

「ウェスペルタティアのアリカ女王ですわ」

「はい？　アリカ女王が？　またなんで？」

というか、いつの間にか女王になってたんですね、彼女。

「なんや上の方で色々あったみたいです。そん中でも、奴隷公認法を成立させたんと、完全なる世界とつながっとったいうんが大きいでしょうな。おかげで、ＭＭ元老院に逮捕されて、今はケルベラス監獄とか」

アリカ女王が完全なる世界とつながっていた？　なぜそんな話に？　それに…

「奴隷公認法なんて、またなんでそんなもの…」

「王都オスティアが地面まで落下しましてね。私らは難民対策に仕方なくやった見とります」

また彼女も下手をうったものです。あの時会った彼女はかなりの傑物に見えましたから、おそらく何かあったのでしょうね。しかし王都が落下するとは…

「それはまた…。しかし元老院もぼろぼろでしょうに、よくアリカ女王を逮捕などできたものです」

「へ？　　セイはん、ボロボロてどういうことで？」

「当然元老院からも出たんでしょう？　　逮捕者」

「いや、出てまへんけど…」

「…なんですって？」

どういうことです？　　わたしが知っている限り、元老院はほぼ真っ黒だった。トカゲの尻尾きりでもしない限り、いくら元老院でも何の批判もなし、というのは無理なはず。それがなぜ…まさか！

「アリカ女王に、何もかも押し付けた…？」

ありうる。あの腐りきった元老院ならそれくらい平気でやる。真実が広まる前に身柄を押さえてしまえば、後はどうとでもできる。

真実を知らせず、オスティアの民の感情をアリカ女王に向けさせることで、掲げるべき旗頭を失ったウェスペルタティアの民による内戦も防げる。

「しかし、これから魔法世界は荒れるでしょうなぁ」

私の隣で酒を飲みつつ術者は語る。

「奴隷公認法のせいで、ずいぶんな数の奴隷がでとるそうですわ。帝国の方はそこまででもないそうですが、連合の勢力圏やと食い物

にしとる商人もおるとか」

「彼らは、逃亡したりしないのですか？」

「できんのでしょう。首輪つけられて、逃げよとしたり無理に外そとしたらボンッだそうです。おまけに、元老院の議員も絡んどるとか。まったくひどい話で」

「……」

「あれ、セイはんどないかしました？」

「……」

バキンッ

「うわっ、ちょっとセイはんどないさたん、で…」

男が、こちらの手を見て絶句している。

握り潰した杯で手のひらが裂け、血と酒が混じり地面にシミをつく

っていく。
だが、この程度の痛みがなんだというのか。

「……元老院、か」

この大戦の間、やろうと思えばいくらでも元老院を潰すことはできた。
それをしなかったのは、フェイト達からの命令があったから。戦争を継続させるのに、駒は必要だからと。

もう一つは、自身の存在が知られることを恐れたから。魔法世界の自分は、アリアドネーを拠点にする傭兵であり、完全なる世界の大幹部であるクロト・セイ。あくまでこれで通してきた。

自分の悲願は春香の復活、そして真帆良。そのために一族を滅ぼし、森を破壊した連合への恨みを押し殺してまで自分を偽ってきた。
全ては万全を期す為に。

だがその結果はどうだ？　命と信念をかけて戦った者達は、敗者は死に、勝者は漁夫の利を狙う下衆どもに捕らわれた。
護られるべき民は奴隷の身分に落とされ、弱者から抜け出すこともかなわない。

それらの全ての原因は、戦争を裏で操っていた完全なる世界ではなく、自らの利益の為に蠢動する元老院。

今回の戦争の原因が完全なる世界にあるとはいえ、世界の歪みだけでなく、自分たちの罪さえも一人の人間に押し付けるというのは筋が違う。

自分が麻帆良で事を起こすまで、後二十年ほど。彼らをある程度押さえていた完全なる世界はもはや存在しない。

それまでに、今まで以上に増長した元老院はより多くの悲劇を生み出すのだろう。

それを止めることができるのは、力を持つごく一握りの人間だけ。

自分には、その力がある。戦争における責任の一端もまた然り。

長期的に見ればかなりの影響がでるかもしれないが、これ以上見過ごすことは出来なかった。

「さて…少し出てきますかね」

「出てくって、どこに…。いや、それよりもセイはん、その傷！」

「ああ、もう傷など残っていませんよ。…ほら」

血にまみれた手のひらを見せる。

そこには傷一つ残っていなかった。先日の鶴子さんとの山ごもりで判明したことだが、人から離れるにつれ、回復力も人のそれではなくなったらしい。

「ああ、あまり騒ぎを大きくしないでください。木乃芽さんには私から話を通しますし、さよさん達もちゃんと連れて行きます。ただ、あまり広めないでくださいね？」

男は息をのんだ様子で頷き、それから、声を潜めて訊ねてきた。

「いったい、どこへ行くつもりで？」

それに私は口の端を吊り上げて、しかし胸の内では暗い炎を燃やしながら、答えた。

「メガロメセンブリアへ」

第二十三話・怒り（後書き）

今回少し遅れてしまいました。すいません。

二十三話は、一度話を全部消して一から作り直したので時間がかかってしまった次第です。

これからも頑張って行きたいと思います。

第二十四話・惨劇（前書き）

若干グロ注意です。

グレート＝ブリッジの修正版が終わらない…

あとがきにアンケートがあります。

第二十四話・惨劇

「ああ、くそ。ぐしょぐしょだ」

そうぼやきながら詰め所に入ってきたのは、鎧装束を身にまとったＭＭ重装兵団の一人。

その日、メガロメセンブリアでは珍しく霧が出ていた。
前日の夕方頃から突如出始めた霧は、その不自然さから何らかの魔法ではないかと思われたのだが、首都全域を覆い尽くすほどの広域魔法は不可能と判断され、単なる異常気象として処理された。

少し先が見えない程の濃霧が突如発生し、おまけに晴れることがない。
旧世界なら間違い無く魔法などの超常の力を疑うのだが、ここは魔法世界。
竜や妖精、魔族までもが存在するが故に、この魔力に満ちた霧を普通の霧だと判断した。判断してしまった。

その判断が、どれほど危険なことかも知らずに。

「おお、お疲れ。火ぃあるぞ」

「ああ、たすかる。しかし何だってんだ、この霧。こんなの今までに一度も無いぞ？」

「まったく、上は単なる自然現象だからほっときゃ晴れるっていうが、巡回の度にこれじゃやってられんぞ。びしょ濡れになるし、まるで先が見えない。本当に自然現象か？」

「確かにな。もうそろそろ日が昇る頃だっていうのに、まるで晴れる様子がない。…おい、下っ端A、外の様子はどうだ。何か変化あったか」

詰め所の中では最も階級が高い先任士官である隊長が、一番若いがゆえに何も見えないのに望遠鏡で外の監視を続ける部下に声をかける。

「先輩、いくら何でも下っ端Aは酷いです。下っ端だけならともかく、Aをつけるともの凄く安っぽくなるじゃないですか。せめて下っ端にしてください」

「はいはい、わかったよ下っ端A。んで、外の様子は？」

「え～と…そうですね、少し明るくなってきました。それと、霧が薄くなってきたように感じます」

それを聞いて、詰め所の中に居る面々からため息がもれる。

「やれやれやっとか…」

「これで濡れずにすむ…」

兵士達の気の抜けた発言を聞いて、隊長がそれをいさめる。

「こら、だらけるのはまだ早いぞ。次の奴らに引き継いでからにし

ろ。おい下っ端。他になにか異常は？」
「ん～…。そうですね。特に異常はなさそうです。まだ完全に霧が晴れてないんで、遠くはよく見えないんですけ…ど……」
「ん、おいどうした。何かあるのか？」
「あ…あぁ……」
「おい、どうした！　何が見える！」
にわかに詰め所の中にいる兵士達に緊張がはしる。隊長が若い兵士に声をかけるが、震えるその兵士から反応はない。
返事がないことにしびれをきらした隊長は、日が差し込み始めた窓の側にいる若い兵士を押しのけて、自身でそれを確認しようと望遠鏡を覗き込む。
そして、彼は見ることになる。
霧が急激に晴れ、朝日を反射する水面の上。
鋼を纏う居住に率いられた、数十メートルの巨体を誇るヒトガタの群。
そしてその背後に浮かぶ数多の異形達を。

Ｓｉｄｅ，セイ

抗魔呪紋処理特装がしゃどくろ二十二体。

防御結界付加のみのがしゃどくろが四十一。

魔法世界に来てから覚えたゴーレム技術と式神の技術を合わせて作った土人形と水人形が五十ずつ。

計百六十三の巨大なヒトガタの群。

その後ろに烏族といった標準的なものから、玄凪独自の黒輪火車や八鬼頭などの式神たち。

そして、それらの先頭にいるのが、他とは明らかに一線を画す存在。

神の模造品、時雨の本来の姿であるジャガーノート・レプリカ。

偽物とはいえ、その姿は現代を生きる者にとっては本物と変わらないのではないだろうか？

そう思わせるに足るだけの威を持った姿をしている。

鋼を思わせる鈍色に、血のような赤で彩られた胴体と四肢。胴体は幾百の盾によって覆われ、四肢の先には銀で紋様が刻まれている。

そして何よりも特徴的な頭部。幾重にも枝分かれした二本の角を持つ頭部には目と鼻が存在せず、その代わりに赤で紋様が刻まれた平坦な顔と閉じられた口が存在するのみ。

そして、今はその頭部の上に今回メガロメセンブリアに来た面々が揃っていた。

私、さよさん、時雨、六火、白露、志津真。

こうして見ると、まともな人間がひとりもいないことに驚く。時雨にいたっては上半身裸で、腰から下は巨獣の頭部と同化している。

「さて…もう一度それぞれの役割を確認しておきましょう。志津真、あなたは式神の指揮を。さよさんにはがしゃどくろ他大型の物の制御を頼みます。六火、白露、あなた達は今度こそさよさんの護衛です。いいですね？」

「マスター、僕は？　蹂躙してもいいの？」

「駄目に決まっているでしょう。今回の目的は元老院議員の可能な範囲での抹殺です。一般人に被害をだしたら元も子もないでしょうに」

「む～、つまんない。…あ、じゃあアレは？」

「アレ？」

時雨の視線をたどると、その先にはこちらに接近してくる数隻の連合艦。

戦時中最もよく見かけた巡洋艦クラスである。

「流石に動きが速いですね、優秀なのは良いことです。しかし……今は邪魔だ。時雨、好きにしなさい」

「ありがとマスター！　それじゃ思いっきりいくね！　……『インドラの矢』発射体勢に移行します」

ガパァッ……キュィィィ

ですって！？　なぜにインドラ！？　時雨、あなたは確かジャガーノートが基なんですよね！？　それになんで神話級の…！

ィィィィィィィ……ン。

「発射」

キュガッ！！！！

「うぅわぁ……」

それはこの場にいる誰のうめき声だったか。

発射されたインドラの矢、極太ビームは、射線上にいた巡洋艦を一隻残らず消し去った。

撃墜を免れた艦も大きな被害を受けたり、無事な艦であっても突然の攻撃に足並みを乱し右往左往している。

チャージ開始から臨界まで七秒フラット。敵側からすればどうしようもないでしょうね。

しかし…

「時雨ぇぇぇぇぇぇ！！　あなたなんて攻撃してるんです！
これ絶対地面に向けて撃つんじゃないですよ？　いいですね？
絶対ですよ？」

時雨が「え～、マスターほめてくれないの～？」みたいな目で見てきますが今は無視です。
いくら連合が嫌いでも、一般人を巻き込んでの旧約聖書の再現はダメです。

「ええい、まったく…とにかく、連合も動き出したようですし、私たちも動きます。あなた達は陽動として連合軍駐屯地と議事堂に向けて進攻してください。
時間は今からきっかり一時間。その後は事前に渡した超長距離転移符で各自離脱、場所は桃源に設定してありますから。
私はそれまでに元老院の下衆どもを可能な限り討ち取ります」

とりあえず、目標数は全元老院議員数二百三十四の内、半分くらいでしょうかね。

「さて、ではみなさんご武運を」

私は背中から翡翠色の尾や剣状の突起を次々と展開し……デュナミス曰わく大幹部戦闘形態へと移行。

ジャガーノート・レプリカの頭部から飛び降り、水面ぎりぎりの所で一度停止。後方へ伸びた突起の一つ一つに飛行魔法を展開、一気に加速し、私は緑の流星となった。

Ｓｉｄｅ，とある元老院議員

「それで、君たちはいったい何をしていたのかね」

「申し訳ありません！」

どうしてこう誰も彼も無能なのか。
朝早くに緊急の召集が元老院にかかったのでわざわざ出向いてみれば、霧に乗じて所属不明の勢力がこのメガロメセンブリアに侵入したという。

まったく、なぜわざわざその程度のことで我々の予定が乱されなくてはならないのか。
完全なる世界なき今、世界はこのメガロメセンブリア、つまりは我々元老院の物だというのに。

「それで、その所属不明の勢力とやらはどれくらいの数なのかね」

「は。確認できた範囲ですと…」

「ああ、良い良い。どうせたいした数ではないだろう。それより、この首都に駐留していた国際戦略艦隊の展開はすんでいるのだろう？」

「十三分前に完了しております。ですが…」

「ならなぜ我々を召集したのだ！　暇な身ではないのだぞ！」

「それは…。緊急時のマニュアルに従い…」

「は、バカバカしい！　なにがマニュアルだ、このメガロメセンブリアが落ちるわけがなかろうが！」

「左様。万が一この建物内に侵入を許したとしても、ここには我々元老院の直轄部隊がおる。いくら霧に紛れてとはいえ、むざむざ首都に侵入された君らと違って優秀な、の」

「はっはっは、違いない！　この建物内には数多くの立派な魔法使いも滞在している。彼らならたやすくその侵入者どもを捕獲できるだろうさ。無能な君らと違って、な！」

「ハハハハハハ！」

「――本当に、そうでしょうかね？」

直後、両開きの扉が、壁に埋め込まれた枠ごと吹っ飛んだ。

Ｓｉｄｅ，セイ

思いあがりも甚だしい。ここに来るまでに出くわした奴らが直轄部隊何でしょうが、相手が悪かったですね。
私は仮にも大戦の英雄の魔法を至近距離で食らっても無傷な男です。
そんじょそこらの正義に陶酔するだけの魔法使いでは、はっきりいって火力不足なのですよ。

「き、貴様ァ！　ここがどこだかわかっているのか！」

「無論です。あなたこそ自分の立場というものを考えなさい、老害」
「んなぁっ！？　　ろ、老害だと！？」
「我々元老院になんたる無礼かっ！」
「誰か！　　誰かおらんのか！」
「無駄です。彼らはすでに戦闘不能です。今この場であなた方の命を握っているのは、この私なのですよ」
自分たちの立場がようやく理解できましたか、やっと静かになりましたね。
「……何が目的かね」
「目的ですか？　　そうですね～」
ほんの僅かだけ口の端を歪め、笑う。
もしもこの中に勘のいい者がいれば即座に逃げようとするのだろうが、逃がすつもりなど毛頭ない。
「行け」
ローブの袖から、幾百枚もの符が紙吹雪のように舞い散り、次々元老院議員へと貼り付いていく。
飛ばした符は、爆裂符。いつか使った物とは違いまったく弄っていないので、発動すれば間違いなく期待通りの威力を発揮してくれる

だろう。

「貴様、何を…！」

「私の目的、お教えしましょう。あなた方元老院議員の抹殺ですよ」

「ま、待て！　貴様本気か！？　我々を害するということは、このメガロメセンブリアを、魔法世界の半分を敵にまわすのだぞ！　立派な魔法使いが正義の名の下に貴様の命が尽きるその日まで永遠に追い回す！　それでもいいのか！？」

「かまいませんよ。だって私は――――

――――悪の秘密結社の、大幹部でしたから」

「貴様、完全なる…！」

議員の一人が正解を口にしようとするが、待ってやる義理は無い。

「爆ぜろ」

Ｓｉｄｅ，重装兵団部隊長

くっ…何がどうなって…？

自身の記憶の最後にあるのは、自分を嘲笑する議員達と、背後から突然響いた爆音のみ。

「はっ……そうだ、議員の方々は！？」

ちゃぷ…

「む…？」

自分の上にある瓦礫をおしのけて何とか立ち上がろうと床に手をつくと、そこには浅くではあるが何らかの液体が溜まっていた。

その赤い色を見て、急激に意識が覚醒する。

なぜ今まで気づかなかったのか逆に疑問に思う。

この鉄くさい臭いは、この大戦の間になんども嗅いだではないか。

「ぎ、議員は……！」

男は痛む身体をおして、今度こそ立ち上がる。

そこで彼の目に映ったのは、全てが真っ赤になった議事堂。

床、壁、天井に至るまで、赤。

果ては自分の服と鎧すらも深紅。

そこに居たはずの議員達は、一人残らずいなくなっている。

彼にとって、この状況がどの様にして生み出されたのか。

理解することは、難しい事ではなかった。

「う、うわぁぁぁ

第二十四話・惨劇（後書き）

さて、この作品を見て下さっている皆様、いつもありがとうございます。

今回は二度目のアンケートです。

質問はズバリ二つ。

?アーティファクトは欲しいか？

?どんなアーティファクトが良いか？

?は作者が悩んでいるからです。

実際に登場したとしても“アーティファクトのような物”になるかもしれませんがご了承ください。

?は、さよさんの分は作者が考えていましたが、時雨の分がありません。

彼は思いつきで出したキャラですから。

ただし、コレだ！というものがあればさよさんのアーティファクトも変更しますし、コレは話の流れ上ちょっと…という場合は時雨も作者が考えます。

期限は来週水曜日正午までです。

第二十五話・創造？（前書き）

これから何話かオリジナルの話、主に関西呪術協会での話をいれます。

戦闘は…余りないかも？

第二十五話・創造？

「さて…そろそろ始めるとしましょうか。新たなる世界の始まりです！」

「マスター、一人で変なこと言ってないで、ダイオラマ魔法球の中をどうするか決めちゃおーよ」

Ｓｉｄｅ，セイ

私の目の前にあるのは、その名もダイオラマ魔法球。非常に希少な魔法具で、その効果はフラスコの中に異空間を造り出すというもの。

この魔法具はフラスコの内部の空間の広さだけではなく、時間の流れすらも変更可能という規格外なものである。

ただし、非常に希少である分恐ろしく高価な魔法具でもあり、あまり表には出回ってはいない。

この魔法具を所有しているのは、名高い魔法使いであったり、どこかの国の重臣クラスがほとんどで、一人で複数所持している者などまずいないのであるが…

「時雨くん、良いですか？　こういうのは雰囲気が大切なんですよ？　セイさんだってたまにはああやって楽しみたい時があるんですから」

「……さよさん、そういうことはせめて本人の居ないところで話してください。結構傷つきます」

「え、あ！　ご、ごめんなさい！」

とにかく、今目の前には台座に載ったダイオラマ魔法球が二つ。

一つはアリアドネーから仕事の“正当な”報酬としていただいた物。
もう一つは、完全なる世界での最後の仕事の報酬としてフェイトがくれたもの。

いずれも広さは一級品だが、現実世界との時間比率は一対一で、中はただ荒れ地が広がるばかり。これに特定の手順を踏んだ上で霊力、あるいは魔力をこめると夏のビーチやら熱帯の密林やらに変化するのだが、今はそれをどうするか考えている最中である。

そもそも、思い立ったのは元老院の粛正を終え魔法世界から帰ってきて、関西呪術協会の一室で随分増えてしまった荷物の整理をしていたときのことである。

鞄の奥から出てきた大きなフラスコ。

そういえばこんなものもあったなと思い出し、良い機会なので本腰をいれて弄ってみようかと考えたのが始まり。

それで二人にどんな物がいいか訊いてみれば、

「そうですねー、私はすごしやすければ何でもいいですよ」

「僕は何でもいいやー」

と完全に人任せなのである。それで一人で何日か徹夜で考えあぐねたあげく、やっと案がまとまって変なテンションになっていたとこ

ろを見られてしまった訳である。

「ま、いいですよ…。とっとと魔力こめちゃいますから」

そう言って、二つあるフラスコの一つに手をかざし、完成像をイメージしながら霊力をそそぎこんでいく。

しばらくすると作業が完了したのか、フラスコが強く光を放つ。それを確認してから、同じように二つ目のフラスコも光るまで霊力をそそぎこむ。

やがて、二つ目のフラスコも光り、作業が完了したことを確認する。

ただの荒れた大地しかなかったフラスコの中に、今はボトルシップのように精緻な建物のジオラマが入っている。

「これで、完成です」

「わぁ…！」

さよと時雨も、キラキラとした目でダイオラマ魔法球の中をのぞき込んでいる。

ただ、時雨の目が新しい玩具を見つけた子供の目であるような気がして、少し怖いのだが…

一方のダイオラマ魔法球は居住空間として考えた物で、テーマは水。

地面は全て水面と大小幾つもの石造りの正方形の島を組み合わせたもので構成されており、だいたい水面が七で島の部分が三である。

大きい島や中くらいの島には関西呪術協会のような和風の木造建造物が建てられており、それらは木の橋で繋がっている。

小さな島は様々で、何もない島から、灯籠が立っている物や樹が植えられている物など多種多様であるが、それらの島ほぼ全てに余すところなく白い砂利が敷き詰められているのも特徴だろう。

ちなみに、フラスコの外から見ればすぐに気づけるのだが、これらの島々は全てダイオラマ魔法球の出入り口に設定してある場所を基準として、点対象になるように配置されている。

二つ目の魔法球は、かなり特殊な仕様となっていて、まず基本的に地表は全て森となっている。

構造物は全て空中に浮かぶ島に建てられており、それらの島の大きさ、高度は様々。

その上それらは橋などでつながれてはおらず、中には星のように一定のコースを回っている物さえある。

そんな島々の移動手段は虚空瞬動か飛行魔法。あとは鳥居を模した転移ゲートを使うしかない。

それと、この魔法球の中は常に時間帯が夕方に設定されている。

特にこれといった理由はないのだが、なんとなくやってしまったのである。
用途は主に設定していない。修行に使ってもいいし、新しい術の試験にも使えるように造った。
一つ目も二つ目も、広さだけはあったが故の仕様である。

「ま、とにかく一度入ってみましょう。こちら側に集まってください」
二人を自分の側に集め、ダイオラマ魔法球に近づく。すると、足下に魔法陣が発生し、光が三人を包み込んだ。
光がやむと、そこには誰も残っておらず、畳張りの部屋に不釣り合いな大きなフラスコが二つだけ残されていた。

第二十五話・創造？（後書き）

唐突にお詫びを一つ。

更新は続けていきますが、並行して行っているグレート＝ブリッジの修正が難航しています。

そのため、修正版の投稿がいつになるかわかりません。

いつか必ず上げるので、どうかご容赦ください。

第二十六話・黒（前書き）

明日テスト。でも投稿します。

第二十六話・黒

黒という色に、どのような印象を持つだろうか？

黒とは、白と対をなす色であり、この世で最も暗い色である。

白が幸運や清浄さ、聖なる者や神の使い、光などの印象を持つのに対し、黒はその逆、不幸や不吉、邪な者や悪魔の類、闇などの印象を持つのではないだろうか。

魔法であってもこれは同様で、白は光や雷といった好意的に受け入れやすい属性を表すこともあるが、黒は闇や影といった大衆に嫌われがちな属性を象徴する。

これは今でもそうだが、特に中世の頃のヨーロッパでは顕著だった。

だが、黒が死者を悼む者達の衣装の色であることも忘れてはいけない。

黒は死を象徴する色でもある。残された者達はその黒を身に纏い、死者との最後の別れに真摯な気持ちで臨むのだ。

なぜこのような話をするのか？

それは、今、関西呪術協会の者達が纏う色が、皆一様に黒だからである。

「……」

一面の曇り空から降り続ける冷たい雨。
土砂降りという訳ではなく、小雨といったところだが、もう三日も降り続いている。
そんな雨の中。
関西呪術協会の一室、本山の奥に位置する百畳近い広さを誇る大部屋に、黒を纏った者達が集まっていた。
西日本の裏社会をまとめる関西呪術協会の重鎮の中でも最高幹部が集まっているのだが、彼らの顔は一様に優れず、室内の空気は思い。
その数は、私をいれて“十八”人。

「…関西呪術協会最高幹部会。始める前に、旅立った家族に黙祷を」
室内の者が皆目をふせ、短い黙祷を捧げる。瞼の裏に浮かべる顔は、皆違うのだろう。
「さて…ほな始めよか。何の話かはわかっとるわな。今席が二つ空いとる。一つは引退する千蔵のじいちゃんの席や。これは本人から言うてきて、うちが長として承認した。これからはのんびりすごすそうや」
ここで、長である木之芽が一度話を切る。

「問題は天ヶ崎家の席や。天ヶ崎さんが大戦で亡くなって、千花さんは帰ってこれたけど…先日、事故で逝ってしもた。千草の嬢ちゃんはまだ小さいさかい幹部の仕事はできへん」

そこで、と続ける。

「うちはな、千草ちゃんが一人前になるまで、セイはんに頑張って欲しいんよ」

Ｓｉｄｅ，セイ

はて、これからの関西呪術協会、ひいては日本のこれからについて重要な話があるということで呼ばれたのですが、私に頑張って欲しいとは？

「セイはんには、千蔵さんの代わりに幹部になってほしいんよ。正直今のうちらには、あの腐った戦争で人が減ってしもて力がたりへ

ん。そんな状況で、幹部の席に空きがあるっちゅうんは致命的や。正直あのクソ親父…あれが何してくるかわからへんのもあるし。せやさか、セイはんに形だけでもええさかい幹部に就任してほしいんや」

一通りの説明の後、部屋の奥にいる木之芽さんが末席にいる私に向かって深々と頭をさげる。

…なかなか難しい問題ですね。木之芽さんに頭を下げられた時点で断るのは難しいのですが、やはりメリットとデメリットが…

メリットといえば組織のコネと人員が使えることがありますが、人が足りないと言っている以上、余り期待はできません。政府とのコネは期待できますし、一応の本拠地ができるのはありがたいですが…

デメリットは多いですね。まずはある程度私の存在が裏の世界にバレます。また名前を変えねばなりません。私はいずれ麻帆良に帰りますから、そのあたりのこともおいおい話さなくてはならないでしょう。

しかも、ここにはいつか青山詠春が帰ってきます。

ただでさえ今回の戦争には不満を持つ者が多いのに、参加する理由の一端になった彼が帰ってくれば、その後の展開によっては関西呪術協会が割れる可能性まで出てくるでしょう。

それに、もしも青山詠春があの馬鹿どもを連れてきたら、本山、いえ、京都が焦土になるかもしれません。

なにより、形だけといってもやはり行動が制限される可能性がないとは言えないのが痛い。

二十年あるとはいえ、するべきことは多々ありますからね。幹部になることで解決できる問題もあるので結果的にはとんとんになるかも…むぅ？

「…いいでしょう」

「！　ほんまに！？」

「ええ、まぁいくつかの条件に憂慮していただけるのなら」

「ほなその辺りはまた後日。あ～、それと、実はもう一つ頼みたい事があるんよ」

「なんです？　これ以上に厄介ごとが？」

「うん、まぁ、その〜」

おや、なんだか凄く言い辛そう。

「千草ちゃん、養子にしたってくれへん？」

……ん？

第二十六話・黒（後書き）

最近少し忙しいです。

でもなるべく更新ペースは落とさないよう頑張ります。

第二十七話・千草（前書き）

なぜか考えていたのと違う方向に進みました。

第二十七話・千草

「…千草ちゃん、セイさんだって重いんですから、そこから降りましょうね？」

「……いやや」

がしっ。

「そんなこと言わずに、ね？」

ムギュウゥゥゥ。

「いーやーやー！」

「……どうしても、いやですか？」

「うん、いやや。とーさまのせなかはうちのもん」

ピキッ。

「……そうですか、わかりました」

「さ、さよさん？　懐から符なんて取り出してどうするんです？　そんな物騒な物しまいましょうよ」

「……四天は巡り、五行は環をなし、我は六方を定めて界となす！」

「ちょっとさよさんそれって大戦の時に私が教えた近接対艦用の砲撃術式ですよね！？　何でそれを千草ちゃんに！？　というか照準が私を向いてる！？」

「私だって……」

「…え？　なんです？」

「私だって、セイさんに甘えたいんですー！！」

「ええっ！？　ってこんな距離でその術式はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

！？」

「きゃー」

「わー」

ちゅどーん。

……これは、梅雨明けの日差しが強い、初夏のある日のことである。

――少し前――

Ｓｉｄｅ，セイ

私の関西呪術協会での新しい役職が決まりました。対外的には“特別顧問”で通すそうです。それに伴って、また名字を変えました。今回は暗辺（くらべ）です。

玄凪、黒兎、暗辺ともう三つ目になりました。いつの日か玄凪に戻る日まで、幾つ名前が増えるんでしょうね？

それと、関西呪術協会での仕事ですが、基本的に何もしなくていいそうです。
ただ、暇なときに若手を指導したり、手に負えない大物が出たときに力を貸して欲しいとのこと。

まぁ、それくらいなら行動予定の妨げにもなりませんし、別に問題はないでしょうが…

問題は千草ちゃんの件です。結局本人の意志に任せるという話に決まってしまって、さよさんと二人会いに行ったんですが…

最初、私達が行った時はふさぎ込んでいたんですが、話をする内に元気を取り戻していって、最後に千草ちゃんに『私達のこどもになりませんか？』と言ったら、『新しいとーさまとかーさまやー！』と言って私の背中に飛びかかってきて、それからずっと私の肩に乗っています。

ですが、それからなぜかさよさんの機嫌が悪くなってしまったんです。

――――そして、話は冒頭に戻る。

「待ちなさーい！」

「待てるわけないでしょう！　私を殺す気ですか！」

今、私は十枚単位で符を浮かべたさよさんに追いかけられています。

本山の敷地内の森の道なき道を走っているのですが、千草ちゃんを背負っているせいでスピードが出せず、振り切れていません。

まずいですね。大戦の頃は背中を預けあってあんなに心強かったのに、敵？にまわるとこんなに厄介だったとは。

…時雨？　時雨なら少し前にさよさんに撃ち落とされましたよ。

戦艦の主砲が直撃しても平気な時雨が人の形をとっているからといって一撃でやられるとは…

「さよさーん。落ち着いて話を聞いてくださーい」

「だったら止まって下さい！」

無理です。だって今止まったら確実に砲撃術式が直撃しますもん。

至近距離であんな物くらったら私はともかく、千草ちゃんに悪影響が出ます。

私の結界で防いだとしても、高密度の霊力はそこに存在するだけで子供に強く作用しますからね。

私やさよさんのように、人から外れる必要はありません。

そんなことを考えている間に、いつの間にかさよさんの追撃が止んでいました。

振り返ると、少し離れたところで、うつむいて立っているではないですか。

と、さよさんの声が風にのって聞こえてきました。

「……こんなに必死に追いかけてるのに止まってくれないなんて」

「あ、あれ？　さ、さよさん」

なんだか様子が…

「セイさんの……」

「ちょ、待っ…」

「バカーーーーッ！！」

キュィンッ！！

宙に浮く符が陣をなし、そこからまばゆい光が放たれる。発動したのはとある砲撃術式。
ようは細くて速い貫通ビームです。

とっさに身体をひねって回避したのですが、それが飛んでいった方向が悪かった。

ビームの先にあったのは、湖の上に建つ祭壇と、そこにまつられた巨大な一枚岩。

ビームは、その大岩を貫いたのでした。

第二十七話・千草（後書き）

最近作者とパソコンが暑さで疲れ気味です。

第二十八話・巨躯の鬼神と焔の屍神（前書き）

少し修正しました。

第二十八話・巨躯の鬼神と焔の屍神

ピシッ、ピキッ……バキンッ。

目の前の湖上の祭壇、その先に祀られた巨大な一枚岩にひびが広がっていく。それに伴って、巨岩から異様な霊力が漏れ出ている。

封印の一端を担っていたであろう岩に巻かれていた注連縄はすでにその力をなくし、ずたずたに千切れてただただ水面を漂っている。

その水面に、祭壇を中心にしてにわかに波紋がおきる。波紋は岩から漏れ出る霊力に比例して、より大きな波へとなってゆく。

そして、岩全体にひびが広がりきった時、現れたのは天に向かって伸びる光の柱。

その光が消えたとき、二面四手の巨躯の大鬼、飛騨の大鬼神、リョウメンスクナノカミがそこに居た。

Ｓｉｄｅ，セイ

「え、あ…わ、私は…」

目の前に現れた鬼神に、さよさんの思考が追いついていないようです。

そりゃ、突然こんな大物が、しかも自分のせいで現れたというのであれば混乱するのも無理はありません。

しかし、これはそんな状態で相手をできるほど生易しい物じゃありません。飛騨を治めた大鬼神。玄凪の本拠地、麻帆良は武蔵国にあったため、たびたび小競り合いが起きていたとの記録が玄凪の史書には残されていました。

まぁその史書も里と共に焼け落ちたでしょうがね。

とにかく、私が覚えていたあの記載が間違いでないのなら、アレはがしゃどくろでは足止め程度にしかならないはず。戦艦の砲撃でさえ防ぎ、一体でメセンブリーナ連合の一個大隊に匹敵する力を持つ、特装がしゃどくろが、です。

そんな相手です。すぐに対処が必要ですが、手段は限られています。

手持ちの術具も多くありません。常に気を張っている必要があった魔法世界の戦場ではなく、ここは旧世界。しかも安全神話を誇る日本です。

今は関西呪術協会にいるということで多少の持ち合わせはありますが、それにしたって多くはありません。

……さよさんから逃走するのにも幾らか使いましたし。

とにかく、今の手持ちは符が十枚一組にしてまとめられた物が二つと三枚、計二十三枚。式神召喚用の腰刀が一振り。召喚補助の霊力結晶や、杭や小刀、短刀の類が数点。

そして、常に肌身離さず持ち歩いている、蒼い布で厳重に梱包、封印してある――――

「マスター！！」

「時雨ですか！　良いところに来てくれました！」

近くの藪から飛び出てきたのは、灰色の髪にたくさんの葉っぱをつけた時雨。この異常な霊力を感知して飛んできたのでしょう。

「マスター……何あれ」

「この日の本におわす神の一柱ですよ。……なぜ京都に封じられていて、しかもあのような姿をしている理由はわかりませんが」

巨躯を誇るリョウメンスクナノカミ。その輪郭がぼやけ、陽炎のように揺らめいている。

しかも、徐々にその霊力は高まってきている。

霊地である関西呪術協会の本山を通る霊脈から霊力を取り込んでいるのか、はたまた飛騨から己の本体を呼び寄せているのか。

どちらにせよ、何もせずに時間をかけるのが一番まずい。

時間は差し迫ってきている。必要なのは、決断し、行動すること。

まずは腰刀を使っていつもの三人衆を喚び出す。

三人とも、喚ばれてすぐに体をこわばらせて、ゆーっくりと湖の方を向いて暴れる鬼神を確認する。

「大将よう、いくらなんでもこれはひどくねえか。三人そろやぁ大概の相手はできるが、リョウメンスクナは無理がすぎる」

「だれもあなた達にそこまでの期待はしていませんよ。……志津真、

白露、あなた達はアレの気をひいて湖から出さないように。それと六火、あなたはさよさんと千草ちゃんを担いで本山の方へ避難させてください」

「あいよ」

「え、きゃあ！　そ、そんな！　セイさん、私も！」

不本意ではあるでしょうが、今のさよさんには少し荷が重いですからね。いつもの状態ならなんの問題もないのですが、今回は一撃が命取りの相手、心を乱した者に相手をさせるわけにはいきません。どんなに実力があっても、それが大切な人であるならば当然の事です。

叫ぶさよさんを担いだ六火は森の中へ入り、私の視界から消えました。

「して大将、あれを如何にする？」

「とりあえずは時間を稼いでください」

手持ちの符の半分以上を使い、特装がしゃどくろを召喚。その数、十三。

「時間をかせいだところで、あれはそうそう…」

「私が“大屍”を喚びます。その間だけ保てばいい」

そう言った瞬間、志津真と白露が固まる。何のことだかわからない時雨だけはそのままだが。

「さて、時雨、あなたも本気の姿でお願いします。ただし、インドラの矢とかは使っては駄目です。がしゃどくろもアレにあてますから、うまくやってください」

「え～、サクッと吹き飛ばしたほうが速いよマスター」

「それができれば苦労はしませんよ」

そうです。それができるのなら苦労はしません。難しい事は考えず、大幹部戦闘形態…もう幹部じゃないし第二形態でいいか。とにかく決着をつけたいなら第二形態で霊力最大出力で吹き飛ばせばいいんです。

空に船が浮き街中に獣人や魔族がいる魔法世界ならそれでいいでしょう。

しかしここは日本なのです。秘匿の概念から、広範囲に影響が出る私や時雨の術などは使いづらいのです。

それに万一、アレが私たちの放った魔法を取り込む可能性を捨てき

れない。

今のリョウメンスクナは異常だ。乱暴な封印の破壊がどのような悪影響をアレに与えたかわからない。

自分を中心に、線で繋げば円を描くように地面に符をまき、その上から腰刀や短刀を刺し、地面に縫い付ける。これは符の力の増幅の意味合いもかねる。

自身も部分的な第二形態へ移行…頭部から角を生やすだけに留める。第二形態の方が一度に扱える霊力の量が多いのだ。

「では我らも参るとしよう。ゆくぞ白露嬢。時雨の坊もついてこい」

志津真が黒く大きな翼を広げて飛び立ち、狐火を浮かべた白露と本体を解放した時雨が後に続く。

「さて……それでは始めましょうか。まさか私の代でこれを使うことになるとは思いませんでしたが……」

懐から、蒼い布が巻かれた棒状の物を取り出す。

布を慎重に取り払うと仄かに光を帯びた赤い剣が姿を現す。

その刃で左手の掌に傷をつけ、刀身に血を垂らす。

「――――謡え」

赤い剣を、刃先を天に向け自身の胸の位置で掲げ持つ。

「死すら澱む凪の海。月すら堕ちた暗き常夜の異界に沈む、異形を持ちし者達よ。遥かな過去に生を捨て、死してなお在り続けんとする者達よ…」

謡うような詠唱に応えるように、血の付いた刀身が振動する。
謡うのは、自身であり、剣でもある。それにあわせて宙に描かれていく術式陣。
ただし、その規模、複雑さはがしゃどくろや黒輪火車の比ではない。
それほどまでに巨大。それほどまでに緻密なのである。

「凪に調べを。奏でろ月夜に。詩に歴史を。今こそ語れや高らかに」

喚び出そうとしているのは、玄凪において数少ない禁呪の一つ。
だが、それは現状唯一の切り札。故に躊躇うことはない。

「我らの歴史、歩んだ道を。我らが残した世界の全てを！」

もともとリョウメンスクナやだいだらぼっちといった規格外の化け物を相手にするための術式。そういう意味では、これが本来の使い道と言えなくもないのだが。

「歴史を沈めた澱みの海で、微睡む神の力を見よ」

既にリョウメンスクナの周りでは志津真達が戦い始めている。

「忘却の果て、ただ在り続けた者達が、全てを捧げた最期の奇跡」

おそらく、逃がしたさよさんの報告によって関西呪術協会の面々が到着するまでもう少しかかる。

木之芽さんを筆頭に、幹部連中は他の術者や神鳴流より速いだろうが。

「刻め。今こそ此処に、我らが生きた証を、遥か遠き日、全てを灼いた終焉の焔を」

最善は自分一人でリョウメンスクナを再封印すること。次善は木之芽さん達の到着まで時間を稼ぐこと。

「我は今こそ界を結ぶ。父祖が造りし我らが力を、現の今に喚び出

さんがため」

そして、これがそのための力。

「蒼の焔を纏いし異形！　界を結びし者末、玄凪“蒼錬”斉が名の下に、いざや今こそお出でませい！」

麻帆良かにおいて近代まで根を張っていた一族が、後の世のために史書に残らぬ古の昔に残した力。

「玄凪蒼焔衣大屍！！！」

術式陣から、蒼い焔が溢れ出た。

第二十八話・巨躯の鬼神と焔の屍神（後書き）

修正が終わらない…

第二十九話・湖上にて（前書き）

今日中に何話か修正したいです。

第二十九話・湖上にて

玄凪蒼焔衣大屍、という式神がある。

相対するリョウメンスクナと比較しても劣ることのない巨躯は人の骨格のようで、白い石材によってまるで鎧のように覆われており、所々にあけられた細い溝から蒼い焔を噴出させている規格外の式神である。

この式神は玄凪において最も古く、造られた理由やその方法、それどころか式神という分類が正しいのかさえわかっていない。

焼失した玄凪の史書によれば初めて使用されたのは約二千六百年前とされており、当時どのような状況で使用されたのかは定かでなく、本拠地であるはずの当時の麻帆良の地にて使用されたとの記述が残るのみ。

詳しいことが全く伝わっていないこの式神は、召喚する方法自体、代々の長に口伝で伝わるのみで、玄凪のものでさえ昔話や伝説の類ではないかと疑っていたほどだ。

しかし、その伝説に語られる玄凪蒼焔衣大屍が現実のものとして今この場にいるのであった

名前の由来でもある蒼い焔で凄まじい量の水蒸気をふきあげる大屍を上空から見やる志津真は、眼下に広がる巨神二柱が真正面から組み合う光景を見て深いため息をついた。

霞のように揺らめく鬼神と、身の内より吹き出る焔を纏う屍神。そして鉄壁の防御を誇る神の模造品。

三柱の戦いによって、巻き込まれる形で既に半分以上のがしゃどくろが討ち果たされている。

祭壇のある湖は、もはや神話の再現といっても差し支えない状況である。

「よもや再びあれが日の目を見る日がくるとはな……しかも相手はリョウメンスクナか。喜ぶべきか悲しむべきか」

黒の翼を広げて滞空していた志津真は、そう呟いた。

「なんじゃ、志津真殿はあれを実際に見たことがあったのかの」

首を回して後ろに向ければ、そこにいたのは七尾の狐、白露。もう随分と術を行使しているはずだが、まったく疲弊した様子は見えない。

「白露嬢か。ああ、あるとも」

その答えに、白露は訝しげに眉をひそめる。

「いつの話じゃ。少なくとも初めて麻帆良を訪れた千年前には、もはや伝説のような存在じゃったぞ」

「私が麻帆良に流れついた頃だ」

「じゃからいつの話かと」

「…二千と六百、それと少し」

「…！　前々から思うておったが、幾つ何じゃ？　いや、そもそも志津真殿は一体“何”じゃ？」

「……」

「だんまりか……まあ良い。今はそんな事よりもやるべき事があるからの」

眼下では、また一体が打ち倒され、いよいよがしゃどくろの数が四体まで減っていた。しかも、大屍と時雨がややおされている。

その光景に違和感を覚えたのは白露。

「…？　どうなっておるんじゃ？　伝承の通りなら、あれはあの程度の強さではなかろう」

「大将…セイ様にも限界がある。大屍はそもそも麻帆良の霊脈から霊力を取り込んで動く言うなれば麻帆良専用の物。それをセイ様は自身の霊力だけでやっておられる。
あれの操作も負担になっているのだろうが、それでも時雨の坊がおらねばここまで保ってはおらんかっただろうな」

そう言って、手に持つ短槍を腰の位置で構える。

「やれやれ、幾つになってもやはり手がかかるの」

白露の周りにも、多くの狐火が灯る。

最初はこぶし大の大きさだったそれらは、たちまち人をのみこめるほどの炎へと成長する。

「まだまだぁ！！」

火球はゴウと周囲の空気を取り込み、より大きな、直径六メートル近い大きな灼熱の炎の塊となる。人がのみこまれたならば、骨すら残らぬ大火力。それを苦もなく、それも複数用意できるあたりが、そこらの妖怪と彼らが一線を画す理由でもあるのだろう。

「さぁ行けい！！　特別製の大玉よ！！」

燃え盛る炎の塊が、地上数百メートルからリョウメンスクナめがけて一直線に落下していく。

まるで流星群のように。

「……参る！」

志津真のかけ声にあわせて、風が乱れる。

もともと風が強い高所、その風が意志を持っているかのように志津真が持つ短槍を中心に渦を巻き、竜巻のような様相をていする。

その竜巻が消えた時、そこに元の短槍は存在しなかった。

志津真の手にあるのは、十六尺の巨大な突撃槍。その意匠は、決して東洋の物ではない。

「イイイィィィィィィィィィィィィィィィエヤァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

普段の物静かさが嘘のように、雄叫びをあげながら白露の狐火を追いかけるようにして漆黒の羽を鋭角に折りたたみ急降下する。

ズドドド

刺さった。

それにあわせるかのように、やられっぱなしであったがしゃどくろの残りの四体が四方から各々の武器をリョウメンスクナに向かって突き出し、その胴体を貫く。

直後に彼らは薙払われて消滅するが、その傷は消えることなく、高密度の霊力が漏れ出ていく。

その隙に、さらに大屍と時雨が攻めに転じる。蒼の焔が集まって二振りの大剣を形造り、大屍がそれらをリョウメンスクナの胸に突き立てる。

二振りの大剣はリョウメンスクナの中で焔の勢いを強くし、内側から燃やしていく。

そこで一連の攻撃を受けて、ついによろめいたスクナを時雨が巨体でもって押し倒し身動きを封じる。その拘束にスクナも抗うが、傷は深く逃れることはかなわない。

「……やったかの？」

「…まだだ、あと一手足りん」

上空で様子を窺う白露の元に、槍を持った志津真が帰ってきた。槍

は突撃槍から元の短槍に戻っている。

「アレを消滅させるのはほぼ不可能。時間が経てば霊脈から力を得て回復する。しかしセイ様にも封印するほどの余力はないだろう。見ろ、大屍が消えていく」

志津真と白露が見守るなかで、蒼い焔が消えた大屍が頭部から順に薄くなって空気に溶けるように消えていく。

「セイ様も限界だろう。あとはここの増援がくるまで待つしかないな。時雨の坊で抑えきれないようであれば、私か白露嬢がもう一撃入れる必要があるだろう」

「……どうやらその必要もないようじゃ」

「む……」

真下に広がる湖では、いつの間にか湖を囲むようにして集まっていた関西呪術協会の術者達によって、巨大な術式陣が展開されていた。

その中には長である木之芽、引退したはずの千蔵、そして六火によって連れていかれたさよの姿があった。

リョウメンスクナは、セーマンが描かれた陣に沈むように消えていく。

断末魔をあげながら陣を消そうと四本の腕で水面を叩き水柱をあげるが、その間も身体は沈んでいき、ついには見えなくなった。

それを見届け、封印の完了を確認したのか術者達は一斉に歓声をあげている。

その様子に、こんなものかと肩をすくめる。

「…さて、セイ様拾いに行かねば。霊力を消費しすぎて立つこともままならんだろう」

「…んん？　……志津真殿よ、しばし待て」

「どうした」

「あれを」

白露が指した指の先では、自らの主がその伴侶たる少女に肩を掴まれがっくんがっくん揺らされていた。

口から白いものが出ているのは気のせいだろう。

「……くっくっく」

先ほどまでと真逆の光景を見て、自然と笑みがこぼれる。

セイを幼き日から知る二人からすれば、年頃の女性とあのように戯れているなど、どちらかといえば奥手だった昔の彼からは考えられないことだった。

二人は頷きあって、ゆっくりと主達の元へと降下していくのであった。

第二十九話・湖上にて（後書き）

作者は二十話で原作に入るつもりだった。

いつの間にやら三十話を突破し、しかもまだ何話かかかる。

……どないしょう。

第三十話・目覚めて（前書き）

後書きにまたアンケートがあります。三回目です。

第三十話・目覚めて

「んん…」

目に最初に飛び込んできたのは、天井の木目。
どうやら布団に寝かされているらしい。
濡れた布が置かれた頭を左に向ければ、正座のまま頭で船をこいでいるさよさんが。

窓からはちょうど朝日が差し込んだところ。
一晩中自分のことを見ていてくれたのだろう。

どうやら、あの後意識を失って倒れてしまったようです。思えば無理をしたものだ。
人には過ぎた力を行使して、倒れただけですんだのだから。これも人を外れた肉体ゆえでしょうか。
身体を起こして、改めて周りを見回すと、関西呪術協会からさよさんと二人で暮らすために用意離れの一室のようです。

自身が大屍の召喚に用いた術具は布団から少し離れた文机の上にまとめて置かれているのが目に入りました。

よろめきながら立ち上がり、文机に近づいて術具の状態を確認してみれば、酷い物です。

小刀はひびが入っているし、杭はどれも折れるか砕けている。無事だったのは愛用の腰刀と“赤い剣”だけなんですから。

「おや」

これには少し驚く。赤い剣がどうにかなるとは思っていなかったが、腰刀まで無事とは思わなかった。

「……んぅ…あれ！？　セイさん！？」

声がしたので振り返ると、目を覚ましたさよさんと目があいました。

「あ、ああ！　セイさん、立ち上がって大丈夫なんですか！？
今治癒術師の人を呼んできますから、部屋から出ないでくださいね！」

引き留める間もなく、さよさんは部屋から飛び出していってしまいました。

……まったく、少しは落ち着いてほしいんですがね。

そう思いつつ小さくため息をついていると、戸が静かに開けられました。

「あれ、もう起きとったん？」

戸を開けたのは、果物の入ったバスケットを持った木之芽さんでした。その後ろには千蔵さんもいます。

「大丈夫なんか？　かなり霊力使っとったやろ？」

「ええ、なんとか」

「ふ～ん、まぁええわ。いろいろ話したいことあったんやけど…さよさんは？　ここ三日ほどつきっきりやったのに」

「さよさんなら治癒術師を呼びに出ていきましたよ。……待ちますか？」

「かまへんよ、業務連絡みたいなもんやからセイはんが起きとるんやったら問題あらへん」

話の内容は私が意識を失った後の情勢の推移についてです。
リョウメンスクナの再封印は無事成功したそうです。

もっとも、最後の術式は仮封印みたいなもので、私が寝ている間に湖の祭壇を用いてしっかりと封印し直したそうです。

戦闘の終盤、大屍の大剣で内側から灼かれたのが相当堪えたようで、本封印はスクナの抵抗もなく粛々と行うことができたとのこと。

それと、今回の一連の騒動について他の組織の反応は、国内、特に西日本においては京都勢だけでリョウメンスクナを鎮めたとあって、関西呪術協会の傘下でない組織からの評価がかなり上がったとか。

ちなみに関東魔法協会からも真偽の問い合わせがきており、確認の為に人を派遣したいという申し出もあったが突っぱねておいたそうです。
この状況で訪れる者など、情報収集のための間諜以外の何者でもないですから。

千蔵曰く、歯がみする関東魔法協会の使者をみて久し振りにすっきりしたそうな。

結果として、関西呪術協会は管理する霊脈が少し乱れた程度で、全体的に大きなプラスになったとか。
そのため、今回はそれを考慮してスクナ復活の件はお咎めなしとい

うことに。

話が終わった後、さよさんが治癒術師を連れて戻ってきて、軽い診察が終わった後はなんだかんだでいつの間にか雑談になりました。話している内容はたいしたことのないどうでもいいような内容ですが、集まっている顔ぶれは豪華です。

関西呪術協会のトップ、元最高幹部、現最高幹部とその妻と、ただの雑談をしていると知らない誰かがこの光景を見たら何か大きな計画について密談でもしているように見えるんじゃないですかね。

「ところでセイはん。これからどないするつもりなん？」

「これから、ですか」

やはり当初の計画通り世界の遺跡巡りを決行して古の技術を探したいんですが、時雨の件もありますし、下手をすると遺跡の奥で封印された神とご対面！なんて事態にもなりかねません。やはり情報が必要なので、すぐに目をつけていた中東や中南米に、とはいかないでしょうねぇ。

術具も結構減ってしまいましたし。符ならまだ何も書かれていないまっさらな物を用意してもらえれば自分で量産できますが、小刀などは流石にすぐ…とはいきませんから。

「術具なしで国外は…いえ、国内でも遺跡巡りは難しいですか」

そこでふと思い出したのは、さよさんと共に麻帆良を離脱した後で、かつて関東に根を張っていた幾つかの組織の本拠地巡りをしたときのこと。

あの時は時間がなくて本拠地があった場所しか行けなかったが、もう一度、ある程度時間をかけて周辺の土地を探してみれば、その子孫を見つけることが出きるのではないだろうか？

関東の組織の中には、玄凪と関わりのあった組織も少なくはない。なら、改めて捜してみる価値はあるはずだ。

麻帆良周辺はもちろんのこと、なるべく関東魔法協会の魔法使いとは出会わないように気を付ける必要があるが、もし生き残りがいて、今も復讐、あるいは何らかのけじめを付けたいと考えているならば、力を借りる事ができるだろう。

……もしも、一人の子孫も残らず、完全に滅んでいたのなら、線香の一つくらいはあげてやるのがすじだろう。

「関東…」

「ん？」

「……昔、東日本の裏の組織があった土地を巡りたいと思います。古業（ふるごう）、七守（ななつもり）、石呼壬（いしこみ）…玄凪と関わりのあった家を中心に、他にもたくさん。もう一度各地を巡って、できれば彼らの子孫を、そうでなくても墓くらいは見つけたいですね」

「東、かぁ」

木之芽さんは私の話を聞いてなんだか思案顔。アレ？　なんでだろう？　いやな予感がします。非常にいやな感じです。魔法世界にいたときほどじゃないにせよ、地球に戻ってきてからは一番かもしれません。おかしいな、寒気が…

「まぁええのんとちゃう？　行ってきたらええやん。ときどきこっちに電話で状況報告してな？」

すっごいニコニコしてますね。怖いくらい。

……関東行き、やっぱりやめましょうか。

第三十話・目覚めて（後書き）

第三回アンケートです！

内容は、赤松先生の作品以外の幾つかとちょいちょいクロスしてもいいかな?、です。

別にええんとちゃう？　　という方は?。

世界観がおかしくなるから止めとけ！　　という方は?。

必ず数字でお願いします。

?の場合、クロスを希望する作品を書いていただいても勿論構いませんが、作者は途中までの流れは原作通り進めたいので、世界観に大きな影響が出る作品は多分無理です。あくまでネギま！の世界のｉｆとして作者はやっていくつもりなので。

例としてｆａｔｅをあげるなら、赤い弓兵さんだけ別世界から飛ばされてきたというのは出来ても、時計塔は存在しないし、冬木もなければ抑止力などが現れたりもしません。

そういったのは既に他の方ので素晴らしい作品がありますし。

また、?が多かった場合は数話以内に実行されます。多分。

最後に、長々と書いてしまいましたが、こんなアンケートいらん！

鬱陶しい！　という方には謝罪しておきます。

申し訳ありませんでした。

番外編の予告編（前書き）

とりあえずの予告編。
これは消すかもしれません。
“生きた人”本編は今日明日中に更新します。

番外編の予告編

それは、関西呪術協会に帰ってきてから少し経った頃のお話。

「――――セイはん。ちょっと頼みたいことあるんやけど」

「頼みたいこと？」

その話を持ち込んだのは、関西呪術協会の長、近衛木之芽。

「じつはな、不可思議な事件のおきとる村があるんよ」

「……それで？」

魔法世界では、大戦が一つの結末へ向けて加速していた頃の話。

「セイはんに行って欲しいんやけど、ちょっと厄介な土地でな？」

「厄介って……どこですか？」

本来の物語の裏。彼は、一体何をしていたのか。

「雛見沢……って、知っとる？」

人食い鬼の伝承が残る地に、新たな風は何をもたらすのか？

「……私に何を求めるのです」

物語はやはり悲劇に終わるのか？

「彼の地の因縁に決着つけてきてぇな」

それとも、少女がいつか夢見たような幸せな結末を迎えるのか？

「……いいでしょう。やってやろうじゃないですか」

そして、新たな舞台の幕が上がる。

麻帆良で生きた人、雛見沢異聞。

「あ〜、でも私もさよさんも最近まで忙しかったですし、ここは志津真に頼みましょう。うん、そうしましょう」

近日掲載予定？

番外編の予告編（後書き）

時代的に大戦期とドンピシャだったのでやってしまいました。

ただ、多分ひぐらし本編とは思いっきり乖離します。

作者の妄想にして願望、オカルト的なオリ設定をぶち込み、なるべく幸せなハッピーエンドを目指したｉｆの話の予定です。

数話の予定なので、夏の間に終わらせたいです。

第三十一話・災厄来たれり（前書き）

これからポンポンと数年単位で話がとんでいくと思います。

第三十一話・災厄来たれり

関西呪術協会を出て、旅の進路を東に向けて早二年。私の記憶にあるものや本山の書庫で調べたものなど、本州最北端青森までの裏に関わる一族や組織があった場所、数百カ所にのぼる地域を調べました。

綿密な調査の結果、各地で細々とですが末裔が生き残っていることが確認できました。

さよさんに時雨、私の背中に千草ちゃんを載せて、家族四人で巡る旅。

関西呪術協会の支援があったとはいえ、いろいろなことがありました。千草ちゃんも大きくなりましたよ。

ええ、ほんとにいろいろありました。

七守の生き残りが経営する田舎の旅館を見つけたと思ったら、夜に四方八方から棒手裏剣を投げつけられたり、名を変え表に擬態することで生き残っていた神里の一族を見つけて喜んでいたら、入れ違いでそこの次期当主が若い衆を引き連れて麻帆良に突貫していったというからそれを止めにいったり……ほんっとにいろいろありましたよ。

そんなことがありながらも、この二年で見つけることができた一族や組織は全部で八十七。

その中でいざという時、裏で組織として指揮系統を確立して動くことが可能なのは半分。

実際に活動しているのがさらにその半分。

反魔法使いを掲げて今も抵抗しているのは、ごくごくわずか。

私はそれらの全てと木之芽さんの了承のもと交渉し、来るべき次の大発光の時の協力をとりつけました。

代価は関西呪術協会の当座の関西呪術協会による支援などです。

ただ、幾つかの組織は無条件で協力すると言ってきました。

そう言った組織はどこもここ数十年の内に関東魔法協会に攻められた組織です。

理不尽な理由で家を焼かれ、身内を亡くした世代が多くいるほど、協力的でしたよ。

私の玄凪という名前も大きかったんでしょうね。どこも名を出すだけで態度を改めてましたから。

……それと、玄凪に連なる一族や、関わりの深かった組織はどこも残っていませんでした。

関東圏の数少ない土着の生き残り、石呼壬の長に訊いてみたところ、どの組織も最後の最後まで戦い続け、果てたそうです。長曰く、それだけ魔法使いに対する恨みが深かったのだろう、と。

玄凪は敵には容赦しませんでしたが、身内や仲間は大切にする一族でしたから、恩義を感じていた組織も多かったのではないだろうか、と。

生き残りや子孫はいませんでしたが、いませんでしたが、彼らの墓は残っているということなので案内してもらいました。

連れて行かれたのは、関東のとあるダム湖のほとりにある隠蔽された旧日本軍施設。

そこから地下に潜って、天然の鍾乳洞を利用した地下通路、その幾つもの仕掛け扉を抜けた先に、それはありました。

ずっと先の天井の岩の割れ目から光がさす行き止まり。

光を浴びて輝く、七メートル近い高さの黒曜石の正四角柱。

なんでも、まだ関東魔法協会に完全に東日本を掌握される前に軍内の土着勢力に関係を持つ一部将校たちが、隠すようにしてここに造り上げたのだとか。

……私はそれを見て、この身体になってから初めて人前で泣きました。

そこには複数の組織の者達の名が、細かい文字で一人残らず刻まれていたのですから。

私がよく知る名も数多くありましたよ。

同年代でともに切磋琢磨し、親友でもあった近隣の組織の長の息子。

老齢であったが、様々な知識を惜しむことなく教えてくれた、とある一族の長老。

私に付き従い、焼け落ちる里を最後まで守ろうと戦い果てた、家族同然の部下達。

私を幼い時から好きだと言ってくれたのに、結局泣かしてしまった私の従姉妹。

そして、玄凪最後の長であった私の名前。

ここには私の大切な人たち、大切であった人たちが眠っているのだと。

そして、ここは私の墓でもあるのだと。

私はその後、巨大な墓石から自分の名前を削り取りました。

私はここに眠れない。

まだするべきことがあるのだから。

もう何度目になるのかもわからないその決意を、決して消えないように刻み込んで、私達はその場を去りました。

旅を通して私に最も大きな影響を与えた出来事でしたね。

それで、丸二年ぶりに関西呪術協会に帰ってきたのですが……

「なっ、なんなんですか、これは……！」

「ひどい……」

鳥居と竹林を抜けた先、見慣れた本山の建物がどれも損壊し、ひどいものでは半壊している。

「セ、セイ殿！」

声のした方を見れば、顔なじみの術者が。

私が符術を教え、大戦にも参加した実力派。

その彼が、頭に包帯を巻いている。

「いったい何があったのです！　関東の襲撃ですか！　それとも今度は酒呑童子でも復活しましたか！」

おもわず男に詰め寄り問いただすが、男が答えるよりも先に、後ろで間延びした声がした。

「おーい、詠春いるかー？」

そこに、赤毛の馬鹿がいた。

第三十一話・災厄来たれり（後書き）

番外編については、おいおい掲載していくことにしましたが、オカルト方面から切り込む予定なのでそれ程話数はかからないはず。

でもまずは本編進めます。

ゼリムさんの外伝もどうするか……

第三十二話・鬼の居ぬ間に（前書き）

お詫びは後ほど。

第三十二話・鬼の居ぬ間に

「おーい、詠春いるかー？」

「あなたは…」

振り返った先にいたのは、どこかで見覚えのある赤毛。

初めてあった時に比べれば大分ましになったが、やはりどこかぬけた顔。

背丈も最後に見たときからは伸びたかもしれない。

だが、なぜこいつがここにいる？　最後に会ったのは魔法世界。

こいつがこの関西呪術協会にいる理由がない。

いや、こいつは今詠春と言った。おそらくは青山詠春についてここまでやって来てしまったのだろう。

……いつか心配した通りになってしまいましたか。

と、ここでこのガキと初めて会った時の事を思い出した。

出会いがしらに古代語上級魔法。次にあった時も殴りかかられたか、古代語上級魔法を食らったような気がする。

崩れた建物。

高威力の古代語上級魔法。

バカ。

唐突に思考が一本の糸を結ぶ。

もしもこの本山の結界の内側で古代語上級魔法など使ったらどうなるか。

というよりそれ以外でこの本山がどうにかなるとは考えづらい。

そもそも、ここの術者は一部を除いて目の前のバカと違い分別を持っており、大火力の術を本山で使ったりしないのだ。

つまり。

「貴様…！」

「ん～？　お前どっかでみたよーな」

なるほど、このバカは人の顔を忘れているようですね。あれだけ吹き飛ばしてやったというのに。

……まあその方が好都合と言えば好都合ですが。

「答えなさい。これをやったのはあなたですか？」

「あ～、俺と言えば俺なんだが、俺じゃねえと言えば俺じゃねぇというか…」

「どういうことです？」

「詠春いねーか？　そうすりゃ速ーんだが」

む…、どうやら何か理由があるようですが…

「…ま、とりあえずあなたを拘束します。大人しく縛につきなさい」

「あぁ！？　なんでだよ！」

そう言いたい気持ちもわからないではないですが、この状況でははいそうですかと通す訳にはいきません。

私個人としても、こいつ嫌いですし。

「捕縛術・知識の鎖」

「うおあっ！？」

地面から大量の鎖がはえて、バカをがんじがらめのぐるぐる巻きにしました。

この術、魔法世界でアリカ王女をさらう仕事の後で考案した新しい術なんですけど、面白い仕様になってるんです。

出てくる鎖の数が対象の魔力の量に比例し、鎖の太さが相手の知識の量に比例するんです。

相手が術者だった場合、力量が一目でわかる素敵仕様です。

で、こいつの場合、極細なのに鎖の数が異常です。何千本あるんだろう。

「何しやがるっ！　はなせこのヤロウ！」

……うるさいですね。

「時雨、黙らせなさい」

「わかったマスター！　インドラの矢は…」

「殺してどうする。気絶させなさい」

まったく、どうして時雨はことあるごとにインドラの矢を使いたがるんですかね？　あんな物使ったら影も形も残らず蒸発してしまうでしょうに。

「しょうがないや。じゃあ、セイッ！」

ゴツッ！！！！

「ぷげらっ！？」

バカが静かになりました。

…なりましたけど、頭突きとは……いや、静かになったからいいんですけどね？

「それじゃあ時雨、それ、担いでください。で、あなたは今いる最高幹部に奥に集まるように伝えてください」

……それにしても。

「それにしても、木乃芽さんは何をしているんですか」

「そ、それなんですが……」

ん？

「今は、長や幹部の方々はおらんのです」

……なんですと？

第三十二話・鬼の居ぬ間に（後書き）

さて、見ていただいた方はおわかり通り、短いです。

しかも遅れた上、予告とも異なります。

本っ当にすいません。

実は、昨日は提出の為のノートを作ってました。

予告の人物は次回こそ！

第三十三話・木乃芽（前書き）

最近作者はみっくみくにされつつあります。

第三十三話・木乃芽

「なるほどなるほど。魔法世界から青山詠春が紅き翼の仲間達を引き連れて帰ってきて、宴会をしていたらその隙をつかれて外部の工作員の侵入をゆるしたあげく、リョウメンスクナの封印を破られたと」

「……はい」

「この本山の惨状は紅き翼がリョウメンスクナと戦った時の流れ弾と、その前の宴会から発展した紅き翼どうしの喧嘩被害とが半々と」

「……はい」

「で、その状況下で幹部連中が軒並み留守、最高幹部も九州の大きな会合でいない。当然連絡をとろうとしたら青山詠春に木乃芽さんが帰ってきたら自分が話すからと口止めされたのでこの状況を伝えていないと。あっはっはっは、おかしいですねぇ」

「は、ははは……」

「馬鹿かぁっ！！！！」

「ひぃっ」

「この状況下で長に連絡をとらないなんて何を考えているんですか！　無能ですか？　無能なんですか？　ええ？　そもそも長の婚約者とはいえ一介の剣士である青山詠春の命令をなぁんできいてるんです？　指揮系統が違うでしょう？　やっぱり無能なんですかね？　というかこれって情報の隠蔽、つまり背任ですよね？　私が今この場で粛清しましょうか？」

「そっ、そんな！」

「それが嫌なら…」

「い、嫌なら……？」

「今すぐ木乃芽さんに連絡をとってありのまま全てを伝えなさい！」

「は、はいいぃ！」

――――というのが昨日の昼の話。

今は夜です。ちょうど月が下がり始めた頃合いですね。

奥の間には木乃芽さん、私、縛られたまま跳ねてる馬鹿の三人。

連絡を受けて飛んで帰ってきた木乃芽さんは、会合を他の幹部に無理やり任せてきたそうです。

その木乃芽さんは今、筆で人の形に切られた紙型――――ヒトガタになにかずっと書いてます。

口元は笑ってるのに目は笑ってません。いえ、笑っているんですけど澱んでいるというのが正解でしょうか。

さよさん達と木乃芽さんと共に帰ってきた一部幹部には隣室に控えてもらい、今は青山詠春を木乃芽さんの名前で呼びつけて到着を待っているところです。馬鹿を拘束したことも伝えているのですぐにやってくるでしょう。

と、廊下を走ってくる音が近づいてきて、部屋の前で止まりました。
月明かりによって障子に映し出される影は二つ。

…二つ？

「入ってええよ」

障子が開き、入ってきたのは二人の男女。一人は青山詠春。問題はもう一人の女性。

豊かな金髪、強い意志を秘めた瞳。そこにいたのは———

「……アリカ王女？」

「む？　お主は…！？」

アリカ王女は私の顔を見た瞬間、目を見開き驚愕を露わにしました。

……なにか顔についてましたかね？

「貴様、完全なる世界のクロト・セイではないか！　なぜここにおる！」

「あ～、なぜと言われても」

「詠春！　なんとかしてくれ」

「ナギ！？　そんな…木乃芽さん、これはどういうっ！？」

収集がつかなくなりかけた時、ゴキッ、という嫌な音が青山詠春の首から聞こえ、その詠春が倒れ伏しました。

「詠春？　詠春ー！」

馬鹿が呼びかけますが、答えません。ピクピクしてますから死んではないようですが…

「うるさいですえー」

「うごっ！？」

「ナギッ！？」

ゴキッ！　木乃芽さんの声とともに、再び聞こえる嫌な音。そして静かになる馬鹿。

「あ、“ちょっと”やりすぎてしもた。あかんなー、うち。反省せな」

そう木乃芽さんは嘯きますが、私の勘はわざとだと言っています。

…敵に回さないようにしましょう。

「…私の夫に何をした」

アリカ王女…あ、そういえば即位したから女王？　でも国は滅んだから…まあ呼びやすいので王女でいきましょう。

…前にもこんなこと考えたような……別にいいか。

アリカ王女は悔しそうに唇を噛んでいますが、逃げたりはせずこちらを睨みつけています。

私に加えて、馬鹿と詠春という魔法世界の英雄二人を無効化した正体不明の人物が相手ですからね。

逃げられる確率はほぼ0パーセント。ならば会話から事態の好転の糸口を探る、といったところでしょう。

しかし、なんでここにアリカ王女がいるんでしょう。紅き翼が助けたにしても、なんで二年も動かなかったのか。

「コレよ」

そう言って木乃芽さんが手に持った物をアリカ王女に見せる。そこには首の部分がおられたヒトガタが二枚。

「丑の刻参りって知っとる？　割と知られた術なんやけど、それに近いもんでな、ようはヒトガタと対象に繋がりもたせて、ヒトガタの動きを伝達する術なんよ」

ヒラヒラとヒトガタをいじる木乃芽さん。それにあわせて意識がないのにビチビチ魚のように跳ねる男二人。

見る間にアリカ王女の顔が引きつります。私の顔も引きつってるかも知れません。

だってこんなにお手軽に人を呪えるんですよ？　おそらく必要な触媒は相手の本名くらいでしょう。術者にも相応の技量が求められるでしょうが、破格の効果です。正直あのヒトガタを火にくべたり

八つ裂きにしたりするとどうなるのか考えたくもありません。

木乃芽さん、怖い人だったんですね。

「さて…うるさいのが黙ったところで話始めよか」

木乃芽さんの空気が、さらに黒く重くなる。

黙らせたのは木乃芽さんだと思うんですがね。

「今回の事、ちょっと腹にすえかねとる。リョウメンスクナとの戦いでの流れ弾はしゃあないとして、喧嘩でこの有り様は酷いと思うんよ。けが人出とるし。……酒盛りはええんよ？　詠春はんが自腹きったんやろから。で、リョウメンスクナを打ち取った功績鑑みて、当面のナギ・スプリングフィールド他紅き翼の本山の出入り禁止っちゅうことにさいてもらうえ？　もちろん謝罪の上でや」

アリカ王女はやがて頷きましたが、なぜか私の方を睨みつけています。だから私の顔になにかついているんですかね？

「……一つ聞きたい」

「なんやの？」

「なぜクロト・セイがここにいる！　完全なる世界最後の幹部格にして鮮血事変の主犯、数々の異名を持つ魔法世界史上最高額一千万ドラクマの賞金首だぞ！」

「セイはん、何しとったん……」

なにって…なにかしましたかね？　元老院をですとろいしたことかね？

「セイはんはなぁ、うちらの特別顧問や」

「特別顧問？」

「そや。もともとこの国の術者やから魔法使いよりも信用できるし、大戦の間も家の者にも目ぇかけてくれたそうやし。魔法使いの都合で巻き込まれた家の者に、な」

「それは…」

アリカ王女がまた唇をかみます。彼女が悪いわけではないでしょうが、魔法世界の出身であるということで何らかの責任を感じているのかもしれません。

彼女の父であるウェスペルタティア王も完全なる世界側でしたからね。

……あれは狂人でした。世界の成り立ち、己の立ち位置、完全なる世界の思惑、それらすべてを知り、理解した上で完全なる世界に抗うでなく協力した。

王に必要なカリスマと能力を合わせ持つ人物で、世が世なら名君とたたえられたでしょう。

しかし彼は振りかざすだけの力が正義とされる世の中に絶望し、世界に見切りをつけ、王国の重臣達までもその狂気の渦に巻き込んだ。

私は彼と一度だけ会う機会がありましたが、温厚で理知的、頭も切れる男で、正直彼が本心から世界の崩壊を望んでいたのかわかりません。

今となって言えることは彼が狂人だったこと。
あるいはそれ以上に役者だったかもしれないことくらいです。

———その後アリカ王女は、何も言わず深々と頭を下げて本山を後にしました。私にも何か言いたい事はあったと思いますが、それでも最後までなにも言いませんでした。

馬鹿？　あれなら鎖を解いても起きないのでアリカ王女が担いで帰りました。自分の夫を軽々です。前々から思ってましたがただのお姫様ってタマじゃないですね、あれは。

「さて、それでは私もお暇しましょう、か？」

「まぁ待ってえな、セイはん」

あ、あれ？　なんでしょう？　身体が動かなっ！？　…木乃芽さん、その手にある三枚目のヒトガタは何ですか！？　ま、まさか…！

「――――木乃芽さん、それなんですか？」

「見てわからへん？　セイはんのヒトガタ。試しに作ってみたんやけど、やっぱり人やないと効果は薄いみたいやね。動きを阻害するんで精一杯みたいやわ」

「…なぜこんなことを？」

「深い意味はあらへんよー。けど時々定期連絡忘れとったし、お仕

置き代わりにええかなーって」

「そ、そんな！　　さ、さよさん、たっ、助け……」

「無駄やよ。さよさんには後でこの術教えることで了承してもろたから」

「なんですと！？　　…ねぇ木乃芽さん、なんでジリジリ近寄ってくるんですか？」

「んふふー、ほなこの二年間のこと、あらいざらい話してもらうえー」

「ちょ、やめっ…！」

———結局、さよさんは助けてくれませんでした。

私がいったい何をした…！

第三十三話・木乃芽（後書き）

次回は番外編一話、もしくは原作までを圧縮した物のどちらかになります。

第三十四話・南国にて（前書き）

今回は閑話的な話。

しかもオリ設定が。

ラブひなを知らない読者にはわからないかもしれない……

……ごめんなさい。

でも最後の一文がどうしても書きたくて……

第三十四話・南国にて

どうも皆さん、セイです。私は今とある南の国にさよさんと二人で旅行に来ています。

ふふふ……なんと新婚旅行なのですよ！

時雨と千草ちゃんを本山に預けて、飛行機を乗り継いで日本から遠く離れた秘境とも言える島国までやってきたのです。

籍を入れてから二年くらいたってしまいましたがやっと来ることができました。

もう少し早く連れてくることができれば良かったんですが…

旅費は関西から出ていた給料でまかないました。

給料、出てたんですよ。

驚きですよね、実は関西呪術協会って給料制だったんです。

私の場合は名前だけ貸している状況なので額はそれなりですが、それにしたって丸二年分ですから結構な額です。

二年分の給料を紙封筒じゃなくて紙袋でドンと渡されるのもなかなか無い経験ですね。

とにかくそれで予算を組んで、海のきれいな小さな南の島国に決めて、2人っきりで十何日か過ごすことにしたんです。ホテルも良いホテルを探して、海の見えるホテルにしました。

ここ二週間ほどは楽しかったですよ。

二人で買い物に行ったり、古代遺跡の観光をしたり、海で泳いだり、地元の名物を食べ歩いたりもしましたね。

———そんな中、事件は最終日前日の夜に起きました。

二人で地元で有名なお店で軽い夕食をとった後、数人の男達に車に連れ込まれそうになっていた褐色の肌の少女を助けたのです。

意識を刈り取った男達を引き渡すため、私が憲兵を呼びに行ってい

る間にさよさんと少女が意気投合し、今夜はその少女の家にお呼ばれになることに。

……この時点で、少女の熱い視線に気づくべきだったのです。

「いやぁ、よく娘を助けてくださった！　ささ、どうぞお食べください！」

少女と同じ褐色の肌に金色の髪、少女の父親に勧められるままに目の前に並べられた料理に手をつける。

少女の家は宮殿と見まごうばかりの豪邸で、少女の父親からはずいぶんと感謝されました。

なんでも少女の父親はこの国でもかなり高い位置にいるらしく、娘である少女も狙われているので普段は護衛をつけているのだが、今回のことは少女が護衛の目をぬすんで抜け出したのが原因らしい。

「いや、しかし随分とお強いのですな！　どうです？　なんな

ら家の娘を妻にでも？」

ゴフッ。

おもわずむせてしまった。

ちらっとさよさんの方を見る。大丈夫、まだ黒くない。

「は、ははは。残念ながら私にはさよさんがいますので」

「なに、この国なら三人までオーケーですぞ」

……この人、本気かもしれません。目が笑ってない。少女もなんか恥ずかしそうにモジモジしてますし。

ここは、さよさんが黒くなる前に逃げた方が良いかもしれません。

「ああ、今晩は少し予定が入っていたのを忘れていました。申し訳ありませんが、ここらでお暇させていただきましょう。さ、さよさん行きましょう」

私がそう言って、さよさんの手をとって立ち上がらせようとしたと

き、突然食堂の扉が開かれて、剣を装備した兵士らしき者達が数人足音も荒々しく入り込んできました。

「……どういうつもりです？」

私が少女の父親に問いかけると、彼は悲しそうな顔をしていました。

「私もこんなことはしたくないのです。…しかし」

「しかし？」

「しかし、娘が恋をしたというのなら、叶えてやるのが親というものの！！」

「はぁ！？」

「あなたには、私の娘の婿になっていただく。なに、生活の一切は保障するし、一人の妻に三人の夫がいてもこの国では問題ない。安心してくれていい」

安心って…この親父、相当な馬鹿ですね。頭のネジ数本ぶっ飛んでるんじゃないでしょうか。

ああ、ほら。さよさんから黒い物が出てるじゃないですか。こうなったら……

「ふん！」

「え！？　わわわ、セイさん！？」

さよさんが暴走する前に、お姫様抱っこをしてにげます。今とれる最善の逃走ルートは…窓か！

「それでは！」

窓を突き破り、芝生の地面に着地。気で強化したひざで無理やり衝

撃を殺し、そのまま一気に駆け出す。

「ま、待て！」

誰が待つものですか。私達が泊まっているホテルは外資系のホテルですから、そこまで辿り着ければ逃げ切ったと言っていいでしょう。

私は屋敷の庭を駆け抜けます。しかし、ちょうど門の辺りまでたどり着いたとき、私は有り得ない物を見ました。

「なっ…」

ウミガメが空を飛び、それに人が乗って槍を構えて三亀？編成がひとかたまりになってこちらに向かってくるのです。

ミューとか鳴いてますが、でかいウミガメが飛ぶなんて地球ではありえないでしょう！？

「しかも速っ！！」

空を飛んでいるだけあって、かなり速いです！　あまり一般人は見せたくありませんが、瞬動を使わないと逃げきれないかも……！

――その後、結局セイはホテルまでたどり着くことはできたが、たどり着いたときには精神的に疲労困憊していたという。

一方屋敷では、父親が無線機からの通信を聞いてため息をついていた。

「すまない、娘よ。逃げられたらしい」

「いいのです、お父様。私はまだあきらめた訳ではありませんから」

少女は、父に向かって微笑んでみせた。

この時のセイはまだ知らない。

十数年後、関西呪術協会の本山に、自分の娘を名乗るカオラ・スゥという少女が現れることを。

第三十四話・南国にて（後書き）

空飛ぶウミガメはデカいタマみたいなものです。

あと、少し年代をずらします。

カオラが生まれたのが１９８５年のようなので。

ちなみに、ハーレムには加わりません。

番外編・始（前書き）

やっちまいました。

後書きを読んでください。

番外編・始

昭和５８年、１９８３年1月某日。

京都、関西呪術協会本山の一室にて。

「――――セイはん。ちょっと頼みたいことがあるんやけど」

「頼みたいこと？」

その場に相対するは、一組の男女。

一人は近衛木乃芽。

この日本の闇に巣くう妖を相手に、長い歴史の中で戦い続ける者達。

その最大勢力であり、西日本をまとめる関西呪術協会の長であり名門近衛家の当主でもある女性。

一人は、玄凪セイ。

武蔵の国は麻帆良にて、世界樹、神木・幡桃を守り続けた長にして唯一の生き残り。

現在はクロト・セイに名を変え関西呪術協会に身を寄せつつ、麻帆良奪還の為に日々活動している。

その二人が、関西呪術協会の本山の一角、近衛木乃芽の私的な生活スペースの一室で、綿入れを着込みコタツに足を突っ込んで向き合っている。

室内は女性らしい暖かな色調で統一されており、二人ともコタツの上のみかんを剥きながら世間話をしているように見えるが、どちらも目には真剣な色が浮かんでいる。

「じつはな、不可思議な事件の起きとる村があるんよ」

「……それで？」

剥きかけのみかんをコタツに置く。

木乃芽との付き合いが長いわけではないが、彼女が何か要件がある時にまだるっこしい言い回しを好まないことは知っている。

「セイはんに行って欲しいんやけど、ちょっと厄介な土地でな？
無理強いはせえへんから、よう考えて決めて」

その彼女がこういった迂遠な言い回しを使うのは、怒っているかよほどの面倒ごとか、そのどちらかだ。

「厄介って……どこですか？　いえ、そもそも何のために？」

「うん……」

すぐ側の電気ポットからきゅうすにお湯を注ぎ、入れたばかりの熱いお茶が入った湯呑みをこちらに出してくる。

「雛見沢村……って、知っとる？」

「雛見沢村？　……いえ、聞いたことがありませんが」

「…あれ？　セイはん知らへん？　……おかしいな、裏やと結構有名なところなんやけど」

「雛見沢村…雛見沢……」

「ほんまに知らへんの？　園崎ゆう家が強い力持っとるところなんやけど」

「雛見……園崎？」

首をひねっていたセイがはっとして木乃芽を見る。

「園崎と言うと、まさか鬼ヶ淵村ですか？」

「あ～、そやね。そういえば明治頃まではそないに言うとったわ。今は雛見沢言うんよ」

セイは熱い茶をすすり、一息ついてから木乃芽に問いかける。

「あそこはただの田舎の村じゃない。関西呪術協会の縄張りでもない。裏の人間でも、並の者ならただじゃすまない。……そんな土地で、私に何を求めるのです」

木乃芽は黙ってそこらの漫画雑誌と同じくらいの厚さを持つ大きな封筒を取り出した。

それを受け取って木乃芽を見ると、彼女は黙って頷いた。

封筒の中身を取り出すと、そこには分厚い紙の束。そね表紙には、“雛見沢調査報告書”の文字。

「家に話持ってきたんは、雛見沢村をとりしきる御三家の一つ園崎家。その現当主である園崎お魎っちゅう人や。本人は随分な高齢やけど、村の中では他の御三家、公由家と古手家差し置いてもっとも強い。しかも、その影響力は周囲の市町村にまであって、国家権力にもある程度食い込んでるんよ」

「…それで、そんな園崎家が関西呪術協会にどんな頼み事を？この資料を見る限り、余り良いものでは無さそうですが」

資料の内容は、村の重要人物のプロフィールや、村の来歴、関係のある政治家のリスト、そして、村でここ数年連続して起きている一連の事件の捜査資料の一部。

楽しい記述など一つもない。

「…詳しくは、ウチもわからへんのよ。ただ、祟りについて調べてくれ言うて」

「はい？」

「この話、直接家に来たもんとちゃうんよ。園崎お魎が身内の政治家に話して、んでそいつが知り合いに相談して家に話が回ってきてん。
その資料も、半分くらいは家のモンつこて調べさせたんよ」

「よく調べられましたね。東なら魔法使いの目もあるでしょうに」

木乃芽は苦笑しつつ自分の湯呑みに手をつけた。

「あいつらはこんなややこしいことに手は出さへんし、処理できる力も無い。
気づいてもないやろ。それに家みたいに歴史があれば、園崎みたいにお役人にも顔がきくから」

「なるほど……」

「まぁ、それで一回こちらから電話したんやけど、詳しくは直接会ってからしか話せんいうから保留にさせてもろたんよ。この件、きな臭いし…
政府もかなり上の方が何かしら動いとるみたいでな？　事によると家もここ京都の本山か、あるいはもっとぎょうさん人員さかんなんようになるかもしれへん」

セイはすぐには返事をしなかった。

眉間にしわをよせ、あごに手をあてどうやら考えこんでいるらしい。

彼は考えがまとまったのか、あごから手をはなした。

「一つ訊きますが、あなたはどうしたいのです？」

「ん？」

「協会の長としてでも、あなた個人でもいい。私にどうしてほしいんです」

「…部下に頼んで占してもろたんやけどな」

「ええ」

「何もせんかったら、かなりの確率で死人が出るらしいわ。他にも良くない予兆がたくさん出とるとか」

「それで？」

木乃芽が、口をつけてからずっと持っていた湯呑みをタンッ、とコタツの上に置いた。

「雛見沢が鬼ヶ淵だった頃の話は、ほんの少しやけどこの本山にも残っとる。お節介になるかも知れへんけど、彼の地の因縁に決着つけてきてぇな」

「どんな結末でもかまわないので？」

「できることならハッピーエンドで」

つかの間の静寂。聞こえるのは壁掛け時計の時を刻む音と、お湯を沸かす電気ポットの音だけ。

「……くっくっく、言うにことかいて、ハッピーエンドときましたか」

「うん、そやよ。甘い考えや言うんはわかっとる。けど、もしもほんまに祟りがあるんなら、それを祓うんはうちらの役目や思うんよ。……ふがいないせいで東の実権とられて、できることも随分減って

しもたけどな」

「そこまで卑下することもないと思いますよ。私は全てを失いましたからね。それを思えばこの京都はずっといい。……それと、木乃芽さんの考えはわかりました。いいでしょう、やってやろうじゃないですか」

「ほんまか！」

木乃芽がコタツをひっくり返しそうな勢いで身を乗り出してくるが、それを手で押しとどめる」

「まぁ待ってください。この件、私は行きません。代わりに式神……そうですね、ここは志津真に頼みましょうか」

「式神って……大丈夫なんか？」

「ええ、むしろ私よりも彼の方が適任でしょう」

「…？　まぁセイはんが大丈夫言うなら大丈夫なんやろけど、よろしゅう頼むえ」

「ええ、了解しました。それではここらでお暇しましょう。あんま

り遅いとさよさんに怒られますからね」

「ん、呼びつけて悪かったわ。ほなね」

――

「……」

木乃芽の部屋を後にしたセイは、無言のまま本山の廊下を歩いていたが、ふと立ち止まり空を見上げる。

冬の澄んだ空気では、夜空の星はより綺麗に見える。

その星々を従えるように青白く輝く月を見て、ぽつりと呟く。

「……うまくいけばいいんですが……私が動くこともあり得ますかね」

月は応えることなく、ただ輝き続けていた。

番外編・始（後書き）

この番外編は、ひぐらしの鳴く頃にとのクロスです。

本編だと元老院粛正前、時間軸はナギ達と完全なる世界との裏側あたりの話になります。

実質、始と終さえ見れば問題ありません。

また、ひぐらしのネタバレはなるべく避けたいと思いますが、ひぐらし未プレイで、これからやろうという方は見ない方が良いかもしれません。

予定では始と終を入れて番外編は全5話、あるいは6話の予定です。

番外編・壱（前書き）

久々の連投。

なるべく速く番外編を終わらせたい。

番外編・壱

昭和５８年、１９８３年６月６日

プシュー、ガタン！

背後で扉が閉まり、バスはエンジン音を響かせて次の停留所を目指して発進していった。

「…流石に暑いな」

雛見沢、宇喜田水道前に佇む一人の男。黒いスーツに黒いネクタイ、黒い革靴。
縁なしのシャープな四角いレンズの伊達眼鏡を装着した志津真がそこに居た。
足元には黒い革張りのスーツケース。全身をこれでもかと言わんば

かりに黒で統一された志津真は、いまだになぜ自分がこの状況に置かれているのか納得がいかなかった。

玄凪独自の式神は、鬼や烏族などとも違うある種の異世界で普段は暮らしている（保管されているといった方が正しいものも多いが）。召喚で呼ばれるときには、基本的にその世界にいる本体ではなく同じ意識を共有する分身のような物が術者の霊力によって作り出され呼び出されている。

そんな式神の中でも位の高い自分の本体が数ヶ月ぶりに呼び出されたと思ったら、始まったのは数ヶ月にも及ぶ現代の世の中の知識や常識の勉強。

理由はわからないが、主であるセイの命令だからと従っていたら、いきなり黒いスーツに裏仕様の旅の道具一式を渡されて、鬼ヶ淵の祟りをなんとかしてこいときた。

おかげで自分はバスを何本も乗り継ぐこと数時間、うだるような初夏の暑さの中で黒スーツなど着るはめになったのだ。

汗はかいていないが、式神だって暑いものは暑い。

出発前に聞いた話では、まずは園崎本家に行けばいいらしい。

先方にはすでに関西呪術協会が話を通しているそうなので、いきな

り行っても大丈夫とのこと。
自分は関西から呼ばれた園崎家の客という設定だそうで、主曰わく黒い服にも意味があるそうだ。

ただし、祟りの調査の為に呼んだというのは園崎お魎しか知らないらしい。注意する必要があるならばそこだろう。自分の翼などまず出せない。

「しかし、暑い…」

自分はいつまでこの停留所で待てば良いのだろうか？　なんでも先方が迎えを寄越してくれるらしいが、今のところその気配はない。

少しして、道の向こうから走ってきた黒塗りの高級車が自分の前で止まる。
通り過ぎるものとばかり思っていたので驚きが少し表情にでてしまったが、もしかするとこれが迎えなのだろうか？
そう思い様子を伺っていると、車から降りてきたのは自分と同じような黒スーツの男性。
自分より背は少し低いが、整えられた口髭に三角形のサングラス。
体つきから、どうやら荒事に係わる人物のようだ。

「迎えの方ですか？」

言葉使いもこの何ヶ月かで直した。いや、昔使っていた物を思い出したというのが正しいのか。

「黒兎志津真様、で相違なく？」

「ええ」

「葛西辰由と申します、お見知りおきを。このまま本家にお連れしても？」

「問題ありません。お願いします」

車に乗り込み、扉を閉める。黒塗りのリムジンは緩やかに走り出した。

車内では特に会話もなく、十分、二十分と、ただ沈黙だけが通り過ぎていく。

「あ」

唐突に、葛西と名乗った男が声を上げた。

「どうかしましたか？」

「すいません黒兎さん。ちょいとよらしてもらってかまいませんか」

「別にかまいませんが…」

「では」

葛西は車を止め、降りて歩いて行く。その先には———

「……学校、か？」

一見すると木造のアパートにも見えなくもないが、開けた土の地面はおそらくグラウンド、ならやはり学校だろう。それに、葛西が向かった先には少年少女達がいる。

黒髪の少年と茶髪の少女。緑の髪の、とてもよく似た少女が二人。それと、もっと小さな少女が三人。黒髪、金髪、角付き巫女服と様

々……角？

当たり前のようにそこにある不可思議に思考を一時停止させていると、葛西が緑の髪の少女の片方と、三人の小さな少女達を連れてきた。

「すいません黒兎さん、同乗をお願いできますか？　ご不快かもしれませんが、すぐ近くですので」

「ええ、もちろん良いですとも。…こんにちは、お嬢様方。私は黒兎志津真と言います。どうぞよろしく」

葛西の頼みを逡巡することなく快諾する。まだ先は長いのだ。なるべく多くの人間と良い関係を築いておきたい。

「あ、これはご丁寧に。私、園崎詩音って言います」

「北条沙都子です」

「みーは古手梨花というのですよー」

少女達は黒ずくめの自分に物怖じせずに自己紹介を返す。

あるいは葛西としたしそうなことから、単に黒服に慣れているのかもしれないが。

「ん？」

「黒兎さん、どうかしましたか？」

「いえ…いきましょうか」

古手梨花と名乗った少女の隣にいる角を持った少女。彼女は名乗らすうつむいていたので気になったのだ。

それに、角。おそらくは人間ではない。だとするなら、今の鬼ヶ淵では人と人外が共生しているのだろうか？

少女達を乗せて、車は再び走り出した。

――――

「ありがとうなのですよー」

「ありがとうございました」

「いいえ、どういたしまして」

車が止まったのは神社のほど近い場所にある二階建ての一軒家。ここで沙都子という少女と梨花という少女は一緒に暮らしているらしい。

有角の少女もここで降りたので、同様だろう。

詩音という少女は、園崎の名が示すとおり園崎本家の人間らしく、本家まで同行するらしい。

「さて、ここでお別れですね」

「みー。残念なのです」

「なに、しばらくの間居るつもりなので、また会えるでしょう」

「そうなのですかー？　それは良かったのですー」

梨花ー速くー、と沙都子が家の入り口から呼びかけ、梨花もそれに返事をし、身をひるがえす。

「梨花さん、でしたね」

「？」

その背中に、志津真は車の中から声をかける。

「次に会うときは、そちらの角を持ったお嬢様の名前も教えてくださいね？」

「なっ……！！」

車は、再び走り出す。

Ｓｉｄｅ，梨花

「梨花ー、どうしたのですか？」

「な、なんでもないのですよー。ちょっと神社に用事ができたので、先に戻ってて欲しいのですー」

そう言い、返事も待たずに神社に向かって駆け出した。

自分の半身である角を持つ少女を引き連れて。

――――

「アレは一体誰なのです。いえ、それ以前になぜ羽入が見えているのですか…！」

「あぅあぅあぅ、わからないのです。もしかすると霊能力者の類かもしれないのです」

「今までの世界であんな奴は居なかったはず。この世界で、いったい何が起きるというのです！　やっと、やっと勝てるかもしれない、この最後の世界で、なぜイレギュラーが現れるのです！！
……羽入、まさかあれが私の敵なのですか？」

「……違うのです。断定はできないですが、あんな人は前の世界には居なかったのです。あぅ」

「……とにかく、羽入が見えている時点でただの人ではないのです。一度会って話をしなければ。……絶対にこの世界では負けられないのだから。だって…」

だって、もう次の世界は無いのだから。

完全に暗くなりつつある神社の境内で、ただひぐらしの鳴く声が響いていた。

番外編・壱（後書き）

このひぐらし番外編、余り面白くはないかもしれません。

でも、作者は番外編をやって起きたかったんです。

なぜなら、本編にも関わりがあるからです。

番外編・弐（前書き）

今回はつなぎです。

番外編・弐

古手神社。

雛見沢村の御三家の一つ、古手家が管理する神社である。
現当主は、数年前に怪死した古手夫妻にかわり娘の古手梨花が幼いながらに努めている。

また、古手神社は雛見沢村が鬼ヶ淵と呼ばれた昔、この地にいたという沼から這い出て人を喰う鬼を討ち、人と鬼との共生をもたらしたオヤシロさまが祀られている神社でもあり、祭具殿には絶対的な不可侵の掟が存在する。

数年前、雛見沢村を沈めるダム計画が持ち上がった時、それに反対する鬼ヶ淵死守同盟の本部がおかれたのもこの古手神社であるのだが…

「それで、皆さんこんな時間に集まってなんのご用でしょう？」

「それはこっちのセリフなのですよ。あなたはこの雛見沢に何をしにきたんです」

黄昏時の古手神社、夕焼けでオレンジ色に染まった世界で、志津真は周りを囲まれていた。

――

昭和５８年、１９８３年６月１７日

「さて、何を、と言われても困るのですが」

雛見沢に来てから早数日、村内を歩き回って探索していた志津真だったが、流石になぜ自分が囲まれているのかわからなかった。

ここ数日の調査でわかったのは、村の中には祟りを臭わせるようなものは余り存在しなかったこと。
強いて言うなら、村全体で強い人の念と、まとわりつくような、身体を侵食するような不快な感覚があるが、祟りとの直接的な関係は無さそうなので放置した。

しかし、このままでは成果がだせない。

主であるセイの名代として来ているのにわからないではすまされない。

そんなときに、緑の髪の少女、園崎の現当主であるお魎からは次期当主として紹介された魅音という少女に呼び出されたので、行ってみることにしたのだ。

この村に来たときに出会った古手梨花という少女と、あの角を持った少女。少なくとも角を持った少女の方はなんらかの情報を持っていると踏んでいる。

その彼女達についての話を、あの日一緒にいたこの少女からなら聞き出せるかも知れないと考えたのだ。

しかし、最初の日から一度も会っていないのだ。まるで避けられているかのように。

今回のことは渡りに船だと思ったのだが…

まさか、包囲されるとは思わなかった。自分を取り囲んでいるのは、年も格好も様々な男女。

子供たちにいたっては思い思いに武装しており、バットはともかく、鉈は流石にないと思う。

「私が何をしにきたって……旅行では通りませんか？」

「通るわけがないのですよ！」

とぼけようとすると、少女がもの凄く怒りました。あの梨花という少女、本当に少女なのだろうか？　子供の反応ではないと思うの

だが。

ここは、祟りの調査という目的をあかしても良いかもしれない。お魎からは口止めされているが、次期当主の魅音という少女には祟りが園崎による物でないということは話していると聞いているし、その少女もこの場にいる。

周りの人数だと、切り抜けるのはたやすいが後始末となると面倒だ。一定の譲歩による交渉が今うてる最善の手か？

こんな時かつての友が持っていたような魔眼があれば楽なのだろうが、世の中そんなに甘くはない。

「……そうですね、仕事だと言っておきましょうか」

「仕事、なのですか？」

「ええ、そうですよ」

「なんの仕事かお聞きしてもかまいませんかね？」

言葉を継いだのは、黒いシャツに赤いネクタイとサスペンダーを身

につけた小太りで白髪の多い男性。今この場にいる面子で一番年上なのは彼だろう。

……見た目なら。

「かまいませんよ。……私の仕事は調査です」

「調査？」

「この雛見沢村のここ数年の祟りの調査。以来主は園崎家現当主園崎お魎。他になにか聞きたいことは？」

「……！」

どうやら、園崎お魎が祟りの調査の為に動いていたというのが随分と意外だったようです。

まぁ園崎家が祟りの黒幕ではないというのも驚きでしょうが、問題はこれからどうするか。

……逃げますか。

「さて、もう用がないのでしたらお暇してもかまいませんか？」

「ま、待つのです！　まだ聞きたいことがあるのです！」

「なんです？　なるべく手早く…」

「お前は、何者なのですか？」

「……その質問の前に、私の質問に答えてもらいましょう。あなたとそこの角を持つ少女、あなたたちこそ何者です」

今日は実体を持っているようですが、角を持つ少女に関して、情報が無さ過ぎる。

この雛見沢において、園崎お魎すらもその存在を知らない少女。

この雛見沢に来てから見かけた唯一の人外、おそらくは彼女が、彼女こそが――――

「いえ、こう言いましょうか。あなたこそがオヤシロさまなのでしょう？」

「――――っ」

「あなたは人ではない。最初にあった時、あなたは普通の人間には見えていなかったでしょう？　そしてなにより、その角があなたが人でない――――」

「黙るのです！」

私の言葉を遮るように、周りが止める間もなく、少女がつかみかかってきた。身長差が大きいので、腰の辺りに飛びつくような形になったが。

「軽々しく羽入のことに触れるな！　羽入がどんな思いでこの百年、いえ、千年を過ごしてきたと思っているのです！　誰からも

見えず、相手にされず、ただ孤独に見続けることしかできなかった羽入のことを、何も知らないよそ者が触れるなああぁぁぁぁぁぁっ！」

「梨花…」

梨花という少女は一息でそれだけ叫ぶと、肩を落として震えている。どうやら泣いているらしい。

少し、悪いことをしたかも知れないと反省するが、いまさら遅い。

永き時の孤独は自身も体験したことがあるが故に、どうしたものかと思案するが、いい方法は思いつかない。

それでも、やがて一つの結論を出す。

「…悪いことをしました」

「何をいまさら…！」

「お詫びに、私の秘密を一つ見せましょう」

見せるのは、本当は見せる予定などまるでなかった、自身が自身である証明でもある黒い翼。

まるで少女を包み込むかのように展開されたそれは、今の自分にあわせたかのように深い黒をしている。

黒い髪に黒い瞳、そして漆黒の翼。いずれも昔は黒ではなかった。

今となっては、そうあることが当たり前になってしまったが。

「なっ、なっ…」

反応は人によって異なるが、その誰もが翼を持つものの存在に驚いている。もしくは呆然としている。

目の前の梨花にいたっては混乱の極みにいるようだ。

「さて、話してみませんか？　謝罪の意味と同じ人外のよしみで、多少手助けはしてあげますよ？」

――

「なるほど…」

彼女達から聞いた話を頭の中でまとめていく。前情報にもあったが、まさかこんな村が政争に利用されていたとは。

「ま、私も主に連絡をとってみましょう。どこまで協力できるかはわかりませんが、敵に回ることはないと確約します」

それだけ言い残して、翼を大きく広げて飛び立った。もちろん符を使い見えなくしておくのも忘れない。

真下でなにか叫んでいるようだが、今は無視する。

ここからは時間が勝負。関西呪術協会がどこまで動くか……

Ｓｉｄｅ，梨花

「あーらら、ほんとに飛んでいってしまいましたねぇ」

「大石さん、もっと驚きましょうよ」

「赤坂君だって驚いてないじゃないですか」

「それは……」

それはしょうがないと思う。

人間、驚きすぎると逆に冷静になるのだ。ついさっき身をもって知った。

しかしあの男、黒兎志津真といったか。

羽入以外で始めてみた人でない存在。その翼で実際に飛び立ったかと思ったら、次の瞬間には居なくなっていた。

「羽入、あの人のこと、どう思います？」

「あぅ～、わからないのです。でも長生きしてそうなので、力はあると思うのです」

「そうですか…」

とりあえず、現状では敵対しないと彼は言った。もしかすると増援もあるかもしれないとも。

これで、鷹野たちに勝てる可能性の“目”が増えたのだから、結果的には良かったのかもしれない。

羽入の角のことに触れた時はどうしてやろうかとおもったが。

……ん？

「沙都子、どうしたのですか？」

私の大切な友達、沙都子が空をじっと見上げている。

「……」

「沙都子？」

「っ！　なんでもないのですよ！！」

沙都子が色を変えつつある空を見上げたままボーっとしていたのだが、どうしたのだろう？

番外編・弐（後書き）

アーティファクトを出すことに決定しました！

まだまだ先の話になると思いますが……

アーティファクトは主にネタに走ることにしました。

番外編・参（前書き）

すいません、少し遅れました。

テストやらなんやらが忙しくて。

※今回ひぐらしの重大なネタバレを含みます。

引き返すなら今です。

番外編・参

遠くから聞こえる爆発音。空に広がる白い煙。それは始まりの合図。

「始まったようですね」

「……」

村を見下ろせる高台。背後に控えるは、先日京都の主に連絡をとって寄越してもらった関西呪術協会の工作任務を専門とする術者。その数総勢五十八人。

本来であれば東の魔法使いに対しての活動が主だが、今回は前もって本山がある程度の荒事も想定していたらしく、即時活動可能だった潜入工作部隊、強行偵察部隊、あとはごく少数の戦闘要員。

皆術者ではあるが、近衛木乃芽の直轄部隊である彼ら彼女らは全員が火器を携帯し、またその扱いも習熟している。麻帆良の行政すら完全に支配下におく己の父に対する切り札の一つとして木乃芽が組

織したこの部隊は、全体の約半数がこの地に来ていた。
長直轄なだけあり、非常に優秀。連絡をとったのが夜であったのに、次の日の朝には近隣の市町村に到着していた。
電話で対応した木乃芽曰わく、残りの半数はまた別の所にやっていて動かせないそうだが、十分すぎる。
それと、今回の指揮権は自分が持つことになったらしい。

「敵の現在位置は把握できているのですか？」

「……はっ」

自分のすぐ後ろ。部隊の副長である女性が短く答える。女性としては少し高めの背に、肩で揃えられた髪。少したれ目な彼女は他の隊員と同じ登山者のような服装をしている。
なお、本来の隊長は別件の方で動いているらしい。

「では昨晩の打ち合わせ通りに動きます。一班は私と共に少女達の援護に向かいます。二から五までの各班は鷹野三四配下の敵対勢力

の捕縛及び無効化。六班と七班は集まっている村人、及び土地の浄化。術は穏行のみ認めますが、他の術も必要に応じて各班長が許可をだして結構です。
それでは現時刻をもって活動を開始。秘匿には十分に気を払ってください。特に、六班と七班は村民に見られないように。……行きなさい」

「はっ」

二班から七班まで、五十人が一斉に動き出す。志津真は、六班と七班、特に土地の浄化を担当する七班に期待していた。

あの日、梨花という少女から聞いた情報の中で、特に興味をひいたのが祟りの正体と雛見沢症候群についての二つ。

梨花が言うには、祟りの正体は鷹野三四…雛見沢症候群の研究者が、研究の為に部下を使って行っていた事だそうで、そのことは共犯である入江京介からも証言はとれた。

では雛見沢症候群とは？　なんでも脳に寄生する寄生虫らしく、雛見沢の風土病で空気感染するらしい。この病気は人の不安や不信がきっかけで発症するらしく、雛見沢を出ても効果は消えないそうだ。

村人は集団意識が強いため、普通はあまり発症しないそうで、女王感染者という存在である梨花も村人の安定につながっているらしい。

非常に珍しい病気。それも、空気感染する寄生虫。予防接種である程度防げるという話だが、そもそもそんな寄生虫が本当にいるのか？

それは本当に寄生虫なのか？

気になったのはそこだった。

この村に来てから感じていた強い人の念は村人の集団意識やよそ者に対する敵対心で説明がつく。

しかし、もう一つの体にまとわりつくような、体を浸食するような不快な物の正体が何なのか、それがわからなかった。

もし仮にそれが寄生虫だというなら、人の身でない自分にすら影響を与えようとする存在がただの寄生虫で済ませられるような物なのか？

ここである考えが浮かび、角を持つ少女、古手羽入に聞いてみた事がある。

雛見沢、当時の鬼ヶ淵に来たのはどれくらい前なのか？

言いづらそうにしていたが、返ってきた答えは、約千年前。

当時は彼女の一族に対する強い偏見と差別があり、最終的に彼女が自身を犠牲にする形でなんとか落ち着いたそうだが、完全には消えなかったらしい。

この話を聞いて、ひとつの仮説をたてた。

曰わく、雛見沢症候群の元凶たる寄生虫は、今も続く非常に強い排他的な集団意識、人の念が生んだある種のコ毒のようなものではないのか、と。

昔は今と違って、人の知らない世界はそれだけである種の異界だった。険しい山や荒ぶる川、深い海には神が宿るとされ、光のない夜

の世界では人に仇なす魔性の物がいると信じられた。

そんな世界では人の強い意志や念、言葉遊びでさえも何かを形作る。怨みや嫉妬といった負の感情は祟り神や、場合によっては無から鬼さえ創り出すことすらある。

これだけ整った環境で、何も生まれない方がおかしいのだ。

故に、感染しているであろう村民と、念がしみこんだ土地を一度に祓い、浄化する。

上手くいくかはわからない。寄生虫が妖怪の類だという確証はないので、念を祓ったところで寄生虫は消えないかもしれないが、それでもやらないよりましだろう。

「ではそろそろ行きましょう。一班、私についてきなさい！」

「はっ！！」

野山の中を、黒い影が駆け抜けた。

――――

「と、意気込んできたものの、この分だと手助けなどいらなかったかもしれませんね」

「……」

少女たちの行動力にやや呆れつつ、ため息をつく。副長が使う双眼鏡の向こうでは、プロの部隊である山犬が少女たちの罠にはまって次々と撃破されていく。

おかげでこちらの仕事が気を失った敵を拘束するだけになってしまった。どうやら少女たちの仲間の中にはずいぶんと優秀な罠師がい

るらしい。

――ザザッ――

『こちら二班の四、新たに山犬をほかくぁああ！？』

「二班の四？　返事をしない、四？　おーい……またか」

というか、優秀すぎる。今の通信で、こちらの人員が引っかかるのは六人目。友軍の罠に引っかかるなど何をやっているんだか。

そのせいで後ろの副長が怖い。

「二班各員、四の救出を。周囲の警戒を怠らないように」

『はっ！』

どうやら思った以上にことは上手く運んでいるらしい。

この分だと、自分は動かずともいいかもしれない。そんなことを思い始めた時だった。

「……！　志津真様！」

双眼鏡で周囲を見渡していた副長が声をあげたのは。

――――

「は、放しなさい！」

「だ、れ、が放すか！　てこずらせやがって！」

「きゃ…！」

北条沙都子は山犬の隊員の一人に捕まっていた。原因は油断。完全に気を失ったと思っていた敵のひとりが、気を失ったふりをしていたのだ。

「この雲雀の１３番をさんざんコケにしてくれたんだ。覚悟してもらうぜ」

「あっ、かっ……！」

首を絞められ、呼吸ができない。必死に男の手に爪をたてて抵抗するが、男はなおも力を込め、徐々に意識が遠のいていく。

「ははっ、殺しはしねえよ。お優しいお前の仲間のこった。お前を人質にすれば簡単に降伏してくれるだろうよ」

「……！」

人質。その言葉に、よりいっそう強く抵抗する。せっかくここまで来たのに、自分のせいで全てが台無しになってしまう。

それだけは、いやだ。

ねーねーにだって迷惑をかけた。

にーにーにだって、まだ会えていない。

まだ、私は……

「おら、もう眠りな」

私は……！

「その手を放しなさい」

――

「げほっ、ごほっ…。けふけふ…」

「大丈夫ですか？」

「あり、がと…けふっ」

「これを」

「けふっ、んぅ…」

激しく咳き込む少女に水筒をわたす。中身は水ではないが、人に害のある物ではないので問題はない。

「落ち着きましたか？」

「ん……はい」

先ほどまで沙都子の首を絞めていた男は、少し離れた木に半ばまでめり込んで気絶していた。

瞬動と翼による飛行を使った急加速。その勢いを叩き込んだのだから、無事なわけはないが、死んではいないはず。

「ありがとうございます。助かりましたわ」

「いえいえ、無事で何より。ん？」

少し離れた所から、副長が駆け寄ってくる。

「志津真様、四班がこの山に接近するヘリを確認。既に降下を始めたようです」

「敵の増援ですか？」

「不明です。ただ、現在穏行を使いながら監視に回った四班からの報告によると、強力な火器で武装していること。山犬と敵対していることの二点は確認できたそうです。いかがいたします」

「……六班と七班は？　浄化はすんでいるのですか？」

「はっ。今は集合予定地にて待機していると先ほど連絡がありました」

……ふむ。

一つ頷いて、トランシーバーを手に取る。

「……現在行動中の各班員に連絡。我々は即時撤収します。各員は予定地に集合。くれぐれも新勢力に見つかって交戦などしないように穏行を徹底。繰り返す、新勢力には見つかるな、以上」

隊員にに指示を出し、副長を見送ってから少女に向き直る。

「さてお嬢さん」

「沙都子です」

「はい？」

「沙都子ですの。ちゃんと名前で呼んでくださいませ」

「……では沙都子さん。どうやらこの作戦はあなた方の勝利で終わりそうです」

「そのようですわね」

「我々は撤収します。お仲間と合流するまでは、くれぐれも油断しないように」

「わかってますわ。先ほどよーく理解しました」

「ならいいのです」

翼に風をはらみ、ふわりと宙に浮く。少なくとも部下の撤収は見届けなくてはいけないから。

「……あの」

「ん、なんです？」

沙都子はうつむいていたが、迷いを振り払うように頭を振ってこちらを見上げた。

「また、いつか会えますの？」

それに、志津真は答える。

「まだ二、三日は滞在します。綿流しにでも会えるでしょう」

「あ…」

最後に沙都子に微笑みかけ、空へ飛び立つ。

沙都子はしばらくそれを眺めていたが、やがて意味深な笑みを浮かべて、仲間が待つ方へ駆けていった。

番外編・参（後書き）

今回でてきた木乃芽さん直轄部隊、何か良い部隊名ありませんかね？

いいのが思いつきません。

感想に送っていただけると嬉しいです。

また、それを採用させていただいた場合、その方の名前を次回の前書きに書かせていただきます。

番外編・終（前書き）

部隊の名前は、鈴鹿様の“木乃根”に決定しました！！

ご協力ありがとうございました！！

番外編・終

昭和５８年、１９８３年7月１３日

関西呪術協会本山、その最奥部にある近衛木乃芽の私室、その付近の廊下に二人はいた。

一人は近衛木乃芽、もう一人は黒兎セイ。もう随分と暑い季節になってきたが、それでも夕方になれば気温もぐっと下がって涼しくなる。

傍らに蚊取り線香を置き、二人とも浴衣姿でうちわを扇いでいた。

「とまあ、以上が今回の顛末になりますかねぇ」

「ふ～ん…」

ぱたぱたとうちわを扇ぎつつ木乃芽はセイの話を聞いていたが、話が一区切りつくと、うちわを扇ぐ手を止めた。

「なあ、セイはん」

「なんでしょう？　なにかご不審な点でも？」

「もしかして、うちら別に手助けせんでも良かったんとちゃうん？」

「かもしれませんねぇ。志津真の報告が確かなら」

「確かならて…」

げんなりとする木乃芽をよそに、セイはうちわを置いて蚊取り線香の横に置かれたお盆の上のスイカに手を伸ばす。

「でも、別にそれでも良かったんでしょう」

「…なんのこっちゃ」

「木乃根の残りの半分、東京に居たそうじゃないですか」

「ん～…。もう、かなわへんなぁ、セイはんは。どこで聞いたん？
それ」

頬に手を当てて愛嬌たっぷりに首をかしげる木乃芽。しかし目は笑っていない。

「内緒です」

並の者なら気を失うような威圧感をセイはどこ吹く風で受け流す。

自分を無視してシャクシャクとスイカを食べるセイに一人凄んでいる自分が馬鹿らしくなったのか、木乃芽もスイカに手をつける。

しばらく、夕暮れ時の本山にシャクシャクとスイカを食べる音だけが聞こえていたが、やがてセイがスイカを食べ終えると、おもむろに話しかけた。

「で、どうだったんです？」

「ん…何がやの？」

「東京ですよ。わざわざ部隊の半分を“囮”にしたんです。それなりの成果はあったんでしょう？」

「それなんやけどなぁ…」

木乃芽はスイカを皿に置いてふぅとため息をつく。

「まぁ、半分成功ちゅうところかな」

「具体的には？」

「魔法使いと関わりを持っとる政治家と役人の特定。数は思ったほどおらんかったけど、意外に高官が多てな。少し手間取った」

「ほう」

これにはセイも食いつく。政府の中に魔法使いとつながっている者が多いなら、麻帆良奪還に支障が出る。できれば知っておきたい情報である。

「で、そっちは良かったんやけどな、もう一個の方はまるであかんかったわ」

「……何させてたんです？」

「……東京地下の第一次世界大戦の戦時中に秘密裏に作られた地下鉄道網、及び地下水道網。そのどこかにある秘密基地と、秘密兵器の設計図探し」

「馬っ鹿じゃないんですか」

「はうっ」

ずーん、という音が聞こえそうなほど木乃芽は落ち込んでしまった、

「それ隊長にも言われたわ…」

「当然でしょうね。で、何かありましたか？」

「鉄道と水道は見つかったんよ？」

「設計図は？」

「……荒唐無稽なモンしか見つからんかった」

「でしょうねぇ」

「うぅ…」

なんとなく、気まずい空気が流れていた。特に木乃芽には辛い空気。

「そ、そや。そういえば報告までに随分かかったやないの。志津真はんもまだ帰ってきてない言うし、いつ帰ってくるん？」

「ああ、それなら遅くとも今日の夜には着くという話なんですが…」

ちょうどそのとき、この離れに歩いてくる巫女さんが一人、二人の位置から見えた。

その巫女さんは木乃芽に近づいて何事か囁くと、もと来た戻っていった。

「なんだったんです？」

「志津真はん、帰ってきたそうなんやけど…まぁ行った方が早いな。うん、いこか」

「？　ええ」

そして、二人は浴衣姿のまま歩き出した。

――――

そこにあったのは、予想だにしない光景だった。

「主、ただいま帰りました」

一人は、出発したときとなんら変わらぬ姿の志津真。夏なのに真っ黒で暑苦しいことこの上ない。

だがそれはいい。まだいい。問題は、その隣。

志津真よりもずっと小さな背丈。金色の髪に茶色の瞳。

「北条沙都子と言いますの。今日からこちらでお世話になりますわ！」

恋に燃える一人の少女が、小さな身体に大きな決意を秘めてそこに居た。

番外編・終（後書き）

今回の最後の部分について、言いたいことは皆様多々あるでしょうが、余りキツいことはかかないでもらえるとありがたいです。

今作者がちょっとリアルの事でへこんでるので。

第三十五話・ぬらりひょんへの反抗（前書き）

今朝起きたら九時すぎだった。

学校は九時からだった。

まさか現実で三十秒で支度する日が来るとは……

第三十五話・ぬらりひょんへの反抗

「……」

さく、さく、さく、さく。

雪を踏む音。

冬の京都。ここ関西呪術協会の本山にも雪が降り、世界を一面の白に染めている。

その本山で雪を踏みしめながら会話もなく山道を歩く数人の人影。

やがてそれらは本山の中にある建物の前で止まると、戸を叩いた。

すると、すっと戸が開き、人影がするりと中に体を滑り込ませると、戸はまたすぐに閉められた。

部屋の中には既に数十人の人間が居て、中央の囲炉裏を囲み座っており、それらの視線が新たな来訪者の方を向いていた。

そこにあるのは怯えと恐れ。皆一様に警戒しているようだ。

「皆、そろっているようですね」

今入ってきた人々の先頭、セイがそう言って頭に被っていたフードを取ると、部屋の中で幾つもの安堵のため息が漏れた。

今この場にいる人間は誰もがそれ相応のリスクを背負ってこの場にいるのだ。

性別も年齢層もばらばらだが、全員が関西呪術協会に所属している人間で、とある“問題”について話し合うためにこの場に集まっている。

「ああ、セイはん。やっと帰ってきてくれはった…！」

囲炉裏の近く、この場にいる中でも実力者の一人、青山鶴子が感極まったように立ち上がった。

「ええ、ここ何年かずっと南米にいましたからね。もっとも、地下に潜ってばかりで日に焼けることはありませんでしたが」

「そら、セイはんらしいわ。千草ちゃんに沙都子ちゃんも背ぇ伸びたみたいやね」

「当然ですわね。でもまだですわ。私は志津真さんの隣に立たなくてはいけないのですから」

「ぷー、志津真のおじさんよりとーさまの方がかっこええモン」

「ふふ。二人とも、ケンカはあかんえ。それでセイはん、その子がそうなん？」

「ええ、そうですよ」

鶴子が、さよが胸に抱く赤ん坊を指す。

「この子が私とさよさんの子供、煌（こう）です」

「さよか…」

「……ええ」

おめでたい話であるのだが、室内の空気は重い。協会ないでも結構慕われている二人の子供なのだからもっと明るい空気になってもいいのだが、そうはならない。

それほどまでに彼らにとって今回の“問題”は大きいのだ。

南米にいたセイ達をわざわざ呼び戻すほどに。

「それでは、そろそろ説明していただきましょうか」

その、問題とは――――

「手紙にあった、木乃芽さんの急死。それに伴う無理矢理な最高幹部会の人事、そして東との融和政策について」

Ｓｉｄｅ，セイ

南米で古代の技術を求め、遺跡を調査すること数年。調査はそれなりの成果を上げていた。

主に暦と星の運行に関する術、自然に関する術式を見つけることができたが、いずれも扱いは難しそうなので使用はしていない。

それと、なにより嬉しいことが、さよさんとの間に子供ができたこと。

本当は少し怖かった。自分のこの身は人からかけ離れている。さよさんも私ほどじゃないにしても完全な人じゃない。

そんな私たちでは、子供など出来ないのではないか、そう考えていた。

だから、妊娠がわかったときはそれはもう嬉しかった。

当然表の病院は使えないので、裏の病院を使うことになったが。

闇医者の女性が『まさかこの病院で出産するやつがいるとはねぇ』と言っていたのも覚えている。

まぁ楽なことばかりではありませんでしたが。

たとえば、南米まで千草ちゃんと沙都子ちゃんが志津真と一緒にやってきたときは参った。

ある日突然に仮の拠点にしていた家に上がり込んでアイスクリームを食べていたのだから。

他にも、沙都子ちゃんが密林にトラップを仕掛けすぎて軍が出ばってきたり、千草ちゃんが遺跡奥の翡翠の柱に触ったらそれが光って、封印されていた半裸の女性の姿をした神様が復活して、それを巡ってナチの残党と戦ったり。

そんなおり、東京から届いた木乃芽の訃報を知らせる手紙。そこには本山で政変が起きた事が書かれており、なるべく早く帰国してほしいとも。

それで南米での拠点を処分して日本に帰国したのだが、話を聞いていると怒りを通り越して呆れしか浮かんでこない。

まず木乃芽さんの死については、どうも産後の肥立ちが悪かったらしく、暗殺などでは無いらしい。産まれた女の子の赤ん坊、木乃香ちゃんというらしいが、その子の多すぎる霊力も影響したかもしれないそうだ。

次に、人事と融和政策についてなのだが……

「青山、いえ、近衛詠春？　なぜそこで彼の名前が出てくるのです？」

近衛詠春。旧姓、青山詠春。紅き翼の一人で、神鳴流を扱いサムライマスターの異名を持つ。

木乃芽さんと結婚していており、紅き翼のメンバーの中で唯一、木乃芽さんのとりなしで和解している人物である。

あくまで一応ですけどね。

「じつはな、今詠春はんが長やっとるんよ」

「は？　いや彼剣士ですよね？」

「うん、そうなんやけど…」

「……嘘ですよね？」

「残念ながら、ほんまなんよ」

周りの術者を見回すと、皆一様に顔を伏せるか目をそらす。信じら

れないが、どうやら本当のことらしい。

「…何故に？」

「東のくそじじいが細工しよった」

「ぬらりひょん、ですか」

「そや、あのクソ爺や！」

「西を裏切ったくせに…！」

周りの術者が口々に声を上げる。どうやら随分と嫌われているらしい。

「やかましいわっ！　今そないなこと言うたかてどうにもならんのはわかっとるやろうが！！」

鶴子さんの喝が飛ぶ。若いのに大したものだと思うが、赤ん坊が居るのだから少しは自重してほしい。

まぁコウは泣くこともなくすやすやと眠っているからいいのだが。

「とにかく、今は最高幹部会が問題なんや、それをどうにかせなあかん。詠春はんは何だかんだ言うて魔法使いと敵対したがらん。神鳴流の橘師範と九州総轄の狭雲さんは去年引退してもうた。それに加えての今回の最高幹部入れ替え。今の最高幹部はろくに機能しとらへん」

「左。今の最高幹部会は近衛右門に懐柔された、あるいはもともとの魔法使いとの融和派が多い。正直、そこで一度決定されてしまえば覆すのは難しい」

「そこで、セイはんの出番や」

鶴子の言葉に、一斉に視線がこちらを向く。

「セイはん、なんとかして」

「なんとかって、情報が足りなすぎるでしょう！　もっとしっかり情報ください！！」

――――

「なるほど……」

鶴子さんや他の人たちの情報をまとめると、どうやら今の関西呪術協会最高幹部会の長を含めた十九席の内、十一席が融和派、あるいは融和派よりの中立派らしい。

はっきりと融和政策に反対しているのは残り八席の内、対魔法使い最前線の各地域を担当する幹部四人と、大戦で亡くなった天ヶ崎さんと親しかったという四国の幹部、そして神鳴流枠の鶴子さんの計六人。

残りの二席は、天ヶ崎家の枠を持つ千草ちゃんと、千蔵さんの席を継いだ私ということのようです。

人事が入れ代わったのになぜまだ反対派が多いのか、それに自分の席が残っていたことについて訊いてみると、どうやら裏工作はあったらしい。

しかし、近畿圏はもともと近衛右門を嫌う者が多い上に、大戦でかり出された人員の数が本山についで多かったころから失敗したそうだ。

私の席の取り上げについては、中立派だけでなく融和派も反対に回り実行できなかったとか。

さすがに融和派も馬鹿ではなく、私という強力な戦力を失いたくなかったようです。

と、ここまでが最高幹部会。では中級幹部から下はどうなっているのかというと、これがまたほとんど反対派。全体的に東に近づけば近づくほど反対派が多くなるようだ。

これだけの状況でなぜ反乱が起きないのかというと、入れ替わりで最高幹部になった術者もそれなりの腕を持つ上に、実力が段違いの詠春がいること。

さらに、ぬらりひょんが魔法協会を通じて『詠春殿は魔法世界の英雄、紅き翼の一人なんじゃから、何かあったら本国ともども介入するぞい』なんて書簡を送ってきたらしく、下は動くに動けなくなっているそうだ。

で、ここにきてやっと私達が帰ってきて、最高幹部会の比率が賛成派十一席、反対派が八席となった。

え？　もちろん私と千草ちゃんは反対派ですよ。融和なんかされたら関西に居る意味がなくなりますし、関東魔法協会の邪魔をしない理由がありませんから。

関西呪術協会の最高幹部会は、実は多数決制ではありません。最終的な決定権はありますが、長があんまり勝手なことをした場合、地方が協会から離反したりするんです。

元々関西呪術協会は関東魔法協会に対抗するために西日本の組織がまとまってできた組織ですから、当然といえば当然のこと。

今回はそれをすれば個別に東に潰されるのが目に見えているからしないだけ。

「中立派を巻き込んでも、長が詠春である限りは余り意味がない、か…」

おそらくは、詠春は幹部全員が反対派になっても融和政策をとろうとするだろう。あれの中では、肩を並べて戦った魔法使いとの思い出が大きすぎる。

「なんとかならへん？　セイはん」

「……東との境界にある地域を管轄する幹部は、確か全員反対派でしたね？」

「そやよ。ここには来とらんけど」

できなくは、ない。しかし、本当はもっと時期を見て使う予定だった計画なので、準備が完全にはすんでいないかもしれない。

しかし、もともと麻帆良の魔法協会へ圧力をかけるために用意した計画。現状ではある意味最高の策とも言えるが……良し。

「わかりました。では鶴子さん、耳を貸してください」

「ん、ええよ。何するん？」

「それは……」

――

「セイはん、本気か！？　そないなことほんまにできるん！？」

ああ、やはり驚いていますね。

周りの術者たちもすわ何事かと目を剥いています。

「もちろんです。うまくいくかはわかりませんが、その幹部の方々には――――という事にして、口裏をあわせておいてください」

さて、私も動かねば。

まったく、日本に帰国してすぐだというのに休む暇もない。

早速連絡を取らなくては。

――数日後――

Ｓｉｄｅ，近衛右門

「学園長、大変ですっ！！」

「フォッフォッフォッ、どうかしたのかの？」

学園長室に、ここ麻帆良学園の魔法先生が一人駆け込んできおった。

まったく、いったいどうしたんじゃろう？　よもや、本国から急に監査でも入ったかの？

だとしたら不味いのう。

ま、西が何か仕掛けてきたということはあるまい。
今はもうあのじゃじゃ馬娘もおらんし、なんといっても婿殿を長にすることに成功したからの。

こうるさい最高幹部会にも、どうこうできるような骨のある奴はおるまいて。

フォフォフォ。

「東日本の旧土着勢力が集まって、新しく関東“呪術”協会を設立したと裏の世界に声明を出しましたっ！！」

「なっ、なんじゃと！？」

ば、馬鹿な！！　完全に潰れておったはずの東の土着勢力が、決起したというのか！？

「既に関東以外のこちらの拠点とは連絡がとれません！！　学園長、指示を！！」

———関東“魔法”協会の、眠れない夜が始まった。

第三十五話・ぬらりひょんへの反抗（後書き）

今回、いろいろやってしまいました。

よくも悪くもなるべく原作にそってやるのが基本の私の初めての大原作ブレイク。

でもちゃんと原作にはつなげられるから大丈夫です。

まだ麻帆良学園都市を制圧したりはしないのでご安心ください。

第三十六話・西と東とそれから東（前書き）

今回は戦闘はないです。すいません。

でも次回は多分ありますよ。

関東呪術協会の活躍があるかも……？

第三十六話・西と東とそれから東

日本、某所。

いずことも知れない深い場所。

社会の闇に紛れるようにして存在するその場所は、日本に数ある酒と料理を出す店の一つだった。

ただし、ここは一般的な店ではない。

ごく限られた者たち。それも、裏の世界のさらに奥、闇の世界に属する者が好んで利用する、一つの中立地帯のような場所である。

ここは大きなカジノが併設されている訳ではない。

女を扱っている訳でもない。

違法な薬物などの持ち込みも禁止されている。

オーナーの方針で、そういった事は全て禁止されているのだ。

そして、それを裏の世界で通すだけの力が、この店のオーナー、そして従業員にはある。

例をあげるなら、昔様々な理由からこの店にとある会社の私設部隊が突入してきたことがあった。

しかし五十人いた私設部隊は、全てフロアスタッフによって撃退、鎮圧された。

そんな物騒な店員がいるこの店が扱っている物は、美味い料理と酒、希望があれば菓子や珍味。

さらに副業として裏の情報に刀剣や銃火器。もっとも、これはオーナーに店を任せられている店長が気に入った者だけだが。

そして、店内にいる間の絶対的安全。これがあるからこそ、この店は裏の世界で確たる信用を築けたのだ。

その店内が、異様な空気に包まれていた。百戦錬磨の従業員の中にさえ、その空気にのまれている者がいるほどだ。

原因は、店を貸し切った三つの組織。

一つは関西呪術協会。

西日本をまとめる一大組織で、近年は関東魔法協会に押されがちだが未だに政府などにも大きな影響力を保つ日本の土着勢力のなかでは最大級の組織でもある。

次に関東魔法協会。

明治初期に日本に進出を果たした魔法使いの組織。

日本に進出するにあたり土着勢力の抵抗にあったが、魔法世界のメセンブリーナ本国の膨大なまでの物量でそのことごとくを排除してきた歴史があり、そのまま今に至る。

近年では魔法世界の大戦の影響で関西との関係が急速に悪化している。

最後に、関東呪術協会。

つい先日突如としてその存在を発表し、国内外問わず裏世界に大きな衝撃を与えた組織である。

その構成組織は既に滅んでいたか壊滅したと思われていた組織で、この一週間で東日本の大部分を掌握しており、各地にあった関東魔法協会の小規模な拠点や構成員の多くを制圧、確保している。

別にこの程度なら、この店で働く者からすれば珍しいことではない。

この店の常連には裏の世界で名のしれた賞金首に賞金稼ぎ、傭兵やどこかの組織のボスなど数多くの実力者が数多くいる。

問題は、今この場にいるのが各組織の長三人を含めて、全員が二つ名を持つような、組織の重鎮と言えるレベルの大幹部であることだ。

そこらの組織のボスを軽く上まわるような実力者が五十人以上集まっているのだ。

それも、長以外は一触即発といった空気。

店側でも、今回は店長、料理長、フロアチーフといった実力者に加えて滅多に店に顔を出さないオーナーまでもがそろっている。

今回、オーナーは進行役として動くことになっている。

今から始まる会談の結果如何では、裏の世界で大きな変遷がおきうる可能性もある。

この場にいるのはせれだけの面子。司会進行には中立な人物が望ましいのだ。

そして、多くの人間の未来を左右する会談が始まる。

Ｓｉｄｅ，セイ

「……そろそろ、始めてもいいだろうか」

「待ってもらいたいのう」

ふわふわとした金髪に翡翠の瞳、透き通るような白い肌を持つ美少女、オーナーが始めようとしたら、いきなりぬらりひょんが遮りま

した。

まだ始まってすらいないというのに、何を言うつもりですかね？

「今回、どの組織も自分の組織に属している者のみ参加を認め、助っ人などは認めんと聞いたのじゃが、なぜそこに部外者がいるのかのう？」

ん？　なぜ私が見られてるんです？

「わしの記憶が正しければ、暗辺殿は前の長によって決められた特別顧問じゃろう？」

「……ええ、そのとおりですが、それが？」

「長の一存で決められたなら、長が変わった今、再びその是非を問うべきだと思うんじゃがのぅ？　その辺りはどうなんじゃ、婿殿？」

「ふん、馬鹿馬鹿しい。その件については既に結論が一度……」

「…私は、ふさわしくないと考えます」

詠春の一言に、ぬらりひょんの言を否定していた幹部が立ち上がる。

「長、何を!?」

「そうだな、私たちが選んだ訳ではないからな」

「貴様ら…!!」

……やられましたね。わたしの席の取り上げに反対していた幹部たちが賛成に流れています。

ぬらりひょんめ、裏で動きましたか。

今も反融和派が詠春に取り合っていますが、最初から腹を決めていやがったようです。

詠春はまったくとりあいません。

まぁ、関西の融和派の中心なんですから、当然といえば当然ですか。

しかしぬらりひょん、このまま終わるとは思っていませんよね…？

「ほっほ、最高幹部でないのなら、ここにおる資格はないのう……」

「…っ、貴様ぁ！！」

「何を怒るんじゃ？　条件を設定したのはそちらじゃと聞いておるが」

「ぐっ…！！」

関西の幹部がぬらりひょんに噛みつきましたが、受け流されました。
やはりこのぬらりひょん、一筋縄ではいきませんか。

「とーさまぁ…」

千草ちゃんが、不安そうに私を見上げていました。

……だめですね、こんな小さな子に心配させてしまうとは。

「大丈夫ですよ、千草ちゃん。私はまだどこにもいきません」

「ほう？」

ぬらりひょんが方眉をあげました。私に何か打つ手があるのかどうか推し量っているようですね。

「どうするのかの？　今から関東呪術協会に移るというのは流石に認められんぞ」

ぬらりひょんが言ったことを無視し、席を立つ。

そしてそのまま関東呪術協会の側に椅子を持っていき、座る。

「……わしの話を聞いておったか？　今から移るのは…」

「何か、勘違いしていませんか？」

「ほ？」

「私は、“最初から”関東呪術協会の人間ですよ？」

「「「「なっ！？」」」」

関東呪術協会以外の二つの陣営の全員が、勿論関西の反融和派を除いてですが、驚いてますね。

「待たせましたね、石呼壬(いしこみ)殿」

「いえいえ、なんということはありませんぞ……長」

「なんじゃとっ！？」

ふっふ、流石にぬらりひょんも驚いているようです。

関東呪術協会、私が暫定的な長なのです。

関東の土着勢力をまとめたのが私だから、という理由で何人かの幹部クラスに推薦された、というより押しつけられました。

最終的には合議制に持っていきたいんですが、今は急場ですからしかたありません。

それに、本当はこの関東呪術協会だってあと十年はあたためておく予定の計画だったんですよ？

世界樹の大発光までかなり期間がありますから、目立ちすぎるんですよね。動かしづらくなりますし。

それで石呼壬の長に長代理を頼んでいたのですが…ぬらりひょんのせいでおじゃんです。

ま、ぬらりひょんの悔しそうな顔を見られたのでよしとしましょう。

「馬鹿な！　わしらは石呼壬殿が長じゃと聞いておるぞ！」

「勘違いをしていただいては困りますな。私は発表の中で確かに“組織をまとめる立場にある”としましたが、私が長だとは一言も言っておりませんぞ」

「それは詭弁じゃ！」

「詭弁で結構、なんら嘘はついていない。そちらが勘違いしただけですな」

「ぐぬぬぬ……！」

「……始めてもかまわないだろうか、近衛殿」

「…わかった」

ま、とりあえず前哨戦には勝ったというところですか。

「では、あらためて始めたいと思う。私は、今回は関東呪術協会が今後どう動くのか。
また、それにたいする関東魔法協会及び関西呪術協会の対応についての“話し合い”だと聞いている」

燕尾服に身を包み、丸眼鏡を付けた執事のような少年、フロアチーフから書類をうけとったオーナーが話を進めます。

フロアチーフは一見するとただの少年のようですが、噂によると優秀な影使いらしい。

やはり会談の場所をここに指定して正解だったようですね。この店なら正義正義とうるさい奴もそんなに無茶は……

「我々メガロメセンブリアは関東呪術協会にたいして即時の捕虜の返還と組織の解散を要求する！」

……するんですか。しかし流石にぬらりひょんが哀れです。頭かかえてますね。

いくら腕がたつからといって交渉のいろはをしらない馬鹿を連れてきたのだから自業自得とも言えますが。

しかし、メガロメセンブリアですか。

「なぜメガロメセンブリアの方がここに？　近衛殿、説明していただきましょうか」

私の代わりに石呼壬の長が問いただします。当然ですね、人に言ったくせに自分たちは連れてきているとはどういうことでしょうか。

「……麻帆良に限らず、各地の魔法学校はメガロメセンブリアの下部組織じゃ。上位組織の人間がおってもおかしくはあるまい」

ふむ、すじが通っていない訳ではない、か。

「いいでしょう。オーナー、進行を」

感情のこもらない目で事態を見ていたオーナーに、進めてくれるように促す。

聞いた話によると、可憐な少女に見えるオーナーは実はこの店でも最強の存在らしい。

「……関西呪術協会も、なにかあるのだろうか。あるならば、今の内に言ってもらいたいのだが」

こね問いかけに答えたのは詠春の一人ではなく、幹部の一人だった。確か京都の本山で総務を取り仕切る男で、この場に来てこそいるが完全な中立派、職務に忠実なタイプだったはず。

内容は、今回の件は関西呪術協会は無関係であること。長以下、最高幹部はこのことをまったく知らなかったこと。関東魔法協会と同じく即時の解散を求めることなどだ。

完全に棒読みだった。声もフラットで淡々と用意された文章を読み上げていた。

「では最後に、関東呪術協会のこれらに対する答えを聞こう」

……オーナーも負けず劣らず淡々としていますね。

こちらも感情の起伏が全くありません。私もこの店を知ってから数年たちますが、未だに笑ったところを見たのは数回程度ですし。

とにかく、まずは彼らの要求に応えましょう。勿論回答は決まっています。

「お断りします。そんなこと、我々が聞く道理がない」

「貴様！　われわれに逆らうというのか！？」

これに噛みついたのは、メガロメセンブリアから派遣された銀髪の男。

……逆らう？　当然ではないですか。そうでなければ、誰がわざわざ関東呪術協会など作るものですか。

「ええ、まったくもってその通りです」

あえて人を馬鹿にするような口調でいうと、銀髪の男が真っ赤になりました。が、なにか言おうとする前にぬらりひょんに止められました。

このまま余計な事を口にしてくれてれば楽だったんですけどね。

「即時解散は無理てしても、捕虜は返還してもらえんかの？」

「…それで、とは？」

「捕虜を返還したとして、何をくれるんです？」

「……組織の存在を認めるだけでは不服かの？」

「……論外ですね」

鼻で笑う。

「私達は、ただ奪われた自分達の土地を取り戻しだに過ぎません」

「もとを正せば、宣戦布告もなしに侵略し、土地を奪ったのはあなた達です」

「それを、認める？　舐めているのですか？」

「あなた方に認められる必要など、欠片もありません」

「私達の中では、まだ何も終わっていないのですよ？」

「その上で、捕虜の返還を望むなら、相応の代価が必要に決まっているでしょう」

――さぁ、どうします？

「……戦争を、する気かの。勝てると思っておるのか？」

「上等です。やるというなら日本から叩き出して野郎じゃないですか。しかし、あなた方の敵は私たちだけではありませんよ？」

「そやね。戦るんやったらうちらも一緒や」

ざわり。

とある人物が声を上げた事によって、それを前もって知らなかった融和派の幹部たちがざわめき始める、

「……鶴子さん、本気で言っているんですか！？」

「悪いな、詠春はん。うちら反対派七席はセイはんに付かせてもらうわ」

「そんな……いったいなぜ！？」

「それをわかっとらへんから、うちらはセイはんに味方すんねん。なぁ詠春はん、あんたは大戦に行って変わってしもたわ」

「そんなこと……」

「ないとは言わさへん。昔の詠春はんなら、少なくとも無理やり最高幹部会入れ替えたりなんかせぇへんかったはずや。今の詠春はん個人についていくんは本山以外の世界を知らん神鳴流の若い奴らくらいやで。それにも気づいてへんのやろ？」

……詠春がうなだれていますが、口は挟みません。あれは下の者に耳を貸さなかった彼が悪い。

彼も根はまともなんですから、今回の事で目をさましてくれればこれからにも期待できるんですが……

「ま、交渉はいつでも受け付けていますよ。よく考えてください」

私が立ち上がったのにあわせて、関東呪術協会及び関西呪術協会融和政策反対派が立ち上がる。

「ま、待たんか！」

「待ちません。それでは」

関東魔法協会から多額の金銭と引き換えに捕虜の返還要請が、関西呪術協会からは離反した八人の最高幹部に対する最高幹部会への再

就任の要請がそれぞれ関東呪術協会に届いたのは、この会合から三日後の事だった。

第三十六話・西と東とそれから東（後書き）

今回は実は微妙にクロスだったのです。

このお店のオーナーやフロアチーフはとあるラノベが元なのですが、わかる人がいるのでしょうか？

いたらその人はきっと同志だと信じたい！

第三十七話・関東呪術協会の愉快な幹部達（前書き）

今回は未成年者の飲酒を思わせる場面がありますが、話の構成上外せないのでご容赦ください。

また、未成年者の飲酒は法律で禁止されています。実際には飲まないでください。

……あとがきも見てね！

第三十七話・関東呪術協会の愉快な幹部達

「……む」

遠くから聞こえた爆音に、横たえていた身体を起こす。

布団を脇に除け、隣で眠る妻を起こさないようそっと立ち上がり、服を手に取る。

帯を締め、羽織を纏い、短刀を腰に差す。

それから、己の妻、さよの頭を撫でてから部屋を出る。

戸を音もなく開き、そして閉めた。

――――

関東呪術協会仮本部。

現在は関東魔法協会からぶんどった資金で正式な本部を用意している最中であるために仮の本部となっているこの場所は、関東呪術協会の幹部であり協会の参加組織の一つでもある古郷善一郎(ふるごうぜんいちろう)が経営する旅館です。

善一郎さんは悪い人では無いんですが、何分無類の酒好きで、今回も『あのにっくき魔法使いにしてやったわ！　めでたい！！』と宴会を開くと言って聞かず、鶴子さんや石呼壬の長、他の幹部も反対しなかったので結局宴会をすることになりました。

何か問題があるのかって？　ええ、一つには今も断続的に続くこの爆発音がそうです。酒をかっくらって寝た結果、むざむざ魔法使いの接近を許してしまいました。

多分今は見張の人たちが戦っているのでしょう。ここらは旅館以外は何もない辺鄙なところですから、敵も味方も、多少はでにやっても問題ありません。

え…他の問題？

……私、実は酒はそれほど強くないんです。弱くはないんですが、まぁ人並みです。
だというのに、さよさんは私にさんざん酒を飲ませてから寝込みを……ごほん、やめましょう。
緊急時に司令部として機能するはずの広間、宴会場につきました。はやく指示を出さなくては。

すたん。戸を勢いよく開く。本来であれば机を並べて各員と連絡が取れるようになっている広間。しかし、そうはなっていなかった。

転がされたままの一升瓶。

浴衣のまま雑魚寝する幹部たち。誰もが名のある強者だというのに。

机の上には地図の代わりに食い散らかされた料理残骸が並び、鶴子に至っては酒瓶に抱きついて眠っているではないか。

自然とこめかみに青筋が浮かぶ。顔がひきつり、頬がひくつく。

「あなたたちは…！」

怒鳴り散らそうとしたところで、服の裾を掴まれました。見れば、裾を掴んでいたのは乱れた浴衣を直そうともせず寝転がったままこちらを見上げる少女が一人。

「……胸元がはだけていますよ、瀬乃宮嬢」

「長のえっち」

「怒鳴りますよ」

「ごめんなさい」

仰向けの状態から即座に流れるような動きで土下座状態に移行した少女にため息をつく。

この少女、瀬乃宮桃（せのみやもも）は幹部の中で最も若い。若干八歳で幹部などやっているのだ。

軽く感じる性格も実は演技で、本当の彼女は寡黙で理知的な切れ者だ。だからこそ幹部など務まっているのだが。

「…で、なぜ止めたんです？」

「だって、長ってば今までお楽しみだったんでしょ？　だったら他の人達も寝かせてあげよう……ごめんなさい悪かったです勘弁してください痛い痛い痛い痛い！！」

アイアンクローをかましてやると流石に静かになりました。マセガキめ。

「本当の理由は？」

「もう他の幹部さん達が四、五人行きました。古郷さんとか神里さんとか、後は七守のお姉さまも」

「……つまり、行かずとも決着がつくと？」

「そうです。あ、でもみんなほろ酔い加減だったから止めに行った方がいいかも」

「大丈夫でしょう。彼らだって大人です。限度はわきまえています」

「…ホントにそう思ってる？」

「…やはりまずいですかね」

「十中八九。昼間は白刃乃さんが沙都子お姉様と山の中に罠を仕掛けていたそうですし」

…どうしよう。凄く不安になってきました。後で見に行った方が良いですね。うん、そうしましょう。

……今すぐ行かなくて、大丈夫か？

――

山の中をひた走る。

やはり不安なので見に行くことにしました。

結論。

見にきて大正解でした。

「イーコーちゃーん！　殺しちゃだめですよーーーっ！！」

『わぁっかってるよーーーっ！！　今日は機嫌がいいから麻痺毒さぁーーっ！！』

最初に見つけることができたのは、幹部の一人七守（ななもりいこ）衣子。いつも拡

声器を持ち歩くポニーテールの女子高生。

麻痺毒だからいいという訳でもないと思うのだが、そこは彼女の個性なのだろう。まぁ、彼女の本来のスタイルからすればましな方ですか。

彼女の一族は、蟲使い。

特に彼女の場合は凄まじく型破りな術を使う。

曰わく、蟲怪使い。

今も彼女がいる場所は高さ十メートルほどの高所。

彼女は今、全長七十メートル近い大百足の頭の上にいるのだ。

この大百足、彼女のお気に入りなのだがなにせデカいので声が届きづらい。だからいつも拡声器を持っているらしいのだが、拡声器を持つと性格が変わってしまうらしい。

本来は礼儀正しいのだが、今は酒の力もあって非常にヤバいテンシ

ョンみたいです。
彼女、確か明後日学校があるって言ってたんですけど、大丈夫なんですかね？

「ほどほどにするんですよーー！」

『わかってるよーー！』

とは言いながらも、大百足で魔法使いを蹴散らしていく。規格外の巨大な蟲に気圧された魔法使いの散発的な魔法では、大百足に傷一つつけられない。

「他の人知りませんかーーーっ！？」

『白刃乃さんなら派手だからわかるんじゃないかなーー？』

「げ…。わかりました。適当な所で切り上げるんですよーー」

『はぁーーいっ！』

……さて、次にいきますか。

『さぁて……やっちゃうぞぉおおーーー！！』

――――

私も大戦でいくつもの死線をくぐり抜け、その中でアクの濃い奴らとの出会いもありました。主に赤毛のバカとか。

そんな奴らに勝るとも劣らない変人が、今私の目の前にいる人物です。

名を、白刃乃（しらばの）。古い家柄がほとんどの関東呪術協会において、唯一といっていい科学者にして正体不明で経歴不詳な存在。

それが姓なのか名前なのかもわからない怪しい人物だが、石呼壬に居候していたのがいつの間にか幹部になっていた。

主に石呼壬の長の推薦で。

いつも黒いスーツの上から白衣を身につけ、白い包帯と白いハンチング、白いロングマフラーという重装備で顔もわからないが、体型からかろうじて女性であるということがわかっている。

「や、長」

「どうも。あいかわらず派手ですね、白刃乃さん」

「そう？　これは結果としてこうなっただけだよ？」

「……機能美の追求でしたか？」

「うん」

彼女が座っているのは、呪術協会という名前には不釣り合いな機動兵器の操縦席。

小型ミサイルを内蔵していたりする四脚に、今は近接火砲とパイルバンカーに換装されている多機能なマニピュレーター。

胴体は全体的に四角い設計で、前面部にどういう理屈かしらないが主砲が搭載、収納されているらしい。丸いライトもこだわりだとか。

そして、その上部に取り付けられたむき出しの操縦席。

これが彼女の目指した一つの究極らしいですよ？　昔はこれのバリエーション機で世界を超えたとか超えなかったとか。

ただこの機体、塗装が派手だ。

常に青白く光るラインの入った漆黒の胴体。四脚やマニピュレーターは真紅というカラーリング。夜でも非常に目立つんです。

「うおおおおお！！」

それに呼び寄せられたのか、突然飛び出してきた魔法使いが一人。

無詠唱で放たれた魔法の射手は二百ほど。

しかしそれらは一つ残らず“何もない”ところで弾かれた。

「なっ！？」

その魔法使いは次の魔法を行使することはできませんでした。主砲から放たれた青白い光の柱が直撃したからです。

おお、一発で気絶してる。

「今回は何でしたっけ」

「内蔵型の全自動魔法障壁発生装置」

「結果は？」

「見ての通り。でもまだ出力が足りないね。またＲＥＩ力炉を改良しないと」

「ん？」

「あ、間違えた。霊力炉だ、うん。霊力炉」

はて、発音が少し違ったような…？

ま、別にたいしたことではないでしょう。

「では私は他の方々を探しに行きますから、ほどほどにしてくださいね」

「ん。じゃね、長」

「危ない危ない。うっかりだ」

「こちらでは“霊”力なんだよね」

「……まぁ、ここは平和な世界だし、いいか」

――――

「ああぁー…これは…」

「おう、長か！　飲め飲め！！」

「魔法使いどもはあらかた捕縛し終わったわ。残りは今日の見張り担当の奴らが掃討にかかっとる。まぁわしらの勝利じゃな。うむ、酒がうまい！」

「酒がうまいじゃないでしょうよ」

心配していた自分が嫌になる。

残りの数人、古郷善一郎、神里甲里（かんざとこうり）他、数人の幹部が縛り上げた魔法使いをそこらに転がして酒盛りの続きをしているではないか。

古郷善一郎は多様な道具を用いる術式使い。神里甲里は忍者の家系で銃器使い。

まともに戦えば強いのだが、二人ともこよなく酒を愛しすぎている割と駄目な人間だったりする。

それでも幹部。

「……私はもう帰ります。七森さんとか酔いつぶれて眠ってそうですし」

「なんじゃあ、お持ち帰りかぁー？　奥さんがおるじゃろぉー？」

「黙りなさいエロ爺！」

「かっかっか！　間違ってはおらんぞ。なぁ古郷の」

「おうともさ」

「「かっかっか！！」」

「ハァ、もういいです。それでは」

――

「寝てますよ…」

案の定、寝てました。それはもうぐっすりと。

しょうがないので背に担ぎます。……しょうがなくですよ？

幹部とはいえ彼女はまだ子供、風邪をひかせる訳にはいきません。

それに、未成年者に酒を飲ませた咎人が誰なのか聞き出さないといけませんし。

背中に当たる柔らかいものは無視です。気にすればさよさんが黒く

なって惨劇の幕があがってしまいます。

「奈落の業火」

視界を一瞬にして埋め尽くす炎。

常時展開していた天球儀式結界のおかげでなんともないが、周囲を火で囲まれた。

火。火。火。

一面が炎。地面以外の全てが炎。

結界は炎はもとより熱も今はシャットアウトしているが、このままだと酸素がなくなる。

「ん……ひぃっ！？」

背中のイコが目を覚ましたらしく、抱きつく力が強くなった。

このまま下手にパニックを起こされると余りよくないので、周囲の炎を冷静に消しにかかる。

別に大きな魔法を当てて相殺する必要はない。

ただ結界で“圧し潰す”。

結界の範囲を広げ、そこにある炎を術式ごと結界で文字通り圧し潰す。

残るのは、焦げた平らな地面だけ。そこには煙も残らない。

「ふん、防いだか」

声のした方に目を向ければ、そこに居たのは銀髪の魔法使い。見慣れてしまった元老院のローブに、威圧するような二メートル近い銀の杖。

先日の会談にメガロメセンブリアから派遣された魔法使い。

予想以上の手練れだったらしい。

この分だと、イコや桃のような年若い幹部だとやられていたかもしれない。自分が見に来て正解だった。

「情けないことだ。組織一つ潰すのに私みずから動かねばならんとは」

ふぅ、と大仰にため息をつく魔法使い。

「確か、貴様が長だったな。どうだ、その背の娘を寄越せばそこそこの待遇で迎えてやるぞ？　　無論、牢の中での待遇だがな」

「いえいえ、イコは大切な幹部です。渡す気はさらさらありません。嫁入り前の大切な身体ですし、何よりあなたのような雑魚にはもったいない」

「……なんだと？」

目の前の銀髪の魔法使いは決して弱くはない。むしろかなり強い部類だ。

最上位の魔法の途中詠唱破棄など並の魔法使いでは到底できない。

それだけ、今回の元老院は本気だったのだろう。

しかし。

だが、しかし。

「な、なんだこれは！？」

周囲に展開された術式に気づけないようでは、ごく一握りの超一流にはけして及ばないのだ。

「さて、人に使うのは初めてですが、どうなりますかね？」

「貴様、これは何だと聞いている！」

叫ぶことができるだけでも、たいした物だと思う。現に、イコは声も出せずに背中で震えている。

才能ある、これからの将来が期待された若者なのだろうが……メガロメセンブリアに毒され、性根が腐ってしまった以上、手心は加えない。

「天球儀式結界・白夜の落星天球儀」

魔法使いを中心に、空間を覆い尽くすように展開された術式陣で構成された半径六メートルほどの半球。

全ての陣が凶悪なまでの力を満たし、発動を今か今かと待っている。

「本当は、陣の一つも見えない隠密性も売りの一つなんですが……まぁ死者への餞です。うけとりなさい」

「待っ…！」

———後日、相応の代価と引き換えに、この日の襲撃に参加した全ての魔法使いが関東魔法協会を通してメガロメセンブリアに引き渡された。

たった“一人”の例外を除いて。

第三十七話・関東呪術協会の愉快な幹部達（後書き）

今回出てきた白刃乃さんはオリキャラではあるけど、世界観的にはクロスになります。

彼女は異世界人なのです。

元ネタ（漫画）知ってる人いるのかな？

彼女は物語に大きな影響は与えないけど、実はとても大きな布石。

ただ、彼女は転生者ではありません。

また、この作品に転生者を出す予定もありませんので安心してください。

第三十八話・硝煙たなびく戦場で（前書き）

今回、タイトルは言うほど関係ありません。

第三十八話・硝煙たなびく戦場で

天球儀式結界。

私の使う術式の中でも数少ない、私自身が一から造り上げた術式。

この術式、魔法世界の大戦、大分裂戦争の間は結局完成しませんでした。

一つの完成を見たのは、中南米の熱帯林、緑に沈んだ遺跡の中で、古代の天文学、今よりも進んだ文明の叡智の一端を知ることができたからです。

その知識を解析し、理解し、取り込み、新たな天球儀式結界とその発展形といえる物を幾つか造り上げました。

一つは、従来通り、防御を目的とした天球儀式結界。

一つは、攻撃性に特化した白夜の落星天球儀。

そして、もうひとつ。

己の最大の目的の鍵となるであろう術式の骨子。

今は、それはいい。

今話したいのは、長く使い続けた防御用の天球儀式結界のことです。

この術式は、元から防御用の術式のため、最高クラスの防御力を誇ります。完成した今となっては、破られることはまず有り得ないでしょう。

当然、物理的要因に対する備えもあり、拳銃弾はもとより対物ライフルを至近距離で撃たれてもこの身に届くことはたぶんありません。

でも、私にだって想定外ということもあります。

「セイさん、三時方向に戦車です！　距離は目視で千二百！」

「とーさまー、空からまた筒が飛んでくるよー」

「こらコウ！　とーさまたちに頭だしたらあかんって言われたやろ！？」

「はーい」

地下遺跡に潜って、地上に戻ってきたら戦争が始まってるってどういうことですかっ！？

ことの起こりは三ヶ月ほど前のこと。

関東呪術協会の発足から五年が過ぎ、関東魔法協会との小競り合いがありながらも組織が軌道にのり、ある程度余裕が出てきたので一時中断していた遺跡巡りを復活させることにしたんです。

もちろん一家全員で。

……組織が落ち着くまでは大変でした。

協会の本部を白刃乃さんが多層構造式要塞級機動戦艦にしたいって言い出してきかなくて、魔法の秘匿をどうすんだっていったら潜水でも世界間転移でもバッチコーイな多重シールドをはるから光学ステルスくらいなんの問題もないって言い張るし……とにかく大変だったんです。

……結局、ゴーサインを私が所用でいない間に幹部会が出してしまって、建造と相成りました。

なんとか機動戦艦は阻止しました。紆余曲折の果てに鶴子さんの指揮下に入っていた木乃根を総動員して阻止しました。

で、去年完成しましたよ？　全長四キロの超巨大構造物が四年で出来るってどーなんでしょーねー？

……どうしたもんですかね、阻止できたのは機動戦艦だけで、要塞並の武装や多層構造は阻止できなかったんですよ。

しょうがないので、大半の部分は地下に埋めることで隠しましたけど。

今は対外的には巨大な複合施設ということでなんとか誤魔化してます。

他にもいろいろあったんですよ？　大概原因は白刃乃さんですけど。

とにかく話を戻します。今回は前回いけなかった中東です。

ここにはウルやウルクを筆頭に多くの遺跡があります。

場所の目星は大体ついていましたから、潜るまでは何の問題もありませんでした。

しくじったのは、潜ってからです。まーた転移に引っ掛かって、地下の暗い大迷宮をさまようことになりました。

私とさよさん、志津真などは必ずしも食料をとらずとも問題はありませんしかし、子供たちはそうではない。

食料はダイオラマ魔法球を持ち込んでいるのでどうにでもなりますが、それにだって限りがあります。

この手の迷宮はたいてい一番奥まで行けば戻れます。それで最奥部にたどり着くまで1ヶ月。

珍しい経験でしたよ。

迷宮の最初から最後までなんにもないなんて。コイン一枚拾えませんでした。

まあそれはしょうがありません。そんなにそんなに成功ばかりするはずがありません。今までがうまくいきすぎてたんです。

でも、だからってこれは酷いと思うんですよ。

「セイさん、二時方向からＲＰＧ！　一個中隊来てます！」

「ええい、面倒くさい……！」

どうも、地下に潜ってる間に政変があったらしくて、戦争が始まってました。

しかも、いつの間にやら激戦地のど真ん中。

砲弾やら対戦車ロケット砲とか空対地ミサイルとかどんどん飛んできます。

天球儀式結界の強度調査にはなりますが、失敗したら即死亡なんて冗談じゃない。

既に沙都子ちゃんがシェルショックでダウンして、それに付き添わせる形で志津真も使えないし……はぁ。

兵隊は遺跡をなんだと思ってるんでしょうね。

ただの遮蔽物とか？

「しょうがありません。手持ちの転移符を全て使いましょう。
ある程度安全が確保できたら長距離転移術式に切り替えて戦闘領域からの脱出をはかります。
その後は……日本に帰りますか。
まったく、今回は完全に空振りですね」

転移符は高い。自分でも作れるが、結構面倒くさいので買うことにしている。

おかげで今回の遺跡調査は大赤字です。協会の予算じゃなくて個人の資金で来てるのに……今度まとめて作ろう。

「全員集まって……そう、いいですよ。……志津真、もっとしっかり沙都子ちゃんを抱えなさい！　どこかに落としたりしたら事何ですから！」

「む、主、しかし……」

雛見沢で初めて会った時からはや数年、年ごとに成長していく沙都子ちゃんを抱きしめるのに抵抗があるのでしょうが、無視です。

私としては、沙都子ちゃんを応援していますからね。

「ほら、いきますよ。はやく」

「むぅ…」

志津真もなんだかんだ言って、結局抱きなおしていました。ふふ、案外新しい家族が増えるのもそう遠い日ではないのかもしれません。

それから、数回の転移を行いました。符を使った転移が七回。術式使用の長距離転移が三回。

それらを連続で行い、戦火は遙か彼方、もう安全と言っていいでしょう。

あとは陸路で隣国に抜けて、そこから飛行機で日本まで戻りますかね。

「あの、セイさん」

「ん、どうしました？　さよさん」

「これ……」

さよさんが指差したのは、彼女の足元。そこには――

「んん……？」

血だらけの青年と、傷だらけの少女が折り重なるように倒れていました。

「もしかして、連続転移中に巻き込んだ……？」

――――

「困りましたねぇ…」

悪いこととは知りつつも、二人の持ち物を調べさせてもらいました。

わかったのは、二人が四音階の組み鈴というＮＧＯ組織のメンバー

であること。

「そうですね……」

二人を帰すことには異論は何もない。連れていくのも面倒なだけだし、さっさとかえしたい。しかし問題が二つほど。

一つは、彼らが立派な魔法使いを擁する組織であり、私達は賞金首であるということ。特に私は一千万ドラクマの賞金首。絶対に問題になります。

二つ目は、青年の方が既に死亡していたということ。調べたところでは、青年が少女をかばったというような感じでした。

パートナー、だったのかもしれません。

ともかく、どちらかが死亡という状況で私が行けば確実に私が殺したと思われる。

どうするか……。

ふと、大戦以来、遺跡調査の時はずっと腰に吊している物に、目がいった。

―――

四音階の組み鈴、キャンプ。

その中でもひときわ大きなテントの中で、代表者と数人が難しい顔をして机を囲んでいた。

理由は、行方がわからなくなっていた、彼らの仲間であり立派な魔法使いでもあるコウキと、そのパートナー、マナ・アルカナが見つかったことだ。

残念ながら、コウキは既に息がなかった。マナの方も、傷だらけだった。

問題は、マナの傷を治療し、死体であるコウキと共にキャンプに現れ、すぐに消えた謎の人物の事だ。

一体、何者なのか？

――後日、どんなに調べてもその人物のことはわからなかったが、キャンプに現れた時の唯一の目撃情報として、バンダナを巻いて黒い眼帯を付けた傭兵のような男だったという情報だけが残された。

第三十八話・硝煙たなびく戦場で（後書き）

龍宮マナは今回オマケ。ホントは木乃根がどうなったかを書いておきたかった。

第三十九話・そして始まる物語（前書き）

真・プロローグの回。

二部とも言う？

第三十九話・そして始まる物語

平成１５年、２００３年、正月

関東呪術協会本部・天乃五環（あまのいつわ）第一層、大宴会場。

全長四キロ強、全幅全高が約一キロの巨大地下要塞。

円筒を横にしたようなこの要塞は、幹部の一人、白刃乃さんが造り上げたシロモノです。

もはやオーパーツと言われても納得してしまう規模ですね。

天乃五環は、上から順に一層、二層というふうになっています。

この大宴会場が位置する第一層は地下にあるにもかかわらず地表に出ている部分から日光をとり入れることができるため、多くの樹木が植えられ、また建造物も多く建てられており、要塞の内部という

よりも地下に関西の本山をそのまま造った、と言われた方がしっくりきます。

その天乃五環に造られた施設のひとつ、大宴会場に正装をして集まったのは、関東呪術協会の幹部達。

組織の発足から、はや十数年。

いなくなった者がいれば、新たに加わった者もいる。

そして、私のように変わらない者もまたしかり。

例年であれば、この日は互いの無事を確認しあい、簡単な報告と挨拶を済ませれば後は愉快などんちゃん騒ぎが常なのです。

昨年、些細な事から始まった千草と煌(コウ)の姉弟喧嘩も記憶に新しい。

最終的に第一層に大穴を開けてしまいさよさんに鎮圧されましたが。

そのことを考えれば、今年は“異様”と言っていいでしょう。

なにせ、私やさよさん、千草といった関西においても地位を持つ者の他に、志津真や煌といった私の縁者までもが上座に集まっているのですから。

それも、例年通りの紋付き袴といった正装ではなく、濃緑を基本とした“玄凪”式の正装。

幹部でも、直接見たことある者はいないでしょう。

例年にない緊張感。クセの強い関東呪術協会の幹部でも、この状況で騒ぐ者はいません。

皆、ただ私が話し始めるのを待っている。

既に、幹部全員がそろっているのは確認している。

呼吸を整えて、口を開く。

すべての視線が、私に集中する。

「――例年であれば、正月のこの日は宴会とするところですが、今回は違う話をさせていただきたく存じ上げます」

この話し方だけでも、若い幹部は驚くでしょう。

この話し方を知っているのは、私が関東を回っていたときに直接相対した者だけです。

「これからする話は関東呪術協会の長、暗辺セイとしてだけでなく、玄凪の長、玄凪セイとしての話としても聴いていただきたい」

私が出した玄凪の名。古参はこれだけで理解しただろう。

ついに、始まると。

「今年、麻帆良を奪回します」

――――ざわり――――

空気が、動く。

ほとんどの者がそれを聞いた瞬間、声を上げ、周りの者を見、言葉を交わす。

声を上げなかった者も、身じろぎするか、眉を上げるなど、なんの反応も見せない者はいなかった。

ある程度場が落ち着いた頃を見計らって、再び口を開く。

「詳しい事を話す前に、一つ、言っておかねばならない事があります」

再び、視線が私に集中する。

「今回の件、協会史上発足時以来の最大規模の戦になるでしょう。……しかし、私は今回の作戦に限り、自由意志による参加とします。強制はしません」

誰も、発言はしない。私の言葉に驚いているのか、続きを促しているのか。

「無論、理由はあります。それは、この作戦において、私の組織と

しての立場よりも、個人としての目的が優先される事柄が多々あるから……いえ、いっそ私個人の目的と言ってしまっても良いでしょう」

「当然、それを認められない者もいるでしょう。私自身、これが組織の長として許されることだとは思っていません」

「それ故の自由参加。参加しない者も、この作戦について口外できないように呪縛をかける以外は、一切の事を保証します。幹部の席もそのままです」

「このことは、前もってごくごく一部の幹部には話させていただきました。それについては詫びます。しかし、それ以外のご一同にも、今この場で結論を出して欲しいのです」

「今より三分間の間に、私に対して異存や疑念があり、参加したくない者は退出を」

深々と、畳につくまで頭を下げる。

「どうか、私に力を貸してください……」

もう二十年も昔、地位と名誉と、それに見合うだけの誇りを持った一人の女性が、部下の非礼を詫びるために、私に対してそうしたように。

長い、三分間。

全員が、賛同し参加してくれるとは思っていない。

私自身、それはしょうがないことだと割り切っています。

麻帆良を奪回し、関東魔法協会を潰すという建て前があっても、結

局は私のわがままですから。

関東魔法協会を潰すだけなら、やりようは幾らでもある。

それをしないのは、私の目的、私がこうして今ここに存在できている理由。

春香に対する事柄を、全ての計画の軸に置きたいから。

自分でも甘いと、いや、弱いと思う。

完全なる世界の元大幹部、関東呪術協会の長という立場を得てもなお、私は弱いまま。

むしろ、昔よりも弱くなった部分すらあるかもしれない。

目的のために、仲間を捨てられなくなった。

本当に万全を期したいなら、真実を伝えるのをごく一部に限り、自由参加になどしなければいい。

何も知らせず、ただ駒として扱えばいい。

ぬらりひょんなら、きっとそうするのだろう。

組織の長としては失格なのだろうが……後悔はしたくない。

春香の為に、何かを犠牲にする覚悟はある。

だが、そのために自分を信じてくれる者を駒として犠牲にしたのでは、彼女の隣に立てないのだ。

それをすれば、きっと春香は笑ってくれないだろうから。

聞こえるのは、決して少なくない衣擦れの音。

どれだけ減るのだろうか？

どれだけ残るのだろうか？

発足時には三十人に満たなかった幹部も、今となっては百を超す。

それだけいても、発足時に私が声をかけた面子はごくわずか。

神里甲里を筆頭に引退した者も少なくありません。

そんな中では、半分も残れば良い方でしょう。

三分と言っても、実際に時計を見て正確に三分計る訳ではありません。

どれだけ時間が経ったでしょうか。

私としては三分のつもりでしたが、五分か、あるいは十分か。

衣擦れの音が止んでからも、なかなか頭をあげられません。

しかし、いつまでもこうしてはいられない。

ゆっくりと頭を上げる。

そして――――

「――――――」

言葉が、出ない。

目の前の光景を、理解できない自分がいる。

目の前には、幹部たちが全員そろっている。

全員が部屋の上座の近くに集まり、身体の向きをこちらに向けて、
先ほどまでの私と同じように頭を下げている。

ただの一人も、欠けることなく。

「な、なぜ……」

予想外の光景に、声が震えるのがわかる。

戦場でも、こんなことは一度も無かったのに。

幹部達が私の声に反応して、一人二人とそろそろと頭を上げていく。

やがて全員の頭が上がったあたりで、幹部達が口々に自分の考えを
述べてゆく。

「そうですね……私の場合は、恩返しかな？　昔、命を助けてもらったし」

最古参の一人、今では娘もいる七守衣子が。

「そうよねー、長がいたから、私達の土地を、誇りを取り戻せたんだもんね」

同じく古参、大学を卒業してすぐの瀬乃宮桃が。

「随分と贔屓にしてもらったからな。長のわがままくらい、嫌という訳がない」

白髪が随分と増え、年相応の落ち着きを持った古郷善一郎が。

「そうっす。水くさいっすよ。長は俺らの爺ちゃんみたいな存在なんすから」

「私も、長にはよく無茶な発明にも予算を出してもらったしね」

「祖父からは、大恩にいずれ報いよと教わりました。今があるのも、全てあなたのおかげだからと」

銃使いの孫にして忍者の末裔が、組織最高の科学者にして最悪のトラブルメーカーが、そして、いつも若い幹部達を自分と一緒に見守っていた、老幹部の後継者が。

皆が自分に恩があると言い、協力してくれるという。

自分勝手なわがままに、付き合ってくれるという。

「――――あ……」

こみ上げてくる熱いものを、留めることはできなかった。

――――

……人前で泣くなんて、何時以来でしょう。さよさんにだって泣き顔なんて見せたこと無かったのに……

……恥ずかしいですね、早く話を進めてごまかしてしまいましょうか。

「こほん……さて、それでは具体的な話を進めたいと思います。実は、既に計画は大体できています。第一段階として、麻帆良に私を含め幹部を数名送り込み、より詳しい、精度の高い情報を収集します」

「長、そのようなことができるのですか？　関東魔法協会との中は最悪です。我々が幹部を派遣すると言っても、その実現は不可能だと思うのですが」

おお、食いついてきました。なんとかごまかせそうです。

「確かに、その通りです。我々関東呪術協会では、何を言っても無視されるか、理由をつけて拒否されるでしょうね」

実際は、ごり押しすれば出来ない訳ではありません。
それをしないのは、メガロメセンブリアの介入を防ぐため。

潰すときは、増援を呼ぶまもなく一気に潰す。
あまり無茶をすれば、些細なミスから泥沼です。それは避けたいのですよ。

「では、どうするので？」

そんなこと、選択肢は一つしかないでしょう。

「無論、我々だけで駄目なら他から力を借りるまでです。既にわたりもつけていますし」

「他、とは……？」

「決まっているじゃないですか」

この日本において、関東呪術協会と関東魔法協会に並ぶ一大組織と言えば――――

「関西呪術協会……西の長、近衛詠春ですよ」

第三十九話・そして始まる物語（後書き）

詳しくはまた次回。

ご質問があれば感想まで。答えられることなら回答します。

第四十話・思惑（前書き）

前回の続き。後半はネタです。

第四十話・思惑

「近衛、詠春……？」

大宴会場が沈黙する。それも、無理はないでしょう。

関西呪術協会の長にして協会内における魔法使いとの融和派の中心人物。それが近衛詠春。

魔法使いの本拠地を攻める計画に出てくる名前としては、意外でしょうね。

なにせ彼は魔法世界の英雄の一人。

その彼が、計画に協力するというのだから。

「馬鹿な！　ありえません！」

声をあげるのは幹部の一人。立場としては中堅どころだったはず。

「なぜそう思うのです？」

「なぜって……奴は実の娘を麻帆良に送るような男ですよ！？」

「そおっす。確か『裏に関わってほしくない』なんて理由だったと思いますけど、そんなことをする人が俺らに手ぇ貸すとは思えないっすよ」

そう言うのは、神里空里（かみさとくうり）。甲里さんの孫にあたるのですが、確かに彼の言うことも一理あります。

ありますが……

「それ、前提が間違ってます」

「は？」

「どういうことっすか？」

「近衛詠春は、木乃香ちゃんを裏に関わらせない為に麻帆良に送ったのではありません。どちらかと言えばむしろ逆、裏の世界の存在を自分で気づかせるために送ったのですよ」

「……は？」

「いや、はっ？って言われても」

「ど、どういうことっすか！？」

驚いてますね。まぁ、あの事件は相当詠春の株を下げましたから。

――曰く、近衛直系の近衛木乃香を、麻帆良学園に進学させる。

それも、詠春の独断で。

……荒れましたからねー、本山。幹部も寝耳に水でしたから、内紛寸前まで行きましたから。

事前に根回しするなり、もう少し下に気を遣って欲しいものです。そのときは最高幹部会に席を持つ私と鶴子さんが事情を聞き、必死に下をとりなしてなんとか事なきを得ましたけど。

「彼は大分裂戦争の最も深い部分を知る生き証人の一人です。私やさよさんもそうだと言えますが……とにかく彼は正義を語る者達の本質を、暗い部分を知っているんですよ」

「ほう、それで？」

ん、ここで白刃乃さんが食いついてきましたか。彼女はこういう話、好きなんですよね。

「彼としては、娘には裏に関わってほしくないというのも本心としてあるようですが……それが無理だというのは彼自身わかっているのでしょう。英雄の娘である以上、彼女もそう遠くない日に世界の裏側を知る日が来る。だからこそ、世界規模で見た裏の最大勢力である魔法使い、その有り様を見せる為に彼らの拠点である麻帆良にやったのです。あのぬらりひょんが家柄、ルックス、潜在能力と三拍子そろった木乃香ちゃんを言われた通りに裏と関わらせないなんてするわけがないですからね」

「価値の高い駒である以上、ぬらりひょんは危険からは確実に遠ざけるし、一応の建て前はあるから、か。だが、詠春氏とて黙ってそれを許すわけではないのだろう？」

「当然です。木乃香ちゃんが持っている携帯には、私と千草ちゃんの関西の最高幹部二人の他にも、さよさんと鶴子さんの妹で浦島とのつながりもある素子ちゃんのナンバーが緊急ダイヤルとして登録されていますから、連絡がくれば一時間以内に誰かが強襲をかけられるようにしてます」

「ほかには？」

「いざというときには、彼が直々に親権をたてに麻帆良に乗り込むそうですよ？」

そんな事態はいかにぬらりひょんでも避けたいでしょうね。

ぬらりひょん自身は別として、魔法先生や魔法生徒、タカミチ・Ｔ・タカハタなども大戦の英雄が相手なら戦い辛いでしょうし、戦うこと自体に疑問を持つ者もでるでしょうから。

「……それで、結局詠春氏が家（関東）に協力してくれる理由はなんなんだい？」

「……やっぱり、知りたいですか？」

「当然。私は知りたいことを知るために生きているんだから」

ふぅ、できれば隠しておきたかったんですけど、下手に白刃乃さんに嘘をついたり隠し事をしたりすると面倒ですからね。この人、実は協会内でもトップテンに入る実力派なんですよ。

科学者なのに。

「……厳密には協力ではなく、互いに相手を利用するというのが正しいのですが……ようは牽制ですよ。あるいは保険と言ってもいい」

「牽制？」

「彼がつかんだ情報によると、麻帆良に近々英雄の息子をつれてくる計画があるそうです」

「……スプリングフィールドか！」

「そう。英雄、ナギの息子。もしこれが実現すれば……いえ、確実

に実現するでしょうね。ぬらりひょんは英国メルディアナの校長と旧知の間柄だそうですし。……そうなれば、木乃香ちゃんは裏に関わるどころの話ではなくなる。二度と抜け出せないところまで引きずり込まれるでしょうよ。そして、それは彼の望むところではない」

「それで、牽制と」

「彼の望みは、木乃香ちゃんが幸せに暮らすこと。そのためなら、将来長にしないことも検討しているそうです。普通に学校を卒業し、誰か好きな人を見つけて結婚して、一般人として平和に生きることも許すと。ただ、これは彼の考えであり、彼女の幸せかどうかはわからない。だから、麻帆良にやった。裏を知り、魔法使いを知り、選択肢を広げることで彼女が何を選ぶのか。それは彼女の人生だからと。しかし、ここで彼は一つ間違えた」

「ぬらりひょんのところにするべきではなかった、か」

「その通り。……英雄の息子と英雄の娘。彼が麻帆良に送った木乃香ちゃんの護衛によると、木乃香ちゃんのクラスには既に裏の関係者が集められているとか。このままでは確実にぬらりひょんの駒にされて平和な生活など望めない。そのために英雄の息子の来訪にあわせて人を送りたいが、並の者ではぬらりひょんの交渉術に勝てない。かといって彼自身が動けるほどにはまだ状況がそれほど逼迫していない」

「それで、あなたか……確かに長なら、実力、影響力共に裏の世界でもトップクラスだ。人選は？　既にすんでいるのかな？」

「基本は建て前がありますから、関東呪術協会の長ではなく関西呪術協会の最高幹部として赴くことになっています。家族であるという事を利用して、私にさよさん、時雨、煌、沙都子ちゃんに志津真の六人ですか。あと、家の幹部から一人二人連れていくつもりです。できれば千草ちゃんも連れていきたかったんですが、関西にも人を置いておきたいので」

それに、建て前にも限界がありますからね。いくら長の娘と言っても、最高幹部二人はさすがに無理です。

「ふぅん。まぁ妥当なところかな。私が行けないのは少し退屈だけれど、まぁしょうがないね。……ところで長」

ん、久々に何か嫌な感じがします。ここしばらく来てなかったのに……白刃乃さん、なにを言うつもりですか？

「家族と言えば、あなたの隠し子はどうするんだい？　ほら、たしかスゥちゃんとか言った……！？」

タァン！

大宴会場に響いた銃声。撃ったのは私。手にある銃はベレッタＭ８４。

「あれは私の隠し子ではないと散々言ったはずです。次は違わず眉間を撃ち抜きますよ」

「あ、ああ、すまない。覚えておくよ」

いかに幹部といえど、この件は茶化させません。どれだけ大変だったと思ってるんですか。ああ、思い出すのも嫌になる。

曰く、呪術協会十大事件の一つ、隠し子事件。

ある日、なんの前触れもなく西の本山に現れた私の娘を名乗る少女。

その名は、カオラ・スゥ。

母親の『あなたの本当のお父様はニホンにいるのよ』という言葉に従いやってきたという少女は、ついでに嵐を連れてきた。

怒りと憎悪から黒化して私を追いかけるさよさん。ショックから泣きわめいて暴走状態に陥った千草ちゃん。そして機械仕掛けの亀に乗って私を追いかける自称私の娘。

それに会合の為に集まっていた西と東の呪術協会の幹部が加わって大変なことに。

……その後どうなったのかはわかりません。いつの間にか気を失って、気がついた時には全て終わっていました。

なにがどうなったのか、私には未だわかりません。誰もその時のことを教えてくれないのです。

最終的に彼女を関東のとある場所、鶴子さんの妹の素子ちゃんの所に送ることで決着を見ました。

「とにかく！　この件に関してはここまでが第一段階。第二段階以降は役割ごとに個別に伝えます。今日はここまで！」

「それでは皆さん、ここからは例年通りの宴会ですから、また元の席に戻ってくださいね」

さよさんの合図とともに、運び込まれる料理と酒。どやどやと腰を延ばしつつ自分の席に戻る幹部達。

「さぁーって、景気づけに飲むっすよー！」

……これから忙しくなりますし、今くらいは、こうしていても良いですよね。

――――

オマケ

「煌、あなたなんでさっきからずっと給仕してるんです？」

「そうです。ちゃんとお父さんとお母さんの所で食べないとダメですよ？」

「母さん、僕もう中学生ですよ？　それに、僕はこうやって体を動かしている方が性にあっています」

「……じゃあ、その格好はなんなんです？」

「オーナーが僕にくれたんです。フロアチーフとお揃いだって」

玄凪セイとさよの息子、玄凪煌。齢十五にして父譲りの長身と濃緑の髪と瞳を持つ。

男としては長めの髪を後ろで束ねた彼が着ているのは、畳に不釣り合いな燕尾服。襟に刺繍されているのは、とあるお店の紋章。

煌は八歳頃から五年間、社会勉強と修行の意味合いを兼ねてその店で住み込みで手伝いをしていたのだが、その五年間で店のスタッフから様々なスキルを習得して帰ってきた。

クイックドローにスローイングナイフ、動植物の知識に執事としての技能など、役にたつものからたたない物まで多種多様。

彼が帰ってきた二年前はセイ達も驚かされた物だ。何せ自分の息子が幹部並に強くなって帰ってきたのだから。

「おーい煌君、こっち追加」

「はーい」

給仕を続ける自分の息子の将来に、一抹の不安を覚えるセイだった。

第四十話・思惑（後書き）

次回、ついに（やっと）麻帆良へ！！

第四十一話・二十年ぶりの帰還（前書き）

やっちまった感がありますが後悔はしません。

あと、少し遅れてすいませんでした。

第四十一話・二十年ぶりの帰還

「あれ？　木乃香、今日どこかいくの？」

麻帆良学園、早朝。

その女子寮の一室で、神楽坂明日菜は自分の親友の見慣れない姿に困惑していた。

近衛木乃香は毎朝早くから新聞配達にいく自分のために朝食を作ってくれているのだが、いつもは朝早いということもあってパジャマのまま、作り終わった後は再びベッドに戻っている。

だがその木乃香が、今日はいつものようなパジャマではなく少しおしゃれなよそ行きを着ている。

それに今日は休みである土曜日、どこか機嫌が良いようにも見えるし、外出する用事でもあるのだろうか？

「んー？　えっとなー、今日は知り合いのおじさんが来るからお出迎えにいくんよ」

「だからそんなにオシャレしてるの？」

「うん。お父様の知り合いで、家の偉い人らしいからきちんとした格好しときたいんよ。それに、小さい頃はよーお菓子とかもろて可愛がってもろたんやけど、会うんは久しぶりやからちょっと気合い入ってしもて」

「ふーん……いつ来るの？」

「午前中には来るみたい」

「じゃあさ、私も行ってみていいかな？　そのおじさんがどんなのか気になるし」

もちろん、気になるというのは好奇心だけでなく、高畑先生のような渋いおじさんを想像しての事である。

「ええよー。先に駅前で待ってるえー」

「うん。それじゃ私は新聞配達行ってくるねー」

「がんばってなー」

まだ朝の寒い、一月のある日の会話である。

――――

「やっと、つきましたか」

麻帆良。

思えばここに帰ってくるまで、随分と長い時間がかかったものです。

あれから、二十年以上たちますからね。

目が覚めて、変わり果てた麻帆良を見てショックを受けたのを今でも覚えています。

西洋のような街並みに、夜にもかかわらず光り輝く派手なパレード。

そして、さよさんとの出会いと、そこからの逃避行。

良くも悪くも印象深いことが多かったですね、今思えば。

でも今、日に照らされた麻帆良を見て、やはり変わってしまったのだと実感します。

二十年前以上に発展した町には、私がかつて、百二十年前に過ごした日々を思い出させてくれるものが何一つ無いのです。

ただ一つ、彼女が眠る世界樹を残して。

「セイさん……どうかしましたか？」

「ん、いえ」

少し、顔に出ていたかもしれません。いけませんね、この麻帆良はさよさんにしても長い時間をたった一人で過ごした場所でもありますし。私が感傷に浸っているわけにもいきませんよね。

「少し、昔を思い出していただけです。あの時は困りましたよ、何せ、いきなり泣き出すんですから」

「え、ちょっ、セイさん！！」

さよさんがにわかに顔を赤くします。

懐かしいですね。幽霊の少女を見かけて気になって、声をかけたらボロボロ涙を流して泣き出したんですから。

あの時はとても困りましたが、今思えばいい思い出です。

「ふふ、あの頃のさよさんは可愛かったですね。もちろん今も」

「……！！　　……怒れないじゃないですか」

む！　　さよさんが少し拗ねてしまいました！！

照れているのも可愛いのですが、これはご機嫌をとらないといけないかもしれません。

麻帆良でも餡蜜の美味しいお店とか探しに二人で歩いてみましょうか？　　そういえば最近二人っきりでのんびりと町を歩いたりとかしていませんし。

「主……もう少し人目を気にしていただきたい……」

ん、何でしょう？　　志津真が何か言ってきました。人目？　　別にこれくらいなら気にするほどでもないでしょう。往来で魔法を使っているわけでもないし。

「というか志津真、あなただって人のことは言えないでしょう」

「いや、これは……」

目の前でしっかりとしっかりと沙都子ちゃんと腕を組んでいるくせ

に何を言うんですかね、まったく。

……ああ、そう言えば言っていませんでしたね。

実は志津真にも戸籍が必要だと言うことで作りました。

姓名、黒兎志津真。

配偶者、黒兎沙都子。

……ええ、そうです。沙都子ちゃんはやりました。押して押して押し切りました。

志津真も種族の違いを盾に結構頑張ってましたが、押し切られましたね。

志津真は最後まで抵抗しましたが、最後は協会の女性幹部たちによ

る複合多重結界で弱体化したところを落とされたようです。

次の日の沙都子ちゃんの肌ツヤッツヤしてましたよ。

志津真は少し疲れてましたが……

結婚式も楽しかったですねえ。沙都子ちゃんの昔の友達も皆来ていましたよ。たしか部活メンバーとか言いましたか。

その中でも、沙都子ちゃんと特に仲の良かった……古手梨花ちゃんでしたか？

なぜか久しぶりにあった沙都子ちゃんの胸をあり得ない物を見るかのように凝視していたんですが……どうしたんでしょうね？

他にも沙都子ちゃんの兄夫婦などは特に驚いていました。

何年か合わないうちに随分と変わったものだと。

……実は、この言葉を聞いてヒヤっとしました。

沙都子ちゃん、少しずつ人間じゃなくなってきてるというか……ようは志津真と……朱と交わったら赤くなったというか……とにかく人じゃなくなってきてます。

本人たちが気にしてないので良いですけど。

「マスター」

おっと、随分と思考の海に沈んでしまっていたようです。

「マスター、迎えってあれかな？」

時雨が指した方向には、木乃芽さんによく似た少女が立っていました。

間違いなく木乃香ちゃんでしょう。

……大きくなった物です。

「流石時雨。しかしなぜわかったんです？」

「んー、なんとなく木乃芽と魔力の感じが似てたよ」

……そんなもんですか。

ま、気にしてもしょうがないですか。

おっと、向こうも気づいたようですね。こちらに向かって少女が二人走ってきます。

ツインテールの娘は木乃香ちゃんの友達でしょうか？　仲良きことはいいことです。

「セイおじさんやー！」

「久しぶりですね、木乃香ちゃん。元気にしていましたか？」

「うん、元気やったよ。お父様はどうやった？」

「はて、最後に見たときは元気そうでしたが……」

「そっか……」

笑顔が少し曇ってしまいました。やはり寂しいのでしょうか？

「それより木乃香ちゃん、近衛右門になにかされていませんか？

何かあったらいつでも気にせず電話するんですよ？」

「わかっとるえー」

「ん、よろしい。……それで、そちらは木乃香ちゃんのお友達でいいのかな？」

「あ、はい！　神楽坂明日菜です」

「木乃香ちゃんとこれからも仲良くしてあげてくださいね？」

「……ハイ」

……ん？　どうしたんでしょう、神楽坂明日菜と名乗った少女が木乃香ちゃんの耳元で何か囁いています。いや私には聞こえてるんですけど……

（ちょっと木乃香、小さい頃からお世話になってるおじさんじゃなかったの！？）

（そやよ？　なんで？）

（なんでって……おじさんって年じゃ無いじゃない！　幾つなのよあの人！？）

（んー？　そういや幾つやろか。昔から変わらへんけど、結構いってるんちゃうかな。こーくんがウチらと同い年やから）

（同い年って……十四の子どもいるの！？　若すぎない！？）

あー……確かに子供が行る年には見えないかもしれません。

煌とさよさんだとさよさんの方が幼く見えますし、私とさよさんは不老ですから、さよさんの見た目は中学生当時のままですからね。

――――！

「明日菜ちゃん！」

突然、場違いな殺気と明日菜ちゃんを呼ぶ声が。

声のした方を見れば、遠くの方からこちらに走りよってくる男性が一人。

直接会ったことはありません。しかし顔は知っています。なにせ裏では有名な人物ですから。

悠久の風所属、元紅き翼のタカミチ・T・高畑。

「おや、誰かと思えば高畑さんではないですか。ご高名はかねがね伺っていますよ」

「世辞は結構です。……明日菜ちゃん、悪いけど帰ってくれるかい？　学園長にこの人を呼んでくるように頼まれたんだ」

「へ？　……はっ！　は、ははは い！」

「高畑先生、うちはー？」

「木乃香君もすまないけど……」

木乃香ちゃんがどうしたものかとこちらを見ていますが、ここは素

直にいきましょうか。

「すいませんね、木乃香ちゃん。用が済んだらまた連絡します。いつになるかわかりませんが……すいません」

「別にええよー。ほなまたね」

それからしばらくは木乃香ちゃん達が見えなくなるまで二人の姿を見送っていました。

「……どういうつもりです」

「それはこちらのセリフですよ。なぜあなたがここにいる。関東呪術協会長、暗辺セイ！」

おや、怖いですね。まぁいきなり敵対組織の代表が自陣の懐に現れればそうなりますか。

「そうですね……ま、ちゃんとした理由があってここにいる、と言っておきましょう」

「……まあいいでしょう。とにかく、学園長の所まで来てもらいま

すよ」

「嫌です」

「……それはこちらの指示に従わないとうけとっても？」

高畑氏から強い殺気が漏れます。さっき木乃香ちゃん達に見せていた人の良い態度は欠片も残っていません。

いつのまにか周囲から人もいなくなってますし……返答いかんによっては殺る気ですね。

「そうではありません。いえ、そうともとれますが……どうせ聞かれるのはなぜここにいるかでしょう？　二度三度話すのも面倒ですし、今晩にでも関係者を集めてもらってまとめて話しておきたいんですよ。ホテルのチェックインも済ましておきたいですしね」

これには実は思惑があります。単にぬらりひょんと顔をあわせるのが面倒というのもありますが……それだけではないのです。

「……少し待ってください」

携帯電話を取り出してどこかと連絡を取る高畑氏。相手はぬらりひょんでしょうね、十中八九。

しばらくして――

「今夜十二時に、世界樹前の広場に来てください。それと、それまで監視をつけさせてもらいます」

監視、ですか。それくらいは当然でしょうね。私はしばらく何も起こす気はないので痛くも痒くもありませんが……それにしても監視ですか。

「それは、あちらの少女のことですか？」

高畑氏がそちらを見れば、神鳴流に縁のある者には馴染み深い野太刀を持った少女がこちらの様子をうかがっている。

詠春から事前にもらった資料によれば、名は桜咲刹那。烏族とのハーフだとか。

「ちがいます。監視の人員が来るまで、ここにいてもらいますが……」

「かまいませんよ。急いでいるわけではないですから」

さて、どんな人が監視にきますかね？　刀子ちゃんは流石にこないでしょうが、それなりに腕のたつ者が複数で来るでしょう。それだけでも麻帆良の戦力調査に繋がりますから、少し楽しみです。

ＡＡＡのタカミチを前にして、不敵に笑うセイだった。

第四十一話・二十年ぶりの帰還（後書き）

原作キャラがでると会話が難しい……

キャラ紹介？（前書き）

注意！

ネタバレがあります。最悪、第四十一話を読んでから見てください。

それと、今回は簡単にまとめてみました。

キャラ紹介？

◇玄凪セイ（斉）

今は偽名で暗辺セイと名乗っている。関東呪術協会の長。

強いのだが術の特性の問題で暴れさせられないのが作者の悩み。

◇玄凪さよ

セイの奥さん。忘れがちだが彼女も半分人じゃない。まれに黒化する。

◇玄凪煌

二人の息子。背は高く、身体的特徴はセイに似ている。修行に出したらいろんなスキルを身につけて帰ってきた。

作者は原作キャラとひっつけようかと日々話を練っている。

◇春香

世界樹の精霊？　二人しかいない正ヒロインのはずだが話の構成上出番がない。

◇玄凪時雨

神代に造られたジャガーノートの模造品。強いがやはり出番が少ない。

◇天ヶ崎千草

名字は関西の最高幹部会の関係で天ヶ崎のままにしている。

あと原作のような服装はせず、きちんとした格好をすることが多い。

◇黒兎志津真

式神三人衆の一人。他二人と違って出番は結構ある。番外編の主人公？　最近結婚した。

裏設定がいろいろあり、名前はシズマと読み、漢字は当て字である。

◇黒兎沙都子

志津真といつの間にか結婚していたひぐらしキャラ。罠師の腕は今も健在。ＡＲＵＭ補正で雛見沢症候群も一切無い。

今のプロポーションは鷹野三四並で、古手梨花はそれを見て絶望したとかしないとか。

◇六火&白露

式神三人衆の怪力の鬼と七尾の狐。志津真と違って出番が無い。

〇関東呪術協会〇

◇古郷善一郎

多様な道具を用いる術式使い。出番は未定。

◇瀬野宮桃

大学を卒業してすぐ。実は一番設定があやふやなキャラクター。

◇七守衣子

虫怪使いでお気に入りは大百足。やろうと思えば土蜘蛛なんかも召喚できる。娘が一人。

幾つになってもポニーテール。

◇白刃乃

科学者。マッドとも言う。知ってる人は知っている「ドリムゴード」の世界から来たという設定のオリキャラ。設定上の強さでは上位に位置する。

彼女の存在は大きな布石。

◇石呼壬の長

出番も少なく、その力が語られることも無かったが実は結構強い設定。

タイプはセイに似た大規模召喚系。

◇神里甲里

銃器使いの忍者の末裔。高齢のため出番はほぼ無かった。

◇神里空里

上記の孫。設定も同じだが、彼には今後も出番は作る予定。

キャラ紹介？（後書き）

今後もたまにここにキャラを足すかもしれません。

第四十二話・麻帆良の夜に集う者たち（前書き）

自動車学校が忙しい……

第四十二話・麻帆良の夜に集う者たち

すっかり人通りも無くなった深夜の麻帆良、世界樹前広場。そこは、普段とは違う様相を呈していた。

この世界樹前広場に魔法先生や魔法生徒が集まること自体はそれほど珍しくない、普段からよくあることである。

ちょうど麻帆良の中心地にあたるここは、主に夜の警備の前の集合場所や打ち合わせ場所としてよく使われているのだ。

話が少し横路にそれるが、極東における魔法使いの拠点である麻帆良は常に人手不足である。というのは、十五年前の大事件、関東呪術協会の発足のせいだ。

麻帆良以外の東日本の拠点を根こそぎ奪還された。が、そこにいた人員はそう間をおかずに金銭などと引き換えに返還されたため、人がいないわけではなかった。

だが、にもかかわらず今の麻帆良が人手不足なのは、せっかく返還された人員をメガロメセンブリア上層部が一度に引き上げてしまったせいだった。

連合の宗主国であるメガロメセンブリアはもともと大戦の影響が大きかった上に、元老院襲撃事件、俗に言う“鮮血事件”のせいで中枢たる元老院議員がほぼ全滅し、政治、社会ともにかなり不安定で、

本国は治安維持などを名目として多くの人員を引き上げたのだ。

それから十五年。政治は落ち着いた。しかし人員は思うように増えない。その理由も、やはり十五年前の事件が原因だった。

当時独断で行動した、立派な魔法使い“銀杖のサーヴィンス”が死亡したこと。

以来、本国は尻込みしてあまり優秀な人材をこの極東に置きたがらなくなったのだ。

なのに、麻帆良は維持しろと言う。所属する魔法使いのほとんどが、表の仕事も持っているというのに。

苦肉の策として、近衛近衛右門は魔法生徒中でも実力の有るものも夜の警備に取り込み、ローテーションをとることで十五年間この麻帆良を守ってきたのだ。

そして今この場には、通常であれば曜日ごとに振り分けられているはずの実力者達が集められていた。

無論、学園の戦力としてナンバーツーと言われるタカミチ・T・高畑も。

その全員の視線が、つい今し方やってきた今宵の客人……招かれざる客人に向けられていた。

「さて……それではお主らがここに来た理由とやらを聞かせてもらおうかのう」

そして、夜の会合は始まった。

――――

「さて……それではお主らがここに来た理由とやらを聞かせてもらおうかのう」

ぬらりひょんがこちらに向かって言い放ちました。

この場にいるのはいずれも実力者でしょう。ぬらりひょんを筆頭に、元紅き翼タカミチ・T・高畑など、今の麻帆良のフルメンバー。

魔法生徒……子供がいるのは少し気に入りませんが、私も煌を連れてきてますから強くは言えないんですよ。

……おや、刀子ちゃんもいますね？

「そう急がなくてもいいでしょう。挨拶くらいはさせてくださいよ。……久しぶりですね、刀子ちゃん」

「……お久しぶりです」

返事をした刀子ちゃんはなぜか微妙な顔をしています。……やはりちゃんづけは嫌なんですかね？　でも千草ちゃんや沙都子ちゃんもちゃんづけだし、一人変えるのも違和感が……

「……葛葉先生、お知り合いで？」

「昔、お世話になった方です。瀬流彦先生」

目の細い男性……瀬流彦というのですか。私のことを知らないということは、余り偉くはなさそうです。

しっかし刀子ちゃんもよそよそしくなったものです。小さい頃は鶴子さんと一緒に本山近隣の野山で野太刀を振り回して笑っていたのに。

……彼女も大人になったということですか。今はバツイチだそうですし。

「……ゴホン！！」

おーっと、ぬらりひょんが青筋たててて怖いです。しょうがないんでやることはやってしまいましょう。どうせ時間がかかることではありませんし。

「では、私が、私達がここに来た理由をお話ししましょうか。近衛右門殿や刀子ちゃん、そこの……桜咲刹那ちゃん辺りは知っているでしょうが、私こと暗辺セイは関東呪術協会の代表であるとともに、関西呪術協会は最高幹部会の一席を特別顧問としていただいています」

名前を出されたぬらりひょんと刀子ちゃんは表情一つ変えませんが、桜咲刹那ちゃんはあからさまに狼狽して、隣の長身で褐色の肌を持つ黒髪ロングの少女と何か話しています。

彼女たちの世代になると、私の名前は知っていても姿は見たことがないという者も多いんです。関東呪術協会の長としてはデスクワークが主な仕事ですから、関西にはいないことが多いんですよ。

「そうじゃの、それは知っておる。ようは、今回は関東呪術協会の者ではなく、関西呪術協会の者として来たと言いたいのかの？」

ぬらりひょんがまとめてくれました。楽ができて助かります。このままスパッといっちゃいましょうか。

「私の役目は、ここ麻帆良における木乃香ちゃんの護衛の追加人員です。当然、木乃香ちゃんが麻帆良にいる間はずっといますよ」

「なっ……！？」

魔法先生と魔法生徒の間に、動揺が走る。

なかでも、長直々に護衛を頼まれた刹那ちゃんと、英雄の息子の来訪まで日がないことを知るぬらりひょんとタカミチには衝撃でしょう。

特にぬらりひょんからすれば事態は深刻です。なにせ私達がいれば計画の邪魔になるのは目に見えていますからね。

……私は、悪意をもって木乃香ちゃんを巻き込むのなら当然邪魔をしますよ。木乃芽さんにはなんだかんだでお世話になりましたから。

「ちなみに、これは関西の長である近衛詠春からの直々の依頼です。これが認められない場合、木乃香ちゃんは近いうちに麻帆良以外の学校に転校となります」

さて、どうしますかね、ぬらりひょんは。

詠春も今回ばかりは本気です。“あの件”で相当怒っていましたからね、彼。ぎりっぎり黒化はしませんでしたが、かなり危なかったらしいですからね。

ちなみにこの転校うんぬん、ブラフじゃありません。既にある程度用意はしてあって、交渉決裂の場合は他の学校に移れるように手配済み。

予定は出雲の辺りです。十月になれば絶対神秘と関わってしまいますが、まぁあそこなら悪い方にはいかないでしょう。

「ぬぅ……しかし、それは本当なのかの？　婿殿からはそのような話、まったく聞いておらんのじゃが。それに、ここにきて急に木乃香の護衛を増やすなど言われてもすんなりと通すわけにはいかん。

護衛なら既に刹那君がおるし、わざわざお主らである必要性もなかろうて」

「……私も理由をお聞かせ願いたい」

刹那ちゃんと、褐色長身の少女が前に出てきました。

……あれ、こっちの少女もどっかで見たような……？

「そちらは……？」

「龍宮真名だ。刹那とはペアを組ませてもらっている。私は傭兵として麻帆良に雇われているのさ。依頼があれば二重契約にならない範囲で承ろう」

龍宮真名、ねぇ。龍宮……マナ。マナ……マナ……褐色で黒髪……？

「ああ、マナ・アルカナか」

「っ！？　どこでその名を？」

おっと、いけない。

「……一言でまとめると、刹那ちゃんが予想ほど護衛として機能していないんですよ」

「なっ、私がお嬢様を守るのに力不足だというのか！？」

「そのとおり。そしてその原因は、あなたですよ？　近衛右門殿？」

「ほ？」

どちらも、身に覚えはないでしょうね。ぬらりひょんにすれば自分が原因などと呼ばれる理由はわからないでしょうし、刹那ちゃんにしても彼女はけっして弱くありません。

むしろ、あの年で神鳴流の師範代クラスで、鶴子さんに教えを受け、詠春よりかの夕凪を譲られたことを考えれば、むしろ強いと言えるでしょう。

しかし――

「刹那ちゃん、あなたは防げなかったでしょう？」

「何をだ！？」

「お見合いですよ。木乃香ちゃんの」

場が、凍った。

まさか、誰もそんな理由で大戦の英雄を含めた組織の長二人が動くとは考えていなかったでしょう。

お見合いなどたいしたことではないように聞こえるかも知れませんが、そんなことはありません。

血縁を結ぶというのは古来よりこの日本でも大きな意味を持ちます。特に木乃香ちゃんは大戦の英雄である近衛詠春の娘にして古き血を継ぐ近衛の直系。極東最大の霊力を持つとも言われています。

そんな木乃香ちゃんを、祖父だからといって自分の都合で親である詠春に一言の相談もなくぬらりひょんが勝手にお見合いさせていた？

普通に大問題です。アウトです。戦争になっても不思議じゃないです。

「関西呪術協会の長の娘を、関東魔法協会の長が勝手にお見合いさせる。それも本人の意志を無視して。何でも三桁近い回数だそうじゃないですか、近衛近衛右門殿？」

「ぬ、ぬぅ……」

「刹那ちゃんも、麻帆良にいる木乃香ちゃんの唯一の護衛が何をしているんです。それに、夜の警備など……護衛はどうしました」

「それは……学園長が、お嬢様を守ることにもなるからと」

……へー、それは良いことを聞きました。学園長が、ねぇ。

「とにかく、詠春からは近日中に書状が届くはずです。その間も、ある程度の行動は認めてもらいますよ？」

第四十二話・麻帆良の夜に集う者たち（後書き）

夜の話はまだ続きます。次回は各陣営の話かな？

第四十三話・それぞれに思うこと（前書き）

はやく九月にならないだろうか……

第四十三話・それぞれに思うこと

夜の麻帆良、教職員寮。

深夜であるためか、控えめなノックが聞こえた。その後に聞こえるのは、かぼそい少女の声。

「……刀子先生」

「刹那ですか」

「ご相談にのってもらいたいことが……」

夜の会合。いつもなら簡単な打ち合わせで終わるのだが、今回はそうはならなかった。

それぞれの内に、疑念とわだかまりを残していた。それは、剣士と傭兵、二人の少女にしても同様だった。

麻帆良の教師の一人、神鳴流の剣士として夜の警備も受け持つ葛葉刀子は、さして逡巡することもなく扉をあけた。そこにいたのは、

桜咲刹那と龍宮真名の二人。

二人を部屋に入れた刀子は二人を座らせ、何か飲むかと聞いた上で自身も彼女らの対面に腰を下ろした。

何の用件かはわからない。だが検討はつく。さきほどの会合に関することだろう。

やがて口を開いたのは、刹那。

「刀子先生、あの方が……その……本当に暗辺様なのですか？」

なんだそんなことかと軽く首肯する

「ええ、それは間違いありません。私も小さい頃からお世話になっていますから、それは保証します」

それを聞いて、刹那は問いかける。

「刀子先生、私は、どうすればいいのでしょう……」

「どう、とは？」

「私は、これまで夜の警備が、麻帆良を守ることがお嬢様を守ることに繋がると考えていました」

「……」

刀子は、何も言わない。ただ黙って刹那の話を聞いている。

「今日の暗辺様の言葉が真実なら、私はお嬢様の側にいることが正しいのでしょう。学友として、幼なじみとして、お嬢様に裏を気取られることなく側ど護衛の任を果たすのが正しいことなのでしょう」

「そうでしょうね。確かにそちらのほうが護衛としては正しいと言えます」

「しかし……」

「しかし、なんです？」

「……お嬢様の側に行けない私は、どうすればいいのです！」

刹那には、生まれながらにしての秘密がある。そのことを、自身がお嬢様と慕う木乃香は知らないのだ。

これも、鶴子と同世代、刹那の秘密を知る刀子だから相談できることである。

「私では、お嬢様の側にいられない。しかし、夜の警備も正しいと言えないなら……私はどうすれば……」

「刹那……」

刀子も、顔を伏せる刹那に何を言えば良いのかしばらく思案していたが、やがて一つの結論を出した。

「刹那」

「……はい」

「それは、私がどうこう言えるような問題ではありません。仮に言ったとしても、あなたは納得しないでしょう」

「……はい」

「あなた自身が答えを見つけなければいけない問題です。いえ、自分に向き合うと言うべきですか」

「っ……はい」

「それでも、他人に答えを求めるならば……」

「……」

「一度、セイさんに話を聞いてもらいなさい」

「っ！？」

「あの方は人生経験も豊富です。決して答えはくれないでしょうが、ヒントはもらえるでしょう。私も、東に嫁ぐ時に相談にのってもらいました」

「え……でも刀子先生は今お一人じゃ……」

すぅ、と刀子の目が細まる。

「失礼しましたっ」

「……わかればよろしい。それで、龍宮さんもなにか用事があるのですか？」

「ああ、暗辺セイのことについて聞きたい」

「セイさん、ですか。あの方は最高幹部ですし、私も多くは知りません。当然あまりプライベートなことにも答えられませんが……その上で何を聞きたいのです？」

「聞きたいことは二つ。彼は昔外国に行ったことはないか？　主に中東に」

「……わかりません。セイさんは昔から世界を旅していたようですから、行ったこともあるかもしれません。絶対とは言いかねますが」

「そうか」

「それで、もう一つは？」

「……」

言い出しづらいことなのか少し悩んでいたようだが、それでも真名はその問を発した。

「彼は……本当に人か？」

「……どういう意味です？」

少し、ほんの少しだけ刀子の空気が変わったのだが、刹那はそれに気づけなかった。しかし、傭兵として戦場を駆け、生き残るための術として空気を読むことに長けていた真名は、それに気づいた。

気づいてしまった。

「……いや、やはりやめておく」

「そうですか」

ただ、短く刀子は返した。

二人の少女の心は、晴れなかった。

――――

同刻、麻帆良郊外、森林部のログハウス。

「まったく、つまらん物を見た。期待していたのに、結局は口先ばかりの頭でっかちではないか」

「ケケケ、機嫌ワリーナ、ゴ主人」

「うるさい、チャチャゼロ。まったく、じじいめ……！」

真祖の吸血鬼、闇の福音エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル

は、そう家に待機させていた己の従者に愚痴っていた。

十五年前、自分がこの麻帆良にとらわれる少し前に、関東魔法協会の勢力を大きく削り取った関東呪術協会の長、暗辺セイ。

どれほどのものかと気になり、わざわざ出向いてみれば、少し期待はずれだった。

確かに術者としては一流なのだろう。魔力は隠していたがかなりの量がありそうだし、おどけた口調に反して隙もほとんどなかった。

海千山千のじじいにほとんど反論させなかったのは賞賛に値するだろう。

それに、気配も気に入った。吸血鬼の真祖だからこそ、闇の福音と呼ばれた自分だから気づいた、匂いとでも言うべきか。

いわく、血の匂い。

そして、己が内に闇を飼う者の独特な匂い。

それは彼の家族にしても同様で、いずれもただの人ではないとエヴ

アンジェリンは確信していた。おそらく、正義を語るだけの魔法使い達とは一線を画す存在、それをそうとバカどもに気取らせない技量。

それを、エヴァンジェリンは一目見て見抜き、気に入ったのだ。

だと言うのに。

「まったく、タカミチの坊やもじじいもなぜああも唯々諾々と……！」

彼の戦い、実力の一端も垣間見ることはできなかった。

じじいのことだから、きっといつものように誰かを当てて実力を計ろうとするだろうと思って見ていたら、あれよあれよと言う間に話が終わり、何も起きなかった。

正直、お見合いなどと絶対勝てない弱点を作り続けていた近衛右門には失望しか抱かない。

彼のせいで、貴重な夜の時間を浪費してしまったのだ。

「それで、茶々丸。検索結果は出たか？」

「イエス、マスター」

出席番号１０番、絡繰茶々丸。チャチャゼロと同じく自らの従者で、最新鋭の麻帆良の科学と自身の魔法技術が融合した高性能なガイノイド。それが茶々丸だ。

エヴァンジェリンは、せめて何かわからないかと茶々丸にまほねっとを経由して旧世界、魔法世界問わず情報を集めさせていた。

力ある者は、自然とその存在は広まっていく。

隠そうと逃げようと、いずれ破綻する。

それは自分自身が身を以てよく知っている。だから、確実になんらかの情報があると踏んで茶々丸に調べさせたのだ。

「検索結果、多数ヒットしましたので、抽出、まとめました」

「出せ」

茶々丸の耳の機械に繋げられたケーブルの伸びた先、プロジェクターから、壁にその情報が映し出され、次々とウィンドウが開いていく。

「……なんだ、これは」

「身長、骨格、魔力パターンから、９８．９６％の確率で同一人物です」

「く、くく……ハハハハハハハハッ！！」

その余りの量と“内容”に、エヴァンジェリンは唖然とした後、笑い出した。

「オイ、ゴシュジン、俺にも見セロ」

「ハハハ……よかろう、チャチャゼロ。ほら、これで見えるか？」

魔力不足で自分では動けないキリングドールを机の上に置き、その内容を見せる。黙って見ていた人形は、やがて主と同じように笑い出した。

「ケケケケケケ！　　コイツハスゲェ、トンデモネェ大物ジャネーカ！！」

映し出されたのは、戦場で望遠レンズを使って撮られたであろう写真。

巨大な骸骨の上に乗ったその姿。

アリアドネーのある意味伝説。

連合の悪夢、鮮血事件の主犯。

自分を抜く、歴代最高額一千万ドラクマの賞金首。

笑う死書、召喚大師、鮮血と爆砕の悪魔など多くの異名を持つ傑物、クロト・セイ。

それが、暗辺セイの本当の顔。

それが、今日来た男の正体。

きっとじじいも、全ては把握していまい。

「ククククク……愉快なことになったなぁ、じじい。さてどうなるか……いや、おまえはどうするつもりなんだ？　クロト・セイ……フフ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！」

自分の計画にも支障がでるかもしれない。だがそれ以上に、麻帆良に現れた自分の同類の存在にエヴァンジェリンの胸は高鳴っていた。

ジィーーーー……

そしてその様子を、彼女の従者はずっと録画していたという。

第四十三話・それぞれに思うこと（後書き）

次回は、日常編？という名のギャグ回の予定です。ちょっと遅れるかもしれませんが。

第四十四話・麻帆良観光、前編（前書き）

ちょっと忙しくて明日明後日投稿できないのでできてる分だけ投稿します。
なのでいつにもまして短いです。

ネタ回です。クロス注意。

第四十四話・麻帆良観光、前編

先日の件について、どうなったかサクッと話しておきましょう。

あの日、夜があけてすぐに詠春からぬらりひょんに正式な書状が届きました。

しかも、うやむやにされないように鶴子さんが使者の役を受け持つ形で。

ぬらりひょんも書状を穴があくほど見ていましたが、結局最後には「……うむ」とだけ言って私たちが麻帆良にいることを認めました。

当然ですよね。なんたってあの書状、事前に私や他の最高幹部が詠春と一緒に頭突き合わせて考えた一分の隙もない自信作です。

構想三日、制作半日、大事なことなので二度言いますが自信作です。

これくらいはしておかないと、面倒ごとを押し付けられかねません。

教師とか夜の警備とか。

私たちの表向きの仕事は木乃香ちゃんの護衛ですから、他の裏の仕事はしません。夜は夜で忙しいんです、主にプライベートで。

「……そろそろ私を呼んだ理由を教えてくれないかい？　それも、こんな早朝に」

おっといけない、忘れるところでした。目の前にいるのは先日傭兵だと名乗っていた少女、龍宮真名。

今いる場所は比較的朝早くからやっている超包子という路面電車を改造したお店。安くてうまいで評判だとか。

……店主のチャイナ服を来た娘から変な視線を感じるんですが……まあ今は捨ておきましょう。

「無論、依頼に決まっているでしょう。……情報が欲しいのですよ、麻帆良の地理に関すること、主に都市部の」

「……前にも言ったが、言えることと言えないことがあるぞ」

私の言葉に、すっと目を細める。ここらは傭兵としてのプロ意識で

すかね？　昨晩遅くに刀子ちゃんから電話があったので、何か知っているのかもしれませんが。

「ええ、わかっています。私が知りたいのは――――」

少し間をおいて、私の素性を知り警戒しているであろう少女を笑う。

「――――この麻帆良の美味しいお店と、その場所ですよ」

あ、チャイナ娘がこけた。……あのラーメン、私が頼んだ奴じゃないでしょうね。

――――

翌日。

日が経つのは早いです。しかし昨日は驚いてましたよ、真名ちゃん。ポカーンという擬音はああいうときに使うんでしょうね、きっと。

でも情報はきちんと教えてくれました。流石傭兵。

あと、ラーメンは私のでした。豚骨だったのに。

……こほん。麻帆良の美味しい店情報、別に私がさよさんと町を出歩くための情報ではありません。

一応、二人で今の麻帆良の道を覚えるという目的があります。

……一応。

あ、それと今日から麻帆良侵攻作戦の第二段階の一部、“麻帆良内における拠点確保”が第一段階と平行して始まります。

これはダイオラマ魔法球の応用と白刃乃さん配下の技術屋集団を動員する計画で、ぶっちゃけ麻帆良ですることは土地を買って邪魔な物壊して更地にするだけです。

あとは魔法球から建物を出せばそれで終了。麻帆良からすれば一日で麻帆良に関東呪術協会の拠点ができるんですから驚くでしょう。

ちなみに建物は技術屋集団が別の場所で鋭意建設中。

更地にするのはグレーな領域の解体屋さんに頼みました。ある程度裏に通じているとかで、予算をかなりはずんだら早速今日から来てくれることになりました。

今日も、もう既に社長以下総出で来てくれてるんです。この分なら案外早くホテル暮らしから抜け出せそうです！

……ただ気になることが幾つかあるんです。

社員総出で来てるのに建機が少なかったり、専務と技術部長がなんか改造された野戦砲？みたいなのを準備してたり、裏の匂いのする営業部長がにこやかな笑みを浮かべてたり、社長と秘書さんがラブってたり……

いえ、やっぱり気にしないことにします。彼らは仕事をする。私はお金を払って更地をゲット。みんなハッピー、それで良いんです。詮索なんてしません。

……会社の名前？　工具楽屋さんでしたけど？

……さて、早くさよさんを呼んで来ますかね。

第四十四話・麻帆良観光、前編（後書き）

次回こそ日常編を……！

第四十五話・麻帆良観光、後編（前書き）

結局ネタにまみれてしまった……

第四十五話・麻帆良観光、後編

ある晴れた日の昼下がり、麻帆良の繁華街を一組の男女が歩いていた。

男の名前は本名を玄凪セイ、女の名前はさよと言う。見てわかるとおり夫婦である二人だが、今はわけあって玄凪ではなく暗辺（くらべ）と名字を偽っている。

玄凪の名は知られると厄介なことになるので、妻のさよにいたってはこの麻帆良に来てからはずっと認識阻害の眼鏡をかけているほどの念の入れようだ。

そんな二人だが、見た目は仲の良い夫婦そのもの。腕を絡ませ、体を密着させて街を歩いてゆく。

二人の格好はそろいのセーターの上に、グレーのマフラー。下は黒のデニム。ちなみに、二人で一つのマフラーをしているわけではない。

二人は特に会話することもなく目的地へ向かって歩いていく。

今はまだ無理に何か話す必要はない。今日一日、時間はたっぷりあるのだ。

目的地は昨日傭兵の少女から仕入れた情報のお店の一つ。安くて美味しいと評判の店らしい。

まずはお昼を食べて、それからは麻帆良を巡りつつ買い物をする。

餡蜜の美味しいお店も既に把握済み。

二人で歩き、二人で感じる。

好きな人と一緒にいられる久しぶりの平穏に、二人の心ははずんでいた。

――――

からんころんからん。

入り口の戸を開けて入る時に、取り付けられていた木の板と棒が接触して客の来店を示す軽い音をならす。

「いらっしゃいませー！」

やってきたお店は、少女の情報の中でも味が◎になっていた数少ない店の一つ。その名も「定食・天川」。

“店主と良いとこの出だった奥さんは若い頃に駆け落ちて麻帆良に来た”という注釈があったのだが、だからどうしたとセイとしては言いたい。別に言わないが。

「何を頼みますか？」

「どれも美味しいって話でしたけど、悩みますね。私は……ハヤシライスにします」

「じゃあ……私、オムライスにしようかな」

少し黄色くなったお品書きには、定食の他にも和と洋のメニューが載っている。それらをしばらく眺めた後で、二人はそれぞれに注文した。

注文した物ができるまでのしばしの時間、店の中を見渡したり、たわいのない話をしたりする。

内容はここ何年かの出来事。六年前の鶴子の結婚式や、鶴子の妹素子が浦島の後継者と共に“妖刀ひな”をもってきたときのことなど。

息子のコウがアメリカのマフィアと大立ち回りを演じたことを後から知ったり、幹部の白刃乃が『長、少し異世界へ旅行してくる』などと言い残して行方をくらましたこともあった（この時のお土産は不思議な匂いのオレンジジュース。即日破棄された）。

中でも、一番緊迫したのは三年ほど前、東大付近に謎の飛行船団が現れた時のこと。

厳戒態勢がしかれたが、蓋を開ければ関東のひなた荘に関するごたごただった。

謎の飛行船団の正体は南の国の王立空軍だった。指名手配犯の乗ったセスナ機を追っていたとかいないとか。

政府には知らせてあったらしいが、正直ふざけるなと言いたいできごとだった。

「お待たせしましたー」

ほんの少しの間話しているつもりだったのだが、どうやら思った以上に話し込んでいたらしく、料理が運ばれてきていた。

運んできたのは少し紫がかった藍色の髪をさよ以上に長くのばしたおかみさん。

いつも明るい笑顔を浮かべており、それがこの店のリピーター増加にも繋がっているとか。

「ん……？」

セイは一晩ねかせた濃厚なハヤシライスを食べ始めたのだが、なぜか向かいのさよがオムライスに手をつけていない事に気づいた。

なぜかと思い覗きこんでみれば、出てきた料理、オムライスの上にケチャップでハートマークが――――

「せ、セイさん」

「……なんですか？」

ケチャップのハートを崩してから、トロトロのオムライスにスプーンを入れて――――

「あ、あーん」

「っ！！！！」

さよはそれを、少し頬を羞恥からか赤く染めて、そのままセイの口の前まで持ってきていた。

この時間、少し遅いとはいえまだ昼時、店内には少なくない客がいる。

いつの間にかその視線が集中しており、厨房の方の店主夫妻は仲良くサムズアップ。

この時、セイは思った。

――はめられた、と。

出会って二十年以上たった今でも初々しい反応をするさよは可愛いと思うが、それとは関係なく汗がにじむ。

オムライスが嫌いな訳じゃない。

卵アレルギーでもない。

しかし、いくらなんでもこの状況は辛すぎる。

「……」

さよも、頬を赤くしたままじっとこちらを見ているのでごまかしはできない。

選択肢は、一つだけ。

食べない訳には、いかないだろう。

「……っ！！」

それを口に含み、咀嚼する。

固唾をのんで、こちらを見守る店の客と店主夫妻。

「美味しいですね、さよさん」

その瞬間、とくに理由もないのに歓声があふれた。

――――

「……ぷっ」

「くくくく……」

「アハハハハハハ！」

同刻、白刃乃謹製スパイカメラでその様子を見ていた幹部たちは、天乃五環で大爆笑していた。

後日、このことを知ったセイによって天乃五環に血の雨が降ったことは言うまでもない。

第四十五話・麻帆良観光、後編（後書き）

さて、次回からどうなるやら……

頑張ろう！

第四十六話・人でないということ（前書き）

明日は忙しいので今日の内に投稿します。

短いですが……

第四十六話・人でないということ

夜。

世界が闇に包まれる時間。

雲に遮られて月の光は無く、面に出せない暗い話やイケナイことをするにはもってこいの刻。

この麻帆良でも、それは同じ。

暗躍する者たちは、闇に紛れて動き出す。

いつもであれば、少女はそれを阻止せんと刃を手に森を駆ける。

しかし、彼女は今日は非番。

で、あるにも関わらず彼女は夜に出歩いていた。

時間は夜の七時。中学生が出歩くにはいささか遅い時間だが、必ずしも咎められる時間でもない。

宵の口、彼女は歩く。

目指すは、麻帆良内部に堂々といる“敵対組織”の仮の拠点。

今は、ホテルのワンフロアを貸し切っているらしい。

相手は関東呪術協会の長で関西呪術協会の最高幹部、暗辺セイ。

神鳴流の先達にあたる葛葉刀子にすすめられた人物であり、普通であれば話すことさえ叶わない裏の重鎮。

それが、今から会いにいく相手。

「ここか……」

少女、桜咲刹那には、ただのホテルが魔窟に見えた。

――――

「よく来ましたね。話は刀子ちゃんから聞いています。さ、座って」

夜に訪ねてきた少女、桜咲刹那をソファに座らせる。

防諜面の問題からワンフロアを貸し切っていたが、実際に使っているのは数室程度だ。

その中の、主に自分とさよが使っている部屋に案内して座らせた。

刹那は少し、面食らっているようだ。裏の重鎮がフレンドリーなら、誰でもそうなるか。

……事前に刀子から聞いた話は、自分について悩んでいるということだけ。

刀子本人はもっと具体的な話を聞いているのだろうし、最高幹部という立場上、機密も知れるわけで、悩む理由も予想はできる。

しかし、それに安易に答えはやれない。

刀子も答えを伝えるだけならできただろう。

だが、彼女はそれをしなかった。だったら、自分も答えをやるべきではないのだ。

与えるのはヒント程度に留め、答えは自分で探させるべきなのだ。

……無論、多少のおまけはするが。

「さて、話を聞きましょうか？　お嬢さん」

「……はい」

――――

「……なるほど」

「……」

「なるほどなるほど」

刹那ちゃんから聞いた話は、ある意味で私の責任ともいえることでした。

半人半妖。その存在はとても歪。

人でなく、妖怪でもない。

同時に、人であり、妖怪でもある。

それは、人の解釈によって在り方はたやすく変化するということ。

人外であるがゆえの危うさと言うべきか。

「……私の罪でもあるか」

「は？」

「いえいえ、何でもありません。……それで、あなたがどうすれば良いのか、でしたね？」

「はい」

さよさんが淹れたホットミルクを手に持つ少女を見て、言葉を選びつつ話していく。

「あなたが刀子さんに言われたことは、正しいことでしょうね」

それを聞いて、刹那ちゃんはしゅんとしてしまいました。

不味いですね、一時期の素子ちゃんと似たような症状です。これを放っておくと、反動でエラいことになるんですよ。

「護衛という意味でなら、今のあなたでは及第点にも届かない。友であるにしても、あなたから離れているようでは木乃香ちゃんを傷つけるだけでしょう。なぜあなたは彼女のそばへ行かないのか」

「それは……」

「言えませんか」

刹那は沈黙する。それは少女の最大の禁忌。

もっとも慕うお嬢様に知られてはいけない絶対の秘密。

しかし、ここでの沈黙は意味を成さない。

刹那が生まれる前から最高幹部をやっているセイが、知らないわけがないのだ。

「あなたが人でないからですか」

「っ……！」

刹那が硬直するが、構わず続ける。

「あなたは厳密には人ではない。髪は染めているのでしょう？　ですが、あなたが木乃香ちゃんから離れる理由は他にある」

「それはっ……」

「詠春からも聞いていますよ。……白い翼だそうですね」

「……はい」

とても、とても小さな声だった。

白い翼。ごくまれに現れる強い力を持つ者の色。

烏族における禁忌の色。

それゆえ、彼女は万が一木乃香にまで忌み嫌われることを恐れ、彼女に近づけない。

自分の存在が、木乃香に裏を教えてしまうという理由もあるが。

「……まぁ、別にどうだって良いんですけどね、そんなことは」

「……え？」

うつむいていた少女が、顔をあげた。

「良いですか、刹那ちゃん。あなたは勘違いしています」

「勘違い、ですか？」

「そう、勘違い。……例えば、私を含め私の家族に純粋な人間は誰一人としていません」

「そうなんですかっ！？」

……あ、そういえば機密でした。まぁいずれはばれることです。

そう思い話を進める。

「とにかく、私は幸運にも家族を持つことができた。妻を得て、子

宝にも恵まれた」

「……」

「要は、人でないということは、人として生きられないということではないのですよ」

刹那は目を見開いた。

「で、でも。それは暗辺様に力があるからで……」

「それはまた違う問題です。確かに力は重要ではありますが、私だって最初から力を持っていた訳ではありません。私が今の地位にあるのは上手く立ち回った結果。今の実力は努力の結果」

そして、戦争で血にまみれて勝ち取った結果、とは言わない。

「これは私の考えですから、あなたがどう思おうとかまいません。これでも最高幹部ですから、欲しいものもありますし、欲もある。あなたも、やりたいようにやればいい」

仮に刹那が木乃香と歩むとしたら、困難は多いだろう。

疎ましく思う者はきっといるだろうし、本当の刹那を木乃香が受け入れるとも限らない。

それでも――――

「あなたが何を選ぶのかは知りません。しかし、私はあなたが木乃香ちゃんと歩むことが悪いことだとも思いません。もう一度いいましょう。やりたいようにやればいい」

――――

「やりたいように、やればいい、か……」

夜の町。街灯を見上げながらのんびりと歩く。

会ってみたものの、やはり答えはもらえなかった。

しかし選択肢はくれた。

自分でも、お嬢様の隣へ行けるかもしれない。

戻っても、良いのかもしれない。

そう思えるようになったのだから、やはり行って良かったのかも。

「お嬢様……」

自分は、どうすればいいのだろうか？

どうしたいのだろうか？

少女は、歩きながら考える。

行きにはなかった、月の光に照らされて。

第四十六話・人でないということ（後書き）

何かクロスで一発ネタをやろうかと思っています。

なにか良いクロス作品はないですかね？

マニアックな物でも良いんですが……

閑話・長（セイ）の知らないところで（前書き）

今回は閑話でなく本編でも良かったのですが、セイの出番が無いので閑話にしました。

また、今回は一発ネタの会では無いです。

次回は一話きりの一発ネタの予定ですが。

なので、一発ネタのクロス作品の募集を明後日金曜日の夕方で締め切ります。何かネタのある方はそれまでによろしくお願いします。

既にご協力いただいた方にはこの場での感謝を。

ありがとうございました！

それと、無理にマイナーな物で無くてもいいですよ？　マイナーでも問題ないというだけで。

あとがきにオマケを付けた為に、長くなりました。それではどうぞ！

閑話・長（セイ）の知らないところで

「諸君、非常に残念な事に……我々は、敗北した」

閑話・長（セイ）の知らないところで

天乃五環、最下層秘密会議室。

長であるセイでさえも知らないその場所は、関東呪術協会の今後を決める為の場所。

当然、リーダーは白刃乃。開発する物は魔法関連の物から機動兵器まで多岐にわたる。

もっとも、それらの大半は技術力の証明として『作りたいから作る』

のであって量産はされない。

それに、ここ最近は麻帆良の侵攻計画に関する物の研究開発とその製作に忙しく、技術者たちの開発魂も満たされていたので大きな事件も起きていなかったのだが――――

「白刃乃本部長、敗北とは聞き捨てなりませんよ。我々は日々時代を先取りする発明を次々と作り出しています。たとえ麻帆良にいる、かの超鈴音が相手だったとしても、そうそう遅れをとるとは思えません」

超鈴音。麻帆良にいる天才児。関東呪術協会研究開発部門に比肩し、対抗しうるほぼ唯一の存在。

故に、常に麻帆良にはある程度のスパイカメラを配置し情報を探っているが、開発本部長の白刃乃が“敗北”という程の物を彼女が作ったていう情報はない。

「それにほんぶちょー、負けたて言うても何で負けたん？　そら人型ロボットの分野では負けとるけどさー、正直それは今更だよー？」

確かに、麻帆良の超が作った茶々丸シリーズは開発部から見ても非常に高い完成度を誇る。

魔法と科学の融合。そしてありえないまでに高性能な人工知能。

しかし、それは前からわかっていたことであり、今更この場で、まして白刃乃が言う事ではない。

「いや、負けたのは人型ロボット分野じゃない。まして、超でもないんだ」

室内にいる面々は疑問を覚えた。超でないなら一体誰に？　そしてどの分野が？

「ＲＥＩ力系動力炉部門ですか？」

「違うよ」

「次世代量子型スパコン部門？」

「それも違う」

「……では一体？」

「見てもらった方が早いね。映すよ」

そして、プロジェクターから壁に映し出されたのは———

「なんだ、これは……」

「本部長、これはどこの物ですか！？」

「馬鹿な、全長約八キロだと！？　天乃五環より三キロも……」

「やられたな。複数の艦船を連結するとは……！」

中央に二艦、左右に前後三艦、計八艦が連結された空を行く巨大艦。

「連結式準バハムート級航空都市艦。名を、武蔵というらしい」

さらに、追加で追加でより詳しい情報が映し出されていく。それらの情報のウィンドウが増えていく度に技術者たちの顔が青や赤になり声がもれる。

やがて話す者は、いや話せるものは誰もいなくなった。

「――――諸君もわかっているだろうが、この艦船はこの世界の物ではない。だから、そもそもの設計思想、ドクトリンが大きく異なる。
　この八隻で観光、行政、外交、生活と生産など一つの都市、いや国としての機能を成り立たせているのだからね」

それを、この部屋にいる者達は黙って聞いている。いずれも裏に属するが故に名こそ知られてはいないが、皆技術大国日本で超一流と言われるに足る知識と技術を持つ者たちだ。当然、それに見合ったプライドも。

「それだけじゃない。通常運行システムの他に、重力航法システム、情報遮断型のステルス障壁まであるらしい」

そんな彼らが持てる全てを出して設計、建造したのがこの天乃五環。

関東呪術協会の本拠地として、長に秘匿してまで航行機能を搭載した要塞級の空中機動戦艦。

科学的な面だけでなく、呪術的、魔術的な技術をも取り入れ、それらを融合させた最新鋭の設備と装備。

前人未到。魔法世界でさえありえない全長五キロという大きさは自分達の夢そのものだった。

白刃乃が言った呆れる程に短い工期。多くの苦労と挫折を味わいながらもそれをやり遂げた自分達に誇りを持った。

だが、目の前に映し出されたこの艦船はなんだ？

八キロ近い巨大な艦船でありながら変形機構を備える上、惰性飛行で百二十ノットという非常識なまでの速度。

自動人形という確たる自我を持つ存在による非常に高度な管制シス

テム。

流体という全く未知のエネルギー。

そしてそれを用いた、大罪武装という名の自分達では考えつかなかった破格の威力を持つ個人武装。

「諸君、もうわかっているね？　我々の敗北とは技術力の敗北ではない」

白衣をひるがえし、固く握りしめた拳を掲げる。

「――――科学者として、技術者としての発想力で負けたのだ！！」

発想力で負ける。それは、技術者だけでなく“技術屋”としても致命的な敗北と言えるだろう。

自分達が全力を注いだ天乃五環は、全てとは言わないが多くの点で劣っていると“言えてしまう”。

「諸君、このままでいいのか？」

――――否。

「こんな物を見せられて、黙っているのか？」

黙っていられる、わけがない――――！

「君たちは、どうしたいんだ？」

――――作りたい。もう一度、自分達の全てをかけて！！

「ならば私は今ここに、新たな計画を提案する！　麻帆良侵攻計画の一環として予算をかすめつつ、天乃五環を超える新たな艦の設計を始めようじゃないか！！」

「「「「うおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！！」」」」

にわかに沸き立つ会議室。新たな艦の設計、それも最低でも八キロを超えるという目標があるのだから大仕事だ。やりがいもある。

しかし、この会議室にいるのがいかにマッドな奴らが多いと言っても、流石に冷静な者もいる。

「しかし、設計チームを組むにしても、人がいなくなればいくらなんでも長にばれます。それに、麻帆良侵攻計画の準備があるのに平行して行うのは無茶があるのでは？」

「それに関する対応は既に考えているよ。これを使う」

パチンと指を鳴らすと、床の一部がわれて、大きな水晶玉の置かれた台がせり上がってきた。

「ダイオラマ魔法球。これは私が一から作った特別製で、同じ物を幾つか用意した。内部空間の広さと時間の流れもいじってあるから、設計と建造はこの中ですることになるね」

「では、長は？　今は麻帆良ですが、何かあれば文字通り飛んできますよ」

「それも、問題ない。手は打つから」

にやり、と白刃乃は笑う。包帯のせいで目元と口元しか見えないが、悪い笑みを浮かべているのがよくわかる。

「長には少しの間……別の世界に行ってもらおう。その間も麻帆良にはさよさんや志津真夫妻がいるから問題はないしね」

「そうですか……ならいけますね」

いかに冷静とはいえ、長を異世界にやるのに何の反論もしないあたり、やはり彼も常人とは違うのかもしれない。

――その後は設計の担当者や持ち回りなど大まかな事を決めていき、ひとまず解散することになった。

「――さて、それじゃ最後にこの計画の名前をみんなに教えておこう」

白刃乃の言葉に、帰りかけていた者たちの足がいったん止まる。

「“那由多”計画。目標は、最低でも全長十五キロだ！！」

この時、セイは得体の知れない悪寒に襲われたていう。

閑話・長（セイ）の知らないところで（後書き）

～オマケ～

「しかし白刃乃本部長、どうやってこんな情報手に入れたんです？」

「ん？　ああ、私が異世界間を移動していたらある世界でたまたま見つけたんだ。
直接調べに中に忍び込んだら鹿の角みたいなのを持ったメイドさんに見つかってね？　いやー大変だったよ」

「はぁ……？」

「でもまぁ、今度はあの自動人形とやらの詳しいデータが欲しいなぁ…」

あくまでも自分の欲望に素直な白刃乃だった。

閑話・月の下で（前書き）

というわけで一発ネタの回です。

タイトルからでもわかる方はわかるかもですね。

深夜に話をまとめたので変なところもあるかもしれませんが、そこは勘弁してください。

閑話・月の下で

「本当にいいのですね、ストラウス」

「ああ」

閑話・月の下で

これは、赤バラと呼ばれた至高の王と、黒い白鳥を宿す少女の千年を超える因縁の決着を付ける決戦の、前と後のお話。

「最後にもう一度だけ聞きます。本当に一人で、一人だけでいいのですね？」

「ああ、それでいい」

「後悔はしませんね？」

「後悔など……」

赤バラ、ローズレッド・ストラウスは目を伏せて笑う。

どこか、とても疲れたように。

「この千年、後悔しなかったことなどない。後悔したところで、どうにかなる問題でもない」

それよりも、とストラウスは目を開けてセイの方を見る。

「セイ、君の方こそ大丈夫なのか？　あらかじめ陣でも敷こうものならブリジットはもとより、花雪にも何かあると気取られて君の身が危うくなるぞ」

ストラウスの言葉に、今度はセイが笑う。

「それこそ、今更でしょうに」

そうだったな、とストラウスもまた笑う。

「君がこの世界に落とされてから、もう千年近く経つか」

千年。

言葉にすれば簡単だが、現実には恐ろしいほどに長い時間が流れた。

もう思い出すのも難しくなったが、千年前突然見知らぬ世界に来たときは困ったものだった。

なにせ、初めは白刃乃のいつものいたずらで、今度は過去に飛ばされたかと思っていたら、その実よく似た異世界だったというのだから。

吸血鬼の国があると聞いたときは驚いたものだ。

幸い、運良く当時夜の国の大将軍であったストラウスに右往左往しているところを助けてもらい、彼のツテで夜の国の将軍であった彼の義理の娘ブリジットの補佐役という安定した生活の基盤を得ることができた。

九割がた違うが一応人間であったため多少のゴタゴタはあったが、大将軍であるストラウスの恋人ステラも人間であるということで表だった問題もなかった。

しかし、不老の身ゆえ老いて死ぬことはなかったが、千年は余りに長すぎた。

いくら白刃乃といえど、こんなことをするつもりはなかったのだろう。おそらくは、自分を異世界に飛ばすのも本当はほんの少しの間のつもりであったはず。

だが実際は平行世界、それも千年以上前に飛ばされた。

理由はおそらく、人の部分が少なくなり、人外となったこの体。

それが何か致命的なエラーを引き起こしたのだろう。

迎えを待つこと千年。いまだに何の音沙汰もないが、諦めてはいない。

無限に近い数の世界がある中で、自分を見つけることは不可能に近いのかもしれない。

だが、世界間転移と、ハプニングとはいえ時間逆行という二つの奇

跡を成し遂げたのがあのマッドサイエンティストだ。

保険として霊力パターンの記録などはしているだろうし、何らかの手段は講じているはずなのだ。

「――いろいろ、ありましたからねぇ」

「……そうだな」

夜の国、セイバーハーゲン、腐食の月光にブラックスワン。

良いことも、悪いことも、たくさんあった千年間。

ストラウスは世界の悪役となり続け、自分はストラウスと別れて一人日本の、元の世界で麻帆良があったであろう湖の湖岸に小さな小屋を建てて千年間、いつか元の世界に戻れることを夢見てそれまで己を鍛えるために引きこもった。

再びストラウスと再会したのは四十年ほど前のこと。

ストラウスが日本にアーデルハイトの封印を探しに来ていた時のことだった。

彼は騒がしい女の子を、レティシアという少女を連れていた。

当時は少し驚いた。

ブリジットすら世界の安定のために真実のひとかけらすら与えずに捨ててきたストラウスが、再び誰かをそばに置くとは思っていなかったからだ。

それに、自分も誰かを近くに置くことはなかった。誰かを置けば、さよやコウ、春香……自分の記憶から何より大切なものが消えそうな気がしたから。

そして今日に至り、ストラウスは一つの区切りを迎えようとしている。

それは、自分もまたしかり。

直感、とでも言うべきか。そろそろ“迎え”が来そうな気がするのだ。

「それで、結局このことは誰かに？」

「誰にも。ただ、森島にだけは私と花雪の決着がついた後で君が動くとだけは伝えてある」

「森島三佐に？　それはまた……」

今度もまた身内には何も言わずに秘密のままかと、男二人して笑った。

――――

「逝ったのですか、ストラウス……」

月の光の下、千年来の友人が彼の最愛の者と共に空へと、かの星へと昇ってゆく。

それを確認して、自分も彼との約束を果たすために最後の仕事を始める。

「術式……起動！」

天を目指す黒鳥を閉じ込めるかのように空を覆い尽くす術式陣。いずれもが巨大かつ緻密。本来は麻帆良で使うはずの物を、自分一人でも扱えるようにこの日の為に改良したものだ。一つの陣は大きな物で直径三キロを優に越す。

それらが数百数千重なりあうように展開していき、やがて一つの球

を創り出す。

まるで、夜に浮かぶもう一つの月のように。

そこに、接近する幾つかの影が。

「セイ、あなたはここまできて何をするつもりだ！！」

それらの正体は、ストラウスを追い続けた面々。

学生であり、ストラウスを追っていた面々の中では一番若いエセルバード高橋。

全身を甲冑で包んだ鎧武者、鉄扇寺風伯。

前代のブラックスワン、小松原ユキと関係が深かった刃蓮火。

そして、ストラウスの娘であり、夜の国の大将軍として自分の上役であった、ブリジット・アーヴィング・フロストハート。

「あなたは！　やっと、やっと楽になれるストラウスに！　一体何をするつもりだぁぁぁぁ！！」

叫びながら突貫してくる四人を、捕縛結界で近づけないように即座に空中に固定する。今も展開した術式陣はブラックスワンの抵抗で軋んでいるのだ。

彼女らにかまっている時間など、ない。

「いいから……黙って見ていなさい、ブリジット！」

「……！！」

ブリジットが目を見開く。軍で仕え始めた時から千余年、呼び捨てにしたのは初めてだ。

「ストラウスがここで討たれたように！　アーデルハイトが月へ行ったように！　私にも友としての、最後に成すべき約束がある！！」

空に浮かぶ二つ目の月が虹色に輝き始め、揺らめくようにその色はうつろい変わっていく。

「最後の最後まで……貴様の思うようにやらせるものかよ、セイバーハーゲン！」

これは、人を再構築する術式。

約束は、ストラウスとステラの子の蘇生。

ずっとずっと昔、春香が自分に使ったであろう物と原型は同じ術。

ただし、自分の時とはあきらかに違う事が一つ。対象が一度完全に死亡していること。

しかし、魂は今もブラックスワンを構成する要素の一つとして存在するのだ。

だから、一度術式としてのブラックスワンを解体し、子の魂を剥離させ、それを核に肉体を再構成させる。

あの場にいるであろう、ストラウスとステラの魂を混合しないようにするのがキモだ。

しかし……

「くぅ……！」

思いのほか、セイバーハーゲンのかけた術式が強い。もとより至高のヴァンパイア、ストラウスを殺すその日まで永劫に保つように組まれた術式。その強度は半端な物ではない。

このままでは、魂うんぬんの前にブラックスワンが術を壊してしまう。

「おおおお

ヴァンパイアでさえ存在しない角に、刃物のように鋭い翼のような突起群。果ては長い尾にいたるまで、それら全てが翡翠色。

しかも、それらがセイの限界近くまで引き出された莫大な霊力に反応して一つ残らず隅から隅まで発光しているのだ。

それらによって、ブラックスワンを押さえ込み、ついには……

「あ……」

術式陣が外側から一つ一つ順に粒子となって消えていく。それは、術が成功した証。

最後の陣が消え、ブラックスワンが再び空へ昇ってゆく。空には残された星が一つ。

それがゆっくりと降下して、やがてセイの腕に抱きとめられた。そこには、桃色の髪をした赤ん坊が。

「なんとか、成功しましたか……」

腕の中で健やかに眠る赤ん坊を見て、ほっと胸をなで下ろす。

しかし、代償は大きかった。

「セイ、その姿は……」

「ふむ……どうやらやっとお迎えが来たようです」

身体がだんだんと透けていく。悪い感じはしないので、きっとあのマッドの仕業だろう。

「ブリジット将軍、この子を頼みますよ？　千年かけて取り返した、ストラウスとステラの子です」

「な、なんだとっ！？」

空の光景に目を奪われていたブリジットが正気に返り、セイの腕に抱かれる赤ん坊を凝視している。

千年前に引き裂かれた彼らの子。それが目の前にいるのだから、驚くのも無理はない。

「さて……それでは、千年間いたこの世界ともお別れのようです」

「ま、待て、待ってくれ！　あなたまで消えるつもりなのか！？」

「ここは私がいるべき世界じゃありませんからね。少し、長居しすぎた感はありますが」

「し、しかし。しかしっ……！」

うろたえるブリジットを見ていて苦笑が漏れる。こんなブリジットを見るのは、ストラウスが初めてステラを王城に連れてきた時以来ではないだろうか。

「ふふっ……心配することはありませんよ、ブリジット。何も私が死ぬわけじゃありません。ただ帰るだけです。果てしない時の流れの中で、いつか再び会うこともあるやもしれません」

「くっ……だが……」

「それではまたいつか会いましょう、ブリジット。貴女にもいと高き月の恩寵があることを願っています」

「っ……！　セイ！！」

「むぐっ！？」

そして、彼はこの世界から消えた。

一人の愛し子を残して。

――――

「と、いうわけなんですよ、さよさん」

「へー、そうなんですか、セイさん。とぉってもよくできた物語ですね。どこかの大賞に応募でもするんですか？」

「いや、だから本当のことで……」

「ふふ、良いんですよセイさん。だからそろそろ“本当”のことを話しませんか？」

ごごごご……

「ですから、さっきから話しているでしょう？　別れ際にブリジットが……」

「三日も留守にして、挙げ句の果てに“キスマーク”をつけ帰ってくるなんて……」

ごごごごごごごごごごごご……！

「あ、あれ、さよさん。なんで符の束を持ってるんですか？」

「決まってるじゃないですか。セイさんが本当の事を話してくれないから、お仕置きするんです♪」

「え、ちょ、やめっ……！」

後日、げっそりとやつれたセイが天乃五環にて目撃された。

閑話・月の下で（後書き）

というわけでヴァンパイア十字界でした。

セイバーハーゲンがたまに正義の魔法使いみたいに見えることがある作者です。

結局、セイバーハーゲンはステラを殺した理由をストラウスが悪いみたいに言ってますが、作者にはセイバーハーゲンが他者を信じられなかっただけのように感じられるのです。

それと、また機会があれば閑話をやりたいと思います。ぜひコレを！という方がいらっしゃれば教えていただければ。

ちなみに、この作品では番外編がネギま！の世界の中でのクロス、閑話が別世界に関する比率が大きい話、となります。

追記。

閑話は、ｉｆではありませんよ？

第四十七話・夢の中で（前書き）

久々の連投。活力があるうちに頑張る。

今回は彼女のターン？

第四十七話・夢の中で

「セイさん、パクティオーしましょう。本契約で」

「……は？」

第四十七話・夢の中で

夢を見た。

気がつくと森の中にいた。

緑が生い茂り、とてもきれいで“生きている”感じがする深い森。

『ははは……』

声のする方を見ると、京都で見た烏族のような格好の子供達が駆けていた。

それをぼうっと見ていると、ふとそのうちの一人に見覚えがあるような気がした。

しばらく誰に似ているのかと考えていたのだが、周りにいた子供の一人がその子の名前を呼んだときにその謎は解けた。

『もー、セイは速すぎるよー』

「……セイ？」

そうだ。この少年はセイに似ているのだ。髪と瞳は黒いが、顔の形といい造りといいそっくりだ。なぜ気づかなかったのだろう？

しかし、もしあの子供がセイだとするならば、ここはまさか――――

「セイさんの、夢の中？」

そう考えるのが一番しっくりくるのだが、ならなぜ自分がここにいるのだろう？

そうこうしている内に、ふっと別の人物が現れた。

頭にピンと立つ獣耳に、着物のすそから伸びる七本の尾。

間違いない。セイの式神の一人、白露だ。

『主、お父上が呼んでおるぞ』

『うん、わかった』

不覚にも、にぱっと笑う小さなセイにときめいてしまった。

その間に去っていく二人を慌てて追いかけていく。

やがて森を抜け、里に出た。建物はどれも石造りの土台の上に木で建物が組まれており、ほとんどが二階以上の大きさを持っている。

里の周りには堀と壁。門の近くには櫓もある。

そして、遠くの小高い丘の上にあるのは……

「世界樹……」

あれほどの大きさの巨木、地形的に考えても世界樹、神木・幡桃で間違いない。

つまり、ここは――――

「昔の……セイさんがいたころの麻帆良？」

この不可解な事態に混乱している間にもかまわず二人は歩いていくので、頭の中を整理しつつ自分も歩みは止めない。

そして、二人はひときわ大きな屋敷の前で一度歩みを止めた。だがまたすぐに歩き出し、門をくぐり、どんどん奥へ入っていく。

最終的に二人が止まったのは、ある一室の前だった。

『御当主、主をお連れしたぞ』

『ご苦労。入ってくれ』

白露が戸を開け、中に入る。中には髪を刈り上げだしかめっ面の偉丈夫と、自分の知るセイとよく似た女性が一人。

どうやらセイは母親似だったらしい。

そして、部屋の中にはもう一人。

『あ、春香ー！』

小さなセイが、前に世界樹前広場で会った春香という女性に抱きついた。春香の方も、セイを抱き上げてから、自分の膝に座らせた。

『春香様、申し訳ありません。……セイ、こっちに来なさい！』

『ふふ、いいんですよ、ゼン。私もセイの面倒を見るのは好きですから』

『ですが……』

あたたかい家庭、と言って良いのだろう。実力主義の裏の世界ではこのような光景はとても珍しい。

だが、さよにはこの光景がたまらなく嫌だった。

ここには、自分がいない。

セイが、自分を必要としてくれない。

心のどこかで、とても嫌な感じがする。

――――自分は、春香に嫉妬しているのだ。

そのことを自覚した瞬間、急に場面が切り替わった。

部屋の中にいたはずなのに、いつの間にか里の中に移動している。

だが、そこはもはや里では無かった。

燃えているのだ。全てが。

建物が、人が、森が。何もかもが燃えている。

炎に包まれた地獄。それがここにあった。

「なに、これ……」

「これは、セイが知る麻帆良の最後」

声のした方を見れば、そこにいたのは世界樹の精霊、春香。
彼女が自分の方を見て、自分に向かって話しかけている。

ここは、彼の夢ではなかったのか？

「それは間違っていないわ。今までみたのは間違いなく彼の見た夢。
古き日の、私がまだ力を持ち、彼もまた正しく人であったころの夢。
今思えば、麻帆良の歴史の中で一番よかった時代ね」

そして、さらに場面が変わる。今度は黒。周り一面何もない深遠の
闇。その中で、自分と春香の二人だけがいる。

「なぜ……？」

「なぜ？　それはどういう意味でのなぜかしら？　私がここにいる理由なら、それは私が彼との“繋がり”を辿ったから。貴女を呼んだ理由なら、それは貴女に頼みたいことがあったから」

「頼みたいこと？」

彼女が、春香が自分に何の頼みがあるというのだろう？　いつも彼の人生の中心にあり、彼の夢の中にすら出てこれる彼女が、自分に何を頼みたいというのだろう？

「あなたに、彼を支えて欲しいの。……彼は、短くて長い間、とても遠くへ行っていたようだから」

遠く、というと、それは昨日セイが話していたことだろうか？
正直、千年前など信じがたいことだったのだが……

「思い当たる事があるでしょう？　……セイは、見かけよりずっと強くないの。
特に今のセイはどこか心がすり減ってしまったような……今は良く

ても、このままだと彼の心が何かのあるばポッキリと折れてしまうかもしれない。だから、あなたが彼を支えてあげて」

――――

「と、いうわけです。さ、パクティオーしてください」

「どういうわけです！？　それ以前に久しぶりに懐かしい夢を見たと思ったらそんな裏が！？　そしてなんでそこからパクティオーという結論になるんですか！？」

「私は楔です」

「何を……！？」

こつん、と一歩さよがセイに近寄る。セイは、魅入られたように動けない。

「春香さんは、セイさんと繋がっている。でも、私にはそれがない。だから、セイさんが遠くに行ってもついて行けない。いざという時、助けられない」

こつん、とまた一歩

「だから、春香さんが戻るまで、私が楔になるんです。パクティオーはそのための二人を繋ぐ鎖」

こつん。ついには、肌と肌が触れあう距離に。

「次は……一人では、いかせません」

そして、顔とか顔が近づき……

「絶対に……」

触れ合った。

第四十七話・夢の中で（後書き）

今回と次の回を書くにあたり、ネギま！原作を見直してたら気づいたんですが、本契約が一人なのは原則であって、魔法使いのキャパシティによっては絶対じゃないんですね。驚きました。

第四十八話・長だって大変（前書き）

今回はつなぎです。次回はいよいよ（やっと）原作一巻……予定！

それと、今回出てくる神鳴流の技は原作やラブひなに出てくる物の剣や閃を掌、拳、蹴に変えたものです。そのままの物もありますが……まぁ全体的におおらかな心で見てください。お願いします。

第四十八話・長だって大変

「ふぅ……」

ため息。理由は、目の前にある“二枚”のカードが原因だった。

パクティオーカード。それが二枚。自分が主の物と、さよが主の物の二種類。当然絵柄も違う。

さよが従者の物は、中央に空色の装束を着たさよが右手に二本の長くて白い杭、左手に白い狐面を持っており、さらにその周囲をおびただしい数の符が理路整然と浮いているというもので、色調は白から翡翠のグラデーション。

数字は４、特性は愛、方位は中央、星辰姓は月。

そして称号が“うつろわざる再誕者”という代物だ。

これはまだいい。色調がグラデーションとかいうだけでも珍しいとかいう話ではないのだが、まだいい。問題は自分が従者の物だ。

まずは色調は黒一色。次に方位は中央。星辰姓は冥王星。特性と方位はさよと同じ愛と中央。

そしてのこる絵柄と称号なのだが……絵柄は、黒を基調とした長衣を着た自分が戦闘形態の自分が、右手に逆手で赤の剣を、左で小さな天球儀らしきものを持ち、首から緋色の面を吊しているというもので、おまけに背後も魔法陣ではなくおそろしく複雑な術式陣に。

しかも称号が“異業の界の統制者”という大層な物で……

「どこのゲームのラスボスだ！」

と叫びたい。凄く叫びたい。最初見た時に一度叫んだらさよさんに笑われたけど叫びたい。

ちなみにまだ一度もアーティファクトは出していない。とてもじゃないが効果が怖くて出せない。時間がある時に魔法球の中で試すつもりだ。

そしてもう一度二枚のパクティオーカードをじっと見た後で、今悩むことでもないとそれらを懐にしまう。

大衆の目があるところでは、余り長い間出さない方が良いからだ。

セイは今、東京発の新幹線の中にいるのだ。その理由は、関東の天乃五環で仕事をしている時にかかってきた一本の電話が理由だった。

第四十八話・長だって大変

――天乃五環第二層後部十八ブロック・第三総合執務室。

そこで、多くの構成員と共にセイは仕事をこなしていた。麻帆良内部では、電子精霊によって機密情報が盗聴される可能性がある。

その為、ときどき天乃五環に帰ってきてはたまった仕事をまとめて片付けているのだ。

電話がかかってきたのも、そんなこんなで延々と働いている時だった。

「長ー、イギリスに飛ばされた白刃乃さんと、先任の神里さんから中間報告きましたー。暗号名“薬味”は遅くとも三日以内に麻帆良に到着するとのことです」

「わかりました。それは破棄しておいてください」

「はいー」

「長、第二縦抗から“ヤバそうな感じのする剣”が発掘されたそうですがどうしますか？　現場主任の葉頭（はず）さんが困ってますけど……」

「それは……“白刃乃リスト”と照合した後で、合致したら二級以上の封印を施して倉庫に突っ込んどきなさい。合致しなかったら一級で、きちっと倉庫のリストにのせておくように」

「開発班から要望書が来てます。爆薬が足りないそうです」

「あー……採掘に使うのなら符で代用しなさい」

「第一から第二十三までの購買部の決算きました！！」

「総務と会計にまわしなさい」

「第二百四番トイレの紙が切れてると陳情が…」

「知るかぁ！！」

繰り返すが、電話がかかってきたのも、そんなこんなで延々と働いている時だった。

「長、京都から秘密回線です！　番号は最高幹部の天ヶ崎！」

関西と関東の呪術協会の間にある秘密回線。教えられているものはごく限られている上、人によって番号が違うのだ。

「っ！　出ます、こちらへまわしてください！」

『とーさまぁ…助けてぇな……』

「どうしました！　何があったのですか！？」

電話の向こうの娘の疲れた声。ただ事ではないと思い、ハンドサインで部下に指示を飛ばす。内容は第二種警戒態勢発令。

『それが……』

『千草ねーちゃん、相手してくれ！！』

『うふふ、千草はん遊んでぇな。コタローはんは相手してくれへんねん』

『ええい、また来よったか……！　今電話しとるんや、後にしい！』

『つれまへんなぁ、千草はん』

『つーまーらーんー。なーなーなーなー相手してぇな』

『……じゃあかぁしぃわーっ！！』

ぶつんっ。

つー、つー、つー、つー。

「「「「……」」」」

――――

というわけである。

それで、新幹線とタクシーを乗り継いで京都は本山までやってきたのだが……

「大丈夫ですか、千草ちゃん」

「無理。大丈夫とちゃう」

千草が、本山の一室でへばっていた。

「どうしてそんなことになってるんです？　あなただってもう最高幹部やって随分と立つでしょう」

「書類仕事の三徹明けにガキどもと全力で相手らしてられへん」

「で、そんなふうにへばっていると」

「とーさま、一日でええんよ。一日だけあのガキどもの相手したって」

「……しょうがないですね。で、どこにいけば良いんです？」

「たいてい、道場か、沢の、あたり、に……すぅ……」

「……おや、寝てしまいましたか」

机に突っ伏した千草をセイは軽々と抱え、すぐに寝るつもりであらかじめ敷いてあった布団に移し、その顔を眺める。

目の下にくまをつくり、疲労困憊といった様子の娘を。

最後に見てから、少しやせたかもしれない。

「ふぅむ……ちょいと悪ガキに灸をすえねばなりませんね……」

この時のセイは、かつて笑う死書と呼ばれた頃の笑みを浮かべていた。

そう、とてもイイ笑顔を……

――――

「おお！？　なんや、兄ちゃんが千草ねーちゃんの代わりに戦ってくれるんか？」

セイが犬上小太郎を見つけたのは、本山の端の方、神鳴流の稽古場の横だった。

どうやら、自分のことは知らないらしい。

「ええ、そうですよ。これでも最高幹部です。……ところで、もう一人の月詠ちゃんと言うのは？」

「ん？　ねーちゃんならかわいい妖怪探しにどっかいった」

「……そうですか」

ひょいと立ち上がり、首やら肩やらをぐるぐる回す。そして、ぱし

んと両の拳を打ち合わせてセイに向き直る。

「よっしゃあ、千草姉ちゃんが今日はすぐにつぶれて暇しとったんや。最高幹部の実力っちゅうのを見せてくれや！」

「いいですよ」

「いくでぷげらぁああああっ！？」

小太郎がセイの“足”を思いっきり顔に食らい、きりもみしながら飛んでいく。やがてぐしゃっという効果音と共に止まった。

「……やりすぎましたかね？」

「……やりすぎましたかね？ちゃうわぁーっ！　なにすんねん！」

小太郎はすぐに立ち上がる。一撃で服がボロボロになったようだが、まだ戦うには何の支障もないレベルのようだ。

そしてセイは小太郎の問いになんでもないように、さも当然といっ

た感じで答える。

「サマーソルトですが？」

「そういうことちゃうわ！　普通は格下にちょっと様子見するとか先手譲るとかあるやろ！？」

「ありませんね」

「即答かい！」

「……なにか勘違いしていませんか？」

セイは腰に手を当て、離れた小太郎を見下しながら言う。

「最高幹部というのは、もっとも高い権力を持つから最高幹部を名乗るのではありません。
協会において、ひいては出雲や伊勢など一部を除いた関西全域において最高の実力を名乗るのが最高幹部なんです。
それに千草ちゃんも私も術者タイプですから、私が格闘というのは

十二分に手加減です」

そして、それは長がその職務にふさわしくないと判断されたとき、実力をもって排除するためでもある。

それを小太郎は唖然とした様子で聞いていたが、それから打って変わって獰猛な笑みを浮かべた。

「上等やぁ！　いけや犬神！」

小太郎の影から黒い犬の形をした影が伸び、四方からセイに向かって伸びていく。しかし、それは虚空瞬動で飛び上がったセイに軽々とかわされ、砂煙を巻き上げただけで終わった。

「んなぁ！？　どこいっ……」

「遅い」

トン…と、小太郎の背中に拳をあてる。

構えも何もなく、無造作に。

「斬岩拳」

「か、あっ……！」

小太郎が、セイの拳に吹き飛ばされる。だが、それだけでは終わらない。

「斬岩蹴……！」

瞬動によって先回りし、大きく上に蹴り上げる。

そして、セイもまたそれを追う。

「斬空掌！斬空掌！斬光蹴！竜破掌からのぉ……斬空掌散！！」

空中パンチ空中パンチ空中キック下に叩きつけるからの打ち下ろし攻撃。ここまで二十六コンボ。

「ぐっ……まだやぁ！！」

小太郎も切り札である獣化を使おうとするが……

「滅殺斬空……」

「げ！　それは止め…！」

「斬魔拳！」

「ぎゃーーー！！」

ーーこれは、あくまで“比較的平和”な関西の本山における“日常”の1コマである。

第四十八話・長だって大変（後書き）

そろそろ妖怪を出そうかな、と考えてたりする。が、マイナーすぎるのもアレだな、とか思ってます。

第四十九話・災禍来たれり（息子編）（前書き）

ついに原作期……しかしまだ薬味の出番はない！

うちの主人公は先生じゃないから絡みづらい！

後書きにアンケートがあります！

第四十九話・災禍来たれり（息子編）

今日、ついにこの麻帆良に赤毛のバカ…ナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールドがやって来ます。

昨夜帰国した白刃乃、神里空里両名の最終報告によれば、品行方正。実直勤勉。礼儀正しく素直ないい子、というのが周りからの評価らしい。

が、実際は禁書庫に忍び込んだりいろいろやっているらしい。まぁ、それくらいなら許容範囲。若いうちは多少の無茶もした方が良いでしょう。のちのち経験として生きてきますから。

問題は、最終報告にあったネギ少年が教師として麻帆良に配属されるという事実。

そう、教師として。

……はっきり言っていただけない。というか腹が立つ。

たしかにこの麻帆良は認識阻害結界のせいで無茶を通して道理をど

こかへ消し去っているから出来なくはないだろうが、いくらなんでもこれは酷い。

木乃香ちゃんのいるクラスは、事実普通ではない人材が多い。

神鳴流の桜咲刹那に、傭兵の龍宮マナ。天才、超鈴音にその協力者葉加瀬聡美。長瀬楓は甲賀の忍者だし、果てはロボットに吸血鬼までいる。幽霊だったさよの席も残されているようだし、普通の先生にはそれは辛いでしょうよ。

だが、普通の生徒だって多数いるのだ。そこに十の子供を教師として送るなど正気の沙汰とは思えない。

絶対に、間違いなく問題をおこすのだろう。むしろこの学園の性質というか、学園長の性格上必然的に起きる。

そして、それを防ぐのが自分の仕事。

だが、少年の監視は難しい。自分はついに完成した住居の結界や隠れ蓑として用意した店のオープンで忙しいし、男である以上女子校エリアで下手に動けば警戒される以前に捕まる。

さよもさよで認識阻害の眼鏡をつけているとはいえ、クラス名簿に載っている以上不測の事態はおこりえる。なのでまだ派手には動けない。

志津真、沙都子夫妻では美男美女のため目立つし、煌にはまだ早い。高畑あたりに補導の名目で拘束されることもありえる。

時雨は……論外。強いが監視などは無理。無謀だ。

なので、鶴子さんに話を通して木乃根を呼ぶことにしました。

連絡をとってみたところ、今は別件で出払っているが二三日中には来れるというので、それまでは自分の式神で何とかすることにしたんです。

いくら赤毛のバカ（ナギ）の息子でも、報告書の内容から判断するに初日から魔法バレはないと思い込んでいたのです。

で、自室で今日の報告を式神から聞いていたのですが……

「朝の電車で、くしゃみで風を起こしてました。私もスカートでしたので……うぅ……」

「その後で、木乃香お嬢様と接触。魔力で身体補助を使い、くしゃ

みの武装解除で少女の服を消し飛ばしてました。アレは女の敵です」

「教室でも障壁を消し忘れたりしていたようですけど……階段から落ちた少女を助けたり、必ずしも悪い子だとは……」

「だが、そのすぐ後にまた武装解除で朝と同じ少女の服を消している。それも、今度は自分本位な考え方の元に故意に、だ。その後でも多くの生徒の前で読心術を使うなど……下手に魔力がある分質が悪い」

上から順に、川姫、肉吸、姑獲鳥、磯女の順番です。全員が綺麗どころなのは、女子校エリアなので男の式神が使えないからです。他意はありません。

とにかく、結論。

私の淡い期待は、もろくも崩れさりました。

あの一族は、とことんやらかしてくれる一族のようです。親が親なら、子も子。蛙の子は蛙というのは事実でした。昔の人って賢いですね、ずばりその通りでしたから。

……あれ？　これ二十年前にも同じようなことが……三回目か？

……気のせいですよね？

とりあえず、これらのことを踏まえて私がまずするべきことは――

「……ああ、どうも。私です」

『――。――、――――――？』

「ええ、そうです。問題が発生しました。以前決めた非常事態レベルです」

『――――！？　――――――！』

「実は……」

関係各所に連絡を入れ、黄昏時の麻帆良にくり出す準備を始めた。

第四十九話・災禍来たれり（息子編）

「と、いうわけで六十分以内に少年の部屋を変えるか、しかるべき措置をとるか、どちらかをしていただきたい」

午後七時、学園長室にて一対一の会談。内容は当然ネギ少年のことについて。本音を言えばこうしてぬらりひょんと話している時間も勿体無い。勿体無いが、ここには高畑がいない。

おそらくはこちらの実力行使を警戒して女子寮方面にやっているのだろう。

「ぬ、ぬぅ……確かに問題じゃが、それはいくらなんでも酷くないかの？　それに彼は子供じゃ。多少のことは目を瞑ってもらいたいのう。
しかも六十分以内など部屋の用意ができんぞい。もともと部屋が空いとらんから木乃香に頼んだんじゃし」

額から汗を流しながらも、できれば内政干渉は控えて欲しいんじゃが…と、ぬらりひょんこと近衛近右衛門は付け足す。
その人を食ったような表情に、さらに苛立ちがつのる。

――その余裕、今すぐ無くしてやりましょう。

「……これは別に教えなくても良いことですが」

「む？」

「京都では、大戦の英雄が目の色を反転させて刀を研いでいるそうですよ？　彼の諸々の準備が完了するまで……ああ、あと五十八分になりました」

「ほあっ！？　まさか婿殿にも報せとるのか！？　というか六十分とはその時間じゃったのか！？」

「当然でしょう。木乃香ちゃんの親権は彼にあります。むしろネギ少年が……魔法使いが同室になるのを止められなかったのは私の失態ですからね。報告して当たり前。あと五十七分三十秒」

そう、京都では大戦の英雄こと近衛詠春が本当に野太刀を研いでいるらしい。

夕方の内に秘密回線で京都の詠春に連絡を入れたのだが、それから数分後、千草から秘密回線がかかってきたのだ。

『とーさま、長が凄い顔して刀研いどるんやけどどないしたん！？』

と。それから今度は同じく京都にいる最高幹部、鶴子に連絡をとったのだが、神鳴流ゆかりの秘蔵の品をいくつか詠春が持ち出したそうだ。

なんとか詠春を止められないか聞いたところ、この件にあわせて融和反対派と賛成派が動き出したらしく、それを東に悟らせないので精一杯だとか。

下手に詠春を止めると久々に内紛の危機らしい。

「で、どうします？　この場で正式な返答が得られるなら詠春に連絡しますが、そうでないなら……」

――この麻帆良が、戦場になりますよ？　と続きは言わない。言わずともこの妖怪もどきならわかっているだろう。

「……本気かの？」

何をいまさら、と思う。

「前にも言ったかもしれませんが、我々を舐めていませんか？魔法使い。我々は警告はしていた。それを“お願い”と勘違いして勝手なことをしたのはそちら。戦争になったとするならば、無論原因はそちらにある。
英雄の息子の首が胴体と泣き別れても、それは余りに未熟な彼自身とあなた方の責任です。我々はなんら関知するところではありません」

静かに、それでいて確実に少しずつ魔力と霊力が練り上げられ、二人の間で渦を巻く。

「……そのようなこと、ただで済むと思うてか？　こちらの背後に何があるか、忘れたわけではあるまい」

すっかり昼行灯から裏の最強クラスへと変貌したぬらりひょんが言うが、その程度わかりきっている。

だが、あえて何も言わずに席を立つ。近右衛門は私が譲歩したのだろうと魔力を拡散させるが、実際はそんなことはない。

なぜなら近右衛門の背後、麻帆良の上位に位置するものと言えば、魔法世界最大の大国、メセンブリーナ連合。そしてその元老院のことである。関東呪術協会発足の頃と違い、随分と立ち直って来てはいるが……

部屋から去り際、扉を閉める間際に、部屋の中の近右衛門に言う。

「……元老院ごとき、私一人でもどうとでもなりますよ」

――――二十年前のように、ね。

「な……！？」

そして、扉を閉めた。

――――

ここから先が正念場だ。

近右衛門がネギ少年を木乃香ちゃんから離せばそれでよし。離さぬならば、詠春は止まらない。

となれば、計画は完全に崩壊する。

時期が早すぎるのだ。これまでも時折計画を前倒しにすることはあったが、今はまだ全体的な計画が第三段階までしか進んでいない。

それを防ぐためにも、もう少し適度な圧力をかける必要があると判断し、懐から取り出した携帯電話をプッシュする。

「――――ああ、もしもし白刃乃さん。イギリスはどうでしたか？」

『楽しかったと言うと思うかい？』

「はははは、そう怒らないでください。元はといえば悪いのは貴女で

す。それを短期間の国外任務で済ませたのだから感謝されても良いはずですよ」

『それは違うよ、長。あの件は完全に私の落ち度、また別の形で埋め合わせる。……それで、麻帆良でなにか？』

「ええ、少しばかり厄介ごとが」

『あなたが厄介という位だ、相当なんだろうね』

「それはもう。ただ、その件で少し保険をかけて起きたいんですよ」

『具体的には？』

「“例の物”が仕上がっているなら一隻、一応神里さんの部隊を乗せて麻帆良北西十五キロの所に待機させておいてください」

『いいのかい、アレを見せてしまって』

「アレくらいなら問題ありません。空挺の運用くらいにしか考えないでしょうよ」

『それもそうだね。普通はあんなことの為にわざわざこんな物を開発しないからね』

――――双胴飛行船なんて、さ。

第四十九話・災禍来たれり（息子編）（後書き）

◇常日頃、皆様が駄文と言っても良いような拙作を読み続けてくださっているおかげで、もうすぐＰＶが二百五十万になります。

◇このことに関して、少し気が早いのですが、今のうちにこれまでご愛読してくださった皆様に厚く御礼を申し上げます。

◇誤解の無いように申し上げすが、打ち切りじゃないですからね？まだまだ続きますからね？

◇……さて、話は変わりますが二百五十万ＰＶが突破した後で、何かやろうと思っている次第であります。

◇と、ここでやっとアンケートです。投稿するときは本編と一緒に投稿するので本編が遅れることもありません。また、原則一話のみです。

?.外伝
（本編内でのサブキャラの話。クロスなし）

?.番外編
（本編内でのサブキャラ、あるいはメインキャラの話。クロスあり）

?.閑話

（本編外、ネギま！とは違う作品世界での話。前回の閑話で使われなかった作品でのクロスもありえる）

?.作者が予想しなかったこと
（皆様が何かこんなのどうよ？という企画があればどうぞ）

◇アンケートは以上四つになります。キャラのリクエストももちろん受け付けます。

◇最後に、読者の皆様方、これまでありがとうございました。これからもこの作品をよろしくお願いします。

第五十話・魔法使い達の憂鬱（前書き）

投稿できる内に投稿します。

第五十話・魔法使い達の憂鬱

「……と、以上のことから暗辺セイが大戦で名を売った傭兵、クロト・セイであるというのは間違いないようです」

麻帆良学園長室。夜のわりかし早い時間に集められたのは、この麻帆良の中枢を成す者達。

学園長を筆頭に、大学部の明石教授やシスターシャークティ。それにガンドルフィーニ、葛葉刀子、二集院光、瀬流彦など。

タカミチ・T・高畑はこの場にいない。ネギ少年を自分の部屋に移すために女子寮の神楽坂明日菜・近衛木乃香両名の部屋に向かっているはずだ。

「学園長、この麻帆良周辺に不審な飛行船が現れたとも聞きましたが…」

「…うむ。明石君」

シスターシャークティの問に、近右衛門は目で合図を出した。

「確かに、七時三十分頃、麻帆良北西十五キロの地点に突如として所属不明の飛行船が現れました。これがその写真です」

学園長室の壁に映し出されたのは、巨大な“二つ”の船体を持った“一つ”の飛行船。

写真は衛星から撮られたのか真上からの写真で、いささか画質が荒れている。

「……そして、学園長がネギ君を高畑先生の部屋に移すとクロト・セイに伝えてから三分後の写真がこれです」

「……！」

その写真に、室内にいる者達は息をのむ。

写真の飛行船は、その巨体の前半分が透けて消えつつあるのだ。

「光学迷彩、もしくはそれに類する魔法か……明石教授、追跡は？」

明石は黙って首を横に振る。

「学園長、いくら何でも危険すぎます！　関西の幹部として来ているというなら、詠春殿と交渉して他の幹部と変えてもらえば……！」

声をあげたのは、ガンドルフィーニ。

「無理じゃ。今回の件、婿殿は単身ここに乗り込むつもりだったようじゃ。交渉するにしても、今すぐにとはいくまい」

大戦の英雄、魔法世界でも名の通ったサムライマスターが敵になっていたかもしれない。

もしそうなっていた時の事を想像し、魔法先生達はいずれも顔を青くした。

「あの…葛葉先生。参考までに聞きますが、クロト・セイについて何か情報があったりとかは……」

それまで何も言わず、ただ瞑目していた葛葉刀子に視線が集まる。彼女は関西の出身であり、あるいは学園長よりも彼については詳し

いかもしれないのだ。

「……セイさんは、私の知る中での最強の一人です。私一人であったなら、不意をつき、尚且つ全身全霊をかけた特攻でも一太刀入れられれば奇跡でしょう。……あの方はそういうレベルの世界の住人です」

「で、でも、後衛主体の術者なら接近戦に持ち込めば……」

「瀬流彦先生、こんな言い方は良くないのかもしれませんが……神鳴流を修めた私でも近づくことは容易ではありません。近づけても、圧し潰されるか四散させられるか……木っ端微塵というのもありえます」

そう語る刀子に、問を発した瀬流彦はさらに顔を青くした。

「このことは、本国の元老院にも報告してある。……動いてくれることを期待するしかあるまい」

召喚大師、笑う死書など多くの異名を持つ魔法世界歴代最高額の賞金首。

それが今、麻帆良にいる。

学園長室の空気は、とてつもなく重かった。

――――

「総督、リカード元老院議員が到着しました」

「どうぞお通ししてください」

新オスティア信託統治領。現在はメセンブリーナ連合の実行支配を受けるこの地にも、クロト・セイに関する情報は回ってきていた。

秘匿されかけたその情報を、運良く入手した男の名はクルト・ゲーデル。オスティアの現総督である。

彼もまた、かつては紅き翼に身を置いた者の一人。

「お久しぶりですね。リカード議員」

「ハッハッハ。お前も随分偉くなったじゃねぇか、クルト総督様よ！　……で？　わざわざ俺を呼んだってことは、何かあったか？」

クルトはリカードに席に着くように促し、自身もまた彼の向かいに腰を下ろした。

「リカード議員。私は大戦中紅き翼に属し、戦場を幾つも巡りました。それは、当時軍の提督であったあなたもそう」

「あん？　そりゃそうだが……それがどうした？　思い出話なんぞ人を呼びつけてまですることじゃあ……」

「クロト・セイ」

「……！」

その言葉を聞くや否や、リカードの表情が引き締まった。その名は連合に所属した兵士にとって、それ以上に元老院にとっては大きな意味を持つ。

とびっきりの、厄ネタだ。

「元老院の上層部は秘匿する腹づもりのようです」

リカードは、フン、と鼻をならす。

「そりゃそうだ。今の上層部からすれば戦々恐々だろうよ。なにせ当時の同僚を皆殺しにされたんだからな。それも、白昼堂々真正面から乗り込んで、な」

鮮血事件。メガロメセンブリアの惨劇とも言われるこの事件は、当時の政界を混沌の底へと突き落とした大戦後期の最大の政変である。

「そこで、当時軍の提督という立場にあったあなたの話を聞かせて欲しいのです。クロト・セイに関する噂でも何でも良い」

「……？　　んなこと聞いてどうする」

「対策を立てます。彼は今旧世界、極東にいますから、そのうちに」

「ああ、無駄だ無駄。あれはもう一つの天災だ。手を出さない方が利口だ。少なくとも俺は部下にそうさせたよ。あの大戦中ずっとな」

「……理由を聞いても？」

「無駄だからだ」

その言葉に、さしものクルトもため息をつく。

「ですから、それがなぜかと……」

「効かないんだよ」

リカードは、クルトの話を遮って言う。酷く、真剣な光を宿した目で。

「アレには何も効かなかった。兵の槍も、魔法も、艦載主砲級の精霊砲であってもだ。それに、大戦中の戦艦撃墜数のレコードはラカンが持ってるが、被害の大きさで言うなら奴の方が格段に上なんだよ」

「……馬鹿な」

「事実だ。しかもやつはラカンの気合いやナギの馬鹿げた魔力頼みの力押しとも違う。悪魔みたいな量の魔力を、完全に制御した上で戦いやがる。はっきり言って、あいつ一人でグレート＝ブリッジよりも厄介だ。考えてもみろ、あいつ一人送り込めば、帝国がやった大規模転移術式と同じ効果を出せるんだぞ？」

クルトもまた、旧世界の麻帆良にいる魔法先生達と同じように顔を青くした。

――――クルトは、リカードの知らないもう一つの情報を握っていた。

二十年前の、アリカ王女との会話で知ったこと。

当時、彼は紅き翼同様戦場で活躍する傭兵、アリアドネーの笑う死書、クロト・セイを勧誘してはどうか、と進言したのだ。

それに、アリカはなんと答えたか。

『クロト・セイを仲間に？』

『はい。話に聞くとおりなら、きっと力を――』

『無理じゃな』

『奴は……奴こそが、完全なる世界の、大幹部であるのだから』

第五十話・魔法使い達の憂鬱（後書き）

雨が非常に強いです。停電したらパソコン保つかな……

第五十一話・隠れ蓑？（前書き）

過去最短かもしれない……

あとがきにオマケがあります。

第五十一話・隠れ蓑？

近衛木乃香は学生である。

それは純然たる事実だ。いくら親が魔法の世界の英雄で、知り合いのおじさんやおばさんのほぼ全てが裏の重鎮であったとしても、平日の昼間は学校へ行き、日夜学友と共に勉学に勤しんでいる。

そして、彼女が“女子中学校”の生徒である以上、セイは諸々の理由で彼女を監視することができない。

そのため今の所式神に監視を任せているが、ではその間、時間が空いた彼は何をしているのか？

無論、関東の仕事もしている。だが、基本的にそれらは天乃五環で処理することであり、この麻帆良で行うのはお悩み相談コーナーの書き込みに返事を書くなど、ばれても組織の運営には問題のない物ばかりである。

では、やはり空いてしまう時間に、彼は何をしているのか？

「昨日オープンしました総合文具雑貨“黒兎堂”でーす！　セールやってまーす！」

「今日だけ全品特別割引価格でーす！　最大３０パーセントオフですよー！」

答。

日中は妻であるさよや、志津真・沙都子夫妻と共に隠れ蓑として用意した移動雑貨店で働いているのである。

第五十一話・隠れ蓑。

総合文具雑貨店・黒兎堂。

私が表と木乃香ちゃんに対する偽装として用意したお店、というか車両です。

そう“車両”です。

四両編成の路面電車で、車体は黒塗りで窓枠の周りは落ち着いたこげ茶の木枠。格調の高さを演出するために所々に金の細工が施されている。

各車体の側面には黒兎堂と漢字で書かれています。文字の色は白で、誰が書いたのか知りませんが非常に達筆。また、最後の堂の字の横には白丸の中にデフォルメされた黒兎が。

先頭車両前面には大きく丸いライト。その下には同じく白で黒兎堂の文字。

さらに、各車体上部には何に使うのかわからないハードポイントが四つずつ。

おかしいですよね。私は関東の開発部に一両編成で地味なものと言って制作を指示したのに。

なのに、家と一緒に魔法球の中にあったのは、気品を漂わせるちょいとレトロな路面電車、

中には男女それぞれの制服と制帽、エプロンがサイズ別に三セットずつ。

そして、運転席のシートの上に置かれた封書。中身はこの車両と制服などの説明と、運転の手引き書。その最後の一枚に、そこだけ手書きでこんな一文が載っていました。

『腕によりをかけました☆』

殺意がわきました。どうやらこれは白刃乃さんではなく開発部の誰かの仕業のようです。もしこれが白刃乃さんなら、こんなもんじゃすみません。きっと装甲列車並みの装備になってますからね。

「すいませーん、これくださーい」

「はーい！」

そんな思考を中断して、セイは今日もまた勤しむのであった。

第五十一話・隠れ蓑？（後書き）

オマケ・Ｆａｔｅ風キャラクターパラメーター

真名・近衛詠春（黒化暴走）

クラス・バーサーカー

属性・中立、悪

ステータス

筋力ＥＸ　魔力Ｅ
耐久Ａ＋　幸運Ｂ
俊敏Ａ＋　宝具Ｃ

スキル

京都神鳴流Ｃ～ＥＸ

魔を討つ為に編み出された技術。対人にはやや不向き。ただしその

奥義はあらゆる物を両断しうる。無手の技も存在し、武器を選ばない。また、飛び道具が効かない。

気Ａ

身体を巡る気を扱う技術。身体強化から空中移動までなんでもござれ。武器に気を流して強度、切れ味を上げることもできる。

狂化（親馬鹿）ＥＸ

ある意味で一つの到達点。目の白と黒が反転し、顔つきまで変化することがある。こうなったらちょっとやそっとじゃ止められない。

第五十二話・修行（前書き）

場面が飛ぶので違和感があるかもしれませんが、一話投稿し忘れたとかではないので悪しからず。

第五十二話・修行

「刹那」

それは、ある日の放課後の話。

「……マナか。何のようだ」

「最近どうしたんだ。もう夜の警備は辞めたんだろう」

「ああ、そのことか」

龍宮マナは、最近の桜咲刹那のことを心配していた。

少し前、彼女の同僚であった刹那は、夜の警備を辞めた。

余りに突然の事で、学園長を始め多くの魔法先生や魔法生徒が留意を促したが、彼女の意志は固く、その日以来夜の警備に来ていない。
（なぜか葛葉刀子だけは訳知り顔で微笑んでいた）
で、あるにもかかわらず、最近の彼女は生傷が絶えないのだ。マナの知る限り、夜の間も特にどこかへ出かけることもないというのに。
何かあるとするならば、ちょうど今から、つまり放課後に何かしていると踏んだのだが……

「実は、少し前からある人に弟子入りしてな」

「弟子入り？　刀子先生じゃないのか？」

「ああ、違う」

「私の知っている人か？」

「……まぁ、な」

珍しく歯切れの悪い返事をする刹那を見て、突如マナにピキーンとした閃きが走った。

「もしかして……暗辺セイか？」

「……ああ」

第五十二話・修行（という名の地獄）

「で、連れてきてしまったんですか？」

「はい……」

ダイオラマ魔法球『黄昏』の中で、もっとも高い所に位置する浮遊島。

その上部全域を覆い尽くす武家屋敷のような建物の一室で、野太刀を横に置き平伏する少女がいた。

そして、野太刀を挟んで少女がもう一人。わざわざ刹那を軽く脅迫、もとい説得してまで付いてきた龍宮マナその人である。

二人が相対するセイも、流石にあきれ顔だった。

もっとも、少女二人が制服で、セイもエプロン姿であるので緊張感など欠片もないが。

「で、何しにきたんです？」

セイが、マナの方を向く。威圧などは全くしていないが、千を生きた存在はそれだけで底知れない恐ろしさをマナに感じさせた。

「あなたは……」

「？」

「あなたは、なぜマナ・アルカナという私の名前を知っていたんだ？」

その問に、セイはしばし黙考していたが、ニッと笑った。

「その問には……あなたが刹那ちゃんと一緒に今日の修行の目標をクリアできたら答えてあげましょう」

――――

「終わった……」

「そこまで悲観することはないだろう、刹那。一日逃げ切れば良いんだろう？」

刹那とマナはそれぞれ一度寮に戻り、戦闘用の装束と装備に着替えて『黄昏』の地上部、森の中にいた。

修行の内容は単純明快。

時間設定を弄って中の一日が外の一時間になった魔法球の中の森で、球内時間で一日用意された相手から逃げ切れば良いという物だ。

ちなみに、刹那とマナはどちらも完全装備だ。刹那が完全装備を主張して譲らなかったのだ。そのため、今は夜の警備でも使わないような装備まである。

「お前はわかっていないんだ、マナ。相手にもよるが、この修行がいくつかあるメニューの中で一番きついんだ。時雨さんなら罠に嵌めつつ逃げれば保つし、志津真さんも森の中にいればある程度は時間を稼げる」

だが、と更に続ける。

「他の……セイさんやさよさんだとそれも難しい。特に、沙都子さんだったら最悪だ」

「――――あら、それはなぜですの？」

「なぜって……沙都子さんだとこちらが罠にかけられるし、気がついたら手詰まりということもある。わかったか、マナ？」

「……刹那、私じゃないぞ」

「……え？」

ギ・ギ・ギ……

ゆっくりと首を後ろに向けると、そこには。

「あらあら、それは罠の仕掛けがいがありますわね……」

ニコリ。

そこに、かつての雛見沢のトラップマスターがいた。

第五十二話・修行（後書き）

次回、あとがきで魔改造沙都子ちゃんのパラメータを載せたいと思います。

他の人が良いですかね？

第五十三話・修行（という名の地獄）（前書き）

後半のシーンは原作六巻を思い出そう！

沙都子ちゃんのステータスは次話のあとがきで！今回は別の人？

第五十三話・修行（という名の地獄）

「刹那……この人が“沙都子”か？」

背後に突如として現れた女性、沙都子にマナは警戒の度合いを一気に引き上げる。

腰まで伸ばした長い金色の髪。自分に匹敵するようなプロポーションを白いワンピースで包み、その手には何もない。たが、戦場で培ったマナの勘はなんの武器の持たない女性から何かを感じた。

透き通るような肌に、薄暗い森の中でも輝く金色の髪。そして優しい微笑みを浮かべる顔。

昔、誰かに同じような優しさを向けられたような気がする。

そう、あれは、コウキと同じ……

「しっかりしろマナ！　逃げるぞ！！」

「……！」

のまれかけていた……！

その事実にマナは戦慄しながらも、背中を向け沙都子を視界に収めつつも逃走を開始する。その背後で、沙都子は一枚のカードを取り出した。

「アデアット――――」

そして、鬼ゴッコは始まる。

第五十三話・修行（という名の地獄）

――――二時間後。

「ハァッ、ハァッ……刹那、彼女は一体何者なんだ？」

「……わからん。関東の幹部格というのは間違いない」

この二時間、二人は逃げ回っていた。幸いまだどちらも無事ではあるが、無傷とも言い難い。既に幾つもの罠を作動させてしまっており、どちらも傷だらけだ。

「それと、多分純粋な人間ではないと思う」

だが、もっと問題なのは、どんなに逃げても、それこそ転移符を使用しても十分もしない間に黒兎沙都子が再び自分たちを見つけてしまうことだ。

そして見つかったら……

「――その通りですわよ」

ガキィィィィイン…！

「くぅっ…！」

「刹那！」

大きな鉈で、斬りつけられるのだ。

「くそっ！」

しかも、異常なまでに慎重で、マナが牽制のために銃を撃ってもすぐに身を引いてかわし、追撃はしてこない。追撃してきたのならば刹那もマナもまだやりようがあるのだが、それをせずに適度な距離

でずっとこちらを見ているのだ。

それに対してこちらは攻撃せずに逃げるしかない。攻撃しないのではない、できないのだ。

最初に襲撃されたときに反撃したのだが、そのときは落とし穴に引っ掛かった（この時は瞬動で加速していたのでけっつまずいただけで落ちはしなかった）し、待ち伏せて二人がかりで攻撃したときは、完全に死角をついたのにどちらも吹き飛ばされた（実際は刹那が一定以上の強さの気に反応する地面に埋められた符を発動させたから）。

そしてそれが、二人を精神的に追いつめていく。

「チッ、どうしてこんなに早く位置がバレる！」

悪態をつくマナに、沙都子はふふっと微笑む。

「教えてさしあげましょうか？」

そう言って、手に持つ鉈を二人に刃の腹を見せるように構える。

「これ、旦那様とのアーティファクトですの。“大鉈・白の少女”と言いまして……身体能力アップの他に、効果がもう一つありますの」

――――決して、相手を逃がさなくなるのですのよ？

その言葉に、二人から血の気が引いていく。

制限時間は二十四時間。まだ二時間しか経っていないので、残りは二十二時間。

沙都子の言葉が嘘でないなら、その間、自分たちは常に居場所を補足され続けると言うことだ。

「……刹那、知っていたか？」

「初耳だ」

実は、この修行にはもう一つ達成条件がある。相手を倒すというのがそれだが、ほぼ不可能なので実際に試したことはなかった。

だが、今は“二人”だ。

「――――やるぞ！」

「ああ！！」

マナが胸元から分隊支援火器、ミニミ軽機関銃を取り出し、沙都子の目がそちらにいっている間に刹那が死角に回り込む。

が、しかし！

ちゅどぉおおぉおぉん！

「へぶあっ！？」

刹那が、地面から突如吹き出た爆炎に吹き飛ばされた。

「刹那っ！？」

吹っ飛んでこんがり黒こげの刹那。ミニミの銃口を地につけ呆然とするマナ。二人を見て、沙都子は楽しそうに笑う。

「トラップは、術式仕様の物もありますのよ？　……ほらあなたの足下にも」

「なっ……！？」

その言葉に慌てて飛び退くが、罠があったのは元のマナの立ち位置の“後ろ”。

マナが後ろに下がった直後、地面から伸びた茶色い土でできた手が足首をつかみ、それから四肢を拘束した。

「まだまだお子様ですわね」

しかもそれで終わらず、

「騙した……ひあっ！？」

土から伸びる手は、まだ十以上あって……

「――――――っ！！！！」

「あらあら♪」

――

「……どうしたんですか、これ？」

その後、『黄昏』内の浮遊島で黒こげのまま寝かされた桜咲刹那と、三角座りでさめざめと泣く龍宮マナが目撃されたそうだ。

第五十三話・修行（という名の地獄）（後書き）

オマケ２

真名・時雨（開発当時の名前は完全に効力を失っている）

属性・中立

ステータス

筋力ＥＸ　魔力Ａ＋＋
耐久ＥＸ　幸運Ｆ
俊敏Ｃ　宝具ＥＸ

スキル

神の模造品Ｃ～ＥＸ

インド神話の神を模倣して造られる過程で魂に刻まれたシステム。
莫大な魔力の制御、異常な防御力の発揮、形態変化などが可能。
“インドラの矢”もこれに含まれるが、上位者（今はセイ）による許可が必要で、普段は開封されていないシステムも多い。また、ス

テータスは人型でなく神形態の物で、人型の場合は筋力が2ランク、耐久が1ランクダウンする。

宝具

神の模造品C～A

スキル、神の模造品に登録された、神々が使ったとされる武器の複製。所詮は人が作った物であり、本物には決して及ばない。ただし、過剰に魔力を込めれば一時的に本物の出力を上回る事は可能（一時的なので本物とやると打ち負ける）。

同時に二つまで出せるが、同じ物は不可。

外伝・二（前書き）

二百五十万ＰＶ突破記念企画。またはネタばらしの回。

あとがきに沙都子ちゃんのステータスがあります。

外伝・二

これは関東呪術協会ができてから、数年経ったころの話。

その日、天乃五環のある一室に集められた関東に所属する者達は、男も女も、全員が黒服を着用し、耳にはインカムを装着していた。

「総員整列、傾聴！」

そして、彼ら彼女らは直立不動で整列していた。その数、二百有余。

「諸君、今日は関東呪術協会始まって以来の慶事である！」

彼らの前に立つのは、幹部の中でも主だった面子の一人、神里甲里。神里空里の祖父である。

「だが、それと同時に最大の試練であるとも認識している！」

彼もまた同じく黒服、ただし彼は和装。紋付き袴を身に纏う。

「しかし！　しかしこの一ヶ月の訓練に耐えた君達ならば、今日のそれにも十分に対応できると判断している！」

関東呪術協会の総力をあげて、通常の任務を一部停止してまで行う神聖な儀式。それが今日、執り行われるのだ。

「今日！　この日！　新しい歴史を刻もうではないか！」

黒兎志津真と、北条沙都子の結婚式が。

外伝・二

結婚式と言っても、今回の場合は通常とは大きく事情が異なる。

別に、裏の組織に所属しているからいけないわけではない。関東にそんな掟はないし、結婚するものは多くいる。

むしろこういうおめでたい出来事はこの組織では歓迎されるので、推奨されていたりする。

別に、新郎である志津真が人でないからいけないわけではない。長であるセイやその妻さよも人ではないし、幹部や所属する者の中には人外の血を引く者もいる。

それが悪いということはなく、セイも本人達が好きあっているなら別にＯＫという方針をとっている。

では、なぜ二百を超える人員が動員されているのか？

その理由は大きく二つ。

一つは、組織の警備の為。

沙都子は組織の発足より前から長であるセイの家族扱いで幹部や古株とも親しい。

そのため、結婚式には西と東の幹部が数多く出席する。それを狙った他の組織の襲撃があり得るのだ。

もう一つ。新婦である沙都子の親族は彼の兄とその妻、沙都子がにーにー、ねーねーと慕う二人がいるのだが、彼らはこの式に参加する予定である。

ほかにも、沙都子の学校の部活の仲間が参加するという情報が伝わっている。

問題は、彼らのほとんどが魔法を知らない一般人であるということだ。

つまり、今回の結婚式は、裏の関係者がほとんどであるにもかかわらず、万が一他勢力の襲撃があった場合でも、沙都子の関係者には魔法といった存在を気づかせることなく対処しなくてはならないのだ。

そのために警備担当責任者、神里甲里はこの一ヶ月間、様々な準備をしてきた。

彼の直属の部下も含めてスタッフを徹底的に鍛え上げた。

セイを説得し、白刃乃に予算をつけて科学的な装備、設備も準備させた。

そして、七百ページにわたるマニュアルも三日で完成させた。

その他の面でも、出席者の送迎から式で出す料理の仕入先まで徹底するなど、準備は完璧だった。

「なのになぜ！　こぉの土壇場で新郎新婦がおらんのだぁっ！！」

魂の叫びをあげる神里甲里。その周りでは、彼の側近と言える者達が新郎新婦の行方を追っていたが、依然として行方はわからなかった。

手がかりは、部屋に残された『式までには戻る』という書き置きだけ。

その式まで、三十分も残されてはいなかった。

――――

「志津真様、こんなところになんの用がありますの」

式場から少し離れた林の中。そこに、髪を上にあげオールバックにした黒いタキシード姿の志津真と、ウェディングドレスを纏った沙都子がいた。

「……私の秘密を、教えておこうと思ってな」

「秘密？」

「ああ。まずは実際に見てもらおう」

「え……」

志津真の背中から、黒い一対の翼が展開される。沙都子がその美しさに見惚れた、どこまでも深い闇のような漆黒。

しかし、今日はそれだけではない。

黒い翼の付け根の、その少し下の辺りから“もう一対”翼が伸びている。

そしてそれは純粋な黒ではなく、所々に“白”が混じったまだらの翼。

「これが、私の過去の残滓。私が……天使と呼ばれた頃の名残だ。そして、堕天の証でもある」

堕天した存在で有名なものと言えば、まず最初に思い出されるものは決まっている。

それは、詳しく無いものでも名前くらいは知っているだろう。

「ルシ、ファー……？」

「違う。私はあの方ほど強くもないし偉くもなかった。今で言う階級なら智天使、と言ったところか。それに、天使と言っても厳密には沙都子の考える天使とは違う」

「……どういうことですの？」

「そもそも天使という存在が全ての天使を正しく表現する言葉では

ないんだ。そうだな……たとえば、鬼も天狗も妖怪だ。どちらを妖怪と呼んだとしても何の問題もない。だが、同じ妖怪と言っても鬼を天狗と、天狗を鬼と呼べばそれは間違いになる」

「だから、どういうことですの！」

「つまり……天使には、もとから天使と呼ばれる存在と、後に天使として組み込まれた存在の二種類がいるということだ。私は後者で、悪魔として組み込まれたものもいるが……しまったな、これならギリシア神話の方がわかりやすいか。とにかく、私は厳密には天使ではない。今は堕天使だからということではなく、まったく違う存在だったということだ」

「私は、もとは一地方の神のような存在だった。わずかな白はその名残。昔は瞳も、髪も、翼も、全てが白かった。だが、彼らの思想では神は一柱。私のような存在は天使として組み込まれた」

「だが、私は彼らの下につくことを拒んだ。彼らが欲したのはあくまで土地で、共存ではなかったからな。そして、私は敗れ、墜ち、今の姿になった。黒は、力を失ったが故の色であり、東のこの地へ逃れた私という存在のあり方が変わってしまったが故の色でもある」

「ああ、もう！　まどろっこしいですわね、結局何が言いたいん

ですの！？」

「本当に、私で良いのか？」

「は？」

「私はかつて、確かに逃げた。そんな私でも良いのか、と聞いている」

「……ふんっ！」

「ぐっ……！」

沙都子は、渾身の力で志津真の腹を殴りつけた。

「……セイさんもそうだったそうですけど、男って土壇場でウジウジ言い出すんですのね」

「何、を……！？」

志津真の言葉は続かない。彼女に唇を塞がれたからだ。

「安く見られたものですわね？」

志津真の眼を、下から覗きこむ。あるいは見ているのは志津真の心の内か。

「あなたが昔何であったか、何をしたかなどしったこっちゃないのですわ。私が知るのは、私がこの目で見て肌で感じたのは、今のあなただけなのですから」

それに、と沙都子は続ける。

「あの六月、私はあなたに恋をした。それから何年もたちましたけど、一度だってそれが冷めたことはありませんの。なにより、私はもうあなたに会う前には戻れないのです。あなたに染められてしまったから……こんな風に」

ふわりと、志津真の四枚の翼を外側から包み込むように展開された彼女の髪と同じ黄金の翼。それは沙都子の背中から生えており、ところどころに“白”と“黒”が混じっている。

驚愕に目を見開いた彼を、かつて少女だった彼女は笑う。

「責任、とってくださいますわよね。旦那様？」

「……ああ。この身がある限り、共にあろう」

これは、今から数年前の話。

二人は今も変わらず寄り添っている。

彼らの物語は本道ではなく、日が当たることも少ないだろう。

だが、それでも彼らの物語が終わるその時まで、きっと二人は共にあることだろう。

外伝・二（後書き）

真名・黒兎沙都子（旧姓北条）

クラス・アサシン

属性・中立

ステータス

筋力C　魔力B
耐久C　幸運E（EX）
俊敏B　宝具B

スキル

トラップマスターEX

罠師としての技術と才能。幾多のバリエーションを誇り、その威力、隠密性は破格の物。
かつて自衛隊の特殊部隊の大半を行動不能に追いやった。

気C・術C

元は裏を知ってから自衛の為に教えられたスキル。今ではトラップにも応用されている

ひとカケラの幸福EX

過去、とある事件を超えて今に至れたがゆえのスキル。因果に影響し、自身と周りの運命を惨劇から遠ざけていく。幸運にも影響する。

宝具（アーティファクト）

大鉈・白の少女B

身体能力が上昇し、瞳孔が縦に裂ける。また、このアーティファクトを出現させた時にその刃を見たものの居場所が直感的にわかるようになる。

ようは“かあいい物”が大好きだった少女の使ってた鉈。

第五十四話・求ム！（前書き）

最近短い。

でも大学の単位落としてなかったから更新は続ける！

第五十四話・求ム！

やぁ皆さん。この挨拶も久方ぶりです。セイです。随分とご無沙汰だったような気もします。

実は今切実な問題に悩まされています。

それは……人手が足りないんです。

理由は、ここ最近四人でまわしてきた総合文具雑貨・黒兎堂。

正直、無理です。だって四両もあるんですよ？　もともと一両を四人でまわすつもりでしたからローテーションもくめませんし……二人で四両をやるのも無謀です。

かといってぬらりひょんが動かない訳はないですし、いざというときに路面電車を放り出すわけにもいきませんし、このままではたちいきません。いや、隠れ蓑とはいえ店が繁盛するのは良いんですけどね。

ではどうするのか？

いろいろ悩んだ結果、諸般の事情も鑑みて、一般からアルバイトを採用することにしました。

採用枠は十二。ただし、本当の意味での採用枠は“一”。残りは麻帆良に一般人として潜入させた“木乃根”と、こちらに呼び寄せた関東呪術協会の神里配下の忍者系の隠密や潜入に長けた人員で固めます。

なので、実際に採用するのは一枠。それでもめくらましの為に人を集める必要があるので、条件は結構良い物を用意する。

大まかな条件は以下のようなもの。

――アルバイト急募――

店・総合文具雑貨黒兎堂。

人・採用予定数、十二人。

仕事内容・接客やレジ、商品の管理など。

午前の部、午後の部、夕方の部があり、それぞれ四人ずつ採用予定。

曜日別に交渉可。

一部資格所有者優遇。

学生可。

時給千三百円。

連絡先……

とまあこんなもんです。募集をかけてから一週間程度で締め切るつもりです。まあほぼ出来レースですからねえ。とりあえず人が集まれば良いんです。

ま、それにしたってむちゃくちゃな人数は集まらないでしょうから、気楽にいきましょう。

―――

気楽にいこう。そう思っていた時期もありました。一週間前の自分が恨めしい。

「セイさん、がんばりましょうよ。ほら、あと少しですから」

コトン、と音をたてたのはいれられたばかりの熱いお茶が入った湯のみ。

「うう、ありがとうございます、さよさん」

目の前にあるのは、山脈のような書類の山。それを明かりを灯して夜の内に延々と処理していく。

さよさんにお茶をいれてもらっても、飲む暇がありません……

気楽なつもりだったのに、なぜか莫大な量の不採用通知を書き続けるという苦行をするはめになりました。

コピー機？　開発部がどんなギミックつけてるかわからないのに使えませんよ。

……原因は麻帆良の学生をなめていたこと。全体の九割五分が学生で、上は大学院から下は中学生まであわせて軽く三桁は超える。

なめてた。なめてました。麻帆良の学生、アグレッシブすぎます。

まさかこの私の予想を超えてくるとは……ここの学生は、セイバーハーゲンに匹敵しうるというのですか……！？

「それでセイさん。結局どんな人を採用したんですか？」

さよの声に、はたと我にかえる。

「ああ、それは……ええとどこにっと……あ、これです。これ」

「これは……」

「どうです？　この山の中では最前だと思うんですが」

「でも、普通の子ですよ？」

「いいんですよ、別に取って食おうってわけじゃなし。普通に仕事をしてくれればなにも言うことはありません。むしろ普通じゃないと困ります」

――

「――あれー、クギミン桜子達は？　今日何かあるの？」

「クギミン言うなっ、パル！　……今日からバイト。文化祭でバンドやろうって計画しててさ、ドラムのレンタル代稼ぎたいんだ」

「へー…頑張って、クギミン！」

「だーかーらクギミン言うなっ！！」

第五十四話・求ム！（後書き）

次回はスタディタイム。

第五十五話・アルバイター（前書き）

なんとか今日中に間に合った……！

第五十五話・アルバイター

始まりはいつだって些細なことだ。

詠春が暴走しかけたのもそうだし、セイがさよという伴侶を得たのもそう。多くの事が偶然の上に成り立っている。

もっとも、始まりが偶然だったとしても、それが原因で起きたことは確実に世界に影響を与える。

湖に投げ入れた小石がやがて大きな波紋をおこすように、蝶の羽ばたきがどこかで竜巻を引き起こすように、どんなに小さな出来事でも、それは多くの人間に影響を与える可能性を秘めている。

この日、麻帆良において一人の少女が話した他愛のない噂も、きっとそんな小さなきっかけだったのだろう。

第五十五話・アルバイター

その少女の名前は釘宮円。先日、採用倍率が百倍を超えるバイトに幸運にも採用された女子中学生である。

彼女がアルバイトしているのは主に夕方の部。チアガール部に所属しているため、部活のない日にアルバイトをしている。

彼女以外にもアルバイトの人員はいて、彼らの多くは朝と昼、朝と夕というように二つ、あるいは三つ全ての時間帯でアルバイトをしている者もいる。むしろ、円のようにどれか一つを主としている方が少ない。

もっとも、彼女以外は皆裏の関係者、それも潜入に特化した者達がアルバイターを装っているのだが、釘宮円はそんなこと知る由もないし、彼ら彼女らも普通の女子中学生にバレるようなマヌケではない。

とにかく、少女・釘宮円はアルバイトとしてはよくやっていた。

他のアルバイトとの仲も悪くなく、店長である暗辺セイ他、黒兎夫妻の覚えも良い。

理由は、アルバイター達が若く円と年齢が近いのと、夫妻も若く（見える）接しやすかったのと、彼女を通して夫妻達が近衛木乃香の学校での普段の姿を知ることができたからだ。

もちろん近衛木乃香には監視をつけてぬらりひょんがこりずにお見合いをさせたりしないか見張らせているが、学友からの視線というのは、それはそれで貴重なのだ。

この日も、今日の分の営業が終わり、黒兎堂の店舗である四両編成の路面電車が車庫に戻る途中、円は他のアルバイター達や店長夫妻と他愛ない無駄話に興じていた。

「それで、ネギ君女子高生の服吹っ飛ばしちゃったんですよー！？」

その話を聞いて、アルバイター達は『まっさかー』とか『うっそだ

ー』などと言って笑っているが、そんなことはとうの昔に全員知っている。

ネギは木乃香に並ぶ最重要監視対象であり、どれだけ魔法バレしたかなど事細記録されているのだ。

ちなみに、ネギは現在木乃根のブラックリストで詠春をおさえて堂々の一位。ぶっちゃけ鶴子やセイが止めなかったら暗殺されかねないのだ。

それでも、彼らはプロ。そんな様子はまったく表に出さない。

しかし、そんな彼らでも平静を保てないようなことが。それは、些細な質問から。

その質問をしたのは、他でもないセイだった。

「しかし、円ちゃんも何時までもバイトしていていいのですか？
もうそろそろ学生は試験でしょう？」

「あ～…でもまあ私なんかは一応赤点はとってませんからね。でもバカレンジャーはヤバいかなー」

「バカレンジャー？」

「あ、うちのクラスの特に勉強できない五人組で、明日菜なんかは木乃香と特に仲良いですよ」

「明日菜……ああ、あのオレンジの髪の。……ちなみに、木乃香ちゃんは？」

「木乃香は……百位位かな？　学年七百人くらいですから勉強はできますよ」

「そうですか！　それは良いことです。彼女のお父さんにも良い報告ができますね」

傍目から見ても嬉しそうに微笑むセイ。木乃香は人望のあった木乃芽の娘ということもあり、関西の幹部からは実の娘や孫、妹のように可愛がられている。それはセイも例外ではない（一説ではこれが木乃香を麻帆良にやった時に内乱が起きかけた理由であるとも言われている）。

「あ、それでですね、最近面白い噂があるんですよ？」

そして、次の彼女の一言で状況は一変する。

「都市伝説みたいなモンなんですけど、図書館島の深部に読むと頭が良くなる“魔法の本”があるとかないとか」

「魔法の、本……？」

「そうなんですよ。ま、きっと噂でしかないんでしょうけど、木乃香なんかは図書館探検部ですから、探してたりするかもしれませんね」

「そう、ですか……」

ここで、円もやっと車両の中の空気がおかしいことに気がついた。

アルバイター達やセイの視線が、すべて自分に向けられている。

「あ、あれ？　私何か変なこと言いました……？」

「あ、いえ……流石に魔法の、本はないかと……」

円も自分が話した噂に周りが呆れているのだと気づいたようだ。

「ご、ごめんなさい！　なんか変なこと言って……」

「別に気にするほどの事でもないですよ？　少し驚いただけですから」

周りも、それに同調するように頷く。

その後、車両は車庫のある暗辺邸に到着しアルバイトは全員解散となったのだが、バイトチーフだけは残された。

車内にいるのは、セイとバイトチーフのみ。

「……どう思いますか」

「おそらく、近右衛門が何か企んでいるのでは」

セイの突然の問いに、バイトチーフは当然のように答える。

彼の名前はバイトチーフこと荻原鈎介（おぎはらかぎすけ）。関東の神里配下の中でも部隊長格の人間で、空里の副官でもある。ちなみに、空里が銃火器を好んで扱うのに対し、彼は近接を好む傾向がある。

「……ネギ少年の監視を、半分ほど木乃香ちゃんにまわしましょう。あと、木乃香ちゃんの監視を担当している者に“噂”についても情報を集めておくように指示を。それと、木乃香ちゃんが“魔法の本”とやらを探しに動いた場合、私の指示を待たずに行動しなさい。原則として報告が第一ですが、急をようする場合は手を出すことも許可します。その場合は撤収までいれて十五分で済ませなさい」

「はっ！」

「それと、本部の神里さんに動員要請をかけておいてください。動員は、そうですね……」

コツコツと、窓枠を指で叩きしばしの黙考。

「動員は二小隊までで精鋭を。装備は隠密・潜入特化、地図作成用の装備も持ってくるように。開発班には九番艦・ミズノエサルを空

挺使用、十番艦・ミズノトトリを……特装三番で発進準備命令。準備が完了次第神里さん達を乗せて前回と同じ麻帆北西十五キロで待機するように。ただし、今度は最初からステルスをかけておいてください。今回はデモンストレーションじゃありませんから」

「はっ！　了解しました！」

ビシィッ！　と擬音がつきそうなほどキレのある敬礼をする荻原。

「……それ、どうにかなりませんか？」

「それ、とは？」

荻原は怪訝そうな顔をする。

「いえ、いいです。忘れてください」

「はっ！」

「あ、そうだ。君たち麻帆良潜入組ですけどね」

再び敬礼をし、車両から降りようとする荻原の背中にセイが声をかける。

「はっ！」

「何か動きがあったら、他のバイトメンバーを集めてですね……」

「はっ！」

「……して、――――――して下さい」

「はっ……はい？」

「いいですね？」

イイ笑顔で念をおす。

「は、はっ！」

威勢のいい返事をして、荻原は今度こそ車両を降りて立ち去った。

一人残されたセイは、天井を見上げて呟く。

「しかし、何も無いのが一番なんですが、そうもいかないんでしょうねぇ……」

見上げた先には、最近は珍しくなった黄色い光を灯す白熱電球。

「……そろそろ、ちょっと仕掛けてみますか」

セイは電気を消し、電車の扉をそっと閉めた。

第五十五話・アルバイター（後書き）

艦についてはまたいつか詳しくやります。

パソコンに設定を作ってあるので。

あと今更ですが、双胴飛行船は閑話・彼らの戦いで作り始めた超巨大戦艦ではないですよ。

第五十六話・周りの人々（前書き）

趣味と妄想に走りました。

……後悔はしない。

第五十六話・周りの人々

『これが図書館島……』

『でも…大丈夫かなー。下の階は中学生部員立ち入り禁止で危険なトラップもあるらしいけど…』

「……だったら行くなっつうの」

高度一万三千メートル。やたらと個性的な面子が多い関東呪術協会の中で、特にアクの強い者達が多く所属する技術開発班が造り上げた多目的双胴飛行船、薄雲(はくうん)級がその巨体を静かに夜空に浮かべていた。

輸送艦としても運用される空挺仕様に換装された十番艦・ミズノトトリの、船体側面部に大きく黒で癸酉と書かれた船の艦橋で、臨時

に艦長を任された開発班の班長の一人はコーヒー片手にそう一人ごちた。

……もっともこの薄雲級、実際は三百メートル近い全長にステルスを筆頭として様々なステキ機能を標準装備したとても飛行船などとは言えないシロモノなのだが、本人達が言うにはあくまで飛行船らしい。

『え…あの…魔法なら、僕封印しましたよ』

「魔法って、…もう一般人にばれてるのかよ。
ったく……あーあーあーあーあーあー、入ってっちゃったよ、木乃香お嬢さん」

「薬味もまだ十のガキんちょですからね、無理もないでしょうよ」

同じくコーヒーを持った部下が相づちをうった。モニターに映るのは赤毛のパジャマの少年。そののほほんとした顔に、苦々しげにため息をつく。

「なんでだよ。世の中他にも魔法の使えるガキなんざ幾らでもいるだろうが」

「そこはほら、周りがしっかりしてるから」

「はっ、だったらこの麻帆良がしっかりしてないってか？　……いや、考えてみりゃそのとおりか。わざと魔法バレ誘発させてるって話もあったし。なんたって組織の長があれじゃあなぁ」

「ああ、ぬらりひょん……。俺も初めて見ましたけど、あの頭なんなんすかね？　生物科学研究班によると一応人間には間違いないって話ですけど……」

「妖怪にしか見えねぇやな……」

手に持ったカップのコーヒーを少しすする。

艦橋に投影された大きな３Ｄモニターには、監視対象を含めた数人

の女子中学生と小さな教師が水辺の裏門から夜の図書館島に侵入する様子がくっきり鮮明に映し出されていた。

「で、どうします？　　班長」

「どうしますもこうしますもないだろーがよぉ。長に言われた通りに地上の奴らに連絡。空里さんと木乃根の部隊長、荻っちの順番でな。長は最後でイイから」

「りょーかいしやしたー」

「ったく、きっちり連絡しろよ？　　俺らがとちったせいで何かおきて、サムライマスターに八つ裂きにされるなんざ冗談じゃねぇ。……ところで“千里”の具合はどうよ」

―――特装三番・千里。

現在このミズノトトリ下部に搭載されている特殊装備で、超長距離

用複合観測システムである。
複数の大型カメラスコープにそれを統合するコンピューター、更には小型カメラと中継・ステルス機能を搭載した無人機の管制。
他にも重力波観測にレーダー機能、霊力観測など、観測や索敵に特化した、これ一台最大千キロ圏内の偵察監視ができるほどの優れもの。の、試作品。

今回開発班の班長が臨時の艦長などやっているのも“千里”のモニタリングのためである。

「見ればわかるでしょう？　重力波観測機、複合光学投影システム、その他諸々問題ありません。子機もちゃんと音を拾えてますし、ステルスも良好です。どうします？　図書館島地下に突っ込ませて地下何メートルまで拾えるかの試験もしますか？」

「馬ァ鹿、万が一回収されたらどうするよ？　……特定状況下の性能試験なら葉頭に頼んで本部の縦坑つかやぁイイだろ。地下のマッピングは空里さんと西のにまかせとけ。失敗しても俺はしらん。部隊の回収はミズノエサルの連中の仕事だ。自己責任だよ自己責任、情報漏洩が何より怖い」

麻帆良北西十五キロ、高度二百メートル辺りにいるであろう僚艦のことを頭に思い浮かべ、すぐにそれを振り払った。

向こうにも自分と同じ開発班の班長の一人がいる。心配するまでもない。

「了解しました。麻帆良に下ろした子機、全十二機帰投指示出します」

「おーう、頼むわ」

コンソールに向かい投影されたキーボードを叩く部下に手をひらひらさせて、自分はズズズズズ……とコーヒーの残りをすする。

モニターには、門の近くに残された二人の少女が映っている。

「さぁて……上手くいきゃいいが」

「？　班長、何か言いました？」

「何でもねーよ。それよかとっとと働け」

「はぁ？」

班長が飲んだコーヒーは、すっかり冷めてしまって苦かった。

――

「…！　彼が動き出しました！」

『わかった！　僕も行きますから、瀬流彦先生はそのまま監視をお願いします』

「わかりました。監視を続けます。……はぁ」

魔法先生である瀬流彦は、ある人物の監視をしていた。

相手は、荻原鈎介。関東魔法協会と因縁のある関東呪術協会の長、暗辺セイが代表をつとめる雑貨店のバイトチーフだ。

夜も遅く、テスト問題を作っていた瀬流彦に学園長から『何か動きがあるかもしれん』と連絡がかかってきて、監視するように指示されたのだ。

関東の長、暗辺セイの方にも、監視の人員はいっているらしい。かわりに手薄になったこちらに自分がまわされたというわけだ。

……正直眠い。凄く眠い。

この時期、一般の教師にまして魔法先生は死ぬほど忙しいのだ。冗談ではなく、下手すれば過労死しかねないほどに。

理由はテスト。そう、テストだ。

魔法生徒はまだいい。たしかに夜には警備に駆り出され勉強の時間がとれなくなるが、テストを乗り切ればそれで終わりだ。

だが、魔法先生にはそれに加えてテストの採点が待っているのだ。さらに成績もつけなくてはいけない。

なのに、そんな状況下でここに来ての通常シフト外の急な呼び出し。理解できる部分もあるので仕事はするが、せめて残業代が欲しいと思うのは間違ってないと思う。いつもの警備だって無償なのに。

夜の警備は、決して公務員の仕事ではないはずなのだ。

「……おっと、いけないいけない」

眠さもあってつい思考が愚痴っぽくなってしまい、対象を見失う所だった。

頭をふって眠気をはらい尾行を続ける。

相手が裏の関係者だと決まった訳ではないが、限りなく黒に近いと麻帆良首脳部では判断している。油断はできない。

「！」

と、その時、荻原に複数の男女が合流した。人数は荻原を入れて全部で十一人。その全員がバイトメンバーだというのだから瀬流彦の気も引き締まる。

彼らが集合したということをガンドルフィーニに念話で連絡し、自分も後をつける。

彼らはその後も別れることなくまとまったまま移動し、やがて繁華街のとある店に入っていった。

「ガンドルフィーニ先生、対象、店に入りましたが……どうします？」

『……中に入って様子を見ててくれますか？　僕ももうすぐ着きます。中で合流しましょう。店の名前は？』

「天川です。定食・天川」

『ああ、繁華街の。ではすぐ行きます』

「ふぅ……よし、行こう！」

頬をパンと叩き、気合いをいれる。瀬流彦は定食・天川に向けて足を向けた。

――――

「荻原さん、来ましたよ」

「さっき追加で注文した生中？レバニラ？それともラーメン？」

「違いますよ。ほら、あの入り口のところ」

「ホントだ。でも一人か。まだ来るな」

定食・天川。夜になると居酒屋もやる店の一角に彼らはいた。

関東呪術協会の潜入員に関西の木乃根、十一人の男女が机を囲っていた。

彼らがこうしてこの場に集まったのには当然理由がある。それは――

「えっと、生中三つです。お待たせしました」

「レバニラと、ラーメンです」

唐突に声がした方を見ると、机の高さに頭が二つ。

「……ん、ご苦労さん。偉いねルリちゃん、ラピスちゃん。まだ小さいのに」

「ありがとうございます！」

「……どうも」

ビールと料理を手分けして持ってきた双子の看板娘の頭をなでる。

定食・天川の二枚看板、天川ルリと天川ラピスだ。

二人に対するエピソードとして、昔酔った麻帆大生が二人にちょっかいを出したところ、厨房から影のような動きで飛び出してきた父親（店長）にまばたきの内に麻帆大生七人が鎮圧されたという事件がある。

この時、父親のエプロンに漢字で“黒百合”と書かれていたことから、二人は“黒百合の逆鱗”とも呼ばれている。

「……いいんですか、荻原さん。お酒なんか飲んで」

「良いんですよ、それが指示なんですから。なんてったって私達は」

———囮ですから。

「……」

そう、あの時セイから命令されたのは、何か動きがあったらバイトメンバーを集めてどこかのお店で迷惑にならない程度に飲んで食べて騒ぎたて、麻帆良の注意をある程度集めること。

特に何かに気をつけろとか、誰かを尾行しろとか言われてはいない

のだ。

「ほら、飲んで飲んで。今日の飲み代はあらかじめ預かってますから、飲まないと損ですよ。……すいませーん、大吟醸“撫子”お願いしまーす！」

「はーい！！」

荻原は、ここぞとばかりに店で一番高い酒を頼み、それを機に他の面子も夜限定の高いメニューを頼み始めた。

その様子を、尾行中で酒を飲むわけにもいかない瀬流彦は涙をこらえて見ていた。

第五十六話・周りの人々（後書き）

薄雲級…境ホラ風に言うとクラーケン級飛行船。

……次回に続く！

第五十七話・地下にて（前書き）

私がいる地域では境ホラが放送されない。

……ショック！

第五十七話・地下にて

「ぬ……？」

図書館島地下。異常なまでに書架が立ち並び、それに比例する量の本が納められたある意味日常からかけ離れた場所で、一人の少女が足を止め、何もない遠くの一角を見つめていた。

女子中学生と言うには不釣り合いな身長に、うなじで一つに束ねた黄緑の髪。いつもは糸のように細い目を開き、遠くを見つめる少女の名は、出席番号二十番、長瀬楓と言った。

「どうしたアルか、楓」

それを訝しんだ他の少女が楓に声をかける。出席番号十二番、中国からの留学生、中国武術研究会部長クー・フェイである。

彼女の言葉に、楓は遠くを見つめたまま答える。一瞬たりとも視線をある一点から外さぬままに。

「何かいるような気がしたのでござるが……」

「む、図書館の幽霊アルか！？」

クーフェイが構えをとり警戒するが、楓はやがてやれやれといった様子で首を振った。

「いや……気のせいだったようでござる」

「ム、ちょっと残念アル」

その言葉に楓もすまんでござると言って笑い、頭をかく。

それから今度はまた別の方を見て呟く。

「むむ、少し夕映殿達と離れてしまったようでござる」

「それはまずいアル、走るネ楓！」

「あいあい」

二人は、風のようにその場を後にした。

――――

「……行ったッスか？」

長瀬楓が見つめていた先、正確にはその先にあった書架の“裏”に彼らはいた。

上下ジャージの集団が、重力を無視するかのように“横向”に直立していた。彼らの足はまるで吸盤のように書架から離れないし、落

ちない。

そう、彼らこそは関東呪術協会の実働部隊、神里空里配下の忍び部隊なのである。

たとえ全員ジャージでも。

そんな彼らの中の一人が口を開いた。

「いくら甲賀の中忍とはいえ、中学生に気取られるとは大失態。長にバレたら減給ものッスよ。原因は？」

他のジャージが緑なのに対し、一人だけ深紅のジャージの若い男。

彼の名前は神里空里。関東の幹部の一人にして部隊のリーダーである。

ちなみに、彼は他と違い雪駄を履いている上、頭には“忍”でなく“認”と書かれたバンダナを巻いている。

それでも書架からは落ちないが。

「佐藤ですね。こいつが本の帯踏んで滑りました」

「ちょ、田宮さん！？」

慌てる部下の一人を見て、空里は一つウムと頷く。その目には服装と裏腹に冷酷な光が宿っていた。

そして、彼は告げる。

――死刑宣告を。

「ペナルティっすね。佐藤は本部に帰ってから開発班の新薬試飲か、帰る前に沙都子さんのデスマーチかどっちかうけろ」

「うげ！？」

「達者でな、佐藤」

「元気でな、佐藤」

「お前のこと忘れないよ、佐藤。……次の給料もらうまではな」

「ごめんな、佐藤。でもみんなの給料とお前だと、給料の方が大事ッスから」

「ひどっ！？」

その場にいる者たちが別れを告げる。オマケに最後の空里の身も蓋もない本音に、佐藤も流石に悔しかったらしく地団駄を踏む。横向のまま。

とても器用である。

「ま、とりあえずこの件は置いとくとして、……“マッピング”の進行度合いはどんなもんすか？」

「図書館島という意味でなら六割ほど。しかし地下全体では一割にも満たないかと」

「だいぶ散らせてるのに一割すか。今のところ“地図”との整合具合は？」

「……図書館エリアはあまり合いませんが、他はほぼ一致しています」

空里を始め彼らが見ているのは、携帯電話ほどの端末から投影された３Ｄマップである。

上の一部が青色で、下の方の大部分は赤で色分けされており、少しずつだが青の部分が今も増えていっている。

「ま、今回はぼちぼちいくっすよ。あくまで“お嬢様”の護衛が建て前っすからね」

「ですね」

「よし、んじゃあそろそろ行け」

空里の号令の元、再びジャージ姿の現代の忍者たちが地下の闇に紛れて動き出す。

その直前、空里は彼らを呼び止めてこう言った。

「ただし、次気取られたら佐藤の倍のペナルティっすから、気をつけるっすよ」

ジャージの集団は、一瞬だけビクッ、としてから音もなく姿を消した。

――――

空里は部下を二人、佐藤と田宮を残して後の全員を麻帆良地下のマッピング、地図の作成にまわした。

今回の潜入、空里という関東でも上に位置する幹部が直々に動いたのは、広大な麻帆良地下の地図作成における“前線指揮”をとるためだ。

セイはもともと麻帆良の地下に存在する、セイがいた頃よりずっと昔に何者かによって造られた遺跡も含めて地下の構造物の大半を知っている。

だが、あの日魔法使い達は地下から侵入してきたのだ。なら、構造が自分の知るものと違っていても不思議ではなく、それではいざ侵攻作戦の時に不都合が出るかもしれない。

だから、新しい地図を作成するために“お嬢様の監視と護衛”という建て前を利用し“アルバイター”という囮も作り出した。

今頃は魔法先生の注意はそちらに向かっているだろうし、セイも動くと言っていたのでタカミチ・T・高畑や近右衛門の注意もある程度分散されているはずだ。

しかし、建て前とはいえ護衛をないがしろにするつもりはない。そのために自分と部下二人はこうしてお嬢様の監視を続けているわけなのだが……

「うっわ、すげぇ……」

「……」

男三人、その先には。

「あたたたたっ！」

「きゃーーッ」

「い…いたいです」

「死ぬ、死んじゃう〜〜っ！」

「は、早く次を〜〜」

桃源郷が、あった。

「佐藤、田宮」

視線は外さぬまま部下に声をかける空里。それに二人は同じく視線を外さぬまま答える。何から視線を外さないかは書かない。

「西の長に提出用のビデオとは別で録画はしてます」

「流石ッ！」

女子中学生達がたどりついた先、あったのは本当の魔法の本。流石にこれはまずいと思い、眠らせようかても思った空里だったが、そこで事情が変わった。

突然左右の石像が動き出したのだ。

それも『フォフォフォ…この本が欲しくば、儂の質問に答えるのじゃーフォフォフォ』と言いながら。

「……ハッ、違う！　音声照合かけるんスよ、ぬらりひょんとの！」

「もう既にすんでます。適合率九十八・七六パーセント」

カメラを構えたまま田宮は空里に端末を見せる。それを見て、空里も頷く。

「よし、これで大義名分ができた！　一芝居うってからアレを潰すッスよ！」

「今からですか？」

「ツイスターゲームが終わってからっす」

「……これバレたら、長に粛清されませんかね」

「どっちの？　西？　東？」

「両方」

顔を見合わせ、青くする。

「……消すっす」

「……無念」

二台あったビデオの内、片方を片付ける。

そうこうしている内に、動きがあった。

石像によって足場が叩き割られ、女子中学生達が強制退場させられたのだ。

「！　行くっすよ。二人は待機」

「はい！」

そして空里は飛び出す。

「そこまでッスよ！」

「フォフォフォ……フォ？」

「大変ッス。お嬢様たちが落とされてしまった……助けに行くにも、この石像を何とかしないと行けないっすよ！」

「フォ！？　お主はまさか関東の！？　待て待つんじゃ、ワシは…」

「まさか、こんな所に魔法使いのゴーレムがあるはずないッスよね！　お嬢様は約定で魔法と関わらせないことになってるッスから、これは事故で、きっとこいつも誤作動を起こした太古のガーディアンか何かに違いないッス！」

近右衛門が何か言う前に、そう言い放つ。こういう物は勢い任せでいいのだ。事実、ここまで言われては近右衛門も一瞬言葉に詰まる。

その隙に、空里は袖口の影から自分の獲物を召喚する。

「こうなったら、一発デカいのでサクッとやっつけるッス！」

「フォ、それは！？」

それは灰色の鉄の杖。

鋼の獣を打ち砕くもの。

鈍く輝くそれは、見ようによっては西洋のメイスのようにも見える。

「取り出したるは、魔法のステッキ――」

「よすのじゃ！　そんなもの……！」

「シュトゥルム・ファーーーウストオォーーーーーー！！！！」

――

「ん？」

「どうしました？」

「ふん、なんでもない」

「そうですか」

世界樹広場前。そこで、二人の人物が相対していた。

どこから持ってきたのか、机と二客の椅子。机の上にはティーカップやポット、茶菓子などが並べられている。

まだ、紅茶は注がれていない。

人通りはない夜の麻帆良。

雲はなく、月を隠すものは何もない。

相対するは金と翡翠。

傍らには金にメイドが、翡翠に執事が。

「良い月だ。貴様もそう思うだろう？　なぁ、“笑う死書”（スマイリー・ライブラリアン）」

「ええ、そうですねぇ。本当に良い月です。“闇の福音”（ダーク・エヴァンジェル）」

第五十七話・地下にて（後書き）

今日中に関西と関東の呪術協会のキャラ設定をできたら載せます。

登場人物・関東呪術協会編（前書き）

感想でオリキャラに対する質問があったので作りました。

関係性重視なのでステータスなどはないです。

登場人物・関東呪術協会編

注！　今回は関東呪術協会を関東と略します。

◆玄凪セイ
（クロナギ・セイ）
九割方人外。セイは漢字で斉。黒戸・黒兎（クロト）や暗辺（クラベ）は偽名。
さよの夫で関東呪術協会の長。関西の最高幹部を特別顧問として務める。
家族構成はさよ、時雨、千草、煌。ただし煌以外は養子であり、時雨が書類上の長男となっている。

◆玄凪さよ
（クロナギ・サヨ）
半分人じゃない。
セイの妻で時雨、千草、煌の母。正式な物ではないが、関西関東ともに幹部扱い。ポルターガイストは健在。

◆時雨
（シグレ）
神の模造品。ジャガーノートを再現するために造られた。書類上はセイ、さよの息子。長男。

◆天ヶ崎千草
（アマガサキ・チグサ）
セイとさよの娘。養子に入ったが、関西の最高幹部を務めているため名字は天ヶ崎のまま。長女。実は玄凪家で唯一の純粋（？）な人間。関東の幹部でもある。

◆玄凪煌
（クロナギ・コウ）
セイとさよの息子。二人の唯一の実子で、人外度は四分の三ほど。いろいろと多芸。次男。

◆黒兎志津真
（クロト・シズマ）
いつの間にやら準レギュラー。正体は堕天使、というかどこか欧州方面の元神。
当時の二つ名は天剣の白鷹。沙都子の夫で、子はまだいない。

セイの式神ではあるが、本体が来ているので明日菜に攻撃されても消えない。

◆黒兎沙都子
（クロト・サトコ）

昭和五十八年を越えてきた少女。今は大人となり志津真の妻となった。

志津真と交わったことで純粋な人間ではなくなり老けない。スタイルは鷹野三四（ひぐらしを読もう！）に匹敵する。

トラップマスター。

◆白露・六火
（ハクロ・リッカ）

セイの式神。七尾の狐と大鬼。最初は志津真と同じ扱いだった。出番がない。

◆石呼壬の長
（イシコミノオサ）

老齢。関東の幹部だったが、すでに三十九話の時点では亡くなっていて、その後は彼の孫が継いでいる。
名前は本編未登場。三十九話の老幹部とはこの人物のこと。

◆石呼壬の長の孫
（イシコミノオサノマゴ）

出番がいままで皆無に等しい。一応セリフだけは登場しており、三十九話の白刃乃の次のセリフが彼である。

◆古郷善一郎
（フルゴウ・ゼンイチロウ）

関東の幹部の一人。今も現役で、だいぶ落ち着いたが中身はやはりおっさん。一族で旅館を経営している。

◆神里甲里
（カミサト・コウリ）

忍者の家系。やはり三十九話の時点では亡くなっている。
神里空里の祖父。

◆神里空里
（カミサト・クウリ）

忍びの家系。現関東の幹部の一人。～っすなど口調が軽い。飛び道具が好き。

◆瀬乃宮桃
（セノミヤ・モモ）
関東の幹部の一人。大学を卒業済み。普段は明るいが演技。ホントは結構寡黙。

◆七守依子
（ナナモリ・イコ）
関東の幹部の一人。虫怪使い。現在は結婚して子供が一人。彼女も実家は田舎の旅館。夫と娘は本編未登場。

◆白刃乃
（シラバノ）
ネギま！とは別の漫画、ドリム・ゴードからやって来たという設定の作者のオリキャラ。マッド。
ただし一応常識はあり、閑話での転移失敗は悪いことをしたとかなり反省している。
白刃乃は名字。女性。

◆葉頭
（ハズ）
出番はまだない。開発班所属で、関東本部の第二縦坑長。ようは第二縦坑における採掘などの責任者。現場主任から出世した。

◆班長
（ハンチョー）

関東呪術協会研究開発部門の中の技術開発部の班長。班長自体相当な数がいる上、班長を一人見かけると半径百メートル以内に三十人は班員がいるともっぱらの噂。

たくさん集まると合体してキング班長になったりはしないが、技術力が超鈴音に匹敵するので注意が必要。

彼らの直接の上司はセイでなく白刃乃にあたり、彼女が本部長を務める。

◆荻原鈎介
（オギハラ・カギスケ）

黒兎堂のバイトチーフ。その正体は第一次麻帆良潜入班のリーダー格にして神里空里の副官。近接戦闘が好き。目上の人間には口調が固い。実家は氷屋。

◆麻帆良潜入班
（マホラセンニュウハン）

関東の幹部、神里空里の配下の一部で麻帆良潜入中。アルバイター達。
特に隠密、諜報に特化した人員で、戦闘能力はそこまででもない。

◆佐藤&田宮
（サトウ&タミヤ）
神里配下の忍者AとB。田宮が先輩。

登場人物・関東呪術協会編（後書き）

次は関西編！

……今日中に終わるか？

登場人物・関西呪術協会編（前書き）

結構忘れられたキャラもいます。

覚えてるかな？

登場人物・関西呪術協会編

◆玄凪セイ
（クロナギ・セイ）
詳しくは関東編にて。関西の最高幹部の一人。特別顧問。

◆天ヶ崎千草
（アマガサキ・チグサ）
詳しくは関東編にて。関西の最高幹部の一人。

◆天ヶ崎の父
（アマガサキノチチ）
関西の元最高幹部。千草の父。大戦で死亡。

◆天ヶ崎千花
（アマガサキ・チカ）
千草の母。夫と違って名前持ち。大戦後、事故で亡くなった。

◆近衛千蔵

（コノエ・センゾウ）

関西の元最高幹部。最高幹部の席はセイに譲った。近右衛門のいとこにあたる。今は故人。

◆近衛木乃芽

（コノエ・コノメ）

関西呪術協会の前代の長。木乃香の母で詠春の妻。周りからの人望が非常に高かったが故人。近右衛門とは仲が非常に悪かった。

◆近衛詠春

（コノエ・エイシュン）

関西呪術協会の現長。木乃芽の夫で木乃香の父。入り婿で、妻と違い人望があまり無い。魔法使いとの融和を目指していたが、最近は木乃香の方が大事。神鳴流。

備考：黒化暴走時は戦闘能力が桁違いに上昇する。

◆橘然次

（タチバナ・ゼンジ）

関西の元最高幹部。セイを怒らせた人。今は故人。千蔵の悪友で、ぬらりひょんとも同世代。神鳴流。

◆狭雲
（サクモ）

関西の最高幹部の一人で今も現役。でもモブキャラで出番は無い。だいぶ少なくなった大戦期からの幹部でもある。九州担当で、融和派。

◆青山鶴子
（アオヤマ・ツルコ）

関西の最高幹部の一人。既婚。妹がいる。神鳴流。生身でも光学兵器が効かない。

◆木乃根
（キノネ）

近衛木乃芽直轄の秘密部隊。主に工作任務に長けた術者で構成されており、銃を筆頭に近代兵器も扱う。人数は百人ほどで、木乃芽が亡くなった今は鶴子の下にいる。

登場人物・関西呪術協会編（後書き）

今日はここまでです。

第五十八話・真祖と人外（前書き）

ご意見、ご感想、誤字脱字の指摘、全てお待ちしております。

……久しぶりにこの一文書きました。何話ぶりだろう。そして多分過去最長。大した量はないけれど。

第五十八話・真祖と人外

「さて、まずは会談に応じてもらったことに感謝します。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル」

やぁ、どうもセイです。部下にだけ仕事をさせるのもアレですからね。私も少し動いて注意を引くことにしました。

目の前にいるのは、この麻帆良における最強の一人、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルです。

六百年生きた真祖の吸血鬼で、六百万ドルの賞金首だったそうです。ちっさいですけど。

おかしいですね。私の知ってる真祖というか、純血のヴァンパイアには六十年もすれば大人になると聞いたんですけど……うん、小さいです。

「エヴァでかまわん。貴様には私も興味がある。それで、なんのようだ？」

「では私もセイで結構。そうですね……お呼びだしして申し訳ないのですが、別段コレといった用はありません。強いていうなら、少し話がしたかったというところですか」

「うん？」

「まぁ、先に目的だけ言ってしまえば、相互不干渉ですかね」

「……つまらんな」

そう言って、エヴァは少し眉を歪ませました。見るからに不機嫌です。いや、そりゃつまらないかもしれませんが、事実この会談自体囮の一つですからね。

「わざわざ来てみればそんなことか。実力も何もわからん相手にどうこう言われるつもりはないぞ」

「……笑う死書という名を知っているのなら、私のことも少しは調べたのではないですか？」

「……チッ、私は自分の目で見たものでなければ信用しない主義だ」

「……そうですか」

あ〜、本格的へそを曲げられたかもしれません。そっぽ向かれてしまいました。

ここは少し場を和ませますか。

「煌」

「はい」

私の一声で、控えていた煌が動き出す。前もって準備されていたポットなどを使い、手際良く紅茶を入れる。

その流れるような手際に、エヴァもほうと感心している。

「たいした物じゃないか、茶々丸と良い勝負だ。貴様の執事か何かか？」

カップを取って一口含む。うん、美味しい。でも茶葉はわかりません。私は日本茶の方が好きです。紅茶も嫌いじゃないですけどね。

「いいえ、私の息子ですよ」

「むすっ！？　ゲフゲフ……息子だと！？」

「うわっと、大丈夫ですか！？」

私と同じく煌の紅茶を飲んでいたエヴァがむせました。なぜに？

「ええい、大丈夫だ。……貴様、指名手配されているのによくもまあ色恋にうつつを抜かしている暇があったな」

……色恋、ねぇ。

「それがまぁ、私の行動する理由みたいなもんですからねぇ」

「……は？」

カップを持ったまま、ぽかんとしてます。でも事実ですからね。

「待て、色恋が理由だと？」

「そうですよ。極端に言ってしまえば、大戦に参加したことすらそれに起因する、と言っていいでしょう」

大戦で戦ったのも、関西の幹部となり、関東呪術協会を起こし、世界の遺跡を巡ったのも、全ては麻帆良を、春香を取り戻すためだ。

その思いは、たとえ異世界に飛ばされて千の時を過ごしても捨てなかった。

ふと、世界樹を見上げる。春香は、今何を思っているのでしょうか。

「ぷっ、くくく……ははははははは！　たいした男じゃないか！」

「……なにがおかしいのです？」

エヴァがなぜか腹を抱えて大爆笑してます。

「これが笑わずにいられるか！　好いた女のために世界を敵にまわしたというのだろう、お前は！」

グッと紅茶を飲み干し、カップを叩きつけるように戻す。

「……良いだろう。相互不干渉くらいでいいならいくらでも結んでやろう」

「それは……！」

「ただし！」

椅子から立ち上がり、私に向かってびしっと指をさす。

あれ、何か嫌な予感。凄く悪い顔してるし。

「先にも言ったが、私は自分の目で見たものでないと信用しない主義だ。ゆえに、貴様の力、確かめさせてもらうぞ」

「……ここで？」

「まさか。流石にタカミチや魔法先生どもが見ている場所でどうこうするつもりはない」

今の所、結界を張っているので会話までは聞き取れないようにしてあります。完全にシャットアウトしても良いのですが、それだと囮になりませんから。

「場所はこちらで用意する。ついてこい」

――

「これは……」

「どうだ。なかなかの物だろう」

目の前に広がるのは、中央にオベリスクが立つ円形の広場。はるか

下には南国の島ような砂浜もあります。
エヴァ所有のダイオラマ魔法球、エヴァンジェリン・リゾート。
これは凄い。なかなかの規模です。
……開発班が知ったら福利厚生とか言って似たものを作りかねませんね。うっかり話さないようにしましょう。
「ま、もっとも貴様ならこれに比肩する物をもっているかもしれんがな」
「いえ、私はこういうリゾート風な物は持っていませんよ。魔法球は生活用と修行用に二つ持っていますが」
「ほう？」
あー、またいらん興味を引いてしまったかもしれません。こういう時は興味をそらすのが一番です。うん、早速始めるとしましょうか。
「さて、それでは始めるとしますか」
「ふん、せっかちなことだ。……まあいい、改めて名乗ろう！

我が名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル！　六百年の時を生きる誇り高き悪にして不死の魔法使いだ！」

おお、小さいですけどカッコいいです。こう、威厳という物が感じられるんですよね。

溢れ出る魔力や威圧感も凄まじいですし、古強者というか……大戦で戦った魔法使いとは比べ物になりません。

まぁ、魔力というだけなら赤毛のバカもといナギ・スプリングフィールドなどエヴァに匹敵する相手がいないわけではないですが、あれは威厳とか覚悟とかそう言う物は皆無でしたからね。

見かけが同じ子供でもナギとエヴァでは格が違います。

比べるのもエヴァに失礼ですね。

さて、しかし名乗られたからには私も名乗り返さねばならないのですが……どう名乗った物ですかねぇ。

笑う死書。まぁ無難なところですか。一番有名といえば有名ですし。でもちょっとマンネリぎみか？

召喚大師。ちょっと気に入ってますが少しマイナー。ゼフィーリア近隣では有名ですが、他のところではちょっと……

また出たよあのゴーレム軍団！。これが一番連合の将兵の間では有名なんですが、使いたくはないですね。

完全なる世界客員大幹部。これは…元ですし客員でしたからねぇ。

となると……さて、どうしますか。

「どうさた？　名乗り上げくらいなら待ってやる。早くしろ」

ん～、そう言われても、関西や関東の役職を名乗るのは自慢みたいでやですし、他に何か……あ、アレで行きましょう！

「では……」

「む」

「――改めまして。夜の国は大将軍補。千を生きる人外、玄凪セイ

と申します」

「千！？　貴様そんなに生きていたのか！？　今まで一度も聞いたことがないぞ！？」

「ええ、まあ。……ですが、そんなことはどうでも良いことでしょう？」

にぃ、と笑い、麻帆良に来てからは日常的に自ら封印、隠蔽していた霊力を解放する。

たったそれだけのことで、世界が変わる。霊力が溢れ出し、それが周囲の空間に作用して霊力の流れを作り周りの世界を静かに侵食していく。

エヴァとの魔力との境目で、霊力と魔力がせめぎあう。

ここから先はある種の異界となるだろう。相手は真祖、自分も人外。覗き見られる心配のないこの場なら、手加減も遠慮も必要ないし、油断して良いという物ではないだろう。

なにせ相手は吸血鬼。赤バラ王ストラウスほどでないにしても、きっとその強さは自分の予想の上をいくはず。

エヴァもこちらを見て笑っています。いいですね、私も久しぶりに全開でいきましょうか。

この間、西で少年と戦った時は軽い運動にしかなりませんでしたからね。

「くくく……いくぞ！　人外！！」

「来なさい、吸血鬼！」

――

「ケケケ、コリャスゲーナ」

椅子に座った人形、チャチャゼロは空を見て呟く。

少し前に自分の妹が調べた賞金首が自分の主と戦っている様子を塔の上から眺めていたのだが、凄まじいの一言に尽きた。

空の上で、自分の主と件の客人が戦っている。

賞金額で言うなら向こうが上。生きた年数ならこちらが上だと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。

主が気に入るほどの存在。生半可な相手ではないとわかってはいたがやはり凄まじい。

自分も戦ってみたい。己の手で切り裂いてみたいと思うが、あの様子では自分が行ったところで瞬殺だろう。

――キュガッ！！

「ウオッ！？」

また空に光の柱が走った。どういう魔法か知らないが、上位古代語魔法を真正面から吹き飛ばしている。

螺旋を描きながら空を舞う金と翡翠の二つの流星。金の流星の後には大きな氷の華が咲き、翡翠の流星から放たれた光の柱がそれをぶち抜き、細かな氷片となって光を反射し、七色に輝きながら蒼い海へと落ちていく。

見ているだけなら美しくもあるのだが、ある程度魔法についての見識があるものならぞっとする光景だろう。

本来ならば、一流どころの魔法使いが詠唱してやっと発動可能な大魔法を、超高速かつ“無詠唱”で撃ち合っているのだ。

それも、連続で。

しかもおそらく、これでもまだどちらも本気ではない。

……人形の自分が言えることではないが、人外魔闘だ。

「ケッ。ドッチモタノシンデヤガルナ、コリャ」

暇だ。空の上はあんなに楽しそうなのに、自分はすることがない。

妹は妹で、客人の連れてきた執事と何を思ったか競いあうように黙々と機械のような精密な動きでスイーツを作り続けている。

ケーキ、チョコと続き、今二人は凝った造りの大きな飴細工を作っているらしい。

執事が片翼の意匠で、妹は月の意匠。どちらも大きさは二メートル近い。

二人の髪色が同じ緑系統の色なので、作業している様子は兄弟に見えなくもない。本当の姉妹とも言える自分がそう思うのだから不思議だ。

チャチャゼロは、再び空へ視線を戻す。

今度は一度に二本、大きな光の柱が交差するように空に走る。

数瞬遅れて今度は三本、徐々に本数が増えていく。

「コノママジャヤベェゼ。ドウスル、ゴシュジン」

――

「どうしました！　それでも真祖の吸血鬼ですか！」

「くっ！　やかましいわっ！！」

また一つ自分に向かって走る光の柱を回避する。

――ええい、忌々しい……！

自らの二つ名、不死の魔法使いは世に聞こえた伝説クラスの悪名だ。

そんな自分が、少しずつではあるが劣勢に追い込まれている。理由

の一つは“地形”だ。

自分が得意とするのは氷と闇。そのうちの氷の魔法の強い物を使うには、地面から遠すぎる上に相手が速すぎる。

通常ありえない高空での超高速戦闘。自分とて長く生きたがここまでの戦いは初めてだ。千年生きたというのもまんざら嘘ではないらしい。

「ククク……」

状況は不利。押されているのは自分。時間の経過は向こうに有利に働くし、正体不明の光の柱も一度に放たれる数が増えてきている。

「ククククク……」

オマケに相手はまだまだ本気を出していそうにない。涼しい顔して杖どころか魔法具一つ使うでなく空を飛び、これだけの大魔法を行使し続けられるのだから本気なわけがない。きっと近接戦闘もそれなりの腕を持っているだろう。

だが

「クハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！」

相手が自分より強い？　素晴らしいことではないか。

誰が予想し得た？　自分か？　あるいは自らの従者か？

答えは否だ。誰が予想しうるものか。真祖の吸血鬼たる自分が“押されているの”など！

強いてあげるなら今もなお高速飛行を続けるあの男くらいだろうか。

目の前の相手は強者だ。魔法世界の龍種のような、自然界における絶対的なソレだ。

相性が悪いのもあるが、相手は自分よりも強い。認めたくはないが格上の存在だ。

それもナギのように逃げるでなく真正面から相手をしてくれるだけの自覚を持った強者だ。

吸血鬼となって六百年、長き生の中で久しくなかった、戦いに生きるものとしての“壁”が目の前にあるのだ。

「すさまじいな！　セイ！　だが、我が誇りにかけて貴様を越えてみせよう！！」

――

ふふ、ふふふ。

ははははははは！！

いや楽しい！　久しぶりに空を飛ぶのが、戦うのがこんなに楽しいものだとは！

さすが不死の魔法使い、高速飛行と白夜の落星天球儀を単発や二連射程度とはいえ使っているのに全くあたりません。かすりもしませんよ！

ここしばらくずっとストレスがたまってましたから、霊力を解放するのがとても気持ちいいです。

身体の中を余すところなく霊力と気が巡り、自分が思い描いた通りに思う存分飛べる。

ああ、なんと楽しい。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル、彼女は違う。

大戦の英雄、紅き翼などとは違う。

彼女の一挙手一投足からは“覚悟”が感じられる。自分の信念を持ち、自身の信ずる柱に従い生き抜く者だけが持つ力強い魂の輝き。

幾度も戦場を駆けたのだろう。血風をくぐり抜けてきたのだろうう。

他人の死など、飽きるほど見てきたのだろう。己が与えた死も含めて。

私はまだ彼女と出会って間もないので、彼女の詳しい人となりは知りません。

ですが、きっと彼女はわがままな、それこそ周りから見れば悪と見なされるようなことでも平然とやってのけるでしょう。

だが、もしもそれが己の信念から外れない物であるならば、それでいい。

それでこそ“人間”だ。

所詮人は求める獣。正義などと上辺を飾らず、悪を自覚し、悪たる誇りを持っていずれ自らが消え去るその日まで、己の咎から目を背けることなく、自分に正直であり続ける。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

その生き様の、なんと貴く美しきことか！

「契約に従い我に従え氷の女王！　来れ永遠の闇、とこしえのひょうが！」

エヴァが今までの高速飛行から少し速度を落とし、手を天に掲げ詠唱を始めました。エヴァほどの魔法使いが始動キーまで使うのだから、かなり大きな物が来るはず。

これで決める気ですか！

「全ての命ある者に等しき死を！　其は安らぎ也！　おわるせかい！」

「……む」

おかしい。

ここは高空。氷系の中でも破格の威力のある“おわるせかい”でも、この高度までたどり着くには数瞬必要とし、その間があれば私が回避可能なのはエヴァも気づいているはず。

ならば、なぜ――？

「術式固定（スタグネット）！！」

「なっ……！！」

莫大な魔力と氷精の冷気がエヴァの掲げられた手に集中し、その余波だけで周囲の気温が下がっていく。

「掌……握！！」

エヴァはそれを握りつぶすようにして、取り込む。

「……やってくれます」

そこにいたのは、先ほどまでのエヴァでは無い。全てを凍てつかせる純白の冷気をその身に纏う、まるで雪の女王のようなその姿。

白一色のその姿は気品を感じさせるようにも思えるが、その本質は違う。

あの白は者皆全てを凍らせる、慈悲無き極寒の白。

その前には正義も悪もなく、ただ死が待つばかり。

人魔融合。こんなことを可能とする術式はただ一つ。

「……噂に名高き大禁呪“闇の魔法”（マギア・エレベア）。そうでしたね、それはあなたが編み出したとされる魔法でした」

「フッ、この私にここまでさせたんだ。……倒させてもらうぞ」

エヴァの手に純白の冷気が集まり、絶対零度の刃を作り出す。

あれは……断罪ノ剣ですか。

「たしかに究極技法に匹敵する禁呪に断罪ノ剣。相乗効果は計り知れないでしょうが……」

私にも、夜の国の名を出した以上、譲れない意地があるのですよ！

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル！　あなたに敬意を払い、私の術の一端をお見せしましょう！」

「ほう…？　今の私に正面から挑むか？」

「無論」

発動するのは、もちろん白夜の落星天球儀。ただし、こんどはさきほどまでのような縮小版ではない。

ダイオラマ魔法球という限られた空間の中で発動可能な限界まで術式を展開する。

そのためには、今のままでは霊力がこころもとない。更にブーストをかけるためすぐに第二形態へ移行する。まず角が生え、翼と尾が生える。

……そういえば、いつのまにか背中のは完全に翼っぽくなってたんですよね。羽も翼膜もないですけど。

すぅ、と息を吸い呼吸を整える。滅多にしなくなった詠唱。かんだりしたら格好がつかない。

「――四天は巡り、五行は環をなし、我は六方を定めて界と成す」

「……む？」

「環を成すは何ぞ。天に七星、地に六星」

「……おい、待て」

「其は降りそそぐもの。至高の月より至る億千万の光条！」

「貴様、これは……！」

「……白夜の落星天球儀。私の知識と今は滅びし太陽の国の天文学を合わせた、今なお進化し続ける切り札です」

一つ一つが二十メートル近い巨大な陣。膨大な数のそれらが他の陣と繋がり、重なるごとに一つ、また一つと新たな魔術的な意味を成立させていき、最終的には私を中心として巨大なパラボラアンテナのような形に陣が完成される。

それぞれが儀式級の大魔法に匹敵する威力を持った術式陣。

それらを星図に見立てて自在に展開、解体、再展開し組み合わせることでより大きな、決戦級の術式陣を超高速で複数展開し発動させる。

これが攻撃特化の私の切り札、白夜の落星天球儀です。

ダイオラマ魔法球の三分の一ほどを埋め尽くさんまでに展開された陣を見て、流石のエヴァも顔をひきつらせているかと思いきや、笑ってるじゃないですか……！

「……化け物め」

化け物？　この程度で？

「……お互い様です」

「ククク……」

「ふふ……」

「「ハハハ

――光が、奔る。

――――

「ヤッベェ！！」

滅多に、それこそここ百年は一度もなかった主の本気。それに加えて禍々しく変身した客人の異常な魔法陣。

そんな二人がまともにぶつかり、その余波で目を開けていられない程の光が四方八方に散っているのだ。

今までは退屈だからとのんびり傍観していたが、このままでは自分もまずい。消し飛ぶ。

「オイ！　イッタン支塔ノホウニ逃ゲルゾ！」

しかし、執事と妹は動かない。動こうとしない。

「オイ、ドウシタ！」

「「……あ」」

「ア！？」

「「飴細工が、粉々に……」」

この状況で何をバカな！　一発殴りたいが時間がない。

「チッ、モウシラネェゼ！　自己責任デナントカシヤガレ！」

ボケた妹を見捨てて、自分一人ゲートがあるので構造上壊れることのない支塔の方へ避難しようとしたときだった。

ピシリ。ビキッ！ミシミシミシ…

「オ、オオ……？」

ゆっくりと足場が、主塔が傾き、海の方へと向かっていく。

「ウオァ、主塔ガ折レル、テカ砕ケル！？　マジカアァァァァァァァァ！？」

第五十八話・真祖と人外（後書き）

ネタは浮かぶ。でも書く時間がない。

目がショボショボする……。

第五十九話・修行（悪夢の再来）（前書き）

先に言っておきますが、この話は次回には続きません。単発ネタです。

第五十九話・修行（悪夢の再来）

地下でぬらりひょんが魔法のステッキで粉砕され、とあるダイオラマ魔法球の内部が真祖と人外の死闘でほぼ崩壊した、次の日。

「一生のお願いだ、マナ。助けてくれ」

夜の女子寮、その一室。ひとりの少女が、同室の少女に土下座していた。

「一体全体どうしたんだ刹那。そんな格好して」

「……これを見てくれ」

なぜか白を基調とした装束に身を包んでいた刹那が、神妙な顔をしてルームメイト、マナに懐から一通の手紙を取り出し、渡す。

マナは刹那の余りに真剣な様子から黙ってそれを受け取り、読み進める。

やがて読み終わったそれを無言のまま丁寧に元のように折り畳み、
刹那に返した。

「なるほどな……事情はわかった」

「……助けてくれるか、マナ」

「刹那……」

マナは、フッと笑みを浮かべる。

そして、背を向けた。

「刹那、この龍宮マナ一生のお願いだ。自分で何とかしてくれ。じゃあな」

がしっ。

「……何の真似だ？」

ベッドに戻ろうとしたマナを、刹那が後ろから腰に手をまわししっかりとホールドしていた。

その目は、決して獲物を逃がさない狩人のものだ。

「それはないだろう、マナ。傭兵だろう？」

「命あってのものだねだ。今回は依頼と言われても断固断る」

「……お前は私に死ねというのかーーー！」

「私だって死にたくはないんだ！」

刹那がマナに見せた手紙の内容を簡単にまとめると、このような感じである。

――ちょっと来なさい。『黄昏』で修行やるから（強制）。ＢｙセイＩ――

……これである。この内容では流石のマナも断らざるをえない。というか断るに決まっている。前回は酷い目にあわされたのだから。

「……ふっ、だがもう遅い、残念だったな！」

「なっ……これは！？」

二人の足元に突如現れたのは転移の陣。よく見れば、自分をホールドする刹那の手には、見慣れた一枚の符が。

「魔法球に転移できるセイさん特製の符だ。悪いが地獄まで付き合ってもらうぞ、マナ！」

陣が、強く光を放つ。

「くっ……謀ったな、刹那ァ！」

「死なばもろとも、だ！」

――気がつけば、空飛ぶ島に、下界に広がる深い森。永久に夕暮れを映し続ける魔法球、黄昏。その上層に二人はいた。

そして、その背後には。

「……随分とイキが良いじゃあないか」

「っ！　あなたは！？」

「馬鹿な……闇の福音だと！？」

「そうとも。この私がじきじきに貴様らを鍛えてやろう。……光栄に思うがいい」

金の髪をなびかせた、吸血鬼の真祖がそこにいた。

第五十九話・修行（悪夢の再来）

時間は、エヴァンジェリン・リゾート最後の日までさかのぼる。昨日のことだが。

「……うん？　修行？」

「ええ、そうです」

レーベンスシュルト城。エヴァンジェリン・リゾートとはまた別のエヴァ所有の魔法球内に存在する巨大な城で、元は十九世紀頃まで暗黒大陸の奥地に実際に建っていたエヴァの居城である。

「めんどくさい。なぜ私がそのようなことをせねばならん」

「私が勝ったからですね、さっき」

「ぬぐ……」

セイとエヴァ、二人の死闘の決着は、意外とあっさりしたものだった。

一言で言うなら、セイのごり押しである。

真正面から突貫したエヴァに、正面と斜め上下左右から一斉砲撃を浴びせかけての飽和攻撃。

地方都市一つをたやすく消し飛ばせるだけの火力を集中されてしまっては、流石のエヴァもどうにもできなかった。

というより“闇の魔法”を使っていなかったらチリも残さず消滅である。かろうじてでも生きていた辺り流石真祖ということか。

コロ〇ー・レー〇ーを真正面から受ければ、ガン〇ムだって消し飛ぶのにたいした耐久力である。

とにかく決着がつき、原型を留めていないエヴァンジェリン・リゾートからこちらの魔法球に移り紅茶を飲んでいたところで、セイから提案があったのだ。

曰わく、修行させている弟子（？）がいるので、手伝って欲しいと。

「だが、弟子にとったのは貴様だろう。なら最後まで貴様が面倒をみるのが筋という物だ」

「そのあたりは考えてますよ。あくまで手伝いですから。煌、アレを」

「あ、はい」

昨日と違い、今日は茶々丸とともに脚立を使って巨大な飴細工を作っていた煌が、頭の三角巾を取って脚立から降り、執事の正装である燕尾服の袖口からポスターのように丸められた紙を取り出す。

「これは……」

「超速成幹部候補養成特訓メニューです。あなたには六日目をお願いしたい」

「なかなかのメンツだな」

そこに書かれたメンバーの名前に目を落とし、エヴァは少し目を見開いた。

「ふん、いいだろう。だが報酬はもらうぞ」

「ええ。貴女にかけられた登校地獄、私が責任を持って解呪させていただきましょう」

「……なんだとぉっ！？」

――

「と、言うわけだ。わかったか、貴様ら？」

「待て、待て待て待て待て、待ってくれ。つまり今の貴女は、全盛期の……？」

「その通り。正真正銘、外でもフルパワーが可能な“闇の福音”だ。無論学校の外にも出られる。今年の修学旅行が楽しみだ」

「……しかし、登校地獄はサウザンドマスターが施したもので、学園長でも解けなかったのでは？」

「ああ、そのことですか」

エヴァがイキイキと二人に説明している様子を、それまで静観していたセイが話に入る。彼の席の周りには煌だけでなく茶々丸もおり、向かいの席にはなぜかチャチャゼロが座っていたりする。

「別に難しいことじゃありません。歪められた登校地獄、実際の効果、かけられたときの状況。これだけそろえば元の登校地獄と比較し、それを打ち消す形で術をくんで霊力を流せば……まぁそうなります」

「……無茶苦茶だな、あなたは。流石一代で組織を起こした関東の長か」

「いえいえ、それほどでも。……さて、それではそろそろお待ちかね。特訓メニューの発表いきましょうか」

この言葉にマナは顔をひきつらせる。

「私もなのか！？」

「イヤですか？　んー…、まあいいです。呼んだのは刹那ちゃんだけですし。さ、発表しますよ。『一週間であなたも幹部候補！超速成幹部候補養成特訓メニュー２００３！』」

セイの言葉にあからさまにホッとするマナ。逆に刹那の顔色は悪い。

そして発表された内容は、以下のような物である。

――1日目・激闘！　沙都子とドキドキ鬼ごっこ二十四時！

――2日目・煌に学ぼう！　明日からあなたもあくまで執事！

――3日目・ファイエル！！　ジャージ忍者包囲網！

――4日目・実験！　白刃乃と開発班の愉快な新兵器！

――5日目・避けろ！　さよの高機動符陣！

――6日目・生き残れ！　風雲☆真祖の吸血鬼！

――最終日・ラスボスじゃない、隠しボスだよ！　決戦・玄凪セイ！

「無理です！　死にます！　初日から！」

紙に書かれた余りに余りな内容に、刹那は顔を真っ青にして取り乱した。

「まったく、最近の子供はすぐに無理無理と……家の子はみんな四つ目くらいまではクリアしますし、大丈夫ですよ。ねぇ？」

「無論だ、死にはしないさ。……死には、な」

「ひ……や、やめっ――――！」

球内時間でこれから一週間続く、関東呪術協会でもっとも過酷な特訓と言われる訓練メニューが幕を開けた。

奥の建物から出てきた沙都子に連れられ、地表の深い森に下りていった刹那を見送った後、エヴァが思い出したようにセイに訊ねる。

「……ところで、坊やや地下の連中はどうするんだ？」

「さて、デスメガネが回収するんじゃないですか？　うちの部下も行ってますし、危険はないはずです。……もういっそ、彼にはこちらにいてもらおうかな」

――

「へっくし！」

――神里空里、部隊撤収後も、麻帆良残留（居残り）決定。

第五十九話・修行（悪夢の再来）（後書き）

次回、開発班の回（予定）。

閑話・開発班の日常（前書き）

以前に一度、外伝、閑話、番外編の分類について書きましたが、開発班の話は閑話扱いとなります。多分、そのうち異世界とか行きそうなので。

閑話・開発班の日常

関東呪術協会本部、天乃五環。

全長約五キロある巨体の大半を地下に隠すこの機動戦艦は、あまりしられていないが、下部の四層と五層の間に四・五層とも言える区画が存在する。

主に格納庫としての使用が想定されただだっ広い空間で、今は兵器の試射試験や大きな物の開発が行われていたりする場所だ。

ただこの場所、一応艦内地図にも載っており、長であるセイにも黙認されている状態なのであまり無茶はできない。

もちろんそれは悪いことではない。確かに余りにもはっちゃけた開発はできないが、きちんと地図に載っているためこそこそする必要がないし、ちゃんと休憩室や購買部も存在する。

……なぜかカ〇リーメ〇トはメープルしか売っていないが。

その休憩室の一角、安っぽいソファに白衣を着た男と、濃緑にオレンジのラインが入った作業服、俗に言うツナギを着た男の二人がソファと同じく安っぽいテーブルに置かれたパソコンを前にうなっていた。

「……だめか、これは。もう一度……ああ、クソッ！」

「やっぱ無理かぁ。……どうするよ？」

白衣の男がパソコンに向かって長く複雑な数式を入力しＥＮＴＥＲキーを押すが、モニターに現れたのは無情で無機質なエラーの文字。どうやら何かに失敗したらしい。

「しょうがない、休憩しよう。そのための部屋だ」

「ちげぇねぇ。休憩しにきて疲れたんじゃ話にならん」

ツナギの男が近くの自販機に飲み物を買いに立ち上がる。何が良い？　聞かれた白衣の男はイチゴオレと答え、再び視線をパソコンに落とし、再び何かの入力を始める。

「おいおい、休憩はどうしたよ。……ほれ」

「……すまん。やっぱり手が空くと、な」

白衣の男は今度こそファイルを閉じてパソコンの電源を落とした。
受け取った紙のコップに口をつける。
それを見ていたツナギの男は、なぜか少し呆れたようにため息をつく。
「お前、ほんとそれ好きだよな」
「当たり前だろ？　これを飲まんと始まらん」
「そうか」
ツナギの男も、自分のコップに手をつける。彼のは普通のブラックコーヒーである。
しばし、休憩室に男二人がテーブルを挟んで向かい合って座り、黙って飲み物を飲むというなんの面白みもない光景ができあがる。
「そういやぁよ」
「うん？」

先に口を開いたのは、ツナギの男の方だった。

「そっちの方は最近どうなんよ？　たしか、那由多計画の兵装部門だろ、お前」

「あー、それなぁ」

白衣の男は、コップを持っていない、空いた方の手で頭をかく。

「今分裂してる」

「あ？　なんでよ。おまえんとこはうちと違って揉める理由がないだろ？」

「それがそうでもないんだわ」

少しイチゴオレを口に含み、喉の調子を整えてから話し出す。

「班長連がさ、主兵装何にするかで揉めてるんだよ。まずは大きく分けて実体弾派と非実体弾派が対立してて、その中でさらに内装型、

可変展開型、常時展開型でも揉めてる。
で、こっからがややこしいんだがよく聞いてろよ？　実体弾派は滑空砲派とレールカノン派がほとんどだが……いや、レールカノン派ももっと細かく分けられるんだが……まあ後は一部にライフル砲派とミサイル派が残ってる。こっちはたぶんレールカノン派が優勢」

「ちなみに、お前どの派閥？」

「リニアレールカノン派。電磁砲派が怖いが、コイルカノン派はウチに合流した。
既に薄雲級の砲戦仕様に搭載されてるから実績もあるんだが、そのぶん今度は他のだろってことで揉めてるんだと」

「はー、大変だねぇ」

「なに言ってるんだよ、すごいのはここからだぞ」

「まだあんのか？」

ツナギの方は既にコーヒーを飲み終わり、空のコップをゴミ箱に投げる。が、コップは途中で失速し墜落。やれやれと席をたって拾いにいく。
その背中に、座ったままの白衣の男が言葉を投げかける。

「非実体弾派の方がすごい。ビーム砲派だろ、レーザー砲派だろ、荷電粒子砲派に陽電子砲派、反物質砲派までいる」

「オイ、最後のはヤバいだろう！」

「だから没になった。んで後は魔導砲派に大魔法射出砲派、精霊砲派、ＲＥＩ力子砲派、ほかにも却下されたの含めて幾つか」

ツナギの男も、その多さにしばしぽかんとした。

「……兵装部門の班長会議どうなってるんだ？」

「書類が宙を舞わない日はないらしい。机か扉のどちらかが吹き飛ばなきゃ御の字だそうだ」

この分だと前面主砲でももめるよなぁ……とぼやく。

白衣の男もイチゴオレを飲み干し、コップをゴミ箱に捨て、両手を上で組み背伸びをする。

背中と腰からゴキゴキと音がし、数秒その大勢を維持した後、元に戻した。その後でテーブルの上のパソコンをソファの上にあった薄い鞄にしまい、二人して休憩室を出た。

巨大な天乃五環では当然通路も長い。そうして歩く間、今度は白衣の男がツナギの男に質問する。

「そういうそっちは？　結構すごいんじゃないのか？」

「んにゃ、実は意外とそうでもない」

これに、白衣の男ははたと立ち止まった。

「……まじで？」

「おう」

ツナギの男は歩き続け、少し離された白衣の男は小走りになって追いつく。

「おいおいおいおい、艦載機部門でも何造るかで揉めてただろう」

「それなんだがな、結局兵装と用途に応じて使い分けるから、とりあえず上に却下されたの以外は一通り造ってみようってことで落ち着いた。数に予定と差はあるが、とりあえずこっちは沈静化してる。未だに二足歩行型を含む機動兵器部門と戦闘機部門は相変わらず仲が悪いがな」

「はー、良いなあ。じゃあもうかなり開発も進んでるんだろう？」

「いや、実はそれがそうでもない」

先を歩くツナギの男は、少し顔を歪めてそう言った。

「全部造れるってことは、完成した後も他と比べられるということだろう？　他のに劣るようなの造れるかってんで、設計一からやり直し。動力やらなにやらも含めて」

「それは……頑張れ」

「……今もがんばってるよ」

ツナギの男はさして気にした風もなく、そう言った。

「薄雲級の開発班は良いよなー。空挺仕様はテスト済みで、今度砲戦仕様の試射試験するらしいし……千里の完成型もできたそうだぞ。麻帆良侵攻計画に関する奴らはどこも順調なんだよな。……このままだと離されるか」

「あー、でもあれはまだ実装は無理って話しだろ？　情報を統括する次世代量子型スパコン部門の小型化が遅れてるから、今のままだと観測と演算、薄雲級二隻分でワンセットになるってぼやいてたぞ」

「そりゃだめだ」

「それより、あれだ。麻帆良の超鈴音に対抗するってんで気合い入れてた人に限りなく近いメイドロボの開発班、最近アイツらあんまり見かけないが何かあったのか？」

「構想の段階でメイド服のスカートをロングにするかミニにするかで揉めて、殴り合いになって、結局三分の二が入院したから残りのメンツがとりあえず基礎設計だけ完成させたって話らしい」

「……馬鹿だな、せっかく担当になれたのに。開発班希望者多数で抽選になったって話だろ？　アレ」

「そうだな」

それからさらに歩くこと十分ほど。目当ての場所にたどり着いた。
エレベーターホールである。

そして、二人がエレベーターに乗るために、△ボタンを押したとき、
それは起きた。

――――バツン。

「っ！？　　なんだ！？」

照明が落ち、通路を照らす全ての明かりが赤色の非常灯に切り替わる。

通常、天乃五環では地下の一部区画以外の照明は動力炉が落ちない

限り明かりが消えることはない。その場合でも、即座に予備動力に切り替わり元の明るさを取り戻す設計だ。

だがしかし、今通路を照らし出すのは赤い光。

それが意味することは、ただ一つ。

「おい、これってまさか…」

「非常事態、だと！？」

直後、けたたましい警報が鳴り響いた。

「おい、パソコン立ち上げろ！」

「今やってる！」

鞄からパソコンを取り出し、立ち上げる。一秒もたたずに初期起動

を完成させたそれで、天乃五環の内部情報にアクセス、情報の収集を開始する。だがそれが完了するよりも先に、放送が入った。

《こちら開発班統合部、この警報は侵入者や実験の失敗によるものではありません。落ち着いて行動してください》

放送の内容に、ツナギの男はホッとする。だが、白衣の男はさらに表情を険しくする。

「なら、この警報はいったい……」

《現在、査察部が今年七回目の『抜き打ち☆強制査察』を開始しました。準幹部級は三人ないし四人いる模様。
中央第一、第六、第七エレベーターホール及び前部第十八非常階段から部隊が接近中。
四層到着は最短で六百四十秒後、付近の那由多計画関係者は隠蔽を徹底してください。
この警報は百二十秒後停止し、通常状態に戻します。繰り返し――》

「……」

「……」

二人は顔を見合わせて。

「……やばいぞ」

「……やばいな」

――元来た道を、駆け出した。

閑話・開発班の日常（後書き）

次回は本編。でも開発班の話はまたいつかやります。

第六十話・黒眼剣士（前書き）

桜通りの吸血鬼をやらないので、その替わりの話です。

……厳密には、その導入部です。

第六十話・黒眼剣士

――――古都、京都。

古き時代の趣を今に色濃く残す町だ。

その京都にあるのが、関東呪術協会の発足以降、力を落とした関東魔法協会とは対照的に、そのかつての影響力を取り戻しつつある関西呪術協会の本山である。

そして、いつもなら静寂に包まれている朝の本山は今、騒然としていた。

「クソ、まだ見つからへんのか！」

彼女の名前は天ヶ崎千草。関西の最高幹部であり、同時に関東の幹部でもある女性だ。

黒の着物に灰色混じりの濃緑の帯。長く伸ばした髪をうなじで束ね、足早に移動しながら矢継ぎ早に指示を飛ばす。

その表情にあるのは、彼女としては珍しい焦りの表情だ。

「ええい、鶴子さんがおらへんこの時に……！」

青山鶴子。彼女もまた関西の最高幹部であり、また神鳴流の師範でもある。京都の本山に常駐する幹部の中では最強と呼ぶにふさわしい女傑であるが、彼女は今いない。

先日、結婚六年目にして妊娠したことがわかり、大事をとって一時的に幹部としての職務を離れ入院中なのである。

「千草様！」

「おったか！」

「いえ……それどころか、武器庫から“炎天”や“風花”などの業物が数点消えています」

「……まずいな、どこ行きよった」

「千草様！」

「どないした！」

「市街地に散っていた者から連絡が。“長”は市内の封鎖を押し通った模様です！」

そう、関西の長、近衛詠春が突如行方不明になったのだ。人望がそれほど無くとも長は長、上へ下への大騒ぎだ。そこに来たのが、やっと見つかったと思った詠春が力ずくで押し通ったという知らせ。

「なん……やと……？」

一瞬、千草の顔から表情が消え、すぐに怒りを露わにする。

「あのアホォ……、自分の立場わかっとんのかぁっ！」

本山に言霊と霊力の乗った怒鳴り声が響き、辺りがシンとする。

それから、ゆっくり言葉を紡ぎ出した。

「……逃がさへん」

ずずず……と、千草を中心に空気が渦を巻く。

「関西最高幹部の権限で非常事態宣言を発令する！！　京都府庁と府警にも協力を要請しぃ！　目標は県内での捕縛！　ただし最悪の場合も想定して近畿圏内全域の各地の支部にも協力を要請し、石化封印も許可する物とする！」

「千草様、石化封印はやりすぎでは！？」

「殺さんだけましゃ。むしろ殺せん。魔法世界の鬼神兵一太刀で斬り伏せる相手にうちらが手加減らできるか？　後で解呪したらええんや解呪したら。……ちゅうかそもそもなんでこの時期に何しに動き出したんや？」

「あのぅ……それなんですが……」

「なんや、どないしてん」

少しクールダウンし、ちょっと思考が冴えてきた千草が、ふと疑問に立ち返る。なぜ彼は突然いなくなったのか？

そこにやってきたのが、本山にたくさんいる巫女の一人である。手に持つのは、パソコンと言うには少し小さい板状の機械。

「……小型ＤＶＤプレイヤー？　そんなもんがどないしたんよ」

「その……長の部屋にこれが」

「っ、貸し！」

千草は巫女からそれを引ったくるようにして奪い、すぐに電源を入れて再生ボタンを押す。

周りにいた術者達も何か手がかりがあるかとモニターを覗き込む。

だが、なぜかモニターは割れていて映像を映さない。しかしかろうじてスピーカーは生きていたらしく、音声のみの再生となった。

そして――――

《フォフォフォ…この本が欲しくば、儂の質問に答えるのじゃーフ

ォフォフォ》

機械を通しているので少し変わっているが、聞く者を酷く不快にさせる独特な笑い声。

――間違いない。

「ぬぅらりひょんが原因かぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

今度は、突風が吹き荒れた。

―――

電話がかかってきたのは、朝食をとるために皆で食卓を囲んでいたときだった。今は神里空里もここにいる。

先日の一件もかたがついた。エヴァとは不干渉を結べたし、ぬらりひょんもゴーレムを粉々にしてやった。ダメージの何割かが本体にいくはずなので、報復としては十分だろう。

面倒事が一段落し、その場にいる者達は皆緩やかな時間の流れの中で朝食をとっていたのだ。

そんなとき、ヴーンヴーンという振動音に気づき、セイは手に持っていた箸を置いた。

懐から携帯電話を取り出して開いてみれば、そこに書かれた番号は天乃五環で一般雑務を取り仕切る古郷善一郎だ。

彼もずいぶんな古株であるため、さして躊躇わずに電話にでた。

「はい、私です」

『長か、緊急事態だ！』

「……何事です」

『近衛詠春が、一人で麻帆良を目指して動き出した！　今琵琶湖北岸付近で関西の部隊が防衛線を組んで足止めしているところだ！　さっき関西から正式にウチ援護要請が来て、千草と衣子のお嬢さんがたが押さえに出てるが分が悪い。私も第二、第三防衛線の構築が終わり次第出るが、長もなるべく早く来てくれ！』

……一段落など、していなかった。

第六十話・黒眼剣士（後書き）

次回、反響が多かった彼が登場します。

第六十一話・琵琶湖決戦・上（前書き）

THE・EISYUN

第六十一話・琵琶湖決戦・上

《非常事態宣言が発令されました。繰り返します、非常事態宣言が発令されました。非戦闘員は直ちに所定の避難場所に向かってください。
四層以下の開発班には一部に出動命令が出ています。今から呼ばれた者は三十分以内に格納庫へ向かってください。
繰り返します――》

関東本部・天乃五環。

その四層の一角で、いつかの白衣の男とツナギの男が赤い光に照らされた通路を歩いていた。

会話の内容は、今現在も流れ続ける警報〈アラート〉についてだ。

「おいおい、一体何事だよ。いつもの強制査察じゃねえのか？」

「わからん。だが俺ら“開発班”に招集がかかるってことはまた麻帆良がらみじゃないのか？」

「勘弁してくれよ、この間行ってきたところだぜ？　あ、だから

か。完成型の“万里”のテストか？」

「それならありえるか。……いや、それなら非常事態宣言なんか出さないだろう。今まで非常事態宣言が出たのって、二年くらい前に第二縦坑で古代の邪神掘り当てた時くらいだろ？　テストくらいで発令しないだろう」

「葉頭さんがモンキーレンチと採掘用のパイルバンカーで討伐して、後で封印してたってあれかぁ？　古郷さんとか常駐幹部が到着した時には何事も無かったみたいに作業再開の指揮とってたってんで、あれ以来扱いが本部長並だもんな、葉頭さん」

「だよなぁ……って違う！　だから問題は今なにが起きているかだろうが」

《呼び出しを開始します。薄雲級三番艦・ヒノエトラの乗員は直ちに…》

三番艦。その単語が聞こえた時、二人はぴたりと足を止めた。それは、周囲の行き交う開発班員達も同様だった。

「おい、三番艦っていやぁ……！」

「……ああ。ＬＲＣ、大口径リニアレールカノン搭載の、砲戦仕様だ」

赤い光に満たされた通路で、警報だけが鳴り響いていた。

――第六十一話・琵琶湖決戦・上

琵琶湖。言うまでもないことだが、日本でもっとも大きな湖である。

ちなみにその名の由来は弁財天が手に持つ琵琶だそうな。

…少し話がわき道にそれたが、今の琵琶湖は一言でいうなら“異常”だった。風が吹き荒れ、雨が滝のように空から落ちているというのに、湖面が凪いでいるのだ。

理由は、結界。今現在の湖面は戦術、それを一般人に見せないために近隣の関西、関東の呪術協会の術者が可能な限り総動員され、人払いと隔絶の結界をかつてない規模で張り巡らせ、さらに重ねるように幻術で雨と風を吹かせ一般人を遠ざけているのだ。

湖面が凪いでいるのも、術で水を固めて足場にしているからだ。

彼らがそこまでして立ち向かう相手。それは、たった一人の剣士だった。

黒衣に身を包み、両の手に持つは二本の野太刀。

それに加えて腰などに数本の脇差しや小太刀が差し込まれている。

通常、野太刀はその長さ、重さから両手であっても扱いが難しいシロモノだ。

それを、この男は二刀流として使っているのだ。

京都神鳴流、関西呪術協会の長、近衛詠春は。

多くの術者に囲まれながらも、その身におった傷はなく、その眼は白黒が反転し、周囲に暗黒の気をまき散らしている。

その様は、まさに怪物。

「……千草さん、それと、関東の七守衣子さんでしたね？　後ろの方々も……あなた方に用はありませんので、どいてくれませんか？」

で、あるというにも関わらず、その口調はいつもと同じ柔らかい口調のままだ。姿と口調の差違は、周囲の者に底知れない闇を感じさせた。

「んなことできへんのはわかっとるやろ。はよ帰りましょや、長」

「そうもいかないんですよ、千草さん。私は少し、妖怪を一匹仕留めにいかねばなりません」

ごう、と、周囲にまき散らされる暗黒の気の勢いが強くなり、それだけで千草と衣子の後ろ、数多くいる術者の中には倒れそうになる者が現れるほどだ。

その様子を見て、千草は一つの決断を下す。

「しゃあないな……力尽くで連れて帰らせてもらう！」

「つまり……私の邪魔をするということですね？」

「弓隊、鳴らせェ！！」

詠春の四方、隠匿の術で隠れていた者達が姿を現し、弓を構える。

だが、そこにつがえるべき矢はない。

彼ら彼女らが構えるのは“梓弓”。その弦の音は古来より魔を打ち払うとされてきた。

時に、今の近衛詠春は闇に堕ちたといっていい。

元来神鳴流は闇に堕ちやすい傾向にあるが、それは一時的なものが多く、闇から戻ってくるのもまた早い。

ならば、闇を打ち払えば近衛詠春も正気を取り戻すかもしれない。

それでなくとも、百からの梓弓による衝撃波。昏倒させることも狙える。

――そんな甘えが、千草にもあったのだろう。

タイミングを完璧に合わせた鳴弦は、成功した。

詠春がいた地点で水柱があがり、霧状となった水が周囲にまいあげられる。

やがて、水煙が晴れたとき、そこには前とかわらずただ立っているだけの詠春がいた。

一つの傷も負うことなく。

「っ！？」

「おや、何か不可思議なことでもありましたか、千草さん。……ああ、私が地に伏していないことですか？　それとも傷一つないことですか？　着眼点は悪くありません。部隊を伏せて、四方から攻撃する。梓弓であれば、その威力も大きいですし」

「……せやったら、なんでそんな風に飄々としてられる……！」

「簡単です。衝撃波を切り捨てた。ただそれだけです」

「は……？」

今、なんと言ったか？　切り捨てた、そう言ったのか？　四方

から、文字通り音の速さで来る衝撃波を、斬った？

「無理なことではありません。弐の太刀は大概の物はなんでも斬れます。魔法であろうが、雷であろうが。
ならば、霊力の乗った音を斬ることもまた可能、ということです」

千草は、自分の中での近衛詠春という存在の認識を改めた。

「さて……次はこちらの番ですか？」

目の前にいるのは、いつもの優柔不断な能無しではない。

――自分の父と同じ、人外であると。

――――

――あれから、半時間ほどたった。

その場にいた三百近い精鋭の内およそ半数が地に伏せ、立っている者も、皆満身創痍。

対する詠春は、数本予備の脇差しなどが減ったものの、大きな傷は負っていない。

関東と関西の精鋭とて、急なことで準備に時間がとれなかったとはいえ、日々の厳しい修練をくぐり抜けてきた猛者達。

それに加えて、千草と衣子という二大戦力がいるにも関わらず、だ。

千草は長年、セイやさよとともに世界を回り、相応に実力をあげてきた。衣子も目立つ活躍は無いが関東発足時からの幹部。得意不得意があるにしても、その実力はおりがみつき。

それでも、彼を、詠春を止められない。追い詰めたと思っても、些末な傷を、それこそ血が滲む程度の傷しか負わせられない。

――――なぜか？

一閃。

一閃。そう、一閃だ。詠春がその手に持つ二本の野太刀、白鞘の“炎天”と黒漆の鞘の“風花”のどちらかの一閃で、全ての攻撃が斬り伏せられた。

曰く、神鳴流の斬岩剣などに代表される、それら奥義の先にあるもの。

――弐の太刀。

あらゆる攻撃が、それによって無効化されたのだ。正確には、斬り伏せられた、だが。

梓弓による衝撃波。神道系術者の祝詞による禍祓い。仏教系術者に

よる縛呪。開発班謹製の特殊結界。千草の“連結符術”から、衣子の“大波野槌”にいたるまで。

そこから動くことなく、ただ一閃。それらが自分に届くまでの刹那に左右どちらかの刀を振るい、それら全てを斬り伏せた。

――関西の最高幹部は、最も高い権力を持つから最高幹部を名乗るのではない。

一部地域を除いて、関西における最高の実力を持つ者が名乗るが故の最高幹部。

西を束ねる長がその職務にふさわしくないと判断された時、実力をもって排除するために用意されたたった十八の席。

西の総本山の長という“力”に対する権力分散の意味も兼ねた安全装置。

では、そこまでする長とは何なのか？

政務の最高責任者？

組織の象徴に足る人望？

高貴なる身分に身を連ねる血筋？

――否。答えは否だ。

先代の近衛木乃芽はそれら全てを兼ね備えていたが、歴代の長がそうであったわけではないし、今代の長、詠春もそう。

人望などは特にない。

むしろマイナスに近い。

ならば、何をもって長は長をたりえるのか？

いろいろな要素はあるが、極論すると、今の詠春がまさにそうだと言えるだろう。

――すなわち。

――西国最強、である。

第六十一話・琵琶湖決戦・上（後書き）

本格的な戦闘は次回。

……予定！

第六十二話・琵琶湖決戦・下（前書き）

ギャグとシリアスのアップダウンが激しいです。

あと若干のグロ注意です。

第六十二話・琵琶湖決戦・下

「……時間の浪費、ですね。そろそろ次にいきましょう」

今までその場から動かず迎撃に徹していた詠春がついに動き出す。

白鞘の“炎天”を鞘に戻し、黒漆の鞘の“風花”を両の手で握り直す。

しかし構えはとらず、刃先は下にぶらりと下ろしている。

そして、ゆぅらりと詠春が消えた。

「……おや」

詠春が消えた直後、響き渡る轟音。音の出所は千草の隣、振り抜かれた野太刀の根元、鍔の辺りを衣子が“拡声器”で防いでいた。

ギリギリと軋む音が鳴るが、拡声器は壊れない。

「……気で強化したにしても、固いですね。噂の“開発班謹製”と

いうやつですか？」

「そうです、よっ。ちょっとやそっとじゃ壊れない、部品一つに、いたるまで、こだわり抜かれたっ！　特別製です！」

「なるほど。ですが、それだけではどうにもなりませんよ？」

「くぅ！？」

最初は拮抗していた力比べが、少しずつ衣子の方に押されていく。

だが――

「……？」

詠春は怪訝そうな顔をする。力を温存するために若干手加減をしているとはいえ、術者に止められるような力では無いはずだ。

なのになぜ、下手をすれば押し返されそうなほど強い抵抗を感じるのか？

「教えてあげましょうか」

直後、衣子の気配が大きく変わる。変転する。

固められているはずの湖面が波打ち、黒かった衣子の髪が色褪せるように白へと変わる。瞳孔は裂け、色も赤へと変化する。

「獣化……！？」

「違いますよ。厳密には、妖怪化。いえ、先祖返りというのが正しいかもしれません。……詠春殿は、土蜘蛛という妖怪をご存知ですか？」

その言葉に詠春は一瞬戦闘中であるにも関わらず自分の中の知識を探る。

土蜘蛛と言えば、虎や鬼の顔に蜘蛛の身体を持つとされる割とメジャーな妖怪である。

人間に化ける妖術も使うし、糸も吐く。

厄介な相手だが、詠春は若き日に討伐したこともある。

だが、それがどうしたというのか？

少なくとも、関東の幹部、衣子は自分の知る土蜘蛛とは何の関連性も――――

「――――っ」

ここで、詠春はあることを思い出す。

一説によれば、土蜘蛛とは――――

「大和朝廷に従属しなかった、地方豪族！！」

「その、とお……りぃっ！」

気合い一声。詠春が大きく押されるような形でバランスを崩す。

詠春は一瞬のうちに失ったバランスを取り戻すが、それよりも早く、衣子が拡声器を口元に持っていき……

《先祖返りの能力はぁーー、主に怪力でーーーすよぉーーーーーーーっ！！！！》

「〜〜〜っ！」

至近距離で、叫んだ。霊力も乗せず、特に呪術的な意味もない叫びを。

ただし、近距離で、拡声器の最大音量でもって。

———開発班謹製。

この五文字を刻まれた製品は、破格の性能を誇る。開発班が造ったものの代表として、神里空里専用の魔法のステッキことシュトゥルム・ファウストがあるが、あれは実際には弾頭を亜音速で飛ばせる攻城兵器並のシロモノだ。

当然、同じく幹部である七守衣子専用の拡声器もそれに準ずる性能であり、音量最大でおもいっきり叫んだならば。

「ぐっ……！」

その威力は、衝撃砲にも匹敵する。

「さ、今です千草さん！　連結符術で……ってあら？」

「〜〜〜〜っ！　もうちょっと周りに気ぃつけえや！」

「あ……」

ちなみに、威力を持つほどの衝撃は前方のごく短い射程しかもたないが、音自体は凄まじい大きさで周りに響く。

戦闘機の爆音とか目じゃないレベルで。

「まあええ、皆今や！
ちょいと気ぃはって縛りつけい！！」

「何を……！？」

湖面からは水の柱が。千草からは細い鎖で繋がれた大量の符が。控えていた術者達からは捕縛術式が、それぞれ詠春を拘束する。特に、野太刀を構える腕を重点的に。

「よし、“逃げぇ”！」

「逃げる…！？」

なぜ？と詠春は思う。少なくとも、今はチャンスだ。自分を倒す気なら、機会は今しかないだろう。なら、なぜ逃げる？

自分なら、どういうときに敢えて引くという選択肢を選ぶ？

相手を拘束した上で引くのは、撤退戦か、あるいはーー

大火力による、一点集中……！

下は湖面。なら来るのは。

詠春は黒く、されど澱むことなく暗い光を放つ双眸で空を見上げた。

―――

「三番艦ヒノエトラ、九番艦ミズノエサル、十番艦ミズノトトリ、所定位置に到着しました」

「各艦、両舷下部可変翼及び下部垂直尾翼展開、艦を現状の位置にて固定します」

「各システム、リンクスタート。十番艦特装四番“万里”起動、観測開始。九番艦試製量子コンピュータ“白澤”起動。三番艦、ＬＲＣ“春雷”チャージ開始。射出可能電圧まで五秒。四、三、二…完了しました」

「万里が地上で異常な大きさの音を観測しました。画像出します」

「あー、はいはい。どうなってます？」

三番艦、艦橋。そこに忙しく指を動かす班員達と、それと対照的にのんびりとした口調の班長がいた。

《…でーーすよぉーーーーーーーーっ！！！！》

「うぉうあっ！？　音声下げて！　何事！？」

「下にいる七守さんが拡声器使ったみたいですね」

「拡声器？　あー、あれね、衝撃砲並の出力だせるようにしたやつ。指向性ももたせられるようにしたやつだっけ？」

「試作品でしたけどね」

「うん。帰ったら改造しよう……って詠春黒ォっ！　しかも衣子さん髪白いっ！？　アレ？　衣子さん本気？　下って結構やばいかな？」

「やばいですね。……照準、“詠春”にあわせます」

「急いで。弾頭はちゃんと重石化術式搭載のやつに変えといた？」

「もちろん。殺すわけにもいきませんから」

「だねー。しょうがない、よ……？」

班長が何かに気づく。画面に映る黒い詠春。

その顔が、地上にいる千草たちを見ずに天を仰いでいる。

そして、班長と詠春の視線が交わった。

ぞわり、と班長の背筋が寒くなる。一気に冷や汗が全身から吹き出し、一瞬視界が明滅する。

「――！　照準合わせ急げ！　セーフティ一番から六番まで解除！　撃てるようになったらすぐに撃て！」

「は？　何を…」

「急げ、バレてる！　発射シークエンス略式省略していい！！」

「は、発射します！！」

砲全長二百七十メートルという船体と同じ規模の長さを誇るが故に、一隻に一基しか積めないＬＲＣ“春雷”。その砲身が、静かに、空を引き裂くつぶてを放った。

――――

「おお、凄いな」

「開発班の人たちの自信作らしいですよ？　春雷って言うそうです」

「ほー、しかし……もう少し手加減してほしかったな。結界が吹き

飛ぶところやった」

「あははは……」

少し離れた所から湖の様子を眺めていた千草と衣子。

空からの攻撃は当初の計画では自分たちの手に負えなくなった場合に行うことに決めていたが、うまくいって良かった。

空から降った光の柱は雲を貫き、轟音とともに着弾した。

今頃、水煙が立ち込めるあの場には人一人分の石像かできあがっていることだろう。

「あ、そろそろ煙が晴れてきましたね」

「お、そやな。ほーれ、皆立ちぃな。とっとと長縛り上げて…」

トスッ。

「帰ろ、か……？」

「え…？」

軽い衝撃。

千草の腹部から、生えるは赤をまとった銀。

それが引き抜かれると共に、吹き出る血。千草は腹を押さえて倒れる。

その背後にいたのは、上半身の服が吹き飛ばされ、身体のいたるところから血を流す詠春。

もはや身につける武器は“風花”一本。しかしぎらりと輝く目を術者達に向け、表情も険しく、睨みつける様はまさに獣のようだ。

「ち、千草さん！」

そして、詠春が動く。

もはや、何かを話すこともなく、ただ刀を振るう。

その様子に、拡声器で攻撃を捌く衣子は焦る。開発班謹製の拡声器が、どんどん削れていくからだ。

衣子はあくまで術者だ。古に西から逃れた、土蜘蛛という名をかぶせられた一族の血を怪力というような形で色濃く残しているが、近接戦闘は本来の彼女の戦い方ではないのだ。

血の影響で相性の良い虫怪を使った中陣あたりでの壁役が本来の仕事であり、詠春のような近接に長けた相手に対しては分が悪い。

「……っ！」

「……」

「く、うぅ、あっ……」

「……」

一閃、二閃、三閃……奥義を使っている訳ではない。だが、一太刀ごとに詠春の斬撃は鋭さを増し、もはや目で視認することができないほどにまで加速している。

それでも直感と経験を駆使して、なんとか直撃は避けている。

これも、関東呪術協会幹部用訓練メニュー、『七日間生き残れば強くなってるかな？　地獄の幹部強化訓練・零式』を受けていたおかげである。

しかし、それにもやがて終わりが来る。今まで詠春の斬撃を防ぎ続けていた拡声器が、真っ二つに割れてしまったのだ。

そして、斬撃が衣子を襲う。

（避け、られっ…！）

衣子は、自分がたどる結末を予想し、目を瞑った。

だが、痛みは訪れない。詠春ほどの腕だ、気づかぬ内に死んだのかとも思ったが、どうやらそうでもないらしい。

そっと目を開ければ。

そこには、関西呪術協会が発足してすぐの頃。

自分が幹部になって浮かれてた頃の魔法使いの襲撃、その時に自分を守ってくれた人の背中があった。

――

「あなたは……」

「なんとか間に合いましたか。……いや」

詠春が、砲撃を食らって以降初めて言葉を口にする。

だが、セイはそれを無視する。視界の先には、腹部に大量の治癒符を貼られた千草がいる。

彼女の顔からは血の気が引き、まだ動ける術者達が今も符を貼りな

がら治癒術をかけつづけていた。
それを見て、セイの顔がほんの少し苦々しげに歪む。
「……終わりにさせてもらいますよ、詠春」
唐突に、辺りが暗くなった。原因は、高度五十メートルの低空に浮かぶ空挺仕様の薄雲級。
そのコンテナ部分のハッチは限界まで開かれており、そこから覗くのは巨大なスピーカー。
「スピーカーなどで、何ができる……！」
「これを聞いても、同じ事が言えますか？」
セイは手を振り上げて合図を出した。
スピーカーから聞こえてきたのは――

《お父様なんか、大っ嫌いやあぁぁぁぁぁーーーーーーーーーっ！！》

聞こえてきたのは、少女の声。それは、麻帆良にいる詠春の娘、近衛木乃香のものである。

セイが、登校前の木乃香に頼んで急いで録音してきたものだ。

そしてそれを聞いた詠春は。

「グハァッ！！」

黒い気を霧散させ、血を吐いて仰向けに倒れた。

その後はぴくりとも動かない。

「……は？」

「……ええ！？」

「「「えぇーーーーーーーーーーっ！？」」」

死力を尽くしていた術者達の、目の前の光景を、現実を疑う叫び声が琵琶湖に木霊した。

第六十二話・琵琶湖決戦・下（後書き）

桜通りの吸血鬼はやらないと言いましたが、短くコンパクトにまとめてやるかもしれません。

エヴァとネギの接点が欲しいので。

第六十三話・エヴァと（前書き）

小休止です。

桜通りの吸血鬼編はたぶんシリアスの欠片もないと思われます。

第六十三話・エヴァと

「むぅ……」

「どうしたんです？　セイさん」

「あ、さよさん」

「はい、どうぞ」

手元の書類の内容にため息をついていた時に、ちょうどさよさんがやってきました。

さよさんが手に持っていたお盆を下ろし、自分の前にお茶を置いてくれる。

「……えへへ」

それから、さよさんは私の横に腰を下ろしてピタッとひっついてき

ました。

さよさんの体温を布越しに自分の左側に感じつつ、湯気の立つ熱々の湯呑みに口をつけ、再び書類に眼を落とす。

昔、私が造った魔法球は二つ。一つは特訓などで使われる『黄昏』。下の森は沙都子ちゃんがトラップ天国にしてしまいました。

それと、もう一つが魔法球『水華殿』。生活用の魔法球で、用途はエヴァのレーベンスシュルト城のような物です。

街一つ分ほどの和風の屋敷が水上に建ち並ぶ少し特殊な設計で、ちょっとした迷路のようにも見えますかね。

あと最近少し手直しして中央部から順に幾つかの層を形成するようにしました。

中央部がもっとも高く、段々畑のように高低差をつけて水の流れを制御しやすくしました。

ぱっと見はもう城ですね。天守閣がない普通の和風建築ですけど。

まぁこれだけ広いとウチの家族が一人一棟使っても建物が有り余ってるんで、無駄と言えば無駄なんですけどね。

「まーた難しい顔して、何読んでるんですか？」

おっと、さよさんの顔がいつのまにか真横に来てました。
悪い癖ですね、ついつい考え込んでしまう。千年経っても治りやしない。

「いえ、昨日からいろいろ起きているようで……」

「それは……」

さよさんの顔が曇ってしまいました。おそらく、千草ちゃんの事を思い出したのでしょう。

現在、千草ちゃんは天乃五環内の病院にて療養中です。
腹部を貫いた刀は、幸い脊椎などの後々まで影響を残すような部位には傷をつけてはおらず、時間をかければ復帰はたやすいとのこと。
全治二ヶ月ですが、ダイオラマ魔法球を使えばそれほど長くはかからないでしょう。

……でも傷は傷。

千草ちゃんは家の中で唯一、生物学的な意味での人間です。

些細な事でも、たやすく死ぬ。そして、そうでなかったとしても、彼女は老いる。

……いずれ、私も……いえ、私達も決断を迫られるでしょうね。フゥ。

ぷに。

「……ん？」

むにむに。みにょーん。

「ふふ、やわらかいです」

「……何してるんですか、さよさん」

「また私の事を無視したから、お仕置きです」

さよさんに頬を指でつつかれたりしました。引っ張らないで欲しいです。

「さよさんもこれを見ればそうなりますよ」

そう言って書類を手渡す。内容はろくでもないことばかりだ。

千草ちゃんの負傷と衣子ちゃんの武器全損から始まり、エヴァから会談の要請があったとか、超包子の代表から連絡があったとか、他諸々。

特に最後の報告はいけない。天乃五環・査察部からの『四層より下の階層にいる開発班が最近なんかカオスでヤバそう』という報告。いまいち要領をえない部分もありますが、何か企んでいるというのは間違いなさそうだ。

一度、戻らないといけないかもしれません。

「千草ちゃん、傷が残らないと良いんですけど……」

さよさんが書類を見ながら言いました。どうも私とは違うところを見ているようです。

「お腹ですし、隠れるからいいのでは？」

「もう、そういう問題じゃありませんよ」

そうなのですか。難しいものなのですね。

「それで、どうするんですか？」

「そうですねぇ」

ま、とりあえずは…

「一個ずつ済ませていきましょうか」

――――

「なかなか趣のあるところじゃないか」

「それはどうも」

まず出始めに手をつける事にしたのは、エヴァとの会談。

麻帆良における諸勢力の中では一番信用できるし、その人となりは信頼できる。

ただ、彼女に問題がないとしても、私たちがこうして会うだけで周囲の立派な魔法使いが騒ぎそうで嫌ですが。

「というわけで、何かようがあるなら簡潔かつ明瞭に手短でお願いします」

「また貴様は……まあいい、簡潔に言うぞ。
ネギ・スプリングフィールドの実力を見ておきたいのだ」

「えー…」

「そうあからさまに嫌そうな顔をするな！　ナギの息子、それがどれだけのポテンシャルを秘めているのか、それを確かめておきたいのだ。どうせジジイのことだ、何か理由をこじつけて私と戦わせようとするだろうさ」

「で、どうせなら自分からしかけてやろうと？」

「そうだ」

「…それ、別に私に言わなくてもよかったんじゃないですか？」

エヴァが、出されたお茶菓子を口に運びながら、めんどくさそうに口を開く。

「言っておかねば、ニンジャどもが邪魔するかもしれんだろう。ここ最近、新しく来た赤ジャージが日中からそこら中でフラフラ買い食いしているのを知らんのか？　あれは実際には監視なんだろう？」

「え？」

「ん？」

へー、空里君はそんなことしてたんですか。まぁ自分の給料の内でやってるんでしょうから、別にいいでしょう。

おや、エヴァがなんだかうなだれています。なぜでしょう？

「まったく、貴様ときたら……！　とにかく、協力しろとは言わん。黙認してもらえればそれでいい」

「良いんですか？　学園結界のせいでたいした力は出せないでしょう？」

「ほう、知っていたか……。まあ心配するな、考えがある」

「……そうですか。まぁ木乃香ちゃんと一般人を巻き込まないのであればいいですけど」

「ふふん、まあ見ていろ」

エヴァは自信満々なんですが……どうにも寒気が……水流の調整間違えましたかね？

第六十三話・エヴァと（後書き）

体がだるくて風邪っぽいです。

湯呑みを持ったらその重さで手が震えた。

疲労がＭＡＸ。

第六十四話・忍者散策（前書き）

注意！ネタ多数！

しかしギャグにはあらず。

第六十四話・忍者散策

「〜〜〜〜〜♪」

昼下がりの麻帆良。そこを、ひときわ人目を引く若い男が歩いていた。

年の頃は青年というのが正しいのだろうが、その風貌と高い背丈が四〜五歳彼を実際より年上に見せていた。

身に纏うのはどこかの稲妻のような深紅のジャージ。頭には認の一字が書かれたバンダナ。

どこでも買えそうな安っぽい雪駄はずるっぺタずるっぺタと石畳の上で音をたて、それにあわせるようにコンビニのビニール袋がガサガサと音をたたてる。

「〜〜♪　〜〜〜、〜〜〜〜〜♪」

左の手首に食玩の入ったビニール袋を引っかけて、両の手をジャージの上着のポケットに突っ込んで足どりもかるく歩いていく。

口ずさむのは、今なお圧倒的な人気を誇る、内気な少年が人型汎用決戦兵器に乗って戦うロボットアニメの、天使のように窓辺から飛び立っていくオープニングテーマだ。

「〜〜、〜〜、〜〜〜♪」

見た目はそこらの軽そうな兄ちゃんだが、その実態は関東呪術協会の幹部の一人、組織の諜報関連の実働部隊を取り仕切る神里空里に他ならない。

見た目とは裏腹に、組織内でも指折りの実力者だ。

その証拠に、鼻歌混じりに歩きながらも、一分の隙もない。

伸びた背筋。一見ただ歩いているだけのようだが、身体の重心が左右にぶれることは全くない。

たとえこの状態で狙撃されたとしても、対応することがかれなら可能だろう。

「〜〜〜〜♪……あっ、すいませーん！　そのメロンパン二つください！」

彼はビニール袋を派手に揺らし、車を改造して路上でパンを売る店に駆け寄っていく。

……繰り返すが、彼は組織でも上位に位置する実力者である。

第六十四話・忍者散策

――歩く。

鼻歌を歌いながら歩く。

雪駄を地面にすりながら歩く。

ビニール袋を揺らしながら歩く。

サクサクメロンパンをくわえながら歩く。

ただ、歩く。

「……うん、美味い。さっすが長……社長推薦のメロンパン」

思ったことを口にする。別に言っても言わなくても同じ事、メロンパンの味が変わることはない。

けっしてーーそう、メロンパンは美味い。それはこの世に存在する普遍の真理の一つだ。

口に出すまでもない。ああくだらない。

だが、これも“仕事”だ。

歩く。それは全ての基本だ。

自転車でもいいが、いざという時に後で回収しにこないといけない。

昔学生の頃に一度やったが緑ジャージが拒否したので後で自分で取りに来る羽目になった。

故に徒歩だ。

無論、なんの用もなくふらついている訳ではない。人の動き、路地の位置、小さな小さな、ほんの些細なことまで確認していく。

メロンパンが美味しいなどということをわざわざ口に出したのも無意味ではない。

自分の現在位置から半径二十メートル以内にいる内の数人から感じる視線が少しだけ苛立ち混じりのキツいものになった。

“立派な魔法使い”か、あるいはそれを目指す“もどき”か。

予想していた事であったが、ここ最近魔法使いの数が少しずつ増えてきているのだ。

それも、ある程度の実力を伴った魔法使いが、だ。

近右衛門が呼び込んだか、それよりも上位のメガロメセンブリア本国が送り込んだ、魔法世界の魔法使い。

確かに彼らは優秀なのだが……

「カタいんすよねー、ちょっと」

そう、根がまじめと言ってもいいが、些細なことにも反応する。
そこそこ使えるのだろうが、専門職の技術を魔法(ずる)で補っている分、一般人ならともかく自分のような諜報のプロには見つけてくださいと言っているようなものだ。

メロンパンごときで勝手にこちらを過小評価したり見損なってくれるのだから、楽なことこの上ない。

さぁ、今日はどれだけ連中を見つけられるだろうか？

どれだけ連中に自分という“囮”を見せつけてやろうか？

「次は、本屋にでもいくっすかねー」

ほら、また一人。向かい側から歩いてくる男が一人顔をしかめた。人混みの中で五十メートルも離れたところからこちらに視線をおくるなど下の下だ。部下だったらペナルティだ。

「〜〜〜、〜〜〜♪〜〜〜♪……？」

メロンパン二つを平らげ、今度は嵐の中でも輝ける小隊長のオープ

ニングテーマにしようかと思った矢先、何かが視界の端に映った。
白い体毛に覆われた胴長短足の身体。イタチにも似たそれは――

「オコジョ？　なんでこんな町中に」

「……？」

「おお？」

オコジョと、目が合う。

直後、オコジョはすぐに路地の方へ逃げて行ってしまった。
だが、あのオコジョの目に宿った感情には覚えがある。

――焦りだ。

獣が、それもオコジョがこんな町中にいるというだけでも変な話だが、それが瞳に感情を宿すというのもまた変な話だ。

まあ、別にいい。些末なことだ。獣一匹いたところで、どうと言う

ことはない。

そう結論し、また歩き出す。

……だが、何かいやな感じがする。

何か忘れているような。

とにかく、このままではいけない気がする。

忍として、こういった直感は信じるべきだ。今のような日常で感じることなどは特に。

だが、閃かない。

あと少しで出てきそうなのだが、わからないのがひどくもどかしい。

「……しゃあないか」

思い出せない以上、思考に囚われて動けなくなることの方が怖い。

故に、空里は再び歩き出した。

報告は即座に実行。

本当はいけないことだが、携帯電話を取り出して長であるセイに電話をかける。

報告して、何かわかればそれでよし。わからなくても報告が完了するのだから問題はない。

『――はい、私です』

「あ、社長。実はですね……」

自分が見たことを、正確に伝える。それも忍者には必要な技術の一つである。

『……空里君。そのオコジョ、可能ならすぐに確保してください』

「了解したっす」

電話の向こうのセイの声が、ほんの少しだけ変化した。空里もそれに反応して自分の意識を切り替える。

忍者は、主の命令を疑う必要はない。

雇われの身なら必要なことだが、今は違う。

主と仰ぐべき方を、自分の中で決めている。

セイの方針で普段はそんなことはないが、今のは“お願い”ではなく“命令”だ。

なら、自分はただ仕事を始めるだけだ。

次の瞬間。

関東呪術協会構成組織の一つ、表では神里総合警備を名乗る神里忍群の若き首領、神里空里は、さながら映画のコマ落ちのように何の予兆もなく、まるで世界から切り取られるかのようにして姿を消し

た。

第六十四話・忍者散策（後書き）

関東呪術協会の幹部は、基本的に皆表でも仕事を持ってます。

第六十五話・昼下がりに会談を（前書き）

すいません、遅れました！

しかも駄文です！

でも、今回はちょっと重要な話です。

第六十五話・昼下がりに会談を

私は、最近思うことがある。

魔法使いって、実は結構暇なんじゃないだろうか？

なぜなら、自分と女子中学生一人の会話を監視するのに魔法使いを三ダースも投入してくるのだから。

単に紅茶を飲んで世間話をしているだけなのに、それを覗いて何が楽しいのだろうか？

「あなたもそう思いませんか？」

「この状況でその発言は、流石というべきなのカナ？」

机を挟んで向かいに座る少女は、あきれ顔でこちらを見る。どうやら、彼女は少し緊張というか、警戒しているようだ。

「そうですか……ま、そろそろ話とやらを伺いましょうか、超鈴音さん」

第六十五話・昼下がりに会談を

「単刀直入に言うヨ。私の仲間になってくれないかな？」

「嫌です」

間。

「……もう少し、訳を聞いてくれたりしてもいいんじゃないかナ？」

眼前の少女、超鈴音が少し泣きそうになってます。

ふむ、と一つ考えるフリをして少女を観察する。背丈や体つきは同年代からすれば普通か少し良い位だろう。

前に一度聞いた話では、恐ろしく頭が良いらしい。本部の開発班曰わく、自分達に比肩しうるとも。

しかも、私の存在を知ってなお、相互不干渉でなく味方に引き込もうていうおもいきり。

何か勝算があるのか……とにかく一考の価値はあるか。

「昔、誰かにも言いましたけどね、単刀直入すぎて意味不明です。目的から何から説明しなさい」

超の目に少し光が戻ります。なんか元気になりましたね。

「わかたヨ。貴方には隠し事をしてもマイナスにしかならなさそうダ。……私はネ、世界を救いたいのだヨ」

うっわ、凄いデジャビュ。ちなみに、今は術で魔法使いには会話を聞こえないようにしてますからね。

「如何にして？」

「魔法を全世界にバラすネ」

「……正気か？」

「無論ネ。そのための策も、その後の用意もしてあるヨ」

……魔法をバラす、か。

「それが何を意味するか、わかって言っているのですよね？」

「もちろん」

「……一つ、訊ねましょう」

「何ネ？」

「何故、世界を自分で救う必要がある？」

それは、避けては通れない疑問。

「昔にも、貴女と同じ事を言った相手に問うたことがあります。何故に世界を救うなどと大それた事を目指すのです？　そこまでする理由が、しなければならない理由があるのですか？」

「簡単なことネ」

超は臆することもなく、目を見て答える。

「私は、実は未来の火星から来た火星人ネ。未来を変えるために、この時代に来たのだヨ」

……

……

……

「そうですか」

「アラ、信じるのカ？」

超が呆けてますねー。

「ええ、もしそうなら納得できることがいろいろありますからね」

「……答を聞いても良いかナ？」

「変わりません。否、です」

超の表情が、ほんの少し変化する。断られるのを予想してのことだろうか。

「……そうカ」

「おや、諦めるのですか？」

「魔法使いにチクったりはしないだろうしネ。今回は諦めるヨ。敵対されるよりはいいサ」

「おや、敵対しないとは言っていませんよ？」

「だが、する気は無いダロウ？」

「まあ」

「次は相互不干渉について交渉したい。それ位なら良いかナ？」

「その時次第ですね」

「言質はとれないカー」

椅子から立ち上がり、背を伸ばす超。彼女は去り際に、こう言い残した。

「……貴方は、何か…過去に戻ってやり直したいことはあるカ？」

それに、私は――――

――――

「あ、お帰りなさい。超さん」

「ん、葉加瀬カ……」

「それで、どうでしたか？」

「どうもこうもないネ。失敗だヨ」

自分の知る情報にはない組織と、その首魁。おまけにキーパーソンの一つとなりえた相坂さよを妻にした謎の存在。

本拠地を調べようとしてもなかなか上手くいかないし、ここ二十年の歴史も自分の知るものと異なる点が大きな事から小さな事まで多すぎる。

組織――関東呪術協会の影響で歴史そのものが狂い始めている。

自分が過去に飛んだことで、因果律でも狂ったのか……

いや、今回は接触が上手くいっただけでもよしとしよう。次の交渉への芽は残せた。

ただ――最後の質問は失敗だったかもしれない。

質問をした後の、自分を見るあの目。

冷たいわけではない。

濁っているわけでもない。

むしろ澄んでいた、澄みすぎていた。

何も映さないほどに。

結局彼は何も言わなかったが、次に会うときは今日にもまして警戒

する必要があるだろう。

「……ままならないものだネ、葉加瀬」

「？　そーですねー、でも、そんなもんですよ」

第六十五話・昼下がりに会談を（後書き）

明日もできれば更新したいです。

第六十六話・忍者と銃（前書き）

学校の祭が近づいてきてるので書く時間が……！

第六十六話・忍者と銃

カチャリ。

「……」

カチャカチャ、カチャン。

ほんの僅かな月明かりが差し込む、仄暗い室内。

そこに銃の分解掃除と点検を行う一人の男がいた。

男の名前は、神里空里。その手にあるのは、銃の部品。

様々な形の部品があるが、一つ一つを手際よく磨き、光にかざして確認してから机に置く。

そしてそれらを組み上げ、銃の形にしていく。

その間思い出すのは、昼間のこと。

「……」

少しの間だけ手が止まる。だがすぐにまた手を動かし、組み立てを再開する。

昼間、長であるセイから命令を受けながら、むざむざ自分は取り逃がした。

補足はできていた。だが運に見放された。

せめてあと五秒はやく補足できていれば良かったのだが、再び補足したときには“薬味”と合流されていた。

周りには関西の“お嬢様”やらその護衛やら同室の少女やらがいて、少し離れた所には高畑まで。

あの状況では狙撃できても少女達に血を見せることになるし、間違いなく高畑に気づかれ戦闘になる。それはセイの望む所では無く、むしろ大きなマイナスとなる。

ゆえに、あの場場引いた。己の恥など気にしない。関係ない。そんなものは存在しない。

成功か否か、それだけだ。

……カチン。

だが、二度はない。

既にセイに再び伺いを立て、いざとなれば西のお嬢様さえその場にいなければ多少の荒事には目を瞑る、その後に発生するであろう学園との交渉もこちらで受け持つとも。

自分は忍者、恥など無い。だが、ささやかな誇り位はある。

命を遂行し、セイの期待に応えることだ。

これ以上時間をかければ、状況によってはあの獣を放置するという判断も下されるかもしれない。

それは、自身の敗北と言って良い。

組みあがったそれを、月の光にかざす。

それは、魔法のステッキことシュトゥルム・ファウストに次ぐ、幹部の中でも異例の一人に対する二つ目の開発班謹製の品。

――開発班謹製多目的銃砲・涼暮月（すずくれつき）。

七守衣子の拡声器のような遊び心のあるようなものではない。

最初から幹部の“本気での戦闘”に耐えられるように設計された、戦闘の為だけの武器、あるいは兵器。

空里が開発班にただひたすらに高機能を要求し、その返答として返ってきたのがこれだった。

白いグリップとその周囲、ただそれだけ。スライド式でもリボルバー式でも、ましてやボルトアクション式でもない。

ごく短い銃身は引き金の上辺りでまるで途切れるように無くなっており、そのうえ銃口すらもなく銃には見えない。

だが、これはこれで紛れもない完成系だ。

変人奇人狂人魔神、それらが集う開発班の新機構――

「――式番・壱……展開」

直後、銃の――涼暮月の姿が変わる。

持ち手だけという歪な姿から、グリップとその周りはそのままに、本来あるべき部分に長細い銃身が虚空から現れる。

完成したのは、ハンドガンに分類される銃。ただし、既存のどの銃ともことなる見た目を持ったものだ。

そして空里は、その銃口を月に向けかざし続ける。

まるで、月を狙うかのように。

第六十六話・忍者と銃。

気配を殺し、己を殺す。

そうして誰にも気づかれることなく、薬味ことネギ・スプリングフィールドを……正確にはその肩の獣を尾行する。

様子を伺う限り、どうやら少年はエヴァンジェリン陣営の……確か茶々丸とやらを尾行しているらしい。

先ほどエヴァンジェリンが高畑に呼ばれて学園長のところへ向かったようなので、茶々丸は今は一人、ネギ少年も自分と同じように周りから人がいなくなるのを待っているのだろう。

現状周りにいるのは、対象……獣の周りにいるのはネギ少年とオレンジ髪のツインテールの少女、神楽坂明日菜の二人。

流石に何か大きな隙があれば別だが、今は無理だ。突然自分の肩から獣が消えれば幾ら素人でもそれに気づく。

故に、今は待つ。

待つ、が……

（どーして、君がそこにいるんすかねぇ……煌君！）

揺れる緑の長髪、茶々丸の横に、平時であるにも関わらず黒の燕尾服を纏い、食材の入った袋をぶら下げた煌がいる。なぜか燕尾服は少し汚れているが。

二人は何でもない話をしながらにこやかに歩いている。が、その微笑ましい様子は組織の諜報担当として多くの情報を握る空里からすると笑えない。今の状況は笑えない。

手元にある情報を鑑みるに、ネギ少年達は先日一度戦ったエヴァンジェリンの従者である茶々丸を今の内に潰すために尾行しているのだろう。

今はなぜか二人が人気のない方へ移動しているので、煌が離れればすぐにでも動くはず。

が、それは非常にまずい。

煌は長の息子、しかも唯一の実子であると同時に幹部クラスの実力を持つという言うまでもない関東呪術協会の重要人物。

その煌と執事とメイドという仕える者同士の友情のようなものを持つ茶々丸は“闇の福音”エヴァンジェリンの従者。

そして、二人を追うのは魔法世界の英雄ナギの息子、ネギ・スプリングフィールド。

ここで、ネギ少年が何かした場合どうなるか結果を予想してみよう。

煌が負傷する→セイはともかくさよが怒る。

茶々丸が負傷する→エヴァンジェリンが超怒る。煌も怒る。

結論。どっちかが負傷すると麻帆良大戦争。

現状、近くにいる幹部は自分一人。

ヤ・バ・イ！！

それはヤバい。ここで何かあれば、すべて台無しになる。

それを防ぐには、自分が動くしかないがどうしたものか。

「――それでは、荷物を置いて着替えてきます。次回スイーツについてはそれから話しましょう」

「はい。ここで猫とともにお待ちしております」

（もう別れたっすか！？　　ヤバいか！？）

そして、煌が離れてから少したって、少年達が動き出した。

「茶々丸さん、あの…僕を狙うのはやめていただけませんか？」

「…申し訳ありません、ネギ先生。私にとってマスターの命令は絶対ですので」

茶々丸がぺこりと頭を下げ、二人と相対する。

そして始まるのは、本当の裏に身を置く空里からすれば子供だましのような戦闘。

ここで介入すれば無力化するのはたやすいが、自分が“浅い所”に顔を出すのはまだ早い。

こんなはずではなかったのに。一瞬そんな考えが頭をよぎるが、すぐに打ち消す。

そんなことを考えていても仕方がない。どうやらあのオレンジ髪の少女も無関係では内容だし、今はこの状況をどうするか――――

「――魔法の射手、連弾・光の１１矢！！」

（いやいや、仮にも生徒に使う魔法っすか！？）

高速、連射、自動追尾と三拍子そろった攻撃魔法。魔法の射手は初級の攻撃魔法だが、その分術者の魔力や技術に影響されやすく、上級者でも好んで使う者がいるほどだ。

それを生徒に使うとは――――！

「すいませんマスター……もし私が動けなくなったらネコにエサを……」

（ええい、ままよ！）

姿と気配を消したまま、射線上に躍り出る。
誰の目に見えず、気配もない。神里忍者の技術の最奥の一つで、詳しく知る者はもはや自分一人。

とにかく、一番良いのはうやむやにすることだ。そのためには、まず魔法の射手を撃ち落とす。

開発班謹製多目的銃砲・涼暮月。その最大の特徴は、バリエーションの多さと展開の速さ。

この銃はダイオラマ魔法球の技術を応用し、銃の中に異空間を形成。そこに銃弾や銃身、機関部などを収納し目的に応じて即座に展開が可能というものである。

利点は持ち運びが非常に楽なこと、弾切れがほとんどないということ。そして“銃”から“砲”まで展開可能ということだ。

今回は飛んでくる魔法を撃ち落とすのでハンドガンで。しかも不審さを極力減らす為にギリギリまで待つという高難度。

だが、特訓メニューに比べれば各段に楽だ。正面からの攻撃魔法がたかだか１１発。全方位からの高速貫通ビームとかじゃない。

一発、二発、三発……瞬く間に、ほぼ同時に魔法の射手が銃弾でもって撃墜され、光の粒子になって消える。

……十発目までは。

（〜〜〜〜っ！！　動作不良！？　マジっすか！？）

十一発目の弾丸は、何らかの理由で発射されなかった。

そのため、残った一発は当然射線上の空里に着弾し、余波が砂煙を巻き上げる。

そして煙が晴れると……

「あれ？　茶々丸さん……！？」

「どこに行ったの！？」

そこには、誰の姿も残されていなかった。

――――

「これはいったいどういうことですか！　空里さん！」

「煌君ナァイスタイミング！　でも説明は後っす！！」

麻帆良郊外の森林地区。そこを二人の男が霞むような速さで走っていた。

一人は空里、もう一人は茶々丸を抱きかかえる煌だ。茶々丸は事態についてこれていないのかぽーっとしている。

あの瞬間、やむを得ず最後の魔法の射手を素手で叩き落としたのだが、絶妙なタイミングで煌が戻ってきたのだ。

燕尾服は汚れたまま。どうも荷物の中にネコ缶が混ざっているのに気づいて戻ってきたらしい。

とにかく、これ幸いと件の茶々丸を回収、獣は断腸の思いで保留、離脱してきたのだが……

「……」

先行する自分の斜め後ろで、煌が笑っている。

その表情を空里は、いや関東や関西の幹部は皆知っているだろう。

（キレた時の長にそっくり……！）

薄ら寒いものを感じた空里であった。

第六十六話・忍者と銃（後書き）

次回はみんな大好き？開発班の話になる予定です。今回の話の補足みたいになるかも。

閑話・開発班と銃と（前書き）

今回は開発班の話。
次回も開発班の話。

…開発班の話、閑話じゃなくて本編扱いにしても良いんですけどね。

閑話・開発班と銃と

天乃五環・四層第七会議室。

そこは普通の会議室であり、最下層の秘密会議室のような場所ではない。通常の会議に使われる部屋である。

あくまで最下層の秘密会議室は本部長である白刃乃が招集するような重要な会議でしか使われない特別な部屋なのだ。

ゆえに、普通の会議室である第七会議室も規模こそ秘密会議室より大きいが普段からよく使われる会議室の一つである。

そしてその日、第七会議室には多くの者達が集められていた。

老若男女、服装も様々だが共通点は大きく二つ。

腰に巻いたりフードを追加して改造したりしているが、皆一様に白衣を身にまとっていること。

そして、全員が“班長”と呼ばれる者達であるということだ。

班長。

ようは小さなものから大きなものまで一つの開発チーム、班をまとめる者のことである。

関東呪術協会の場合、厳密には小班長とか大班長とかいるのだがここでは省略させていただく。

なお、一応班長は原則的に年齢などに関係なく同格である。

そんな彼らが、大学の講義室のような扇形の第七会議室に百人から集まっていた。

これだけいても氷山の一角である。

その部屋の一番奥、一番低い所であり、黒板の代わりに設置された大型ディスプレイの前に、一人の女性がいた。

女性にしては長身でスタイルも良く、顔も整っているのだが、大きな黒縁メガネに化粧も何もしていない姿がそれを相殺ている。

緑のジャージの上に機械油で所々黒く汚れたよれよれの白衣を身に纏う姿は、科学者というよりは技術者と呼ぶにふさわしい。

その彼女が教壇というか演説台というか……とにかく机の前に立ちパンパンと手を叩くと、ガヤガヤ好き勝手に話していた班長達が静かになる。

それをぐるりと見回してから、彼女は口を開いた。

「はーい開発班兵装部門の各班長の皆さんこのクソ忙しい時によーく集まってくれましたー。本部長の天乃五環の敗北宣言以来の残念なお知らせでーす」

「はい！」

その言葉に、班長の一人が手をあげる。髪を角刈りにした軍人のような見た目の男だ。

「そこ、何かー？」

「それはもしかして、先日署名を集めて提出した『カ〇リーメ〇ト』のメープル以外の味も販売して欲しいという申請が却下されたということでしょうか？」

これに班長達はざわめく。表立った動きは余りないが、班長を含めた開発班の中にはメープル以外の味が好き、あるいはたまには他の味も食べたいという者達がたくさんいる。

しかしこの天乃五環では全ての売店でメープルしか販売されておらず、長年多くの不満の声が寄せられていた。

「違いまーす。今回のは別件です。……まぁさっき『論外』の二文字が書かれたメールが総務部から届きましたけどー」

その言葉に、班長達の多くが憤る。

過激な者達は『労働闘争、やっちゃう？』とか『地下の葉頭さんと三層の農耕部門の奴らも巻き込もう』とか『葉頭さんはメープル派だから難しい』とかいろいろ言っている。

パンパン！

「せーいしゅーくにー。今回はもっと重要なことで呼んだんですよー」

「あれ、その銃……空里さんの急な発注で造ったやつじゃ……」

「そうだよ。涼暮月だよ。たしか」

発砲音に驚いた班長達が下を見ると、司会役の緑ジャージ女性が白い銃を手に持って銃口を天井に向けていた。そこからは細い煙が伸びている。

「今回の議題はー、これについてですー。開発班史上初、“開発班謹製”の品で動作不良が確認されましてー、空里さんからリコール食らいましたー」

その瞬間、第七会議室から音が消え、次の瞬間爆発した。

開発班謹製というのは一つのブランド、誇りと言ってもいい。

最高の技術の結晶、それらがさらに合わさってできたのが開発班謹製という品だ。

それ幹部達は命を預ける。その信頼に応えてきたからこそ、開発班という立場と居場所を得ているのだ。

「しーずーまーれーやぁー」

ズドォン！！

轟音。見れば、白い銃が白い砲となっていて、八十八ミリのような砲身が天井を向いていた。天井に穴などはないので空砲だろう。

「通信で聞いた限りではー、十一連射しようとしたら十一発目だけが発射されなかったようですー。調べたところー、どうも空里さんの連射速度に転送が追いつかなかったみたいですー。原因はわかり

ましたけどー…、このままだと我々の根幹が揺らぎますよねー」

「……」

グリップだけに戻した涼暮月を指にひっかけくるくる回す。班長達は黙ってその様子をじっと見ている。

「どーするかー、わかってますよねー」

パシィ、と回すのを止めグリップを握る。

「大班長権限でー、涼暮月の設計の全面的な見直しを目的とした特別チームを設置しますー。
班長三十人までで構成して、大幅なグレードアップを目標としー、志願者を募りますー。
期間は魔法球の中で一週間。こちらの七時間程度なのでー、不眠不休のデスレースを覚悟してくださいねー」

そして、彼女は銃を置く。

「それではー、志願者を募りますー。志願する奴は手をあげてー……」

――バツン！

照明が、突如赤い非常灯に切り替わった。

そして鳴り響く若干慣れてきた警報。

「んー…？　また『抜き打ち☆強制査察』ですかー？　最近多いなー」

スピーカーが設置された上を見て呟く。

本部“迷”物、査察部による『抜き打ち☆強制査察』。

最近どうも多いと思っていたが、班長クラスになると別段気にする物でもなく、話を続けようとしたのだが……。

《開発班統合部より緊急連絡！　最下層・特殊ハンガーにて開発

されていた実験機、計九機が暴走、地上を目指して移動を開始しました！　各員は至急シェルターか最寄りの研究室に退避してください！！　五層の全隔壁を封鎖し時間を稼ぎますので、四層、四・五層で機動兵器開発担当者やテストパイロットは防衛線を形成、保安部と協力して鎮圧にあたってください。破壊も許可されています！！》

静まり返った第七会議室。そこで、アラートだけが鳴り響く。

「……大事件だねー」

「ですな」

「暴走かいな」

「行きますか？」

「だね。場合によっちゃ事だ」

――そして、彼らも動き出す。

閑話・開発班と銃と（後書き）

次回、作者が八月末から思いついたはいいけどずっとやれなかったネタをやるつもりです。

閑話・開発班と量産型（前書き）

今回は前回の続きですが、クロスというかパロディ要素の強いお話。万人向けするネタではありませんが、次回に繋がるのでご容赦ください。

それではどうぞ！

閑話・開発班と量産型

『――こちら五層二十四区より統合本部、超高圧電流トラップにより実験機“量産型”三機の強制初期化に成功！　一時的な封印に成功しましたが、残り六機は隔壁を“切断爆砕”して突破した模様！」

――スピーカーから聞こえる音声は肉声と聞き間違えそうな程にクリアだ。ノイズなど混じっていない。

これもまた、開発班の技術力の一端を示すものである。

『こちら五層メインシャフト前の五層臨時指揮所です！　隔壁が次々に突破されており、五層の防衛線ではもう保たないと思われます！　現在最終バリケードが破られた場合連動して発動するトラップを設置中です！！　我々は設置が終わり次第撤退しますが、右舷のサブシャフト経由で必ず合流するのでご心配なく』

「――こちら統合本部、了解した。合流するなら四・五層に行ってくれ。機動兵器はともかく、あり合わせで防衛システム造ってるから人手が足りないそうだ」

『了解。それでは』

「――ふぅう、ちょいとやべぇな。こいつぁよ」

――閑話・開発班と量産型

薄暗い室内。天井に明かりがあるのだが、今は消されている。

しかし、壁の一方に取り付けられた巨大モニターや、統合部員が扱う端末の整然と並んだ明かりがあるので作業ができないほどではない。

開発班統合部第一司令室。四層にある五十メートル四方の立方体という巨大な空間は、多くの人員がせわしなく動いている。

その室内にあって一段高くなった席で、一人の男が頭をかいていた。

身長は百五十にも満たなく、髪は短めに切りそろえられた紺。
線の細いからだに幼さの残る顔立ちもあいまって女性…というか女の子に間違えられることも多い。
彼は開発班統合部の部長と本部長補佐を兼任する重要人物、多岐宗介（タキ・ソウスケ）である。
本部長補佐というのは本部長である白刃乃の一つ下に位置し、開発班全体でも三人しかいない役職である。
偉いし強い、開発班の実力者だ。
しかし、一部には男の娘と呼ばれてたりする。
それが嫌で統合部に引きこもっていたりもする。
「でも俺、もう四十なんだがなぁ」
そう、彼はもう四十である。葉巻が好きだし、酒もたしなむ程度に飲む。結婚はしていない。
でも、男の娘扱いは昔から変わらない。

彼は何かの血を引いているわけではない。

関東呪術協会には妖物などの血を引いていたりして実際より若く見えるものがかなりいるが、彼の場合は三十を過ぎた辺りで議論を呼び、かなり大掛かりな検査をしたので間違いなく普通の人間である。

当時はその結果におおいに揉めたが、結局は“生命の神秘”で落ち着いた。

「突然どうなさったので？　誕生日の催促ですか、部長」

「違うっちゅうの。それよかぁこれからどうするかだよ。全部で九機だったっけ？」

「そのようです。資料、出しますか？」

部下の言葉に、おうと短く答える。彼は自分の前の空間投影モニターに映し出された資料に眉を歪める。

「おい、こりゃあれだろ。麻帆良にいるヤツ。なんだってこんなもん造ったんだよ」

「報告では、どうも本部長が持ち帰った映像資料にあったのを一部の班長が再現しようとしたのだとか。なんでも『本物は無理だがパ

ロディにすればイケる』とか」

「馬っ鹿だなぁ、意味わかんねぇ」

一刀両断。同じ開発班でありながら弁護のかけらもなく切って捨てる。

幼い見た目でこそあるが、彼は関東の発足以前から白刃乃に引き抜かれて開発班の前身となる組織に身を置いていた。

当時は石呼壬の保護下にいたわけだが、その頃からむちゃくちゃだった古参のマッド達を脱線しない程度にまとめていたのが彼なのだ。

白刃乃は本当にまずいときしか介入しなかったので、気づいたときには自然と彼はそのポジションにいた。

彼は当時のことを回想する。今では本部長補佐や大班長など偉いどころになってしまった当時の仲間達。

薬学や生物学に長けた奴らが自分を無理矢理成長させようと変な液体薬を造って、それを飲まされたこともあった。

実験は成功して身長百八十オーバーの理想の身体を手に入れたがすぐに戻った上、反動で三日は寝込んだ。

そういえば当時の仲間には実弾砲派の頭目みたいな奴がいて、彼女

は国内で列車砲を造ろうとして皆で止めたものだった。

最近みないが、どうしているのだろう。まさか二十年越しに今頃――

「部長、五層のメインシャフト付近でトラップが作動しました」

「お？　　おう、どうなった？」

過去に意識がいっていた多岐は、生返事で聞き返す。今は集中するべきことがあるということを忘れていた。

統合部の部長がこれではいけない。また小さいから仕方ないとか言われる。それはイヤだ。

「五層メインシャフト装甲壁が突破された模様です。五層の班員が仕掛けたトラップの影響でカメラが動きませんが、メインシャフト内のカメラで確認できるのは五機。現在メインシャフトを上昇しているようで、多重装甲隔壁を展開していますがいつまで保つか……」

「それ、開けちまおう」

「は？」

少しの間、司令室の空気が凍り、誰もが司令官の椅子に座るこの部屋の主、多岐を見る。

「開けるのは途中までだぞ？　四・五層に引き込んで一気に潰そう。あそこが一番広いし人と兵器が充実してる。そこまでの隔壁開けて、一度爆雷投下して、あとは現場担当者に任せようや」

「は、はぁ」

「ほら、急げ。四・五層のメインシャフトのゲートも開けてさ。データ見た限りＡＩが不完全だから多分ひっかかるだろう」

「了解しました」

多岐の命令で、オペレーター達が端末を操作し、隔壁を開くように指示を出す。

その様子を満足そうに眺めた多岐は懐から長方形のケースを取り出し、そこから細めの葉巻を一本とってその先を切り落とす。同じく懐から取り出したマッチで火をつける。

軽く煙りを吸い込み、満足げに吐き出した。

「さぁてと、機動兵器の性能や如何に…ってな」

と、格好をつけた多岐だったが、椅子に座っている多岐の背後からすっと手が伸び、葉巻をひょいと取り上げた。

「んむ？」

「……禁煙ですよ、部長」

「せちがらいなぁ……」

―――

「これがお前のところの自信作か？」

「おうよ。十メートル級機動兵器『灰色兎』だ。なかなかだろう？」

四・五層。そこにはいつもの白衣の男とツナギの男が灰色の巨体を見上げていた。

開発班十メートル級機動兵器、灰色兎。

兎を模して造られた頭部から後方に大きく伸びた耳型のアンテナに、脚部には大きなスラスター。背中には縦に長い長方形の飛行ユニットが二つ取り付けられている。

主に高機動戦闘を想定しての設計のため装甲は少なめだ。

現在の武装は急だったため大型ライフル一挺と盾のみ。

ミサイルなども装備によっては搭載が可能である。

それが、全部で七機。
横一列に並んで、メインシャフトに向けてライフルを構えている。
「良い機体だな。どれくらいだせる？」
「まー音速は楽に超せらぁな。だがどこまで出せるかとなると外で試験してみないとなんとも言えん。武装と装甲取っ払って加速用ユニットつければ……最高でマッハ４～５ってとこか」
「ぶっつけ本番になるか。……しかし壮観だな、おい」
「班長連に加えて、俺ら搭載機部門の現状動かせる全戦力だからな」
メインシャフトから三百メートルほど離れた位置に、数多の兵器と、それを操る開発班員にテストパイロット、班長連がいた。
『灰色兎』の他にも、十五メートル級の機動兵器で日本の鎧武者を模した『古白』（フルシロ）が三機と二十メートル級の砲戦仕様『重霧』（カサギリ）が一機。試作品の野戦砲サイズのレールカノンや、採用されなかった収束魔導砲なども並べられ、果ては誰かが趣味で造った高速巡行戦車まである。

それに加えて班長連がいる。
班長連。彼らの多くは自作の銃砲火器で武装しているが、一部にはパワードスーツのような形で小型の機動兵器を操る者もいる。

ドォン…

「おっ……？」

「揺れた、な……」

ドドォォン……

『――こちら統合部長の多岐だ。あと三分くらいでそちらに対象が到着する。多少の損害はかまわんから、思いっきりやってくれ』

「多岐さーん。光学兵器は駄目なんですかー？」

スピーカーから響く多岐の声。それに、集団の中からひとりの女性が出てきて問いを発した。

『却下。周りを巻き込みかねん。なぁ、三城那三（ミシロ・ナミ）大班長』

「そんなことー、ないでーすよー？」

『そこで疑問系な辺りが信用できねーんだよ！』

「えー」

三城那三。緑のジャージに汚れた白衣、黒縁メガネがトレードマークの化粧と無縁な残念美人である。

そんな彼女でも大班長は大班長。

人並み以上に戦えるのだ。

『別に使わんでも、ソレがあれば十分戦えるだろーが』

「それはそれでー、これはこれー。なるべく早く涼暮月の改修に取りかかりたいんでー」

ガツン、と拳を自分の豊かな胸の前で打ち合わせる。

……ガツン。ちなみに金属音である。まかり間違っても女性の拳が出す音ではない。

彼女の自作の得物で、機械手甲という。特別な名前はない。そう呼んでいるだけだ。

ようは肘から先を覆う化け物みたいな機械腕で、左右にそれぞれ特殊装甲板やら抗呪文処理やらを施し、掌と拳骨に光学兵器を仕込んだ上、機動力強化にバーニアを四つずつ搭載した両腕だけの機動兵器みたいなシロモノである。

『とにかく駄目だ。頑張れ』

「めーんどいぃー」

『そんなこと言ってていいのか？　もう来るぞ、“量産型”』

「――！」

すぐさま那三は両手を引いた構えをとり、開かれているメインシャフトのゲートを見やる。

いくらマッド達のネタ用に造られたとはいえ、自分と同じ開発班が開発途中のメイドロボの技術を応用して造りあげた試作量産機。どんなびっくり機能が備わっているかわかったものではない。

注意深く、全神経を集中してゲートの奥を見る。

やがて――それは、否、それらは、スゥと闇から浮かび上がるように姿を表した。人の形を模した姿が五つ。

――見た目は、まさしく少女のようだった。

病的なまでに白い肌と、絹糸のような美しい白い髪。

それに加えて白のワンピースを纏った白一色の姿。

だが、それだけではない。

手に持つ槍と同様に、瞳が血のように赤いのだ。

それは、三日月のように弧を描く口も同様で。

那三は――その場にいた開発班は身震いする。誰かは知らないが、いつの間に自分の同僚はこんな“化け物”を造りだしていたのか、と。

そしてこうも思う。

―ああ、なんてすばらしい、と。

「すばらしぃーなー。こーれがぁ――――」

那三もまた、唇をニィてつりあげ、笑う。

「コレがー、今回の騒動の原因……ネタ用試製量産型・タイプエヴァンジェリン――――量産型エヴァかー!!」

量産型エヴァンジェリン。

それは、かつて白刃乃が持ち帰った異世界の映像資料を基に、他の班長二人が入院中で暇をもてあましたメイドロボ担当の班長の残りの一人が造りだしたネタとロマンの結晶。なお、紫や赤、蒼は造らなかったそうだ。

そして、彼女の機械手甲のバーニアにも火が灯る。

「そーれじゃー行ってみよーかなー？」

「ちょ、那三さん！　先に突っ込まれたら砲撃できな……！」

「よーし行ってみよー！」

キィーーーーー…ドォン！！

加速。

左右合わせて八機のバーニアが火を噴き、音を置き去りにして一瞬の内に三百メートルの距離を詰める。

そして接触する直前に、両の拳を前に突き出す。

衝突音とともに一番前にいた量産型エヴァが吹き飛ばされ、メインシャフトの壁面に叩きつけられた。

「あらー？」

しかし、量産型エヴァはまだ原型を留めていた。那三は胴を貫いて真っ二つにするつもりだったのだがそうはならず、壁にめり込み機能を停止した程度で済んでいる。

主電源が落ち既にその瞳に光はないが、浮かべられていた笑みはそのままだ。

一瞬の内に一機を無効化したわけだが、すっきりしない。予想と結果が狂うのは科学者として許せることではない。

原因として推測できるのは、

「八角形の、障壁？」

自分の拳が届く寸前に展開されたオレンジ色の八角形の障壁。那三も件の映像は見ており、オリジナルの絶対的な防御力も知っている。心がどうだとか拒絶がどうだとかで再現は不可能という結論が出ていたはずだが、担当者が可能な範囲で再現したことに内心賞賛を送る。

「とゆーことはー、これもー？」

深紅の槍。これも資料映像ではずいぶんな威力を発揮していたが、やはりレプリカなのだろうか？

そう思い手にとってみると、予想よりもずっと軽いことに驚く。

見た感じだと抗魔法処理が施されているようなので、魔法使いの障壁突破に重点を置いたモノなのだろう。

レプリカにしては上等だ。

「これ良いなー。本部長に開発者の昇格推薦してみよーか」

ひゅんひゅんと軽く槍を振り回す。長さは二メートル弱といったところだが、本当に軽い。まるでプラスチック製のオモチャのようだ。

振り回しているとだんだん楽しくなってきたので、なんとなくでたらめに舞を舞ってみたりする。

「おー、意外とできる」

汚れた白衣に緑のジャージ、自分のウェストより太い機械の腕と赤い槍。

何もかもがミスマッチ。だが、だからこそ楽しいのか。

「那三大班長ーー、手伝ってくださいよーーー！！」

ピタリ、とデタラメな舞を辞める。

「……何をー？」

駆け寄ってきたのは涼暮月の件で招集した班長の一人だった。

「何って、アレですよ！！」

班長が指差した方を見る。

そちらでは、更に一機に減って三機の白い少女が笑みを浮かべたまま赤い槍を振るい、自分以外の開発班と戦っていた。

現状はやや開発班が押しているようだが、搭載機班の二十メートル級機動兵器『重霧』がたったまま火を噴いていたり、量産型エヴァもやられてばかりではないらしい。

「うわぁーお」

『みぃーーーしぃーーーろぉーーー！！　なぁに遊んでんだーーー！！』

「うおぁー！？」

那三の目の前に突如現れるウィンドウ。至近距離で幼い顔に怒鳴られたことに驚く。

『とっとと次行け次！　さーぼーるーなぁー！！』

「わかりまーしたよー。いーきまーすよー」

那三は槍を持ったまま、再び加速を開始した。

――

「ったく、真面目にやりゃー強ぇーんだからよ、最初っから行けっての」

司令室の三次元投影モニターには、一機、また一機と班長と機動兵器によって機能停止に追い込まれていく量産型エヴァが映し出されていた。

そして、ついに最後の一機が『灰色兎』に撃墜されたのを見て、室内にほっとしたような吐息が幾つも漏れた。

機会とはいえ見た目は少女、それがぶっ飛ばされるのは精神的に余り良い映像ではない。

それでも、やはり兵器は兵器だ。

「あーーー……終わった。よっしゃ喫煙室いこう。後で報告書だすように言っといてくれや。最悪三本吸い潰すまで戻ってこないから」

「天乃五環を通常シフトに戻しますか？」

「四・五層の五機全部が完全に機能を停止してるの確認できたらな」

「了解しました。……現場から報告きました。メインシャフト及び四層以下の隔壁を開放します」

その時だった。

「……部長！！　五層から高速飛翔体が出現、メインシャフトを上昇開始！　大きさと反応から量産型だと思われます！！」

「んだとぉ！？」

すぐさま自分の席の端末に飛びつき確認する。

「……どうなってる！　全部で九機だったんじゃないのか！？」

「おそらくは、五層のメインシャフト付近で消えた機体かと」

「今まで回収してなかったのか！？　五層の連中は何を……いや、それよりなぜ“今”動き出した？」

「五層はトラップによる一部崩落で人が入れなかったため確認でき

ていませんでした。それと、おそらくは機体同士で情報の共有が行われていたのではないかと」

「くそっ、機械が“死んだふり”とはやってくれるじゃねえか。急いで四・五層の連中に……」

「無理です！　既にメインシャフト二層付近を通過、隔壁の再封鎖も間に合いません！！」

「……しくじった！！」

小さな拳を、コンソールの脇に叩きつけた。

―――

夜空。

雲は少なく、まだ寒い時期なので空気も澄んでいる。

周りに人工灯りはなく、どこまでも広がるのは黒の地平。

空には星と丸い月。

ひとりになった機械の少女は、天乃五環を抜け空に浮いていた。

初めて見る夜の空。

輝く星に蒼い月、暗い空から白い自分を照らしてくれる。

量産型エヴァ……少女は、再び移動を開始する。自分に刻まれたプログラムに導かれるままに。

目指すは彼の地、麻帆良。

本当は、九機みんなで行くはずだった。

でも今はひとり。それでもいく。

この機会を逃せば、きっとながいこと動けなくなるだろうから。

紅い槍を手に、飛ぶ。

“彼女”に会いに。

今夜は、満月だ。

閑話・開発班と量産型（後書き）

多岐宗介の見た目は『とある魔術』の小萌先生の色違いだと思っていただければだいたいあってます。

……男ですからね！

第六十七話・満月の下（前書き）

遅れて申し訳ありません。

学祭が終わったので、また定期的な更新ができると思います。

今回は話を区切って投稿しますが、可能なら今夜中にもう一話投稿します。

第六十七話・満月の下

――話は、白の少女が地に隠れる船から飛び立つ、少し前にさかのぼる。

一人の少年が、小さな決意をもって戦いに臨もうとしていた。

きっかけは、自分の生徒、自分が傷つけようとしてしまった生徒とともにいた、自分より年上の、燕尾服を着こなした背の高い少年が持ってきた一通の封書。

それは、自分が出した果たし状の返答だった。

相手の執事のような少年は、それを少年に渡すと用は果たしたとばかりに去っていった。

何を訊いても『全てはそこに書いてある。自分が話すことはない』という趣旨を丁寧な口調で語られ、何も教えてはくれなかった。

その内容は、まとめると『満月の晩に、戦いをうける』という非常にシンプルなもの。

手紙の最後には、流麗な筆記体でＥｖａｎｇｅｌｌｉｎｅ・Ａ・Ｋ・ＭｃＤｏｗｅｌｌの署名がなされていた。

少年は、自らが勝利する事によって生徒を正しい道に。授業を受けさせ、悪いことを止めさせようと決意を新たにする。

……自らが相対するのが、歴史に刻まれるほどの悪だけではないと知らずに。

――第六十七話・満月の下

「兄貴、本当にいくんですか？」

「うん。エヴァンジェリンさんにちゃんと授業をうけてもらって、悪いことをやめてもらわないと」

「だがよー」

夜。麻帆良の市街地にくりだそうとする少年は、いつものスーツではなく麻帆良に初めて来たときのような動きを阻害しない軽装にマントを羽織り、幾つもの骨董魔法具を身につけ戦闘準備を整える。

その足元に、一匹の獣がいた。

アルベール・カモミール。猫の妖精に並ぶ由緒正しきオコジョ妖精…のはずである。

下着泥棒という罪を犯しており、イギリスの魔法使い圏なら仮契約の仲介を行うということで多少は大目に見られるかもしれないが、ここは日本である。

先日、当然関西関東ともに呪術協会では賛成率九割オーバーで排除が決定されているが、いろいろな幸運によって今日まで生き延びてきた淫獣である。

そんな獣でも、兄貴と呼んだ少年、ネギのことは本気で心配しているのだろう。何せ相手は闇の福音。六百年生きた真祖の吸血鬼だ。

「せめて明日菜の姐さんに頼みましょうよ。かないっこねぇですって！」

「ごめんね、カモ君。でも、明日菜さんにはこれ以上迷惑はかけられない。だから、僕一人でいく」

「兄貴ー…」

ネギは獣…カモの言葉を無視して、杖にまたがり飛行姿勢をとって飛ぶ準備をする。

「ああ、もう知りませんぜ！！」

「あ、カモ君……」

自分の杖から飛び降りたカモを、首をまわして後ろに見る。

「ごめんね、カモ君。でも、やっぱり僕は……」

杖の柄を握る手に込める力を一層強くし、杖により多くの魔力を流し込む。はやる気持ちをおさえるように。

「一人で、行く」

最高級の魔法媒体である杖は、流し込まれた魔力と少年の意志によって加速する。

風を切り向かう場所は、エヴァに指摘された大浴場。

今は夜であるため消灯されているが、エヴァは吸血鬼。多少の暗闇は関係ないのだろうと結論づける。

建物に入り、飛ぶのをやめる。

自身が風呂嫌いなためあまり来ることはないが、かといって迷うことはない。

大浴場の湯船の中を進む。膝上まで水につかり、マントも濡れるが気にせず進む。

「エヴァンジェリンさん、ネギ・スプリングフィールドです！」

名乗り上げ。臆することなくよく通る声でしたそれは広い大浴場によく響いた。

「――そうわめくな。ここにいる」

聞こえたのは、上。屋内にある小さな四阿の屋根の上に、いた。

闇の福音。そして、その従僕たる茶々丸と――

「あれ……？」

ネギが、ふと首をかしげる。

「あの……エヴァンジェリンさんですよね？」

「他に誰に見える？　私の夢を覗き見たくせに」

本当はエヴァの大人の女性のような姿について訊きたかったのだが、先に言われてしまい慌ててネギは矛先を変えた。

「う……い、いやそうじゃなくてですね、その、そちらの方は誰なのかと……」

「ん……？　ああ、こいつか」

ネギが見るのはエヴァから見て左側。茶々丸と同じく不安定な足場であるにも関わらず微動だにしない燕尾服の少年。

「見てわからんか？　執事だ。臨時雇いだがな」

「執事？　それも臨時って……」

「まぁ気にするなよぼうや。そるよりもよく逃げずに来たじゃないか。それも一人で」

エヴァの声にあるのは嘲りではない。強者としての当然の余裕といべきか。

「約束してください、エヴァンジェリンさん！　僕が勝ったら、悪いことはやめてまじめに授業に出てください！　それからっ」

「坊やの父親のことか？」

その言葉に、ネギの顔つきが変わる。それを愉快そうにエヴァンジェリンは眺めて、

「ああ、いいとも。答えてやるさ。だが……私が手を出すまでもないかもしれんぞ？」

「それはどういう――」

――ジャキン。

「え……」

鈍く響く鉄の音。ネギに向けられた鋼の銃口。

その音の出所の一つはエヴァンジェリンから見て右側、茶々丸が構えた大きな砲。

もう一つは、執事こと玄凪煌が両手に構えるマシンガン。

特異な形状から余りにも有名なその銃の名前は———UZI・SMG……ウージーと言った。

「さぁ、どうする？　坊や？」

銃声が、響いた。

第六十七話・満月の下（後書き）

キャラ人気投票、するべきか止めるべきか……

やるとなったらその内発表します。

第六十八話・量産型がもたらすは（前書き）

量産型エヴァを出した時点で桜通り編シリアスとか無理です。作者の技量では。

それではどうぞ。

第六十八話・量産型がもたらすは

「――よかったんすか、長。このタイミングで煌君に好きにさせて」

麻帆良内にある、玄凪邸。その居間。

大きな炬燵に、今麻帆良にいる幹部格がそろっていた。

セイを筆頭に、さよ、時雨、志津真、沙都子、空里の六人である。

彼らが鍋をつつきつつ見ているのは、大きなテレビである。

そこに映るのは、夜の麻帆良を杖に乗って必死に逃げる赤毛の少年と、それを追う八八ミリのような砲を持って飛ぶロボメイド、両手にマシンガンを持つ執事。

そしてその後ろを悠然といく金色の吸血鬼。

関東開発班の副次的な発明品であるスパイカメラで、随時中継されているのだ。

「いいんですよ。あの煌が初めて私に自分のやりたいことを、自分の意志で決断し伝えたんですから。多少の無茶は目を瞑ってやるのが親というものでしょう。

そうでなければ強くは育ちません。ま、欲を言うなら私に許可をとらずとも実行できるだけの我の強さがあればよかったんですが……煌らしいということでよしとしましょう」

テレビから目を離さぬまま、セイは隣のさよによそってもらった器を受け取る。

バランスよく鶏肉、豚肉、春菊、白菜、エノキ、椎茸、豆腐などが入ったそれに、ふっと表情を緩める。ちなみに鍋にマ〇ニーは入っていない。

「そうですわよ。私も小さい頃は裏山をトラップだらけにして遊んだモノですわ。自衛隊の特殊部隊だってイチコロですのよ？」

「そうだな。おかげであの時、私は何もせずにすんだ」

「もう、旦那様ったら……はい、あーん」

「ん……」

テレビを見ていた沙都子と志津真が炬燵の一角で甘い空間を形成し。

「肉、肉、肉、お肉～」

灰色の髪を纏め上げた時雨がひたすらに肉をさらい。

「しっかし、急に俺のコレクションから幾つか銃を借りたいなんて来たからまさかとは思ったっすけど、こうなるとは……そういや、どうして闇の福音が動けてるんすか？」

「あ、なんでも擬似的な封印を自分で自分にかけて、存在の“格”を弱く見せているのだとか。ここの学園結界は低級な妖怪とかだと入ってきますからね。他にも式神とか」

「なるほどっす……」

空里はしみじみつぶやき、セイがそれに答える。

エヴァによるネギの襲撃。ネギからすれば一大事だが、彼らからすれば煌の、家族の成長の一幕にすぎないのだ。

そんな銃弾が飛び交う現場とは真逆のほのぼのとした状況で、突然さよから空里にキラーパスが飛ぶ。

「ところで空里君はいつ那三ちゃんと結婚するんですか？」

「ぶふぁっ！？」

「お肉、お肉～っっっ！？　　汚っ！？」

突然のことに、空里は口の中のご飯を向かいの時雨の方に噴き出した。

「ごふげふ、かはっ…な、何で！？」

「え、だってつきあってるんでしょう？」

「いや、違うっすよ！？　どこからそんなガセネタが！？」

「本人から」

「あの女外堀から……！　な、なんで信じたんすか！？」

「だって、ねぇセイさん？」

さよがセイにしなだれかかる。

「ええ、神里忍軍の緑ジャージ、着てましたよ？　あなたがあげたものだって言って。嘘なんですか？」

「……いえ、あげたのはほんとっすけどあれはそういう……」

「……詳しく話を訊く必要がありそうですわね？」

「え、いやいやいやそれは待ちましょうって沙都子の姐さん！

ほら、いいとこですよ、煌君！」

突如ふってわいた己のピンチに、空里は煌を生け贄にささげる。確かに、テレビの映像は佳境を迎えているようだ。

「ふむ、案外少年も逃げるのが上手いか……いや、若が遊んでいるだけか？」

「そうなんですの？」

テレビの画面では、燕尾服を翻し屋根を駆け、二挺のウージーで煌が弾幕を張り、そうしつ追い立てられたネギに茶々丸が砲をぶちかまし、必死に逃げるネギを後ろからエヴァが手を出さずに鑑賞しているという一つの構図が出来上がっていた。

エヴァ本人はまったく手を出していないのに、ネギは装備の大半を失っている。

しかもエヴァ側にはメイドと執事もいる。まともにやれば、ネギ一人では誰かひとりを倒すのも無理だろう。

だがしかし、ボロボロになったネギの目からはまだ光が失われていなかった。彼のすぐ先には、麻帆良と外の境界、麻帆良大橋がある。

「罠っすか？　ひっかからないっしょ」

それに答えたのは、沙都子。

「いいえ、多分ひっかかりますわ」

画面では、煌、茶々丸、エヴァの三人が橋の上に設置されていた捕縛結界に捕まっていた。

『や、やったー！！』

「ああ、ああ。ぬか喜びしちゃって」

上手く捕縛できたことに喜ぶネギ。しかし――

『ふん、この程度か……煌』

『はい』

タン。パキィィィン……

『え……？　そ、そんな！？』

煌が、足を一度踏み鳴らす。そるだけで捕縛結界が硝子細工のような音をたてて砕け散った。

当然、ネギには何が起きたのか理解が追いつかない。

「あー、そういや煌君の革靴って、仕込んだ鉄板に色々術式が刻まれてるんでしたっけ」

煌は一時期……というか今も執事を本気で目指しているらしく、主の為に紅茶をいれている時であったとしても、それを中断することなく術式発動可能な媒体はないか模索し、開発班を頼ってしまった。その結果が靴だったらしい。

他にも時計など幾つか案が出たらしいが、執事の形を崩さず、なおかつ隠密性にも優れるという理由で靴になったそうだ。

とにかく、捕縛結界は破れた。

ネギはエヴァに杖を投げ捨てられ、泣きわめいている。

「あーあー、みっともない」

「もうそろそろ終わりですか……。あ、セイさん。よそいますね」

「あ、お願いします、さよさん」

「……マスター、誰か来るよ」

「んむ？　　ん……ふぅ、乱入者？」

豚肉を口に運んでいたセイがそれを咀嚼したあとで、画面に目をやる。

突貫してきたのは、オレンジ髪の少女と、その肩にのった獣。

「あの獣、ついに一般人をこの道に巻き込んだか…」

オコジョがマグネシウムリボンを燃やして強力な光を発生させた隙に、少女がエヴァンジェリンを蹴り飛ばした。“障壁の存在をまるで無視するかのように”。

衝撃でエヴァンジェリンはもとの幼女の姿に戻り、その間にネギ達は柱の影に隠れ、獣の敷いた魔法陣でパクティオーを交わした。それを、厳しい目で室内の者達は見ていた。

「……やはりあの獣、潰しましょうか。ある程度なら魔法使いを潰すときのネタにできるかとも思いましたが、これは酷いですね」

ほのぼのしていた場が荒む。ありえないことだが、熱い鍋が冷え切りそうなほどだ。

テレビの向こうでは、獣も入れれば三対三の構図が出来上がっていた。

そして、いざ動きだそうかというその時に。

『ぬ……？　がぁっ！？』

エヴァの腹部。

そこから“赤い槍”が突き出ていた。

――――

「ぬ……？　があっ！？」

感じたのは、トンっ……という軽い衝撃と、腹部の些細な違和感だった。
だが、それ違和感はすぐに爆発的な痛みに変化した。
見れば、そこにあったのは自分を貫く赤い槍。血の色ではなく、その槍自体がもとから深紅の色をまとっているのだ。
気配はまるで感じなかった。平和ぼけしていたとはいえ、夜の女王である自分が。
その事実に戦慄している間に、槍が引き抜かれた。
痛みをこらえ、振り向きざまに遠心力をのせてローキックを見舞う。
それは背後の襲撃者をとらえ、自分から引き離す。

そして目にしたのは。

「ば、かな……」

そこにいたのは、色こそ違えど、自分だった。鏡に映したような、白いこと以外は何も変わらぬドッペルゲンガー。

それが、深紅の槍についた自分の血を、ほんの少し指ですくって、口に運ぶ。

「……にがい」

「貴様、よくも……！」

エヴァの傷がたちまちふさがる。だが、そんなことは些細なことだ。

ネギ達は状況の推移についていけないようだが、既にメイドと執事はネギ達を無視し、突如出現した白いエヴァンジェリンに注意を向け、油断することなく武器を構えていた。

こいつは、何だ――――？

疑問の答えが出ぬうちに、白エヴァが真っ赤な口を開いた。

「はじめまして、おりじなる」

「オリジナル、だと？」

「そう、おりじなる。わたしたちはあなたを、あなたとよくにたなまえのへいきをもしてつくられたりょうさんがた」

“ねた”ようだけど。と白エヴァは続ける。

「私達、か。仲間はどうした？」

エヴァも、得体のしれない相手に情報を集めようと、会話が成立するのかを試す。ただし、いつでも迎撃できる体勢をとりながら。

「とめられちゃった。ほんとは、かんせいしてもあなたとのおさけのせきとかでよきょうとしておめみえするまでつかわれないはずだったんだって。でも、ぱぱがあついこーひーをこぼしてあわてたせいで、たまたまどうりょくがはいっちゃったの。だから、わたしたちはぷろぐらむにしたがってうごいたわ。そーしたら、ぱぱのどうりょうにみんなとめられちゃったの」

「ふむ、で？　貴様は何をしにきた？　プログラムとはいったいなんだ？」

「えっと、わたしたちは“きゅうげき”をさいげんするの。ほんとはそらからみんなでぶわーってきて、ろんぎぬすでぶすってやって、がつがつがつっていくの。でも、わたしひとりしかいないから、それはあきらめる。だから――」

――アナタヲ、タベサセテ？

「ふん、だが断る！！」

「え？　どうして？」

「どうしてって、タベサセテ？と言われて食べられる馬鹿はおらん

わ！」

「えっと、えっと。こういうときは……」

槍を持ったまま頭に手をやり、くるくる回る。どうやら、思考のうずにはまったらしい。

「あの、エヴァンジェリンさん……？」

「黙れ坊や。今は坊やの相手をする暇はない」

「あうっ！？」

仮契約までしたのに、もはやネギはエヴァの眼中にないらしい。カモにしても、下手に動かないほうがいいと判断を下す。こういうのには人一倍勘の働く獣だ。

「うん、そうだよ。とりあえず、たべちゃえばいいんだ」

そうこうしているうちに、白エヴァが回るのをやめこちらを向く。

赤い瞳は、エヴァだけを見ている。

「やっぱり、ろんぎぬすでさしていぬいてうがってぬいつけて、それからたべることにする。ぷろぐらむかめいれいのへんこうは、ぱぱかぐらんどますたーじゃないとできないもの」

「グランドマスター？　そいつの名前を聞いてもいいか？」

どうせ答えないだろうがな。エヴァンジェリンはそう思いつつも一応訊ねる。すると、意外な答えが返ってきた。

「いいよ。ぐらんどますたーは……」

せい、って、いうんだよ？

「ぐほっ！？」

こんどは、テレビを見ていたセイがむせた。

「セイさん。浮気デスカ……？」

「違います！！」

「ちょ、長、あれが何か知ってるんすか！？」

「い、いえ、知りません。しかし私をグランドマスターなどと呼ぶからには、おそらく開発班の仕業じゃないかと……。基本的に彼らは暴走などの緊急時に備えて私か白刃乃さんのどちらかを最上位に設定していますから。とにかくちょっと行ってきます！」

「あ、長！」

予期せぬ事態に、セイは転移術式を起動する。もともと近右衛門辺りが覗き見ているのは承知の上であり、煌が暴れた後の言い訳は考えているが、流石にここで開発班の生物兵器？機体？が出てくると具合がよろしくないのだ。

さよもまた、セイにしがみつきともに行く。

「はいストップ！！」

「え……ぐらんどますたー？」

「父さんと母さん！？」

虚空からスッと橋に現れたセイとさよ。部屋着のままだが二人とも術師タイプなので問題はない。

その一方で、ますます混乱するのは今までその場にいたエヴァンジェリン達だ。

「おい貴様、“これ”は一体何なんだ！？　納得のいく説明をしろ！！」

「あー、はい。一言で言うと部下の暴走です。私も何が何だかさっぱりで」

「父さん、どういうことです！　手出し無用だって約束したじゃないですか！」

「いや、私が命令したわけじゃ」

「とにかくもっと詳しく説明しろ！！」

「父さん！！」

「ぐらんどますたー♪」

「あっ！　ちょっと何セイさんに抱きついてるんですか！」

――橋の上は、混沌としていた。

決意を固めていたはずの少年を置き去りにして。

第六十八話・量産型がもたらすは（後書き）

いつかは量産型エヴァでシリアスやりたい……

次回まとめます。

それからしばらく裏世界のターン！

第六十九話・悪とは？（前書き）

作者は見つけてしまいました。

１０月３１日、２３：００頃の話。

日刊ランキング、２９位。

……やりましたよ読者諸兄、紳士淑女の皆さん。

私は自分で初めてこの作品がランキングに載ってるのを見ましたよ。

連載開始から約半年、ランキングがあることに気づかなかったと言うのもありますが……

とにかく、作者は非常に喜んでおります。テンションが天元突破です。

これもこの作品を読んでくださっている皆様のおかげです。

願わくば完結する日までお付き合いください。

第六十九話・悪とは？

スターブックスコーヒー。麻帆良にある緑の看板でおなじみのコーヒーショップである。

コーヒー以外にちょっと食べられるものも充実しており、スタブの通称で親しまれている。

断じてスタバでないことをここに明記しておく。

そこのオープンテラスを占領するように、店の雰囲気に不釣り合いな団体客がいた。

彼らは、三つの塊にわかれていた。

一つは闇の福音の勢力。

椅子に座るエヴァと、メイド服ではない普通の普段着を着て背後に立つ茶々丸。そしてその茶々丸に抱かれるチャチャゼロの一人と二体。

一つは、ネギ・スプリングフィールドと愉快な仲間たち。
ネギの傍らには仮契約をかわしてしまった神楽坂明日菜と、アルベール・カモミールがいる。
その手にあるのは、常識ある裏の関係者からすれば正気を疑われるような大きな杖。
魔法先生の中でも、裏で『秘匿はどうした』と嘆いている者がいるとかいないとか。

そして、最後の一つ。

仕事場から抜けて来たのか、外国の車掌のような黒い制服を身に纏ったセイと、その家族だ。
今日もいつもと同じ燕尾服を着こなした煌と、先日混沌をもたらした量産型エヴァンジェリン……もとい白エヴァがいる。
とりあえずあの後ぬらりひょんや遠巻きに様子を窺っていた高畑に介入される前に煌と白エヴァを回収して家にとんぼ返りしたのだが、その後で天乃五環の開発班に連絡を入れて確認をとったり査察部に総動員をかけたりで大変だった。
とにかく、それで白エヴァが開発班の仕業であるということがはっきりしたので、麻帆良まで来た一機？は当分セイで預かる事になっ

た。

今の白エヴァは最初のようなワンピースではなく、エヴァと対照的な真っ白なノースリーブのセーラー服のようなものを着ている。

その上から両の端に幾つか切り込みが入ったマフラーを巻いている。それが風にたなびく様はまるで翼のようだ。

まあそれは良いのだが、問題が一つある。

「おい、貴様」

不機嫌そうなエヴァの声。セイがエヴァの方を見れば、顔をひきつらせて頬をぴくぴくさせている。不機嫌そうどころではなく、どうやらたいそうご立腹らしい。

「どうしてそいつを連れてきた！　むしろなぜ引っ付けてきた！！　さては貴様、実はそういう趣味かっ！？」

白エヴァ。

彼女が今どのようにしているのかというと。

「ぐらんどますたー、どうしておりじなるはおこってるの？」
「それはですね、あなたがエヴァと同じ姿形をしているからですよ」
「それだけー？」
「いいえ。……自分と同じ姿形をしているあなたが、私の頭にしがみついているからですよ。エヴァはそれが恥ずかしいんです」
「そうなの？　おりじなるー」
「違うわっ！」
「そっかー、ちがうのかー。ぐらんどますたー、ちがうって」
「違うみたいですねー」

白エヴァは、セイの頭にしがみついていた。
セイは長身である。対してエヴァは十歳程度の身長しかなく、それを模した白エヴァも同様である。
ようは肩車しているわけなのだが、六百年生きた闇の福音にはそれが気に入らないらしい。
「ぐらんどますたー、あれがさいきんはやりの“やんでれ”なの？」

「いいえ、あれはどちらかと言うとツンデレです」

「つんでれ？」

「そうです。また一つ賢くなりましたね」

「えへへ♪」

年相応にしか見えない笑みを浮かべ、頭に手を回し抱きつく白エヴァ。

セイの子供は現状三人。

時雨は神の模造品でありこんな時期はなかったし、養子の千草もこのように甘えてきたのは異世界に飛ばされたりしたセイからすれば遥か昔。

煌は中南米にいた頃に生まれ中東や日本を行き来しつつの子育て生活だったし、本人の気質もあいまってこのように甘えるというのは少なかった。

なので、実はセイも案外、まんざらじゃなかったりする。

「うがぁぁぁぁぁっ！　とりあえずそいつを下ろさんかあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

第六十九話・悪とは？

「それで、わざわざ人を呼びだしてまでどうしたというんです？　エヴァ」

白エヴァを自分の頭から煌の頭に移してセイはエヴァに問いかける。とりあえずブレンドコーヒーを注文するのも忘れない。

「どうもこうもあるか。結局のところソレはなんなのだ」

「ああ、白エヴァですか？」

ギリギリと苦虫を噛み潰したような表情のままのエヴァに、セイは

のほほんと返す。

「そうですね。とりあえずは白エヴァと呼んでいますが……正式にはネタ用兵器試製量産型・タイプエヴァンジェリンと言うそうです。うちの部下が……まあいっぱいいるんですが、そのうちの一人が暇だったから造ったみたいです」

「ひまー」

「暇だったから……！？　ええい、ならなぜ私の姿である必要がある！！」

「……遠い世界に、エヴァンゲリオンという決戦兵器があるんですけどね」

「……それがどうした」

「名前、似ているじゃないですか。エヴァンジェリンとエヴァンゲリオン。綴りも意味も。つまりはそういうことらしいです」

ぷつっ。

「……知るかぁぁぁぁーーーーーーっ！！」

魂のシャウト。

―――

エヴァのシャウトの後、セイは一時会話から外れて場を静観していた。

話を聞いている限り、どうやら少年はエヴァに父親……赤毛の馬鹿ことナギのことを訊きたいらしい。

が、どうやらエヴァに勝てたらという約束だったらしく、エヴァは話すのを渋っていた。

しかしあまりのしつこさに根負けしたのか、昔京都にナギが住んでいたことを話していた。

懐かしい話だ。今は亡き木乃芽さんに馬鹿と詠春が首をゴキっとされていたのが昨日のことのように思い出せる。

「あの……」

「ん？」

「あの……木乃香さんのおじさんなんですよね」

「血のつながりはありませんが、まあおじさんとは呼ばれていますね」

ネギはしばしモジモジしていたが、やがて口を開いた。

「その……エヴァンジェリンさんに聞いたんです。凄腕の術者だって。立派な魔法使いなんですか？」

「違います」

即座に否定。

大人気ないかもしれないが、それだけは看過できることではない。自分があの表面だけの自己中心的な正義を語る連中と一緒にされるのは我慢ならない。

「くはははははっ！　立派な魔法使いと来たか！！」

セイの隣でエヴァンジェリンが爆笑している。

「……坊や、貴様の目の前にいるのは立派な悪だぞ？　それも私以上のたいした悪党だ」

「え……？」

「獣、貴様なら知っているんじゃないのか？　鮮血事件の主犯、召喚大師とはこいつのことだ」

「な、ななななんだってぇ！？」

エヴァの暴露に、ネギの肩の上でガタガタ震えだす。

「ちょっと、なんなのよそれ？」

「近代魔法世界最悪といわれる大事件でさぁ！　賞金額歴代トップで、アリアドネーとかだと子供に言い聞かせるための歌にもなってる、もはや生きる伝説とも言われる大悪党……！」

「そんな！　どうしてそんなことを！？」

「あーー！…」

ちらりとエヴァの方を見ると、にやにや笑っている。意趣返しのつもりらしい。

面倒なことになったと、心のうちでつぶやく。

案の定、ネギは“子供の意見”を押し付けようとする。

「悪いことは、止めて――…」

「少年」

少し、ほんの少しだけ威圧すると、ぴたりと黙った。生物としての格の違いを、頭ではなく体が、本能が理解しているのだ。

「少年、覚えておきなさい。正義は絶対ではない。正義は平等ではない。正義は一つではない。
既に用意された正義に従うというのは、自分で考えることを放棄したということ。
考えなさい。なぜ悪という存在があるのか。そも悪とは何なのか。
なぜ私やエヴァが悪と呼ばれ、そしてそれを否定せず自称すらしているのか。
全てを理解できたなら、話くらいは聞いてあげましょう」

言うだけ言って席を立つ。こういう手合いは相手にすればするだけ面倒なことになるからだ。とっとと離れるのが吉である。

去り際、口には出さないが不満そうな、意味がわからないという風なネギに言葉をかける。

きっと今、自分は苦笑しているだろう。

「少年、悪はいけないことだと思いますか？」

「あ、当たり前です！」

「そうですか。ですが……私のように立場のある者からすれば、あなたが庇ったその獣。それは間違いなく悪ですよ？」

「え……？」

今度こそ、セイは立ち去った。

笑う吸血鬼と、唖然とした少年を残して。

第六十九話・悪とは？（後書き）

今後の予定！

数話関西呪術協会や関東魔法協会、開発班の話を挟んで、舞台は遂に魔都京都へ！

原作より地味に魔改造された千草はどう動くのか？

そしてネギや、同じく魔改造途中の刹那はどう立ち向かうのか？

かつての戦友フェイトは？

意外と好評だった親バカバーサーカー詠春は？

そして最近出番の少ない主人公、セイはどう動くのか？

乞うご期待っ！！

第七十話・開発班悲喜交々（前書き）

あとがきに割と重要なお知らせがあります。

打ち切りとかではないのでご安心ください。

第七十話・開発班悲喜交々

ダンダァン！！

「判☆決！　無罪ッ！」

ワァァァァァァァ……

「へ？」

天乃五環、五層・開発班略式裁判所。

その暗い室内で、ひとりの男が気の抜けた声をもらした。

白髪混じりのぼさぼさの髪。瓶底眼鏡によれた白衣。白エヴァを作り出したメイドロボ開発担当の班長である。

「不思議そうな顔してるなぁ」

壇上の最も高いところ。裁判長の役ということで白衣の上から黒のコートを羽織った統合部長、多岐が声をかける。

その声は珍しいことに少しうわずっている。

「えー、まあ、はい。メイドロボの担当からは外されると思ってましたねえ」

「そうだろうな。普通ならそれプラス減給&謹慎だ。でもそうじゃない。なぜだかわかるか？」

「あー、いえ…」

「いいか。この件で天乃五環の場所がばれたかもしれん」

「ですね」

「そうなると、まずいよな？」

「まー、まずいですね」

「で、だ。本部の場所変えようかって上で話が出てるんだよ」

「はー」

「わっかんねえかな。いいか？」

――天乃五環な、飛ばせるかもしれねぇんだわ。

「あー、なるほど」

「……反応薄いなオイ。まぁとにかく、開発班長年の悲願が叶うかもってんで無罪な。流石に表向きはそうもいかねえから上には減給ってことにしとくから、うまく話あわせ……」

《部長っ！》

「……どうした」

突然、多岐の前に小さなウィンドウが浮かぶ。それに映るのは、第一司令室に残してきた自身の副官。

《長が査察部に総動員かけました！　今回は幹部の中でも総務部長など査察部以外の上級幹部クラスが数名いることから本気と書い

てマジだと思われます！　集結地点から二方向から侵攻してくるものと思われます！！》

その報告に、多岐は慌てることなく思考を加速させる。

「……二方向？　どこからだ？」

《はい。総務部長古郷善一郎氏が一層の中央メインシャフト付近に。査察部長七守衣子氏に代わって部長代行が地上部の通風坑付近にそれぞれ集結しています。おそらく通風坑から地下坑道区まで降りて、その後で縦坑を経由して四・五層を目指してくるかと》

「本部長は？」

《メインシャフト方面に出るそうです。古郷氏を抑えると》

「あのじいさまなぁ……わかった。縦坑方面には三城をあてよう」

《あー、そのぅ…》

歯切れの悪い返答。自分の副官がこのように言葉を濁すのは珍しい。なんとなく嫌な予感がよぎる。

「おい、三城はどうしたよ」

《それが……改修が完了した新型兵装を直接渡すと言って麻帆良に

……》

「……あ・の・や・ろ・う！！」

――

自分は、忍者だ。忍の頭領であり、表では警備会社の社長でもある。

今の任務は、最近追加された魔法使いのいぶりだし。

今日も今日とて歩き続ける。

それが自分のやり方だから。

……今日は、何を食べようか。

「空里さーん」

ぞわり、と、うなじの辺りで何かがうずく。

声が聞こえたのは背後。

「見ーつけましたよー」

記憶にあるその声の持ち主は、けして麻帆良にはいないはずの人物。

そう、いないはずだ。

「えいっ」

ふにん。

背中にあたるやわらかい謎物体。男であるなら嬉しくないはずはないのだが。

しかし、もしこれが自分の予想通りの人物なら。

「つーかまーえまーしたー♪」

ぎゅうー……ギリギリギリギリギリ！！

「ぐあああああ！？　ちょ、三城さん！？　何でいるんすかぁ！？　あ、ああ！？　ギブギブギブギブッ！！」

背骨やらアバラやら、生まれた時から鍛え上げてきたはずの人間離れした肉体が悲痛なまでの悲鳴をあげる。

「もー。那三って呼んでくださいー」

「ちょ、待っ！　那三さん離して、離してっ！」

すると、自分にかかっていた圧迫感がなくなった。

振り返って見れば、そこにいるのは開発班の大班長、三城那三だ。何を思ったか自分を好きだと言って追いかけてくる変わり者。

見た目も悪いわけではないし、スタイルは抜群。今はいつもの汚れた白衣と緑のジャージではなく、割とカジュアルな服装で固めているためこの麻帆良でも浮いていない。

空里も、嫌いなわけではない。

長など人目のあるところでは嫌っているようなことを言っているが、本心はそうではない。

苦手なのだ。

三城那三。彼女は、本気になれば幹部の一人七守衣子の先祖がえり

後と同じくらいの怪力を出せるらしい。

兵装部門にいる彼女は、普段からチェーンブロックや小型クレーンと同じくらいの働きをしている。

数種類の防御手段と左右四つずつのバーニアを備えた、腕だけの機動兵器とも言われる機械手甲を素手で扱えるのだから力が無いわけがないのだ。

その力で抱きつかれるのだから、いくら至福の感触が背中に感じられるとしてもハグは遠慮願いたい。

しかも悪意がないせいで、回避もしづらいのだ。

「そ、それでどうしたんっすか、三城さ……」

「那三ですー」

「……那三さん」

「うふふー、コレを見てくださいー」

そう言って肩掛け鞄から取り出したのは、小さな箱にいれられた銀色に輝くシンプルな指輪。

少し幅広で、表側には二本のラインと小さなクリスタルが三つ三角形を描くように配置されており、裏側にはびっしりと細かい溝が刻まれている。

「これは……なんっすか？」

「結婚指輪ですー」

「えっ」

「嘘ですー。涼暮月の改修発展型、開発班謹製次世代型多目的銃砲・彌涼暮月（いすずくれつき）でーす」

これが、銃？　という疑問が浮かぶ。細工は精緻だが、見た目はふつうの指輪。とても銃には見えないが……

「機能は前とほぼ一緒でー、式番を呼べば今度はグリップごと展開されますー。このクリスタルに見えるのがー、開発班の最新技術、超小型ダイオラマ魔法球なんですねー。直径二ミリ程ですー」

そう言って、那三は指輪をつまみ空里の手をとって、指輪をはめようとする。

それを、空里は止める。

「……那三さん、ちょっと待つっす。薬指はだめっすよ！」

「じゃああげませんよー？」

「えー……」

「隙ありー♪」

不意をつき、薬指にはめられた指輪。

一瞬、光が走り、ちくりと針を刺したような痛みが走る。

「つっ！？」

「あ、大丈夫ですー。所有者の認証だけですからー、外れなくなったりはしませんよー」

「な、ならいいんすけど……」

「嘘でーす。私か長か、あるいは開発班の副部長クラスより上の人間じゃないとはずせませーん」

「はっ！？」

「ふふふのふー」

「ちょ、待つっすよ！」

「捕まえてくださいなー。そうしたらはずしてあげますよー」

全力で明後日の方向にダッシュする那三。瞬く間に遠ざかる後ろ姿と揺れる黒髪に、空里の中で抑えていた何かが蠢く。

日頃と違い飄々とした軽い雰囲気はなりをひそめ、裏の関係者だけがわかるチリチリとした空気が空里を中心として溢れ出す。

「……本気にさせたな」

赤い影が、麻帆良を駆け抜けた。

――後日談になるが、いつもと同じように麻帆良を歩く彼の薬指には、銀に輝く指輪がはまっていたそうな。

第七十話・開発班悲喜交々（後書き）

祝、七十話突破記念キャラクター人気投票っ！！

どうも作者のＡＲＵＭです。久々のアンケートになりますね。

ほんとはＰＶ四百万突破記念でやろうかと思ったのですが、話の進行上早い内にやりたかったのでこのタイミングでやります。はい。

今回のアンケート内容は三つ。

？――好きなキャラクター。複数回答可ですが、多くても三人くらいまででお願いします。

川姫とか、今まで一度しか出なかったキャラもいますね。

？――外伝が見たいキャラクター。こちらも複数回答可。

？と同じでも無論大丈夫ですが、集計で困るのでそれとわかるようできれば分けて書いてください。

？――コイツをぜひ出してくれっ！という妖怪。当然複数回答可。

？とは別に京都編でチョイ役とかで出す予定。準レギュラーもありえます。マイナーなのでも全くＯＫ！

ただ、スキマ妖怪や長飛丸、白面の者といった世界観をブレイクする大妖怪は今回は勘弁してください。将来クロスするかもしれませ

んが、現状では無理なので。

以上となります。締め切りはとりあえず5日土曜日の午後11時までとさせていただきます。

ご協力よろしくお願いします！

第七十一話・京都争乱、その序曲はゆるやかに（前書き）

キャラ人気投票の期限を来週の土曜の夜十一時まで延長します。

ご協力どうかよろしくお願いします。

なお、今回は真面目な話。

第七十一話・京都争乱、その序曲はゆるやかに

――思い出すのは、ずっと昔の話。

自分が今より、もっと小さく、何も知らなかった頃。

四季にうつろう、小さな世界が全てだと思っていた頃。

世間の異常が、自分の日常だと知らなかった頃。

異常と日常という、簡単な言葉さえ知らなかった頃。

そして――自分の父と母が、まだ生きていた頃の話。

第七十一話・京都争乱、その序曲はゆるやかに

あの頃は、自分は何も知らなかった。

今では呼吸をするような気軽さで扱える符や呪術、それらを何もしらなかったのだ。

家が関西……京都で代々続いてきた陰陽師の家柄だとか、最高幹部の席を持ち続ける名家だとか、そういったことなども何もしらなかった。

だから、あの頃は魔法使いとかメガロメセンブリアとか、父や知り合いのおじさん達が何を言っているのかわからなかった。

ある日、父と母、そしてよく家に遊びに来ていたおじさん達が家に

来なくなった。

自分の小さな世界からも、たくさん人が消えた。

それがどうしようもなく怖くなって、たまに遊んでくれたとっても偉いお姉さんの所に遊びに行った。

子供でないと通れないような細い道。

でも、いつも木漏れ日が差し込むお気に入りの抜け道。

今思えば、随分と無茶をしたものだ。

その日も、お姉さんは部屋の縁側にいた。

東の空をじっと睨んでいた。

今まで見たこともないような、怖い顔だったのを覚えている。

あれは、長としての自分の不甲斐なさが悔しかったのか。

それとも裏切り者が憎かったのか。

今となってはわからない。

お姉さんは、自分が来るとはっとしていつもの笑顔になった。

父と母、皆がいないと言うと、自分を膝の上に抱き上げて座らせて

くれた。

『今は遠くに出かけとるんよ。せやけど、きっと皆帰ってくる。あの人らは、強い人らやさかい』

言い聞かせるような口調だった。

ほんの少しだけ、笑顔が歪んでいた。

それは叶わない希望だと、わかっていたのだろう。

それから数ヶ月の間、小さな世界は静かだった。

いつもの賑わいは無く、遠くから毎日のように木を打つ音だけが聞こえていた。

一度だけ見に行ったが、黒髪の少女が木刀で木を打ちすえていた。

ある日、皆が帰ってきた。

その中には、父の姿はなかった。

後で、もう会えないと聞かされた。

それから、ほどなくして母も亡くなった。雨の降る日だった。
交通事故だった。

それから、小さな世界は色を失った。
この頃のことは、正直あまり覚えていない。

いつだったか正確には覚えていないが、あるとき、たまに遊びに来てくれていた緑の髪のお兄さんがやってきた。
いつも髪の色の薄いお姉さんといっしょにいる人で、お菓子をくれて遊んでくれる人という認識だった。
その隣には、偉いお姉さんもいた。

『私達の子供になりませんか？』

差し出された、大きな手。

その日、新しい父様と母様ができた。

その日から、世界は一気に広がった。

時雨……兄という存在も得た。

多くのことも知った。

符、魔法使い、式神、魔法世界、術式、魔法、関東、関西、麻帆良、本山……

初めて、飛行機にも乗った。

沙都子ちゃんという友達と、志津真という式神のお兄さんと三人で父様と母様を追って中南米に行った。

ついたのはとても暑い国だった。

知らない言葉。

知らない文字。全てが新しい未知のものだった。

それからは、父様と一緒に地下の遺跡に潜ったり、沙都子ちゃんと一緒に日が暮れるまで罠を仕掛けて遊んだりした。

遺跡の奥の大きな翡翠の石柱に触ったら封印されていた神が復活して、それを巡ってナチの残党と戦ったりもした。

弟もできた。父様ゆずりの緑の髪と瞳が、少しうらやましかった。

ある日、家族皆で日本に帰ることになった。

本山では、雪が降っていた。

長……偉いお姉さんが死んでしまったらしい。

新しい長が“ふぬけ”で“へたれ”だから大変だそうだ。

魔法使いとの和平を本気で目指しているなど、夢想家が長をやってはいけない。

自分も、それに対抗するために天ヶ崎の席を継ぎ最高幹部になった。

そのすぐ後で、父様が関東呪術協会を発足させた。自分と年の近い瀬乃宮桃という幹部もいて、友達になった。

ただ、三会の会合に来ていた関東魔法協会の長、ぬらりひょんを初めて見たが、あれは絶対人じゃない。嫌悪感しか感じなかった。

それから、十余年。

友達だった沙都子も結婚し、自分も裏の重鎮としてふさわしい実力を身につけた。

知らなくても良いことも、たくさん知った。

偉いお姉さん……先代の長の娘を、父親である今の長、詠春が魔法使いの支配する学校に送ったときは、内乱になりかけた。

裏には関わらせないという約定を結んだが、あの妖怪が守るわけがない。

父様の計画まで数ヶ月となった時に、大戦の息子が麻帆良にやってきた。

関西で緊張が高まる中、案の定そのガキはやらかした。

それをぬらりひょんが利用し、愚かなことに眠れる剣鬼を起こしてしまった。

おかげで、黒化暴走した詠春を止めるのに自分は死にかけた。

だが、だいぶんマシになったとは言え、やはりあの男はへたれだ。

もう、誰も彼も不可能だと、詠春自身さえも叶わない夢だとわかっているのに。

詠春は、今でも心のどこかでいつの日か関西が一つにまとまり、魔法使いと融和できると信じているのだろう。

きっと、そう信じていたいのだろう。

だからあの時、暴走していたにも関わらず自分を殺そうとしなかった。

殺す気なら、素直に首を刺すか落とすかすればいい。

あの時、詠春は暴走してなお、甘さを捨てられなかった。

非情になりきれなかった。

そんなへたれに、この案件はまかせられない。まかせるべきではない。まかせられるわけがない。

「……なめた真似してくれるやないか、ぬらりひょん」

手元にあるのは、報告書。送り主は、京都市の行政に食い込んだ裏の関係者。

内容は、麻帆良の修学旅行を受け入れる旨の処理がいつのまにか完了していたというもの。

関西呪術協会は限界はあるにしても古くは朝廷から繋がりがあり、行政にもそれなりに食い込んでいるので、有事の際にはある程度意向を反映できる。

そのため、通常であれば敵対組織である麻帆良の修学旅行がここ本山のある京都を選ぶことなどできるはずはないし、ぬらりひょんもそれはわかっている。

だが、

「これは、宣戦布告ととられてもしゃあないわなぁ……」

先日の、詠春の黒化暴走時には京都府庁や府警などに協力を要請したのだが、そのごたごたが収まらない内に紛れ込まされたらしい。

その頃は行政以上に最高幹部が融和派と反対派がごっちゃになって詠春の進退についてごたごたしており、とても手が回らなかったのだ。

しかもどうやら書類に薄く魔法がかけられていたらしく、一般の職員は何の違和感も持たずそのまま処理してしまったそうだ。

今となっては麻帆良学園のホームページ上、表側でも今後の予定として出されてしまった上、書類上は不備がないためこちらでは取り消すことができない。

だが、気に入らないのはそこに大戦の英雄の息子を突っ込んできたこと。

さらには、その息子を、和平の特使にしようとしていることだ。

たかだか、英雄の息子というだけで、十やそこらの子供に。

「……」

関西の最高幹部、天ヶ崎千草は報告書を手に立ち上がった。

その身の内を、静かな怒りで満たして。

確かに、英雄の息子というネームバリューがあるのは認めよう。

詠春が魔法使い贔屓であるから、有効だというのもわかる。

だが、自分達を忘れてはいないか？

大戦で身内を失った、自分達を。

異国どころか、異界のどこか名も知らぬ地で息絶えた者達を。

残された自分達は、それを命令したのが誰か、それを伝えたのが誰だったか――――忘れたことなど、一度もないぞ？

自分達の家族が、何の関わりもない理不尽な戦場で戦っている間、

貴様は、貴様らはどこで何をしていた？

なぁ、魔法使い。いや、近衛近右衛門。

大戦から二十年以上たった今日この日に至っても、未だに謝罪など一度も無かったぞ？

それに貴様は、十の子供をあてるというのだな？

大戦の戦火も、喪失の痛みも、怒りも嘆きも悲しみも、全てを形だけで済ませてしまおうというのだな？

自分達を、無視するというのだな？

そこまでするというならば――――

「……上等やないか」

相手は修学旅行を建て前に、一般人を多く連れてくる。

不確定要素も、障害も、どれだけあるかわかりやしない。

だが、昔と違って、今は自分の意志で動ける。

意志を通す力もある。自分を信じてくる仲間もいる。

父様の計画までもう余り間はないが、麻帆良でなくこの関西ならば問題はない。

なら、やってやろう。

貴様らが、望むのであれば。

思い知らせてやろうじゃないか。

――私達なりの、戦争で。

第七十一話・京都争乱、その序曲はゆるやかに（後書き）

キャラ人気投票の詳細については、七十話のあとがきをご覧ください。

黒化詠春の話はただのネタ回ではなくこのための布石だったのです。

第七十二話・京都争乱、集うは三人（前書き）

キャラ投票継続中。詳細は七十話後書きにて。

できれば明日も更新したい。

第七十二話・京都争乱、集うは三人

関西呪術協会の奥まった所に、小さな庵のような建物がある。

今では住む者がいなくなった、先代近衛木乃芽の庵である。

その存在を知る者もこの十年程で随分と少なくなったが、時折当時を知る誰かが今でも暇なときに持ち回りで掃除をしており、今なお昔の姿を保っている。

関西の古株が、昔を懐かしみ集まるのにたまに使うからだ。

その実態は反対派の集会ではあるが、昔話に花を咲かせることもあり、あながち全て嘘というわけではない。

それに、融和派の古参連中は木乃芽に合わせる顔がないということで、亡くなった今でもここには近づかないのでなおさら都合が良いのである。

その庵の一室に、数名の男女が集まっていた。今いるのは急な招集が可能だった反対派最高幹部で、数は千草を入れて三人。

若い男と、禿頭の老人。全員が着物である。

関東呪術協会の発足から十余年、関西の融和反対派の中でも世代交

代があり、今いる若い男の方は千草同様当時子供だった、大戦を経験していない世代。

言い換えると、家族を失った世代でもある。

二人は反対派が大半を占める近畿の中でも、禿頭の老人の方が和歌山、若者の方が滋賀を管轄する最高幹部である。

そんな三人が、炬燵を囲って座っている。

北側の、木乃芽が座っていた席はそのままにして。

彼らが集められた理由は、当然関東魔法協会による修学旅行の強行と、それに伴う和平を目的とした英雄の息子という特使の派遣の対応についてである。

「――――ちゅうわけや。今日はとりあえずここにおる面子だけでも方針を固めときたい」

「固めるも何もなぁ」

南側に座った千草に、東側に座った禿頭の老人が言う。

「わしらにそいを訊くちゅうことは、もう腹決めとるンやろ？」

「爺さん、そういう風に決めつけるのはどうかと……」

西側、若者も加わる。

「カァッ！　決めつけるも何も、間違っちゃおらんやろうて。なぁ千草ちゃん」

「うん」

千草は、さしてためらはずに言う。

「やっぱり、いっぺんぶちかましてやらなあかんやろ」

「戦争する気で？　勝算はあるんですか？」

「なかったらやらん。修学旅行っちゅうのが肝や」

「……どういうことや」

「おそらく、今回の件は関東魔法協会としてもギリギリの選択や。うちら関西との和平、その重要性とリスクは麻帆良のじじいもわかっとる」

「近右衛門かい……」

老人が、苦々しげに顔を歪める。彼は麻帆良のぬらりひょんと同世代であり、思うこともあるのだろう。

「そうや。関西に和平の使者を送るとして、一番ええんはどんな人間が、どんなことをすることや？」

「それは……当然彼らの本国で地位のある人間が、直接謝罪に来るのが一番でしょう。そうすれば一応の筋は通したということで、中立派の一部は融和派につく」

「そやな。せやけど、それは実現するわけないわな」

「ええ」

「あの外道どもが来るわけなかろうて」

「そや。だから近右衛門が和平の為の特使を送るにしても、難易度は一気に上がるわな。なにせ人がおらんねん。元紅き翼の高畑は詠春と親交があるてゆうても交渉ごとは不得手らしいし、今も魔法使い側で活動してるからウチらからのウケは悪い。近右衛門とかは交渉ごとには強いけど、ウチらとの相性ちゅう意味やと最悪や。じじいが京都の土踏んだら言うたらその時点で開戦やろ？」

「そやのう」

「ですね」

老人と若者が一瞬の間もおかずに答えた。

「かといって、他の奴ら……残りはパッとせん。魔法先生でも交渉事ができるような人間は基本麻帆良の防衛から外せん。となると動かせる人間はさらに限られる。そうなると…」

「そうなると？」

「今回みたいに、『この程度の奴を特使としてよこすとは、魔法使いは私ら馬鹿にしとるんちゃうか？』っちゅうことになる。どうせそうなるなら、英雄の息子でもって、関西の中で……へたれを仲間にしようっちゅう腹づもりやろ」

「なるほど……しかし、それと修学旅行がどう関係するんですか？」

「今言うた理由で、引率で来る魔法先生は多くてもガキの他は二人くらいやろ。あんまり多いと中立派も離れるさかいな。……つまりはここ関西において、魔法世界の重要人物であるガキは戦力的に孤立する」

ここで、千草は紙を取り出していくつかの事柄を書き出していく。

「問題は、修学旅行の一般生徒やけど……向こうから来た場合とか幾つかの状況を除いて、秘匿の前提の元に不干渉とする。ただ、一部例外を設ける」

「……木乃香の、嬢ちゃんかい？」

「……そや。悪いけど、ここまで来たらもう無関係ではいられへん。それやったらむしろ今回の計画の“核”になってもらう。それと、

詠春のつけた護衛の刹那や。父様が“速成コース”やらせた言うてたから、並の幹部と同格と見るべきやな」

「……それで、結局何するんや」

「前段階として親書の確保。次にお嬢様を保護して、最終的には本山の一時的な制圧と長及び融和派最高幹部の交代。それによる本山新体制確立と移行。んで西日本の指揮系統の統一。……欲を言えばガキを捕縛した後で、じじいに三つ指つけさせて頭下げさせることか？」

「……まぁたえらい大事やな。そこまでやらにゃあならんか？」

老人の問いかけに、千草は頷く。

「いままでズルズルやってきて、このザマや。もうお嬢様に隠し通すんも限界。じじいの策略で魔法使いの従者にされでもしたら、それこそ長に申し訳たたへんやないか……」

彼女らが長と呼び慕うのは、詠春ではなく先代の木乃芽である。表向きは長と呼んでも、裏でも詠春を長と呼ぶものは少ない。

「暗辺特別顧問の“計画”は？」

「そっちは問題ない。今回は、父様には積極的には動かんように頼

んだ。これはウチらの問題やから言うて。そしたら『なら、娘の成長を見せてもらいましょう』やって」

千草は笑う。セイを知る老人もまた同様に。

「カッ、あの男、そうは言いつつ土壇場できっと出てくるぞ。恩にはあつい男やさかいになぁ。そう思わんか？」

「……やろなぁ」

書き出した紙に不備がないか一通り目を通し、それを折りたたみ懐にしまう。

「ほな今日はお開きにしよか」

「そうさな。とりあえず今日は方針だけでええやろて。奈良と大阪のがおらんしなぁ」

反対派は、皆近畿圏の人間である。今ここにいない鶴子も京都の担当。融和派や中立派は中国、四国、九州に散っている。

近畿に反対派が多いのは、大戦で京都の本山以外で人が集められたのが近畿であるというのと、関東呪術協会発足以前の魔法使いの最前線が京都だったから、というのが理由である。

話も一区切り付き、老人が立ち上がろうとした時、障子に影が映った。

この庵には普段人が近づかないので、今いるのは千草たち反対派最高幹部三人の他はそれぞれの付き人くらいである。

そして、映った人影は少女のもので、それは千草の付き人だった。

「一葉（ひとは）、どないかしたん？」

障子の向こうから、少女の声で答えが返ってくる。

「それが……市内に、魔法使いの従者を名乗る者が来ております」

「従者ァ？」

思わず、室内にいる三人が顔を見合わす。

「その従者が、どないしてん」

「……我々反対派に協力したいと、そう申し出ております」

いよいよ、三人は表情を険しくする。この時点で、まだ反対派が本山にたいして行動を起こすと決めたのは今日が最初であり、情報が漏れたというのはありえない。

ならば、相手は関東魔法協会側の、修学旅行の情報から諸々の情勢を鑑みて自分たちが動くという判断を下したという事になる。

それを成すだけの情報力と判断力。それらを兼ね備えた上、何らかの目的を持って自分たちに接触しようという“魔法使い”とその“従者”がいるというのだから、ただ者ではないのだろう。

「……その、従者とやらの名前は？」

障子の向こう、一葉と呼ばれた少女は答える。

「……暦（コヨミ）。そう名乗っておりました」

第七十二話・京都争乱、集うは三人（後書き）

次回、ネコミミ登場。

第七十三話・魔都に迷い込んだ猫（前書き）

１１月５日の夜にランキングを見たら、日刊２３位でした！

皆さんありがとうございます！！

キャラ人気投票は継続中。詳しくは七十話に書いてますが、？の妖怪はできればクロスしないものでお願いします。

今までの分はそのままで大丈夫ですのでご安心ください。

第七十三話・魔都に迷い込んだ猫

「お待たせいたしました。ご希望された、関西融和反対派、その中でも一定以上の地位にある方がお会いになられます。……こちらへ」

「はい」

京都市内のホテル。

そのロビーで待っていた暦（コヨミ）は、現れた関西呪術協会の案内役に連れられ、ホテルから外に出た。

何でも少し歩くらしい。

迎えにきたのは、自分と同じくらいの年に見える一葉（ひとは）と名乗る少女。

それを不躾にならない程度に観察する。

シンプルな白のシャツに、黒のチノパンという落ち着いた、というよりは地味なコーディネートで、髪は肩で切りそろえられている。

白いシャツを押し上げる胸は……うん、比べるのはよくないと思う。

自分くらいが標準なのだ。うん。大きいことは必ずしも良いことで

はないはず。

視線を胸から外し、全体を見る。……少なくとも今は得物を持っているようには見えないが、旧世界でもこの日本の裏の組織、特にニンジャと呼ばれる者達は隠密に特化しているという。

彼女がそうであるかどうかはわからないが、油断はできない。

自分は、敵地の真っ只中にいるのだ。

暦という偽名を名乗る自分は、かつては魔法世界で一大勢力を築いた秘密組織・完全なる世界の所属ということになる。

主であるフェイト・アーウェルンクスは自分を救ってくれた恩人である。それは、悪の大幹部であろうとなかろうと関係ない。

自分の意志で付き従うことを選んだのだから。

そのフェイトから下った命令は、旧世界の極東、日本というこの国で、大戦の英雄ナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールドが将来どの程度の脅威になるかを見極めるため関西呪術協会に協力するというもの。

そのために、仲間の中からこの日本にいる固有種、狗族に似た自分

が選ばれた。
なお、耳を消したりすることはできないので、今は大きな帽子で誤魔化している。
それと、フェイトからはくれぐれも気をつけるようにと、ゆめゆめ油断などしないように言われている。
理由を訊くと、なぜか口ごもっていたが……

「……到着しました」

「ここ、ですか？」

「ええ、こちらでお待ちです」

着いたのは、街中にある普通の雑居ビル。
このような雑居ビルで会おうというのだから、それほど偉くない中堅どころの人物なのかもしれないと、暦は勝手に判断する。
暦はこの時、少し浮かれていた。
フェイトからは、数日で合流すると聞かされていた。

そして、合流するのはフェイトだけらしい。

つまり、自分とフェイトの、二人きり。

仲間達（邪魔者）は、いない。

情緒豊かな異国で、フェイトは自分と二人きり。

異国での夜も、二人きり……

「……あの、着きましたが？」

「はっ！？」

いつの間にか、桃色の妄想の中に入り込んでいた暦ははっとした。

目の前には、表札の出ていないのぺっとしたシンプルな鉄の扉が一つ。

一葉はためらいなくその扉を開けて中に入り、中にいた男二人に挨拶してから奥にあるもう一つの扉へと向かう。

それは雑居ビルには不釣り合いな、銀行や大会社の応接室のような重厚な黒い木の扉で、銀色のドアノブには精緻な紋様が刻印されている。

どうやら、なんらかの術式がなされているらしい。

「先に言っておきますが」

くるり、と一葉がこちらを向いた。

「気を、しっかりと持つことをお勧めします。———くれぐれも、気を失わないように」

え？　と聞き返す間もなかった。

扉が開かれ、そして——

――そして、感じたのは全身にまとわりつくようなドロリとした濃密な魔力。

それに、突き刺さるような明確な敵意。

全身が泡立つような、漠然と、それでいて確かに認識できる生命の危機。

死が目前に迫っている。

そう錯覚してしまう。

「ひ、ぁーーー」

「――よう来はったなぁ、お嬢ちゃん」

こちらを見るのは、三対の目。

中央に座る綺麗な女性の唇が弧を描き、美しい笑みをつくる。

まるで石になってしまったかのように、身体が動かない。

目の前にいるのは、本当に、人なのか……！？

弧が、形を変える。

「――ようこそ。千年の怨が今なお渦巻く、この京都に。歓迎するわ」

背後で、静かに扉が閉じられた。

逃げ道をふさぐかのように。

第七十三話・魔都に迷い込んだ猫

おかしい。

世界が歪む。明滅する。

フェイトの従者たらんと、日々訓練している自分が、こうもたやすく気圧された。

息が詰まる。足が地に着いているかどうかわからない。

旧世界の辺境に、こんな化け物達がいたのか。

自分は、化け物の腹の中に飛び込んでしまったのか。

あれほど、注意はうけていたのに。

自分はもう、フェイトと――

「っ！！」

ぎりっと手を強く握る。自慢の鋭い爪で手のひらを傷つけ、痛みでもって意識を無理やり覚醒させる。

頭に一瞬浮かんだ己の主の顔をより強く思い浮かべる。

自分はフェイトの信を受けてここにいる。

失敗は、信頼を裏切ることは許されない。

――自分を、律しろ。

地に足は着いている。

自分はちゃんとここにいる。

自分の役目は交渉、その先駆け。

相対するは妖物ではなく、人間だ。

「――――っ」

一度目を瞑り、息を深く吸い、ゆっくりと吐き出す。呼吸を整えるために。

さあ演じろ、暦。

今のお前はいつかの無力な子供じゃない。

暦の名を賜った、フェイト様の従者だ。

「――お初にお目にかかります。魔法使い、フェイト・アーウェルンクスが従者、暦と申します」

――――

「ほう」

自分の右隣、禿頭の老人が声を漏らす。

その表情は軽い驚きというか、面白いものを見たという風だ。

それは自分も同様である。

魔法使いの従者。それがどのような者であるかわからなかったので、試す意味も込めて最高幹部三人揃って霊力を出しつつ威圧した。

やってきたのは少女で、気圧されてすぐにでも気を失いそうな様子だった。

だが、少女はそこから持ち直した。

強者が初めから威圧を受け流したり威圧しかえすのではない。弱者である少女が、一度はそれを真正面から受け、自分を見失いながらも耐えた。

さらにその上、自身の役所をきちんと演じ、立て直して見せた。

「……まぁ、座りぃな。慣れん異国で疲れとるやろ？」

これは高く評価できる。

最高幹部三人の威圧。本気でないとはいえ、まともに相対して耐えられる者は多くない。

これに耐えられるのは、自分の心の内に思う人か信ずる誇りか、何らかの強い柱を持つ者のみだからだ。

この少女はそれに耐えたのだから、まぁ合格と言っていいだろう。

主の名前は、見過ごすことのできない名前ではあったが。

「ン……遠くからよう来はった。ウチは天ヶ崎千草。関西呪術協会最高幹部の京都担当の一人や」

「同じく。滋賀担当の最高幹部、水無原冬雅（ミナハラ・トウガ）です」

「刀久里鉄典（トクリ・テツノリ）、最高幹部や。受け持ちは和歌山やが、言うたてわからへんか？」

目の前の少女は、絶句どころか凍結封印を食らった妖怪みたいにガッチガチに硬直した。

無理もない。ある程度の、話が出来る程度で良いというのに最高幹部が出ばって来たのだから。

下請けの取引で係長クラスの打ち合わせだと思っていたら親会社の重役が揃っていたようなものだ。

酷い詐欺だと苦笑する。

「……そないに緊張しんすな。とりあえず儂らはお嬢ちゃんが芯のある、交渉くらいはしてもええ奴やっちゅうのはわかったし、孫みたいな年の子供に怒鳴り散らしたりもせん。ほれ、饅頭食うかい？」

「……え、あ。い、いただきます」

緊張をほぐそうとしたのか、老人、刀久里が袖から饅頭を出して暦に差し出した。アレは袋を見るに、表では流通しない最高級栗饅頭だったはず。

暦も珍しそうにそれを穴があくほど見た後、そっと口に運ぶ。

自分達だったから良いが、もしこれがＭＭとかだったら毒や洗脳に使うような薬が入っていてもおかしくはない。

やはり、良くも悪くもまだまだ未熟。今後に期待といったところか。

「一葉、お茶出したり。爺さんもそないに次から次から饅頭だしたら話が進まへんやろ」

「おぅと、そらすまんよ」

コトリ。

あらかじめ用意してあったのか、程よい熱さの緑茶が少女の前に置かれる。

この部屋はドアに細工がしてあり、二つの部屋につながる。

一つは偽装用の、もとからビルにある普通の部屋。もう一つが今いる応接室。

裏の関係者専用であるために、当然お茶なども最高級のものが揃えられている。

少女がそのお茶に口をつけると、目を見開いた。きっと今までで一番美味しいのだろう。

そのタイミングを見計らって、交渉を始める。

「……ほなそろそろ、悪名高き『完全なる世界』の大幹部、フェイト・アーウェルンクスの従者が、関西に協力しようっちゅう理由を聞かせてもらおか」

「……っ！？　ごふっ、ケフケフ……っ！」

少女が、派手にむせた。

――――

むせた。

いままで飲んできたモノとはまるで別物の美味しいお茶が気管に入って、激しい咳が出る。

やられた。

美味しいお菓子から始まって美味しいお茶でペースを崩す。

一度油断させて、不意をつく。

これが、極東流の交渉術……！

気恥ずかしくて相手を、中央の千草という女性を睨む。

すると、意外なことに彼女の左右からも彼女を非難するような視線が向けられていた。

「……嬢ちゃん、子供相手に何しとるんや。大人げない」

「千草さん、ちょっと見損ないました。あ、これ良かったらどうぞ」

水無原という若い男の人が親切にハンカチを貸してくれたので、それで口元をふく。

「あれ？　ウチが悪い流れか？　でもウチ結構重要なこと言うたで？」

そうだ。それだ。

なぜ目の前の千草という女性は、フェイト・アーウェルンクスとい

う存在が、自分の主たるフェイトが完全なる世界の大幹部だと知っている！？

「不思議やろ？」

いつの間にか、三人の視線が自分に向けられている。

「ま、その辺もあわせて、のんびり話していこうや。時間は、ようさんあるんやろ？」

再び、千草の唇が弧を描いた。

――助けてください、フェイト様。

――暦には、少し荷が重かったかもしれません。

第七十三話・魔都に迷い込んだ猫（後書き）

次回から、修学旅行がはっじまっるよっーー！

……ごほん。

その前に、アンケート?、リクエストから外伝を出すかもしれません。

第七十四話・ひかり２１３号（前書き）

キャラ投票は継続中！

外伝も執筆中！！

第七十四話・ひかり２１３号

「ほな、迎えは頼むで。一葉」

『了解いたしました。月詠、小太郎、暦共々、京都駅にてお待ちしております。どうか、ご無事で』

「ん、まかせとき」

それだけ言って、携帯を切りポケットにしまう。

東京駅。いつもの着物とは違い、キャップにエプロン、丈の短いスカートと、車内販売の制服に着替えた千草がいた。

コスプレ紛いの格好だが、あえて千草が出てきたのにも理由がある。

目標は関東の長、近衛近右衛門がネギ少年に渡したという関西の長近衛詠春あての書状。

それくらいならば別に部下に任せても良かったのだが、それができないだけの理由があった。

理由は二つ。

一つは、桜咲刹那。関西の長が直々に麻帆良に送った護衛である。昔のままならひとひねり、と言いたいことなのだが、自分の父様が特訓メニューを受けさせたとのことなのだ。

確実に強くなっているはずなので、部下に任せて万が一があっては困る。

もう一つは、闇の福音。登校地獄とやらのせいで麻帆良から動けないと思っていたのだが、やはりコレも父様が何らかの方法で解呪していたらしく、今回に限って修学旅行に出ばって来ていた。

もっとも、基本的に闇の福音は和平云々にはノータッチらしく、事前に行った裏取引（普段は非公開の重要文化財や京都の着物やらなんやらの老舗へのとりなし）で少なくとも新幹線に乗っている間での不干渉はとりつけた。

それに……少しやるせないことだが、麻帆良の狂気じみた認識阻害結界の影響で、修学旅行で浮かれる彼女ら麻帆良の女子中学生は“普通”と“異常”の境界が非常に曖昧に……むしろ“異常寄り”になっている。

そのおかげで多少の無茶はできるのだが、やはり裏の関係者としては割り切れないものがある。

何にせよ、あとは自分がうまくやるだけなのだ。

パン、と頬を叩き気合いを入れる。

「ほんならちぃとかし気合い入れて、お仕事頑張ろか！」

そしてゆっくりと、京都へ向かう新幹線、東京駅１０：２６分発京都駅、ひかり２１３号はゆっくりと動きだした。

その内に、様々な思いを乗せて。

――――

「えーお弁当ー、ジュースにお菓子ー……」

千草はお馴染みの車内販売のワゴンをおしながら、目標である赤毛の少年、ネギ・スプリングフィールドを目指す。

父親譲りの赤い髪を目印に、少しずつ近づいていく。
途中、刹那がこちらを見ていたが、あの表情から察するに自分が最高幹部の千草だとは気づいていないようだ。
何かが記憶の隅に引っかかっていて、思い出せそうで思い出せない。
そんな顔。
よもや裏の重鎮が、新幹線の売り子をしているとは思うまい。
自分だってこんなことをやるとは思っていなかった。

しかし……刹那をうまく欺けたのは良いとして、気に入らないことがある。

件のネギ……ではなく、いやネギもといえばそうなのだが……あの獣。あれは気に入らない。
なんでも父様や同僚である空里でも間が悪くてしとめられなかったらしい。
今だと、その理由がわかる。
あの獣、存在そのものが秘匿を無視しているのだ。

そもそも肩乗りオコジョとか日本ではありえない。そのうえ、小声とはいえ普通に会話するとか日々細心の注意を払って裏を秘匿している全世界の術者に対する挑戦か？

おそらく、父様や空里も秘匿に秘匿を気にしたがゆえに仕損じたのだろう。

……というか、ここは新幹線の中なのだから、そもそも動物を入れるなと思う。

しかも曲がりなりにも教師だろう。生徒の模範とかあるだろうに。

大宮駅の改札は何をしていた？　……まさか、こんなことで麻帆良の外で認識阻害を……？

と、ここで千草はネギとかなり接近していることに気づいた。

『おっとと……行き過ぎてまうとこやった。あんな獣一匹後でどうにでもできる。今はこっちや』

「お弁当ー、ジュースにお菓子ー……」

『三、二ィのぉ…今！』

エプロンのポケットに仕込んでいた符を起動させる。
符を数枚連動して発動できる特別製で、これも父様や……本当の父の技術が生きている。
効果は、霊力の流れの隠蔽、対象の識別、情報の複写の三つ。
たかが符、しかも地味ではあるが、非常に高度な技術なのである。
今のにも、気づけたとしても闇の福音くらいだろう。

そのまま、止められることなく車両を抜ける。
ポケットから紙の包みを出してその中身を確認してみると、そこにはもとから仕舞われていた符の他に、複写された書状の写しがあった。
確認の為に、それらにざっと目を通し――

ぎしり、と新幹線の扉がきしんだ。
高速で走る上、内と外で気圧の差が発生するため特に丈夫に造られ

た新幹線の扉が、だ。

わかってはいた。

一時的に勢力を大きく盛り返したとはいえ、世代交代が著しく進む関西。

近衛千蔵、橘然次など古株が亡くなり、じじいの権謀術数に対抗出来るものが減り続ける現状。

自分や特別顧問である父様、志を同じくする反対派の面々がいるとはいえ、長が融和派であるため攻勢に出れない関西呪術単体では、未だにどこかなめられているというのは、わかっていた。

彼ら魔法使いの本国ＭＭにしても、怖いのは関西呪術協会ではなく、それに所属する父様だということも

わかっては、いた。

だから、自分たちは一切の妥協をしない反対派として在り続けた。

あのじじいに関西を、先代の長が愛した世界を壊されぬように。

だが、この文面はなんだ？

まがりなりにも、今回は和平の為の、特使としての派遣ではなかったのか？

これは、そのための書状ではなかったのか？

『下もおさえられんとは何事じゃ、しっかりせい婿殿！！』

わざわざ書状の内の一枚を使用して書かれた文章。右下には忌々しいぬらりひょんのイラストと『ぷんすか』という言葉までである。

これでわかった。はっきりした。

じじいは、近衛近右衛門は自分達と対等な和平など成す来はない。

それどころか、和平という枠組みすら組む気はないのだろう。

茶番だ。こんなものは。

即座に破り捨てたい衝動を精神力で抑え込み、元のように折りたたんでしまい込む。

破り捨てたいが、今はまだそれはできない。

これがあれば、中立派を反対派に引き込める。

だから今は、今は我慢する。

……今なら、なぜ木乃芽様が実の父であるぬらりひょんを毛嫌いしていたかわかる気がする。

あれは、もはや独善主義者ですらなく……強いて言うなら、我欲主義者とでも言うべきか。

今は笑っているがいい。じじい。

だが、関西が今のままだと思うなよ。自分達はもう動き出している。

京都に着くまで、あと少し。

———獲物が狩り場に入るまで、あと、少し。

第七十四話・ひかり２１３号（後書き）

そろそろ伏線をちょっとずつでも回収していきたいなーとか思ってます。

……実は私自身が伏線がなんだったか忘れてきてたり？

第七十五話・京都争乱、舞台袖で控える役者達（前書き）

昨日、眼鏡が壊れた……

第七十五話・京都争乱、舞台袖で控える役者達

「――よう来てくれたな、フェイト・アーウェルンクス。造物主の使徒て呼んだほうがええか？」

「……報告にはあったけど、本当に僕のことを知っているようだね。やはりクロト・セイから聞いたのかな？」

京都市内の喫茶店。その角のボックス席に人影が三つ。

壁際、奥に千草が座り、隣に一葉が座っている。

一葉は白のシャツに黒のチノパン。千草は黒のスーツスカートで身を固めている。

その向かいに、白い少年がいた。日本なら脱色だと判断されるであろう白い髪。

色を写さない白い瞳。そして表情のない顔。

完全なる世界の残党、フェイト・アーウェルンクスその人である。

「そやよ。父様から聞いた大戦の昔話。その中に出てくる悪の組織の大幹部」

「そう。なら腹の探り合いはしないほうがいいね。僕の目的はネギ・スプリングフィールドが脅威になりえるかを調べること。そのために君たちに一時的に戦力として協力する。……それでいいね？」

「ん。大筋はそれでかまわ……ちょいと待ち」

「ん……？」

二人が、話すのをやめる。

三人に、新たな人影が迫っていたからだ。

「ご注文おきまりですかー？」

「あ、すんまへん紅茶とチーズケーキセットで」

「私、紅茶だけで」

「僕はコーヒー、とりあえずブレンドで。砂糖は結構」

第七十五話・京都争乱、舞台袖で控える役者達

「それで、どういう予定なのかな？　できればなるべく早く教えてもらいたい。僕の言えた事ではないけど、秘密主義は好きじゃない」

フェイトが、音もたてずにコーヒーをすする。

小さなスプーンでチーズケーキを口に運べる大きさに切っていた千草は、目をあわせることなく答える。

「予定よか遅れてきたくせによう言うわ」

「イスタンブールでの細工に手間取ってね」

千草の皮肉に、フェイトは何の謝罪もなく淡々と返す。

「……今日と明日、修学旅行初日と二日目は動かへん」

「へえ、日程は四泊五日と聞いたけど、そんな余裕があるのかい？」

「事を起こすには、一日あれば事足りる」

千草達反対派がたてた計画はスピードが命だ。秘匿や対外的な問題など、一度事を起こしたならば走り続けるしかない。

止まることは、許されない。

「問題はその準備や。今そのための根回しに駆け回っとるんよ。勝負は明後日の三日目。三日目の日中にお嬢様を確保して、その日の内に関西呪術協会及び各地の支部を制圧する。その準備を終わらせるんに二日。なるべく万全を期したいさかいな」

「お嬢様……サムライマスターの娘だね。その辺りはお手並み拝見といこうか。人は足りるのかい？」

「今中立派を引き込みに刀久里……うちら反対派の最古参が動いとる。中立派は引き込めるはずやから、賛成派最高幹部は詠春いれて七席。本山以外は奇襲すれば楽に落とせる。……関西の術者は大戦

を生き延びたモンも多い」

紅茶に砂糖をいれ、スプーンでくるくるとかき混ぜる。千草は視線を紅茶の渦に視線を落としたままだ。

その顔には薄い笑みが浮かんでいる。そこにあるのは自嘲でなく、自虐でなく、ただ回顧だ。

「……謝るべきかな？」

「かまへん。そも、人に訊いてから謝るくらいなら謝らん方がマシや」

「なら、謝らないよ。……時に、彼は動くのかい？」

「基本的に父様は動かへん。一応京都には来るけどな」

「そうか、ならいいよ」

「……先に言うとくけど、また完全なる世界に誘おうゆうんは多分無理やと思うで。父様は目的があって大戦に参加して、それはもう達成した言うとったから。良うてちょっとだけ協力とかやろ」

一瞬、ピクリとフェイトが動きを止めたが、またコーヒーをすする。

「それは……残念だけど、まあそれならそれでいい。敵対さえしなければ」

「さよか」

「……ところで、暦はどこにいるのかな？　一応他の面子とも可能な範囲で顔合わせしておきたいんだけど」

「ん、一葉」

「はい。そろそろ来る頃かと」

ちょうどそのとき、からんころんと喫茶店の入り口で音がした「いらっしゃいませー。何名様ですかー？」

「待ち合わせなんですけどー、眼鏡かけて髪の長いお姉さんいてはるやろかー？」

「月詠はん。こっちやこっち」

「あ、いてましたわー」

ごゆっくり、という店員の声。店に入ってきたのは、白いフリルがたくさんついたゴスロリ調の衣装の月詠と――

「あの、フェフェフェイト様、ど、どおでしょうか？」

そこに、フェイトの記憶とは大きく姿の異なる暦がいた。

えび茶色の袴に、赤と白の矢絣の着物を着た、日本の古き女学生のような姿。

袴を握り、少し顔をふせ俯いている。

「これは……」

「耳隠せん言うんでな。これやったら、うちの月詠と一緒におらせたらコスプレで済ませられるやろ？」

「なるほど……暦の髪は黒だからね。うん、よく似合う」

「ひゃい！？」

そっと暦の黒い髪、それも耳の辺りを触るフェイト。それに、暦は真っ赤になる。

そして――ぷしゅーと煙をあげて目を回してしまった。

「あーあー……フェイトはん、嬢ちゃん背負ったりや。あと一葉、勘定しといで。レシート忘れんようにな」

「？　かまわないけど？」

「はい」

一葉がレジに向かい、フェイトが暦を背におぶる。

千草達は、扉をあけて外に出た。

外は、雲一つないほどに晴れ渡っている。

「一葉、月詠」

唐突に、千草が二人に声をかけた。

「はい」

「なんでしょかー？」

「空、よう見とき。しばらくお天道様ら見られへんようになるかもしれへんさかい」

千草は、手をかざしてじっと太陽を見上げていた。

第七十五話・京都争乱、舞台袖で控える役者達（後書き）

人気投票は継続中です。

外伝は京都編が終わってからになります。

第七十六話・かくして争乱の幕は上がる（前書き）

明日で人気キャラ投票も締め切り。

もうこないかな？

今日はちょっと長いですよ。

第七十六話・かくして争乱の幕は上がる

修学旅行、三日目の早朝。

関西呪術協会、本山。

京の都と同じかそれ以上の歴史を持つ関西の本山には、術者にとって必要な多くの施設が備えられている。

その中には、激動の戦乱や時代の潮流の中で忘れ去られたり、流行り廃りで使われなくなったものも多々ある。

そんな過去の遺物の一つに、周囲を森に覆われた石舞台があった。

大きな一枚岩を削って平らにした、神楽舞台と同程度の規模の石舞台。

本山でも最も古い部類に属するそれは、地脈を抑える要石の一つであり、同時に祭壇であった。

朝日が木々の間から差し込む石舞台の上に、人影があった。

人影は、女性だった。

女性は、くるりくるりと舞っていた。

白の装束をたなびかせ、時には激しく、時には緩やかに。

緩急をつけつつも、テンポの速いステップで円を描くように。

凛とした表情に疲れを見せながらも、ひたすらに舞い続ける。

風をはらんで髪は広がり、飛び散った汗が滴となって朝日に反射しきらりと光る。

左手に持つ鈴の音。右手に持つ子烏造りの刀が風を切る音。

そして石舞台を踏む音が、何の伴奏も無い中で一つの旋律を奏でる。

そこに言葉はなく、詩もない。

だが、意味ならばある。

装束、道具、歩法、刀を振るう手の動作、息づかいにいたるまで。

一つ一つが意味を持つ、呪術的に完成された舞。

やがて、昇る朝日が石舞台全体を照らし出す。

それと同時に女性は……千草は、石舞台の中央で切っ先を天に向けて刀を掲げ、ぴたりと動きを止めた。

そして、その場に膝から崩れ落ちた。

「千草様！！」

「……一葉か。ちょいと、待ち」

一葉に支えられた千草は、すぐにでも千草を運ぼうとする少女を押しとどめる。顔色は疲労からか悪く、身体も熱を持っている。

それでも、千草は少女を止めた。

手に持つは、長さは小ぶりな六十センチほど、切っ先両刃の子烏造り。それに親指の腹を食い破って血を垂らし、そこに符を貼り付ける。

「――■■■……」

力有る言葉とともに符が力強く光り、刀が姿を変える。六十センチほどだった刀身が百センチほどの物になり、姿形も大きく変化する。

日光を吸収する漆黒の刀身が、血のような、しかしどこか澄んだ赤色に。

緩く弧を描く切っ先両刃の片刃が、左右に三つずつ枝刃がついた両刃の直刀に。

いわゆる、七支刀である。

石上神宮に安置されている国宝よりも大ぶりだが、姿形には類似点が多く見受けられる。

六叉の鉾とも呼ばれていた太古の儀礼用の剣であるが、これは刀身に文字が刻まれていない。

何より、国宝の七支刀は鉄製だが、これは全く別の素材を使っている。

切っ先は鋭利で実戦にも十二分に耐えうるため、性能からしてもまったくの別物と言っていいだろう。

それが、朝日を浴びて朱に輝く。

「……あー、良かった。上手くいったわ」

完全に脱力した様子で、千草は完成したばかりの七支刀を眺める。

「千草様！　お気を確かに！」

「あー…聞こえとる…よ、と」

一葉に支えられたまま、千草はなんとか立ち上がった。

「あっはっは……。流石にウチでも、まる一日舞い続けるんは過酷やわぁ……」

「当たり前です！　あのような舞、普通は一時間も持てば大成功なのです。それを一日も舞うなど……命を縮めるようなものです！　どうかお休みください、私が責任を持ってお運びしますから！」

「……一葉、父様は来とるか」

「はい、本山に既に来ておられます！」

「ほな、このまま歩いて連れてってくれるか。それまでに昨日の間の報告聞きたい」

「千草さ…！」

「なぁ、見てみい、一葉」

必死に休養をすすめる一葉に、千草はひょいと片手で七支刀を掲げてみせる。

まるで重さを感じさせない軽やかな動作。

汗で髪が額に張り付き、顔色もどんどん悪化しているが、それでも千草の顔には笑みが浮かんでいる。

「……立派な剣やろ？」

「……はい」

「“神器”や父様の“赤い剣”に比べたら粗末なモンやろけど、現代で造られたこと考えたら、最高のモン言うてええやろ？」

「はいっ！」

「怒鳴らんでも聞こえとる。……これだけのモンつくれたんや、ウチはまだまだ死にゃあせんて。仕込みも、これで今できる分は終いや。せやから、もうちょっとだけ、頑張らせてぇな？」

既に大人である千草からすれば、まだ少女と言っていい一葉に心配をかけたのは充分にわかっている。

千草がまる一昼夜行ったのは、舞という形でもって幾多の術式を複雑怪奇なまでに融合させた恐ろしく難解な術式だ。

その複雑さと苛酷さから、並みの術者が行ったなら十分持てば御の字。

それを千草は二十四時間、不眠不休でやり通した。

そのせいで心配させたのもわかっている。

一葉が唇を噛んでいる理由もわかる。

自分だって正直精神力は限界に近い。でも、まだ休めないのだ。

だから。

「わかった。三時間や」

「え……？」

「父様にダイオラマ魔法球を持ってきてくれるように頼んどいた。せやから、今までの報告聞いたら素直にそこで休む。外の一時間が中の一日や、それで文句無いやろ？」

「……はいっ！」

少しだけ笑顔を浮かべた一葉に、千草はかろうじて苦笑を返した。

――――

道すがら、千草は一葉に肩をささえてもらいながらも自分の足で歩き、報告を聞く。

「ほな、中立派は皆こっちに取り込めたんやな？」

「はい。刀久里様が『上手くいった』と仰っていました」

「皆はどうしとる？」

「当初の予定どおり、最高幹部は手勢と共に各地の拠点で最終準備を開始し、昼までには終わると思われます。水無原様も既に――――に向かわれました。よって、現在京都にいる実働可能な最高幹部は千草様、刀久里様、特別顧問のお三方だけです。長にもこれと言っ

た動きはなく、まだ感づかれてはいないかと」

「上々。けど、やっぱり鶴子はんは動けんのか……」

苦笑する千草。鶴子は現在、入院中なのである。

先日の詠春暴走の少し前に妊娠がわかり、大事をとってのことだ。

結婚六年目、これを機に最高幹部の引退も考えているそうだが、千草としては残ってほしいというのが本音だが、それもやむを得ないことだと諦める。

姉のような存在であり、最高幹部として強力な戦力でもある彼女がいないのは大きな不安要素ではあるのだが、それでもやり遂げてみせる。

そうすれば、彼女も安心して引退できるだろう。

寂しいという思いが、ないわけでもないのだが。

「……小太郎やフェイトらは？　どないしとる？」

「小太郎は一日身体を鍛えていた模様です。フェイト、暦は特別顧問と何か話していたようですが、挨拶程度かと。今は特に何をするでもなく、与えられた自室で過ごしています。ただ、コーヒーの減りが異常ですが」

「ふぅん……ん？　月詠は？　その間なにしとったんや？」

「今日の為に衣装を選んでいたとか。県外にも足をのばしていたようですが、既に戻ってきております」

「ならええわ。……まだ、本山(ここ)に親書は着いとらんな？」

「はい。千草様の予想通り、自由行動の今日動くようです」

「特に問題はなさそうやな……」

「ただ……」

「ん、なんかあったんか？」

「それが……」

一葉が語ったのは、千草が舞を舞っていた間、修学旅行二日目の夜に起きた英雄の息子とその近辺での出来事。

それを聞くにつれ、千草はどんどん顔を険しくしていった。

「……決めた」

疲れもあいまって、鬼気迫る表情の千草が発した言葉は、囁く程度の大きさであったにもかかわらず、木々のざわめきの中で一葉にもしっかり聞き取れた。

「所詮は子供やと思とったうちの失敗や。じじいの差し金やろからガキはともかく、獣は仕留める。一般人を裏に巻き込んだゆうんは論外や。
裏の世界は一寸先が修羅の道、狂気と隣り合わせの世界に、中学生の嬢ちゃんを己の欲のために巻き込んだやと？　ふざけよって……！」

「千草様……」

それからは口数も少なくなり、黙々と歩き続けた。

本山の、セイに割り当てられた部屋に着く頃には、一葉はともかく千草は雨にうたれたのかと思うほどにびしょ濡れだった。

セイの魔法球『黄昏』に入る寸前、千草は一葉を呼び止めた。

「一葉」

「はい」

「昼間のうちは計画どおりにな」

「はい」

直立不動。完全に落ち着きを取り戻した一葉は、特に表情を動かすこともなく淡々と答える。

「……一葉」

「はい」

「……急ぎすぎたらあかんえ？」

「は……？」

何を言っているのか？　彼女はそんな顔をした。

「今、ちょっと熱くなっとるやろ。それじゃあかん。午前中は誘い込みや。やりすぎても、やらなすぎてもあかんのや。一葉には月詠のストッパーしてもらわなあかん。せやから、いつも通りでいき」

「……わかりました」

しゅんとして、少し悔しそうな一葉。

憮然としているようにも見えるが、そんな娘でないことは千草も良く知っている。

だから、セイに肩を借りて立ち上がった千草は、一葉の頭に手を置いた。

「一葉は……ちぃと固すぎるんやな。月詠あたりに、少し気ぃ抜くコツ教えてもらい。月詠みたく抜きすぎるんもアレやけど……まあ、それができたら一人前や。頑張り」

「……はい」

一葉の前で、千草は魔法球に消えた。

「……特別顧問」

「なんでしょうか」

「私は、急ぎすぎているように見えていたのでしょうか……？」

「見えてましたね」

「あう……」

関西呪術協会最高幹部会特別顧問、暗辺セイこと、玄凪セイ。

長い間戦乱の下に身を置いた彼の言葉には、否応のない説得力がある

千年を超える生の中で、彼は多くの者を見てきたのだ。

ある者は、己の強さの証明の為に、その強大すぎる力を戦場で無意に振るった。

敵には憎しみと恐怖をもって赤毛の悪魔と、味方には畏怖をもって千の呪文の男と呼ばれ、ついには英雄となった赤毛の少年。

ある者は、己がいずれは必ず殺されると知りつつ、それでもなお全ての罪を背負い、最期まで皆の安寧を願い歩みを止めなかった。

月の下に生き、月の下で死んだ、赤バラの二つ名を冠した最強にして至高の王たる吸血鬼。

良きも悪しきも、多くを見続けた歴史の生き証人。それが、玄凪セイである。

その言葉には、年月に裏打ちされた、それ相応の重みがある。

「ま、千草ちゃんの言ったように気楽にやってみなさい。若いんですから、多少の失敗は私たち大人が何とかしましょう。……そんなことが許されるのも、若い内だけですよ？」

――

「と、いうことがあったのです」

「ほへー、気ぃ抜くですかー。んー」

京都市内。雑居ビルから眼下を見下ろすのは、一葉と月詠の二人。

視線の先には、目標である“お嬢様”こと近衛木乃香がいる。

「……一葉さんはー、どうして戦いはるんですかー？」

「……えっ？」

月詠の唐突な問いかけに、一葉は気の抜けた声を出した。

「ウチは戦うのが好きで戦うてますからいつでも素でおりますけどー、一葉さんにはなんかキチッとした理由があるんちゃいますのー？」

「戦う理由、ですか」

「そうですー。ありますやろー？」

「……ええ、ありますよ」

「ほなら、いっぺんそれ忘れて戦うてみたらどないどすー？　あんまりやりすぎてもウチみたいになってまいますけどー……」

「つまり、無我の境地のような“ただ戦う”ということですか？」

「……ちょっとちゃいますえ？　んー……」

月詠はかわいらしく小首をかしげ、うんうんとうなっている。どうやら言葉を探しているらしい。

「……千草さんの言いたかったこととは違うんやろけど……己を研ぎ澄ませるんどす。刀も、自分も、心も、体も。全部揃ってウチなんどす。どれか一つでも欠けてしもたらあかんのですー。刀も無茶な使い方したら悪なりますしー、心が乱れたら剣もぶれてまいますやろー？　そうなったらウチはウチで……あ、そうですわー」

「……？　何か？」

月詠が、ぱんと胸の前で手を合わせた。

「さっきの言葉、取り消しますわー。ようは、いつでも最高の自分であろうとすればいいんですー」

「最高の、自分？」

「そうですー。刀も硬いだけでねばりがない刀はあきませんしー、逆に弱すぎてもあきませんやろー？　刀を振るうには力んでもダメで、かといって脱力しすぎても刀はすっ飛んでってまいますー。せやからちょうどええところ、最高の動きができる自分を想像するんですー。自分の最高の理想、現状の最善を体現できる、そんな状態ですわー。今の一葉さんは力みすぎてますから、ちょっと気ぃ抜いたらええんとちゃいますー？」

「……それ、最初に戻ってるじゃないですか」

「……あらー？」

「ふう……まあいいです。答えは自分で見つけますので」

「そうですかー」

ため息をついた一葉は、視線を再び木乃香に向ける。学友の少女達とはしゃぐ姿は、年相応で、なんの影もあるようには見えない。

周囲にいるのは、ただ一人の護衛、烏族とのハーフである桜咲刹那を除けば皆ただの一般人。

既にネギという少年とそのパートナーは本山に向かったためこの場にはいない。

そちらには、小太郎と暦が向かっているはずなので問題はない。

裏の要素が隠れてこそいるが、そこにあるのは紛れもない平穏だ。

そして、それを今から壊すのは、紛れもなく自分達だ。

大義の為などではない。

大義など所詮は名目、建て前にすぎない。果たすべきは己の信念。

自分たちはただ自分の信ずる道を行き、立ちふさがる全てを排除する。

その事実から目を背けることなく、さりとて振り返ることもなく歩き続ける。

犬上小太郎は己の武を高めるために戦う。

月詠は己という“刀”の存在意義の為に戦う。

自分は……自分を“救ってくれた”千草の理想の為に戦おう。

――いや、違う。

千草を助けたいという、自分の願いに……“欲”に従い戦うのだ。

今日一日で、関西呪術協会の全構成員、数百、数千、数万……それらと関わりを持つ数えきれないほどの人間の運命が動く。

世界一つを支配する魔法使いから見れば、小さな小さな世界の喜劇。

それでも、小さなつぶてはやがて大きな波紋を引き起こす。

その幕を上げ、開幕を告げるのは自分なのだ。

他の誰でもなく、自分なのだ。

全ての始まりを告げる。それが引き起こす影響の大きさは、まだ理解できていない。

だが、これから否が応でも実感できるようになるのだろう。

「……月詠、準備はよろしいですか」

「いつでもどうぞー？」

「では……参ります！」

「はいなー♪」

京都の街を、二人が駆ける。

かくして、争乱の幕は上げられた。

第七十六話・かくして争乱の幕は上がる（後書き）

次回！

セイ、出番を確保。

暦、驚く。

小太郎の戦い！

の三本立て（嘘）！

乞うご期待！

……あとがきで書くことに困るとは……

第七十七話・京都争乱、昼の部？（前書き）

キャラ投票終了しました。

ご協力、ありがとうございました。

それと、今回少し話の書き方を試験的に昔に戻しました。

第七十七話・京都争乱、昼の部？

Ｓｉｄｅ，セイ

墨をすり、筆につけて紙に置く。

さらりさらりと筆を走らせ、そのまま文字と図形を描き出す。

出来たのは、治癒符。

完成したばかりのそれを、娘（千草）の身体に貼り付ける。

貼ったのは、これで七十六枚目。

この符の効果は、身体の霊脈の流れを静め整えること。

正しく作用したのを確認すると、すぐにまた次の治癒符の作成にとりかかる。

「――まったく、無茶をしますね……」

やあ皆さん。本当に、本っ当に久しぶりな気がしますが、セイです。

この挨拶、大戦の頃はよくやったものです。

最近は部下が頑張ってくれるのであまり出ないようにしていたのですが、今夜は娘の一世一代の大勝負ですからね。出てきました。

で、久しぶりに京都に来て荷ほどきをしていると、一目見ただけで疲労困憊とわかる、全身汗だくびしょ濡れの千草ちゃんが運ばれてきたではありませんか。

くわしく調べてみれば、全身の筋繊維や骨に極度の負荷がかかり、切れるか砕けるかの瀬戸際でした。事実、多くの筋は伸びてましたし。

本人に理由を聞くと、自分を“道”にして要石経由で地脈から直接霊力を吸い上げて、“切り札”の仕込みをしていたとか。

しかも、呪言の詠唱ではなく、意味と概念を利用した舞で行ったとか。

そりゃあ体中ボロボロになりますよ。

よくこの程度で済んだものだと思っていたら、千草ちゃんも自動回

復や肉体補強を舞に組み込んだり、気を使って関節の補強をしたりある程度の対策はしていたようです。

ぺたり。

また一枚完成した符を貼る。今度のは、大気中の霊力を他の符に供給し続ける符。

治療も一段落したので、視線を部屋の中にある時計に向ける。

中と外、両方の日時を示す、複数の文字盤をもった特別な柱時計。

外の時間は、昼の十時。

おそらくは――戦闘が始まる頃合でしょうね。

第七十七話・京都争乱、昼の部？

「……」

「……」

関西の本山。そこに辿り着くためには、竹林の中の千本鳥居を抜ける必要がある。

基本的に本山に至る道がこれ一つであるため、件のネギ少年もここを通ると思われるのだが、それを見逃すわけはなかった。

「……」

「……」

千本鳥居にしかけられた術式の名は、無限方処の呪法。

一定範囲内に入り込んだ者を取り込み、半永久的にさまよわせる術式で、関西の反対派……より正確には、この千本鳥居を受け持つ小太郎と外部からの協力者、暦がしかけたものであった。

なお、術の核になっている鳥居に貼られた三枚の符は、一昨日千草が三十秒で書き上げたものである。

「……なあ、なんかしゃべれや」

「何でですか」

「暇や」

物陰に、今か今かとネギ達が来るのを待ち構える二人の人影があった。

一人は犬上小太郎。狗族のハーフで、黒い学ランの前をとめずにあけている。

少し前に、セイに格ゲー張りにK．O．された少年である。

もう一人は暦。魔法世界の出身で、主たるフェイトの命でこの日本にやってきていた。

今着ているのは、フェイトに褒めてもらったえび茶の袴と紅白矢絣の着物。

この着物。

喫茶店で倒れた後、千草からせっかくだからとプレゼントされたのだ。

結構着心地が良い上、計らいで尻尾を出せるようにしてもらったためなおのこと快適なのだ。

しかし彼女の表情は、いや、二人の表情は優れない。

何故かというと……暇なのだ。

朝早くから出てきたのはいいが、相手、ネギ達がなかなか来ない。

小太郎はする事がないし、暦もせっかくのチャンス、フェイトと二人きりで風光明媚な本山にて緩やかな時間を過ごしたかった。

なので、二人の意志は共通していた。

――役目が終わったら、すぐ戻ろう。

そんなとき――…

「っ、オイ！」

「はい、間違いありません！　無限方処、発動しました！」

二人とも、狗族と亜人という違いはあるが、どちらも人間より身体

的に優れた種族。
当然、聴力や視力も優れており、それは結界内に入った異物、ネギ達を素早く察知した。

「出遅れんなや！」
「でしゃばりすぎないでください！」

二人は竹林を駆け抜ける。
気で強化した足で、それこそ獣のような人間離れした速度で、竹林を走る。

ネギ達を見つけたのは、千本鳥居の途中の休憩所だった。
そこにいたのはネギと明日菜、それと二人は名前までは知らないが、カモとちびせつなである。

二人は竹の上の方の張り出した部分に乗り、様子を窺う。
眼下では、明日菜が『たあー』と言いながら岩を蹴り砕いていた。

その様子に、暦が少し引いた。

「……あれ、普通の学生なんですよね？」

「お、おお。そう聞いとったけど、思ったより楽しめそうやな……よっしゃ、そろそろ行くで。千草姉ちゃんにもろた符は持っとるな？」

「これですよね？」

暦が取り出したのは、妖物を召喚する時に使う符である。

少し細工がしてあり、あらかじめ気を込めておくことによって、いざ使うときに気を込めずとも名を呼ぶだけで召喚を行えるようになっているのだ。

「そや。合図するから、名前呼んですぐそれ下に投げえ。二人一緒にやるんや」

「……符って紙ですけど、投げられるもの何ですか？」

「細かいことは気にすんなや、ほないくで！　来い！」

「ああもう、フェイト様の対極みたいな人ですねっ！　来なさい！！」

「「土蜘蛛っ！！」」

放たれた符。呼び出されるは異形。

甲殻を思わせるような胴体、人など軽く踏み潰せる巨大な八本の脚、
まるで蜘蛛のような姿。

それぞれ、小太郎のは蜘蛛の頭、暦のは鬼の頭を持つ。

二つの巨体が竹を押しのけ、石畳を砕き、轟音とともに落下する。

「うわぁっ！？」

「きゃあああ！？」

「な、なんでえっ！？」

「これは……！」

ネギ一行を挟み込むように落ちた二体の土蜘蛛の頭に、小太郎と暦
がそれぞれ着地する。

「よお来たなぁ！　せやけど、こっから先は通さへん！　帰ってもらうで、西洋魔術師！！」

Ｓｉｄｅ，小太郎

ははははっ！　やぁっと来よったな西洋魔術師。ここ最近は千草姉ちゃんも忙しいから相手してくれへんかったし、ようやっと暴れられるわ！

せやけど、チビ助の方は期待でけへんかもしれん。お姉ちゃんのほうは期待できそうなんやけどな！

「さあ来いや！　来なへんならぁっ！？」

今日、二度目の轟音。

それと共に高い防御力を誇る土蜘蛛がたやすく吹き飛ばされた。

さらに、どこからか召喚された巨大なハリセンで、一発で土蜘蛛が消された。

――式返し、やと！？

「へっへーん。なによ、たいしたことないじゃない」

「……やるなあ、お姉ちゃん」

すごいなこのお姉ちゃん！　一発で土蜘蛛倒してしもたで！？

式神やと相性悪いみたいやな……

相手するんやったら俺がやんのが一番ええねんけど、千草姉ちゃんに言われたこともあるし……

よっしゃ決めた！

「暦ィ！　俺はそのチビ助の相手するから、お姉ちゃん抑えてくれ！」

「ええ！？　だって今式神が返されたじゃないですかっ！」

「何聞いとった、相手するんはお前や！　式神は……そこの獣でも追わせとけ！！」

小太郎の意図がわかったのか、暦はすぐに土蜘蛛から飛び降り、爪

でもって明日菜に襲いかかる。

「え、爪！？　　というか猫耳！？」

「いけませんかっ！？」

ハリセンといえど、アーティファクトはアーティファクト、やすやすとは切り避けない。

しかし、戦闘経験、手数で言うならば圧倒的に暦が上。明日菜も攻めることができない。

一方で、カモには別のピンチが迫っていた。

「うおあっ！？　　死ぬってこれはマジで駄目って……！　　兄貴か姐さんヘルプっすーー！」

カモに襲いかかる土蜘蛛。

自分の全長よりも太い直径を持つ脚が八本。それらが自分めがけて降ってくるのだからたまったものではない。

土蜘蛛も鬼の顔を歪めてカモを叩き潰そうとするが、そこはカモも大したもので必死に土蜘蛛の死角をぬっていく。

「カモ君！」

ネギは自分のペットの悲鳴一瞬視線をそちらに向け、

「おい、チビ助。よそ見してる暇がらあんのか？」

「しまっ…あがっ！？」

「ちょ、ネギ！！」

魔法障壁をたやすく貫いた小太郎の拳がネギのわき腹に入り、ネギは人形のように吹き飛ばされた。

明日菜が悲鳴をあげるが、それをやった小太郎は別の意識にとらわれていた。

――ちっ……やっぱチビ助はあかんか。障壁も思ったほど硬ないし、お姉ちゃんの方がよっぽど強いわ。

あー、クソっ！　なんで俺の方がこいつのせいで苛立っとんねん！！

「なんやなんや、やっぱり弱いな西洋魔術師は！　所詮後ろでこそこそするしかでけへんもんなあ！　この分やと、お前の親父のサウザンドマスターとかもたいしたことなかったんとちゃうか！？」

あーあ、がっかり、や……？

サウザンドマスター…父であるナギを馬鹿にした小太郎を見る、ネギの顔つきが変わった。

……なんや、そないな顔もできるやないか！

小太郎が、再びネギに殴りかかろとした時だった。

「ネギさん！」

「なっ、これは！？」

しまっ……煙幕やと！？　自販機のジュースを爆発させよったか！？

戦闘に唯一参加していなかったちびせつな。それが機転をきかせて煙幕をはったのだ。

煙が晴れる頃には当然――誰もいなかった。

「だーーーっ！　くそっ！」

「どうします、追いかけますか」

「……いや、ちっと待つ。どうせ逃げられへん」

――

「一葉さーん、いつまでこないなことやってますのー？」

「お嬢様の周りに一般人のご学友が多すぎます。護衛の桜咲刹那が彼女たちを振り切るか……もしくは、彼女たちがいてもごまかしの効く場所に入るかするまでです」

「そんなとこ市内にありませんやんかー…」

一葉と月詠、二人は空を駆けていた。無論、本当に空を飛んでいるわけではなく、電信柱や瓦屋根の上を走っているのだ。

無論、隠密の符で一般人には見えないようにした上で、だ。

「えーい」

月詠が、両手の指に挟んだ棒手裏剣、計八本を投げるが全て刹那に受け止められた。

二人を追い立てる為に先ほどから散発的に間接攻撃を行ってはいるのだが、それら全て、一度たりとも成果をあげられていない。

「あーん、やっぱりこんなんじゃあきませんえ～。一葉さーん、生殺しなんて殺生や～」

「まったく……ですが、もうそろそろ見えてくるころかと」

「なにがですか～？」

「あれです」

「はい～？」

ちょうどその時、今までは地を走っていた刹那が急に木乃香を抱きかかえ、大きく飛んだ。目の前にそびえる、高い壁の向こう側へと。

「あれは……」

「――シネマ村。あそこなら、あなたの衣装でも違和感なくいられるでしょう？」

「……うふふ、いややわ一葉さん。ちゃあんと先のこと考えとったんやったら、最初から言うてくれたらよかったのに～」

「あくまで想定された逃げ込み先の一つだったので。……行きますよ」

「もちろんです～♪　やっと斬りあえる……楽しみやわ～♪」

「……くれぐれも、やりすぎないように」

「わかってますえ～？　ずっと楽しみにしとったのに、すぐにやってしもたら勿体無いやないですか～」

「……はぁ」

一葉と月詠、二人もまた高く飛ぶ。

そびえる壁の向こう側へと。

――舞台は、徐々に広がりを見せてゆく。

第七十七話・京都争乱、昼の部？（後書き）

あとがきで申し訳ないのですが、キャラ投票にご協力いただいた榊様にお詫びです。

アンケート？で牛鬼とあったのですが、手元の資料で調べたところ、アンケートに書いていただいた特徴が一致するのは牛鬼ではなく土蜘蛛であったため、作者の独断で土蜘蛛として登場させました。

ご了承ください。

納得いかないというのであれば、一報ください。資料を増やして検討します。

第七十八話・京都争乱、昼の部？（前書き）

現在集計中です。

今回は短いですが、次回で昼の部は終わる予定。

第七十八話・京都争乱、昼の部？

「なかなか来ませんね……」

「もろに入れたったからな。あのチビ助にはよう効いたんやろ」

小太郎と暦、二人はぶらりぶらりと竹林の中をさまよっていた。

煙幕をはって逃げたネギ一行はいまだこちらに向かってこず、再び暇を持て余し始めたので自分たちから動くことにしたのだ。

「一葉姉ちゃんと月詠姉ちゃんはどないしてるんやろか……くそっ、チビ助め。はよ出てこいっちゅうねん」

「……あの、小太郎さん。一つ良いですか」

「あん？　なんや？」

「一葉さんって、どういう風に戦うんですか？　それ以前に戦えたんですか？　私、てっきり千草さんの秘書的な役回りだと思ってたんですけど……」

「……一葉姉ちゃんか」

暦の問いに、小太郎は珍しく小難しい顔をする。どうも話して良いかどうか悩んでいるようだ。

「召喚系の符はよう使うらしいから戦えるには戦えるし、体術もそれなりにいける……らしい」

「らしい？」

「……そや。昔な、いっぺんだけ千草姉ちゃんにおんなじこと訊いたんやけどな、教えてくれへんかったんや。んで、しゃあないから直線一葉姉ちゃんに訊きにいったんやけどな」

「……それでそれで？」

小太郎に続きを促す暦。しかし、

「おっ！？　今なんか音したで！　チビ助かもしれん、行くでぇ！」

「あっ、ちょっと！？」

小太郎は話を切り上げ、そのまま走り出してしまった。

しょうがないので暦もまたその後を追う。

だが、追いついた暦が見たのは、少女のスカートに顔を突っ込んだ小太郎だった。

「……不潔です」

「ぬあっ！？　違うわ事故や事故っ！！　あっ、わざとやないねん、人違いや！！」

暦に言い訳し、少女に謝罪ともとれない謝罪をする小太郎。

しかし、ここで暦が気づいた。

「今日って、一般人立ち入り禁止のはずじゃ……？」

「そや！　入り口に看板あったはずや！　アカンで中入ったら！　あー、もう。どないしよか」

「とりあえずまずはちゃんと謝りなさい！」

「うぐおっ！？」

暦が、小太郎の頭を石畳に叩きつけた。
その惨状に逆に少女が身体を少し引いたのだが、暦は気づかなかった。
「つぅあー……何すんねん！」
「ちゃんと謝らないからです」
冷たい目で小太郎を見ながらも、暦は小太郎の耳元に顔をよせる。
「……向こうで声がしました。彼らかと」
「っ！　ほな、後で罠解いたるさかいに、ここでじっとしときや！　ほなな！」
少女に軽い挨拶と、動かないよう念をおすのもそこそこに再び走り出した。
「――来れ（アデアッド）！」

背後で、少女――宮崎のどかが、一冊の本を虚空から取り出したのに気づかずに。

――――

「っ、いよったなぁ！」

暦の先を行き、鳥居の上を走る小太郎。それを出迎えたのは、ネギの放つ魔法だった。

薄緑の体をしたネギの写し身。各々が体と同じ薄緑の杖にまたがり武器を持ち、小太郎に向かってくる。

その数、八。

風の精を使役したものだと適当にあたりをつけ、それを蹴散らす。

拳で殴り、蹴り飛ばし、小さな刃を撃ち込んで。

そんな小太郎の視界に、光が映る。

ネギが追加で放った、魔法の射手、連弾・雷の17矢。それが、小太郎に殺到する。

「ちぃぃっ！！」

とっさに、前もって渡されていた守りの護符で防ぐが、勢いは完全にそがれ脚を止めてしまった。

「小太郎さん！」

「暦ィ！　俺は大丈夫やから、もっぺん式神召喚せえ！　俺はチビ助をやる！」

数秒遅れて追いすがってきた暦に、小太郎は指示を出す。しかし暦は前を指し示して、

「違います、前っ！！」

その瞬間、小太郎の視界が白に染まる。ネギの放った『白き雷』が

直撃したのだ。

とっさに全ての護符を使って防いだが、相殺しきれずに鳥居から落ちる。

だが、多少のダメージは追ったものの、動く分には問題ない。拳をより強く握り、脚に気を満たし煙を突っ切り突撃する。

途中立ちふさがった明日菜を無視し、ネギの背後に回り込む。

「オラァッ！！」

拳を腹に打ち込み、宙に浮いたネギを更に地面に叩きつける。

明日菜は暦が、カモとちびせつなは式神が抑えているのでネギに助けは来ない。

そこからは、ラッシュだ。

殴って殴って殴って殴って、殴りたおす。

そして、とどめの一撃が――――

―――

「よう来はりましたな、先輩。約束通り来てくれて嬉しいわ～」

シネマ村の、橋の上。明治大正期の華族のドレスを改造したようなきらびやかな服の月詠の隣で、一葉はげんなりとしていた。

シネマ村に紛れ込んだまでは良かったのに、月詠がいらぬ芝居を打ったせいで無駄に衆目の目を集めることになってしまった。

おかげで、自分まで仮装することになってしまった。

「まったく……」

一葉の今の姿は、いつものシャツにチノパンではない。

黒い制帽に黒の詰め襟の上下、そして金の鎖で留めた黒の外套。

腰には模造刀を差した黒ずくめで、それを着こなした自分は月詠曰く『男装の麗人』なのだそうだ。

「ひゃっきやこぉー♪」

月詠が、符でもって小型の妖怪を大量に召喚する。お嬢様の周囲にいる学友の相手をさせるつもりらしい。

一般人に害あるものはなさそうだが、百鬼夜行の名の通り細々したのが百近くいる。

しょうがないので、一葉も自分の符を取り出した。

「……百器夜光」

妖怪と一口に言っても、日本には北から南まで多種多様な多くの妖怪がいる。

月詠はその中でも特に自分の好み、見た目重視で式神を選んでいるようだが、一葉の場合は少し違う。

カンテラ、提灯、ランタンなど、年経た古道具が変じた九十九神の類を好んで集めている。

その役割は、その身に蒼い灯りを灯し“惑わす”こと。こういった場で多数向けの暗示や催眠に向いている。

月詠とは違う、補助や絡め手に特化した実用主義の式神と言っても良いだろう。

「にとーれんげきざんてつせーん」

月詠の方は既に白兵戦へと移行して、桜咲刹那を相手にしている。

自分の役目も、もうすぐだろう。

――ここからだ……！

“急がない”

千草は言われたことを頭の中で反芻しながら、一葉は自分でも気づかぬ内に、汗ばんだ手を握りしめていた。

第七十八話・京都争乱、昼の部？（後書き）

ここまで大筋は同じ。

ではこれからはどうでしょう？

第七十九話・京都争乱、昼の部？（前書き）

これで、昼の部は終わりです。

第七十九話・京都争乱、昼の部？

「こいで終いやぁっ！　いねやチビ助ェッ！！」

「――契約執行０．５秒、ネギ・スプリングフィールド」

止められた、やと……！？

己の目を疑う。最後の一撃。これで勝負を決めるつもりだった一撃が、一方的にやられていたはずのネギに止められた。

驚愕。

その次に感じたのは痛み。

顔に突き刺さる拳。自分の体が宙を舞い、

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル」

聞こえたのは、西洋魔術師が使う始動キー。

「闇夜を切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を食らえ！」

背中に、何かが当たる。

「白き雷！！」

「がああああああっ！？」

「小太郎さん！？」

衝撃。視界が白く染まっていく。再び痛みが走る。地面に落下したのだと気づいた。

「どうだ！　これが西洋魔術師（ぼく）の力だ！」

さっきまで圧倒していた相手に、油断からつけ込まれ、逆転された。
あげく、地に無様に転がるのは自分。
自分の中で、何かがはじけた。

「手加減しとったら、調子にのりよってぇ……！」
「な、まだ立ちやがるのか！？」
「ちょ、小太郎さんまずいですって！！」

血が騒ぐ、とでも言うのか。
自らの身体を、より戦うためのそれへと変える。
「獣化変身しやがった！？」
髪は白く、尾を生やし、爪は鋭利に、己を獣へ。

「こっからが本番や、ネギ！」

再び、拳を握りしめる。

ネギはおそらくもう限界。自分も似たようなものだが、獣化した分有利、そうふんでいた。だが、

「左です先生ー！」

拳が、空を切る。

その後も、数発攻めるが、それを予測した声にあわせてネギが攻撃を避け、あまつさえ反撃をもらってしまった。

そこでやっと声のした方を見ると、そこには千本鳥居の途中で出あった少女が、大きな本を構えて――

「アーティファクト！？　一般人と違たんか！？」

「あ、ああの、小太郎君！　ここから出る方法を、教えてくれませんか！？」

「ああ！？　　んなこと教えるわけ……はっ！　　まさかその本！？」

小太郎が、はたと気づく。なぜ、自分の攻撃がよまれたのか。なぜ、答えるはずもないのに自分に脱出の仕方など訊いたのか？

答え。

「こ、この広場から東へ６番目の鳥居の上と左右の三カ所を壊せばいいそうです！」

あの本は、自分の考えていることを読めるアーティファクト。

「ちょ、おまっ！　　あ、待てやコラァ！！」

脱兎ごとくとはまさにこのことと言わんばかりに、ネギ達が東を目指す。

追いかけるが、ダメージもあるため杖にのったネギに追いつけない。

結果、ネギ達は無限方処を突破し、あまつさえ結界返しをくらって閉じこめられた。

結界が完全に閉じた後で、小太郎はごろんと仰向けになった。

「あーーーーーーっ！！　やられた畜生！！！！」

「大丈夫ですか、小太郎さん！」

「平気や平気、死にゃあせん。けど、予想外やったわ。まっさかあのお姉ちゃんがアーティファクト出すとは思わんかった」

「ですね。一般人にしか見えませんでした。後で報告しないと」

「そやな。俺も結構でかいダメージもろてしもた。思ったより強かったわ」

「……けど、よかったんですか。もうちょっと追いつめても良かったんじゃ？」

「よう言うわ。おまえかて全然本気出さんかったくせに。けど、これで“計画通り”やろ？　ほなら別にええやん」

――ネギ達を通したのは、当初の予定の内。つまりはわざと。
そうでなければ、杖に乗ったネギはともかく、暦が相手だった明日菜が逃げ切れるわけがないのだ。

「それはそうですけど……じゃあなんで獣化したんです？」

「頭に血ぃのぼった」

「……もういいです」

ふぅと息をはく暦。心なしか、耳が少したれている。

「あとは一葉姉ちゃんと月詠姉ちゃんの方か……大丈夫やろか」

小太郎のつぶやきは、風にざわめく竹林に消えていった。

――

「にとーれんげ……」

「甘いっ！！」

「っ、やりますな、せんぱ……」

「そこっ！！」

「……っ！　あーん、話させてもくれへん～」

数本の髪が風に舞う。

その髪の持ち主は、月詠。

月詠は刹那の攻撃を抑えきれなくなっていた。

最初は自分の生きがいであるキリアイが楽しめる。その程度の認識だった。

だが、実際に相対してみれば、前情報とは違うとんでもない相手だ

った。

足運び、呼吸、刀を構えて振るうまでの一連の動作の一つ一つに無駄がなく、隙がない。

正確にはあるのかも知れないが、少なくとも月詠自身ではわからないレベル。

そのくせ、こちらの攻撃は初見であろうと即座に見切り、斬撃の合間を縫って逆に反撃してくる。

当たったと思った一撃がかすりもしない。

神鳴流では珍しい対人特化の小太刀二刀。それが完全に対処されている。

同門だというだけではない。そんなことで対処されてしまう程度の腕なら、自分はこの場にいない。きっと自分は他の場所に配置され、ここにいるのは一葉だけだったろう。

だが、実際に今自分は手も足も出ない。

かろうじて食い下がってはいるが、刹那の速く、鋭く、重い野太刀の斬撃に、完全に封じ込められつつある。

本来、野太刀の方が手数が少ないはずなのに。

――なんて素晴らしいんやろか。

これこそ、自分が求めてやまなかったもの。

強者との、シアイ。

自然と口の端がつり上がる。

身体が火照り、精神が高揚し、加速していく。

もっと、もっとだ。

もっともっと、キリアイタイ。

「あはははは！　ええなぁ、ええどすなぁ！　先輩、どうしてそないにウチの剣に反応できるんやろかっ！？」

「貴様の剣には殺気がありすぎる！　それに、お前の剣はあの“地獄の特訓”に比べれば常人の範疇だ！」

「ウチを常人と言いますかぁ！？」

「少なくとも貴様は人だろうがっ！！」

「ほなら剣鬼にでもなってみせますえぇ！！」

「ぬかせぇっ！？」

一瞬、刹那の視界がブレた。

「すきありですー♪」

「くっ！？　まだまだぁ！」

首に迫る短い方の小太刀を『夕凪』の柄でいなしてしのぎ、一度距離をとる。

刹那は自分の見える世界に違和感を覚えた。

何かおかしい。なにがおかしいのかはわからないが、とにかく何かがおかしいのは間違いないのだ。

自分の感覚と、実際の間合いがほんの数センチずれているような、もどかしい感覚。

「――月詠」

月詠の背後に、もう一つの人影。

黒衣に身を包んだ自分と同じくらいの年の少女。男装だが、外套の上からでもわかるあの胸は女性で間違いない。背は同じくらいなのに。

……自分の記憶にはない、未知の少女。

――誰だ？

黒衣の少女――一葉は、事務的な口調で月詠に語りかけた。

「あなたはそこで桜咲刹那の相手をお願いします。私は式神の配置にもう少しかかりますから」

「一葉さん、ウチ言われずともやってますえ～？」

式神？

気づけば、宙におびただしい数の蒼い灯りが浮かんでいるが、代わりに周りから人がいなくなってきていた。

自分たちの派手な斬り合いを目当てに相当な数の見物客がいたはずなのに、今はほとんどいない。

委員長や村上といった級友達は未だに月詠が出した小型の妖怪の式神達と戦っているようだが、彼らに対しても通行人は興味を示さない。

まるで、視界に映っていないかのように。

「貴様、何をしたっ！？」

「たいしたことではありません」

そっと、近くにある灯りの一つに手を添える。すると、蒼い光は消えて古めかしい行燈(あんどん)が残った。

「この子達に、私がつけた火を守ってもらって、一般人を遠ざけてもらっただけのこと。蒼い火は容易く人を惑わせます……貴女もそうではありませんか？」

「貴様が原因だったか……！」

「ええ。何か耐性があるのか、効きづらいようですが……でも、見たところ効いていないわけでもない」

ホゥ、と行燈に再び蒼い火が灯り、宙に浮く。

ゆらりゆらりと宙を漂うそれを一葉は満足げに眺め、再び刹那に視線を戻した。

「さて、どうしましょうか。月詠、まだ抑えられますか？」

「もちろんです～、やってみせますえ～？」

「では、私だけで先にお嬢様をさらってしまいましょうか」

こつり、と刹那をしり目に、一歩、木乃香の方へ近づく。

木乃香は、周囲を一葉の式神に囲まれて動けない。

まるで、ホゥホゥと点滅するように光る蒼いに魅入られたように。

「それでは、月詠。お役目、頼みましたよ」

「はいな〜」

「ま、待てっ！！」

その言葉を無視し、こつり、こつりと硬質な音を立てて一葉は木乃香へと近づいていく。

月詠に足止めされた刹那をあざ笑うかのように、ゆっくりと。

ここで、一葉は大きな間違いを犯す。

ここでの一葉達の役目は二つあった。

一つは、小太郎と同じく対象……この場合は木乃香を、なるべく自然な形で本山に誘導するためにあえて日のある内に襲撃をかけること。

もう一つは、関東の幹部達が一度は受けるというセイの地獄の特訓メニュー……正式名称『一週間であなたも幹部候補！　超速成幹部候補養成特訓メニュー』の最新版を受けた刹那の脅威がどの程度であるのか、その強さの限界を確かめる事であった。

ゆえに、一葉はあえて普段なら絶対に言わないようなセリフを使うことにする。

酷薄な笑みを浮かべるという演技までして。

「さて、お嬢様。しばし眠っていただきます。……もっとも、次に目覚めることがあるかどうかは、保証しかねますが」

そして、不用意なその一言が、

「――――待て」

刹那の、逆鱗に触れた。

背後に感じた、強烈な殺気。
そして、風切り音とともに、外套をかすめるようにして二本の刃が橋の上に突き刺さる。

振り返れば、そこには小太刀二刀を根元からへし折られ唖然とする月詠と、黒化してこそいないものの、一切の感情の消えた目を細めこちらを見据える刹那がいた。

野太刀の切っ先が、一葉に向けられぴたりと止まる。延長線上には、一葉の心臓。

一葉は、後悔する。

自分は、やはり急ぎすぎたらしい、と――

「覚悟は、いいな？」

「……撤収します！　月詠っ！！」

刹那の切っ先がぶれた瞬間に、一葉の術が発動する。

周囲三百六十度、百近い式神から強烈な閃光が走り、世界を蒼に染める。

それが消えたときには、式神も、月詠も、一葉もいなくなっていた。

「お嬢様、ご無事で！？」

「あ、せっちゃん……？」

元に戻った刹那が、茫然自失としていた木乃香に駆け寄る。

「申し訳ありません。危険な目に遭わせてしまって……」

「……ええよ。危ななっても、せっちゃんが守ってくれるて信じとったから」

「お嬢様……」

刹那は、目頭を抑えてしばしじっとした後、こう切り出した。

「お嬢様、今からお嬢様のご実家に参りましょう。神楽坂さん達と合流します！」

――

《――――神楽坂さん達と合流します！》

去り際に残してきた盗聴用の符。

すぐに効果が、切れるし、有効距離もそう長くない物だが、情報を得ることは充分に可能な便利なシロモノだ。

「一葉さん、お嬢様は計画通り本山に向かうみたいや」

「そう、ですか……」

京都市内の森の中。

そこに、あの一瞬で逃げ延びた一葉と月詠がいた。

「月詠、すいませんが、報告をお願いします。計画の、第一段階は、終了。お嬢様、が、本山に向かわれたことと、桜咲刹那は、ともすれば、中堅位の、幹部には、食らいつきうる、と……」

「……一葉さん、大丈夫ですか～？」

「大丈夫、です……」

しかし言葉とは裏腹に、木に背中を預けるようにしてもたれ掛かっていた一葉の顔色は真っ青だ。

「……一葉さん？」

月詠は、気づいた。

一葉の外套に大きな横一文字の切り込みと、その下の黒衣に滲み出た赤があることに。

「……転移で消え際に、ばっさりやられました。野太刀の間合いを、見誤りましたか……」

「一葉さん！」

「大丈夫、ですって」

「それは大丈夫な傷とちゃいます！」

職業柄、刀傷を嫌というほど見慣れている月詠の見たところ、一葉の傷はかなり危うい場所にある。

すぐにでも手当てをしなければ、命にかかわる程度には。

それでも、一葉は首を横に振る。

「問題、あり、ません。そう、簡単に、死ねは、しません」

その言い方に、月詠はほんの少しの違和感を覚えた。

――死なないと強がるのではなく、死ねない？

「不思議、そう、ですね……？」

一葉に、変化が現れる。

些細な変化ではあるが、黒だったはずの瞳がやや青みがかってきたのだ。

そして、何より、一葉が纏う力。

一葉の内から感じられる力。

月詠からすれば、それは余りにも馴染みのある力。

「妖、気……ですか？」

「……ええ、ええ。そう、です」

答える一葉の声は、どこか自嘲の響きを帯びて。

「私は……“混じり物”なんですよ……」

第七十九話・京都争乱、昼の部？（後書き）

もしかすると、最初の方のキャラ紹介を消すかもしれません。

その場合はまた報告します。

第八十話・一葉（前書き）

注意！　今回は途中読者様方を不快にするかもしれない部分があります。一応作者としても考えて書いているつもりですが、ご容赦ください。

それと、作品のジャンルを学園からファンタジーに変えました。

第八十話・一葉

関西呪術協会、本山。

数年ぶりの長の娘、お嬢様こと近衛木乃香の帰還にわく本山にある離れの一つ。

特別顧問であるセイとその妻さよにあてられたその離れの一室に、反対派の古参術者数名に守られた大きな水晶が存在した。

ダイオラマ魔法球、『黄昏』。

その中に、午前中に動いていた面々がブッキングを避けるために隠れているのだった。

外での時刻は既に昼過ぎ。

最初は立ち上がることも困難だった千草も、セイの治療の甲斐もあって今ではほぼ本調子である。

たが、今度は代わりに千草の付き人、一葉が運び込まれてきて布団に寝かされている。

治療には当然千草も加わった。

「ふぅ……よう寝とるわ」

今は安定しているが、一葉の傷は深かった。

鋭利な刃物で一閃。

傷は内蔵にも及び、普通の人間なら死んでいただろう。

そう、普通の人間だったなら。

「千草はん」

「……月詠か」

「訊きたいことがあるんですけど、答えてくれはるやろか」

「……一葉のことか？」

「はい～」

千草が背後を振り返ると、部屋の入り口に普段着の少し大人しい目の服に着替えた月詠が立っていた。

二刀を折られたが故に得物は持っていない。

だが、それよりもいつもの月詠と大きく異なる点があった。

いつもと同じのんびりとした口調だが、やや固さを帯びた声色。

常日頃浮かべていたほんわかとした笑顔はなりを潜め、千草でも初めて見るような真剣な顔だった。

こんな顔もできるのかと、千草も内心で驚く

もしこれがいつも通りの月詠であったなら、千草は迷わず断った。

人の深いところは基本的に他人が語るべきではないからだ。

だが、今までにない今の月詠ならば、あるいはこの話をすることで剣に生きる修羅の道以外の……新しい道を見つけてくれるかもしれない。

彼女はまだ若いのだから。

――だから、試すことにした。

「……月詠、知ることに対する覚悟はあるか？」

「……覚悟、ですか～？」

「そや。知らんでもええことを知りたがり、望むべきでないことを望む。何かをするなら、当然相応の覚悟が必要になってくる。それが誰かの秘密ならなおさらに、や」

「……」

「ええか、月詠。この話は関西でもとびきり暗い部分の話や。気分のええ話やないし、聞いたところで何の得もない。裏の世界にあってなお光届かぬ深いところに近づくだけ。せやから、半端な興味とかやったらやめとき。せやないと――いつかこうなる」

トン――――と、月詠の眉間に扇子の先があてられた。

それをしたのは、一葉の横で、“自分の目の前で正座で座っていた”はずの千草だった。

ぶわりと体中から汗が噴き出した。

目の前の千草はいつも通りの自然体。

シネマ村での刹那のような殺気も、強大な妖怪が放つような威圧感もない。

ただ、自然体でいる千草。それが何をしたのか“わからない”。

ただの一瞬も、自分は目を離しはしなかった。なのに、何が起きたのかわからなかった。

正座から立ち上がるという動作も、懐から扇子を抜く動作も、そしてそれを自分の眉間に突きつけるという一連の動作全てが――――月詠には、知覚することができなかった。

月詠のその様子を見て、千草は眉間にあてていた扇子をしまい、心の内を覗き込むかのように、目をまっすぐに見てこう告げた。

「今のは認識阻害と気の瞬発力を併用しただけのごくごく単純な小技やけど……月詠、お前は今のが見えたんか？」

「……見えまへんでした」

「そやろな。しかもウチは術者で月詠はんは剣士や。前衛と後衛の差は大きい。なのにそのていたらく。そんな状況で暗部に近づくことが何を意味するか、わかるわな？」

「……はい」

「それでも、聞くか？」

千草が見た月詠の目には、確かに一瞬の迷いがあった。恐怖もあった。だが、それを月詠は自分の前で振り切った。

月詠の目に強い光が戻るのを見届けると、千草は一つ頷いた。

「……ええやろ。ただし、この話は絶対に他言無用や。墓の中までもっていけ漏らしたら、相応の罰を受けてもらう。ええな？」

「かまいまへん」

「おし、座り」

自分の前をポンポンと叩き、月詠に座ることを促す。月詠は素直にそれに従い、黙って千草の前に正座で座った。

「まず、初めに一葉がなんであるかを言うておく。一葉は人と妖物のハーフや。本人は自嘲の意味で混じり物て言うけどな」

「やっぱり、そうやったんですか……」

あのとき、森の中で一葉は自分で自分のことを混じり物と呼んだ。関西呪術協会では時々蔑称として人と妖のハーフのことをそう呼ぶが、その存在自体はそこまで珍しい物ではない。

現に犬上小太郎もそうだし、他にも結構似たような境遇の者はいる。昔は相当風当たりも強かったそうだが、今ではそういったことはほとんどない。

だが、千草の次の言葉に、月詠は言葉を失う。

「――昔、て言うても十五年ほど前やが、一部中堅幹部が秘密裏に画策、実行した計画があった。曰く、式神を人と交わらせることを目的に召喚し、人工的に人と妖のハーフを造る計画。生まれてくるであろう子供を、片親が式神という側面を利用し幼い段階で呪言で縛り、命令に決して反抗しない。そもそも反抗という考えを持つことのない優秀な駒を造りだす。そんな腐った計画や」

千草の表情には、なんの変化もない。

ただ、たんたんと事務的にそれを語る千草が、話の内容以上に月詠は怖かった。

「当時は先代の長が亡くなったり関東呪術協会が発足したりで本山もごたごたしとってな。不自然な物の流れに気づいてから事実を調べるまでに少しかかってしもた。当然すぐにその計画に荷担した外道は一人残らず粛清したけど……悪い意味での成果は既に出とった」

「それが……一葉さんなんどすか？」

「そや。たった一件だけの成功例、それが一葉。安倍晴明を生んだ葛の葉狐にあやかって狐の妖と人との間に造られた、呪具と符に埋もれた赤ん坊。身勝手な都合で造られたが故に、混じり物やと自嘲しよる。関東に誘ても、未だに理由付けてなかなか表に出たがらん」

ふぅ、と嘆息した千草は、すっと手を伸ばし、眠り続ける一葉のでこをぺしんと指ではじいた。

「あうっ」

「ほれ、とっとと起きい。狐が狸寝入りなんぞするもんとちゃう」

「しかし、千草さまが……」

「しかしも何もあるかいな。薬とってくるさかい、じっとしとき」

すっくと立ち上がり、千草は部屋を出て行った。

残された一葉と月詠が夕日で黄色く染まる部屋の中で会話もなく黙っていると、一葉が話を切り出した。

「月詠」

びくっと、名を呼ばれた月詠が体を震わせる。
それを見た一葉は、横になったまま月詠に語りかける。

「あなたは、なぜ私が好んで式神に九十九神を用いるかわかりますか？」

「式神、ですか～？」

どんなことを言われるかと身構えた月詠は、内心でほっとしつつも、言われたことを考える。

だが何かを答える前に一葉が答えを言ってしまう。

「狐の火は人を惑わしますが、灯りとしての役割を果たすこともあります。それが本来の役割とは違うとしても、必要とされなくなったあの子達に役割を与えられる」

だから、と一葉は続ける。

「月詠、もしあなたが私の話を聞いて何か感じることがあったのなら、誰かを必要として、その誰かに必要とされる人になりなさい」

「……けど、ウチは斬り合いになったら止まれません」

「だからです」

天井を見上げたまま、一葉は笑う。

「どんな名刀であろうと、振るう者がいなければただのなまくらと同じ鉄の塊です。だからこそ、振るうに足る理由が必要なんです。あなたが言ったように、理想の自分を想像しなさい。そうすればきっと変われるはずですよ。あなたがそれを望むなら」

『黄昏』

永久に日の沈まぬ魔法球で、月詠の心の中に新しい何かが芽生えた瞬間だった。

第八十話・一葉（後書き）

一葉は千草に育てられた訳ではありません。

そこら辺はまたちょいちょい語られていく予定です。

第八十一話・庵（前書き）

メガネが直った……！

ありがとう眼鏡屋さんの店員さん！

……今回は短いです。

あと、あとがきにてキャラ投票の結果があります。

第八十一話・庵

Ｓｉｄｅ，木乃香

「はー……」

数年ぶりの実家。山の上に建つ、大きな大きな家屋敷。

桃色の花を満開に咲かせた桜を横目に、着物に着替えた近衛木乃香はのんびりと廊下を歩いていた。

――最初、家に帰るつもりはなかった。別に家に居づらいだとか、そういった理由があるわけやない。

家にはお父様がおるし、小さかったウチを可愛がってくれた人もぎょうさんいてる。

けど、今回は修学旅行であんまり時間がとれへんから、寄るんは無理やと思とっただけ。

三日目の今日、せっちゃんがウチの手ぇ引いて急に走り出した。

今までせっちゃんはウチのこと他人みたいに接してくるから嫌われてしもたんかと思うてたけど、そうやなかったみたいでほっとした。

けど、その時のせっちゃんは少し怖かった。見たこともないような目ぇしとったからや。

なんかぎらぎらしとって、今にも爆発しそうな……ウチの知らんせっちゃんやった。

それからせっちゃんに抱えられてシネマ村の壁を飛び越えて、そっからイベントに巻き込まれたんやけど……あれ、ほんまにイベントやったんやろか？

よく覚えてへんけど、なんか蒼い光が……

「――――木乃香お嬢様」

歩き続ける木乃香が自分の記憶に疑問を抱き始めたちょうどその時、廊下の向こうから声がかかった。

あれ、この声は……

「……千草さん？」

――

「……千草さん？」

廊下の反対側から歩いてくる木乃香を待ちかまえていたのは、千草だった。

――本山の反対派。その人員は千草のような最高幹部だけではなく、下級の巫女や術者なども多くいる。

千草はそんな彼ら彼女らから情報を集約し、木乃香が着替えのために刹那や学友から離れた一瞬のすきをついて、木乃香に接触をはかりにきたのだ。

何せ、刹那はともかく他の面子が本山に入ってすぐにどんちゃん騒ぎをするようなお気楽さ。正直もう少し警戒心を持てと言いたいくらいだ。

とにかく、木乃香に会いに出向いたのは千草一人だ。

もしこれが小太郎や月詠、一葉では万が一刹那達に出会った時に即座に戦闘に陥ってしまう。

だが、千草ならその心配がない。千草が関西の融和反対派であるということは関西に所属する者なら周知の事実だが、千草は今日一度として“表立って”動いていないのだ。

故に、刹那からすれば例えどんなに怪しくとも千草が黒幕である確証はなく、絶えず他の最高幹部、あるいは幹部の誰かが黒幕である可能性がつきまとう。

しかも、千草自身が京都・本山の最高幹部であるから、幼いころの木乃香はもとより刹那のことも知っている。

故に、千草が木乃香と接触することに何のおかしな点も存在しない。だからこそ、万が一この場に誰かが居合わせたとしても、千草を糾弾することなどできはしないのだ。

「お久しゅう、お嬢様」

「もう、千草さんにはお嬢様ら言わんといてて言うてるのに……」

くすくすと笑いあう二人。タイミングを見計らって、千草が用件を切り出す。

「お嬢様、ちょいとついてきてもろてええやろか」

「え？　どっか行くん？　せやったらせっちゃんも呼んで……」

「できれば、お嬢様だけでお願いしたいんやけど……」

ついに千草自身が動き出した理由。それは――

「お嬢様のお母様……木乃芽様の庵を見せておきたいんです」

――――

「ここが、そやの？」

「ええ、そうです。近衛木乃芽様の庵です」

後ろに木乃香を引き連れた千草は、木乃芽の庵の中を歩いていく。

この庵は他の建物からは離れた場所にあるので、木乃香がいなくなったとしてもすぐここに来るということはない。

「さて、ここが木乃芽様が一番よう使っとった部屋です」

千草は戸を開き、木乃香を中に招き入れる。

落ち着いた色合いの家具に、中央に置かれた炬燵。

生前、皆から慕われた木乃芽が主に私生活用にしていた一室は、今も昔と変わらぬ姿を保っている。

木乃香は興味深そうに部屋の中を見て回ったり、本棚のアルバムを見たりしている。

そして、その様子を千草も昔を懐かしむような気持ちで眺めていた。

この私室に小さかった自分が来ると、いつも木乃芽はにこにこと笑って迎えてくれた。

夏にはスイカを切ってくれて、縁側に座って食べた。

冬には炬燵に肩まで入って、寝っ転がってみかんを食べた。

食べてばかりだと苦笑しつつも、あの頃が一番関西にとって穏やかな頃だったと千草は思う。

昔から、この部屋で多くの事が決められてきた。

いつも木乃芽は夜は執務用の部屋ではなく、この部屋に書類を持ち込んで片づけていた。

内密な話をするのにも、よくこの部屋を用いていた。

それは、木乃芽が亡くなる前も後も同じこと。

自分のかけがえのない友人、沙都子が本山に来るきっかけになった事件への介入も、ここで木乃芽とセイの話し合いでどうするかが決められていた。

木乃芽が亡くなった後、セイが関東呪術協会の発足を決めたのもこの部屋だった。

そして、自分たち反対派が近衛詠春を追い落とし、組織を掌握すると決めたのも、この部屋。

思えば、この部屋が本当の意味での本山の、引いては関西の中心だったのかもしれない。

本当に重要なことは、全てここから決められてきた。

ここから全てが動いていた。

全てが始まっていた。

そして、これからも。

今から自分も、それをする。

千草は、懐から数枚の符を取り出した。

そしてそれを使おうとしたとき、木乃香の何気ない所作が――――生前の木乃芽と重なって見えて、一瞬符を使うことを躊躇した。

そして、思う。

――――木乃芽様は、自分を恨むだろうか？

答えは出ない。記憶の中の木乃芽は、決して答えてはくれない。

……どちらにせよ、自分はもう選択した。だから、千草は符に力を込める。

「……お嬢様」

「ん？　なんやろか、千草さ……」

「――お休みなさいませ」

「え……？」

本山の、庵に続く細くて暗い並木道。

そこを、一陣の風が通り抜けていった。

その後に、木々のざわめきだけを残して。

第八十一話・庵（後書き）

人気キャラ投票結果発表！

◆一位：玄凪さよ、白エヴァ。

◆二位：玄凪セイ。

◆三位：七守衣子、白刃乃、玄凪煌、天ヶ崎千草。

◆四位：瀬乃宮桃、黒兎沙都子、綾瀬夕映、近衛木乃香、近衛木乃芽、青山鶴子、春香、エヴァ、ウェンズリー。

どうも、作者のＡＲＵＭでございます！

今回の投票では十五名の方にご協力いただきまして誠にありがとうございました！

結果はさよさんと白エヴァがトップでした。セイは主人公なのに二位。やはり出番が少ないからですかね？

あと、この結果はあくまで？のみです。？は発表いたしません。

が、目下閑話外伝を作成中。京都が終わったら何話か投稿する予定です。

……最近、Ｉｆで黒化暴走詠春をＦａｔｅ／ｚｅｒｏにバーサーカーで送り込んだらどうなるだろうとか妄想してます。

当然昔あとがきに載せたステータスで。

第八十二話・京都争乱、逢魔が時に響くのは（前書き）

第七十七話の一部を消しました。

理由はあとがきにて。

第八十二話・京都争乱、逢魔が時に響くのは

「一葉、傷はもうええんか？」

「はい。ご心配おかけしました」

本山の、木乃芽の庵の一室。そこに数名の男女が揃っていた。

その一番前に座る千草は、数時間前まで寝込んでいた一葉に声をかける。

今回の件では一葉は直接的な戦闘ではなく主な仕事は千草の補助になる予定だが、それでも戦闘がないとは言い切れない。

たとえどんなに万全の準備を期したとしても、必ずどこかに穴がある。

絶対などありえない。

それは、今までの経験からも言えること。

「ほなええ。……さて、皆の衆。いよいよや」

既に日は傾きつつあり、障子越しに外から差す光が部屋の中を黄色く染める。

部屋の中には、車座で座る千草を含めた男女。

千草の後ろには一葉と月詠。右隣には刀久里鉄典がいる。

残りの人影の数は十。その内の一つはセイで、残りは反対派、あるいは中立派から反対派に移った最高幹部たち。

千草と刀久里、セイ以外は皆いずれも遠方にいるため式紙を利用した姿写しであるが、ここには反対派の最高幹部全十二名が揃っているのだ。

彼らは皆表情はとても穏やかだ。しかし、その瞳の奥には強い光が宿っている。

皆、動くと決めた者達。

そこに至るまでには、彼らなりの理由と歴史があったのだ。

そんな彼らの中央には、近衛木乃香が寝かされている。

額と胸、それから両肩に符が貼り付けられてはいるが、これらは木乃香に害をなすような物ではない。

これら四枚の符の役目は木乃香の位置を隠すためのジャミングと、睡眠、それから霊力の吸収。

そして、“意識の転送”の四つ。

現在刹那や詠春の周りで活動しているであろう木乃香は、この日のために用意した式紙、つまりは偽木乃香。

木乃香本体を眠らせ、一時的に式紙の方へと意識を移しているのだ。

本体はこちらで確保しつつ、ギリギリまでそれに気づかせない。経験豊富な刀久里が提案した方法である。

この策なら、あくまで体が偽物なだけで意識は本物のため、刹那や詠春でもそう簡単に気づけない。

ジャミングは万が一バレたときのための保険。あえて木乃香を本山から出さずにかえって混乱させ、初動を遅らせる狙いもある。

「――刀久里はん、武器は手に入れられたん？」

「おう。今さっき武器庫から何本か盗ってきた。さすが本山、ええもんがそろとるわな。あ、あと後ろの嬢ちゃんに儂が使わんのを渡しといたさかい」

盗ってきたという数本の野太刀を後ろの壁に立てかけた老翁は笑う。千草が自分の後ろに目を向ければ、月詠が刀久里に目礼していた。

彼女の腰に吊されているのは、それぞれ桜と雲の蒔絵が施された二本の小太刀。

刹那にへし折られた得物にかわる、彼女の新しい力。

それが獣の牙となるか、人の振るう刀となるかは千草にもまだわからないが。

千草は月詠に視線を送ってから、再び顔を前に向けた。

「水無原はん、そっちはどないやの。手はず通りに動けるん？」

『ええ、ホテルも既にチェックアウトしましたし、いつでも動けるように手はずは整えています。後はそちらのタイミングを待つばかりですね』

青年、水無原冬雅は仮の姿のまま薄い笑みを浮かべる。おそらくは、彼が一番死に近い所にあり、そしてそれを彼も充分すぎるほどに理解している。

それでも、彼は笑うのだ。

自分に何かあっても、千草達ならやり遂げると確信しているが故に。

「……他に、まだ用意ができとらんっちゅうもんもおらんな？
この期に及んで、怖じ気づいた言うもんもおらへんな？」

それは、最終確認だ。答えなどわかりきっている。それでもやるのは、これが一つの儀式のような物だから。

今まで漫然と続けてきた、守り続けてきた日常に、自分の意志で別れを告げるのだという自覚を持つための、そんなちょっとした儀式。

当然、反応するものは、いない。

「――――よし」

千草は懐から鉄扇……の形に変えて小さくしていた七支刀をとりだし、左の手のひらにパンとうちつけた。

「機は熟した。今こそウチらの手で、二十年前の大戦から続く全ての歪を断ち切る時。ウチらの役目は、最高幹部としてなすべき使命を果たすこと」

千草は、木乃香に貼られた符のうち、額の符に手を伸ばす。

「二十年前は魔法使いの勝手な都合に巻き込まれた。十五年前は木乃芽様の死を悼む暇もあらへんかった。今度はウチらの思いを土足で踏みにじりおった。――――けどな」

そして、ついにその符に手が届き、

「今度は、ウチらから始める番や」

符を、勢い良く剥ぎ取った。

――

「――木乃香が、消えた！？」

「はい！　本山の中のどこを探せども、いらっしゃいません！」

関西の長、近衛詠春がその報告を受けたのは、千草が木乃香から符を剥がしてすぐだった。

巫女の話では、護衛についていた刹那の前から突如として、桜吹雪に紛れるように消えていき、後には人型の符が一枚、残されていただけだったという。

タイミングが良かったのか悪かったのか、ちょうどその時周りには刹那しかおらず、木乃香の学友には見られなかったらしい。

「急いで動員をかけなさい！　本山常駐の千草さん……いえ、巫女頭に連絡を！」

詠春は強い焦りを覚える。この京都で、本山の内部で事を起こせたということは、きっとこれは関西融和反対派の仕業、おそらくは千草も関わっているはず。

目的はおそらく今回のネギ少年が持ってきた親書による融和の阻止。木乃香をそのための人質にでもする気なのだろう。

刹那が今も木乃香を見つけようと走り回っているそうだが、木乃香を探そうにも術による妨害で本山内にいることしかわからないらしい。

関西呪術協会総本山。その敷地は周囲の結界を含めると山幾つ分にもなる。

おまけに、今は夕暮れ、黄昏時だ。これから世界は夜を迎える。

そうなれば、捜索は困難を極めるだろう。

だが詠春には、諦めるつもりなどさらさらない。

「私は今から神鳴流の方へ行きます！　報告はそちらへ……っ！？」

走りだそうとした詠春。

その足を止めさせる物が、夕焼けに染まる空にそびえていた。

『――――――告げる』

空から響くのは、よく聞き慣れた女性の声。

空には、見たことのない七支刀を地面に突き立て、柄頭に両手を乗せた千草が立体投影されていた。

その大きさ、およそ二百メートル。本山の結界が無ければ世間を揺るがす大ニュースだ。

「やはりかっ！！」

詠春が空に吼える。

『ウチ、天ヶ崎千草を筆頭に――』

だがこの時、詠春はまだ知らない。

『関西呪術協会、最高幹部会の――』

この千草の巨大な立体投影は、本山にだけ映されたものではないということに。

『融和反対派“十二席”は――』

それは、近畿、中国、四国、九州……各地の一定以上の規模を持つ全ての関西呪術協会の支部で映し出されていたのだ。

『長を筆頭とした融和派が、組織の上に立つ者として不適であると判断したが故に――』

「……十二席だと！？」

数瞬間を置いて、詠春が驚愕を露わにする。

十二席。それは、長を含めて十九しかない最高幹部会において、過半数を超える。

その全員が、今回動いたというのだから。

『最高幹部に与えられた権利にして、課せられた義務を果たすために――』

そして、千草は沈む太陽を背負い、空を見上げる者全てに、こう告げた。

『――――力でもって。歪を正すことを、今ここに宣言する！！』

第八十二話・京都争乱、逢魔が時に響くのは（後書き）

この世の紙様から第七十七話についてご指摘をいただきました。

作者が確認したところ、作者の勘違いが原因で一部が過去と矛盾する内容になっていました。

そのため、その部分を削除した次第です。

皆様にご迷惑をおかけし、申し訳ありませんでした。

第八十三話・京都争乱、夜の部？（前書き）

長く続けていると、たまには問題も起きるものです。

第八十三話・京都争乱、夜の部？

関西呪術協会最高幹部、天ヶ崎千草による事実上の反乱。

それを前にした人々の反応はそれぞれが属する立場によって様々であったが、もっとも多かったのは混乱だった。

なぜ。どうして。大半の者はそう思っただろう。

だが、ある程度の実情を知るものは皆“やはり”や“ついにきたか”といった感想を持つのではないだろうか。

もともと、火種はずっとくすぶっていたのだ。

それを、大戦の影響を直接受けなかった者達が所詮対岸の火事と油断していただけのこと。本当は、彼らの上に立つ融和派の最高幹部達が必死に動いていたというのに。

だが、それももう過去のこと。

今、彼らは渦中にいる。それも同じ関西の中から宣戦布告を受けるという最悪に近い形で。

最高幹部会十九席の内、京都にいるのは全部で五名。

融和派は長である近衛詠春。反対派は天ヶ崎千草、刀久里鉄典、玄凪セイ、青山鶴子の四名だが、この内鶴子は入院中のため実質三人となる。

残るは融和派六席、反対派八席。

ここから更に反対派の水無原冬雅が別に動いているため、実際に京都以外の支部の制圧に動いたのは反対派七名ということになる。

結果的に京都以外は五分に見えるが、そうでもない。

前もって準備していた反対派に対して、融和派は何の準備も、所属する人員の集結も何もできていない。それに加えて、完全な奇襲。

千草の宣戦布告と同時に、格が低ければ堕ちた神も殺せるかもしれないというような完全武装の反対派の各支部の人員が一斉に襲撃をかける手はずになっている。

無論融和派にも最高幹部を筆頭に実力者は多くいる。だが、最高幹部に最高幹部を、実力者に実力者を当てれば、結局最後に物をいうのは“数”の力。

この日のために、反対派は動員可能なほぼ全ての人員を動かした。
今までであれば東に対する警戒という問題があって滋賀、京都、奈良、和歌山などの近畿の人員は余り動かせなかったが、今回は彼らもほとんどが何らかの形で動いている。

融和派の最高幹部もただではやられないだろうが、やはり奇襲という点で反対派に分がある。

朱から紫へ、紫から紺へ、紺から黒へと徐々に夜の色へと移り変わる空の下で、決して表には出ることのない戦いは始まっていた。

そして、京都でも――――

「ちょ、ちょっとネギ！　どうなってるのよ！」

「わ、わかりません！　僕にも何がなんだか…」

本山の廊下で、一人の少年と少女が混乱の極みに達していた。

少年……ネギが前もって麻帆良学園長近衛近右衛門から聞かされていたのは、仲の悪い西と東の融和の為に、自分が親書を運ぶということだけ。

途中妨害もあったが、結果的には無事西の長である詠春に親書を渡し、役目を終えたはずだった。

これでまた一つ自分の目指す理想に、立派な魔法使いに近づいた。

そう思っていたのに。

なのに、あれは何なのか。

ネギの知らない女性が告げたのは、戦いの始まり。

誰かが傷つけ、誰かが傷つく。

なぜこんなことになったのか。

大人達の打算も、己の父の世代から続く確執も。何も知らないネギには、なぜ戦うのか理解できなかった。

だがこの状況が普通ではなく、このまま立ち止まっているのが一番まずい。それを誰よりも速く気がついたのは、誰よりも生存反応に忠実な獣、アルベール・カモミール、通称カモだった。

「兄貴、このままここにいるのはまずいです！」

「まずいって……じゃあどうすればいいのよ！」

「とりあえず朝倉の姐さん達と合流した後で、あの詠春ってえ長か刹那の姐さんと合流するのが一番でさぁ！」

処世術としぶとさに関しては世界トップクラスと思われるカモ。混乱しているばかりのネギは、その言葉に素直に従うことを選んだ。

「じゃあ、まずはのどかさんや夕映さん達と合流しましょう。皆さんを安全なところに誘導してから、詠春さんや刹那さんを探して合流します！」

そして、二人と一匹が走りだそうとしたとき――

「おーうおうおう、坊ちゃん嬢ちゃんらにしてはええ判断やと思うが……そういうんは儂みたいなんに見つかる前にするべきやったなぁ」

背後から、声がかかった。

その声にネギと明日菜が振り返れば、夜桜に彩られた日本庭園の奥、桜吹雪の向こうから、こちらに歩いてくる人影が。

「誰ですか！？」

「あ、あにき……！」

ネギは気づかないが……否、気づけないが、カモの勘は全力で警鐘を鳴らしていた。

背中に棺桶のような巨大な木箱を背負った、黒の紋付き袴の禿頭の老人は何かいけないものだと。人の良い笑みを浮かべた老人が、先日の闇の福音とどこか重なる何か。

経験の浅いネギではけしてわからない、笑顔の奥にある得体のしれない何か。それが危険なのだと、カモの獣としての本能が訴えかけていた。

「誰て言われても困るんやが……まあええわ。さっき上で千草の嬢

ちゃんが言うとったやろ。関西呪術協会反対派最高幹部、和歌山管轄刀久里鉄典。わかりやすう言うたら坊ちゃんらの敵で、しかもめっちゃ偉い人やと思うてくれたらええわ」

刀久里は、話しながらも歩みは止めない。

この刀久里、年齢的には麻帆良の近右衛門と同世代であるが、背筋はしゃんとしていて、頭も当然後ろには伸びてなどいない。ぬらりひょんと同世代の老人とは思えない堂々とした歩きで、ネギ達に近づいてくる。

「もうわかっとると思うが……子供相手に手ぇ出すんも気ぃひけるんでなぁ。素直に捕まってくれへんかい？　そうすりゃあ儂の名において身の安全は保証するさかい」

「……どうしてです？」

「うん？」

「どうして、こんなことをするんですか？」

「どうしてってなぁ……」

「西と東で、仲良くすれば良いじゃないですか！　どうして無理やり力で解決しようとするんですか！」

命知らず。もし誰かがこの状況を見れば、ネギのことをきっとそう

評するだろう。

「……ふぅ。特別顧問から話は聞いとったが、この坊は親父とは違う方面で馬鹿か。見た目もよう似とるしなぁ。……いや、案外単に物を知らんだけか？」

「父さんを知ってるんですか！？」

ネギの勢いの良い食らいつきに、刀久里はまたため息をついた。

「あの男、ナギ・スプリングフィールドと直接の面識はない。ないが、この京都に一時期住んどったからな。何度か遠目に見かけたことはあるが……別にどうでもええやろう？　何せ今から儂に捕まるんやからな」

刀久里の言葉に反応して、ネギは杖を。明日菜はハリセンを召喚して構える。

その様子を見て、刀久里は笑う。

天を向き、大口を開けてただ笑う。

「カッカッカッカッカ！　やぁめとけやめとけ！　坊ちゃんらじゃあ儂の相手になりゃあせん！」

「やってみないとわかりません！」

「いいや、わかるとも」

人の良い笑みが、獰猛な獣のそれへと変わる。ニィィと唇の両端がつり上がり、大きな弧を描く。

それと同時。轟、と風が渦を巻く。刀久里を中心に霊力が吹き荒れ、一度は散った桜が巻き上げられて再び宙を舞う。

その中央で、刀久里は背の木箱を自分の斜め前に持ってきて、立てるようにして地面に下ろした。ズン、と箱が少し地面に沈む。

「……既に、お嬢様のご学友の方は手ぇうたせてもろた。無論、お嬢様もこちらが確保しとる」

「お嬢様って、木乃香を！？　どういうつもりよ！」

明日菜が激昂するが、刀久里はそれを無視して話を進める。ネギ達を戦わずして追い詰めるために。

「桜咲刹那も、坊ちゃんらとお嬢様ならお嬢様をとるやろなぁ？
助けは来ぃせん。それに……一つ訊くが、儂と戦ったところで何をどうするつもりや？　抗った先に、勝算でもあるんか？」

「……え？」

老いた刀久里の瞳が、獲物を狙う狩人のように細められる。

「なぁおい、今がどういう状況かわかっとるか？　知らんやろが、事態は全国規模で動いとる。この京都の総本山だけやのうて、西日本全域が戦場や。儂一人相手にして、奇跡でも起きて儂をどうにかできたとしてもどうにもならへん。何ら変わらん。それでも無為に抗うか？」

刀久里に気圧されてしまったネギには、何も答えられない。嘘か真実か、何もわからないのだから、答えられるわけがない。自分の身一つ守れるかどうかもわからないのに、日本の半分など一人の少年には話が大きすぎるのだ。

だから、ネギは黙ってしまった。なまじ頭が良い分、ただ漠然とした情報だけでは答えをだせない。だから、それを否定する言葉も出てこない。

そのまま、持っていた杖を下ろし、俯いてしまう。

「――そんなこと、知らないわよ！」

「おう？」

ネギの隣にいた明日菜が、一歩前に踏み出した。吹き荒れる嵐のような霊力に、真正面から立ち向かうように。

その姿は、まるでおとぎ話の騎士のように凛として。

「馬鹿だから難しいこととか全然わかんないけど……木乃香は私の親友なのよ！　だから助けるの！　お嬢様とかじゃなくて……パルとか朝倉とかもそう！　関西がどうとか関係ない！　友達助けるのに、グダグダした理由なんかいらないのよっ！！」

その言葉に、消えかけていたネギの心にも再び火が灯る。

自分は教師であり、木乃香達は守るべき生徒なのだ。なのに、自分が先に諦めてどうするのか！

「……やれやれ、厄介なんは坊やのうて嬢ちゃんの方やったかぁ……」

呆れ顔の刀久里。

改めて杖を構えたネギの瞳からは、先ほどまでのような迷いはすっかり消えている。

すぐに切り替えができるのも、子供だからかと三度目のため息をついた。これが普通の術者であったなら、現実を知るが故に、まだ抵抗しようなどとは思わなかったはずだ。

子供ながらに、たいしたものだと評価を改める。

だが、手心を加えるつもりはない。

ここはもはや戦場であり、世界を知らない少年少女が夢を語るための場所ではない。

闇につかり、黒く染まった大人達が、それでもなお己の意志を貫く為に互いを喰らいあう場所だ。

「……どら、世の中の理不尽さっちゅうもんを教えたろか」

これ以上は何も教えず、意識を刈り取ることにした。中途半端に知識を得て、半端なまま世界を見るから深く考えずに首を突っ込み場を乱すのだ。だから、これ以上は会話も気づかいもいらない。悪いのは、この場に存在してしまったネギ達なのだから。

刀久里は、箱の側面を手荒く蹴る。すると、箱の前面の蓋が外れてネギ達の方へと倒れた。

箱の中身は数多くの刀剣類。

いずれもが名のある業物で、中でも数本の野太刀は歴代の神鳴流が愛用していた名刀である。

その中の小ぶりな刀が三本、青い燐光をまてってふわりと箱からでてきて宙に浮かぶ。

「“剣霊使い”刀久里鉄典。……次目ぇ覚ましたら全部終わっとるさかい、安心して眠るとええわ」

そして、その三本がネギと明日菜の動体視力を超える速度で打ち出され――

ギャリィィィィ……ン

――全て、斬り払われた。

それに目を剥いたのは刀久里。廊下の向こうから瞬動で現れ、ネギ達の前に飛び込んできた人物の顔を確認して表情を歪める。

それは曲がりなりにも組織の代表である男。刀久里達が排斥すると決めた男だ。

「ちょいと……話しすぎたか」

刀三本。それを一刀のもとに斬り伏せたのは。

「長、さん……？」

「なんとか間に合いましたね。ネギ君」

関西の長、近衛詠春がそこにいた。

手には野太刀を持ち、厳しい顔をした詠春はネギ達を守るかのように刀久里と相対し、ネギ達には背を向ける形になる。

「遅かった……いんや、早かったと言うべきか？　なぁ詠春」

「刀久里さん……」

詠春は目を伏せた。しかしすぐに目を開け、背後のネギに向き直った。

「……ネギ君。麻帆良の学園長に連絡して現状を伝えてください。それと、ここから東北……先ほど女性が空に映し出された方に湖があります。この符を使えば刹那さんと通信できるので、合流してなんとか木乃香を救出してください」

詠春は符を渡し、それだけ言うと話はすんだとばかりに野太刀を構えた。

ネギが何か言おうとするが、それよりも先に明日菜がネギの手を掴んで叫ぶ。

「行くよ、ネギ！！」

そして、そのままわき目もふらずネギの手を引いて走り出した。

その様子を、刀久里は手も出さず眺めていた。

そのことに、詠春が不審げに眉を寄せて問いかける。

「良いのですか、行かせてしまって」

「かまへんわい。わしらのようなモンの戦いは若いンに見せるようなもんじゃあないさ。それに、やったところでどうせ無駄やしの」

刀久里の言葉に詠春が更に表情を険しくし、野太刀を握る手に力を込める。

「……木乃香を、どうするつもりです」

「さてなぁ。わーからへんのぉ」

うそぶく刀久里。ニヤニヤと笑う刀久里とは対照的に詠春の奥歯がぎちりと鳴り、詠春の目が黒を帯びる。

黒に染まった部分に吸い寄せられるように本来黒いはずの部分から色が抜けて白抜きのような状態になり、目の白黒が逆転する。

先ほどの刀久里と同じように詠春を中心として、ただしこちらは気が吹き出し、散った桜を巻き上げる。

「……やぁれやれ。儂のノルマが詠春をしばらく抑えることたぁいえ、ちょいと老人にはきついんとちゃうのんか」

毛の無くなった頭を掻きつつ、そう呟く。刀久里の仕事は長である近衛詠春の対処。

だが、話に聞いていた黒化した詠春のあまりの禍ヶしさに内心で舌を巻く。

神鳴流が闇に堕ちるのは見慣れているが、ここまでのは刀久里も久々だ。

何度目かのため息を、またついた。今日だけでかなり幸せが逃げていった気がする。

それでもまだ仕事があると、老いた身体に鞭打つように気合いをいれる。

大きく息を吸い、声を張り上げる。

「うっしゃやるかぁ！！　炎天、風花、業（ごう）、海原（うなばら）、落星（おつるほし）、末枯（うらがれ）……起きろやぁっ！！」

刀久里の箱から六本の野太刀が飛び出すと同時、詠春もまた地を蹴った。

第八十三話・京都争乱、夜の部？（後書き）

黒化詠春復活の回。

ただし次回はまた別の人の話になる予定。閑話とかではないですよ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1087t/

麻帆良で生きた人

2011年11月26日01時13分発行